

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第112集

蓮田市

あら かわ づけ
荒 川 附 遺 跡

国道122号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

—V—



1992

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第1号住居跡出土遺物



第16号住居跡出土遺物



第22号住居跡出土遺物



第25・95号住居跡出土遺物



第41号住居跡出土遺物



第58号住居跡出土遺物



第85号住居跡出土遺物



第92号住居跡出土遺物

序

本書は、蓮田市関山地内に所在する荒川附遺跡の発掘調査報告書です。遺跡は、国道122号バイパスの建設に伴い、関係機関の協議を経て、当事業団が発掘調査を行いました。路線内には7ヵ所の遺跡が確認されており、このうち6遺跡については既に「国道122号線バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書」としてⅠ～Ⅳの3冊が刊行されています。

今回報告する荒川附遺跡は、古墳時代後期を中心とした遺跡です。蓮田市周辺は黒浜式土器、関山式土器の標式遺跡として有名な黒浜貝塚、関山貝塚をはじめとして縄文時代の遺跡が数多く知られていますが、今まで古墳時代の大きな集落跡は調査されていませんでした。今回の調査によって、この地域の古墳時代のようなすがわかってきたことは大きな成果です。

本書が記録保存の成果としてはもとより、これらの資料が教育、学術、文化の発展の一助となり、さらに文化財保護思想の普及に広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する調整に尽力いただきました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご協力をいただきました埼玉県土木部道路建設課、同杉戸土木事務所及び蓮田市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成4年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒 井 修 二

例 言

- 1 本書は埼玉県蓮田市関山4丁目342番地他に所在する荒川附遺跡の発掘調査報告である。
文化庁指示通知は昭和58年7月4日付け委保第5の851号、昭和58年12月1日付け委保第1485号、平成元年6月28日付け委保第5の784号である。
遺跡名の略号は ARKWZK である。
- 2 発掘調査は一般国道122号バイパス建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 発掘調査は小野美代子、木戸春夫、利根川章彦、西井幸雄、田中英司、秋山幸治、高崎光司が担当し、昭和58年4月1日～7月31日、昭和58年11月1日～昭和59年3月31日、昭和62年9月1日～12月31日、平成元年4月1日～平成2年3月31日まで実施した。報告書作成作業は木戸が担当し、平成元年4月1日～平成3年3月31日まで実施した。
なお、発掘調査・整理事業の組織は2ページに示した。
- 4 分析・鑑定については下記へ委託した。
胎土分析 (株) 第四紀地質研究所
鉄滓分析 (株) 第四紀地質研究所
木炭鑑定 山内 文
貝 鑑 定 松本充夫 (県立自然史博物館)
- 5 本書の執筆は主に木戸が行い、それ以外については下記のとおりである。
I-1 教育局指導部文化財保護課
VI-1 西井
- 6 図版作成、写真撮影は下記の者が行った。
図版作成 木戸
発掘調査撮影 小野 田中 秋山 利根川 高崎 西井 木戸
遺物撮影 木戸
巻頭カラー 折原基久
- 7 本書の編集は、資料部資料整理第2課の木戸春夫が行った。
- 8 本書にかかる資料は、平成4年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 9 本書の作成にあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。(敬称略)
大塚孝司 後藤建一 酒井清治 松本充夫 山内 文 吉田孝造 渡辺 一

凡 例

1 使用した挿図の縮尺は原則として以下のとおりで、それ以外のものは個別に表示した。

遺構 縦穴住居跡 1/80 縦穴状遺構 1/80 土坑 1/80

円形環状遺構 1/80 溝 1/100

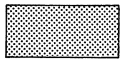
遺物 土器 1/4 土錘 1/2 鉄製品 1/2 石製模造品 1/2

2 挿図における遺構の略号は以下のとおりである。

SJ：住居跡 SK：土坑 SD：溝 P：ピット

3 遺跡 X, Y の座標表示は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づくもので、挿図中における方位は全て座標北を表す。

4 遺構挿図におけるスクリーントーンは焼土の範囲を表し、遺物については以下のとおりである



赤彩土器



黒色土器

5 遺物分布図における記号は以下のとおりである。

● 土師器 ○ 須恵器 ■ 土錘 □ 鉄製品

△ 石製模造品 ☆ 鉄滓 ▲ その他

6 土器の断面は土師器は白抜き、須恵器は塗りつぶしで表示した。

7 色調は、「新版標準土色帳」（農林省水産技術会議事務局監修）による。

8 観察表における註記No.は土器の註記を、実測No.は遺物実測原図のNo.を表す。

9 図版の遺物に付した数字は各遺構の挿図番号と一致する。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査の経過	4
II 遺跡の立地と環境	5
1 遺跡の立地	5
2 周辺の遺跡	6
III 遺跡の概観	12
IV 検出された遺構と遺物	16
1 住居跡	16
2 竪穴状遺構	294
3 円形環状遺構	296
4 土坑	296
5 溝	305
6 グリッド出土遺物	305
V 自然科学分析	326
VI 結語	342

挿 図 目 次

第 1図 埼玉県の地形図 …………… 5	第 34図 第15号住居跡(1) ……………58
第 2図 遺跡周辺の表層地質 …………… 7	第 35図 第15号住居跡(2) ……………59
第 3図 周辺の遺跡 …………… 9	第 36図 第15号住居跡出土遺物(1) ……………60
第 4図 周辺の地形 ……………10	第 37図 第15号住居跡出土遺物(2) ……………62
第 5図 基本土層図 ……………12	第 38図 第16・17号住居跡(1) ……………64
第 6図 調査区区割図 ……………13	第 39図 第16・17号住居跡(2) ……………65
第 7図 遺構配置図 ……………14	第 40図 第16・17号住居跡(3) ……………67
第 8図 第1号住居跡(1) ……………17	第 41図 第16・17号住居跡(4) ……………68
第 9図 第1号住居跡(2) ……………18	第 42図 第16号住居跡出土遺物(1) ……………69
第10図 第1号住居跡出土遺物(1) ……………19	第 43図 第16号住居跡出土遺物(2) ……………70
第11図 第1号住居跡出土遺物(2) ……………20	第 44図 第16号住居跡出土遺物(3) ……………71
第12図 第1号住居跡出土遺物(3) ……………21	第 45図 第16号住居跡出土遺物(4) ……………72
第13図 第1号住居跡出土遺物(4) ……………22	第 46図 第19号住居跡 ……………76
第14図 第1号住居跡出土遺物(5) ……………23	第 47図 第19号住居跡出土遺物 ……………77
第15図 第2号住居跡(1) ……………27	第 48図 第18・20号住居跡 ……………78
第16図 第2号住居跡(2) ……………28	第 49図 第21・94号住居跡(1) ……………79
第17図 第2号住居跡出土遺物 ……………30	第 50図 第21・94号住居跡(2) ……………80
第18図 第3号住居跡(1) ……………32	第 51図 第21号住居跡出土遺物(1) ……………81
第19図 第3号住居跡(2) ……………33	第 52図 第21号住居跡出土遺物(2) ……………82
第20図 第3号住居跡出土遺物(1) ……………34	第 53図 第21号住居跡出土遺物(3) ……………83
第21図 第3号住居跡出土遺物(2) ……………35	第 54図 第22号住居跡 ……………86
第22図 第4・5号住居跡 ……………38	第 55図 第22号住居跡出土遺物(1) ……………87
第23図 第4号住居跡出土遺物 ……………39	第 56図 第22号住居跡出土遺物(2) ……………88
第24図 第6号住居跡 ……………41	第 57図 第23・97号住居跡(1) ……………91
第25図 第7・8・9・12号住居跡(1) ……42	第 58図 第23・97号住居跡(2) ……………92
第26図 第7・8・9・12号住居跡(2) ……44	第 59図 第23号住居跡出土遺物(1) ……………93
第27図 第7・8・9・12号住居跡(3) ……45	第 60図 第23号住居跡出土遺物(2) ……………94
第28図 第9号住居跡出土遺物(1) ……………46	第 61図 第24号住居跡出土遺物 ……………96
第29図 第7・8・9・12号住居跡出土遺物(2) …47	第 62図 第25・95号住居跡(1) ……………98
第30図 第10・11号住居跡 ……………52	第 63図 第25・95号住居跡(2) ……………99
第31図 第13号住居跡 ……………54	第 64図 第25・95号住居跡出土遺物(1) … 101
第32図 第10・13号住居跡出土遺物 ……55	第 65図 第25・95号住居跡出土遺物(2) … 102
第33図 第1号住居跡出土遺物 ……………57	第 66図 第25・95号住居跡出土遺物(3) … 103

第 67 图	第25·95号住居迹出土遺物(4) …	104	第103 图	第48号住居迹 ……………	158
第 68 图	第26号住居迹 ……………	107	第104 图	第48号住居迹出土遺物 ……………	159
第 69 图	第27·96号住居迹 ……………	108	第105 图	第49·50号住居迹(1) ……………	161
第 70 图	第27·96号住居迹出土遺物 ……………	109	第106 图	第49·50号住居迹(2) ……………	162
第 71 图	第28·72号住居迹(1) ……………	111	第107 图	第49·50号住居迹出土遺物(1) ……	163
第 72 图	第28·72号住居迹(2) ……………	112	第108 图	第50号住居迹出土遺物(2) ……………	164
第 73 图	第28号住居迹出土遺物 ……………	113	第109 图	第51号住居迹(1) ……………	169
第 74 图	第29号住居迹 ……………	115	第110 图	第51号住居迹(2) ……………	170
第 75 图	第29号住居迹出土遺物 ……………	116	第111 图	第51号住居迹出土遺物 ……………	171
第 76 图	第30号住居迹(1) ……………	119	第112 图	第52号住居迹·出土遺物 ……………	173
第 77 图	第30号住居迹(2) ……………	120	第113 图	第53·54号住居迹 ……………	175
第 78 图	第30号住居迹出土遺物(1) ……………	121	第114 图	第54号住居迹出土遺物 ……………	176
第 79 图	第30号住居迹出土遺物(2) ……………	122	第115 图	第55号住居迹·出土遺物 ……………	178
第 80 图	第31·32号住居迹(1) ……………	125	第116 图	第56号住居迹 ……………	179
第 81 图	第31·32号住居迹(2) ……………	126	第117 图	第57·58·59·60号住居迹(1) ……	181
第 82 图	第32号住居迹出土遺物(1) ……………	127	第118 图	第57·58·59·60号住居迹(2) ……	182
第 83 图	第32号住居迹出土遺物(2) ……………	128	第119 图	第57·58·59·60号住居迹(3) ……	183
第 84 图	第33号住居迹出土遺物 ……………	131	第120 图	第57·58·59·60号住居迹(4) ……	184
第 85 图	第34号住居迹 ……………	133	第121 图	第58号住居迹出土遺物(1) ……………	185
第 86 图	第34号住居迹出土遺物 ……………	134	第122 图	第58号住居迹出土遺物(2) ……………	186
第 87 图	第35号住居迹 ……………	136	第123 图	第58号住居迹出土遺物(3) ……………	187
第 88 图	第36号住居迹 ……………	137	第124 图	第58号住居迹出土遺物(4) ……………	188
第 89 图	第37·38号住居迹(1) ……………	138	第125 图	第61号住居迹 ……………	192
第 90 图	第37·38号住居迹(2)出土遺物 ……	139	第126 图	第62号住居迹 ……………	194
第 91 图	第39号住居迹出土遺物 ……………	142	第127 图	第63号住居迹 ……………	195
第 92 图	第40·41号住居迹(1) ……………	144	第128 图	第59·61·62·63号出土遺物 ……	196
第 93 图	第40·41号住居迹(2) ……………	145	第129 图	第64号住居迹 ……………	198
第 94 图	第40·41号住居迹出土遺物(1) ……	146	第130 图	第64号住居迹出土遺物(1) ……………	199
第 95 图	第41号住居迹出土遺物(2) ……………	147	第131 图	第64号住居迹出土遺物(2) ……………	200
第 96 图	第42·43号住居迹·出土遺物 ……	149	第132 图	第65·66号住居迹(1) ……………	203
第 97 图	第44号住居迹 ……………	150	第133 图	第65·66号住居迹(2) ……………	204
第 98 图	第45号住居迹 ……………	151	第134 图	第65号住居迹出土遺物 ……………	205
第 99 图	第46号住居迹 ……………	153	第135 图	第66号住居迹出土遺物 ……………	208
第100 图	第47号住居迹(1) ……………	154	第136 图	第67·68号住居迹 ……………	210
第101 图	第47号住居迹(2) ……………	155	第137 图	第67·68号住居迹出土遺物 ……	211
第102 图	第46·47号住居迹出土遺物 ……	156	第138 图	第69号住居迹(1) ……………	213

第139図	第69号住居跡(2) ……………	214	第175図	第87・88号住居跡(1) ……………	275
第140図	第69号住居跡出土遺物 ……………	217	第176図	第87・88号住居跡(2) ……………	276
第141図	第70・71号住居跡 ……………	219	第177図	第87号住居跡出土遺物 ……………	277
第142図	第69・70・71号住居跡出土遺物 ……	221	第178図	第87・88号住居跡出土遺物 ……	278
第143図	第73号住居跡 ……………	223	第179図	第89・90号住居跡 ……………	281
第144図	第73号住居跡出土遺物 ……………	225	第180図	第92・93号住居跡(1) ……………	282
第145図	第74・75号住居跡 ……………	226	第181図	第92・93号住居跡(2) ……………	283
第146図	第76号住居跡 ……………	228	第182図	第92・93号住居跡(3) ……………	284
第147図	第77号住居跡 ……………	229	第183図	第92号住居跡出土遺物(1) ……	285
第148図	第75・76・77号住居跡出土遺物 ……	231	第184図	第92号住居跡出土遺物(2) ……	286
第149図	第78号住居跡 ……………	233	第185図	第93号住居跡出土遺物(1) ……	288
第150図	第78号住居跡出土遺物 ……………	234	第186図	第93号住居跡出土遺物(2) ……	289
第151図	第79・80・84号住居跡(1) ……	236	第187図	第93号住居跡出土遺物(3) ……	290
第152図	第79・80・84号住居跡(2) ……	237	第188図	第1・2号竪穴状遺構 ……………	295
第153図	第79号住居跡出土遺物(1) ……	238	第189図	円形環状遺構 ……………	297
第154図	第79号住居跡出土遺物(2) ……	239	第190図	土坑(1) ……………	298
第155図	第80号住居跡出土遺物(1) ……	242	第191図	土坑(2) ……………	299
第156図	第80号住居跡出土遺物(2) ……	243	第192図	土坑(3) ……………	300
第157図	第81号住居跡 ……………	247	第193図	土坑(4)・出土遺物 ……………	301
第158図	第81号住居跡出土遺物 ……………	248	第194図	溝(1) ……………	306
第159図	第82号住居跡 ……………	249	第195図	溝(2) ……………	307
第160図	第82号住居跡出土遺物(1) ……	250	第196図	溝(3) ……………	308
第161図	第82号住居跡出土遺物(2) ……	251	第197図	溝(4) ……………	309
第162図	第83号住居跡(1) ……………	254	第198図	溝(5) ……………	310
第163図	第83号住居跡(2) ……………	255	第199図	溝(6) ……………	311
第164図	第83号住居跡出土遺物(1) ……	256	第200図	溝(7) ……………	312
第165図	第83号住居跡出土遺物(2) ……	257	第201図	溝出土遺物 ……………	314
第166図	第83号住居跡出土遺物(3) ……	258	第202図	グリッド出土遺物(1) ……	315
第167図	第83号住居跡出土遺物(4) ……	259	第203図	グリッド出土遺物(2) ……	316
第168図	第83号住居跡出土遺物(5) ……	260	第204図	グリッド出土遺物(3) ……	317
第169図	第85号住居跡 ……………	266	第205図	縄文土器(1) ……………	320
第170図	第85号住居跡出土遺物(1) ……	267	第206図	縄文土器(2) ……………	321
第171図	第85号住居跡出土遺物(2) ……	268	第207図	石器(1) ……………	323
第172図	第85号住居跡出土遺物(3) ……	271	第208図	石器(2) ……………	324
第173図	第86・91号住居跡 ……………	272	第209図	三角・菱形ダイアグラム ……	329
第174図	第86・91号住居跡出土遺物 ……	273	第210図	QT-PL相関図 ……………	334

第211図	Si ₂ O ₃ ・FeO ₃ -MgO相関図	……	339
第212図	元荒川流域の先土器時代遺跡	…	342
第213図	荒川附遺跡出土の黒燧石製石器	…	344
第214図	北宿西遺跡出土の先土器時代遺物		346
第215図	I期・II期の土器	……	354

第216図	III期・IV期・V期の土器	……	355
第217図	VI期・VII期・VIII期・IX期の土器	…	357
第218図	時代別住居分布	……	359
第219図	迅速図	……	360

図 版 目 次

巻頭図版 1	第1号住居跡出土遺物 第16号住居跡出土遺物
巻頭図版 2	第22号住居跡出土遺物 第25・95号住居跡出土遺物
巻頭図版 3	第41号住居跡出土遺物 第58号住居跡出土遺物
巻頭図版 4	第85号住居跡出土遺物 第92号住居跡出土遺物
図版扉	荒川附遺跡航空写真
図版 1	荒川附遺跡 I 区全景 荒川附遺跡 II・III 区全景
図版 2	調査風景
図版 3	第1号住居跡 第1号住居跡完掘 第1号住居跡カマド
図版 4	第1号住居跡遺物出土状況 第1号住居跡須恵器甕出土状況 第2号住居跡
図版 5	第2号住居跡カマド 第2号住居跡遺物出土状況 第3号住居跡
図版 6	第3号住居跡カマド 第4・5号住居跡 第4号住居跡カマド
図版 7	第4号住居跡遺物出土状況 第6号住居跡 第7・8・9・12号住居跡

図版 8	第9・12号住居跡カマド 第10・11号住居跡 第13号住居跡遺物出土状況
図版 9	第14号住居跡 第18号住居跡 第21・94号住居跡
図版10	第21・94号住居跡完掘 第22号住居跡 第22号住居跡遺物出土状況
図版11	第23・97号住居跡 第24号住居跡 第25・95号住居跡
図版12	第27・96号住居跡 第28・72号住居跡 第29号住居跡
図版13	第30号住居跡 第31・32号住居跡 第32号住居跡カマド
図版14	第33号住居跡 第34号住居跡 第35号住居跡
図版15	第36号住居跡 第37号住居跡 第38号住居跡
図版16	第39号住居跡 第40・41号住居跡 第41号住居跡カマド遺物出土状況

図版17 第42号住居跡
第43号住居跡
第44号住居跡
図版18 第45号住居跡
第46号住居跡
第47・48・49・50号住居跡
図版19 第48号住居跡
第51号住居跡
第52号住居跡
図版20 第52号住居跡カマド
第54号住居跡
第55号住居跡
図版21 第56号住居跡
第57・58・59・60号住居跡
第57号住居跡
図版22 第58号住居跡
第58号住居跡カマド(旧)
第58号住居跡カマド(新)
図版23 第58号住居跡遺物出土状況
第59号住居跡
第60号住居跡
図版24 第61号住居跡
第62号住居跡
第62号住居跡石製模造品出土状況
図版25 第63号住居跡
第64号住居跡
第65・66号住居跡
図版26 第67・68号住居跡
第69号住居跡
第71号住居跡
図版27 第73号住居跡
第74号住居跡
第77号住居跡
図版28 第78号住居跡
第79・80・84号住居跡
第79号住居跡遺物出土状況

図版29 第81号住居跡
第81号住居跡遺物出土状況
第82号住居跡
図版30 第83号住居跡
第83号住居跡鉄鍬出土状況
第85号住居跡
第86号住居跡
図版31 第87・88号住居跡
第90号住居跡
第91号住居跡
図版32 第92・93号住居跡
第19号住居跡
第19号住居跡遺物出土状況
図版33 第1号土坑
第2号土坑
第4号土坑
第48号土坑
第23号土坑
第24号土坑
第25号土坑
第26号土坑
図版34 第27・28号土坑
第55号土坑
第56号土坑
第57号土坑
第58号土坑
第59号土坑
第60号土坑
第2号溝
図版35 第3号溝
第11号溝
第13号溝
第14号溝
第15・16号溝
第18号溝
第21号溝

図版35 第22号溝
図版36 第1号住居跡出土遺物(1)
図版37 第1号住居跡出土遺物(2)
図版38 第2・3号住居跡出土遺物
図版39 第4・7・9・12号住居跡出土遺物
図版40 第9・10・13・15号住居跡出土遺物
図版41 第15・16号住居跡出土遺物
図版42 第16号住居跡出土遺物
図版43 第21・22号住居跡出土遺物
図版44 第22・23号住居跡出土遺物
図版45 第23・25・95号住居跡出土遺物
図版46 第25・95・27号住居跡出土遺物
図版47 第28・29・30号住居跡出土遺物
図版48 第30・32・33号住居跡出土遺物
図版49 第34・37・38・39・40・41号住居跡出土遺物
図版50 第41・46・47号住居跡出土遺物
図版51 第48・49・50号住居跡出土遺物
図版52 第50・51号住居跡出土遺物
図版53 第51・52・54・55・58号住居跡出土遺物
図版54 第58・61号住居跡出土遺物
図版55 第61・62・63・64号住居跡出土遺物
図版56 第64・65・66・67号住居跡出土遺物
図版57 第68・69号住居跡出土遺物
図版58 第69・70・73・75・76号住居跡出土遺物
図版59 第76・77・78号住居跡出土遺物
図版60 第79・80号住居跡出土遺物
図版61 第80・81・82号住居跡出土遺物
図版62 第82・83号住居跡出土遺物
図版63 第83号住居跡出土遺物
図版64 第83・85号住居跡出土遺物

図版65 第85号住居跡出土遺物
図版66 第86・87・88・91・92号住居跡出土遺物
図版67 第92・93号住居跡出土遺物
図版68 第93号住居跡出土遺物
第48号土坑出土遺物
グリッド出土遺物
図版69 耳環 鉄製品(1)
図版70 鉄製品(2)(3)
図版71 鉄製品(4)(5)
図版72 鉄製品 X線写真
図版73 土玉(1)(2)
図版74 土玉(3) 土錘(1)
図版75 土錘(2)(3)
図版76 玉類 紡錘車
図版77 石製模造品(1)
図版78 石製模造品(2)
図版79 石製模造品(3)
図版80 砥石(1)
図版81 砥石(2)
図版82 砥石(3)
図版83 砥石(4)
図版84 凹石
図版85 縄文土器(1)
図版86 縄文土器(2)
図版87 第19号住居跡出土遺物 羽口
図版88 石器
図版89 貝
図版90 木炭顕微鏡写真
図版91 鉄滓顕微鏡写真

I 調査の概要

1 発掘調査に至る経過

東北縦貫自動車道の開通に伴い一般国道122号線の交通量は一段と増加した。特に蓮田市内は渋滞が著しく交通量緩和の対策が要望されている。

埼玉県では、このような状況に対処するために、一般国道122号線蓮田市内のバイパス建設を計画した。道路建設などの開発事業にたいして、文化財保護課では、文化財の保護に支障がないよう事前に連絡調整を密に実施している。

昭和50年10月29日付け道建第543号をもって「一般国道122号線（蓮田市内）建設予定地内の埋蔵文化財の所在について」道路建設課長から文化財保護課長へ照会がなされた。文化財保護課では遺跡地図と照合し検討した結果、昭和51年2月4日付け教文第960号をもって概ね下記のとおり回答した。

①建設予定地内には現在7箇所の周知遺跡が存在する。1. 蓮田市No.24遺跡 2. 蓮田市No.19遺跡 3. 蓮田市No.20遺跡 4. 蓮田市No.10遺跡 5. 蓮田市No.11遺跡 6. 蓮田市No.4遺跡 7. 蓮田市No.3遺跡

②詳細については、さらに現地調査を実施する必要があること。

その後、両課において現地調査を行いながら、これらの遺跡の取扱について協議を重ねた結果、路線変更が困難であるため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することが決定した。

この決定を受けて、道路建設課長から昭和54年4月19日付け道建第120号をもって「一般国道122号（蓮田市地内）道路改良事業区域内における埋蔵文化財発掘調査について」協議がなされた。文化財保護課では、昭和54年10月1日付け教文第704号により、調査の期間、範囲、経費と文化財保護課が直営で実施することを回答した。

法的手続を終了した後、昭和54年11月からNo.7遺跡から順次発掘調査を実施した。

また、昭和55年度からは増大する公共事業に対処するため設立された財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を引き継がれた。

なお、本書で報告する荒川附遺跡（蓮田市No.2遺跡）は昭和58年から平成元年にかけ3度にわたり発掘調査を実施したものである。文化庁からは昭和58年7月4日付け委保第5の851号、昭和58年12月1日付け委保第1485号、平成元年6月28日付け委保第5の784号をもって調査届を受理した旨の通知があった。

発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

1 発掘〔昭和58年度〕

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎
副理事長 岩上進
常務理事 石川正美

庶務経理

管理部長 佐野長二
主任 関野栄一
主事 江田和美
主事 福田啓子
主事 福田浩
主事 本庄朗人

発掘調査

調査研究部長 横川好富
調査研究副部長兼
調査研究第5課長 小川良祐
調査研究第3課長 水村孝行
調査員 小野美代子
調査員 利根川章彦
調査員 木戸春夫
調査員 西井幸雄

発掘調査

(兼)調査研究部長 早川智明
調査研究部長 塩野博
調査研究第3課長 宮崎朝雄
主任調査員 濱野美代子
調査員 西井幸雄

3 発掘〔平成元年度〕

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二
副理事長 百瀬陽二
常務理事兼
管理部長 古市芳之

庶務経理

常務理事兼
管理部長 古市芳之
管理課長 関野栄一
主事 江田和美
主事 岡野美智子
主事 本庄朗人
主事 齐藤勝秀

発掘調査

調査研究部長 吉川國男
調査研究副部長 塩野博
調査研究第3課長 宮崎朝雄
主任調査員 田中英司
主任調査員 秋山幸治
主任調査員 高崎光司

2 発掘・整理〔昭和62年度〕

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎
副理事長 百瀬陽二
常務理事兼
調査研究部長 早川智明

庶務経理

管理部長 原田家次
主査 関野栄一
主事 江田和美
主事 岡野美智子
主事 福田浩
主事 本庄朗人

4 整理〔平成2年度〕

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二
副理事長 早川智明
常務理事兼
管理部長 古市芳之

庶務經理

(兼)管理部長 古市芳之
 庶務課長 高田弘義
 主査 松本晋
 主事 長滝美智子
 經理課長 関野栄一
 主任 江田和美
 主事 本庄朗人
 主事 斉藤勝秀
 主事 菊地久

庶務經理

理事長 荒井修二
 副理事長 早川智明
 常務理事兼
 管理部長 倉持悦夫

(兼)管理部長 倉持悦夫
 庶務課長 高田弘義
 主査 松本晋
 主事 長滝美智子
 經理課長 関野栄一
 主任 江田和美
 主事 福田昭美
 主事 腰塚雄二
 主事 菊地久

整理

整理

資料部長 栗原文藏
 資料部副部長兼
 資料整理第1課長
 資料整理
 資料第2課長
 調査員 木戸春夫

資料部長 中島利治
 資料部副部長兼
 資料整理第1課長
 資料第2課長
 主任調査員 木戸春夫

5 整理〔平成3年度〕

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

2 調査の経過

荒川附遺跡の調査は、昭和58年度と平成元年度に行った。調査面積は合わせて10、665㎡である。このうち昭和58年度の調査区は県道大宮栗橋線の北側を対象とし、調査期間は昭和58年4月1日～7月31日及び昭和58年11月1日～昭和59年3月31日の2次に分けて行われた。調査区は2次調査の時のみ調査区を横断する道路によってA区、B区と2分して呼称していたが整理の段階で便宜上1次調査の調査区をCとした。各調査時には杉戸土木事務所担当者の立会のもとに調査範囲の確認を行った後表土除去作業に入った。1次調査で検出された遺構は住居跡12軒、土坑4基、溝跡1条であった。実際に調査区の確認を行ったのは4月の後半であった。その後表土除去を行いながら囲柵等の安全対策を行い実際に本格的な調査に入れたのは5月になってからであった。続いて遺構の検出、精査を行い航空撮影を7月12日に行った。その後遺構図面の作成を行い7月31日に調査を終了した。2次調査では遺跡の現状がB区で山林であったために樹木の伐採及び抜根から始まった。特に竹林となっているところは根のはりも強くこれらの除去に時間をとられた。B区の遺構の確認ができたのは12月半ば過ぎになってからであった。遺構の精査を行い航空撮影直前には雪にふられる等の障害が起きたが調査は期間内に終了した。住居跡7軒、土坑23基、溝跡5条を検出した。検出された遺構、遺物の時期は古墳時代後期が中心であり、ほかに縄文時代後期の住居跡1軒があった。また溝跡は全て近世以降の所産であると考えられる。

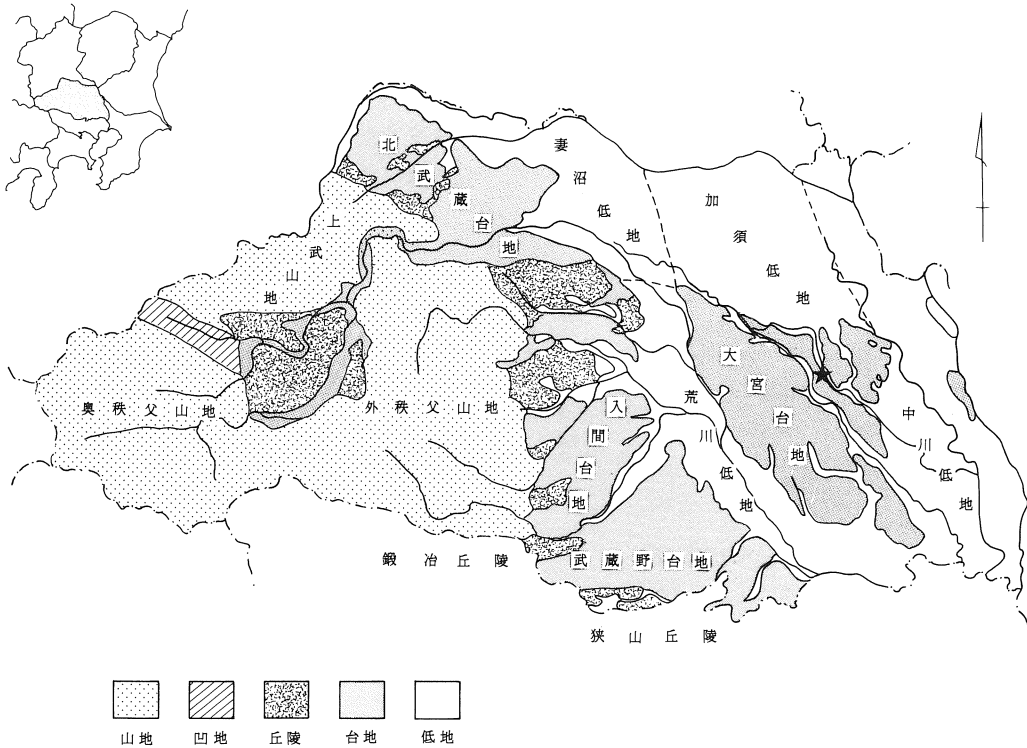
平成元年度の調査は県道大宮栗橋線の南側を対象として行われた。調査期間は平成元年4月1日～平成2年3月31日である。調査は調査対象地域内を横断する道路等によって調査区をⅠ区～Ⅴ区に分割して呼称した。調査は工期の関係から調査の終了した部分を次々に引渡していくという方式をとりそのつど航空撮影及び航空測量を実施していった。しかし、途中、調査隣接地の軟弱地盤等のため表土除去に重機が使えなくなりもっぱら人手に頼る作業となるなど調査に大きな支障をきたしたが、なんとか調査を続行した。1回目の航空撮影は8月9日に行った。以下、2回目を10月6日、3回目を11月21日、4回目を12月15日に行い5回目は年度末の3月28日に実施して調査を終了した。検出された遺構は住居跡78軒、竪穴状遺構2基、土坑37基、溝跡17条である。遺構、遺物の時期は古墳時代後期を中心とし古墳時代前期から平安時代にわたる。また、溝跡は出土する遺物から近世以降の所産と考えられる。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

荒川附遺跡は蓮田市関山4-342-3他に所在する。宇都宮線蓮田駅より北へ約1キロに位置する。遺跡の中央部やや北側を県道大宮栗橋線が横断している。遺跡の現状は大部分が畑であるが、蓮田市は近年東京への通勤圏として開発が進み大規模な住宅団地が造成されるなどほとんど宅地化され、遺跡周辺ではわずかに畑が残っている状態である。

遺跡は、大宮台地の支台である蓮田岩槻支台上に立地している。蓮田岩槻支台は桶川市下栢間付近で元荒川によって大宮台地からわかれ、西側を綾瀬川、東側を元荒川によって解析され南は岩槻市尾ヶ崎付近で終わる北西から南東に長い洪積台地である。台地は更に小河川によって解析され支谷が樹支状に入り込む。この傾向は特に台地東側において顕著で、西側は崖状になるという大宮台地全般に通じる特徴に合致する。遺跡はこの台地の中央部東側の緩斜面にあり、すぐ東側を元荒川が流れている。標高は9～13m前後にわたり沖積面との比高差は3～4mである。



第1図 埼玉県の地形図

蓮田市周辺の地質は洪積台地と沖積地からなるが、県東部に通じるこの地域は標高も比較的低く元荒川、綾瀬川をはじめとして水路が多く沖積地が発達している。山地及び丘陵の発達している県西部と大きく違う特徴である。この地形のために縄文時代の海進期にあっては貝塚が形成される等海が入り込んでいたことが知られている。また、これらの河川は自然堤防も発達させたがその傾向は綾瀬川には顕著にみられるが、元荒川の場合蓮田市域にあっては台地を直接削るように流下するためか遺跡周辺においてはその発達はあまり著しくなく、流域の岩槻市に入る辺りから見られるようである。

2 周辺の遺跡




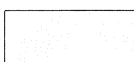
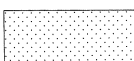

周辺には各時代にわたって多くの遺跡が分布する。次にそれらについて概観してみる。

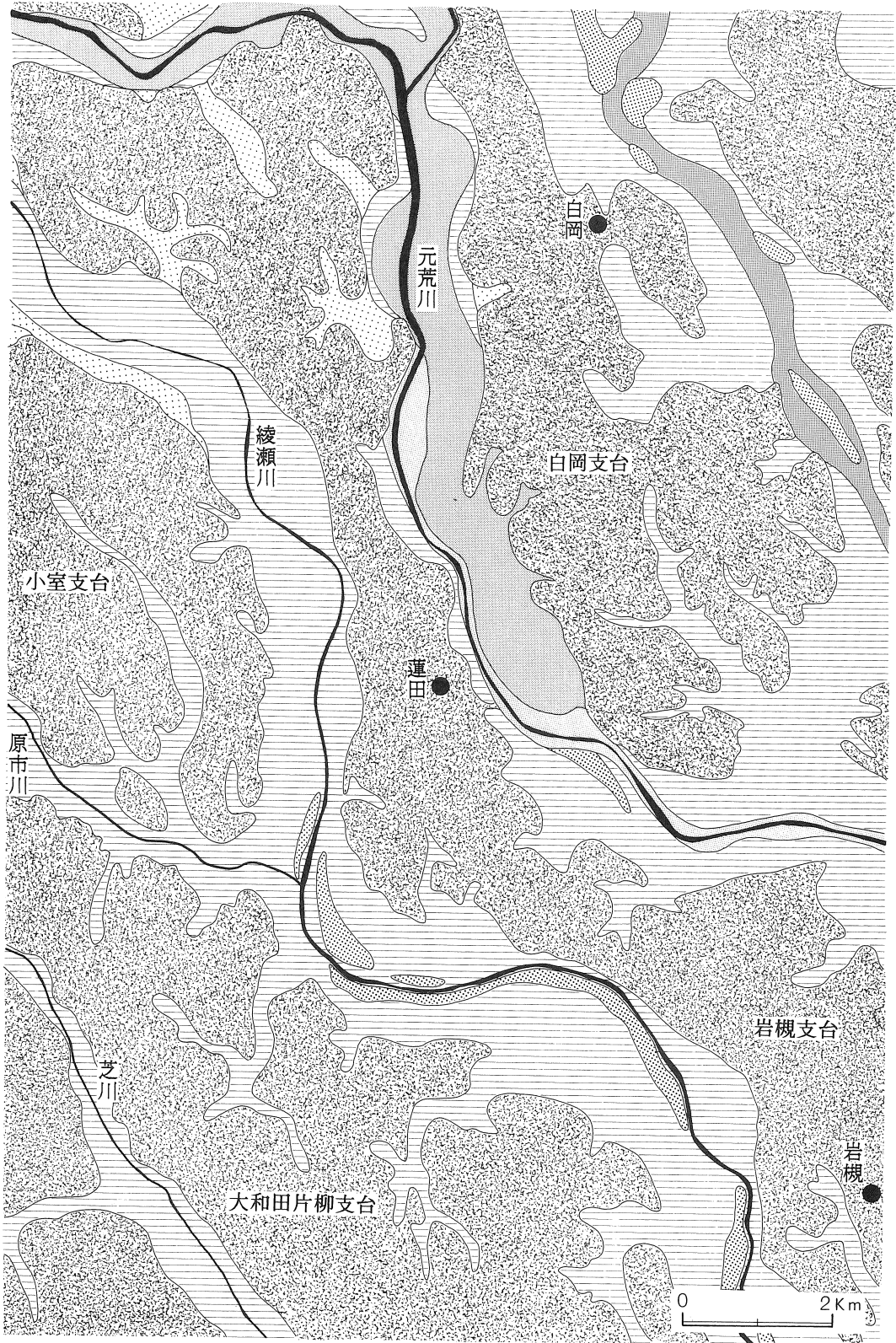
旧石器時代では蓮田市ささら遺跡、久台遺跡、帆立遺跡、閩戸足利遺跡、上尾市尾山台遺跡、伊奈町小室天神前遺跡、大山遺跡などがある。大山遺跡では2ヵ所のユニットとこの時期のものと思われる土坑が報告されている。他の遺跡ではグリッドあるいは他時期の住居跡の覆土などから遺物が出土している場合が多い。

縄文時代の遺跡は多く、特に前期では標式遺跡である関山貝塚、黒浜貝塚をはじめとして、綾瀬貝塚等、県重要遺跡に選定されているものも多い。ここでは縄文時代の遺跡については省略する。

弥生時代の遺跡は、岩槻市西原遺跡で宮の台期及び弥生町期の住居跡が15軒検出されている。掛遺跡では宮の台期の住居跡1軒、慈恩寺台地に立地する諏訪山遺跡では須和田式土器が方形周溝墓の可能性が指摘されている溝から出土している。南遺跡では7軒の住居跡が検出され須和田式期の遺物が検出されている。馬込遺跡では宮の台期の住居跡3軒、前野町期の住居跡6軒等が検出されている。また、木曾良遺跡では弥生町期の環濠が検出されている。大宮市吉野原遺跡では前野町期の住居跡が14軒検出されている。伊奈町では小室天神前遺跡で前野町期の住居跡が4軒検出されている。

古墳時代になると前期では、蓮田市ささら遺跡が当事業団によって昭和55年に調査されている。このときの調査では弥生末～古墳時代初頭の住居跡が21軒検出されている。その後昭和60年に蓮

	河道氾濫原		泥質堆積物 (後背湿地)
	自然堤防		旧流路跡
	泥質堆積物 (開析谷地田・後背湿地・二次堆積ローム)		ローム台地



第2図 遺跡周辺の表層地質

田市遺跡調査会によって行われた調査で同時期の住居跡が3軒検出されている。馬込新屋敷遺跡、馬込大原遺跡でも同様の住居跡がそれぞれ14軒と3軒検出されている。荒川附遺跡の対岸にある椿山遺跡、宿上遺跡では五領期、和泉期の住居跡が検出されている。岩槻市上野遺跡では2度にわたる調査によって五領期の住居跡が13軒検出されており、遺物では多量の土玉が出土している。諏訪山遺跡では五領期の住居跡が21軒検出されており、ここでも1軒の住居跡から多量の土玉が出土している。加倉遺跡では昭和32年と昭和45年の調査によって五領期の住居跡が計12軒検出されている。平林寺遺跡は加倉遺跡と同じく昭和45年に東北自動車道の工事に先立って調査され、五領期の住居跡が13軒検出されている。白岡町神山遺跡では和泉期の住居跡が2軒検出されている。皿沼遺跡では五領期の住居跡が2軒検出されている。タタラ山遺跡では五領期の住居跡1軒が検出されている。上尾市では尾山台遺跡、秩父山遺跡が調査されている。尾山台遺跡では弥生時代後期末～古墳時代初頭の住居跡が60軒検出されている。秩父山遺跡では住居跡が6軒ほど検出されている。伊奈町では大山遺跡が調査されている。大山遺跡は8次にわたる調査の結果前期の住居跡が26軒検出されている。

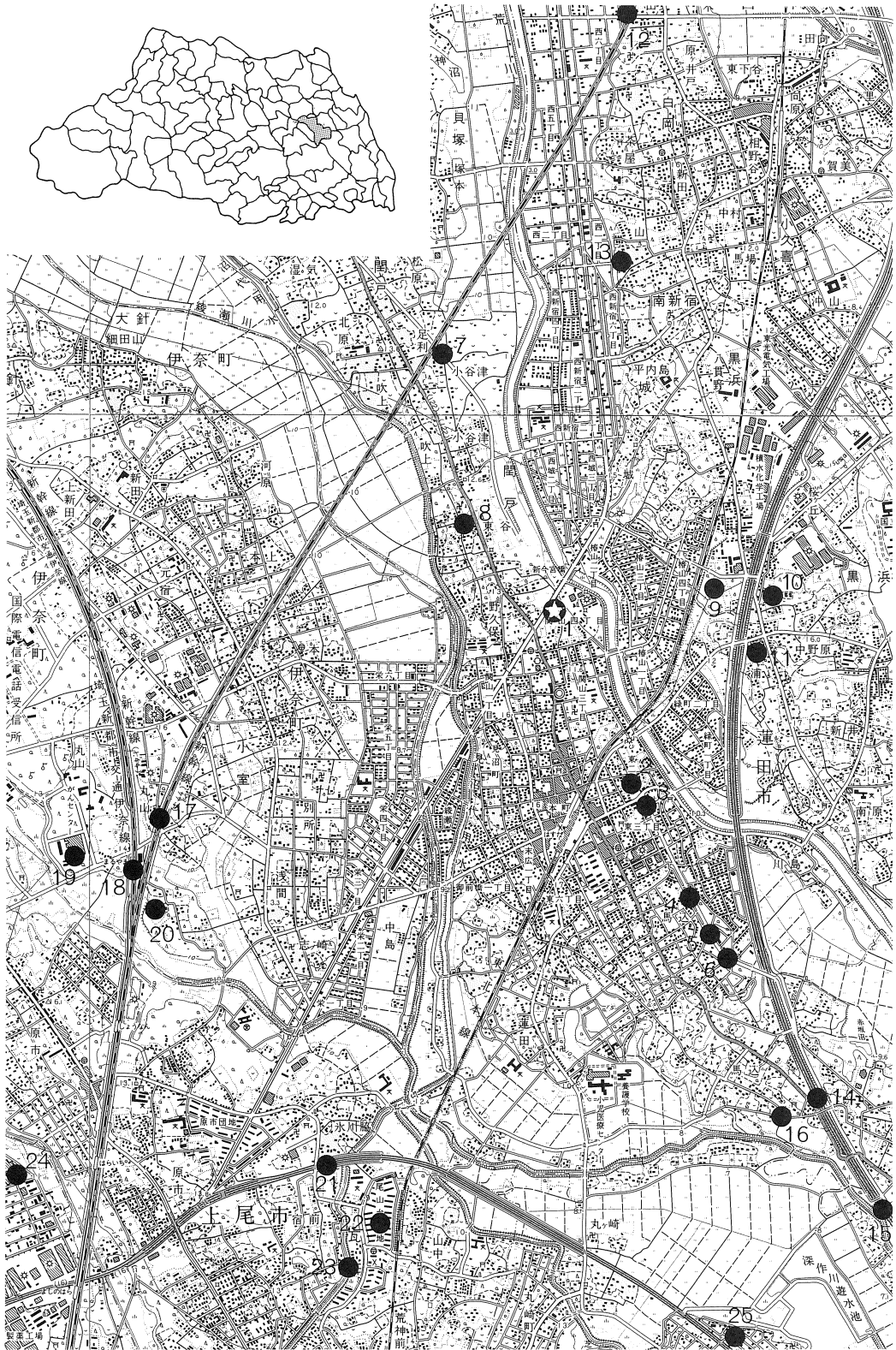
古墳時代後期になると集落数は極端に減少する。わずかに伊奈町大山遺跡で住居跡が9軒発見されている。あとはやや離れるが上尾市後山遺跡で住居跡が1軒、大宮市中里遺跡で3軒、下加遺跡で2軒調査されているのみである。

古墳は他地域に比べると少なく蓮田市内では十三塚古墳が現存するのみである。調査で確認されたのはささら遺跡で円墳が3基検出された。ささら遺跡の古墳は従来笹原古墳として理解されていたものである。椿山遺跡では5基の円墳が検出されている。時期的には元荒川右岸の十三塚古墳及びささら遺跡で検出のものは7世紀の築造であるのにたいして元荒川左岸の椿山遺跡の場合は出土遺物からより古い様相を示す。蓮田市以外の地域でも周辺には古墳は少なく岩槻市につかのこし古墳があったとされる。元荒川上流の菖蒲町には栢山古墳群がある。

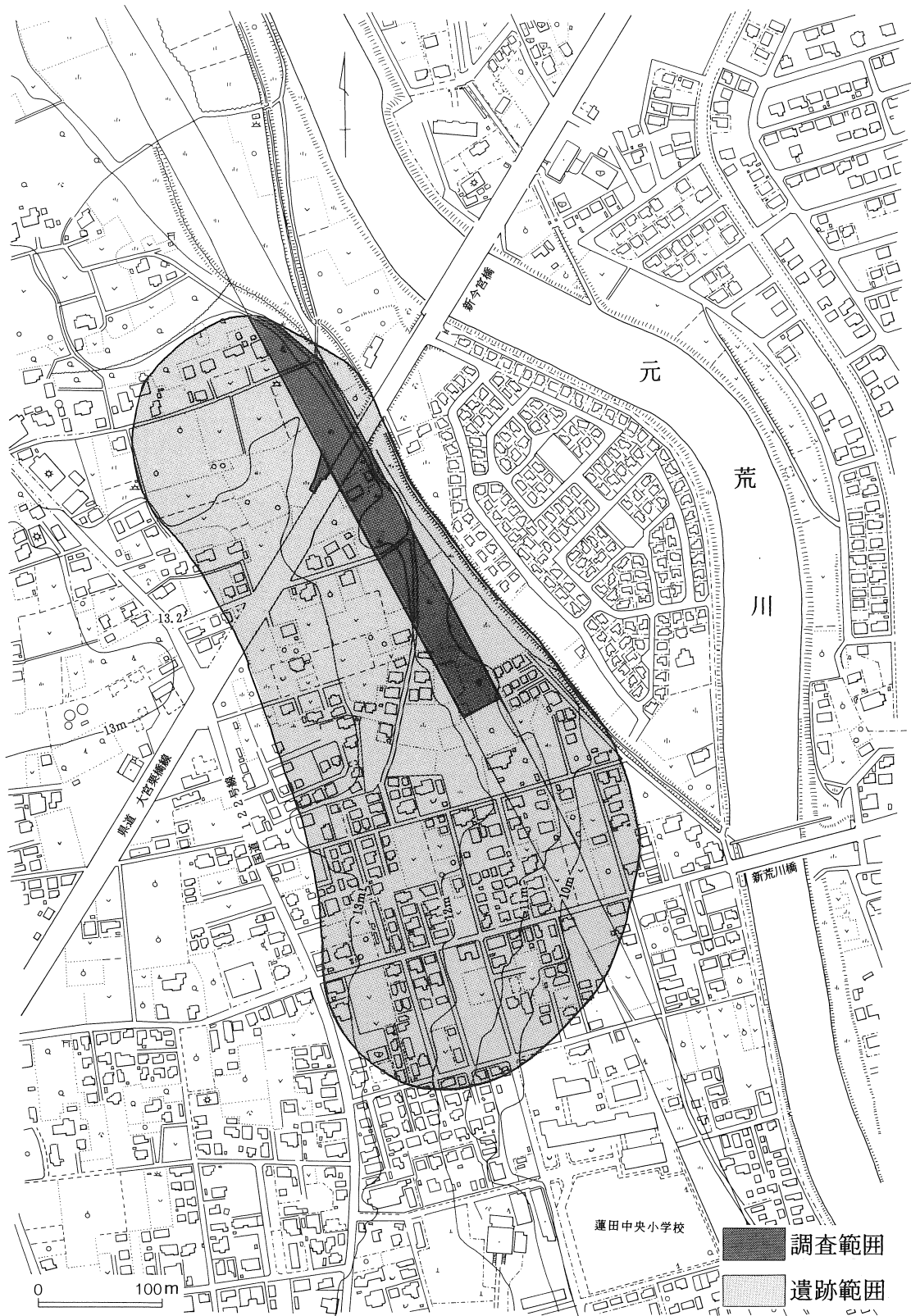
歴史時代になると遺跡数はやや増加してくる。椿山遺跡は5回にわたって調査が行われている。特に昭和59年と60年に市庁舎の建設に伴って蓮田市教育委員会によって行われた調査では平安時代の大規模な集落が検出され、製鉄関連の遺構も多数発見されている。隣接する御林遺跡では平安時代の住居跡が3軒検出されている。久台遺跡では住居跡が1軒検出されているが、遺物が鎌のみの

周辺の遺跡

<p>[蓮田市] 1 荒川附遺跡 2 久台遺跡 3 ささら遺跡 4 帆立遺跡 5 馬込新屋敷遺跡 6 馬込大原遺跡 7 閨戸足利遺跡 8 十三塚古墳 9 椿山遺跡 10 御林遺跡 11 宿上遺跡 [白岡町] 12 神山遺跡 13 タタラ山遺跡 [岩槻市] 14 馬込遺跡 15 平林寺遺跡 16 つかのこし古墳 [伊奈町] 17 赤羽遺跡 18 丸山遺跡 19 大山遺跡 20 伊奈氏屋敷跡 [上尾市] 21 秩父山遺跡 22 尾山台遺跡 23 宿前Ⅰ遺跡 [大宮市] 24 吉野原遺跡 25 深作東部遺跡群</p>
--



第3図 周辺の遺跡



第4図 周辺の地形

ため時期は特定できない。ささら遺跡では平安時代の小鍛冶跡と推定される堅穴状遺構が1基検出されている。大宮市では高台山遺跡で平安時代の住居跡が2軒調査されている。東北原遺跡では平安時代の土坑が9基調査されその中には土器焼成土坑も含まれている。吉野原遺跡では平安時代の住居跡が1軒検出されている。深作東部遺跡群は13遺跡を内包するものであるが奈良平安時代の住居跡が9軒報告されている。上尾市では秩父山遺跡で平安時代の住居跡が1軒報告されている。宿前Ⅰ遺跡でも平安時代の住居跡が1軒検出されている。また、平塚氷川遺跡においても平安時代の住居跡が1軒報告されている。伊奈町では丸山遺跡で平安時代の住居跡が1軒検出されている。赤羽遺跡でも同じく平安時代の住居跡が1軒検出されている。大山遺跡では49軒の住居跡が検出されている。また製鉄遺構も多数検出され、この時期の製鉄関係の遺跡として知られている。

参考文献

- 埼玉県 1982「新編埼玉県史 資料編2」
- 埼玉県 1984「新編埼玉県史 資料編3」
- 岩槻市 1983「岩槻市史 考古資料編」

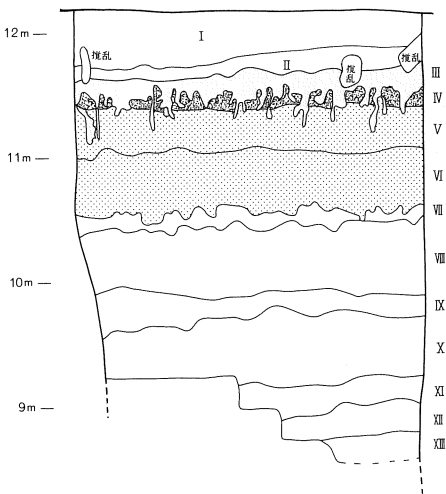
Ⅲ 遺跡の概観

荒川附遺跡は大宮台地蓮田岩槻支台上に立地する。遺跡は台地の東縁に位置し元荒川の右岸にあたる。標高は9m～13mにわたる。元荒川との比高差は1m～2mである。遺跡の広がり台地の縁に沿うように南北方向に長い。規模は南北630m、東西は最大で280mほどと考えられる。地形は台地中央部の西側から東の元荒川に向かって低くなるが細かくみると遺跡の南半部においては北西から南東方向に向かって低くなる。

調査は埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団と省略）と蓮田市教育委員会（以下蓮田市と省略）、蓮田市遺跡調査会（以下調査会と省略）の3者によって行われている。

蓮田市と調査会による調査は8次にわたり合計25軒の住居跡が検出されている。内訳は古墳時代後期2軒、奈良時代17軒、平安時代5軒時期の明確にわからないもの1軒となっている。これらのうち4軒は鍛冶に関係する工房の可能性が指摘されている。時期は3軒が奈良時代、1軒が平安時代のものである。集落の変遷は北から南に下るにしたがって時代も古墳から奈良、平安と新しくなる傾向が指摘されている。

事業団による調査は今回報告するものである。昭和58年度と平成元年度に都合3次にわたって行われた。調査区の設定は第6図に示したとおりである。検出された遺構は竪穴住居跡97軒、竪穴状遺構2基、円形環状遺構1基、土坑65基、溝跡22条である。住居跡の時期別内訳は縄文時代1、古墳時代中期和泉式期4、古墳時代後期鬼高式期66、奈良時代5、平安時代1、時期不明20である。竪穴状遺構は古墳時代後期に属する可能性が高い。円形環状遺構は古墳時代後期の古い時期。土坑は1基が古墳時代後期、他は時期不明。溝跡は全てが近世以降のものである。住居跡のうち第81号

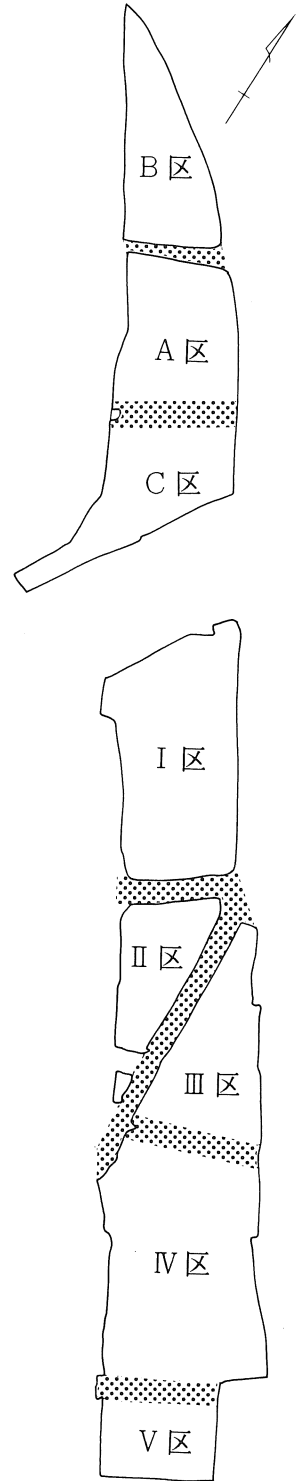


第5図 基本土層図

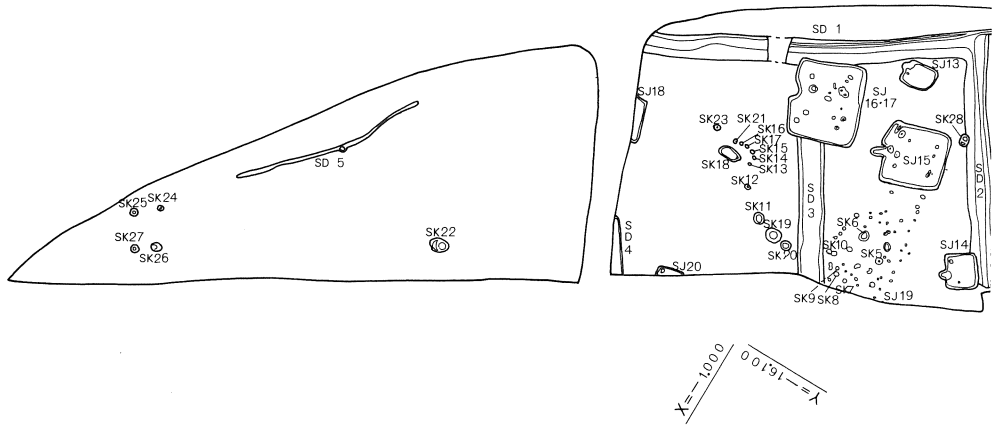
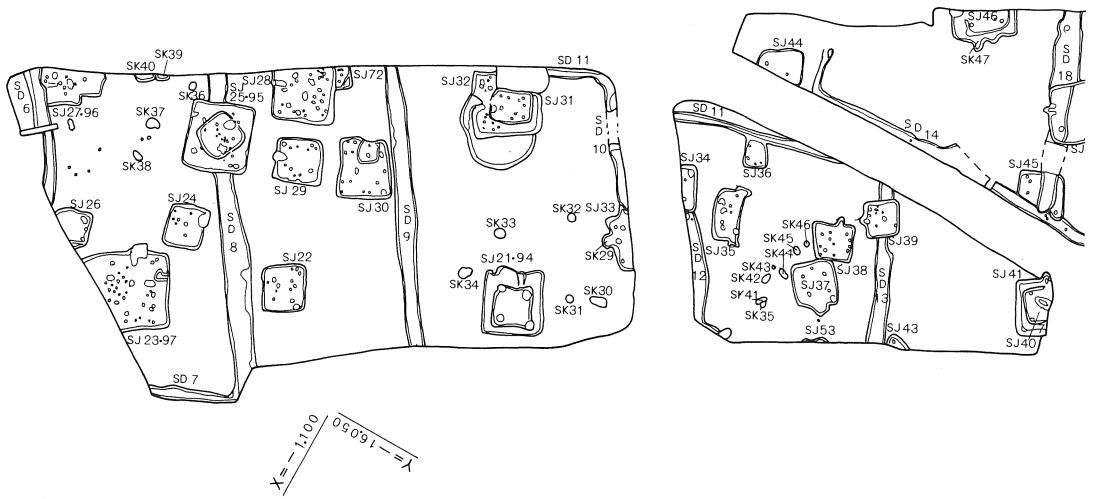
- I 褐色 表土
- II 褐色粘性有しまり良包含層
- III 黄褐色粘性有しまり良ソフトローム
- IV 黄褐色粘性無しまり良ハードローム
- V 暗褐色粘性有しまり良黒色帯
- VI 黒褐色粘性有しまり良黒色帯
- VII 褐色粘性有しまり良赤色パミス少量含水分多
- VIII にぶい黄褐色粘性有しまり良固い
- IX 褐色粘性有しまり良固い
- X 黄褐色粘性有しまり良固いポロポロしている
- XI 黄褐色粘性有しまり良固い水分多い
- XII 明黄褐色粘性有しまり良かなり固い
- XIII 明黄褐色粘性有しまり良かなり固い微砂粒多

住居跡は奈良時代の鍛冶に関する工房跡である。また、住居跡の時代別の分布は前述の蓮田市および調査会による指摘と合致するものである。

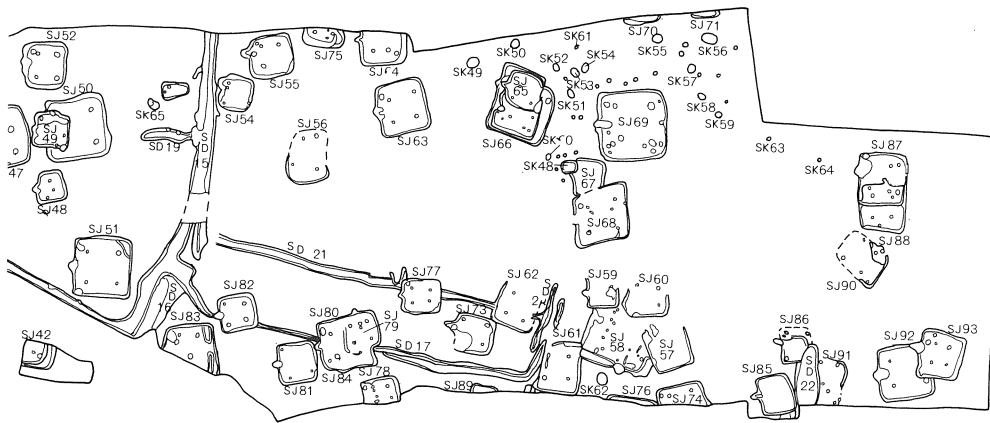
遺跡の年代は今まで古墳時代後期から平安時代までとされてきたが、今回の調査で遺構の面では縄文時代に遡ることとなった。さらに古墳時代についても和泉式期の住居跡の存在が確認されたことは大きな成果である。



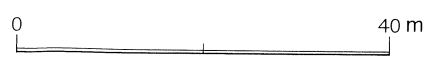
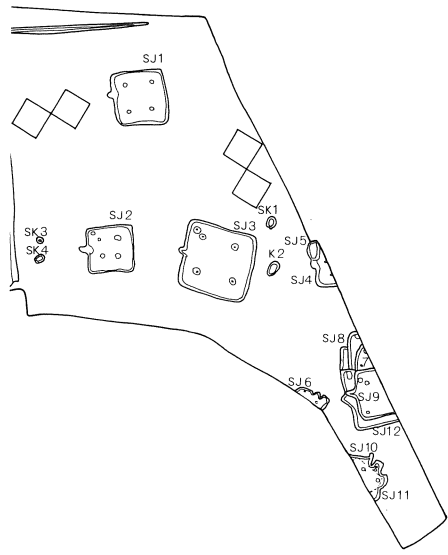
第6図 調査区区分図



第7図 遺構配置図



X = -1200
Y = -1600



IV 検出された遺構と遺物

1 住居跡

第1号住居跡（第8図）

平面形は隅丸方形である。他の遺構との重複はない。規模は5.7m×5.4mで確認面からの深さは40cmである。主軸方位はN-35°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦で中央部はよく踏み固められていた。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1～P4が検出された。いずれも主柱穴と考えられる。壁溝は全周する。

カマドは北壁中央に設けられ、袖及び焚口の天井部分は砂岩の切り石を用いて作られていた。また支脚も砂岩を整形したものを使用していた。焚口の幅は37cmで奥行きは105cmである。煙道は検出されなかった。

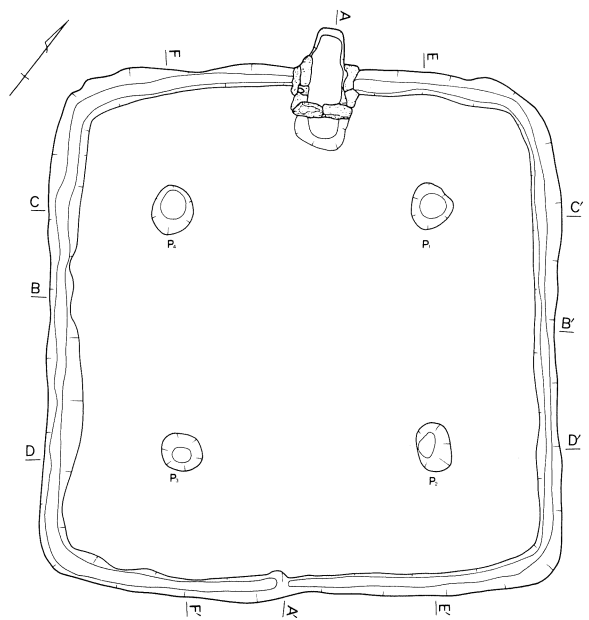
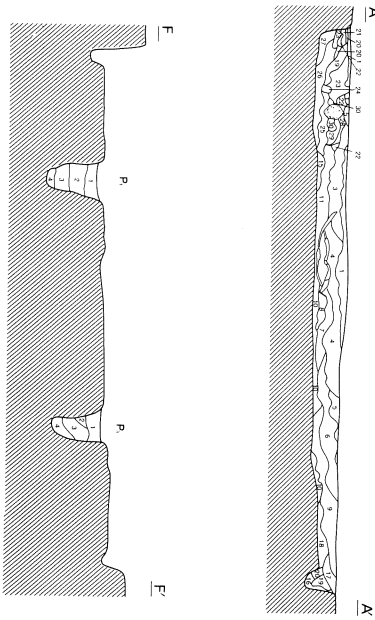
遺物は須恵器の大甕が床面に据え付けられた状態のまま潰れた形で検出されたほか、礎、土師器坏、甕などが出土した。出土状況は一部を除いて床面から浮いているものもある。

砥石（30、31） 30は被熱しており表面の剝離が激しく折損している。全体に剝離面のほうが多いが上下を中心に側面も良く使われている。石質は砂岩である。31はごく一部分だけの残存である。32は支脚である。砂岩を削って整形している。

鉄製品（35～39） 35は板状を呈するものであるが保存状態が悪く3枚に剝離している。現存長3.3cm、幅1cm、厚さは4mmほどである。36～38は棒状鉄製品である。あるいは鎌の頸部になるかもしれない。39は長頸鎌と考えられる。鎌身は長さ2.4cm、最大幅1.2cmで三角形を呈し、小さい逆刺をもつ。両丸造りである。頸部は幅6mm、厚さ4mmほどである。X線撮影を行ったが筧被は確認できなかった。

第1号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (10.4) 底径 — 高さ 3.6 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 赤色粒 礫		30	床-20	4	
2	ク	口径 11.6 底径 — 高さ 4.4 最大径 —	赤色粒 砂粒 角閃石	橙褐	100	床-10	3	
3	ク	口径 11.0 底径 — 高さ 4.1 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	にぶい黄橙	90	B-1-7-157	8	

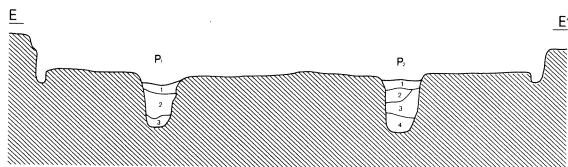
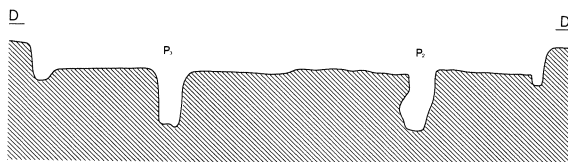
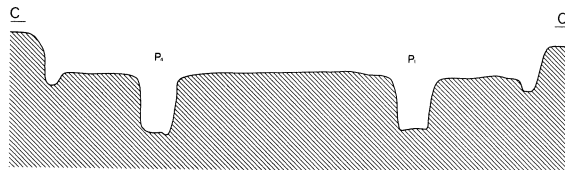
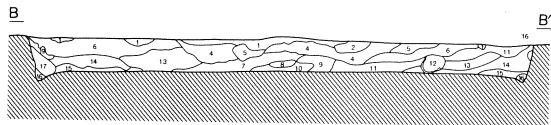


S J 1

1. 暗オリーブ褐色 しまり良、砂質、炭化粒、黄色粘土の小ブロック含む。
2. 褐色 しまり良、焼土粒子・炭化粒子多量含む、黄色粘土のブロックを含む。
3. 黒褐色 しまり弱、焼土粒子多量含む。
4. 暗褐色 しまり弱、黄褐色土の粒子、炭化物等を微量含む。
5. 灰褐色 しまり良、焼土粒子・炭化粒子多量含む。
6. 暗褐色 しまり良、黄褐色土の粒子を微量含む。
7. 黒褐色 しまり弱、黄褐色土の粒子・焼土粒子を多量含む。
8. 極暗褐色 しまり弱、黄褐色の小ブロックを微量含む。
9. にぶい黄色 しまり弱、粘性あり、炭化物を微量含む。
10. 暗褐色 しまり弱、黄褐色土の粒子を多量含む。
11. 黒褐色 しまり良、焼土、炭化粒子を微量含む。
12. 褐色 しまり弱、黄褐色土の粒子を微量含む。
13. 暗褐色 しまり弱、黄褐色土の粒子を多量含む。
14. 褐色 粘性あり、黄褐色の小ブロックを多量含む。
15. 黄褐色 しまり弱、粘性あり、硬質焼土。
16. 暗褐色 しまり弱、炭化物微量混入。
17. にぶい黄褐色 しまり良、やや粘性あり、黄色粘土の粒子を微量含む。
18. 暗灰黄色 しまり良、粘性あり、オリーブ黄色粘土の粒子微量含む。
19. 明褐色 粘性なし、硬い焼土・オリーブ黄色粘土を多量含む。
20. 明褐色 しまり良、粘性なし、焼土粒子を微量含む。
21. 褐色 しまり良、粘性なし、オリーブ黄色粘土粒子微量含む。
22. 褐色 しまり弱、粘性なし、焼土粒子を多量含む。
23. にぶい赤褐色 しまり弱、粘性なし、焼土の小ブロック及び炭化粒子を多量含む。
24. オリーブ褐色 しまり良、粘性あり、一部に焼土ブロック含む。
25. 灰黄色 しまり良、粘性あり、オリーブ黄色粘土の粒子微量含む。
26. 極暗赤褐色 しまり弱、粘性なし、焼土粒子を多量含む。
27. 褐色 しまり弱、粘性なし、焼土粒子微量含む。
28. 黒褐色 しまり弱、粘性なし、炭化物、焼土粒子を微量含む。
29. 暗褐色 しまり良、粘性なし、オリーブ黄色粘土粒子微量含む。
30. にぶい黄褐色 しまり良、粘性なし、焼土粒子及び、硬質岩小ブロックを少量含む。

S J 1 ビット

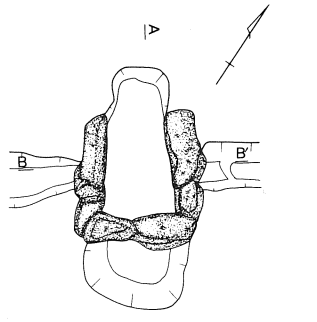
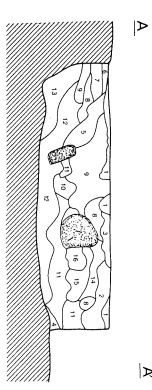
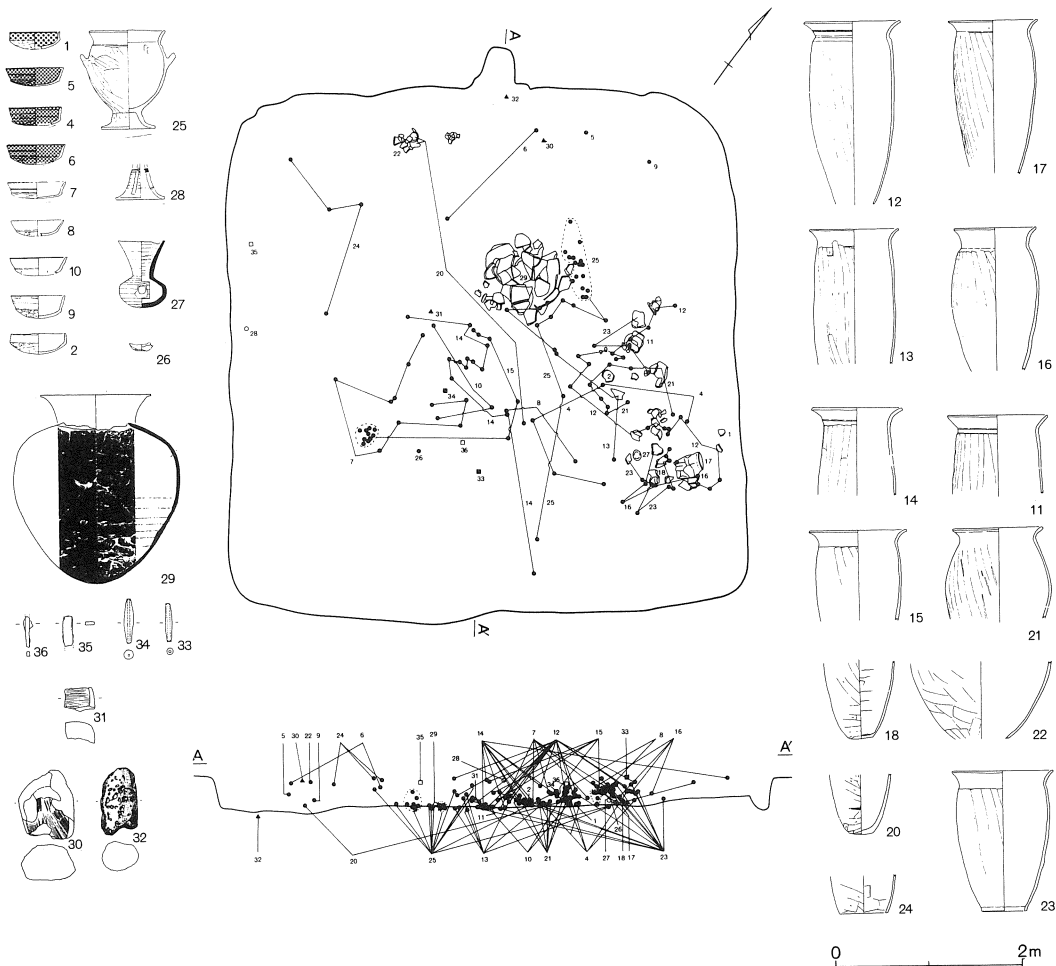
1. 暗褐色 粘性なし、ローム粒子を多量含む。
2. 灰褐色 しまり良、粘性あり。
3. 褐色 しまり良、粘性あり、ロームの小ブロック（径6cm以下）多量含む。
4. にぶい黄色 しまり良、粘性あり。



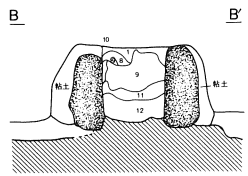
水系標高 = 12,000 m

0 2m

第8図 第1号住居跡(1)

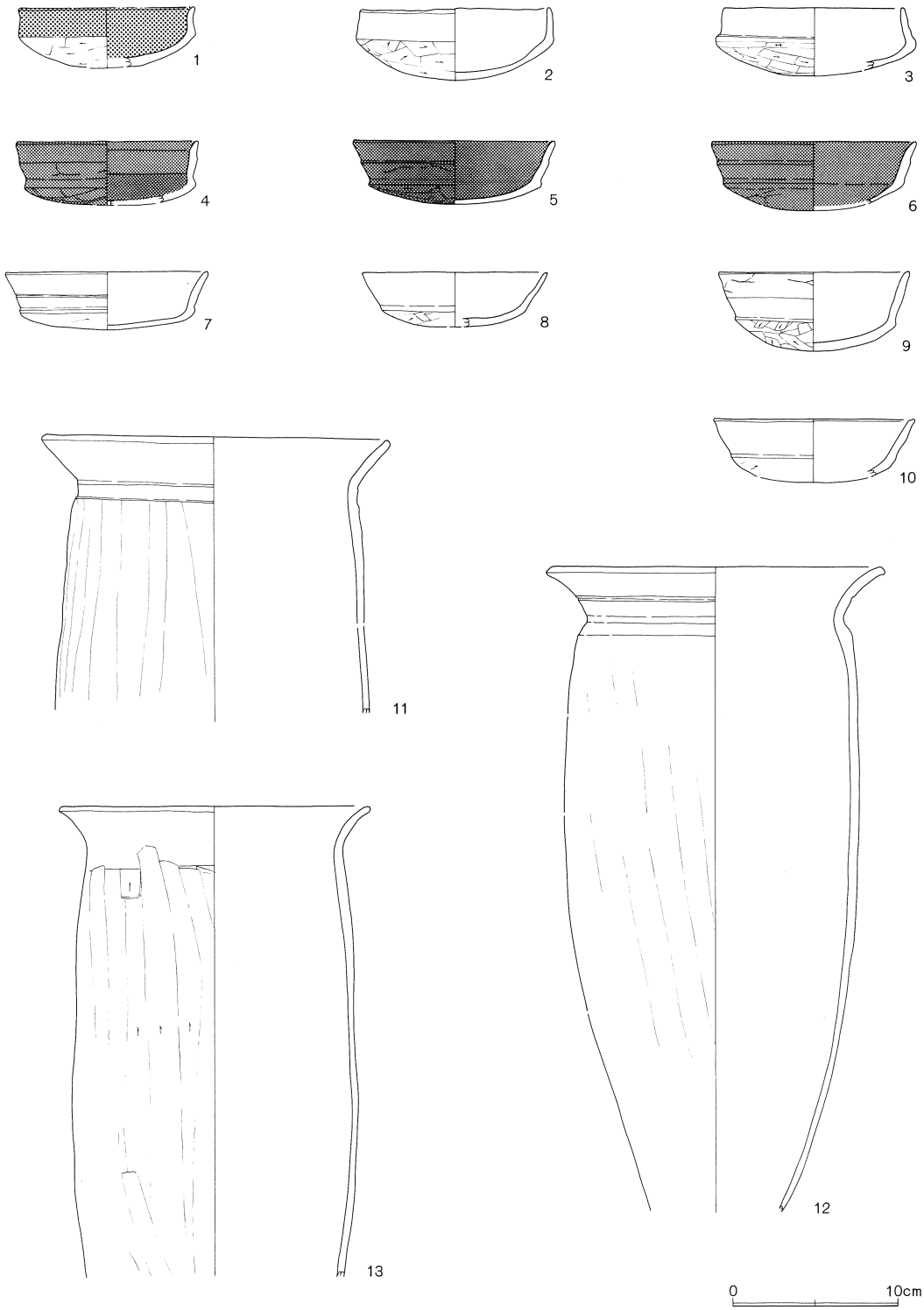


0 1m
 水系標高 = 12,000 m

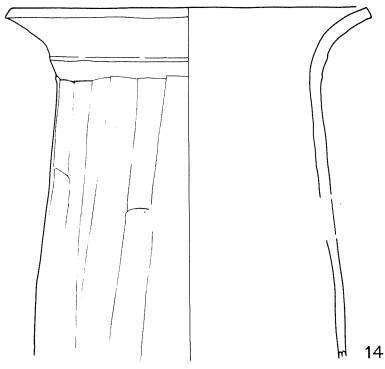


1. 暗オリーブ褐色 しまり良。砂質。炭化粒、黄色粘土の小ブロック含む。
2. 黒色 しまり弱。焼土粒子多量含む。
3. 灰褐色 しまり良。焼土粒子・炭化粒子多量含む。
4. 黄褐色 しまり弱。粘性あり。壁崩壊土。
5. 明褐色 粘性なし。硬い焼土・オリーブ黄色粘土を多量含む。
6. 明褐色 しまり良。粘性なし。焼土粒子を微量含む。
7. 褐色 しまり良。粘性なし。オリーブ黄色粘土粒子微量含む。
8. 褐色 しまり弱。粘性なし。焼土粒子を多量含む。
9. にぶい赤褐色 しまり弱。粘性なし。焼土の小ブロック及び微粒子を多量含む。
10. オリーブ褐色 しまり良。粘性あり。一部に焼土ブロック含む。
11. 灰黄色 しまり良。粘性あり。オリーブ黄色粘土の粒子微量含む。
12. 極暗赤褐色 しまり弱。粘性なし。焼土粒子を多量含む。
13. 褐色 しまり弱。粘性なし。焼土粒子微量含む。
14. 黒褐色 しまり弱。粘性なし。炭化物、焼土粒子を微量含む。
15. 暗褐色 しまり良。粘性なし。オリーブ黄色粘土粒子微量含む。
16. にぶい黄褐色 しまり良。粘性なし。焼土粒子及び、凝灰岩小ブロックを少量含む。

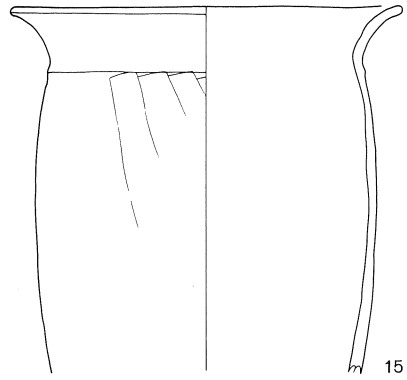
第9図 第1号住居跡(2)



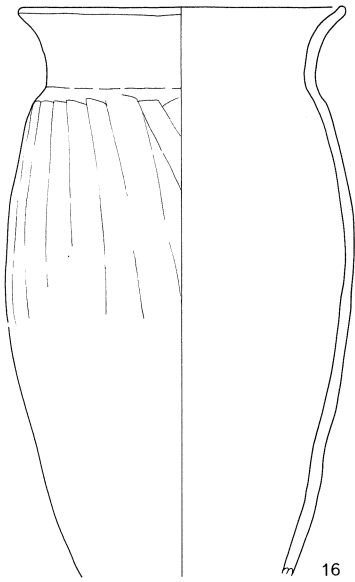
第10図 第1号住居跡出土遺物(1)



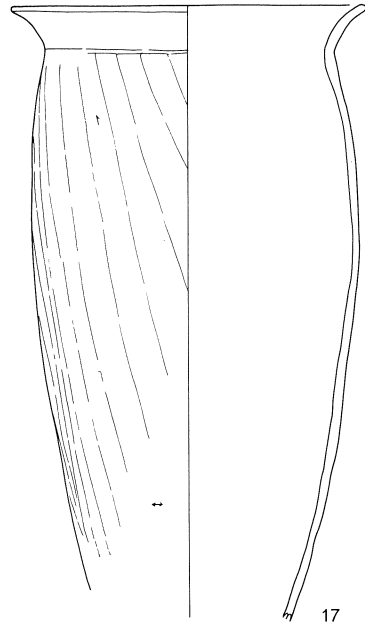
14



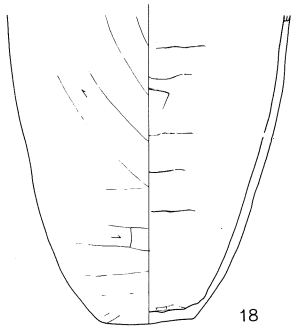
15



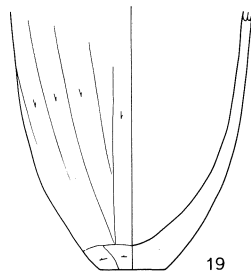
16



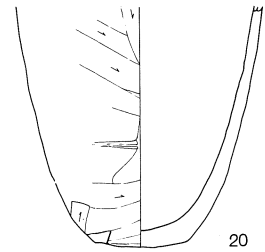
17



18



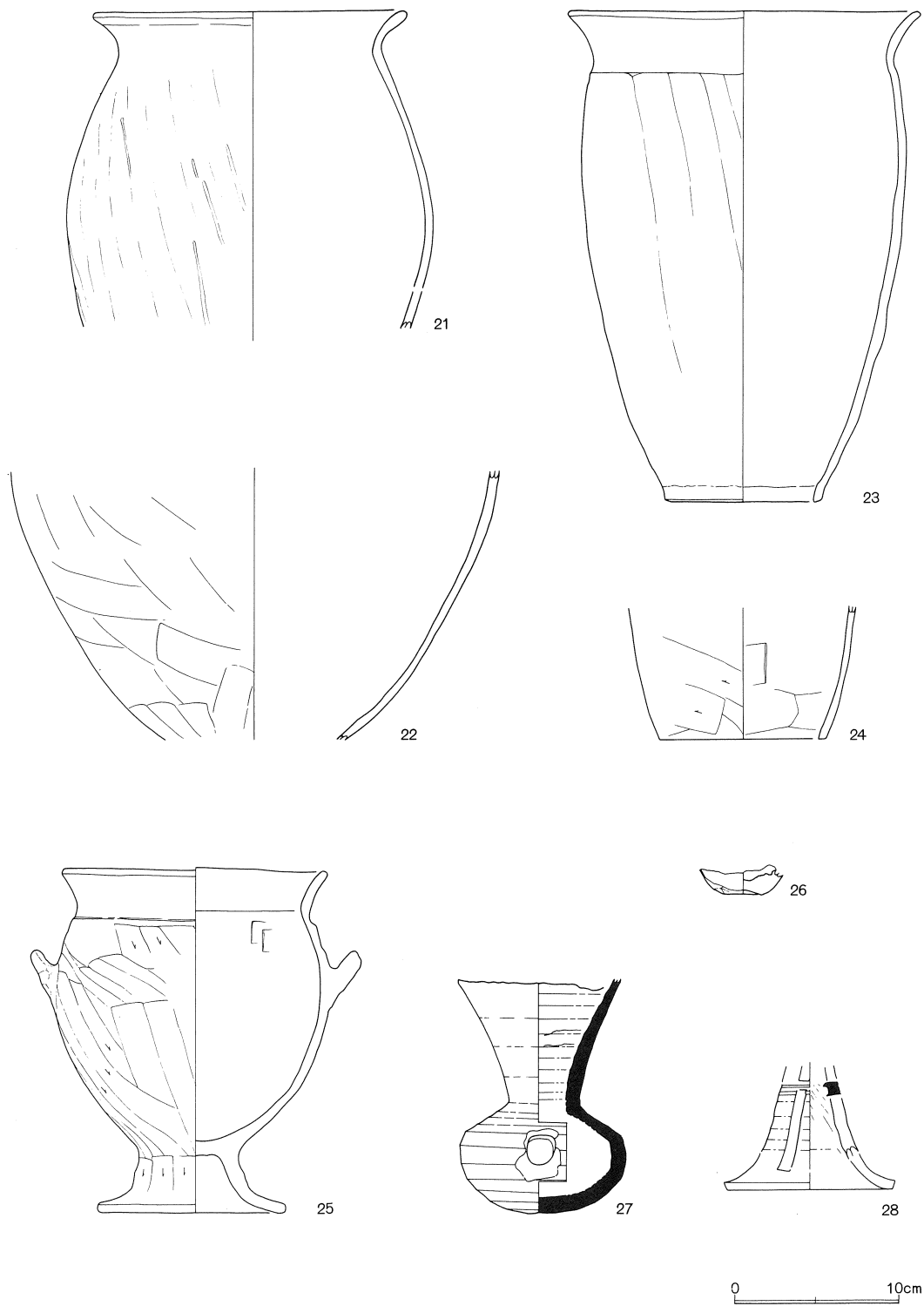
19



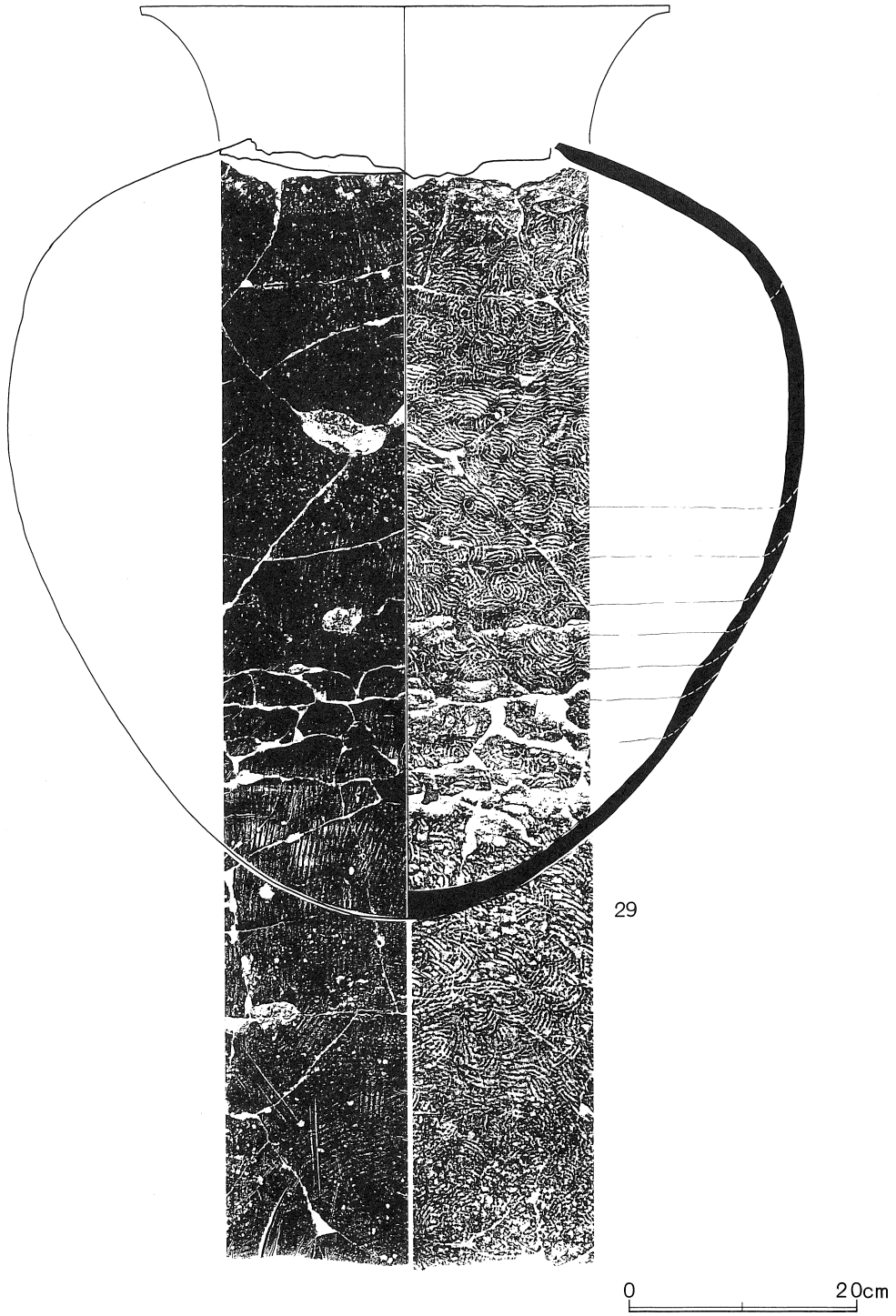
20



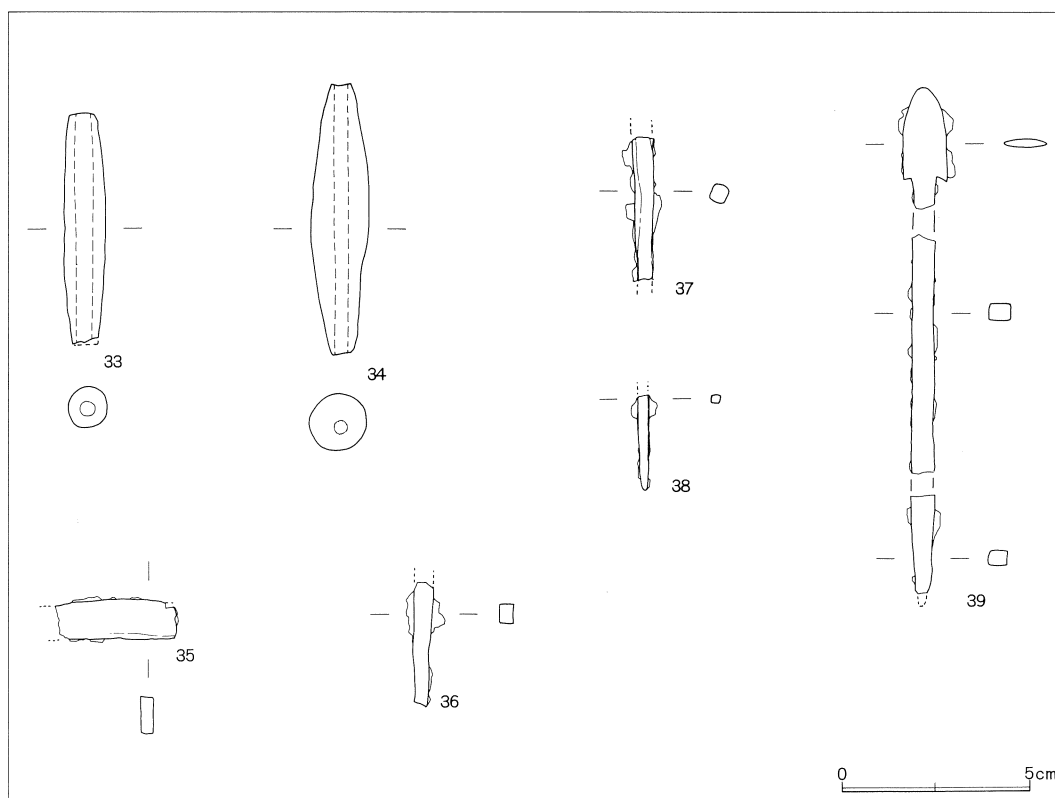
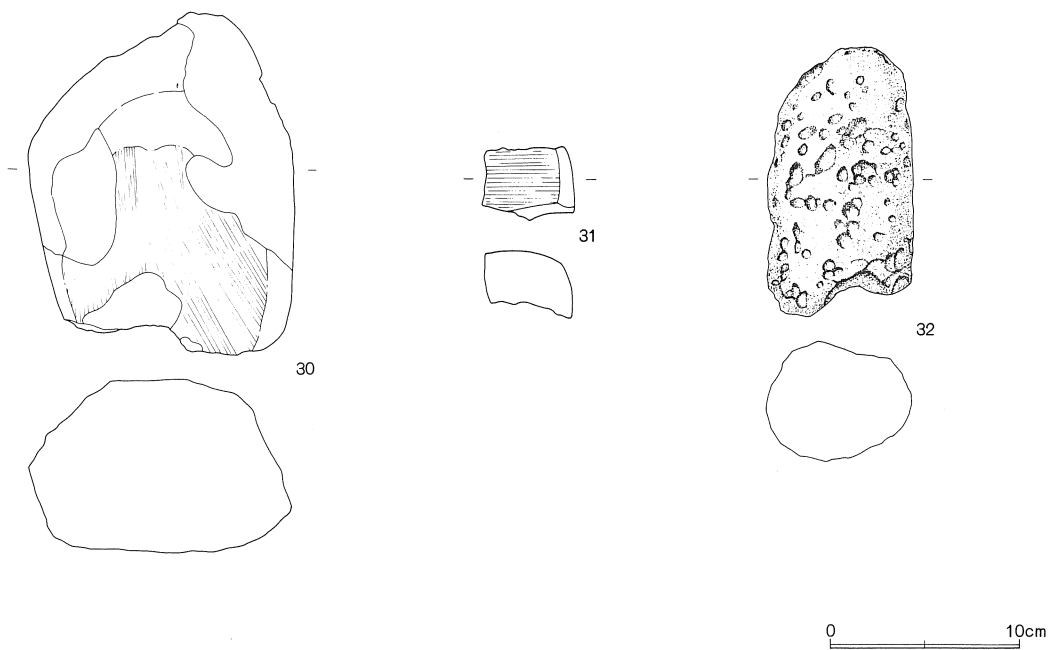
第11图 第1号住居跡出土遺物(2)



第12図 第1号住居跡出土遺物(3)



第13図 第1号住居跡出土遺物(4)



第14図 第1号住居跡出土遺物(5)

第1号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
4	坏	口 径 11.2 底 径 — 高 さ 3.8 最大径 —	赤色粒 砂粒		70	B-2-1	7	
5	〃	口 径 12.2 底 径 — 高 さ 3.9 最大径 —	赤色粒 砂粒		90	B-1-8-45	5	
6	〃	口 径 (12.5) 底 径 — 高 さ (4.2) 最大径 —	赤色粒 砂粒	明赤褐	20	B-2-2-53 B-1-8-53	10	
7	〃	口 径 (12.4) 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	〃	40	B-2-2 B-2-1	9	
8	〃	口 径 (11.4) 底 径 — 高 さ (3.3) 最大径 —	赤色粒 砂粒	〃	20	B-2-1-1	12	
9	〃	口 径 11.6 底 径 — 高 さ 4.8 最大径 —	赤色粒 角閃石 砂粒	明黄褐	90	B-1-7-153	6	
10	〃	口 径 (12.3) 底 径 — 高 さ (3.8) 最大径 —	角閃石 礫 砂粒	明赤褐	20	B-2-1	11	
11	甕	口 径 20.9 底 径 — 高 さ (16.8) 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい黄橙	50	床直7	20	
12	〃	口 径 20.7 底 径 — 高 さ (39.0) 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 赤色粒 礫	〃	80	床 5、7、8、13、14	14	
13	〃	口 径 18.8 底 径 — 高 さ (28.4) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	80	床11、B-2-1	16	

第1号住居跡出土遺物(3)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
14	甕	口径 19.0 底径 — 高さ (18.6) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	30	床B-2-1、B-2-2	18	
15	〇	口径 (20.6) 底径 — 高さ (19.4) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	20	B-2-1	22	
16	〇	口径 17.5 底径 — 高さ (30.3) 最大径 —	黒色粒 赤色粒 礫 砂粒	〇	60	床16、17	17	
17	〇	口径 18.7 底径 — 高さ (32.7) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〇	80	床	15	
18	〇	口径 — 底径 4.8 高さ (16.4) 最大径 —	白色粒 黒色粒 赤色粒 砂粒	にぶい黄褐	20	床16	23	
19	〇	口径 — 底径 3.5 高さ (13.6) 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	赤褐	20		794	
20	〇	口径 — 底径 5.0 高さ (12.7) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	20	床2、B-2-1-157	24	
21	〇	口径 18.8 底径 — 高さ (19.2) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〇	50	床12、B-2-1-327	21	
22	〇	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 砂粒	橙褐	30	2、床	796	
23	甗	口径 (21.7) 底径 9.6 高さ 29.9 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	50	床6、7、12、16	19	

第1号住居跡出土遺物(4)

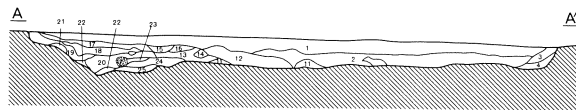
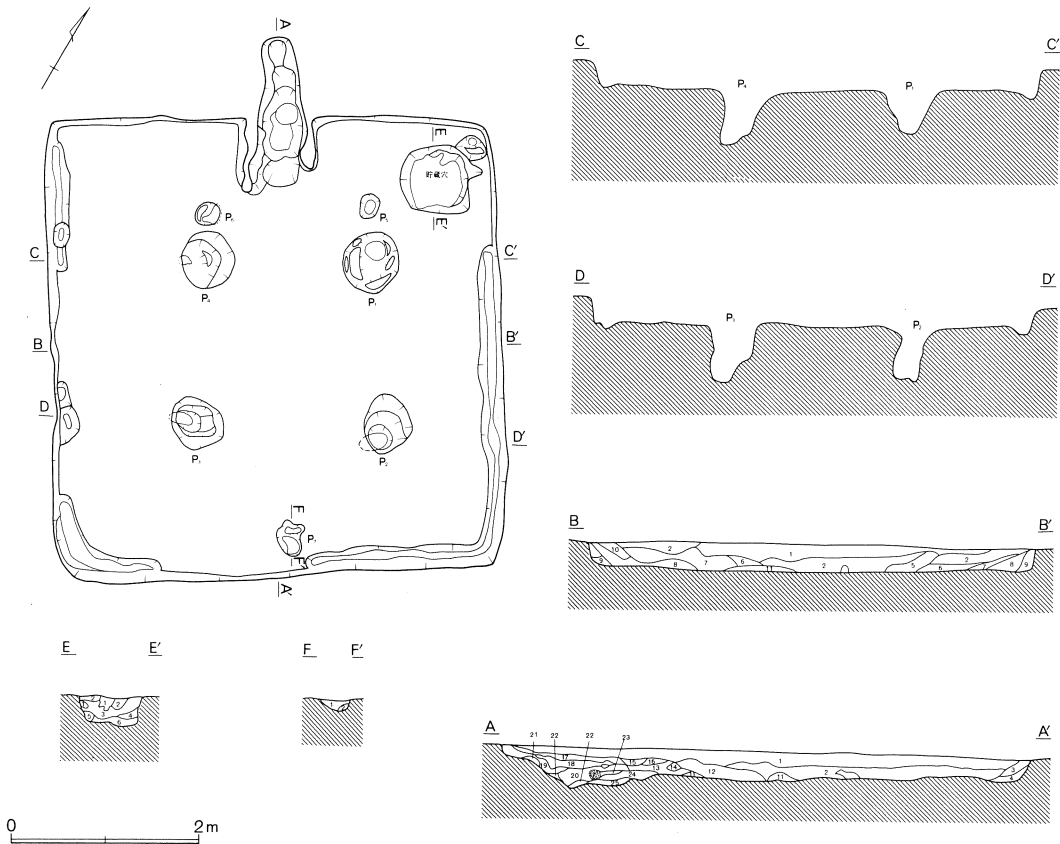
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
24	甑	口径 — 底径 (10.2) 高さ — 最大径 —	砂粒	にぶい黄橙		B-2-2-8、15、14	504	
25	台付甕	口径 16.4 底径 11.4 高さ 21.0 最大径 —	黒色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	〃	90	B-1-7-124、125	13	
26	手捏ね	口径 — 底径 2.0 高さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	〃	20	B-2-1-59	25	
27	甕	口径 (10.0) 底径 — 高さ (14.0) 最大径 10.2	礫 砂粒	灰	90	床直15	2	
28	高坏	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 砂粒	〃		B-2-2-68	503	
29	甕	頸部 (46.8) 底径 — 高さ (80.0) 最大径 70.2	礫 砂粒	〃	90	4, 床面出土	1	

第1号住居跡出土土錘計測表

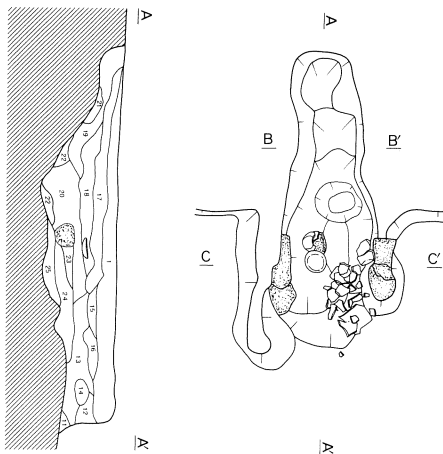
番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
33	6.1	1.1	0.4	6.37	完形	B-2-1 78	27
34	7.2	1.5	0.3	14.25	完形	B-2-1 265	26

第2号住居跡(第15図)

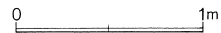
平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は4.9m×4.8mで確認面からの深さは26cmである。主軸方位はN-34°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は住居跡の北東隅に検出された。方形の掘り込みで上面70cm×70cmほどで深さは30cmである。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられ、P1、P4にはそれぞれ副え柱的なピットが付随している。P4では覆土上面から甕の上半部が倒立した状態で検出された。壁溝は全周せず北西辺と北東辺、南東辺および南西辺の一部で切れる。P5は入口に関するピットであろうか。



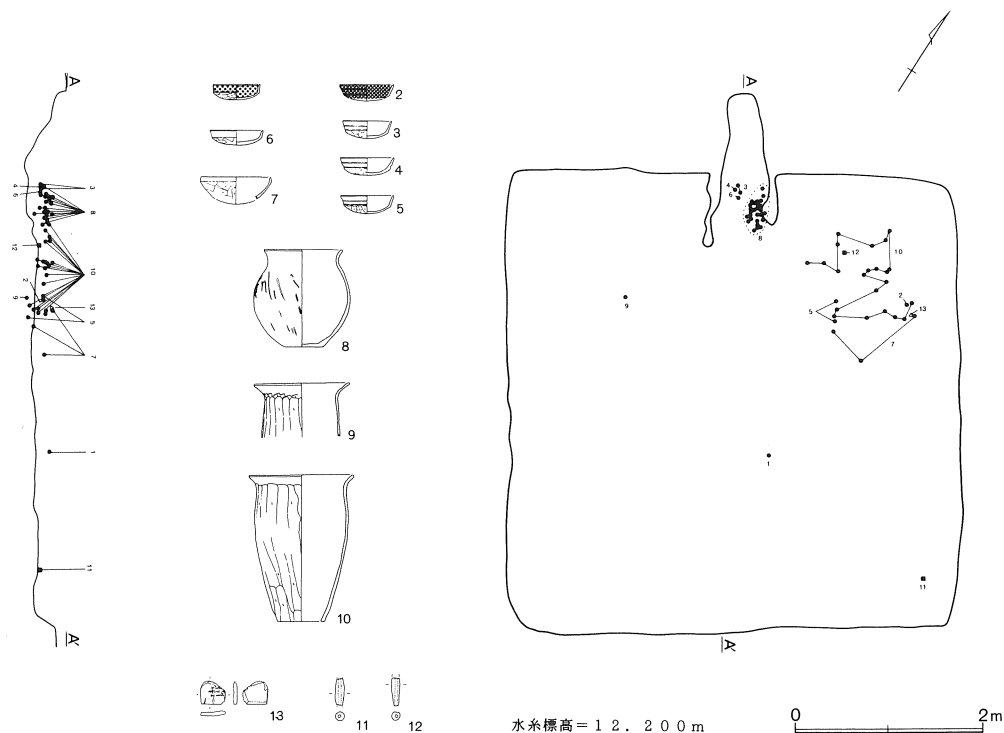
- 0.2.2
1. 褐色 しまり砂、黄褐色土砂子を多量に含む。
 2. 褐色 しまり砂、黄褐色土砂子・粘土砂子を多量に含む。
 3. 褐色 しまり砂。
 4. 褐色 しまり砂、附砂あり。
 5. 褐色 しまり砂、ロームを小ブロック状及び粘土砂子を多量に含む。
 6. 黄褐色 しまり砂、他の砂子なし。
 7. 褐色 しまり砂、粘土砂子・黄褐色土砂子全体に含む。
 8. 黄褐色 しまり砂、ロームを小ブロック状に含む。
 9. 灰色+黄褐色 しまり砂、ロームをブロック状(3~4cm)に含む。
 10. 褐色 しまり砂、黄褐色土砂子を多量に含む。
 11. 黄褐色 しまり砂、附砂あり。
 12. 褐色 しまり砂、附砂あり。
 13. 黄褐色 附砂あり、粘土砂子を多量に含む。
 14. 灰色+黄褐色 しまり砂、カマド材あり。
 15. 黄褐色 しまり砂、黄褐色土砂子を多量に含む。
 16. 灰色+黄褐色 しまり砂、黄褐色土砂子を多量に含む。
 17. 褐色 しまり砂、附砂あり、黄褐色土砂子(1m~3m)。
 18. 褐色 しまり砂、附砂あり、黄褐色土砂子を多量に含む。
 19. 黄褐色 しまり砂、附砂あり、黄褐色土砂子多量、附砂あり。
 20. 黄褐色 しまり砂、多量の附砂を多量に含む。
 21. 褐色 しまり砂。
 22. 褐色 しまり砂、ロームブロックを含む。
 23. 黄褐色 黄褐色土砂子を多量に含む。
 24. 黄褐色 黄褐色土砂子を多量に含む。
 25. 褐色 黄褐色土砂子を多量に含む。



水系標高=12.300m



第15図 第2号住居跡(1)



第16図 第2号住居跡(2)

カマドは北壁中央に設けられていた。袖には砂岩の切り石が用いられており、まわりを粘土で補強している。右袖は先端部分がやや崩れていたが左袖はよく残り遺存状況はほぼ良好である。焚口の幅は36cmでカマドの奥行きは105cmである。煙道の長さは46cmである。

遺物は土錘が床面から2点出土しているほかカマドから坏および甕が一括して出土している。ほかには貯蔵穴周辺からややまとまって出土している。

第2号住居跡出土遺物(1)

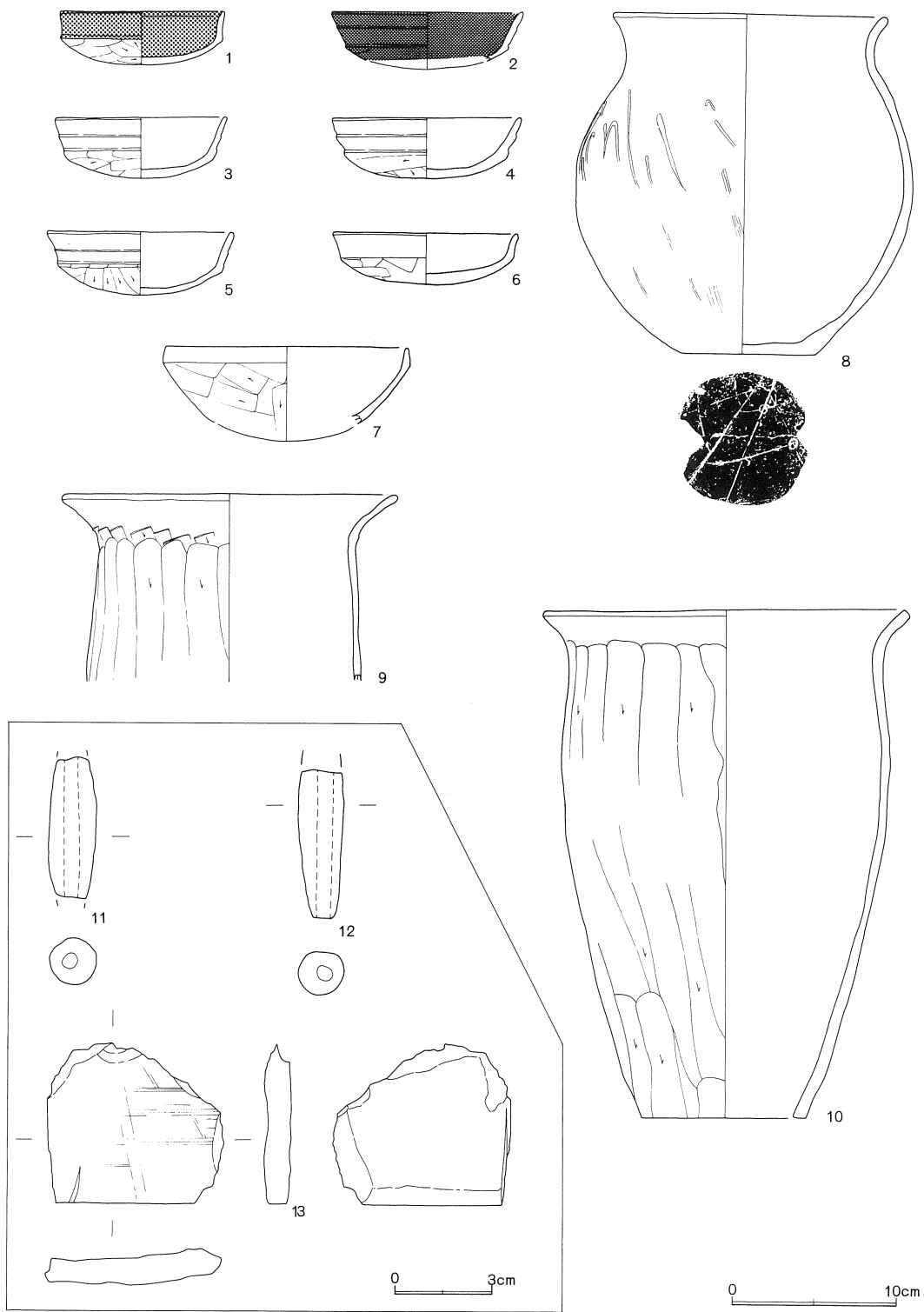
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (10.0) 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		90	C-2-9-47	29	
2	ク	口径 (11.6) 底径 — 高さ 3.5 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	にぶい褐	40	C-2-6-59	33	

第2号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
3	坏	口径 10.4 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	白色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	橙褐	90	39, 3	30	
4	ク	口径 (11.6) 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	ク	50	38	31	
5	ク	口径 11.3 底径 — 高さ 3.9 最大径 —	白色粒 黒色粒 赤色粒 砂粒	明赤褐	80	C-2-6-109, 27	32	
6	ク	口径 11.3 底径 — 高さ 3.1 最大径 —	白色粒 黒色粒 角閃石 砂粒	橙褐	100	37	28	
7	ク	口径 (15.0) 底径 — 高さ (5.8) 最大径 —	黒色粒 赤色粒 砂粒	明赤褐	20	C-2-6-35, 55	34	
8	甕	口径 16.5 底径 — 高さ 20.7 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい褐	100	1, 2, 6, 7, 8, 9	35	
9	ク	口径 20.3 底径 — 高さ (11.3) 最大径 —	白色粒 砂粒	ク	40	D-2-7-138	37	
10	甌	口径 (22.1) 底径 — 高さ 31.0 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	にぶい黄褐	80	C-2-6, D-2-4-24	36	

第2号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
11	4.3	1.4	0.4	7.80	完形	C-2-9 27	590
12	(4.5)	1.4	0.5	(6.36)	2/3	C-2-6 75	589



第17図 第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
13	54	49	8	41.43		C-2-6 19	729

第3号住居跡 (第18図)

平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は7.4m×7.3mで確認面からの深さは26cmである。主軸方位はN-17°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はやや起伏がある。貯蔵穴は北東隅に検出された。ほぼ方形の掘り込みで上面80cm×74cmほどで深さは32cmである。ピットはP1～P4が検出された。いずれも支柱穴と考えられる。これらの柱穴及びカマドには重複があり本住居跡は建て替えられたものと考えられる。壁溝は全周せず北東隅と東辺、西辺の一部で切れる。

カマドは北壁中央に設けられていた。袖及び天井には砂岩の切り石が用いられていたものと思われる一部に切り石が残存していた。支脚も砂岩を整形して用いていた。袖は両袖とも良く残っていた。焚口の幅は52cmで奥行きは105cmである。カマドも重複が認められ旧カマドは新カマドの前の部分に焚口部が検出された。新カマド構築時にはこの部分を埋めて構築している。

遺物は床面及び床面からやや浮いた状態で出土している。

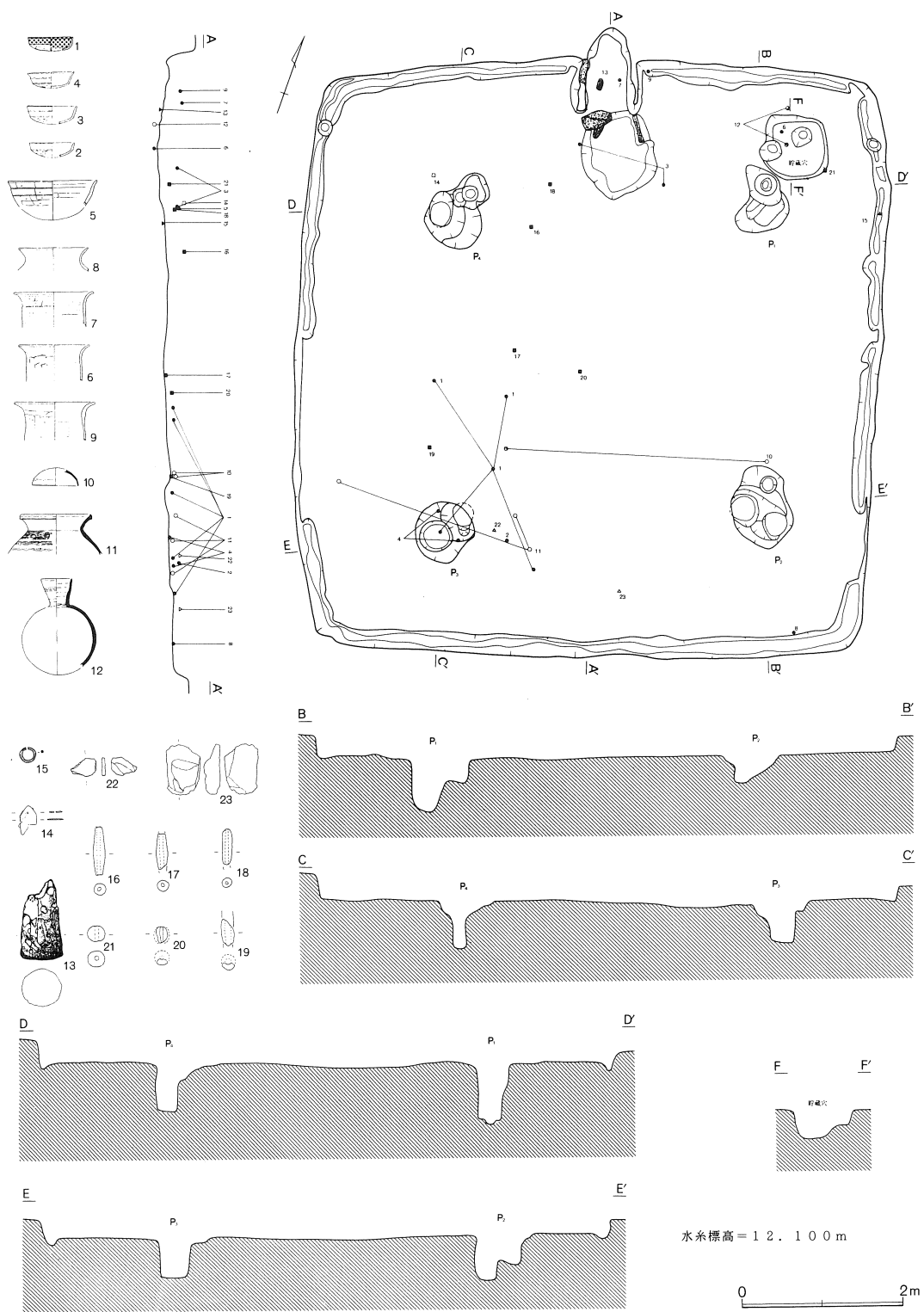
13は支脚である。砂岩を使用している。上端は欠落している。表面を鋭い工具で整形しており外見は多角形を呈する。

耳環 15は東壁の壁溝から出土している。錆化が進んでいるが内側には金箔が残っている。断面は円形である。X線撮影では中空である。環径20mm×19mm、直径3mm、重量3.79g。

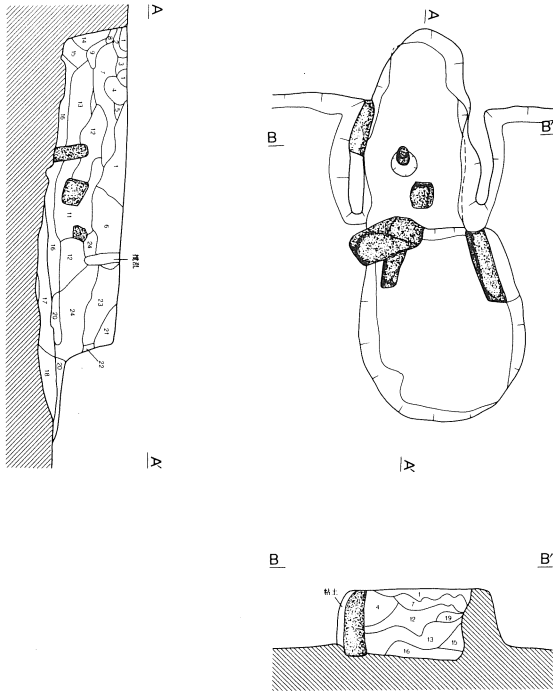
鉄製品 14は無頸鎌と思われる。錆化が激しく破損が著しいが図の様に復原した。五角形を呈するものであろうか。現存長3.5cm、幅2cmで平造りである。

第3号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)		胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径	11.3	白色粒 砂粒		70	C-4-2-37,56,62,66	39	
		底 径	—	黒色粒					
		高 さ	3.4	赤色粒					
		最大径	—	礫					
2	〃	口 径	(11.1)	白色粒	橙褐色	40	C-4-2-45	827	
		底 径	—	赤色粒					
		高 さ	3.7	角閃石					
		最大径	—	砂粒					



第18図 第3号住居跡(1)



SJ3カマド

1. 褐色 しまり良。焼土粒子少量含む。
2. 褐色 しまり良。焼土を含まない。
3. 褐色 しまり良。焼土粒子を多量含む。
4. 赤褐色 しまり良。焼土多量。白色微粒子を多く含む。
5. 赤褐色 しまり不良。焼土少量。
6. 褐色 しまり良。堅い。焼土粒、白色微粒子を含む。
7. 暗赤褐色 しまり不良。焼土粒子少量含む。
8. 黒褐色 しまり不良。焼土粒子微量含む。
9. 褐色 しまり不良。焼土、炭化物などは含まない。
10. 灰黄褐色 しまり不良。焼土、炭化物などは含まない。
11. 褐色 しまり不良。焼土粒子、焼土ブロック多量。
12. 極暗褐色 しまり不良。焼土粒子、焼土ブロック多量。
13. 暗褐色 しまり不良。焼土粒子、焼土ブロック多量。黄褐色土ブロック多く含む。
14. 黄褐色 しまり不良。壁崩壊土か？褐色土粒子微量。
15. 極暗褐色 しまり不良。焼土粒子多量含む。
16. 暗褐色 焼土、褐色土粒子、炭化物等含む。
17. 暗赤褐色 しまり不良。焼土ブロック、焼土粒子多量含む。
18. 黄褐色 しまり良。焼土微量含む。
19. 黄褐色 しまり良。黄色粘土のブロック。
20. しまり良。よごれている。粘土。
21. 暗褐色 しまり不良。焼土、炭化物、褐色土粒子含む。
22. 黒褐色 しまり不良。黄褐色土粒子多量含む。
23. 黒褐色 しまり良。焼土微粒子多量含む。
24. 黒褐色 しまり良。焼土粒子、粘土ブロック含む。

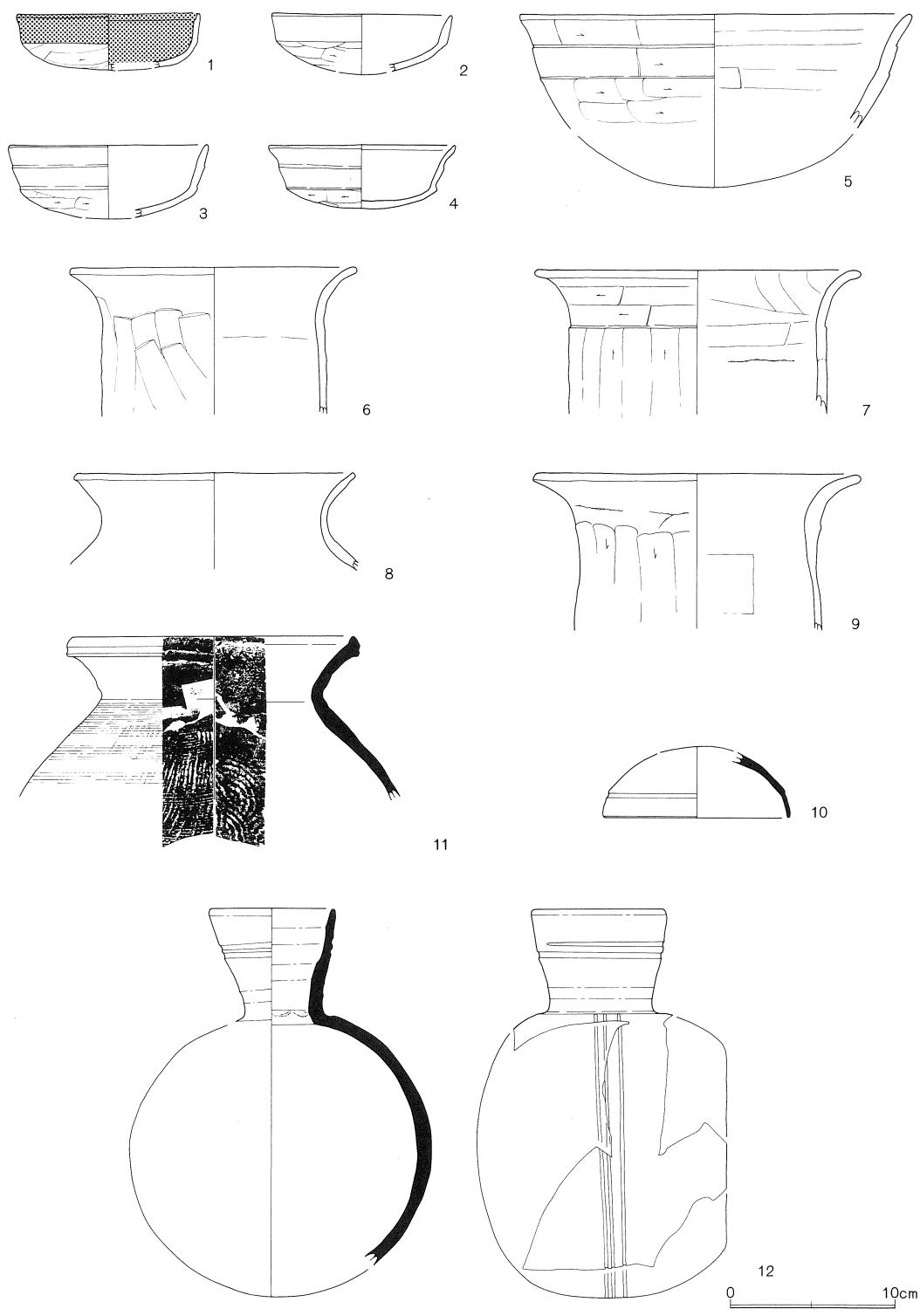
水糸標高 = 12.100m

0 1m

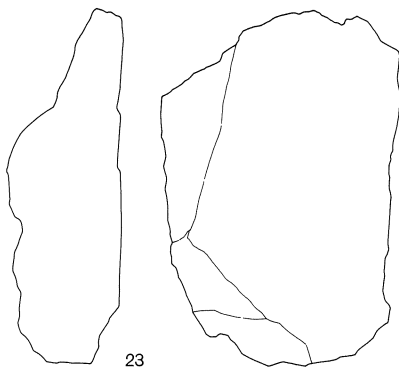
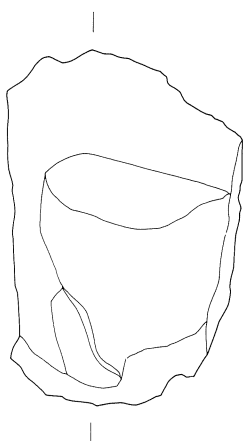
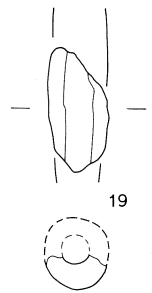
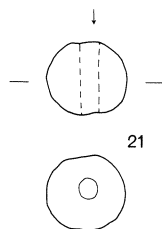
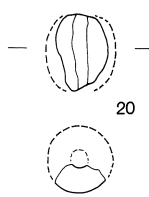
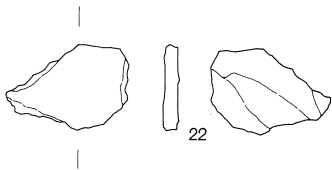
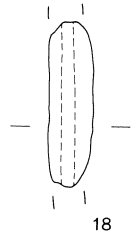
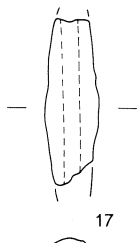
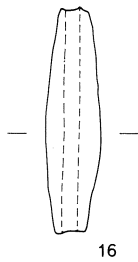
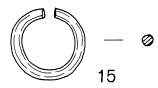
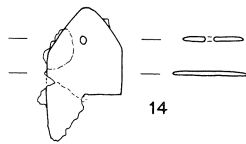
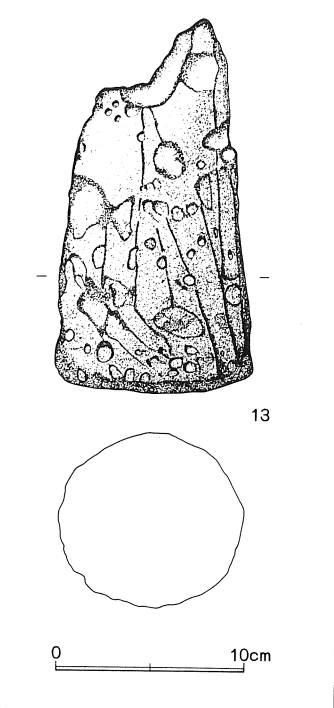
第19図 第3号住居跡(2)

第3号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
3	坏	口径 (12.3) 底径 — 高さ (4.5) 最大径 —	白色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	20	C-3-8-1	795	
4	〃	口径 11.5 底径 — 高さ 3.9 最大径 —	白色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	橙褐	70	C-4-2-86,104	38	
5	鉢	口径 (23.8) 底径 — 高さ — 最大径 —	黒色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	〃		C-3-8-1	557	
6	甕	口径 (17.5) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃		C-3-4-18	558	



第20图 第3号住居跡出土遺物(1)



第21图 第3号住居跡出土遺物(2)

第3号住居跡出土遺物(3)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
7	甕	口径 (19.9) 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	橙褐		2	559	
8	〆	口径 (16.9) 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	明赤褐		C-4-1-30	4	
9	〆	口径 (19.6) 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 砂粒	にぶい黄橙		C-3-5-26	561	
10	蓋	口径 (11.3) 底径 — 高さ (4.4) 最大径 —	白色粒 黒色粒 砂粒	褐灰	30	C-4-2-55	512	
11	甕	口径 (17.3) 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	灰白		C-4-2-38,41	554	
12	提瓶	口径 7.6 底径 — 高さ (23.7) 最大径 18.5	礫 砂粒	灰黄褐	30	C-3-4-21,37	505	

第3号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
16	6.0	1.5	0.4	9.70	完形	C-3-8 31	594
17	(4.4)	1.4	0.4	(6.24)	2/3	C-3-8 152	595
18	(4.4)	1.2	0.3	(4.00)	3/4	C-3-8 20	596
19	(3.3)	—	—	(3.17)	1/4	C-4-2 79	591
20		—	—	(1.37)	1/4	C-3-8 84	593
21		2.1	0.5	7.00	完形	C-3-4 12	592

第3号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	×	よこ × 厚さ				
22	32	×	23 × 4	4.27	剥片	C-4-2-44	731
23	95	×	64 × 31	242.20	原石	C-4-1-28	730

第4号住居跡 (第22図)

調査区外にかかるため平面形や規模はわからないがおそらく方形になるものと思われる。5号住居跡と重複しそれより新しいものと思われる。検出された部分は住居跡西辺と北辺の一部で2.3m×3.7mほど確認されている。確認面からの深さは50cmである。主軸方位はN-22°-Wである。壁はわずかな傾斜をもって掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は検出された範囲内では確認できなかった。おそらく未確認の北隅部分にあるものと思われる。ピットは小ピットが数個検出された。P1・P2が柱穴になるのではないかと考えられるがいずれも浅いものである。本住居跡は壁溝の状態から拡張された可能性が考えられるがP1を拡張前、P2を拡張後のものと考えておきたい。壁溝は確認部分では切れることなく検出された。壁溝底面には小ピットがいくつか確認された。西辺部分では内側に拡張前の壁溝が確認された。

カマドは北辺に設けられていた。袖の遺存状態はあまりよくない。焚口の幅は38cmでカマドの奥行きは82cmである。

遺物は床面からやや浮いた状態のものが多いが湖西産の須恵器の坏が床面から出土している。また耳環が覆土中から出土している。

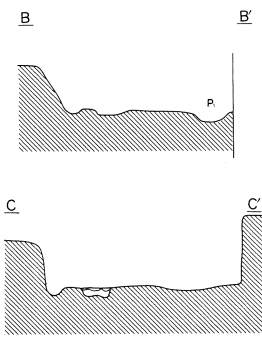
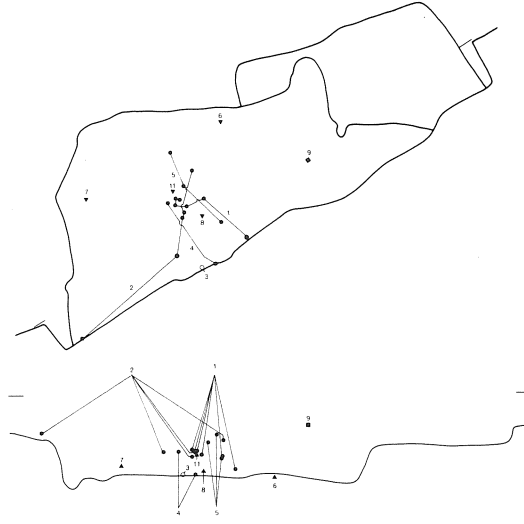
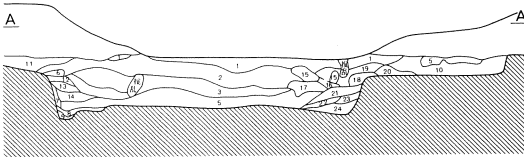
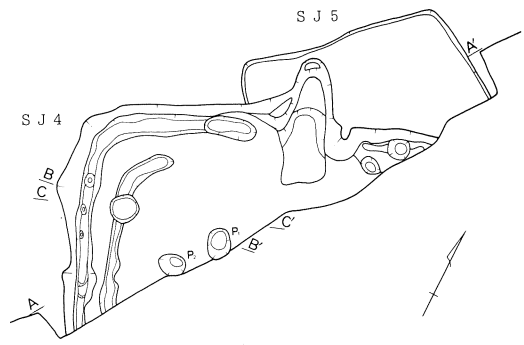
砥石 (6~8) 6は板状を呈し撥型に近いものである。上下面、両側面とも良く使用されている。特に右側面は使い込まれて弧状をなし面は平滑である。端面は折損した後使われている。下方は折損している。7は断面長方形をなすもので4面とも使用されている。端部は両端とも折損している。上下は平滑な面をなすが側面は使用による溝状の痕跡を残す。6、7の石質は凝灰岩である。8は被熱している。長軸方向に擦痕が認められる。

耳環 11は錆化が激しい。断面は楕円形である。環径18mm×17mm、断面6mm×3mm、重量5.96g。X線撮影の結果は中空である。

鉄製品 10は長頸鏃の頸部である。錆化が激しく全体に歪む。現存長15.1cm、幅6mm、厚さ4mmほどである。

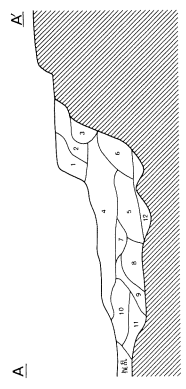
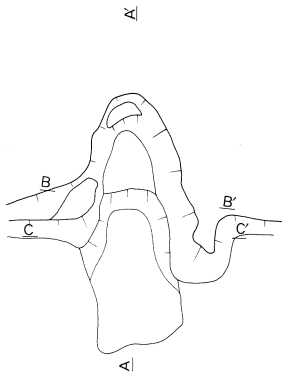
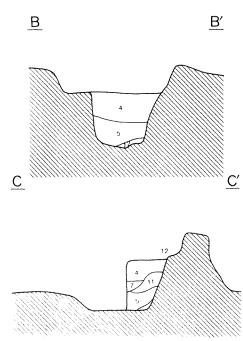
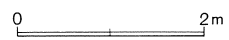
第4号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 10.3 底 径 - 高 さ 3.1 最大径 -	黒色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	橙褐	80	B-5-3-148,155	41	



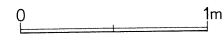
- S J 4・5
1. 褐色 しまり貝, 粘性弱, 焼土粒, 炭化物少量含む。
 2. 緑 赤褐色 しまり貝, 粘性あり, 焼土粒 (3mm-5mm) 炭化物少量含む。
 3. 緑 赤褐色 しまり貝, 粘性あり, 焼土粒, 炭化物少量含む。
 4. 明 赤褐色 しまり貝, 粘性弱, 焼土の侵入。
 5. 黒 褐色 しまり貝, 粘性あり, 焼土粒少, 炭化物粒含む。
 6. 灰 白褐色 しまり貝, 粘性あり。
 7. 明 褐色 しまり貝, 粘性あり, 炭質礫土。
 8. 褐色 しまり貝, 粘性あり, 汚れあり。
 9. 褐色 しまり貝, 粘性あり, 砂子含まない。
 10. 褐色 しまり貝, 粘性あり, 焼土粒少, 炭化物少量, 炭化物粒含む。
 11. 褐色 しまり貝, 粘性弱, 焼土, 炭化物なし。
 12. 褐色 しまり貝, 粘性弱, 焼土粒, 炭化物, 炭化物粒含む。
 13. 褐色 しまり貝, 粘性あり, 焼土粒, 炭化物粒なし。
 14. 黒 褐色 しまり貝, 粘性あり, 焼土粒少, 炭化物粒なし。
 15. 褐色 しまり貝, 粘性あり。
 16. 褐色 しまり貝, 粘性あり。
 17. 灰 褐色 しまり貝, 粘性あり, ギラつきが激しい。
 18. 黒 褐色 しまり貝, 粘性なし, カマド材, 砂粒状。
 19. 褐色 しまり貝, 粘性あり, 焼土粒少量含む。
 20. 灰 褐色 しまり貝, 粘性あり。
 21. 褐色 しまり貝, 粘性なし, 天井材の一部と思われる, 白色粒子を少量含む。
 22. 褐色 しまり貝, 粘性弱, 焼土粒少量含む。
 23. 褐色 しまり貝, 粘性弱, 炭化物を若干含む, 汚れあり。
 24. 褐色 しまり貝, 粘性なし, 焼土粒-炭化物少量含む。

水糸標高 = 12.100 m

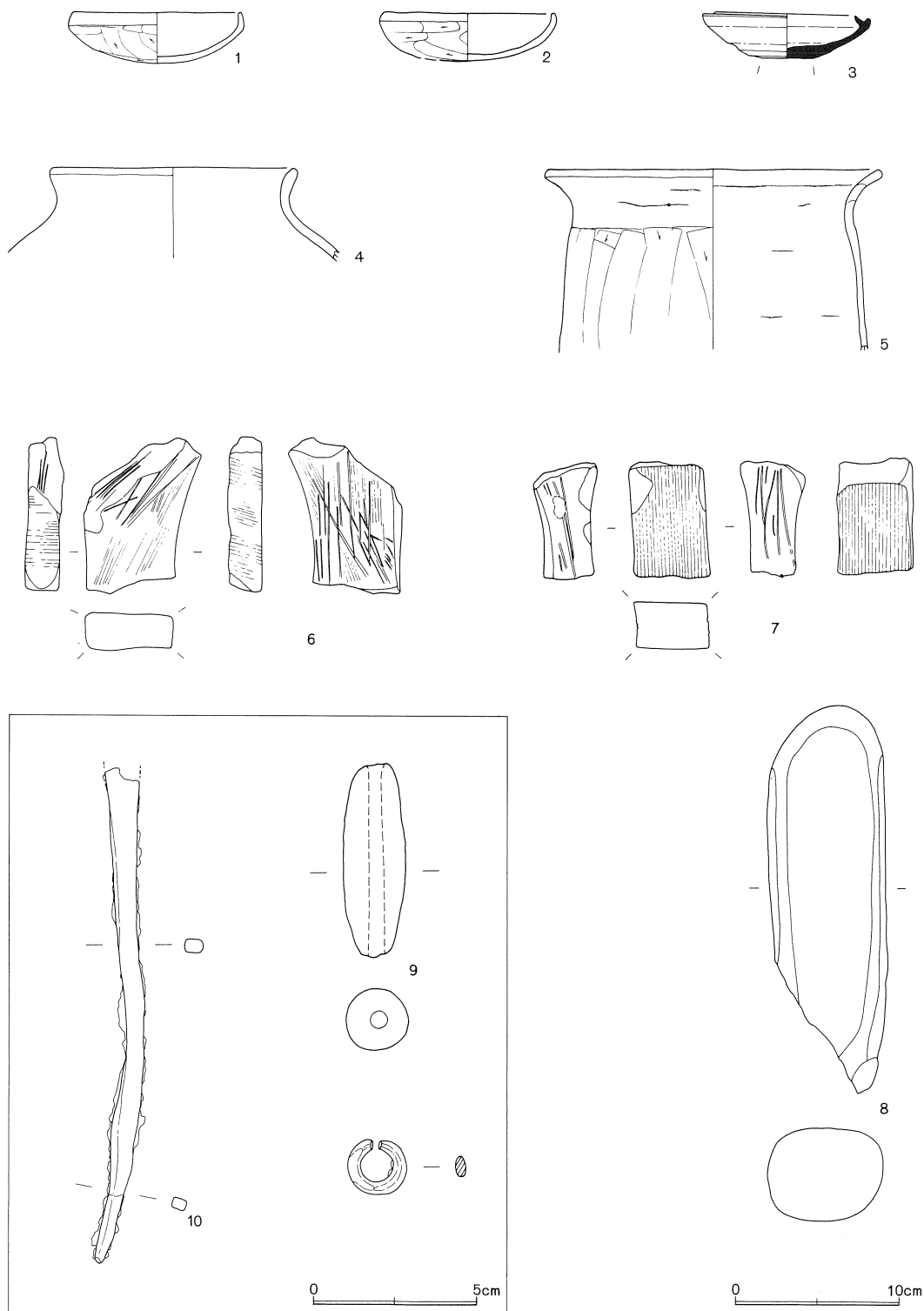


- S J 4カマド
1. 暗 褐色 しまり貝, 焼土粒少量含む。
 2. 褐色 しまり貝, 焼土粒含む。
 3. 黒 褐色 しまり貝, 炭質礫土, ローム粒少量含む。
 4. 褐色 しまり貝, 天井材の一部, 白色粒子少量含む。
 5. 褐色 しまり貝, ロームブロック含む, 焼土少量含む, 赤っぽい。
 6. 褐色 しまり貝, ロームブロック少量, 焼土少量含む。
 7. 褐色 しまり貝, 焼土少量含む。
 8. 暗 赤褐色 しまり貝, 焼土粒, 炭化物少量含む。
 9. 暗 褐色 しまり貝, やや赤っぽい, 焼土粒少量含む。
 10. 暗 褐色 しまり貝, 炭化物を含みザラザラしている。
 11. 暗 褐色 しまり貝, 炭化物を含み少ない。
 12. 暗 褐色 しまり貝, 炭化物が少く, 焼土粒少量含む。
 13. 暗 褐色 しまり貝, 炭化物少量含む, 上ではいている。
 14. 褐色 しまり貝, ローム含む。

水糸標高 = 11.800 m



第22図 第4・5号住居跡



第23图 第4号住居跡出土遺物

第4号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
2	坏	口径 10.4 底径 — 高さ 3.0 最大径 —	角閃石 砂粒	橙褐	80	B-5-3-327,507	43	
3	ク	口径 8.1 底径 3.1 高さ 2.7 最大径 —	黒色粒 砂粒	灰	100	B-5-3-645	513	分析No.17
4	甕	口径 (15.1) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	口縁 40	B-5-3-279,646	44	
5	ク	口径 (20.9) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 白色針状物質 雲母 砂粒	明赤褐	30	B-5-3-78,126,487	42	

第4号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
9	5.9	1.9	0.5	18.70	完形	B-4-9 84	597

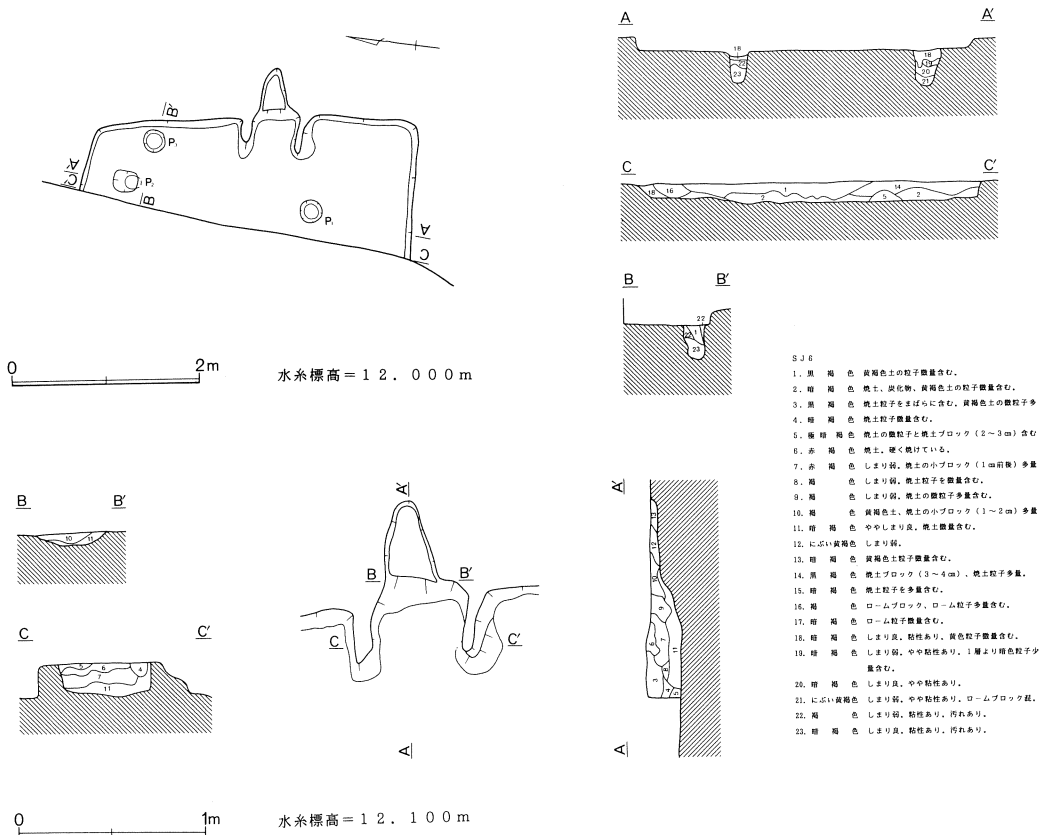
第5号住居跡(第22図)

調査区外にかかり4号住居跡と重複する。4号住居跡より古いものと思われる。検出されたのは西辺と北辺及び南辺の一部である。全体が確認されていないので詳細はわからないが平面形は方形になるものと思われる。規模は西辺が2.3mで北辺は1.3m分確認された。確認面からの深さは20cmである。主軸方位は西辺でN-42°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴及びピット、カマドなどはいっさい検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第6号住居跡(第24図)

一部調査区外にかかる。他の遺構との重複はない。平面形は方形になるものと思われる。検出されたのは東辺及び南辺と北辺の一部で規模は東辺が3.5mで南辺は1.4mほど確認された。確認面からの深さは12cmである。主軸方位は東辺でN-6°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴はなかった。ピットはP1~P3が検出された。P1、P2が主柱穴と考えられる。壁溝は検出されなかった。



第24図 第6号住居跡

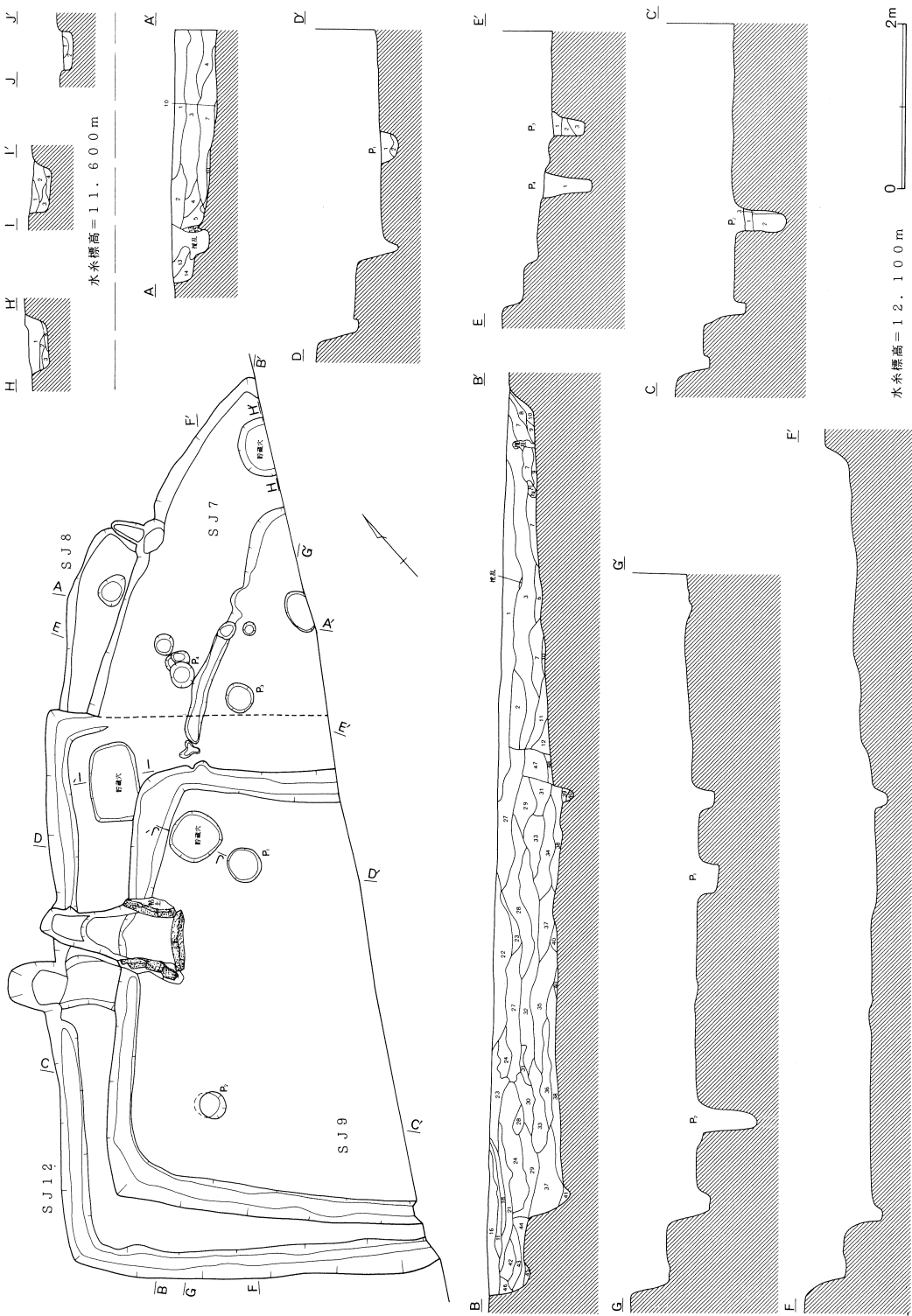
カマドは東壁中央に設けられていた。袖の残りは比較的良好。焚口の幅は45cmでカマドの奥行きは50cmである。煙道の長さは35cmである。

遺物は出土しなかった。

第7号住居跡 (第25図)

一部調査区外にかかる。8号住居跡、9号住居跡、12号住居跡と重複している。9号、12号住居跡より古く8号住居跡より新しい。平面形は不明であるが方形になるものと思われる。検出されたのは北辺と北東角である。北辺は12号住居跡に切られているが検出された長さは4.4mである。確認面からの深さは40cmである。主軸方位はN-24°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はやや起伏がある。貯蔵穴は住居跡の北東隅に約半分が検出された。隅丸方形ないしは円形に近い掘り込みと考えられ径が70cmで深さは26cmである。壁溝は壁際には検出されず約50cm内側に壁溝状の溝及び落ち込みを検出したことから本住居跡は拡張されたものと思われる。ピットはいくつか検出されたがP3が拡張前、P4が拡張後の柱穴と考えられる。

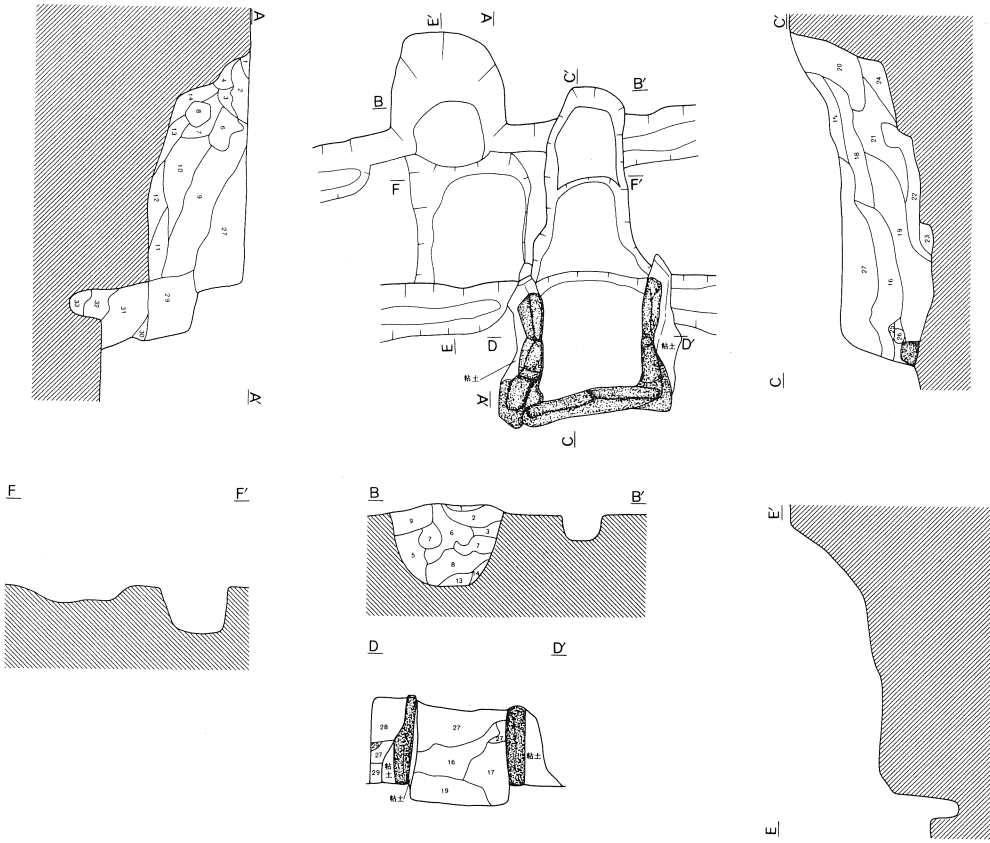
カマドは北壁中央に設けられていた。遺存状態はよくなく袖は検出されなかった。燃焼部もわずかに残っていたのみである。煙道は40cmである。



第25图 第7·8·9·12号住居迹(1)

7号・8号・9号・12号住居跡土層註記

- | | | | |
|---------------------------|---------------------------------|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 暗褐色 | 粘性なし。しまり弱。黄褐色粒子わずかに含む。 | 26. 黒褐色 | 粘性なし。しまり弱。炭化粒を多量に含む。 |
| 2. 暗褐色 | 粘性なし。しまり弱。黄褐色粒子、焼土粒子わずかに含む。 | 27. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒、黄褐色粒を多く含む。 |
| 3. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。黄褐色粒子、焼土粒子、炭化物粒を多く含む。 | 28. 暗褐色 | 粘性あり。しまり良。炭化粒、黄褐色粒をわずかに含む。 |
| 4. 黒褐色 | 粘性あり。しまり良。焼土粒子、炭化物粒を多く含む。 | 29. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒、黄褐色粒を含む。 |
| 5. <small>にぶい</small> 黄褐色 | 粘性なし。しまり良。黄褐色粒子、炭化物粒を多く含む。 | 30. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒少量含む。 |
| 6. 褐色 | 粘性なし。しまり弱。黄褐色土小ブロックを含む。 | 31. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。炭化粒、焼土粒、黄色粒を含む。 |
| 7. 暗褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒子、炭化物粒を多く含む。 | 32. 灰黄褐色 | 粘性なし。しまり良。黄色粒、焼土小ブロックを含む。 |
| 8. 極暗褐色 | 粘性なし。しまり弱。黄褐色土粒子をわずかに含む。 | 33. <small>にぶい</small> 黄褐色 | 粘性なし。しまりなし。黄色土粒、焼土粒を多く含む。 |
| 9. 黒褐色 | 粘性なし。しまりなし。炭化物、黄褐色土粒子を多く含む。 | 34. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒、炭化粒少量含む。 |
| 10. 褐色 | 粘性あり。しまり良。壁崩壊土か。 | 35. <small>暗</small> 灰黄褐色 | 粘性なし。しまり良。黄色粒、焼土小ブロックを少量含む。 |
| 11. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土、炭化粒含む。 | 36. 褐色 | 粘性なし。しまり良。黄色粒多量。 |
| 12. 灰黄褐色 | 粘性なし。しまりなし。炭化物、黄褐色粒子を含む。 | 37. <small>にぶい</small> 黄褐色 | 粘性なし。しまりなし。黄色土多量含む。 |
| 13. 暗褐色 | 粘性なし。しまり良。黄褐色粒子少量含む。 | 38. <small>にぶい</small> 黄褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土、炭化粒、黄褐色粒多。 |
| 14. 褐色 | 粘性あり。しまり良。 | 39. 灰褐色 | 粘性なし。しまり良。炭化粒、黄褐色粒少量含む。 |
| 15. 黄褐色 | 粘性あり。しまり良。 | 40. 褐色 | 粘性なし。しまりなし。黄褐色粒多い。 |
| 16. <small>オリブ</small> 黒色 | 粘性なし。しまりなし。黄褐色粒子含む。 | 41. 褐色 | 粘性あり。しまり良。炭化粒少。 |
| 17. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。黄褐色粒子少量含む。 | 42. <small>にぶい</small> 黄褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒、褐色土粒を少量含む。 |
| 18. 黒褐色 | 粘性なし。しまりなし。灰黄色粘土の粒子を含む。 | 43. 暗褐色 | 粘性なし。しまりなし。黄色粒少量含む。 |
| 19. 黒色 | 粘性なし。しまりなし。炭化物粒含む。 | 44. 暗褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒、炭化粒を少量含む。 |
| 20. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。黄褐色粒子少量含む。 | 45. 褐色 | 粘性なし。しまりなし。炭化物をわずかに含む。 |
| 21. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。黄色土ブロック、焼土粒子をわずかに含む。 | 46. 黄褐色 | 粘性あり。しまりなし。壁崩壊土。一部に褐色土が混じる。 |
| 22. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。黄褐色粒子少量含む。 | 47. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒、黄褐色粒子を含む。 |
| 23. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒子を少量含む。 | 48. 黒褐色 | 粘性なし。しまり良。焼土粒、炭化物粒を含む。 |
| 24. 暗褐色 | 粘性なし。しまり良。黄褐色粒子、焼土粒子を多く含む。 | | |
| 25. 暗褐色 | 粘性なし。しまりなし。炭化物少 | | |



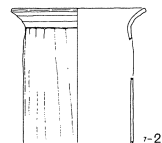
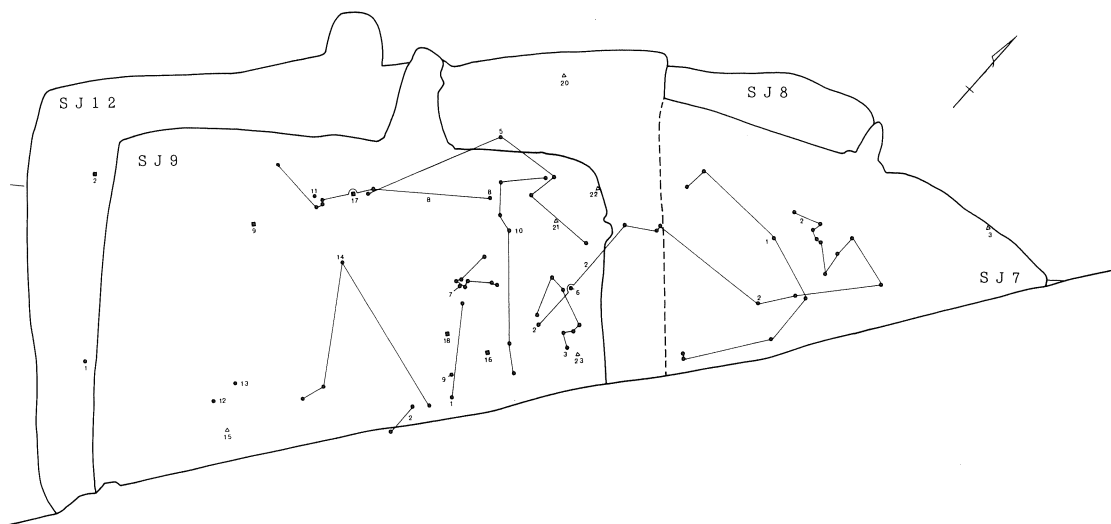
SJ9・12カマド

- | | |
|---|--|
| <p>1. 黒褐色 粘性なし。しまり良。黄褐色土粒微量含む。</p> <p>2. 黄褐色 やや粘性あり。</p> <p>3. 褐色 やや粘性あり。</p> <p>4. 暗褐色 やや粘性あり。</p> <p>5. 暗褐色 やや粘性あり。</p> <p>6. 褐色 粘性あり。しまり良。</p> <p>7. 褐色 粘性あり。焼土混入。</p> <p>8. 暗赤褐色 粘性なし。焼土、焼土ブロック混入。</p> <p>9. 黒褐色 粘性なし。しまり不良。焼土、黄褐色粒子微量含む。</p> <p>10. 黒褐色 粘性なし。しまり不良。焼土粒子多く含む。</p> <p>11. 暗褐色 粘性なし。しまり不良。焼土多く含む。</p> <p>12. 褐色 粘性あり。しまり良。明褐色粘土多く含む。</p> <p>13. 褐色 粘性なし。しまり不良。焼土粒子微量含む。</p> <p>14. 明黄褐色 粘性あり。しまり良。</p> <p>15. 暗褐色 粘性なし。しまり不良。焼土、炭化物多。</p> <p>16. 黄褐色 粘性なし。しまり不良。焼土わずかに含む。</p> | <p>17. 暗褐色 粘性なし。焼土小ブロック含む。</p> <p>18. 赤褐色 粘性なし。しまり不良。焼土多量含む。</p> <p>19. 極暗褐色 粘性なし。しまり不良。焼土多く含む。</p> <p>20. 黄褐色 粘性あり。しまり不良。焼土、地山ブロック含む。</p> <p>21. 褐色 粘性なし。しまり不良。焼土多量含む。</p> <p>22. オリーブ褐色 粘性あり。しまり不良。炭化物少量。</p> <p>23. 灰黄褐色 粘性なし。しまり不良。灰多量。</p> <p>24. 黒褐色 粘性なし。しまり不良。炭化物、焼土多。</p> <p>25. 焼土ブロック。</p> <p>26. 褐色 粘性なし。しまり不良。</p> <p>27. 明黄褐色 粘土ブロック。</p> <p>28. 暗褐色 粘性あり。しまり良。炭化物、黄褐色粘土の小ブロックをわずかに含む。</p> <p>29. 黒褐色 粘性なし。しまり良。焼土、炭化物粒子少量。</p> <p>30. にぶい黄褐色 粘性なし。しまり不良。黄褐色土小ブロック多。</p> <p>31. 褐色 粘性なし。しまり良。黄褐色土粒子少量含む。</p> <p>32. 褐色 粘性あり。しまり良。炭化物粒子少量含む。</p> <p>33. にぶい黄褐色 粘性なし。しまり良。焼土、黄褐色粒子少量</p> |
|---|--|

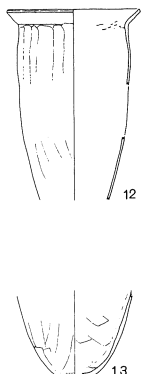
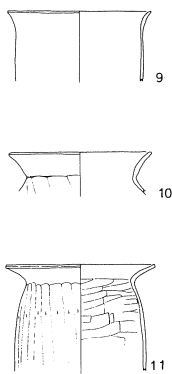
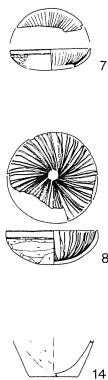
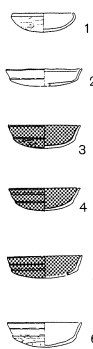
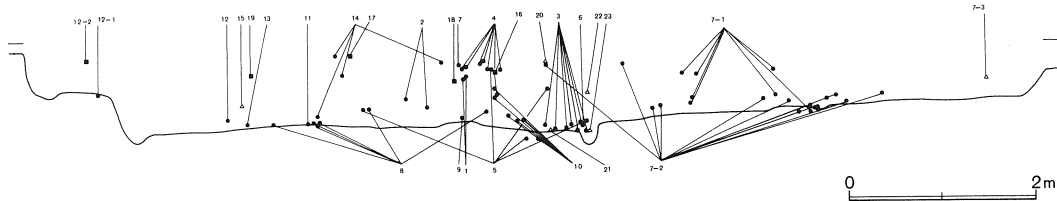
水糸標高=12.000m

0 1m

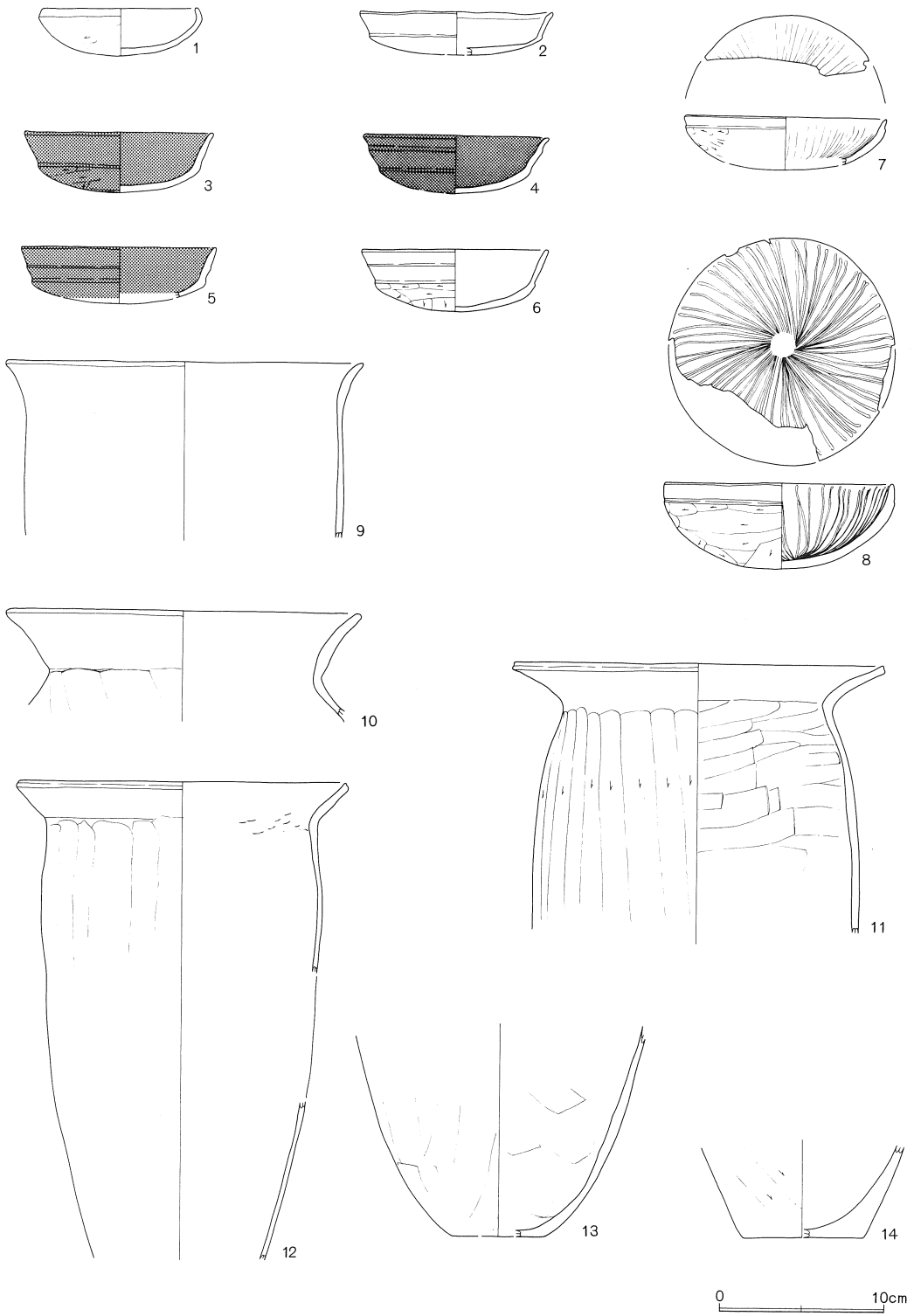
第26図 第7・8・9・12号住居跡(2)



水系標高 = 12.000 m

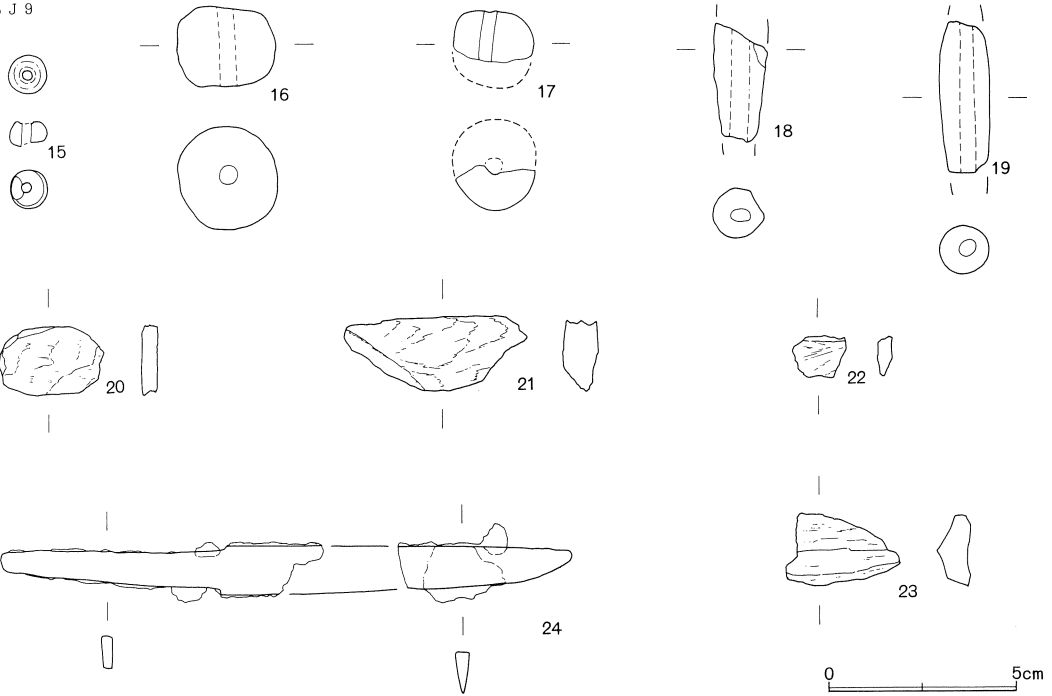


第27图 第7·8·9·12号住居跡(3)

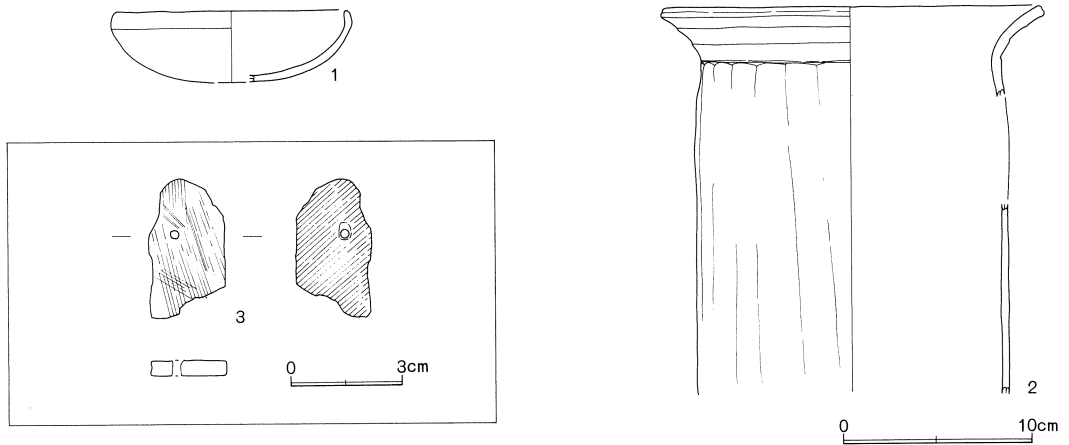


第28図 第9号住居跡出土遺物(1)

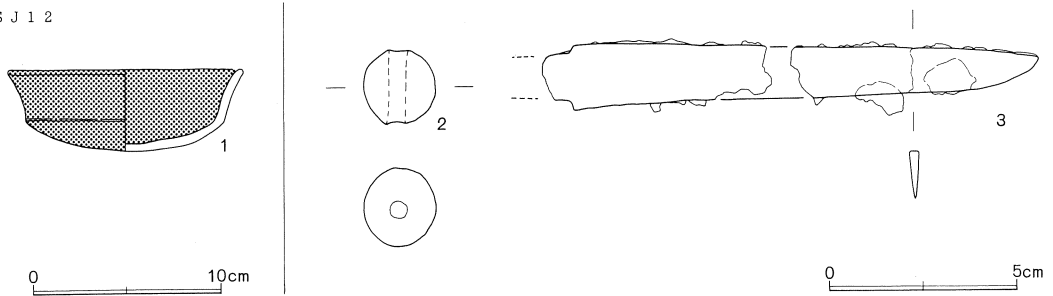
S J 9



S J 7



S J 1 2



第29図 第7・8・9・12号住居跡出土遺物(2)

遺物は土師器坏、甕、石製模造品が出土している。

第7号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (12.5) 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	赤色粒 砂粒	にぶい赤褐	30	C-5-8	45	
2	甕	口径 20.1 底径 — 高さ (20.6) 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	明黄褐	胴上半40	C-5-8-64,177	54	

第7号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法量 (mm)			重量 (g)	種類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
3	37	21	4	5.65	剣形	C-5-8-1	732

第8号住居跡 (第25図)

7号、12号住居跡に切られる。ごく一部が残っているだけなので全体の規模、平面形等は不明である。検出された部分の深さは25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面にはピットが1個検出されたのみである。

遺物は出土しなかった。

第9号住居跡 (第25図)

一部が調査区外にかかる。7号住居跡、12号住居跡と重複し一番新しい。約半分ほどの検出であるが平面形は方形になるものと思われる。規模は北辺で5.1m、西辺は3.7mまで確認されている。確認面からの深さは44cmである。主軸方位はN-40°-Wである。壁はやや斜めに立ち上がる。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は北東隅に検出された。やや歪んだ方形であるが大きさは55cm×54cmで深さは16cmである。ピットはP1、P2が検出された。柱穴と考えられる。壁溝はカマド部分を除いて全周するものと思われる。

カマドは北辺中央よりやや右に設けられていた。袖及び焚口の天井部には砂岩の切り石が用いられておりまわりを粘土で補強している。カマド底面は3段になっており焚口から奥に高くなっている。土層の状態から一番奥は煙出しになっていたものと考えられる。焚口の幅は50cmで奥行きは62cmである。

遺物は土師器坏、甕などが出土しているが一部を除いて覆土中からの出土である。

鉄製品 24は刀子である。刀身の中央部を欠失する。身幅1.4cm、背幅3mmほどである。関は両

第9号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 9.4 底径 — 高さ 2.9 最大径 —	黒色粒 角閃石 砂粒	橙褐	100	C-6-3-8,56	49	
2	〃	口径 (11.7) 底径 — 高さ 2.5 最大径 —	白色粒 黒色粒 砂粒	〃	40	C-6-3-272	51	
3	〃	口径 11.5 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	赤褐	60	C-6-2-210	47	
4	〃	口径 11.3 底径 — 高さ 3.5 最大径 —	黒色粒 砂粒	にぶい黄橙	80	C-6-3-62,63,69,70	48	
5	〃	口径 11.9 底径 — 高さ (3.4) 最大径 —	赤色粒 砂粒	〃	40	C-6-3-155,313,493	50	
6	〃	口径 (11.5) 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	白色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	明赤褐	70	C-6-2-226	46	
7	〃	口径 (12.3) 底径 — 高さ (3.2) 最大径 —	白色粒 角閃石 砂粒	〃	20	C-6-3-296	53	
8	〃	口径 14.0 底径 — 高さ 5.2 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	赤褐	80	C-6-3-56,413,479	52	
9	甕	口径 (21.9) 底径 — 高さ (11.6) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明黄褐	口縁 40	C-6-3-280	60	
10	〃	口径 21.5 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	橙褐	口縁 70	C-6-3-161,520,595	56	

第9号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
11	甕	口径 22.6 底径 — 高さ (16.3) 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	明黄褐	口縁 50	床直	59	
12	◇	口径 (20.1) 底径 — 高さ 29.0 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	40	C-6-6-115	57	
13	◇	口径 — 底径 5.8 高さ — 最大径 —	角閃石 砂粒	◇	底部 30	C-6-6-119	58	
14	◇	口径 — 底径 7.4 高さ — 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	にぶい橙	底部 40	C-6-3-548,5	55	

第9号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
16	—	2.6	0.5	11.86	完形	C-6-3 88	601
17	—	—	—	(2.22)	1/3	C-6-3 197	602
18	(3.1)	—	0.5	(4.42)	1/2	C-6-3 36	600
19	(4.0)	1.3	0.4	(6.39)	2/3	C-6-3 575	599

第9号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法量 (mm)			重量 (g)	種類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
15	直径10	孔径2	6	1.00	白玉	C-6-6-124	788
20	28	19	4	3.90	剥片	C-5-9-18	734
21	49	20	10	10.33	剥片	C-6-3-591	735
22	14	11	4	0.80	剥片	C-5-9-36	733
23	30	20	9	5.54	剥片	C-6-2-209	736

関である。基部は長さ5.8cm、幅1cm、背幅3mmほどである。X線撮影をしたが目釘穴は確認されなかった。

第12号住居跡（第25図）

一部が調査区外にかかる。7号住居跡、8号住居跡、9号住居跡と重複している。7号、8号住居跡より新しく、9号住居跡より古い。平面形は方形になると思われる。規模は北辺で6.8m西辺で4.3mまで確認されている。確認面からの深さは24cmである。主軸方位はN-45°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は9号住居跡に切られてあまり残っていないが北側から南側にかけてわずかに下がっている。貯蔵穴は住居跡の北東隅に検出された。長方形の掘り込みで上面95cm×60cm、深さは24cmである。ピットは検出されなかった。9号住居跡に切られて無くなっている。壁溝は全周していたものと思われる。

カマドは北壁中央に設けられていた。9号住居跡構築の際に破壊されたためか残存状態はあまりよくない。袖は残っていなかった。煙道もなく、煙出しと思われる部分が外側に25cmほど出ている遺物は坏が床面から1点出土している。

鉄製品 3は刀子である。刀身中央部と基部を欠失する。身幅1.7cm、背幅は4mmほどで関は両関である。

第12号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 12.4 底径 - 高さ 4.3 最大径 -	白色粒 角閃石 砂粒	にぶい黄橙	60		63	

第12号住居跡出土土錘計測表

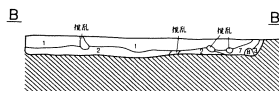
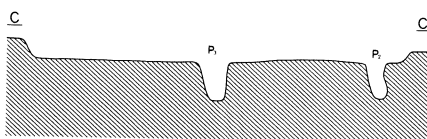
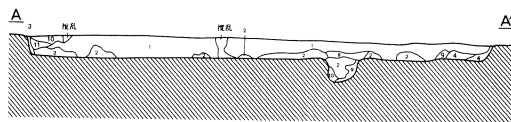
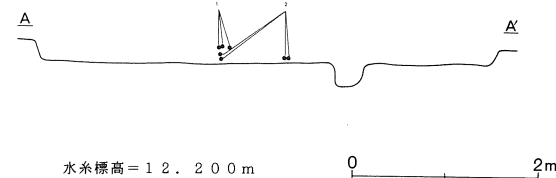
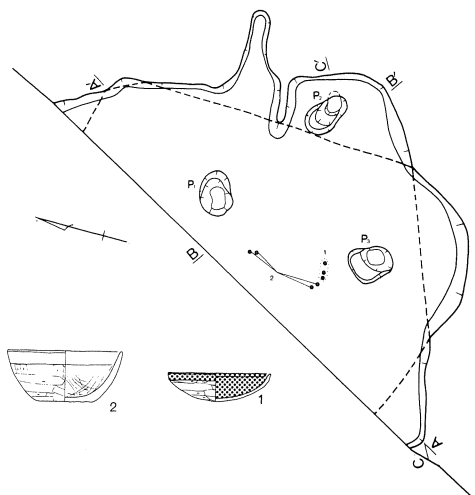
番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
2	-	1.9	0.4	6.13	完形	B-6-4 20	598

第10号住居跡（第30図）

一部調査区外にかかる。11号住居跡と重複する。11号住居跡より新しい。平面形は方形になるものと思われる。検出されたのは南辺と東辺の一部である。規模は南辺で3.8m東辺は3.6mまで確認された。確認面からの深さは20cmである。主軸方位はN-72°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。ピットはP1～P3が検出された。貯蔵穴はよくわからないが、位置的にはP2がそれにあたるのではないかと思われる。壁溝はなかった。

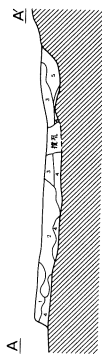
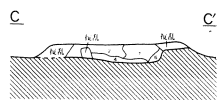
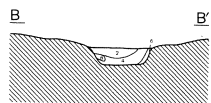
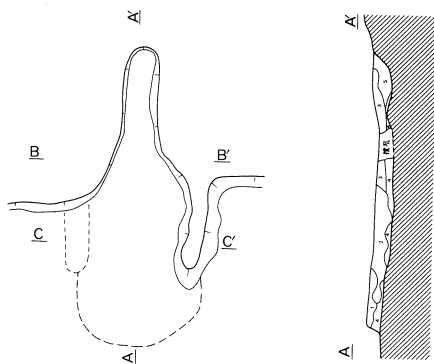
カマドは東壁やや右よりに設けられていた。遺存状態はあまりよくなく右袖のみが遺存していた。切り石は用いられていない。焚口の幅は50cmで奥行きは60cmである。煙道の長さは60cmである。

遺物は2点出土しているがやや床面からは浮いている。



S J10・11

1. 暗褐色 しまり良。やや粘性あり。炭化物粒・焼土粒少量。黄褐色粒含む。
2. 褐色 しまり良。粘性あり。黄色粒多量に含む。
3. 暗褐色 しまり良。粘性弱。黄色粒混入多。壁崩壊土。
4. 褐色 しまり良。粘性弱。黄色粒ブロック状に含む。
5. 暗褐色 しまり良。粘性あり。黄色粒多量含む。焼土粒・炭化粒なし。
6. 黄褐色 しまり良。粘性あり。ビット壁崩壊土。
7. 暗褐色 しまり良。粘性あり。土粒・炭化粒混入多。
8. 褐色 しまり良。粘性あり。焼土・炭化粒なし。
9. 黄褐色 しまり良。やや粘性あり。ロームの混入で汚れあり。
10. 暗褐色 しまり良。粘性弱。焼土粒・炭化粒なし。
11. 褐色 しまり良。粘性あり。斑状に汚れあり。



S J10カマド

1. 暗褐色 粘性なし、しまり良。炭化粒少量含む。
2. 褐色 粘性なし、しまり良。焼土粒・炭化粒多量。
3. 暗褐色 粘性あり、しまり良。焼土粒・炭化粒含む。
4. 褐色 粘性あり、しまり不良。焼土・炭化粒・黄色土粒を多量混入する。
5. 暗褐色 粘性あり、しまり良。焼土・炭化粒少量含む。
6. 暗褐色 粘性なし、しまり不良。崩壊土。
7. 赤褐色 粘性なし、しまり良。焼土ブロック多量。

水系標高 = 12,000m



第30図 第10・11号住居跡

第10号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (13.8) 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	橙褐	30	D-6-9-92,109,129	61	
2		口径 (15.3) 底径 (7.3) 高さ 6.7 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	30	D-6-9-41,42,43	62	

第11号住居跡 (第30図)

一部調査区外にかかる。10号住居跡と重複する。10号住居跡より古いものと思われる。検出されたのは南東及び北東のコーナー部分である。ほとんどの部分が10号住居跡に切られているため平面形、規模などの詳細は不明であるが、隅を結んだ長さは約4.5mほどでおそらく方形あるいは隅丸方形になるものと思われる。柱穴、壁溝、カマドなどは検出されなかった。

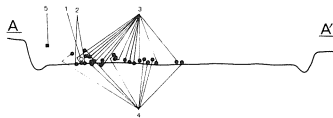
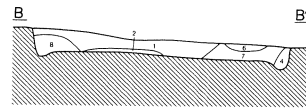
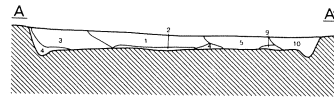
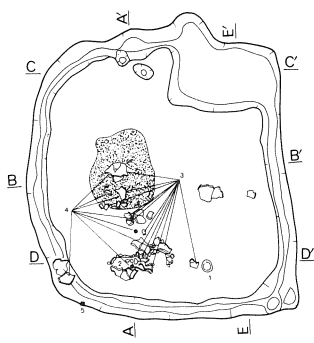
遺物は出土しなかった。

第13号住居跡 (第31図)

平面形はやや変則的な隅丸方形である。他の遺構との重複はない。規模は3.1m×2.8mで確認面からの深さは20cmである。主軸方位はN-5°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面

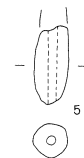
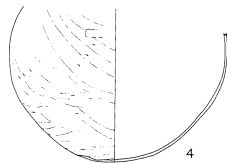
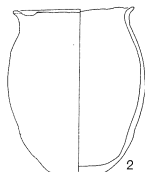
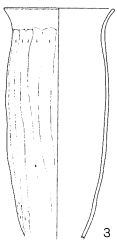
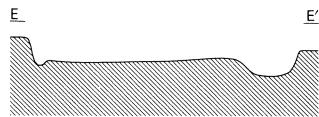
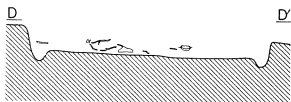
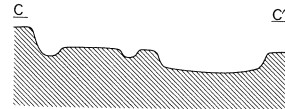
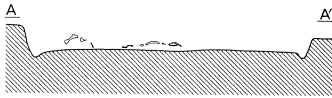
第13号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 8.7 底径 4.0 高さ 4.0 最大径 —	白色粒 砂粒	灰	100	C-0-1-30	514	湖西産
2	甕	口径 18.5 底径 7.2 高さ 25.5 最大径 21.0	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	80	C-0-2-23,28	69	
3	〃	口径 (16.7) 底径 — 高さ (35.3) 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	赤褐	50	C-0-1-27,39,40	82	
4	〃	口径 — 底径 12.0 高さ (21.7) 最大径 (33.5)	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	明赤褐		C-0-1-33,38	65	



S J 13

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1. 暗褐色 ローム粒、ロームブロックを含む。 | 6. 暗褐色 焼土粒・炭化粒を少量含む。 |
| 2. 暗褐色 1層より暗い、ローム粒なし。 | 7. 暗褐色 ロームブロックを含む。 |
| 3. 暗褐色 2層に類似。ローム粒を含む。 | 8. 暗褐色 炭化粒を含む。 |
| 4. 暗褐色 ローム粒を含む。 | 9. 灰層 |
| 5. 褐色 肥後礫土。ローム粒含む。 | 10. 暗褐色 灰と焼土粒を少量含む。 |

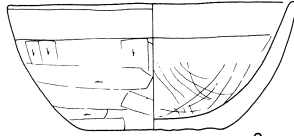
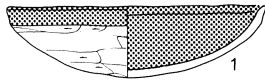


水系標高 = 12.100 m

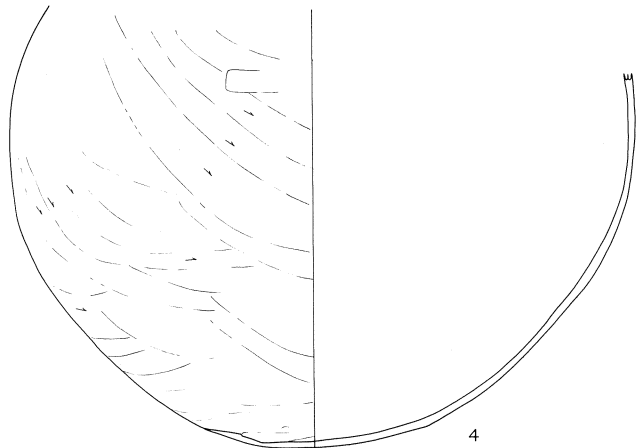
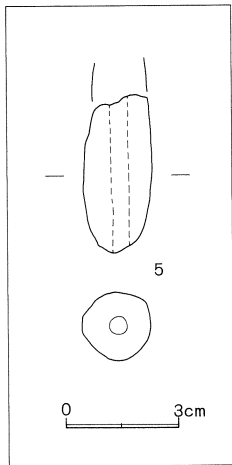
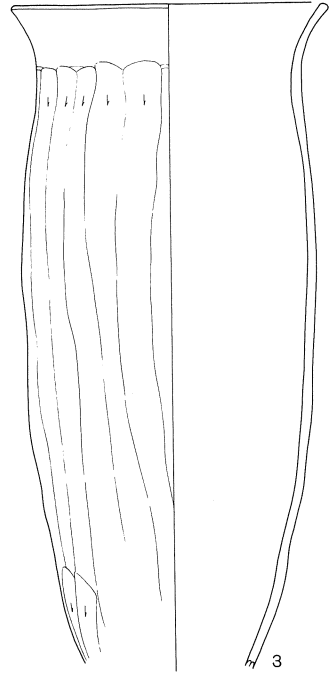
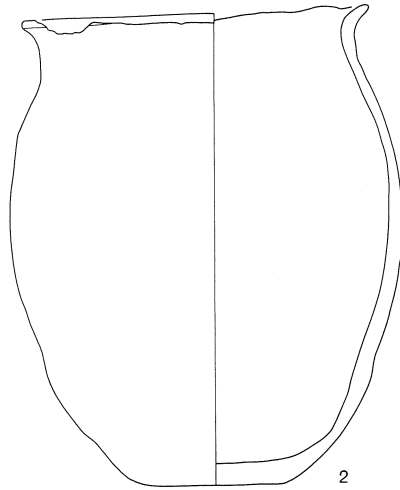
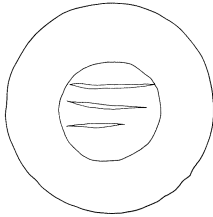
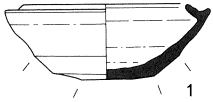


第31図 第13号住居跡

SJ10



SJ13



第32图 第10・13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存	註記番号	実測番号
5	(4.2)	1.8	0.5	(11.27)	1/2	C-(-1)-2-30	603

はほぼ平坦であるが北東隅の部分が一段低くなっている。また住居跡中央やや西よりのところには焼土が分布していた。柱穴は検出されなかった。壁溝は全周するが北東隅の床面が一段低くなっているところはほとんど同じレベルとなっている。

カマドは北壁中央よりやや東寄りに設けられていた。攪乱が入り遺存状態はあまりよくなかったが覆土は焼土及び白色砂粒を多量に含みよく加熱を受けた状態が窺えた。袖は検出されなかった。焚口の幅は40cmほどと思われ奥行きは20cmが壁外に張り出している。

遺物はほとんどが床面あるいは床面直上から出土している。湖西産の坏、土師器の甕がある。

第14号住居跡（第33図）

平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は3.9m×3.3mで確認面からの深さは33cmである。主軸方位はN-34°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は住居跡の北東隅に検出された。歪んだ方形の掘り込みで上面74cm×74cmほどで深さは28cmである。ピットは床面及び壁溝部分に検出されたがどれが柱穴になるかは不明である。壁溝は全周する。

カマドは北辺やや西寄りに設けられていた。約90cmほど大きく外側に張り出している。袖は遺存していなかった。焚口幅は90cmほどと思われ奥行きは現存で100cmである。煙道はない。

遺物は床面から水晶が1点出土したのみである。

第15号住居跡（第34図）

平面形は隅丸方形である。他の遺構との重複はない。規模は6.4m×6.3mで確認面からの深さは80cmと深い。主軸方位はN-18°-Wである。壁は斜めに掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は住居跡の北東隅に検出された。歪んでいるが円形に近い掘り込みで上面110cm×100cmで深さは40cmである。ピットは6個検出された。それぞれ柱穴になるものと考えられる。壁溝は全周せず北辺のカマド右側の部分が切れる。

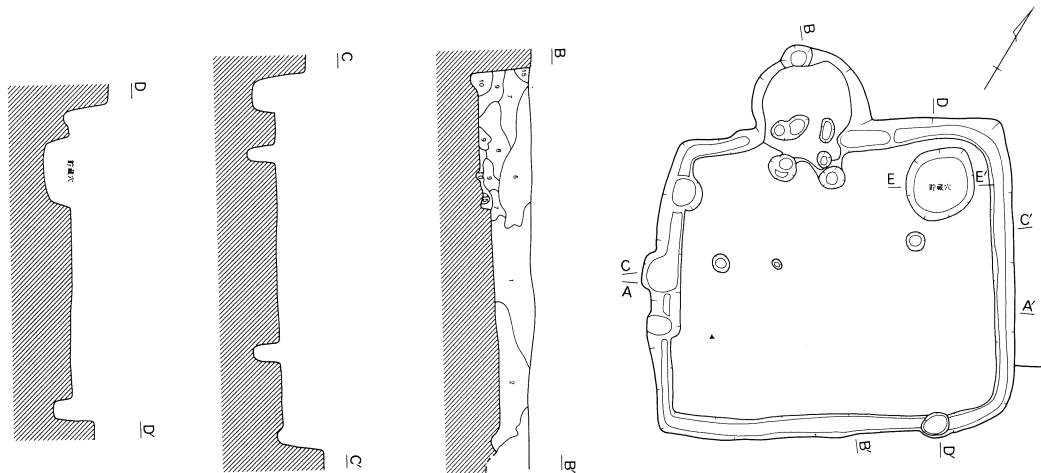
カマドは北壁中央に設けられていた。遺存状態はあまりよくなく袖は残っていなかった。煙道の長さは55cmである。

遺物は土師器坏、甕、甗などが出土しているが一部を除いては覆土中からの出土である。

鉄製品 21は刀子の茎部分と思われる。現存長3.7cm、幅8mm、背幅2mmほどで木質が残る。

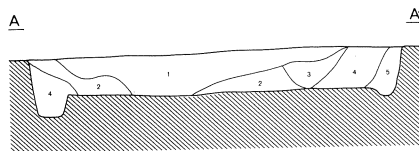
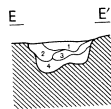
第16号・17号住居跡（第38図）

1号溝及び3号溝と重複する。これらより古い。3号溝は覆土上面までしか達しておらず、1号溝は東壁にかかっているが床面までは達していない。平面形は方形である。プラン確認時にはわか

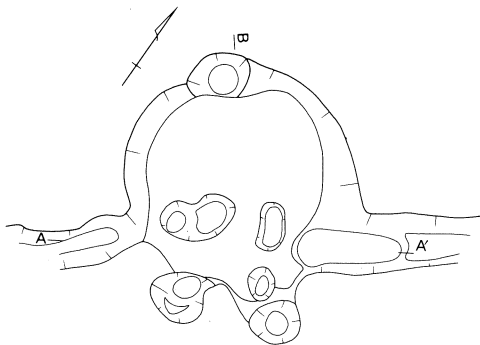
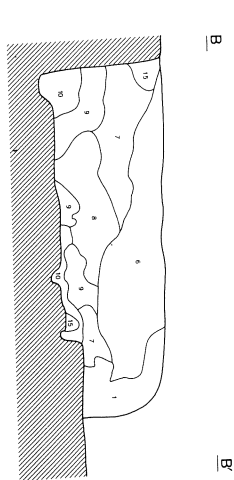


SJ14ピット (貯蔵穴)

1. 褐色 しまり弱、ロームブロック多、炭化物少量含む。
2. 褐色 しまり弱、ロームブロック、炭化物多、焼土少量含む
3. 褐色 ローム粒・炭化物粒やや多量含む。
4. 黄褐色 しまり良、ロームブロック多量含む



0 2m

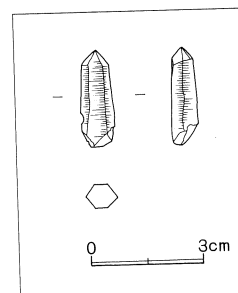
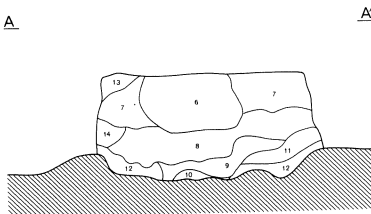


SJ14

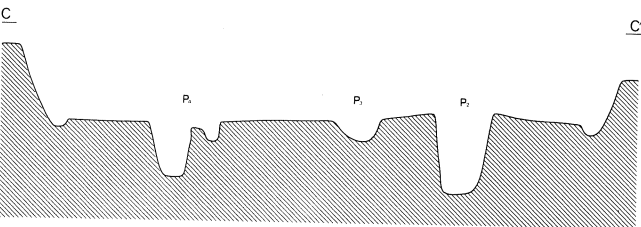
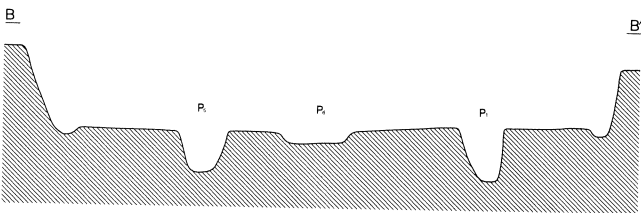
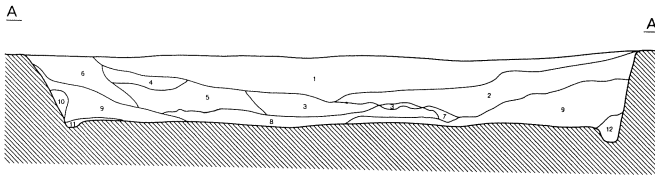
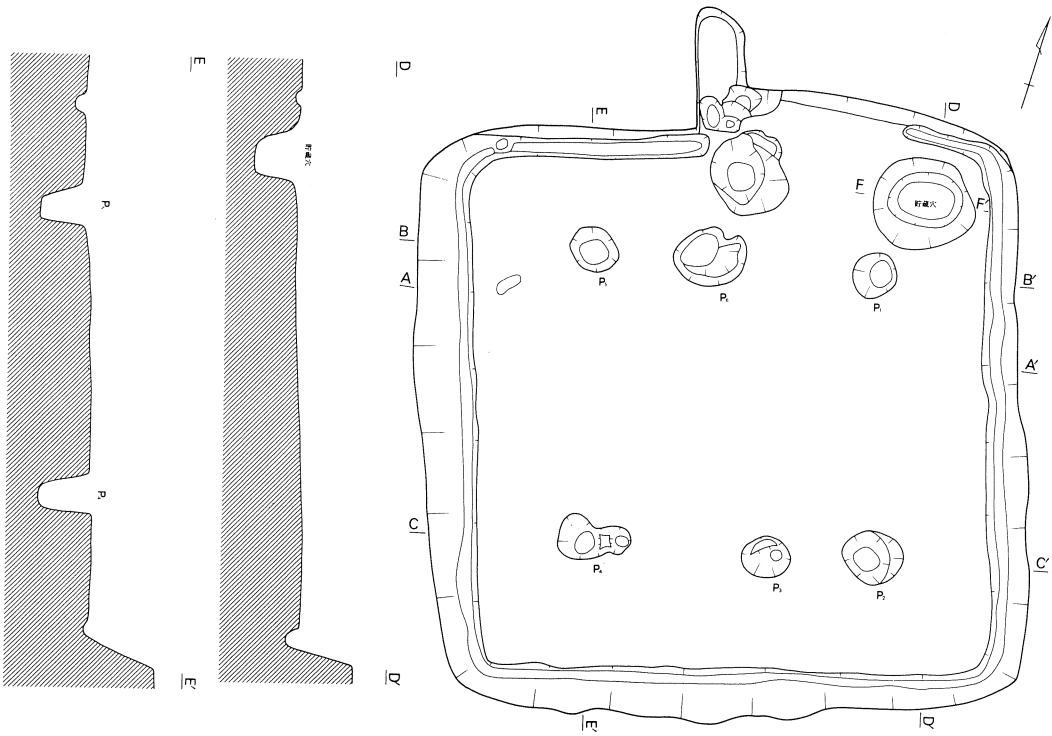
1. 暗褐色 しまり弱、ローム粒、ロームブロックを含む。
2. 暗褐色 しまり良、ロームブロックを多量含む。
3. 暗褐色 2層に類似するが少し暗い。
4. 褐色 ロームを多量含む。
5. 褐色 ローム多、壁崩壊土。
6. 暗褐色 ローム粒を含む。
7. 暗褐色 炭化粒を含む。
8. 褐色 ローム粒を多量含み明るい。
9. 褐色 焼土粒を多量含む。
10. 暗褐色 ロームブロックを含む。
11. 褐色 炭化粒を多く含む。
12. 黄褐色 ロームブロックを多く含む。
13. 褐色 焼土粒を含む。
14. 褐色 焼土ブロックを多量含む。
15. 黄褐色 壁崩壊土ローム。

水系標高 = 12.500 m

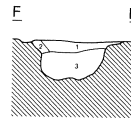
0 1m



第33図 第1号住居跡出土遺物



- S J 15
1. 褐色 しまり弱、ローム粒、焼土、炭化物をやや多く含む、耕作による灰褐色土ブロックや多い。
 2. 褐色 しまり良、焼土、炭化物微量含む、ロームブロック、ローム土やや多く含む。
 3. 黄褐色 しまり良、焼土、炭化物少量含む、ロームブロックと暗褐色土の混土层。
 4. 褐色 しまり弱、焼土、炭化物少量含む、ロームブロック、ローム土粒多量含む。
 5. 褐色 しまり弱、焼土、炭化物、砂岩粒やや多く含む、ローム・黒色土粒多量含む。
 6. 褐色 しまり弱、ローム粒、炭化物、焼土多く、ロームブロックやあり。
 7. 褐色 しまり良、炭化物、ローム土微量含む。
 8. 黒色 非常にしまり良、ローム粒、炭化物、焼土、多量含む。
 9. 褐色 しまり良、ローム粒、ロームブロック多、焼土、炭化物微量含む。
 10. 褐色 団粒凝土。
 11. 黄褐色 しまり良、やや粘質、炭化物少量、ローム土と茶褐色土の混土层。
 12. 褐色 しまり弱、ローム粒、焼土、炭化物やや多い。

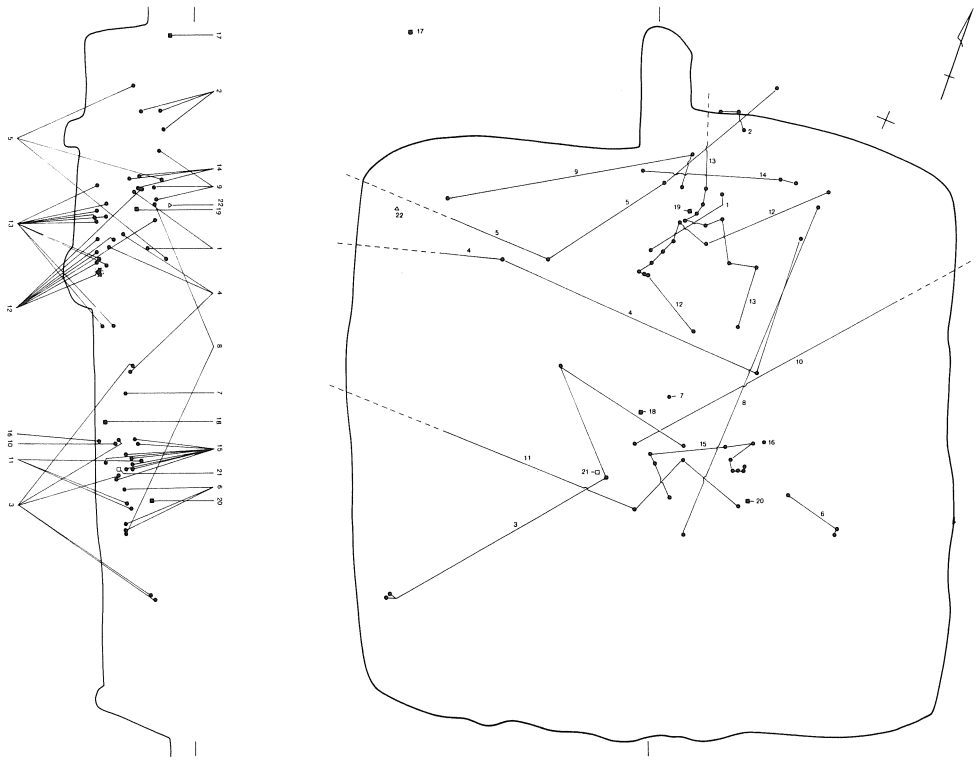


- S J 15 貯蔵穴
1. 暗褐色 ロームブロック、炭化粒・焼土粒を含む。
 2. 暗褐色 1層よりロームブロックを含まない。
 3. 暗褐色 2層に類似、炭化粒・焼土粒を含む。

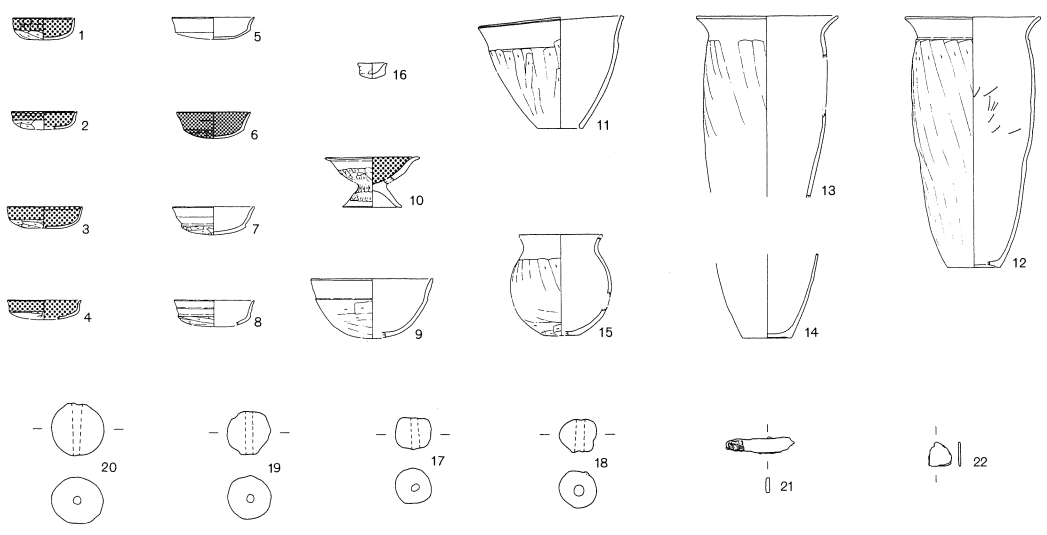
水系標高 = 12.500 m



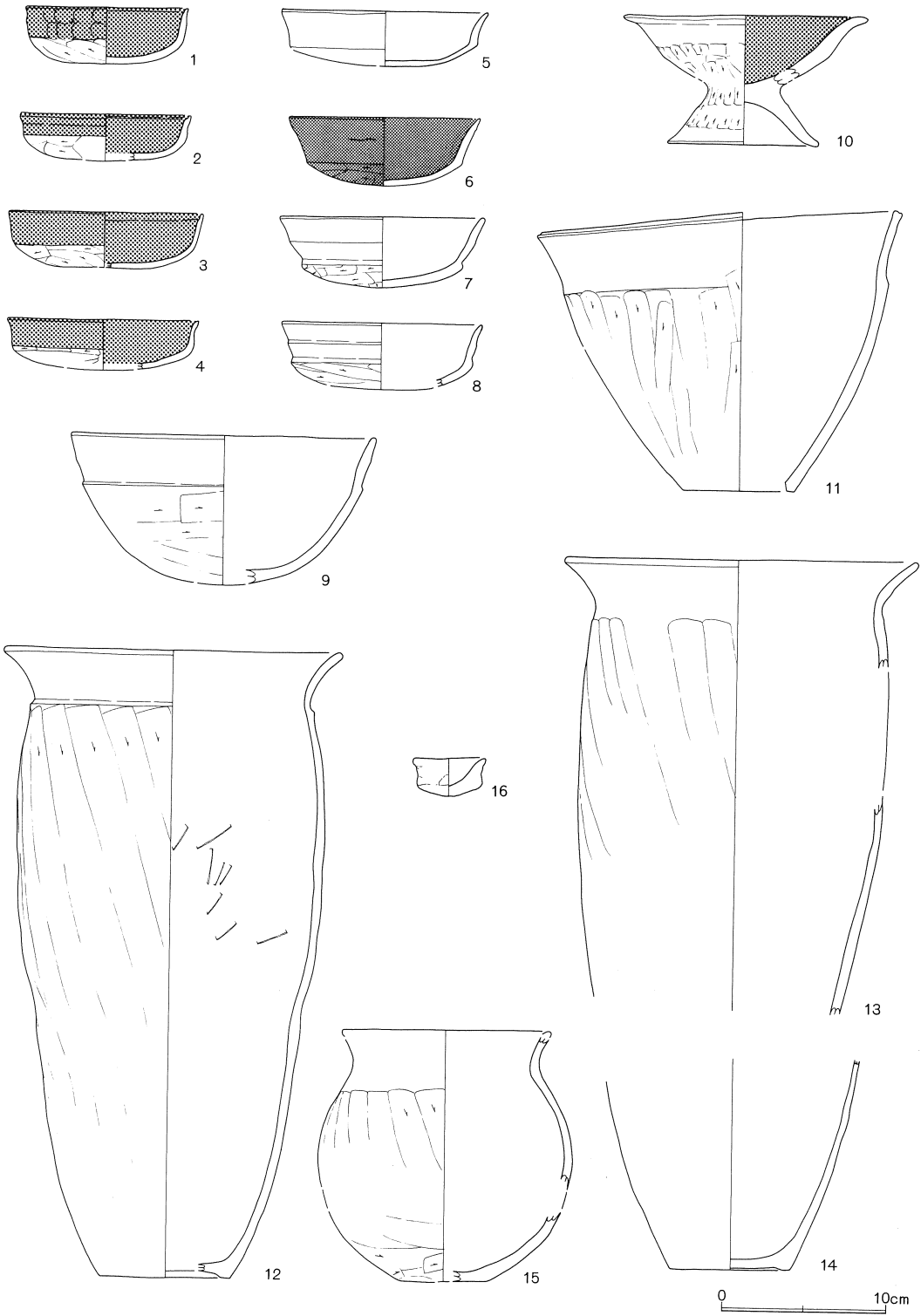
第34図 第15号住居跡(1)



水糸標高 = 1 2 . 5 0 0 m 0 ————— 2m



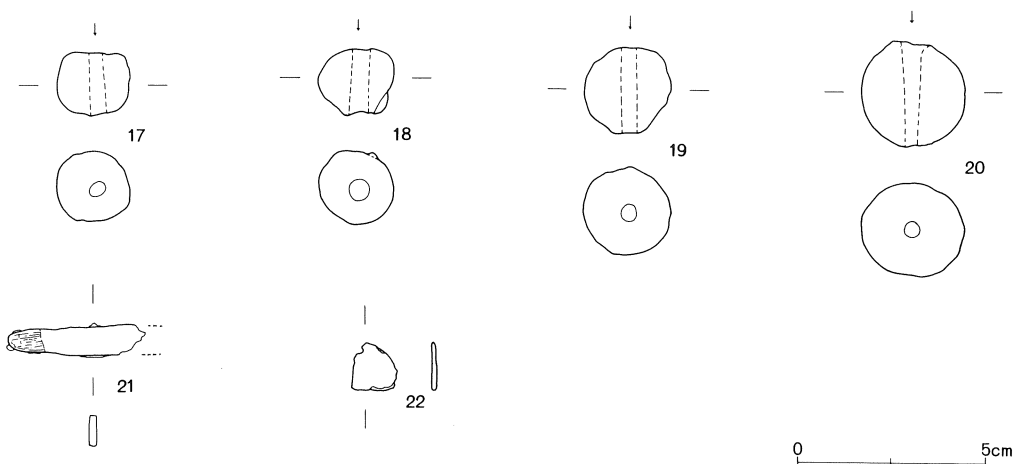
第35图 第15号住居跡(2)



第36图 第15号住居跡出土遺物(1)

第15号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (9.8) 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		50	D-0-1-136,148	74	
2	〃	口 径 (10.4) 底 径 — 高 さ (2.9) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		20	D-0-1-53,56	75	
3	〃	口 径 (11.8) 底 径 — 高 さ 3.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		40	D-0-8-18,19	72	
4	〃	口 径 (11.6) 底 径 — 高 さ (3.1) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	40	D-0-1-221	70	
5	〃	口 径 (12.5) 底 径 — 高 さ 3.3 最大径 —	白色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	橙褐	60	D-0-1-64,85	68	
6	〃	口 径 10.7 底 径 — 高 さ 4.2 最大径 —	赤色粒 角閃石 砂粒	明赤褐	60	C-0-6-171,172	69	
7	〃	口 径 (12.6) 底 径 — 高 さ 4.3 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	〃	50	C-0-4-553	71	
8	〃	口 径 (12.3) 底 径 — 高 さ (4.1) 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	20	D-0-4-113	73	
9	鉢	口 径 (18.7) 底 径 — 高 さ (9.1) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	20	D-0-1-162,155	76	
10	高坏	口 径 15.0 底 径 — 高 さ 7.9 最大径 —	赤色粒 角閃石 砂粒	にぶい橙	60	D-0-4-458	66	



第37図 第15号住居跡出土遺物(2)

第15号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
11	甑	口径 22.3 底径 6.9 高さ 17.2 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明黄褐	70	D-0-4-281,377	78	
12	甕	口径 20.8 底径 8.0 高さ 38.2 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	70	D-0-1-112,402	79	
13	〃	口径 21.7 底径 — 高さ (27.5) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	胴上半80	D-(-1)-4-239	81	
14	〃	口径 — 底径 7.4 高さ (12.8) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	底部 70	D-0-1-532,540	80	
15	〃	口径 (12.8) 底径 (5.5) 高さ (15.3) 最大径 15.6	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	50	D-0-4-301,302	77	
16	手捏ね	口径 (4.4) 底径 — 高さ 2.3 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	にぶい橙	20	D-0-4-596	921	

第15号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
17	—	1.9	0.4	5.39	完形	D-(-1)-2-222	606
18	—	2.0	0.5	5.23	完形	D-(-1)-4-600	607
19	—	2.3	0.4	9.29	完形	D-(-1)-1-264	605
20	—	2.8	0.4	14.69	完形	C-(-1)-6-57	604

第15号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて × よこ × 高さ						
22	13 × 12 × 1	0.31	剝片	D-1-2-64	885		

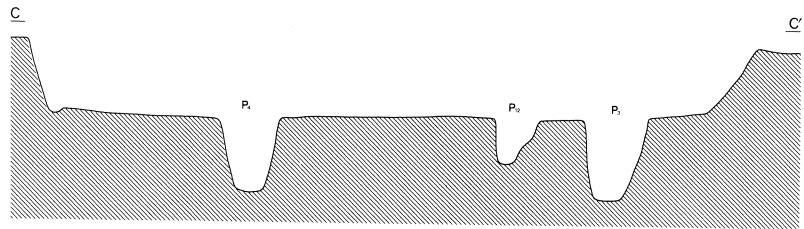
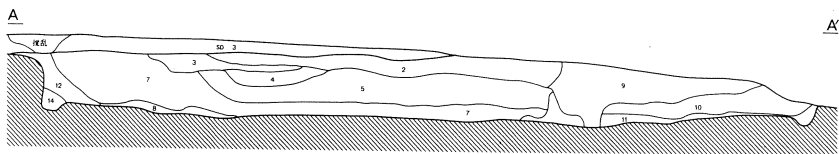
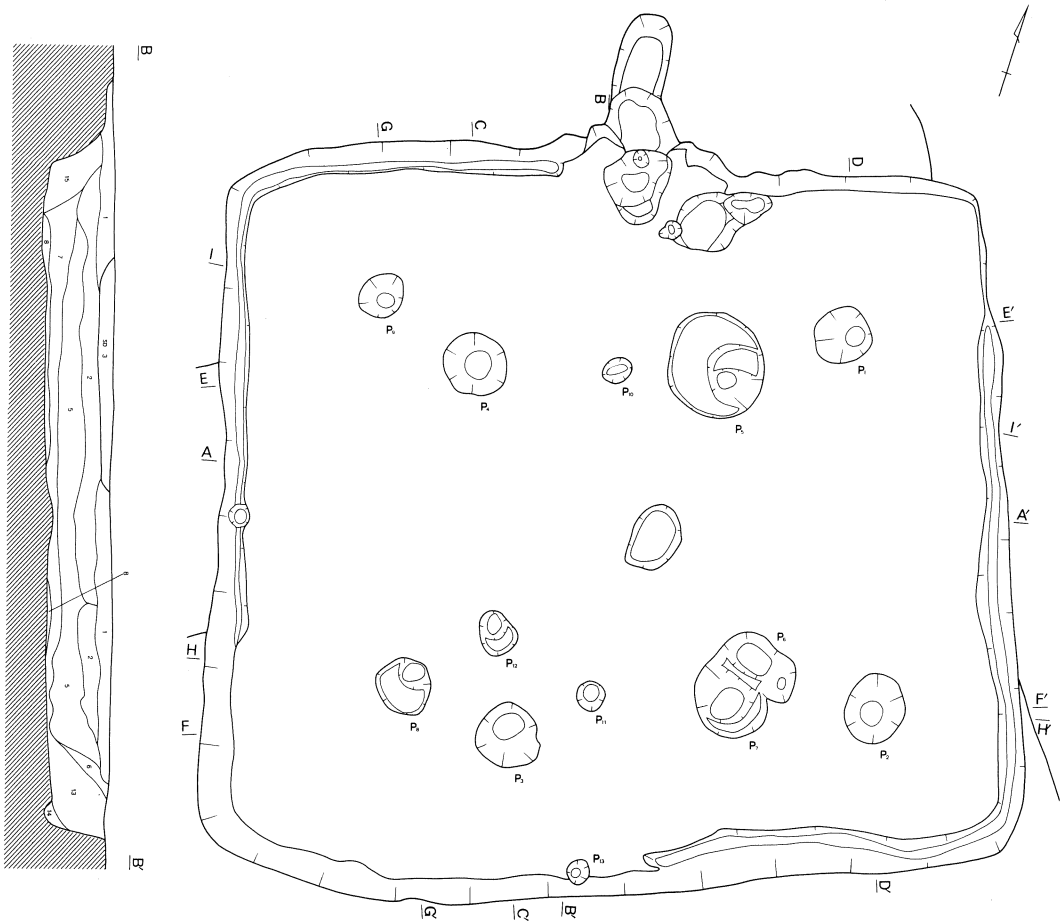
らなかったが床面の精査時に柱穴及びカマドの状況から2軒分であることが判明した。あるいは拡張の可能性も考えられる。規模は8.4m×8.0mであるがこれが1軒分の大きさとは断定できない。確認面からの深さは70cmである。主軸方位は西辺でとった場合N-15°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はやや起伏がある。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは複数検出された。P1~P4、P5~P9などが組合せとしては考えられるがP10、P11、P13も一直線上に並ぶことから住居跡に関係するものと思われる。壁溝は北東と南西のコーナー部分で切れる。

カマドは北壁中央に設けられていた。2基分が重複しているがいずれも袖は検出されなかった。遺物は土師器坏、甕、須恵器坏、鉄製鎌、石製模造品などが多くは覆土中から出土している。

鉄製品 45は鎌である。錆による腐食が著しく破損して数片に分離している。先端部分をわずかに欠失する。長さ16.8cm、幅3.1cm、背幅4mmほどである。

第16・17号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 10.6 底 径 — 高 さ 3.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		100	C-(-2)-9-133	92	
2	ク	口 径 11.4 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		70	C-(-1)-3-128	93	灯明か?



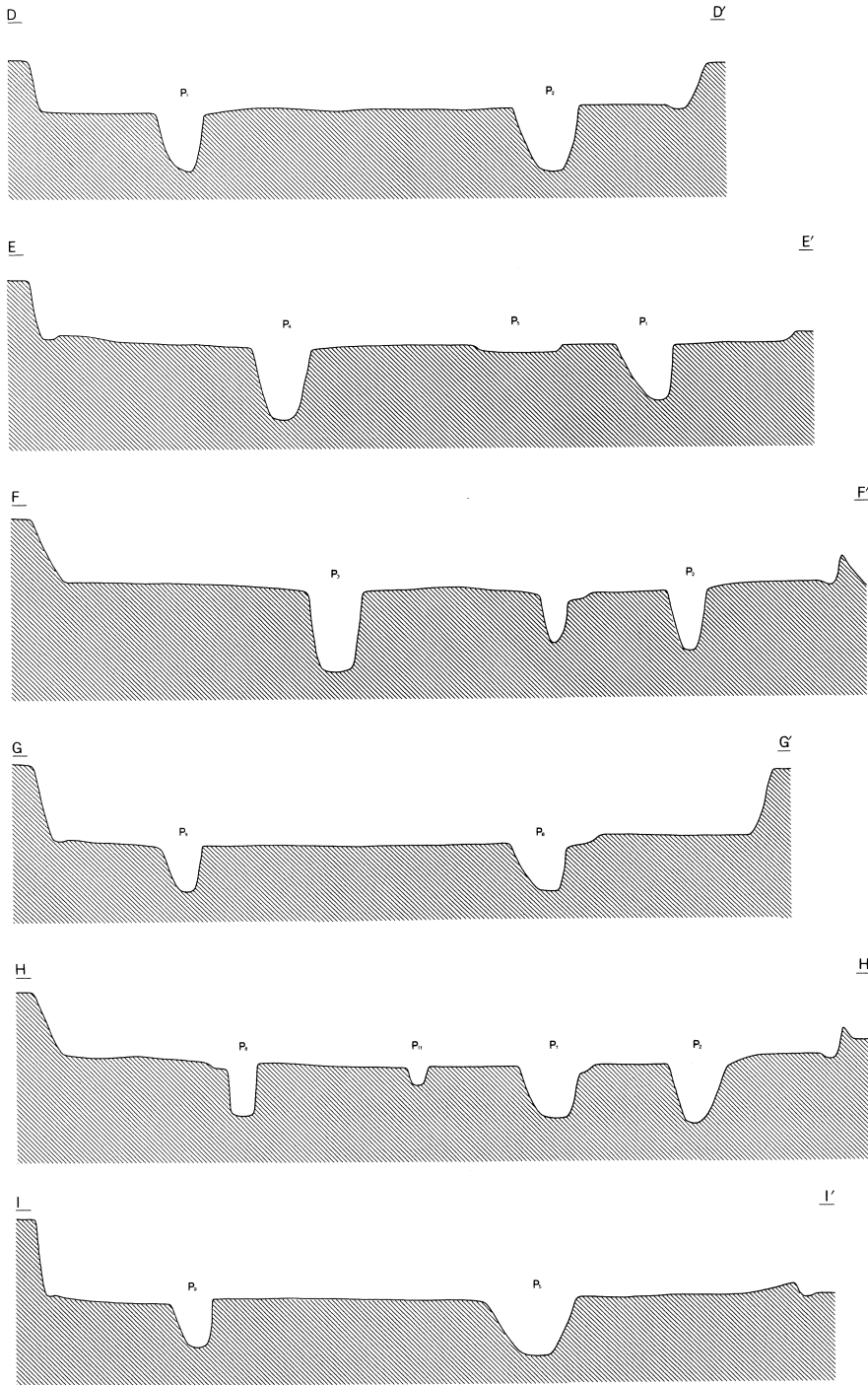
S·J 16

1. 暗褐色 黒味が強い。
2. 暗褐色 ローム粒を含む。
3. 暗褐色 ローム粒・焼土粒を含む。
4. 暗褐色 ローム粒・炭化粒を含む。
5. 黒色 炭化粒・焼土粒を多量含む。
ローム粒を含む。
6. 黒褐色 ローム粒の多量含む。
7. 暗褐色 ローム粒・焼土粒を含む。
8. 暗褐色 しまり灰、ロームブロックを含む。
9. 暗褐色 しまり不良。
10. 暗褐色 しまり灰、ローム粒を多量含む。
焼土粒を含む。
11. 暗褐色 ロームブロックを多量含む。
12. 暗褐色 ローム粒、炭化粒・焼土粒を含む。
13. 暗褐色 ローム粒多量含む。
14. 暗褐色 ロームブロック含む。
15. 暗褐色 焼土粒を含む。

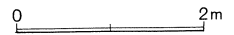
水糸標高 = 12.400 m

0 2m

第38図 第16・17号住居跡(1)



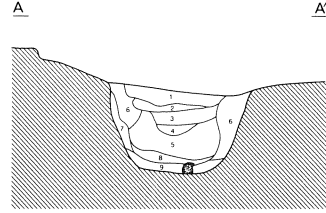
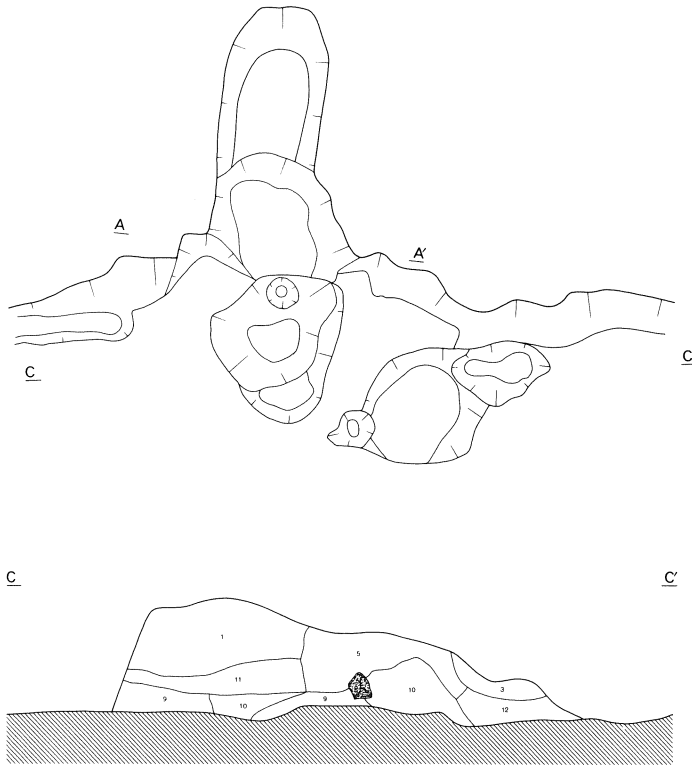
水系標高 = 12.400 m



第39図 第16・17号住居跡(2)

第16・17号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
3	坏	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ 3.7 最大径 —	赤色粒 砂粒	橙褐	60	D-(-1)-2-72、81	94	
4	〇	口 径 10.7 底 径 — 高 さ 3.7 最大径 —	黒色粒 角閃石 砂粒	〇	60	C-(-1)-3-149	97	
5	〇	口 径 11.3 底 径 — 高 さ 3.6 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	明赤褐	80	C-(-1)-3-105	96	
6	〇	口 径 11.3 底 径 — 高 さ 4.3 最大径 —	白色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	橙褐	90	C-(-1)-3-421	95	
7	〇	口 径 11.2 底 径 — 高 さ 4.0 最大径 —	角閃石 砂粒		20	C-(-1)-3-4	107	
8	〇	口 径 12.0 底 径 — 高 さ 3.7 最大径 —	角閃石 砂粒	にぶい黄橙	40	C-(-1)-3-38	103	
9	〇	口 径 (12.9) 底 径 — 高 さ 3.8 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	50	C-(-1)-3-363	106	
10	〇	口 径 (11.2) 底 径 — 高 さ 4.5 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	赤褐	50	C-(-1)-3-373	104	
11	〇	口 径 (13.9) 底 径 — 高 さ (5.4) 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	にぶい褐	30	C-(-1)-3-214	105	
12	〇	口 径 (12.8) 底 径 — 高 さ 4.2 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	80	D-(-1)-1-547	112	



S J 16・17カマド

1. 黄灰色 しまり不良、粘性なし、ローム粒粘土粒多量含む。
2. 黒色 しまり不良、粘性なし、黒色土粘土粒含む。
3. 明褐色 しまり不良、粘性なし、ローム粒粘土粒多量含む。
4. 白灰色 しまり良。粘性ややあり。粘土粒含む。
5. 赤褐色 しまり良。粘土粒の赤化である。
6. 白灰色 しまり良。粘性なし。4層類似。白色粒多く含む。
7. 明褐色 しまり不良、粘性あり、ローム粒多量。粘土粒少量。
8. 褐色 しまり良。粘性あり。ローム粒粘土粒、赤色焼土粒との混合土。
9. 褐色 しまり良。粘性あり。8層類似。赤色焼土粒なし。
10. 焼土層
11. 暗褐色 白色砂粒、焼土多く含む。
12. 暗赤褐色 焼土粒、焼土ブロック含む。

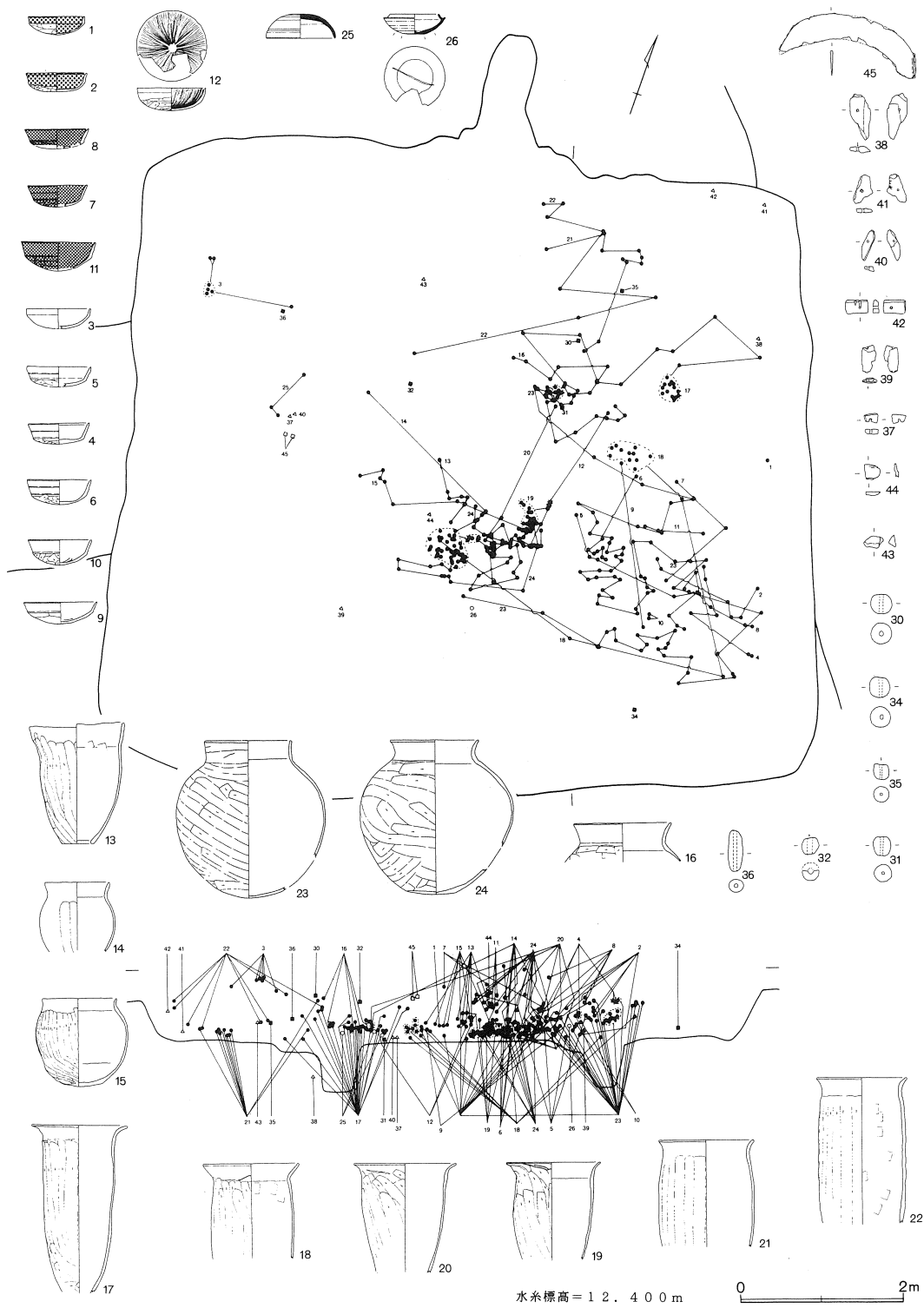
水系標高 = 12.400 m

0 2m

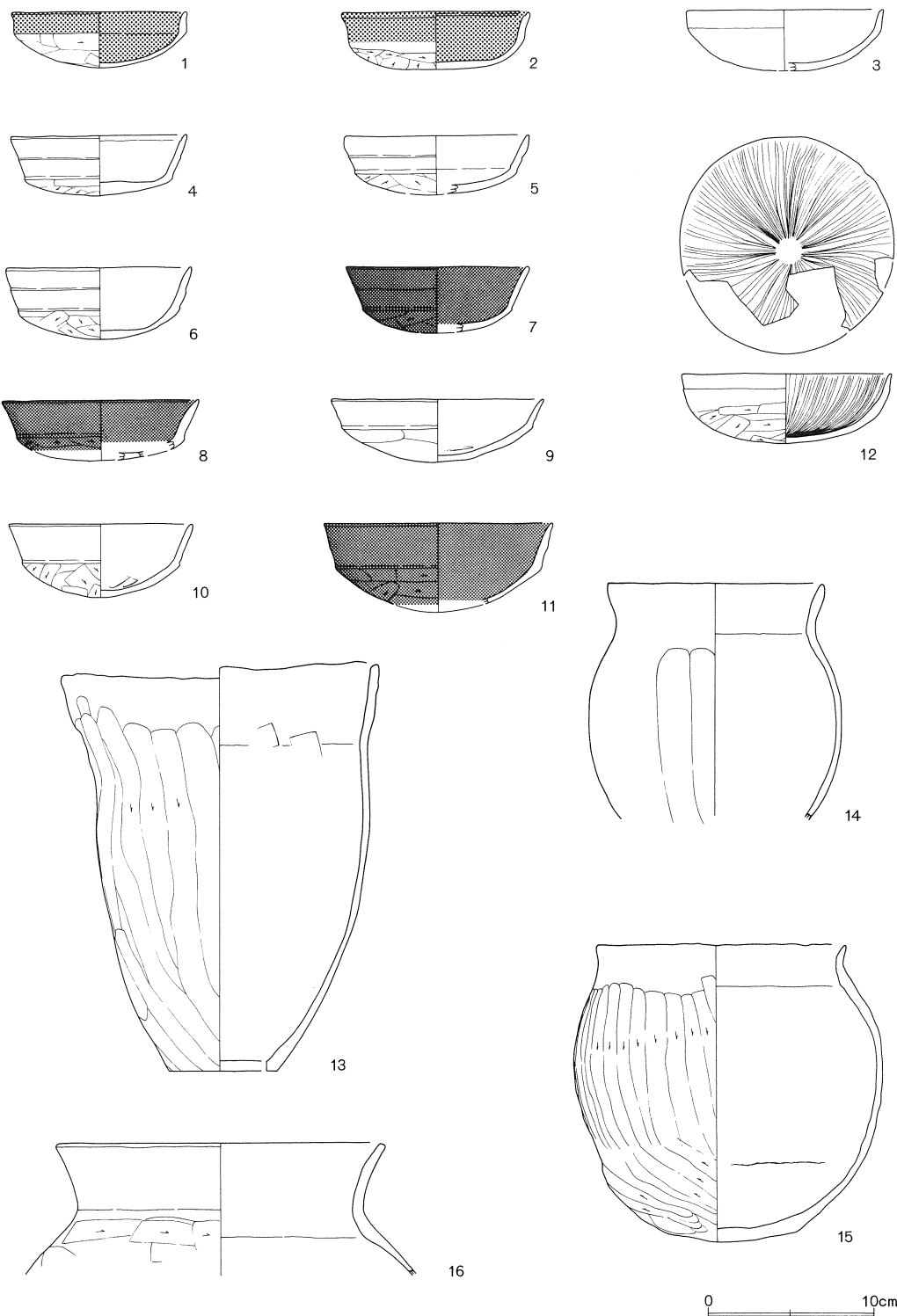
第40図 第16・17号住居跡(3)

第16・17号住居跡出土遺物(3)

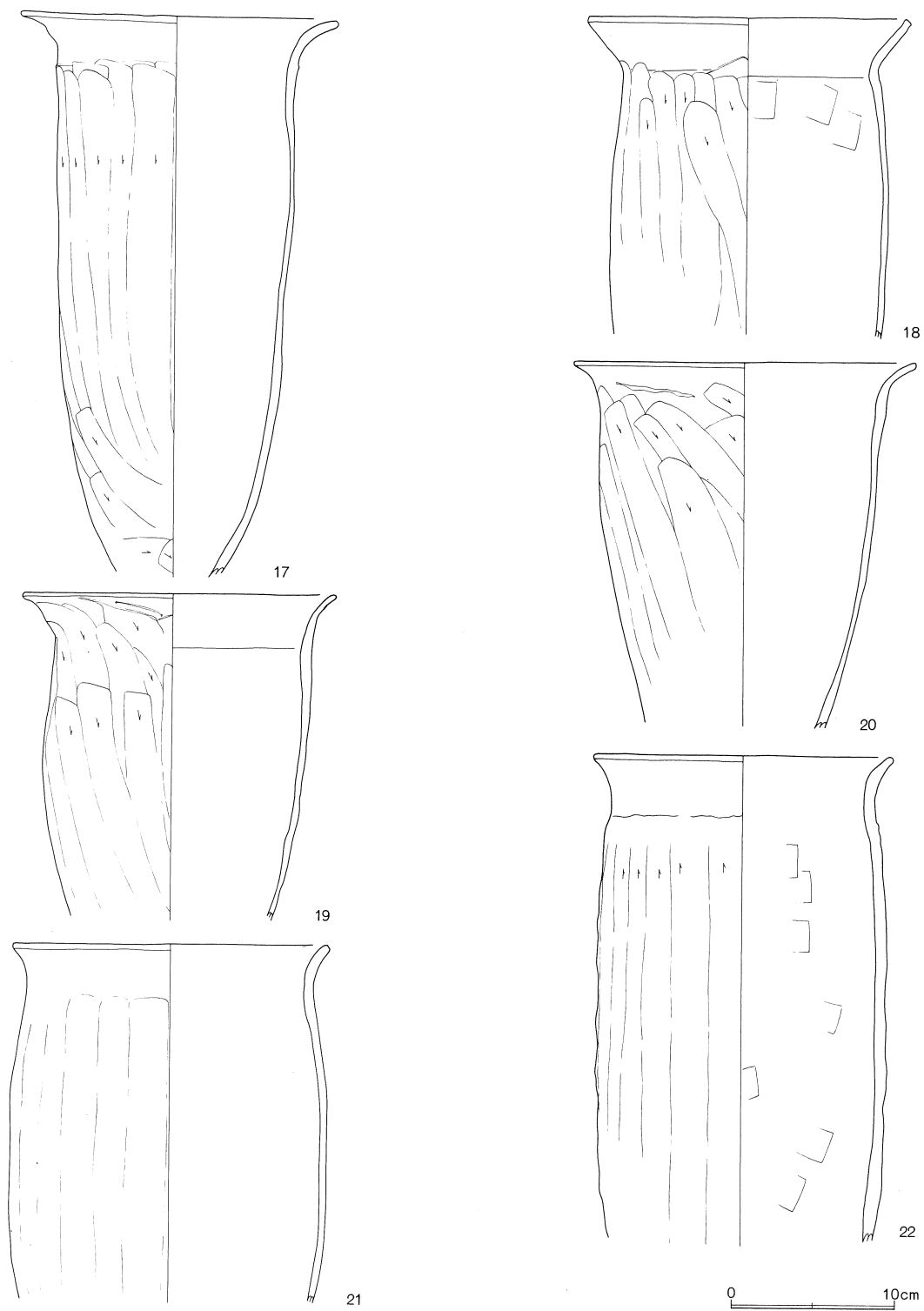
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
13	甑	口径 19.4 底径 6.5 高さ 24.2 最大径 -	赤色粒 礫 砂粒	にぶい橙	100	C-(-1)-3-195	85	
14	甕	口径 13.2 底径 - 高さ (14.4) 最大径 (15.3)	白色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	にぶい褐	60	C-(-1)-1-317	90	
15	シ	口径 15.2 底径 7.9 高さ 18.0 最大径 18.8	赤色粒 礫 砂粒	にぶい橙	90	C-(-1)-3-537	87	



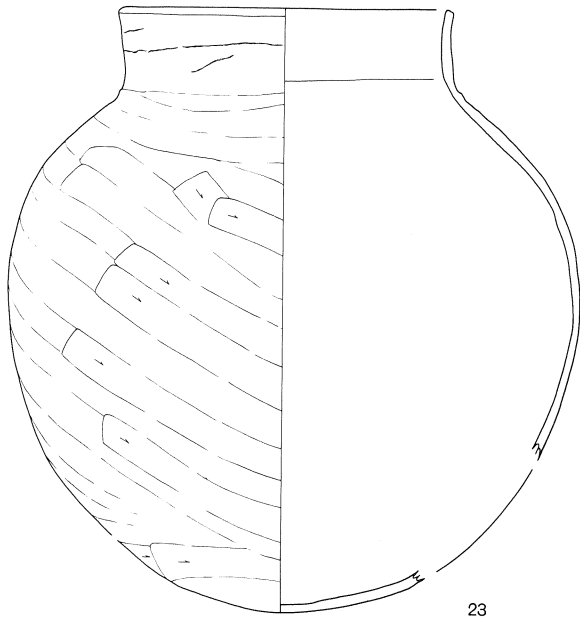
第41図 第16・17号住居跡(4)



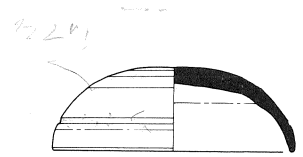
第42図 第16号住居跡出土遺物(1)



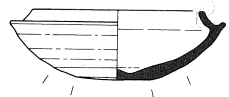
第43图 第16号住居跡出土遺物(2)



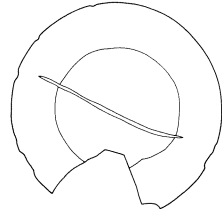
23



25



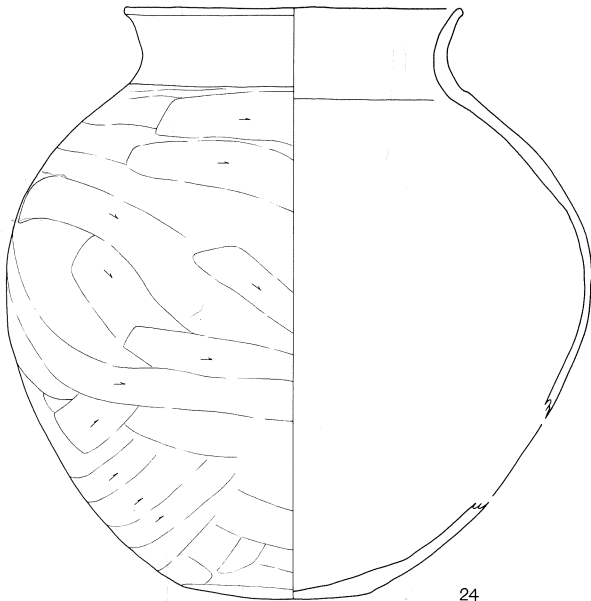
26



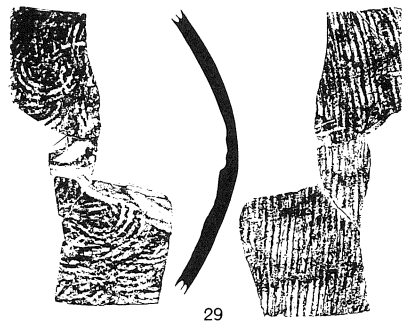
27



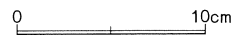
28



24



29



第44図 第16号住居跡出土遺物(3)



第45図 第16号住居跡出土遺物(4)

第16・17号住居跡出土遺物（4）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
16	甕	口径 19.8 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい橙	口縁 100	C-(-2)-9-6	86	
17	〃	口径 19.6 底径 — 高さ (34.2) 最大径 —	黒色粒 赤色粒 礫 砂粒	〃	90	D-(-1)-1-289	98	
18	〃	口径 19.9 底径 — 高さ (19.4) 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい褐	胴上半40	D-(-1)-1-91	88	
19	〃	口径 19.3 底径 — 高さ (20.0) 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい橙	50	D-(-1)-1-306	89	
20	〃	口径 21.0 底径 — 高さ (22.3) 最大径 —	赤色粒 角閃石 砂粒	にぶい褐	胴上半60	D-(-1)-1-318	91	
21	〃	口径 (19.4) 底径 — 高さ (21.8) 最大径 —	礫 砂粒	赤褐	50	D-(-2)-7-214	99	
22	〃	口径 (18.4) 底径 — 高さ (29.7) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	40	D-(-2)-7-97	102	
23	〃	口径 (17.8) 底径 (12.7) 高さ (32.0) 最大径 (30.4)	赤色粒 礫 砂粒	にぶい橙	50	C-(-1)-3-85	100	
24	〃	口径 19.0 底径 10.3 高さ 31.3 最大径 31.2	礫 砂粒	にぶい褐	70	D-(-1)-1-86,87	101	
25	蓋	口径 13.0 底径 — 高さ 4.4 最大径 —	礫 砂粒	灰白	70	D-(-1)-2-485	83	

第16・17号住居跡出土遺物（5）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
26	坏	口径 9.2 底径 6.9 高さ 3.7 最大径 -	白色粒 砂粒	灰	100	D-(-1)-1-998	84	湖西産
27	甕	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰オリーブ	破片		16-28	
28	〆	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 礫 砂粒	灰	〆		16-24	
29	〆	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	明赤褐	〆		16-27	叩き幅 3本/cm

第16・17号住居跡出土土鍾計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
30	-	2.1	0.5	13.12	完形	D-(-3)-7-212	608
31	-	2.1	0.3	9.35	完形	D-(-2)-1-917	612
32	-	2.1	0.7	(4.23)	1/2	D-(-2)-1-262	613
33	-	2.4	0.3	9.27	完形	D-(-3)-7-7285	614
34	-	2.5	0.4	12.80	完形	C-(-2)-6-152	609
35	-	1.9	0.3	6.08	完形	D-(-3)-7-187	610
36	5.1	1.7	0.4	13.29	完形	D-(-2)-2-323	611

第18号住居跡（第48図）

大部分が予定路線内を横断する既存の道路によって削られている。平面形は方形であったと思われる。他の遺構との重複はない。規模は残存していた南辺で4.6mで、確認面からの深さは26cmである。軸方位は同じく南辺でN-68°-Eである。壁はやや傾斜をもって掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴、ピットなどは検出されなかった。壁溝は検出された。床面からの深さは約5cmほどである。

第16号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて × よこ × 高さ						
37	18 × 12 × 7			2.08	破損品 (剣形?)	D-(-2)-2-526	741
38	56 × 25 × 8			12.45	破損品 (剣形?)	C-(-2)-9-135	739
39	33 × 18 × 7			4.30	破損品 (剣形?)	D-(-2)-4-229	743
40	37 × 16 × 6			3.72	剥片	D-(-2)-2-527	742
41	35 × 24 × 6			6.47	剥片	C-(-3)-9-49	738
42	28 × 17 × 6			7.98		C-(-3)-9-47	737
43	24 × 15 × 8			3.00	剥片	D-(-3)-7-312	744
44	19 × 19 × 5			2.11	剥片	D-(-2)-1-374	740

カマドは検出されなかった。

遺物は土師器の破片が出土しているが図示できるものはなかった。

第19号住居跡 (第46図)

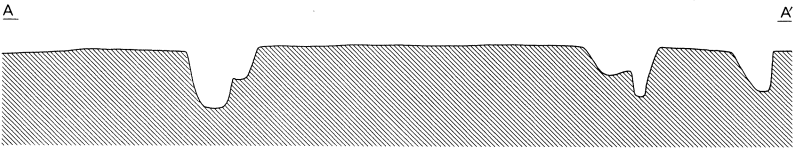
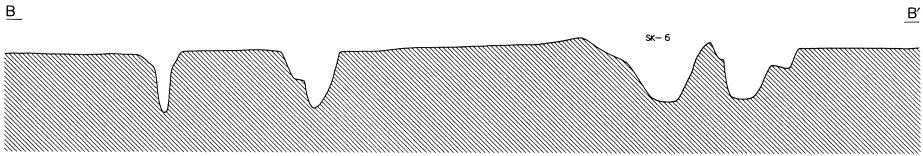
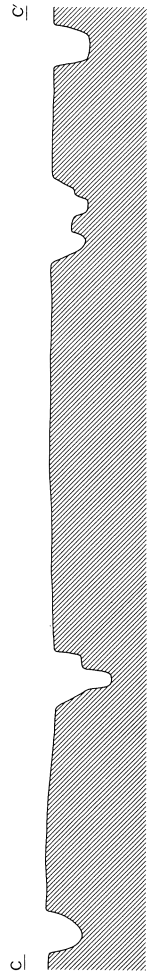
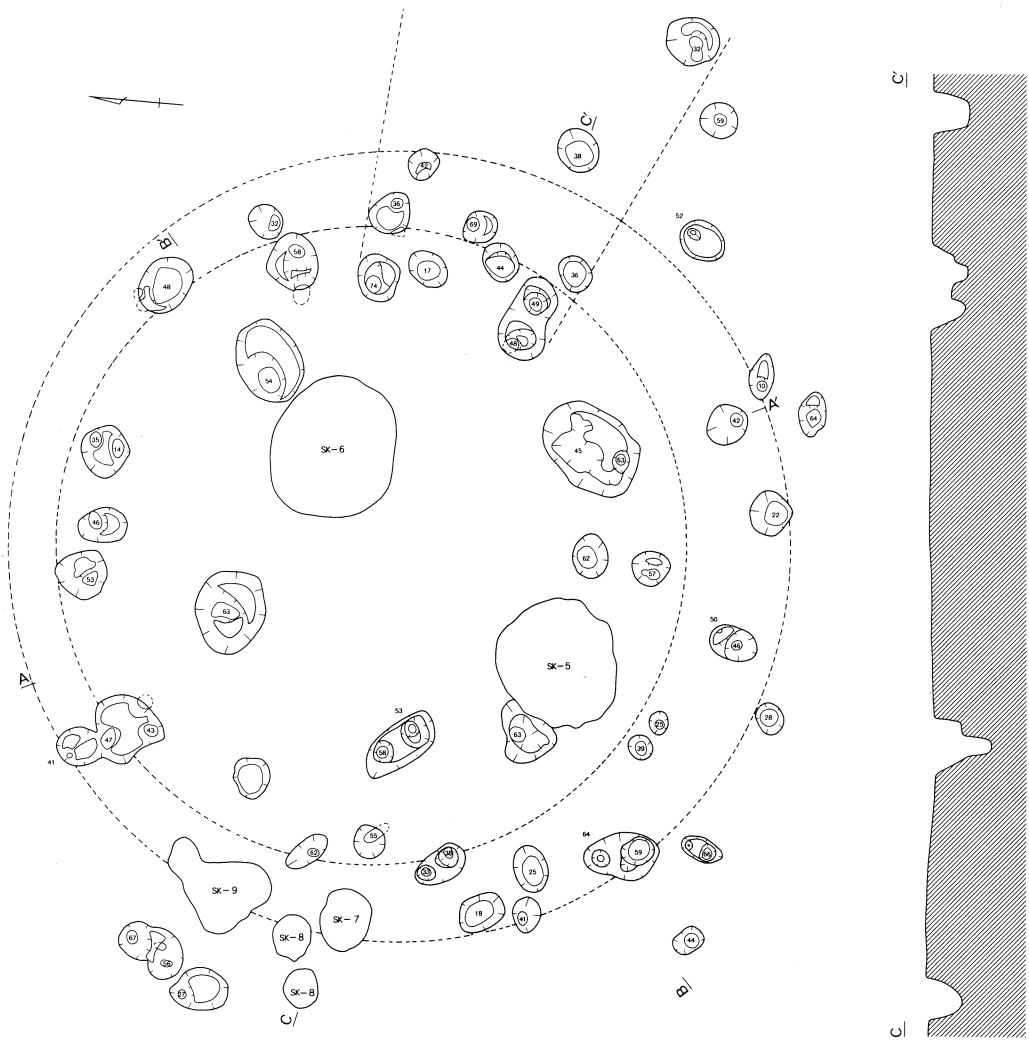
ピットのみを検出で壁の立ち上がりはわからなかった。土坑が数基重複する。ピットの配置から拡張があったものと思われる規模は内側で直径6.7m外側は8.3mほどと思われる。主柱穴は4本ないし5本と思われる。東側が入口と想定される。炉跡は検出されなかった。住居跡の時期は遺物から安行式期のものと思われる。

遺物は破片が数点出土したのみである。第47図1、2は胎土に多量の繊維を含む。前期黒浜式であろう。3、4は胎土に多量の礫及び雲母を含み阿玉台式に、5は加曾利E式に比定されよう。6は安行ⅢbあるいはⅢc式と思われる。

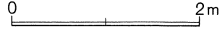
第20号住居跡 (第48図)

調査区外にかかる。他の遺構との重複はない。ほとんどが調査区外のため平面形及び規模等は不明であるが、検出された東辺の長さは2.7mである。確認面からの深さは30cmである。軸方位は東辺でN-15°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は検出面積が狭いうえにピット状の施設が掘り込まれているため詳細は不明である。壁溝はないようである。貯蔵穴、カマド等は検出されなかった。調査区外にあるものと思われる。

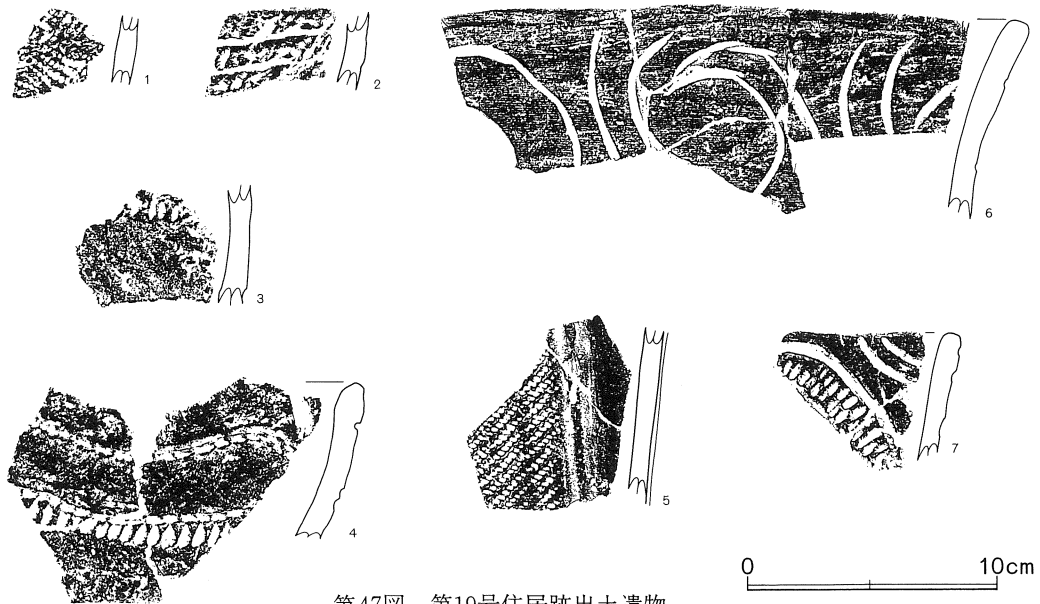
遺物は出土しなかった。



水系標高 = 12,500 m



第46図 第19号住居跡



第47図 第19号住居跡出土遺物

第21号住居跡（第49図）

平面形は方形である。94号住居跡と重複しこれより新しい。規模は6.3m×6.2mで確認面からの深さは22cmである。主軸方位はN-64°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は住居跡の東隅壁からやや離れて検出された不整楕円形のような掘り込みで上面80cm×60cmほどで深さは26cmである。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。覆土はいずれも暗褐色土でP2、P3は均一にローム粒を含む。P4は炭化粒を少量含む。P7は混入物が少なくしまっている。P1、P4の覆土からは土器片が出土していることから柱は抜き取られたと考えられる。壁溝は検出されなかった。北側の隅は内側に掘り残され両側にピットが検出された。ピットの覆土は暗褐色土で混入物が少なく比較的しまっている。入口と思われる。

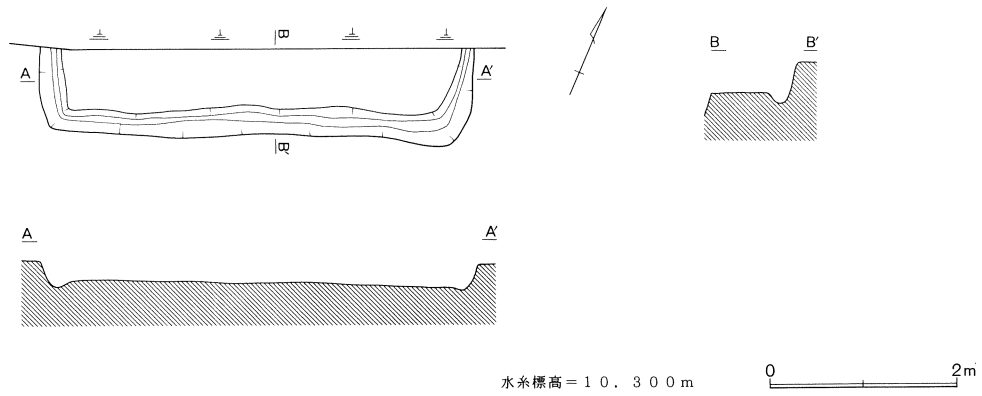
カマドは東辺やや南よりに設けられていた。袖には砂岩の切り石が用いられていた。両袖ともよく遺存しており、焚口の幅は30cmで奥行きは100cmである。支脚も砂岩を加工して用いていた。煙道はなかった。

遺物は貯蔵穴を中心に坏、甕などが出土している。

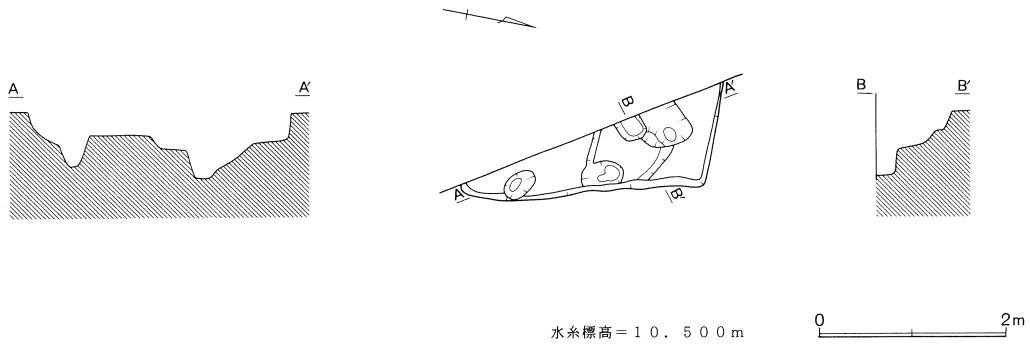
砥石 10は円盤状を呈する。台石とするほうが適当かもしれない。上下面に無数の擦痕及び沈線状の痕跡があり片面には直径2cm深さ7mmほどの穿孔がある。他面にも小さな穿孔が2ヵ所認められる。

第94号住居跡（第49図）

21号住居跡と重複する。平面形は方形である。規模は4.1m×4.0mで21号住居跡の床面からの深さは14cmである。主軸方位はN-27°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は住居跡の東隅に検出された。21号住居跡の柱穴に壊されている。隅丸方形あるいは隅丸長方形の掘り込みで深さは55cmである。柱穴は21号住居跡と重なる部分があるがP8～



S J 2 0



第48図 第18・20号住居跡

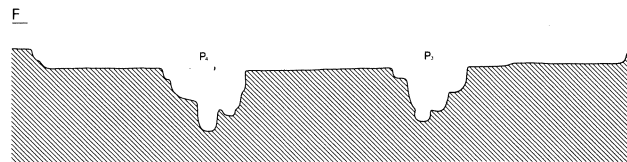
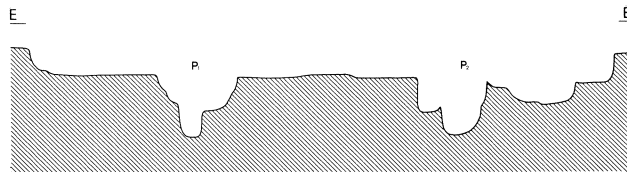
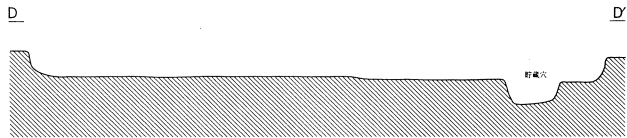
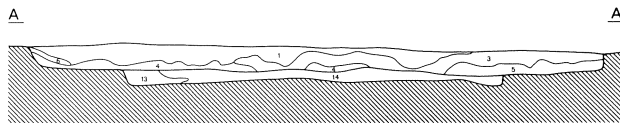
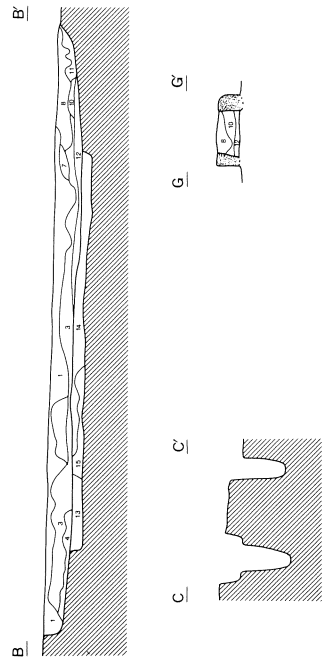
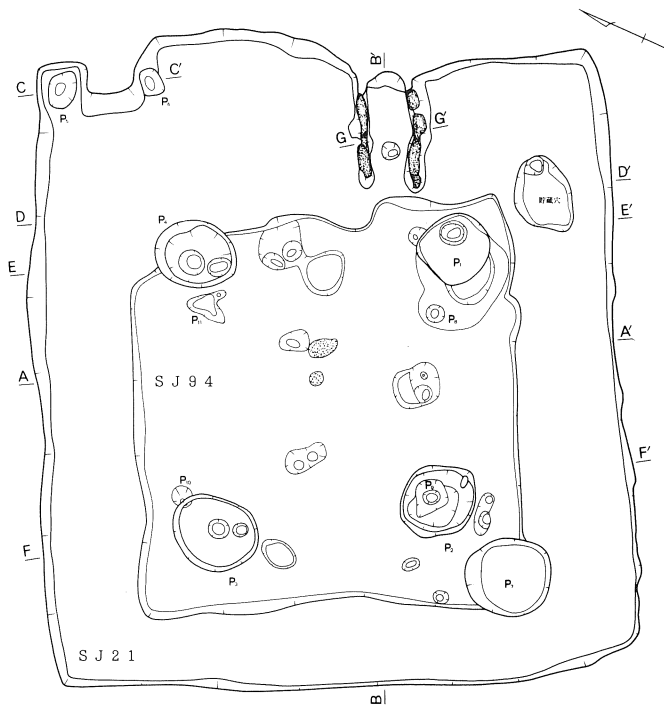
P11が支柱穴と考えられる。壁溝は検出されなかった。

カマドは21号住居跡によって壊されておりほとんど残っていなかったが東辺に燃焼部の底面がころうじて残っていた。

遺物は確実に本住居跡に伴うものは出土していない。

第21号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (11.8) 底径 — 高さ (4.1) 最大径 —	赤色粒 砂粒	橙褐	20	6,7,Bグリッド上層	111	
2	ク	口径 (12.4) 底径 — 高さ (5.1) 最大径 —	赤色粒 角閃石 砂粒	ク	30	70	110	



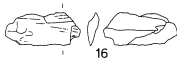
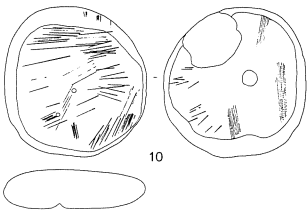
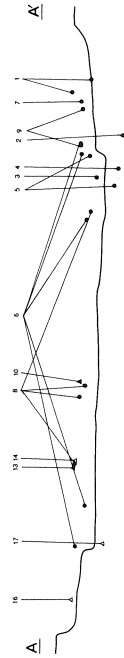
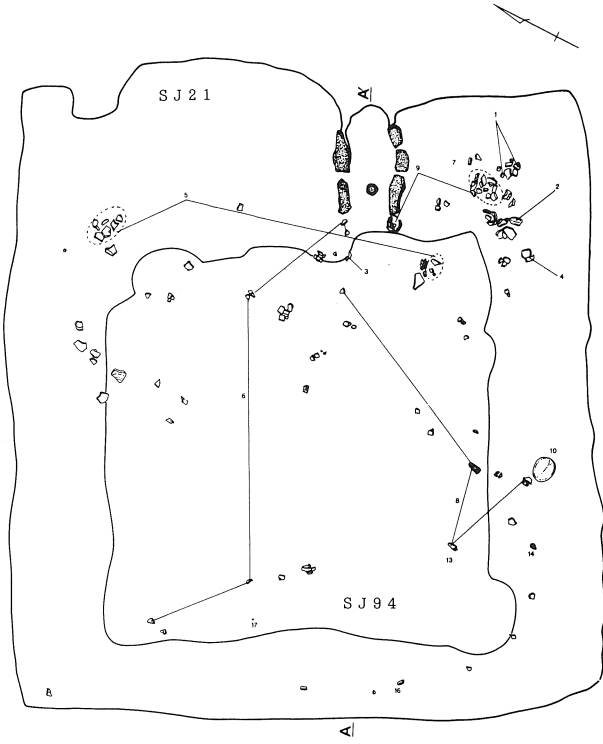
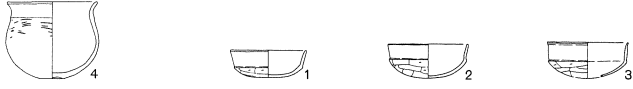
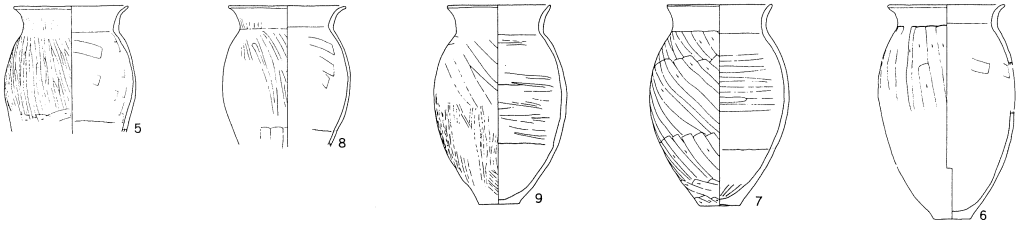
S J 21

1. 黒褐色 ややしまり弱。ローム粒若干含む。
2. 黒褐色 ローム粒含む。
3. 明黒褐色 しまり弱。ローム粒、黒色土全体に多量含む。
4. 明黒褐色 3層よりローム粒多い。
5. 褐色 粘性有。しまり良。ロームブロック崩れ。
6. 黒褐色 1層よりしまり弱。混入物なし。
7. 黒褐色 焼土がまばらに混入。
8. 赤褐色 しまり弱。焼土ブロックが大量に混在。黒色土粒混入。
9. 明褐色 ややしまり良。焼土粒微量混入。
10. 赤褐色 8層より焼土少ない。
11. 暗褐色 ややしまり良。焼土、炭粒若干含む。
12. 暗褐色 しまり良。11層より混入物なし。
13. 暗褐色 しまり良。上層からの黒褐色土混入。ロームブロック混入。
14. 明褐色 しまり良。黄色っぽい。焼土粒子混入。
15. 黄褐色 しまり良。

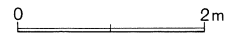
水糸標高 = 11.600 m

0 2m

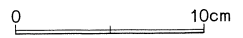
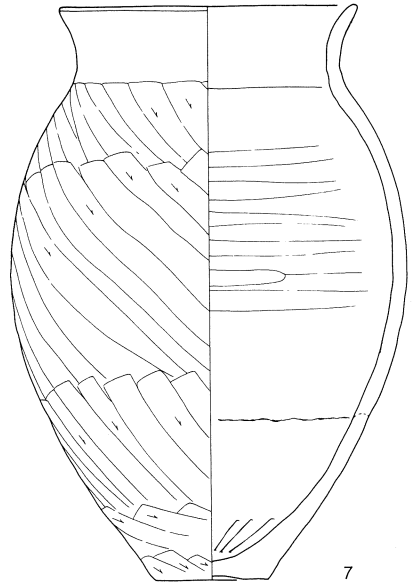
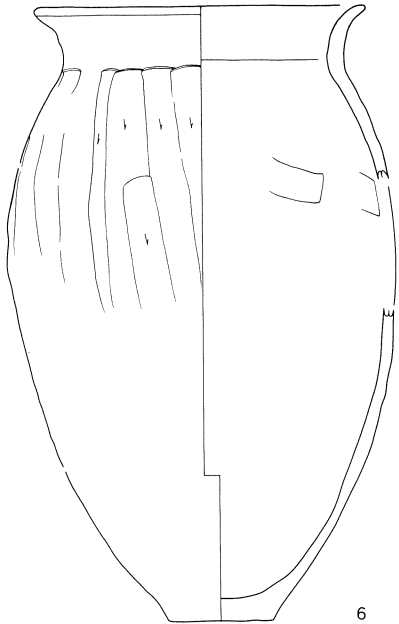
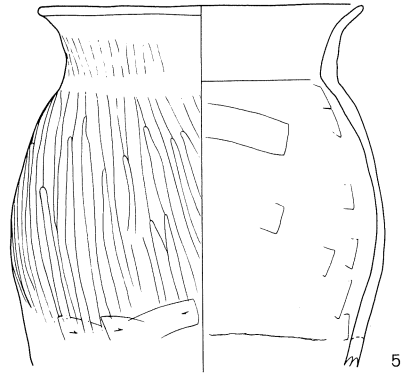
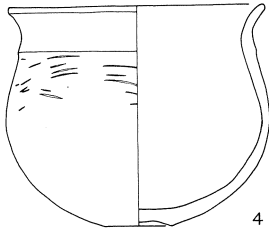
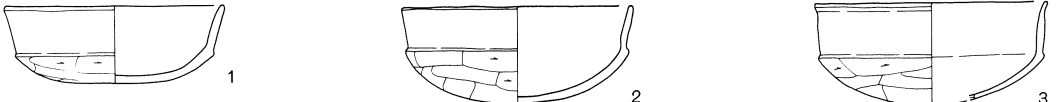
第49図 第21・94号住居跡(1)



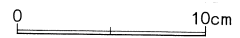
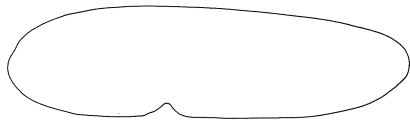
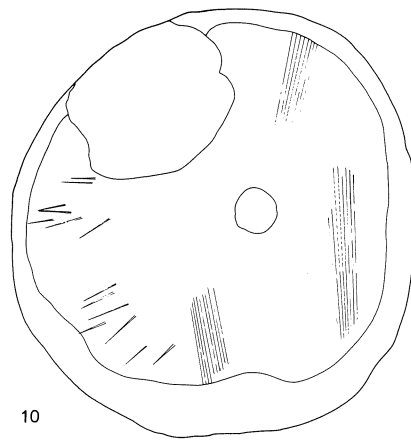
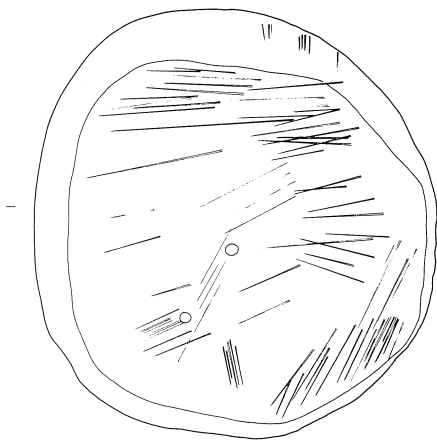
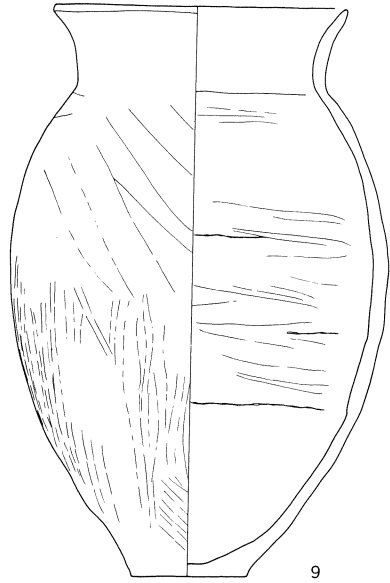
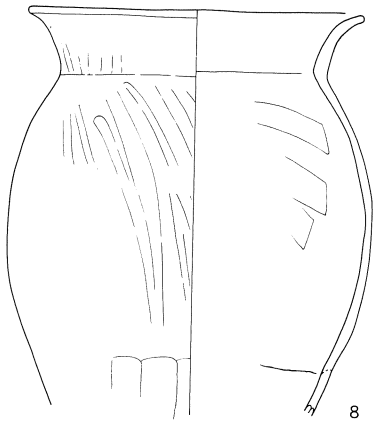
水系標高 = 11.600 m



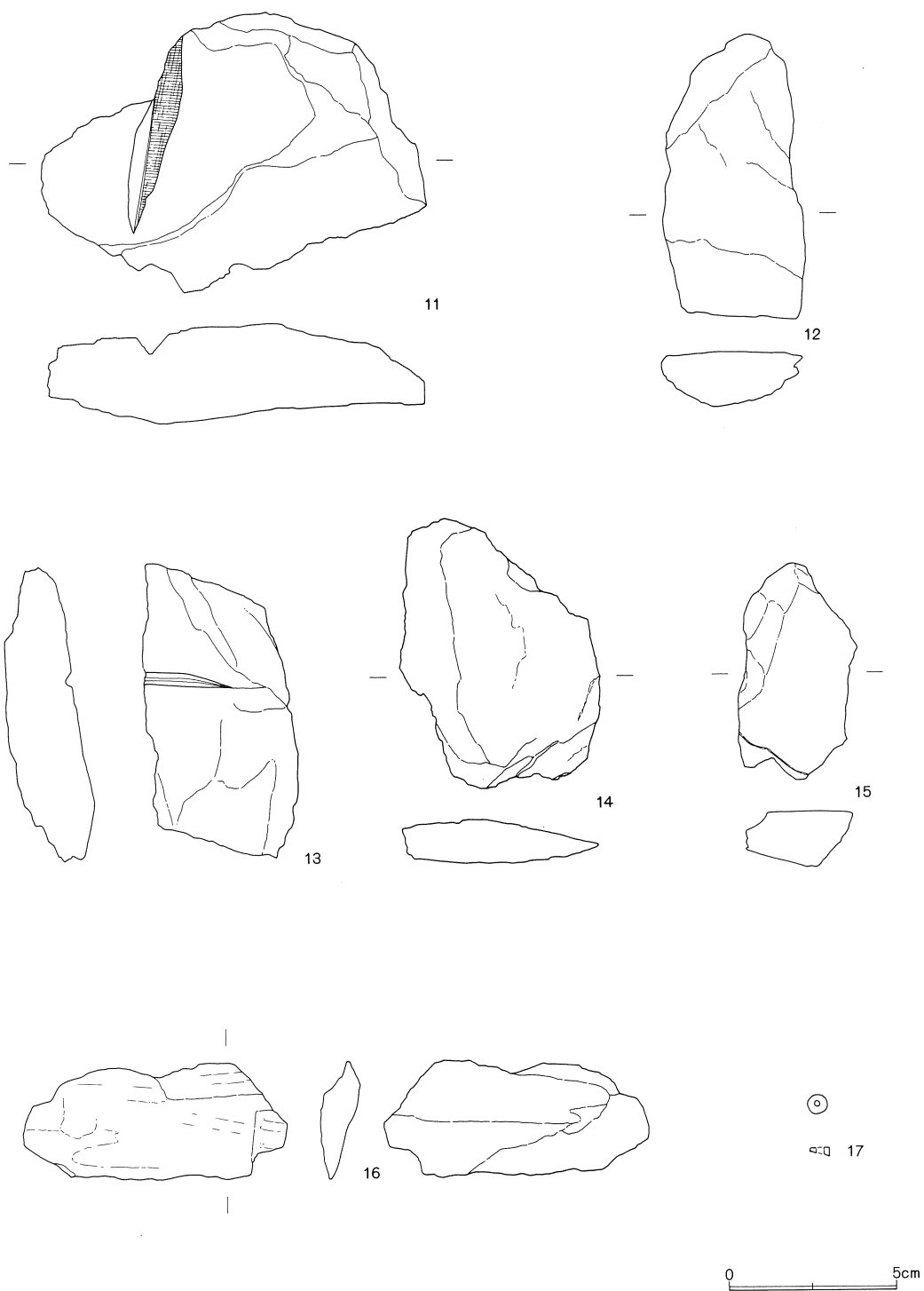
第50図 第21・94号住居跡(2)



第51図 第21号住居跡出土遺物(1)



第52図 第21号住居跡出土遺物(2)



第53图 第21号住居跡出土遺物(3)

第21号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
3	坏	口 径 (12.4) 底 径 — 高 さ 5.5 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	40	73	109	
4	甕	口 径 (13.8) 底 径 3.6 高 さ 11.7 最大径 (14.2)	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	60	69	108	
5	〃	口 径 17.3 底 径 — 高 さ — 最大径 (20.0)	赤色粒 礫 片岩 砂粒	〃	40	17, 34	115	
6	〃	口 径 17.8 底 径 (5.6) 高 さ (32.7) 最大径 (20.7)	赤色粒 礫 片岩 砂粒	〃	60	22, 23, 24, 47, 49	116	
7	〃	口 径 15.9 底 径 6.0 高 さ 30.5 最大径 21.1	赤色粒 砂粒 礫 角閃石 片岩	〃	70		835	
8	甕	口 径 18.0 底 径 — 高 さ — 最大径 (21.4)	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 片岩	〃	20	27, 45, 58, 63	113	
9	〃	口 径 15.7 底 径 6.2 高 さ 30.2 最大径 20.1	赤色粒 礫 片岩 砂粒	〃	40	1	114	

第22号住居跡（第54図）

平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は4.7m×4.4mで確認面からの深さは34cmである。主軸方位は北辺でN-60°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は北側が約5cmほど低くなる。貯蔵穴は南隅にあるものが該当すると思われる。長方形の掘り込みで上面42cm×30cmほどで深さは15cmである。ピットはP4が浅いが位置的にP1～P4が主柱穴と考えられる。覆土はいずれも暗褐色土でロームが混じり全体にしまりはあまり良くない。壁溝は検出されなかった。住居跡中央部には炉などは検出されず東隅に焼土が検出された。

遺物は南西の壁に沿って高坏、甕などが一括して出土した。ほとんどが床面あるいは床面直上からの出土である。

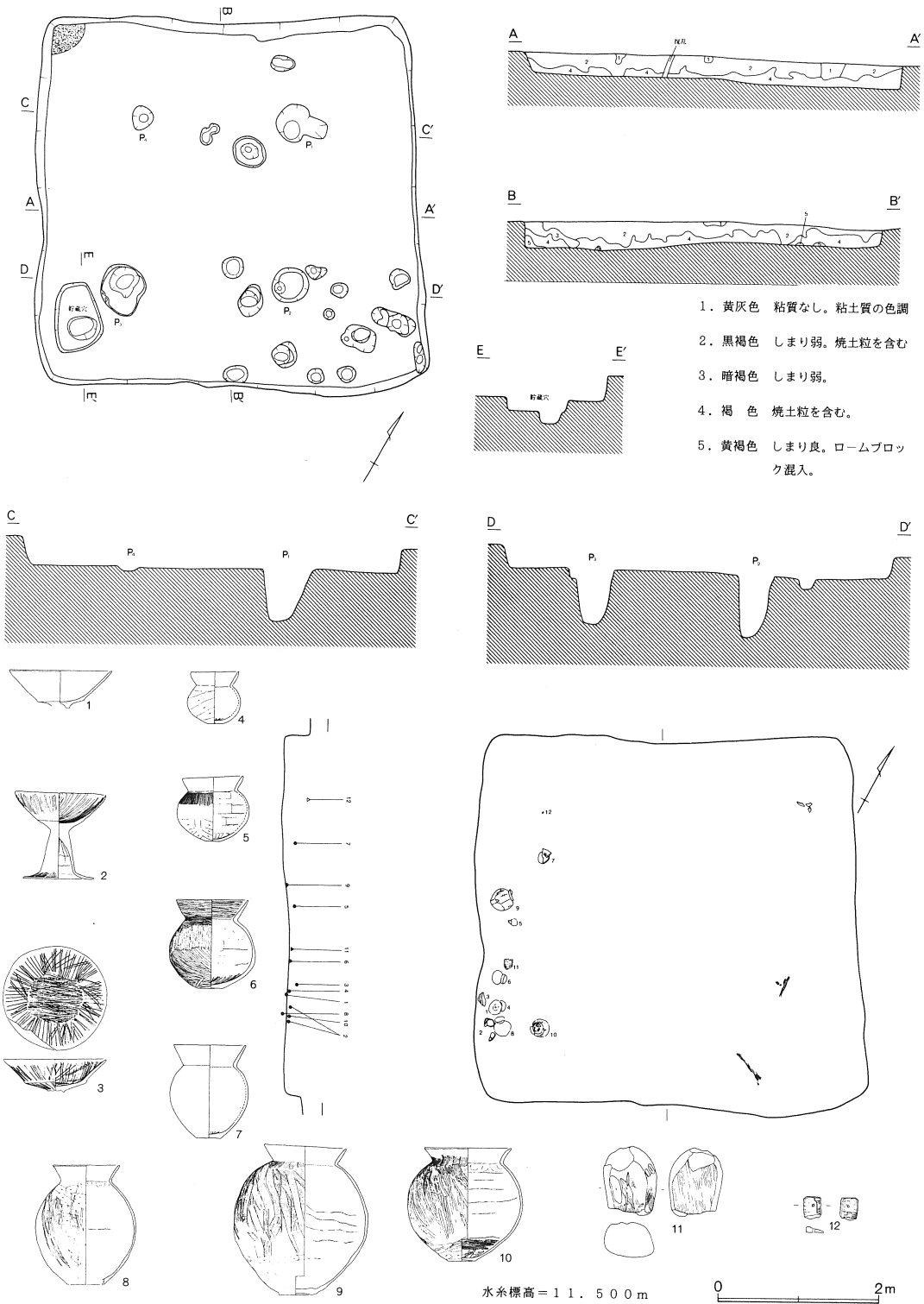
第21号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量(g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
11	115	× 79	× 26	209.21	材 (荒割)	Cグリッド上層	749
12	85	× 42	× 16	68.62	原石	Cグリッド上層	748
13	79	× 43	× 22	99.95	材 (荒割)	58	746
14	77	× 59	× 13	65.57	原石	59	747
15	63	× 33	× 16	40.65	原石	ピット	887
16	79	× 35	× 12	40.12	原石	54	745
17	直径6	× 孔径2	× 3	0.08	白玉	74	789

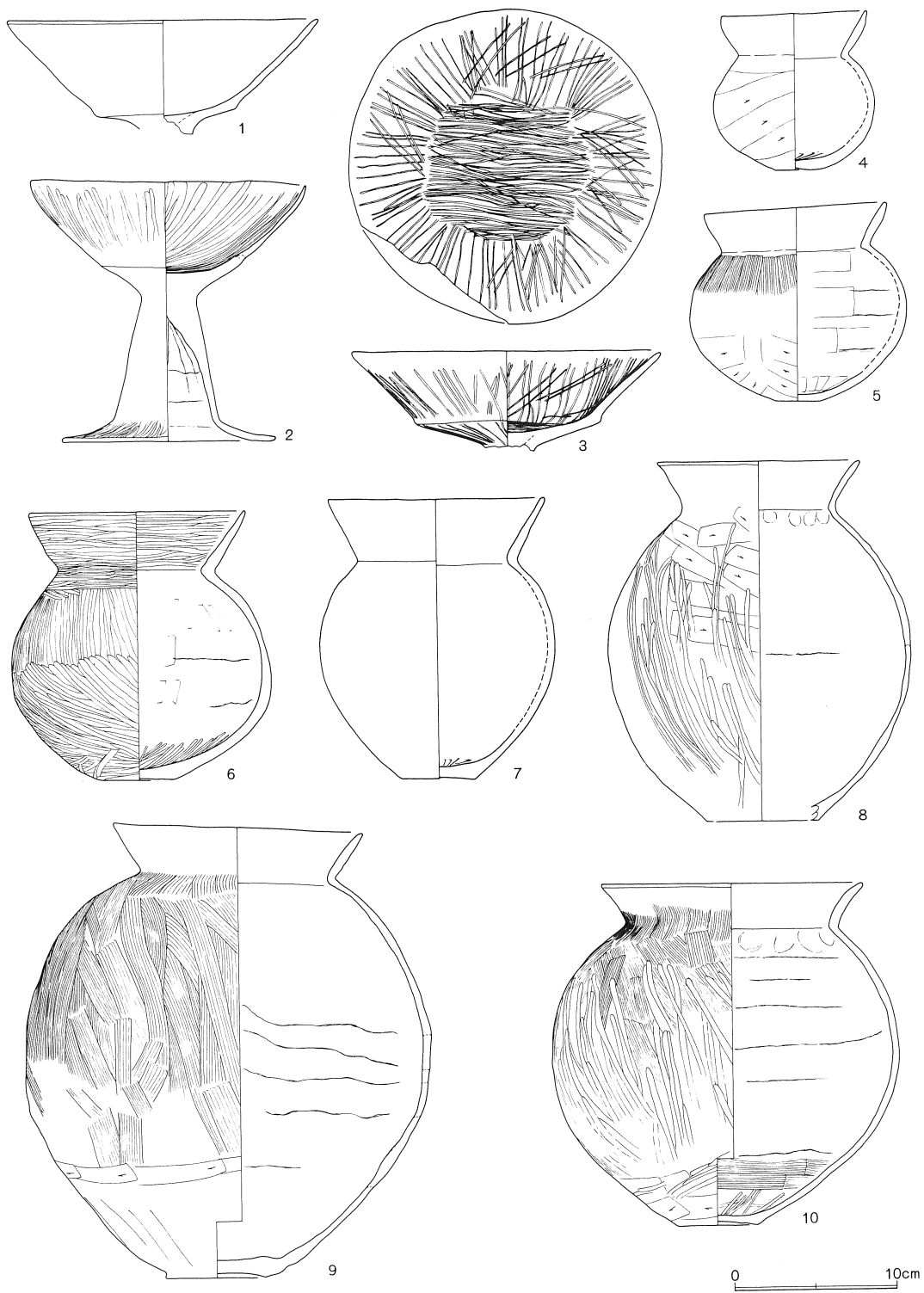
砥石 11は床面直上から出土した。被熱している。表面が一部剥離し下端は折損している。4面を使用しているが左側面は擦痕が少ない。石質は砂岩である。

第22号住居跡出土遺物 (1)

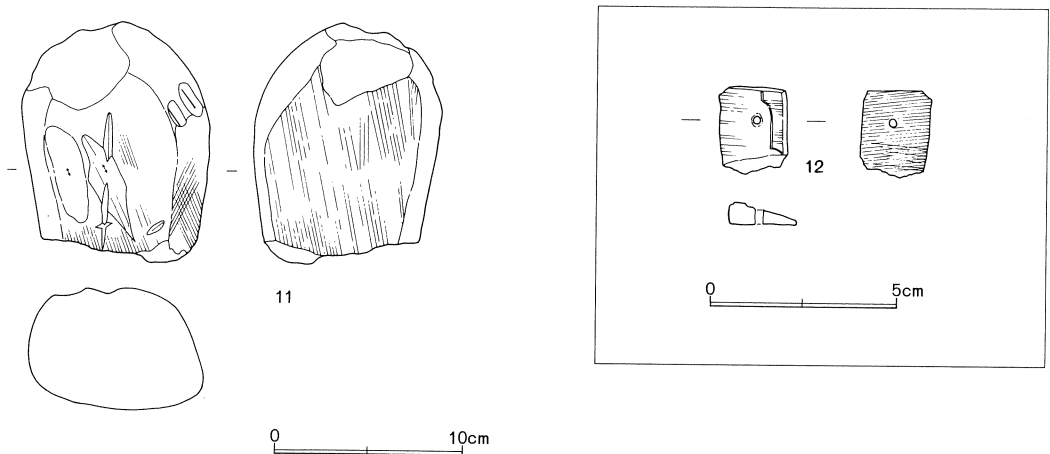
番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	高坏	口 径 19.3 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	橙褐	坏部 100	4	119	
2	〃	口 径 17.1 底 径 13.0 高 さ 16.0 最大径 —	礫 砂粒	赤褐	100	2, 3, 5	125	
3	〃	口 径 19.2 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒		坏部 90	6	126	
4	埴	口 径 9.0 底 径 2.7 高 さ 9.7 最大径 10.0	礫 雲母 砂粒	にぶい黄橙	90	5	117	
5	〃	口 径 11.4 底 径 2.8 高 さ 11.9 最大径 13.4	赤色粒 礫 砂粒	〃	90	8	118	



第54図 第22号住居跡



第55図 第22号住居跡出土遺物(1)



第56図 第22号住居跡出土遺物(2)

第22号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
6	埴	口径 13.5 底径 4.5 高さ 16.5 最大径 16.1	白色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい黄橙	100	7	121	
7	ク	口径 13.5 底径 4.5 高さ 17.3 最大径 14.6	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	10	10	120	
8	甕	口径 12.6 底径 7.0 高さ 22.2 最大径 18.8	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	60	3	124	
9	ク	口径 15.6 底径 6.2 高さ 27.7 最大径 26.2	白色粒 礫 砂粒	橙褐	90	9	123	
10	ク	口径 16.3 底径 5.0 高さ 21.1 最大径 21.6	白色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい黄橙	100	1	122	

第23号住居跡(第57図)

一部調査区外にかかる。カマド部分に攪乱が入り壊されている。平面形は方形である。97号住居跡と重複する。拡張された可能性も考えられるが、整理の段階で別住居として扱った。規模は9.0m×8.3mで確認面からの深さは24cmである。主軸方位はN-32°-Wである。壁は垂直に掘り込ま

第22号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
12	23	18	6	3.82	剝片	11	750

れている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は明確にはわからなかったが東隅のピットあるいは南西辺にある長方形の掘り込みがこれにあたると思われる。ピットはP 1、P 2が柱穴と考えられるが他はわからなかった。壁溝は南西辺で検出されたが他では検出されなかった。

カマドは北東壁中央からやや東よりに設けられていた。攪乱によって右袖のほとんどと燃烧部の半分から奥を破壊されている。袖には砂岩の切り石が用いられている。焚口の幅は34cmで奥行きは45cmが残存している。破壊された部分を入れると90cmほどと思われる。煙道はなかったものと考えられる。

遺物は床面およびカマド周辺から土師器坏および甕、刀子、石製模造品などが出土している。

砥石 13は床面から出土している。四角柱状の石を利用している。使用しているのは1面だけである。石質はチャートである。

紡錘車 30は覆土中からの出土である。上面及び下面は丁寧に研磨され平滑である。側面は5mm～1cmくらいの幅で面取りされたあと縦方向の細かい整形を行う。穿孔は上から2/3ほど行い残りを下から行っている。上面径2.8cm、下面径4.5cm、孔径0.9cm、高さ2.4cm、重量66.15g。滑石製。

鉄製品 (31 32) 31は刀子である。茎部と刀身の半分は50号住居跡出土のものと接合した。先端を欠失する。刀身は現存長9.1cm、身幅1.5cm前後、背幅4mmほどである。関は両関である。茎部は長さ5.2cm、幅1cm、背幅3mmほどで木質が良好に残存する。32は刀子の刀身部の破片である。現存長3.3cm、身幅9mm、背幅3mmである。

第23号住居跡出土遺物 (1)

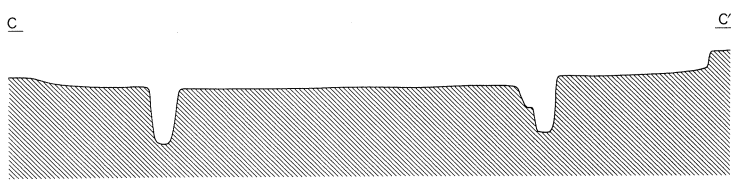
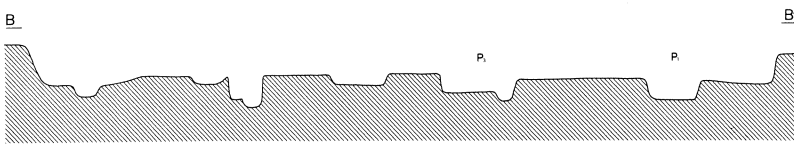
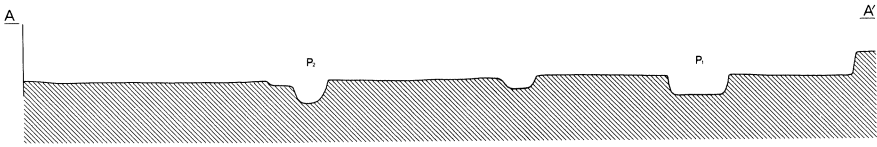
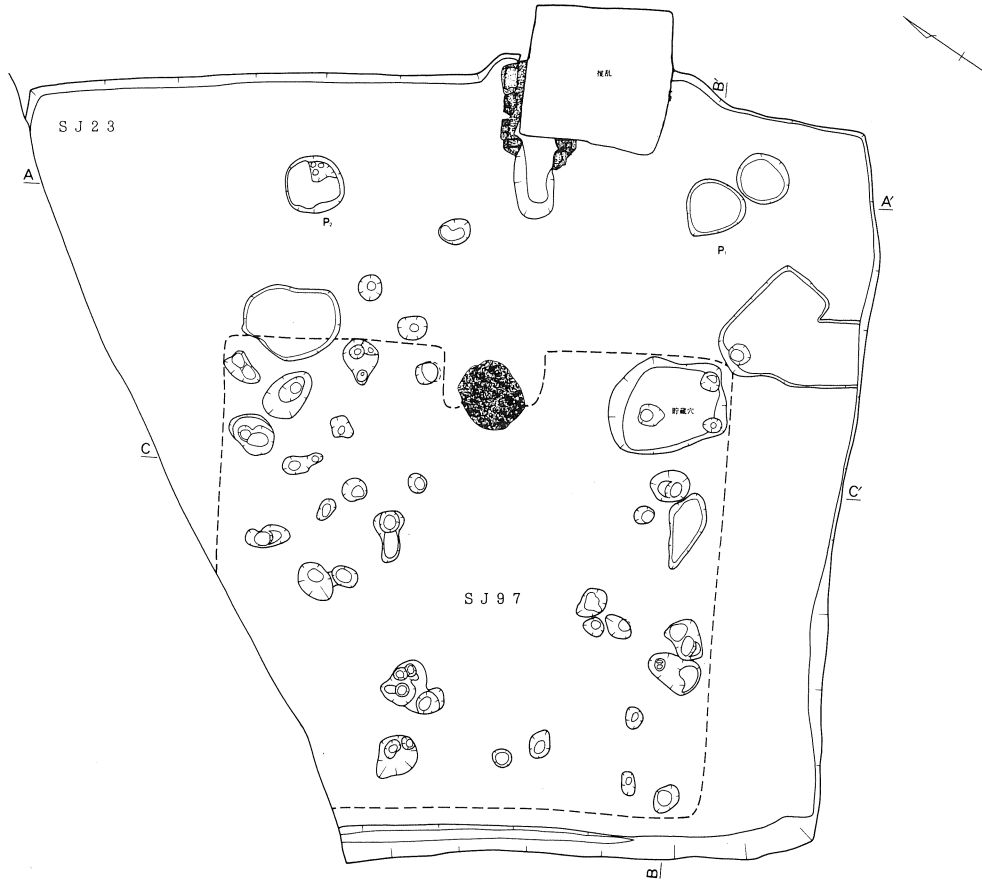
番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	杯	口 径 (11.2) 底 径 — 高 さ (5.2) 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	明赤褐	20	47, 52, カマド	139	
2	〃	口 径 12.2 底 径 — 高 さ 5.6 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	90	105, 106	137	
3	〃	口 径 12.3 底 径 — 高 さ 5.5 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	〃	100	24, 26	136	

第23号住居跡出土遺物（2）

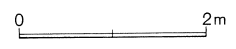
番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
4	坏	口 径 13.0 底 径 — 高 さ (5.0) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	50	28, 29	138	
5	甕	口 径 16.6 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	橙褐	口縁 50	104	131	
6	〆	口 径 (13.9) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 片岩 赤色粒 砂粒 礫 雲母	明黄褐	口縁 20	6	133	
7	〆	口 径 15.7 底 径 — 高 さ — 最大径 18.8	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	橙褐	80		130	
8	〆	口 径 — 底 径 7.5 高 さ — 最大径 19.3	赤色粒 礫 砂粒	明黄褐	50	85, 95, 96, 99	132	
9	〆	口 径 — 底 径 4.5 高 さ — 最大径 —	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	にぶい赤褐	底部 50	40	134	
10	甕	口 径 9.1 底 径 6.4 高 さ 12.7 最大径 13.0	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	90	3, 4, 33	128	
11	甗	口 径 (21.7) 底 径 8.4 高 さ 28.4 最大径 (19.8)	赤色粒 砂粒 礫 角閃石 雲母	〆	50	49, 50, 51	129	
12	甕	口 径 — 底 径 8.1 高 さ — 最大径 29.4	白色粒 片岩 赤色粒 砂粒 礫 雲母	明黄褐	60	9, 10, 12, 15, 16	127	

第97号住居跡（第57図）

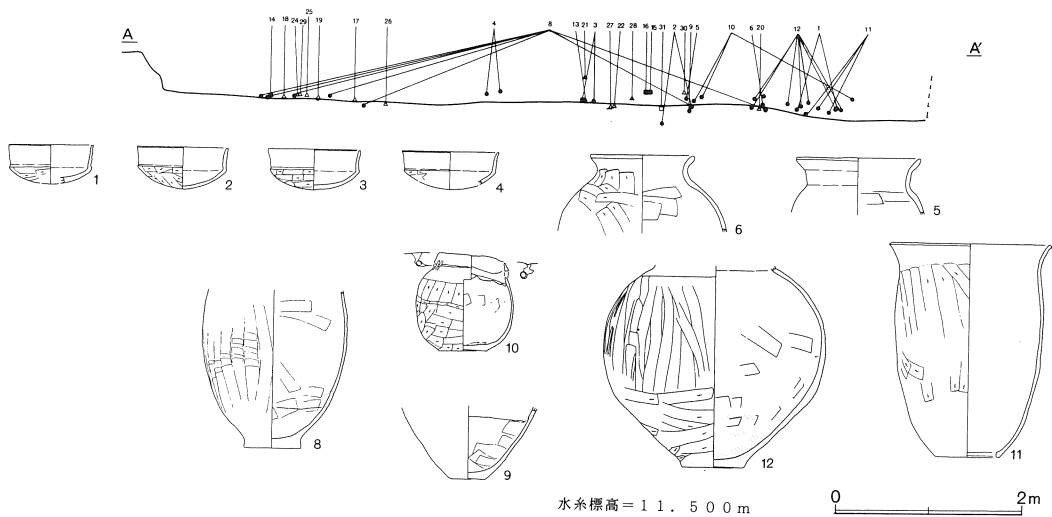
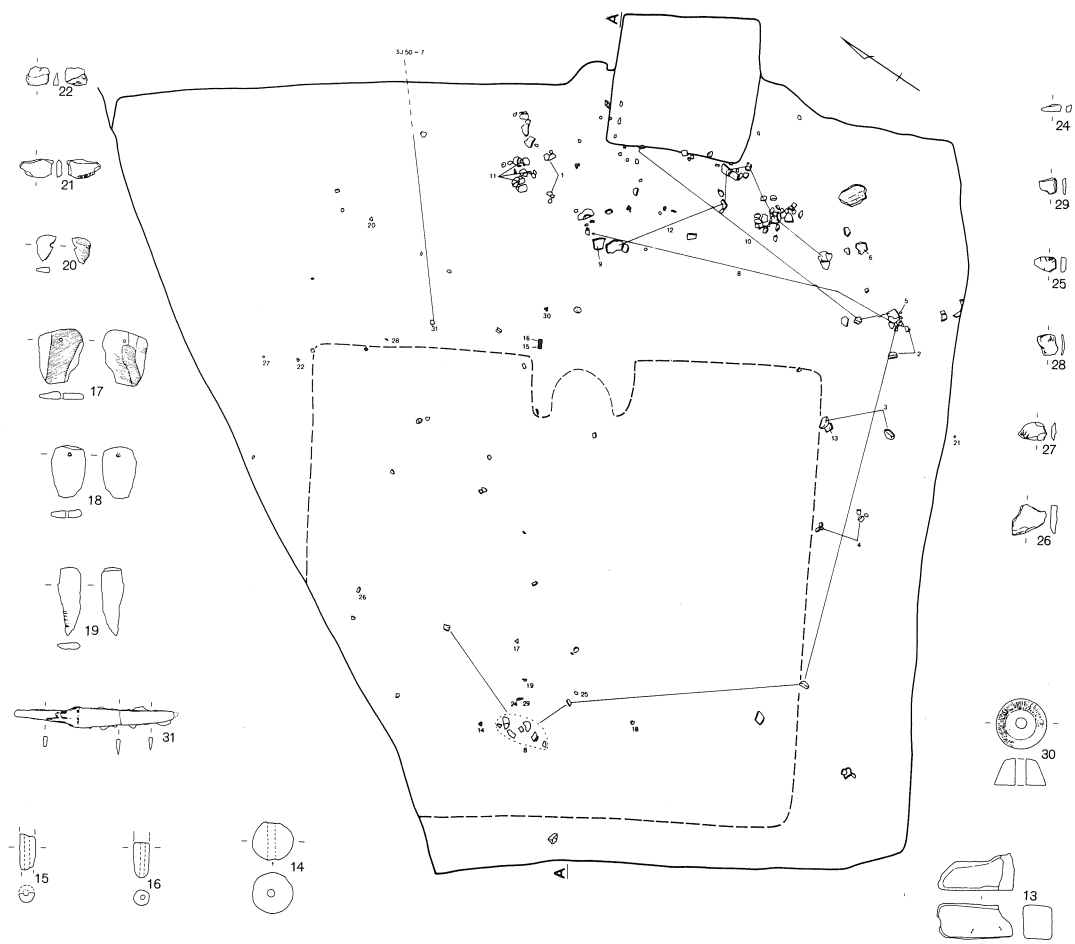
23号住居跡と重複する。規模は推定で2.5m～2.7mと思われる。貯蔵穴は東隅に検出された。ピットが複数検出されたがどれが柱穴になるかは不明である。



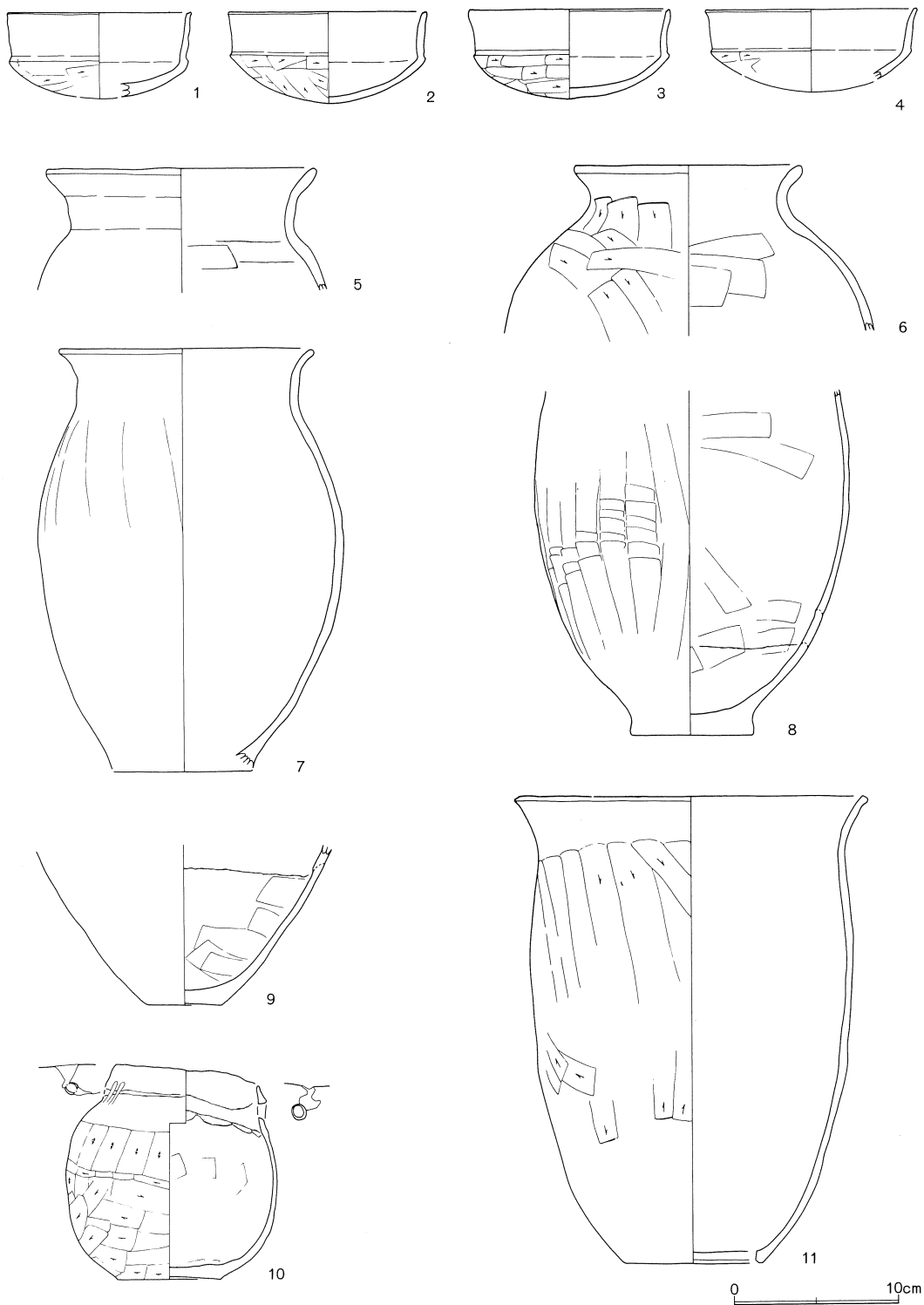
水系標高 = 11.500 m



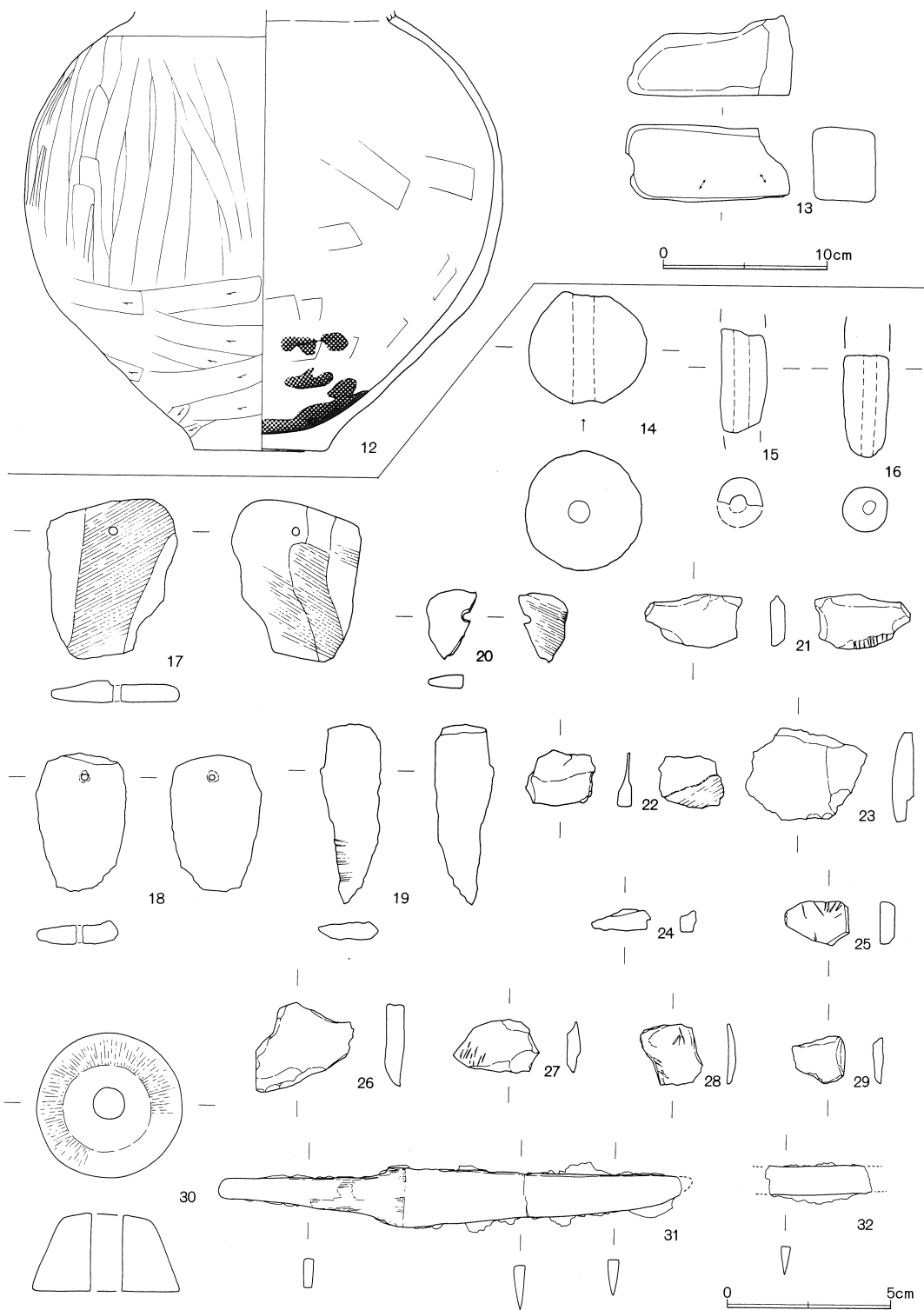
第57図 第23・97号住居跡(1)



第58図 第23・97号住居跡(2)



第59图 第23号住居跡出土遺物(1)



第60图 第23号住居跡出土遺物(2)

第23号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
14	—	3.1	0.6	36.29	完形	94	615
15	(3.2)	1.4	0.4	(3.06)	1/2	60	617
16	(3.1)	1.4	0.4	(5.00)	1/2	60	616

第23号住居跡出土石製模造品計測表

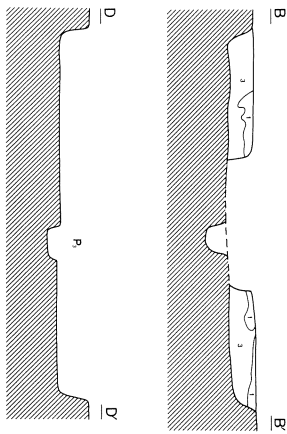
番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
17	47	× 40	× 7	27.45	剣形?	102	754
18	42	× 28	× 6	11.80	破損品 (剣形)	92	753
19	55	× 18	× 5	8.44	剣形?	88	752
20	20	× 14	× 3	1.90	破損品 (剣形)	69	751
21	28	× 16	× 4	3.68		23	896
22	20	× 17	× 4	1.92	剥片	74	893
23	35	× 28	× 6	7.41	剥片	床直上	920
24	17	× 7	× 5	0.64	剥片	89	890
25	19	× 13	× 4	1.99	剥片	91	889
26	29	× 25	× 5	5.75	剥片	81	892
27	26	× 15	× 4	2.30	剥片	73	894
28	18	× 17	× 2	1.51	剥片	65	895
29	16	× 14	× 3	1.00	剥片	87	891

カマドは燃烧部底面の焼土だけが検出された。

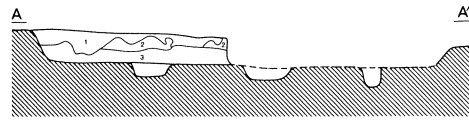
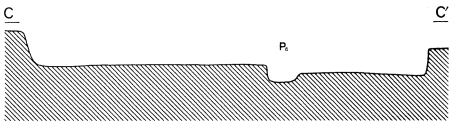
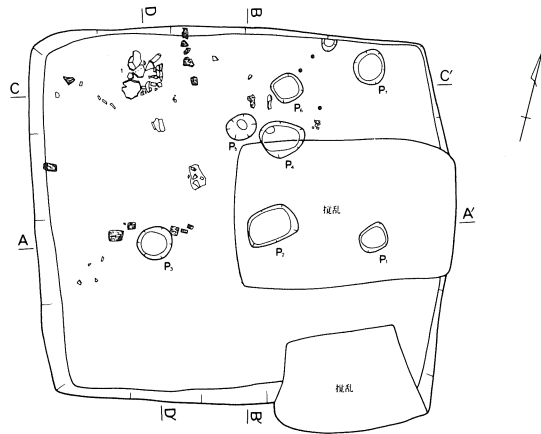
遺物は図示できるものはなかった。

第24号住居跡 (第61図)

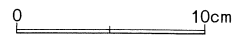
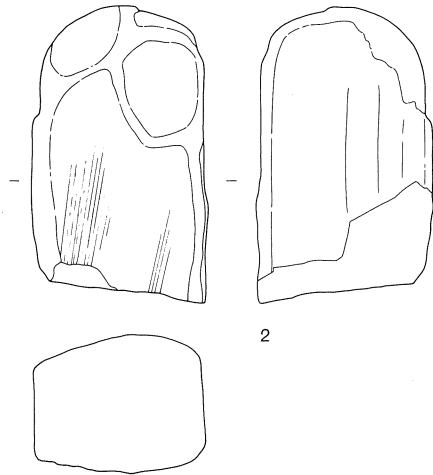
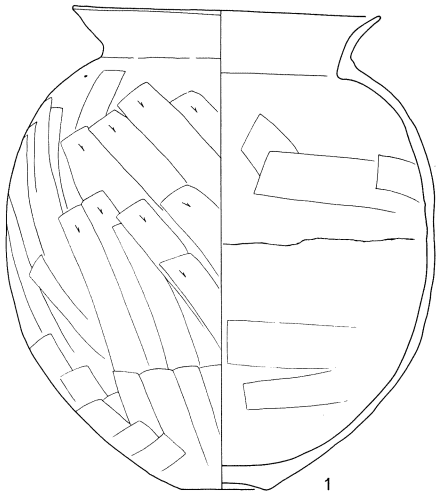
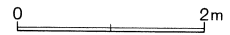
平面形は方形である。攪乱によって東側中央部分と南西部分を壊されている。規模は4.3m×4.0mで確認面からの深さは32cmである。主軸方位は北辺でN-73°-Eである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は不明である。ピットはP1～P7が検出された。



1. 黒褐色 しまり臭。焼土粒、炭化物を多量含む。
2. 黒褐色 しまり臭。焼土粒、炭化物多量含む。
3. 黒褐色 焼土粒・炭化粒少ない。



水糸標高=11.200m



第61図 第24号住居跡出土遺物

P 1、P 2 が軸にたいして平行に並ぶことから 2 本柱穴と考えておきたい。壁溝はなかった。

炉は検出されなかった。

遺物は図示できるものは少ない。

砥石 2 は角柱状の石を利用している。折損している。わずかに擦痕が認められるがあるいは台石としたほうがいいのかもしい。

第24号住居 出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	甕	口 径 16.5 底 径 4.5 高 さ 25.4 最大径 22.8	赤色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	90		141	

第25号住居跡 (第62図)

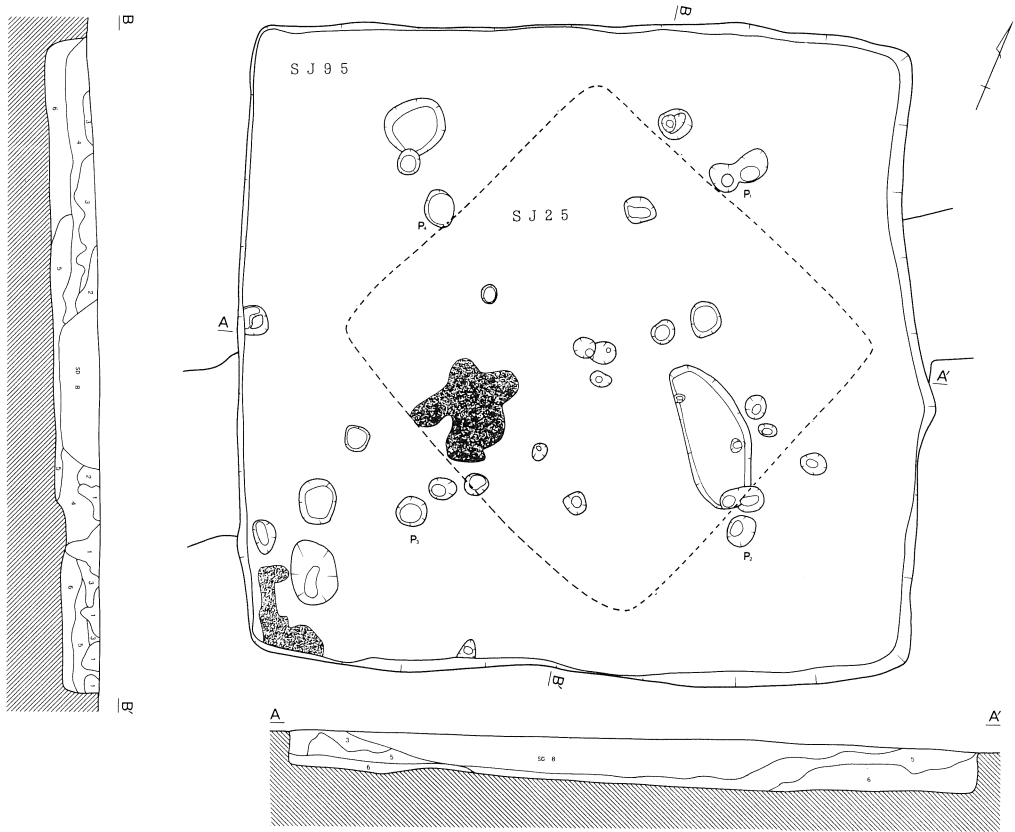
8号溝、95号住居跡と重複する。95号住居跡より新しく8号溝より古い。調査時には8号溝による重複部分が大きく一軒の住居として認識していたが、整理の段階で95号住居跡と分離した。従って遺物は全て25号住居跡で取りあげられている。住居跡の平面形はわからないがカマドの位置、遺物の分布状況等からみてほぼ方形をしていたものと思われる。規模は一辺が4.3m前後であったと推定される。主軸方位はN-22°-Wと推定した。貯蔵穴、柱穴などは不明である。壁溝もなかったものと思われる。

カマドは南辺に作られていたと思われる。大半を8号溝によって壊されており燃焼部の底面がかなり壊れて検出されただけである。

遺物はカマド左側を中心に坏、甕などが一括して出土した。

第25・95号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 13.0 底 径 - 高 さ 6.0 最大径 -	赤色粒 砂粒	明赤褐	80	42, 51, 54, 55	165	
2	〃	口 径 13.2 底 径 - 高 さ 6.2 最大径 -	白色粒 砂粒	〃	100	37, 38, 40	166	
3	〃	口 径 13.6 底 径 - 高 さ 6.1 最大径 -	白色粒 砂粒	〃	90	13, 43, 44, 57	164	



- 1. 黄色 しまり弱。砂質。焼土、炭化物含む
- 2. 黄褐色 焼土粒、炭化物を含む。
- 3. 黒褐色 しまり良。焼土粒、炭化物を含む。

- 4. 黒褐色 しまり弱。焼土粒、炭化物を含む。
- 5. 褐色 しまり良。焼土粒多。炭化物混入。
- 6. 暗褐色 しまり良。ローム混。汚れている。

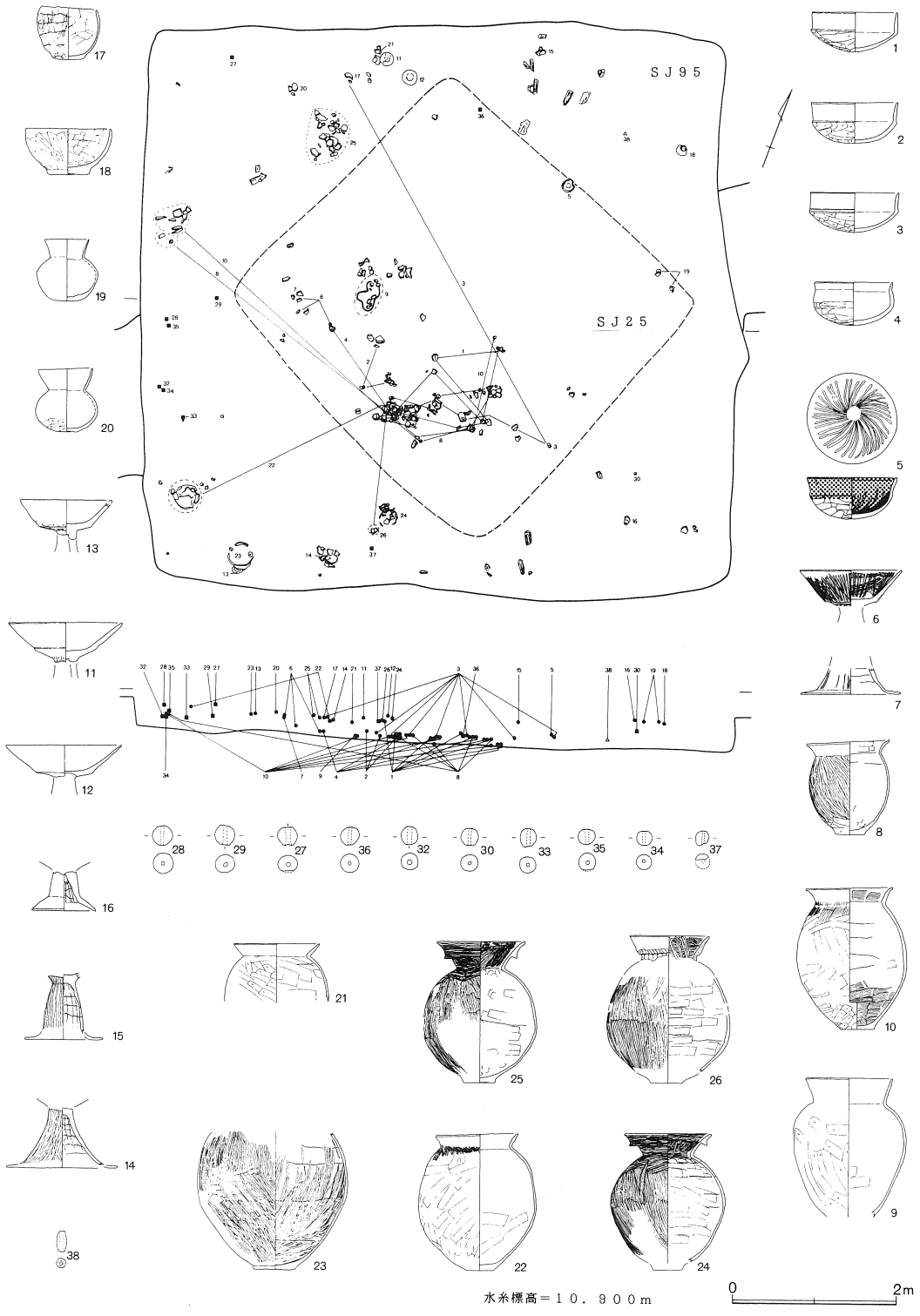
水系標高 = 10.900 m

0 2m

第62図 第25・95号住居跡(1)

第25・95号住居跡出土遺物(2)

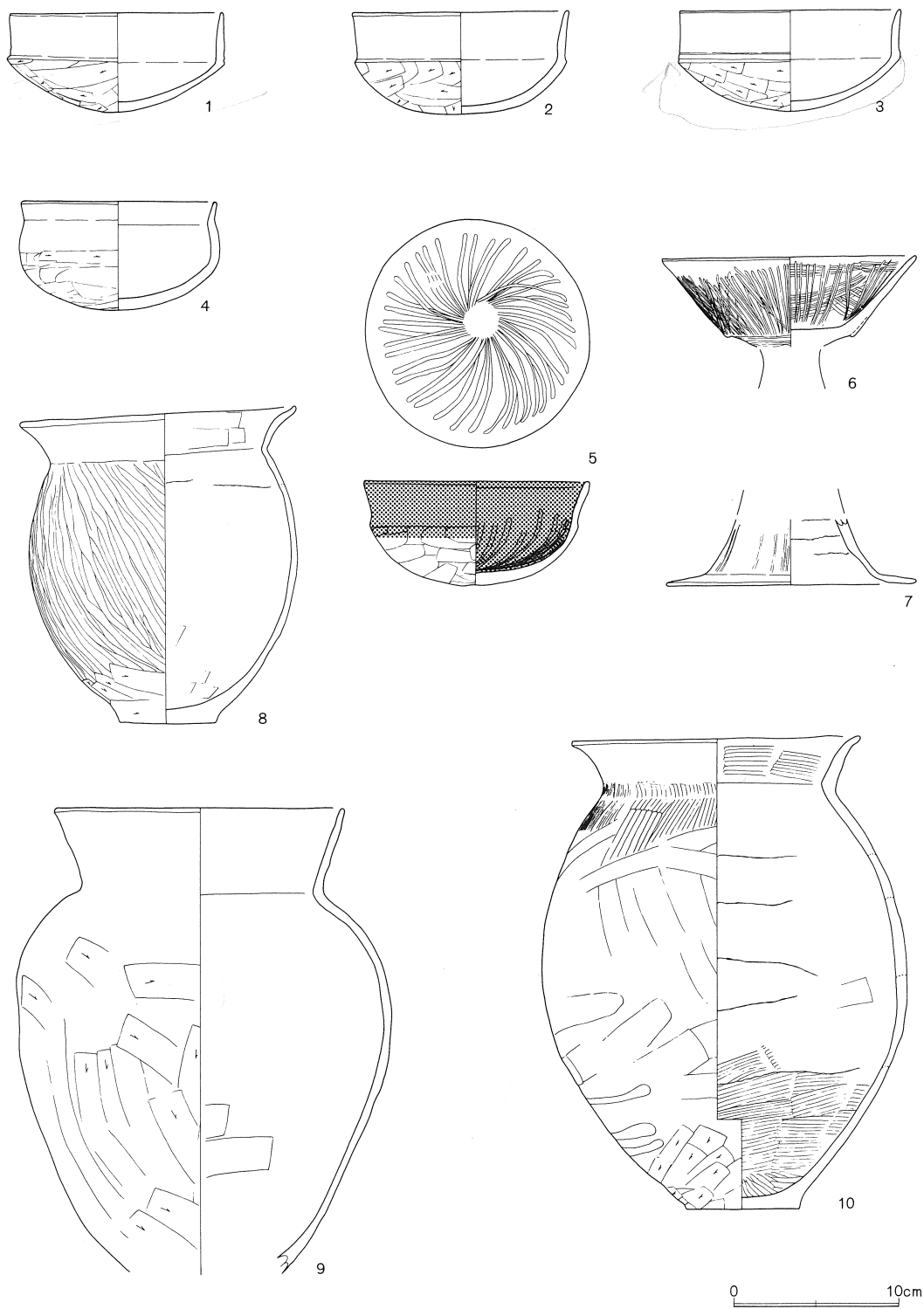
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
4	碗	口径 11.9 底径 — 高さ 6.6 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	明赤褐	90	25, 56, 61, 63	167	
5	シ	口径 13.8 底径 — 高さ 6.3 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		90	65	157	



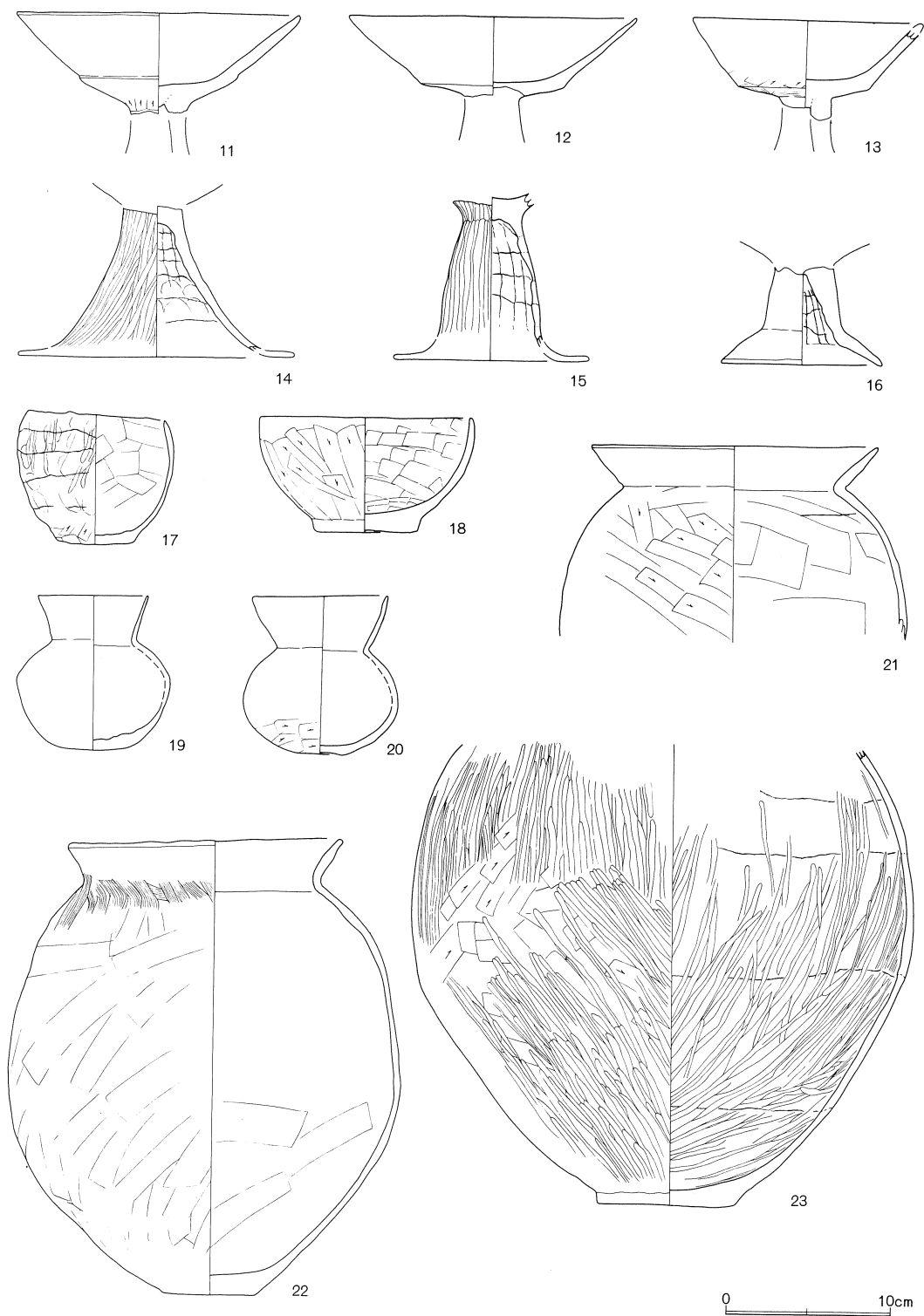
第63图 第25·95号住居跡(2)

第25・95号住居跡出土遺物（3）

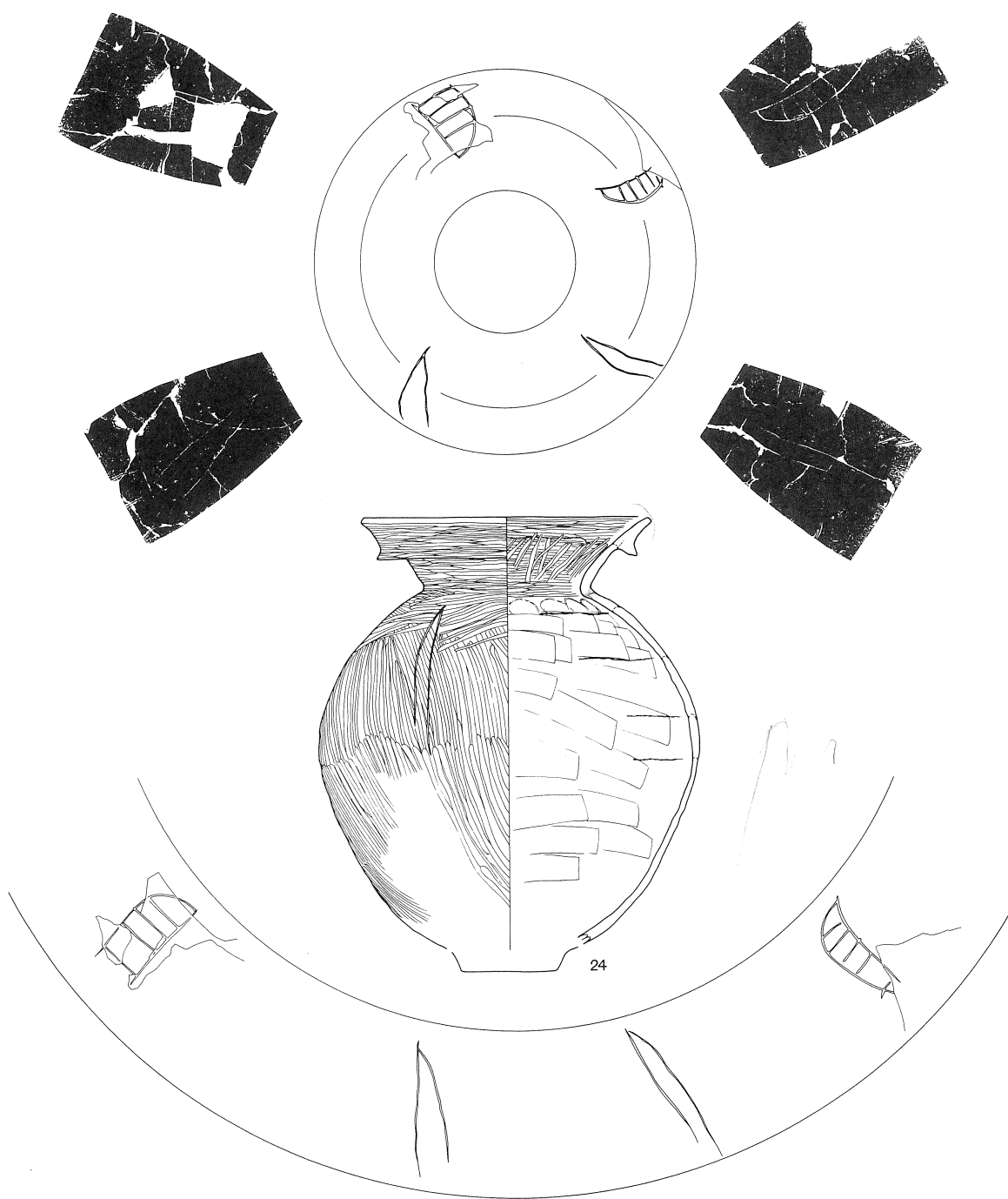
番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
6	高坏	口 径 (15.6) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒	橙褐	坏部 40	25, 26, 27	158	
7	〃	口 径 — 底 径 (15.4) 高 さ — 最大径 —	砂粒	〃	脚部 40	26, B覆土	161	
8	甕	口 径 17.0 底 径 5.9 高 さ 18.8 最大径 16.5	白色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	90	11, 44, 54, 58	147	
9	甗	口 径 17.8 底 径 — 高 さ 28.2 最大径 22.4	白色粒 雲母 赤色粒 砂粒 礫 角閃石	にぶい黄橙	80	28	144	甗転用
10	甕	口 径 (17.7) 底 径 7.0 高 さ 28.6 最大径 22.4	礫 雲母 砂粒	橙褐	90	11, 42, 44, 45	145	
11	高坏	口 径 17.3 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	坏部 100	32	148	
12	〃	口 径 17.7 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	坏部 100	33	149	
13	〃	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	坏部 40	86	155	
14	〃	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明褐	脚部 70	92	159	
15	〃	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 砂粒	橙褐	脚部 40	89	163	



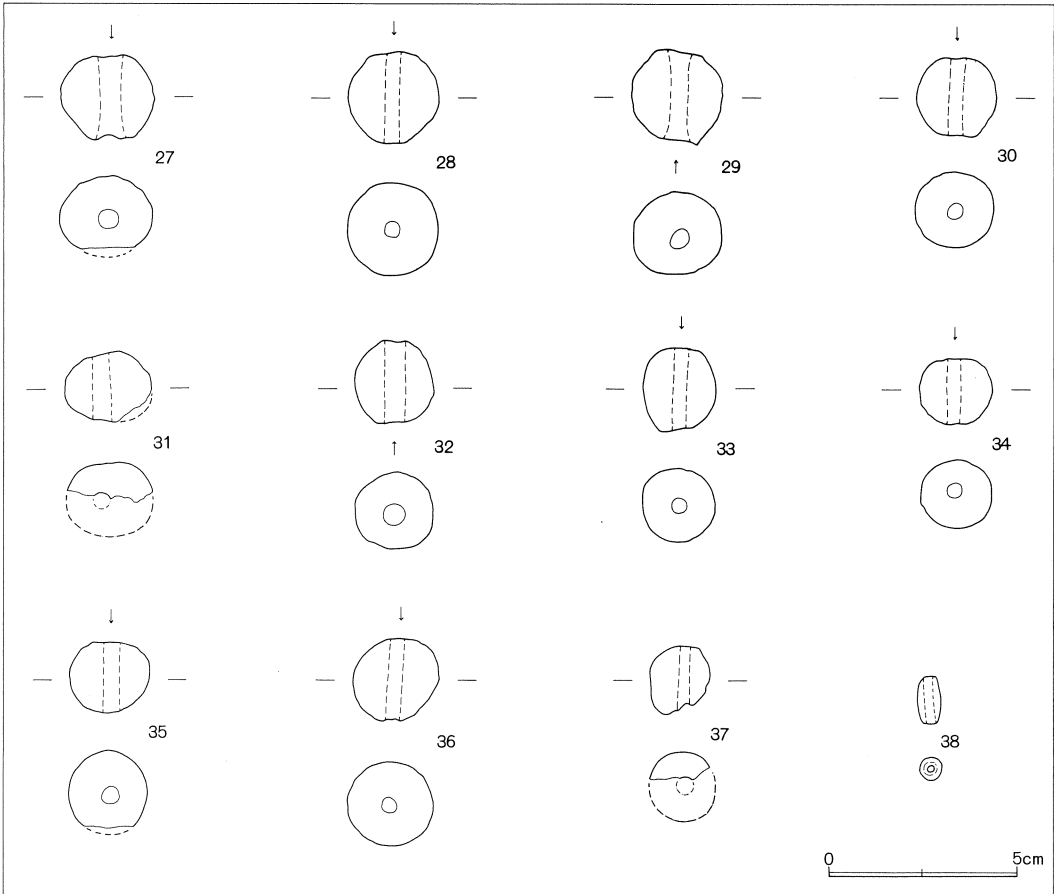
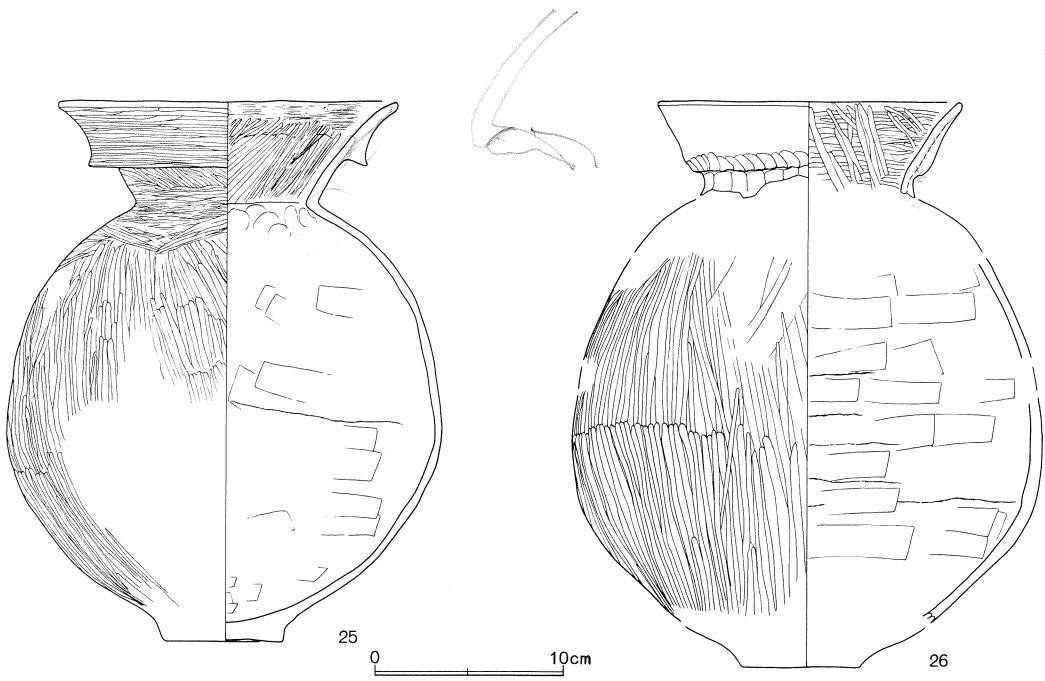
第64图 第25·95号住居跡出土遺物(1)



第65図 第25・95号住居跡出土遺物(2)



第66図 第25・95号住居跡出土遺物(3)



第67图 第25·95号住居跡出土遺物(4)

第25・95号住居跡出土遺物（4）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
16	高坏	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明褐	脚部 60	76	160	
17	埴	口径 8.4 底径 4.7 高さ 7.9 最大径 9.5	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	70	13	153	
18	〃	口径 (13.1) 底径 6.4 高さ 7.0 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	50	69	151	
19	埴	口径 (6.8) 底径 (2.7) 高さ 9.4 最大径 (9.3)	赤色粒 礫 砂粒	明褐	30	78, 80	150	
20	〃	口径 8.8 底径 2.7 高さ 9.6 最大径 9.5	礫 砂粒	明赤褐	80	14	154	
21	甕	口径 (17.6) 底径 — 高さ — 最大径 21.2	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	口縁 30	91	156	
22	〃	口径 16.7 底径 5.7 高さ 27.7 最大径 24.1	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	90	42	142	
23	〃	口径 — 底径 8.5 高さ — 最大径 30.8	赤色粒 礫 砂粒	赤褐	40	20	143	
24	壺	口径 17.5 底径 — 高さ — 最大径 23.5	赤色粒 礫 砂粒	〃	60	52, 53	152	
25	〃	口径 17.2 底径 6.3 高さ 28.6 最大径 23.3	赤色粒 礫 砂粒	〃	60	15, 16, A覆土, 表土	146	

第25・95号住居跡出土遺物（5）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
26	壺	口径 (16.2) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	口縁 20	11, 51	162	

第25・95住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
27	—	2.5	0.5	(8.75)	少欠	12	621
28	—	2.4	0.4	12.30	完形	9	625
29	—	2.4	0.5	10.53	完形	19	618
30	—	2.1	0.4	7.60	完形	77	627
31	—	—	—	(3.19)	1/2	D上面	622
32	—	2.1	0.6	7.37	完形	7	619
33	—	2.0	0.4	7.43	完形	5	626
34	—	1.9	0.4	5.36	完形	7	628
35	—	2.	0.4	(7.15)	少欠	8	620
36	—	2.3	0.4	8.96	完形	35	624
37	—	—	—	(3.00)	1/5	46	623

第25・95号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法量 (mm)			重量 (g)	種類	註記番号	実測番号
	直径	× 孔径	× 厚さ				
38	6	× 2	× 12	0.63		68	790

第95号住居跡（第62図）

25号住居跡、8号溝と重複する。これらのなかでは一番古い。平面形は方形である。規模は7.0 m×6.8 mで確認面からの深さは25 cmである。主軸方位は北辺でN-69°-Eである。壁は垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。壁溝は検出されなかった。

南隅に焼土が検出された。22号住居跡と同様のものであるが具体的な施設についてはわからなかった。

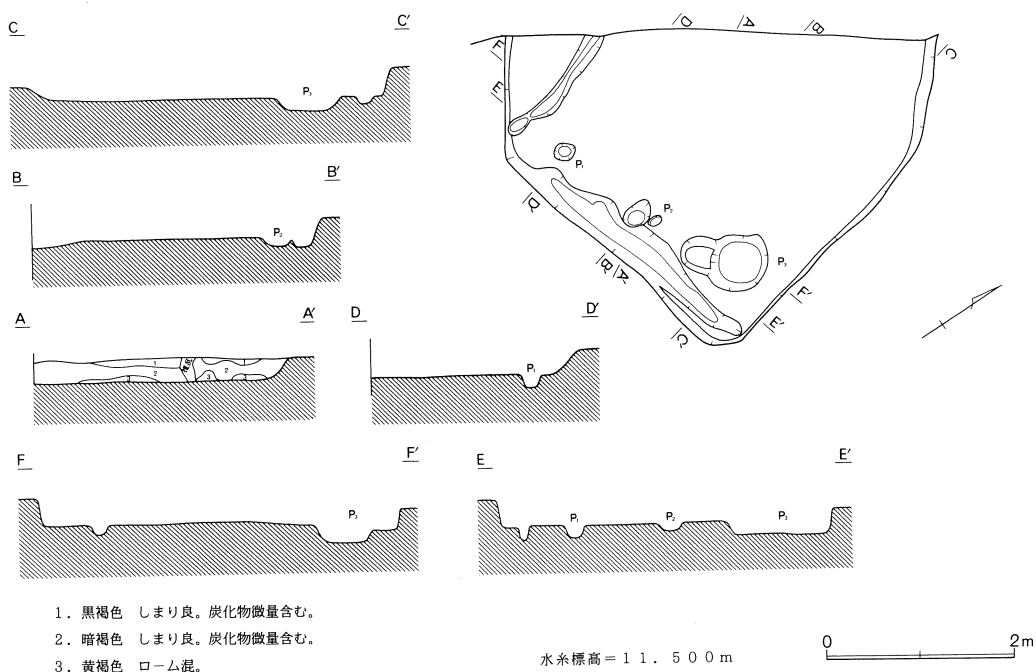
遺物は壁際を中心に壺、高坏等がまとまって出土している。

第26号住居跡（第68図）

一部が調査区外にかかる。平面形は不整形であり住居跡の重複あるいは拡張があるのかもしれない。規模は南辺で3.9mである。確認面からの深さは20cmである。主軸方位は東辺で $N-13^{\circ}-W$ である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴はP3が該当するかとおもわれる。直径60cmほどで深さは20cmである。ピットはP1、P2が検出された。主柱穴は不明である。壁溝は南辺部分と西側にこれにほぼ直角に検出された。

カマドなどは検出されなかった。

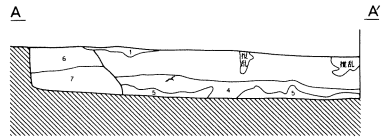
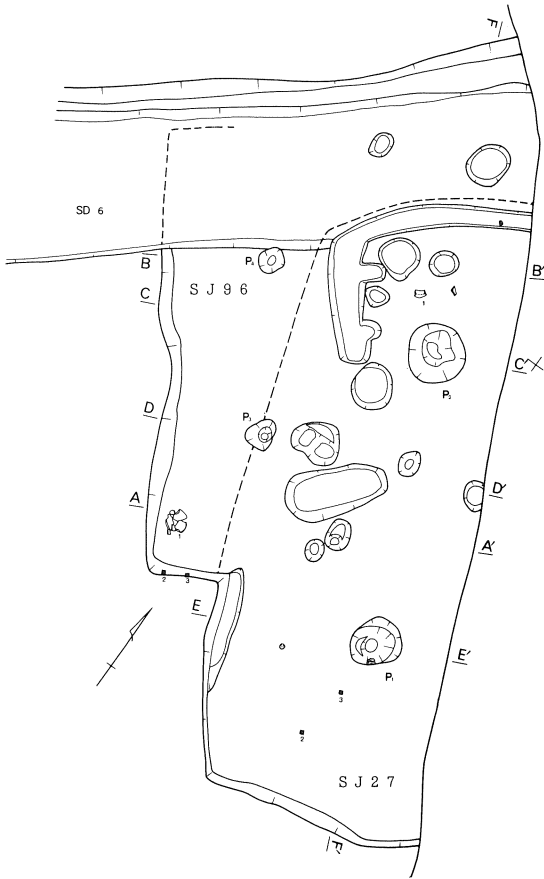
遺物は出土しなかった。



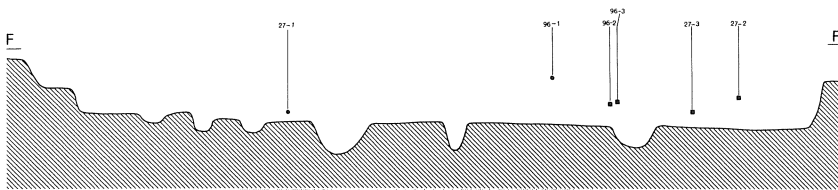
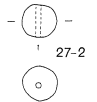
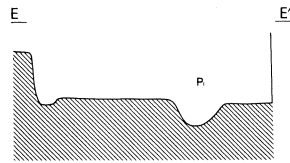
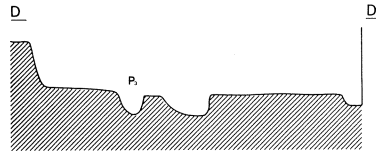
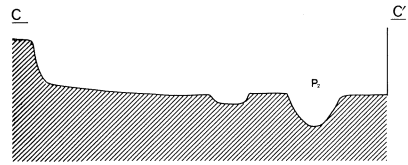
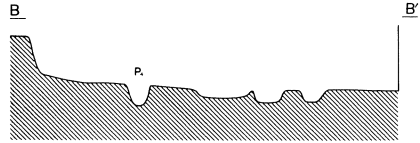
第68図 第26号住居跡

第27号住居跡（第69図）

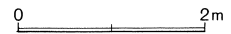
約半分ほどが調査区外にかかる。96号住居跡、6号溝と重複する。96号住居跡より新しく6号溝より古い。平面形は方形と思われる。規模は調査区の壁際で7mである。南辺では2.5m検出されている。確認面からの深さは50cmである。主軸方位は $N-25^{\circ}-E$ である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はわずかに東側に傾斜しているがほぼ平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1、P2が主柱穴と考えられる。壁溝は西辺及び北辺で検出された。西辺では南の隅及び中央部分で切れ、北側は内側に入り込んでいる。北辺では調査区外に続く。



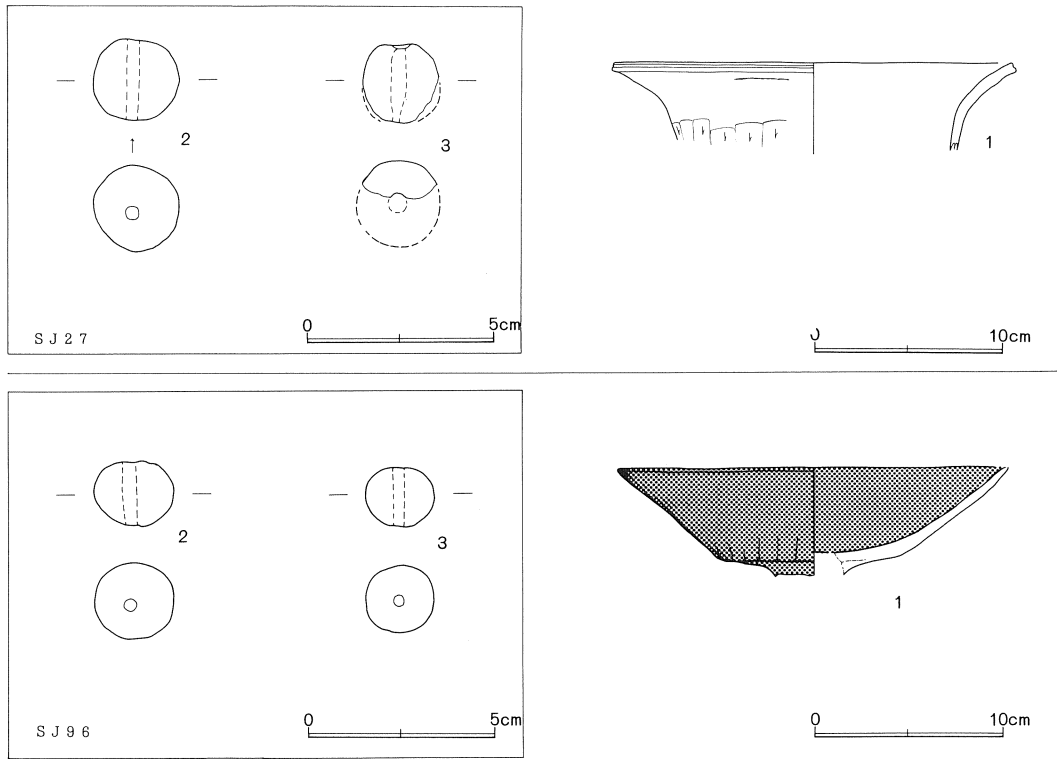
1. 灰褐色 しまり良。砂質。焼土粒多。炭化物少量含む
2. 黒褐色 しまり良。焼土、炭化粒微量混入。
3. 黒褐色 しまり良。焼土粒、炭化物微量混入。
4. 暗褐色 しまり良。焼土粒、炭化物微量混入。
5. 黄褐色 ローム含む。汚れあり。
6. 暗褐色 しまり良。
7. 褐色 ロームブロック多。



水系標高 = 11.000 m



第 69 図 第 27・96 号住居跡



第70図 第27・96号住居跡出土遺物

カマドは検出されなかった。

遺物は甕の口縁部破片、土玉などが床面からやや浮いた状態で出土している。

第27号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	甕	口径 (21.3) 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	口縁 30	3	169	

第96号住居跡 (第69図)

27号住居跡、6号溝と重複する。これらのなかで一番古い。南の角及び西辺が検出された。6号溝の対岸には検出されないため住居跡の北辺は6号溝によって完全に壊されているものと思われる。平面形は方形になるものと思われる。規模は西辺の残存部分で3.5mである。確認面からの深さは40cmである。軸方位は西辺を基準にしてN-30°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。ピットはP3、P4が柱穴と考えられる。貯蔵穴、壁溝、カマドなどは検出されなかった。

遺物は南隅から高坏、土玉が出土している。

第27号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
2	—	2.3	0.3	8.19	完形	10	630
3	—	—	—	(3.34)	1/3	9	632

第96号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	高坏	口径 21.0 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒		坏部 100	4	168	

第96号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
2	—	2.1	0.3	5.70	完形	5	629
3	—	1.8	0.3	4.37	完形	6	631

第28号住居跡 (第71図)

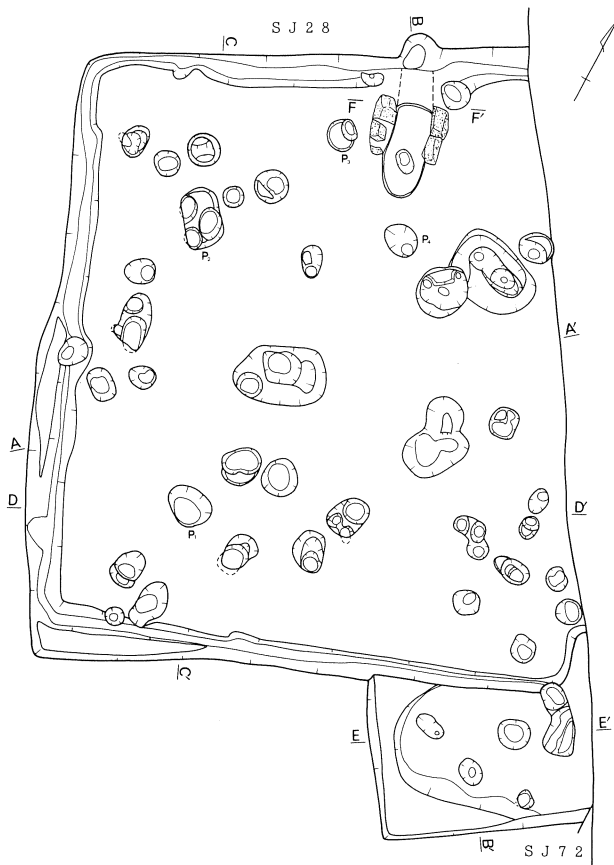
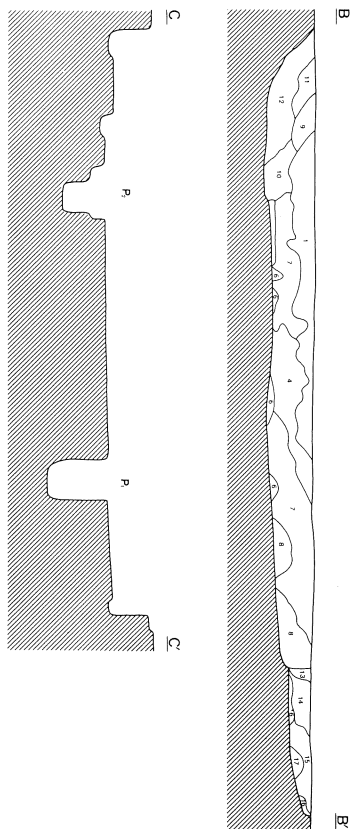
一部が調査区外にかかる。72号住居跡と重複する。72号住居跡より新しい。平面形は方形になるものと思われる。南東部分の内側への張り出しは入口等の何等かの施設ではないかと考える。規模は西辺が6.5mで南辺は5.9m確認されている。確認面からの深さは40cmである。主軸方位はN-23°-Wである。壁は西辺及び南辺の角に段をもつが他はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はやや起伏をもつ。貯蔵穴は検出されなかった。調査区外にあるものと思われる。ピットは複数検出された。ほとんどが覆土に黒褐色土が入り込んでいる。P1、P2が支柱穴になるものと思われる。P3、P4は上面に焼土粒および焼土ブロックを含む。壁溝は南東の張りだし部分を除いて全周するようである。

カマドは北壁ほぼ中央と思われる所に設けられていた。袖には砂岩の切り石が用いられていた。焚口の幅は40cmで奥行きは155cmである。煙道は検出されなかったが、住居外へ若干張り出す部分が煙出しになるものと思われる。

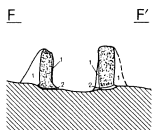
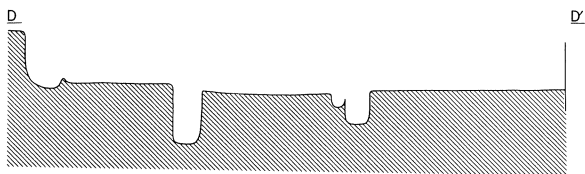
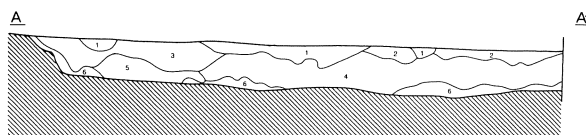
遺物は坏および土玉などが少量出土している。

砥石 4は覆土上面からの出土である。円礫状のものが破損したのを使っている。左側面は直線的に研ぎ減りしている。

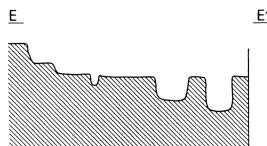
鉄製品 14は破損しているがコ字状になるものと思われる。用途は不明である。類例は近くでは御林遺跡で出土している。



1. 黒色 やや粘性あり。
2. 明褐色 しまり弱。
3. 黒褐色 しまり弱。わずかにローム粒混入。
4. 暗褐色 しまり弱。全体にローム粒を多量含赤色土、黒色土粒若干含む。
5. 黒褐色 若干しまり良。ローム粒・焼土粒含
6. 明褐色 ロームブロックを多量含む。
7. 黒褐色 ロームしみ状に含む。
8. 黒褐色 しまり良。ローム粒・黒色粒含む。
9. 黒褐色 焼土ブロック(2cm)多量含む。
10. 黒褐色 カマド袖石片(3~5cm)多量含
11. 暗赤褐色 焼土、袖石片を多量に含む。
12. 赤褐色 焼土、炭化物を多量に含む。
13. 黒褐色 やや粘性あり。
14. 黒色 粘性あり。1層類似。
15. 黒褐色 しまり弱。ローム粒微量含む。
16. 明褐色 ローム崩土。
17. 黒褐色 しまり良。15層に近いが混入物なし



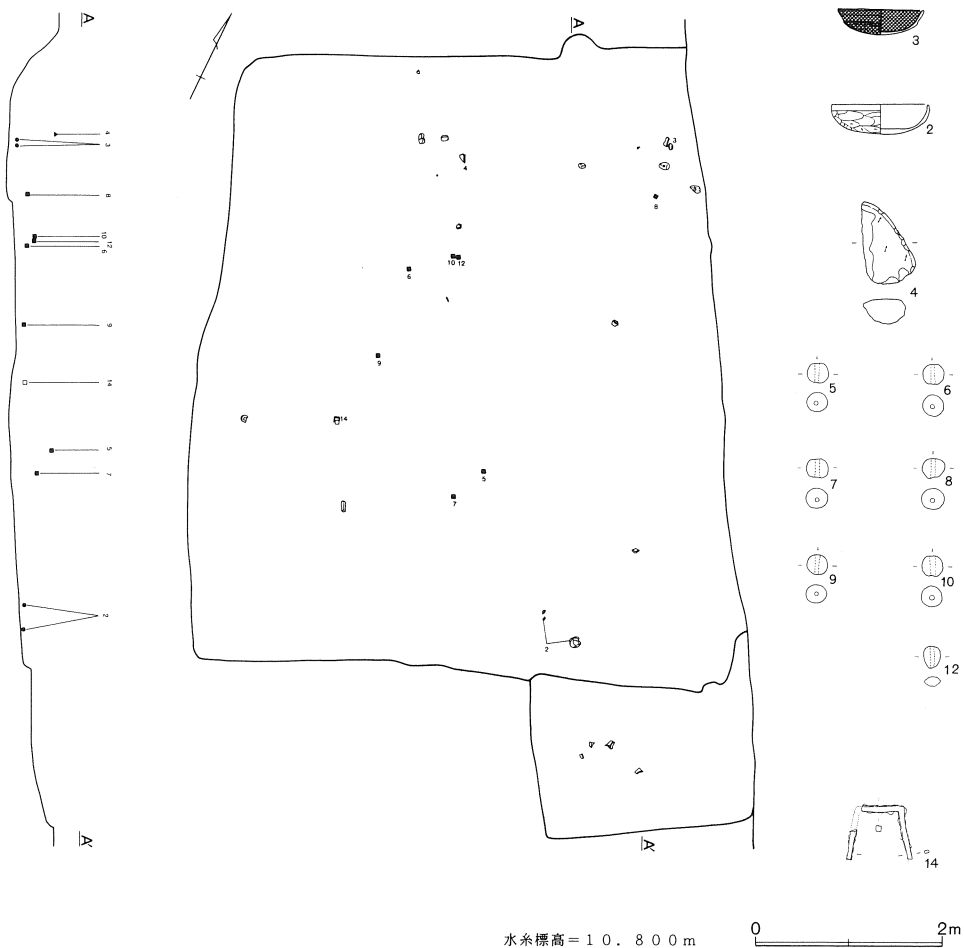
1. 黒褐色
2. 暗褐色 焼土混入。



水糸標高=10.800m

0 2m

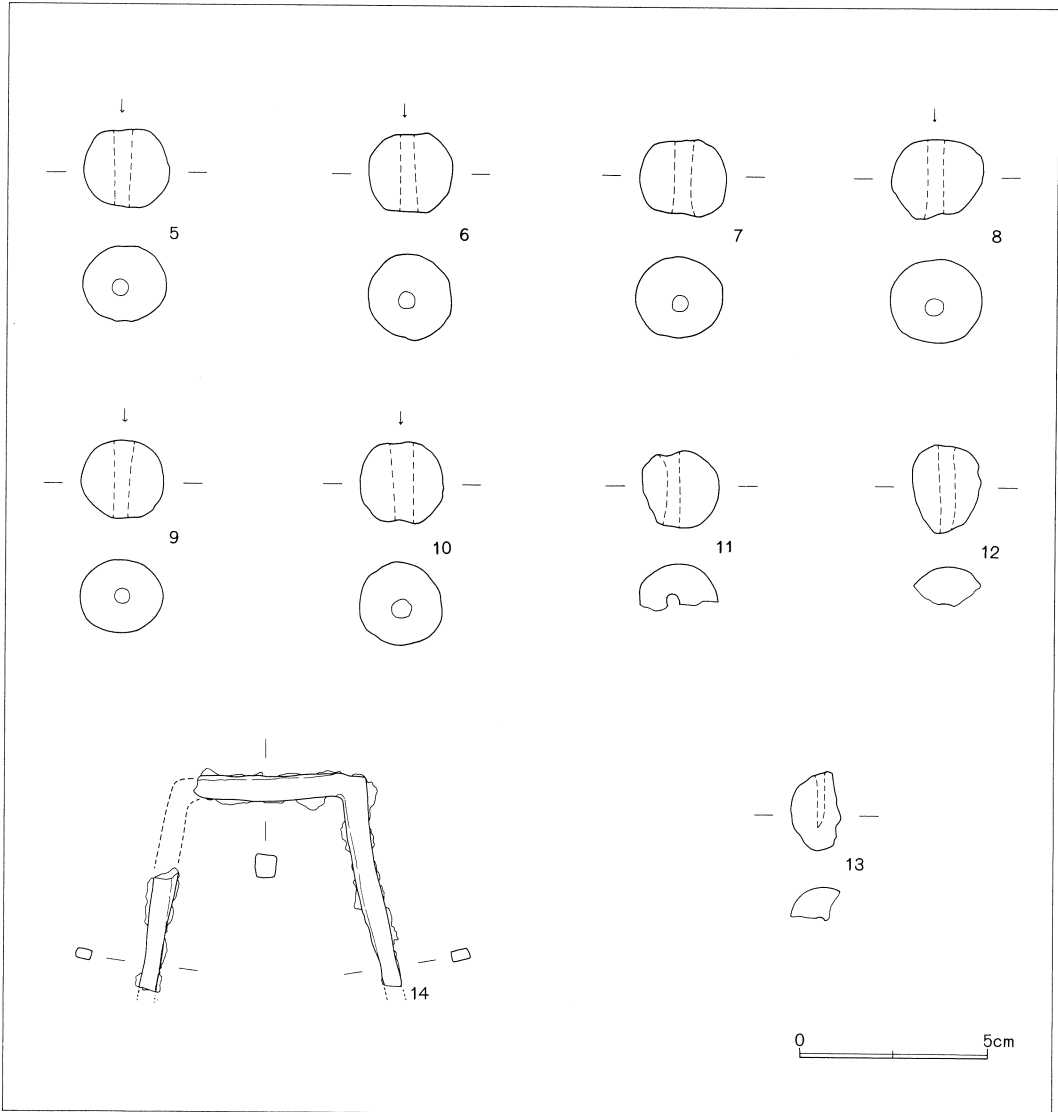
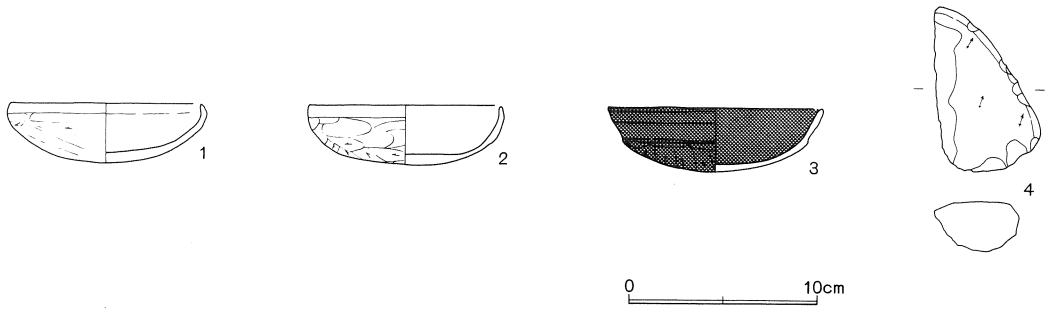
第71図 第28・72号住居跡(1)



第72図 第28・72号住居跡(2)

第28号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (10.2) 底径 — 高さ 3.2 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	40		171	
2	ク	口径 10.3 底径 — 高さ 3.2 最大径 —	礫 砂粒	橙褐	90	4, 5	170	
3	ク	口径 (11.4) 底径 — 高さ 3.4 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	50	12, 13	172	



第73図 第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
5	—	2.3	0.4	8.32	完形	9	633
6	—	2.2	0.4	8.94	完形	22	636
7	—	2.3	0.4	8.60	完形	8	637
8	—	2.4	0.5	9.36	完形	15	634
9	—	2.2	0.4	7.64	完形	24	638
10	—	2.2	0.5	8.67	完形	21	635
11	—	2.1	0.3	(3.90)	1/2	Cグリッド上層	640
12	—	—	—	(3.26)	1/4	21	639
13	—	—	—	(1.59)	1/4	Aグリッド上層	641

第72号住居跡 (第71図)

調査区外にかかり28号住居跡と重複する。28号住居跡より古い。南の角が検出されただけであるが平面形は方形になるものと考えられる。検出された南辺は2.4mで西辺は1.7mが残存していた。確認面からの深さは22cmである。軸方位は南辺でN-53°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は壁際から一段下がっているため皿状を呈する。ピットはいくつか検出されたが覆土はいずれも黒褐色土でしまりは良くない。貯蔵穴、壁溝、カマド等は検出されなかった。

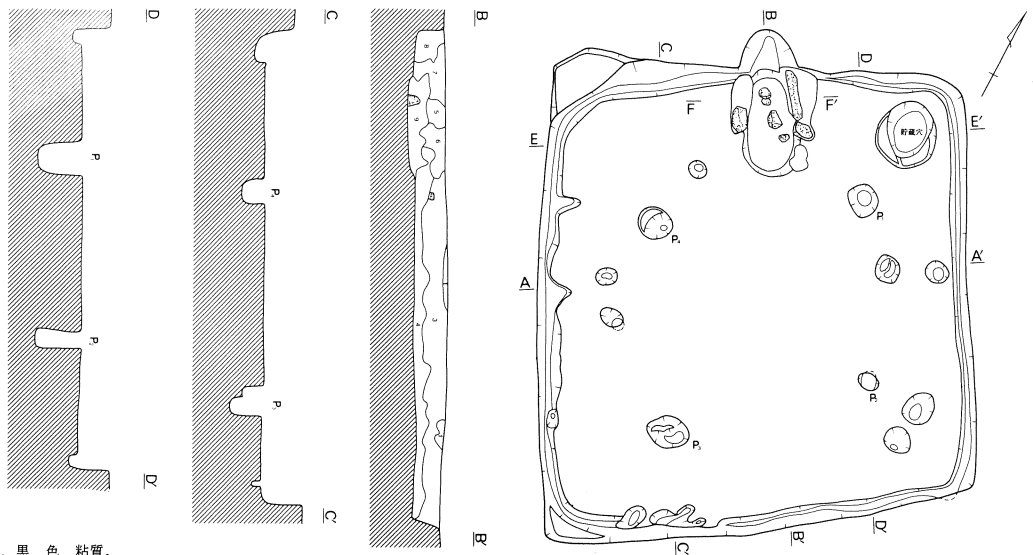
遺物は土師器甕の口縁部破片等が少量出土したが図示できるものはなかった。

第29号住居跡 (第74図)

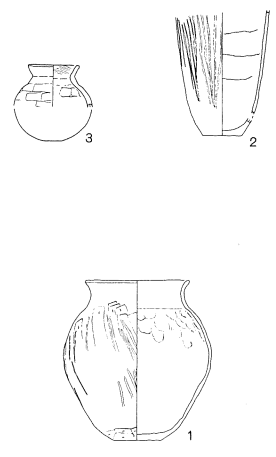
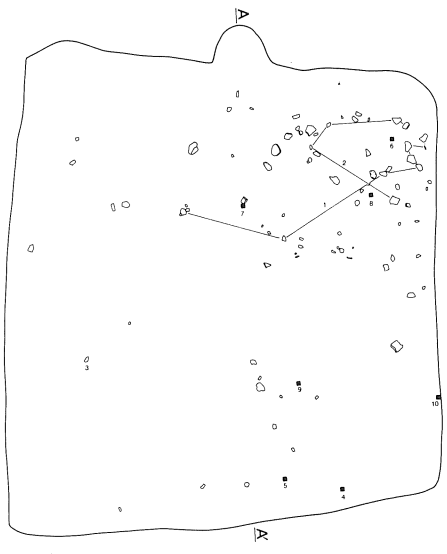
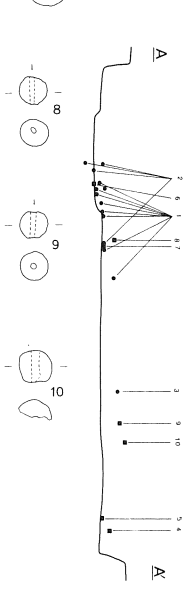
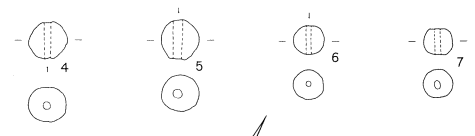
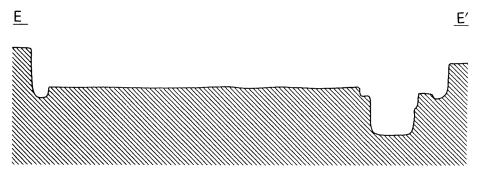
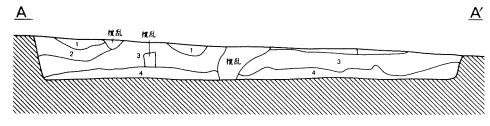
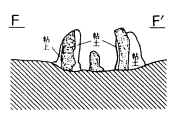
平面形は方形であるが東辺が西辺より短いためやや歪んでいる。他の遺構との重複はない。規模は4.7m×4.6mで確認面からの深さは30cmである。主軸方位はN-26°-Wである。壁は北辺と東辺はほぼ垂直に掘り込まれているが、西辺と南辺はやや斜めである。床面は平坦である。貯蔵穴は北隅に検出された。楕円形の掘り込みで上面70cm×62cmほどで深さは46cmである。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。覆土はいずれも黒褐色土で微量の炭化粒、焼土粒を含む。壁溝は南隅部分のピットのところで切れる他はきれいに廻る。西辺では2ヵ所内側に入り込んでいる。

カマドは北壁中央に設けられていた。袖には砂岩の切り石が用いられておりまわりを粘土で補強している。支脚も切り石を使っていた。焚口の幅は50cmでカマドの奥行きは110cmである。煙道の長さは46cmである。

遺物は貯蔵穴周辺に破片が散在するように出土したが図示できたのはわずかである。



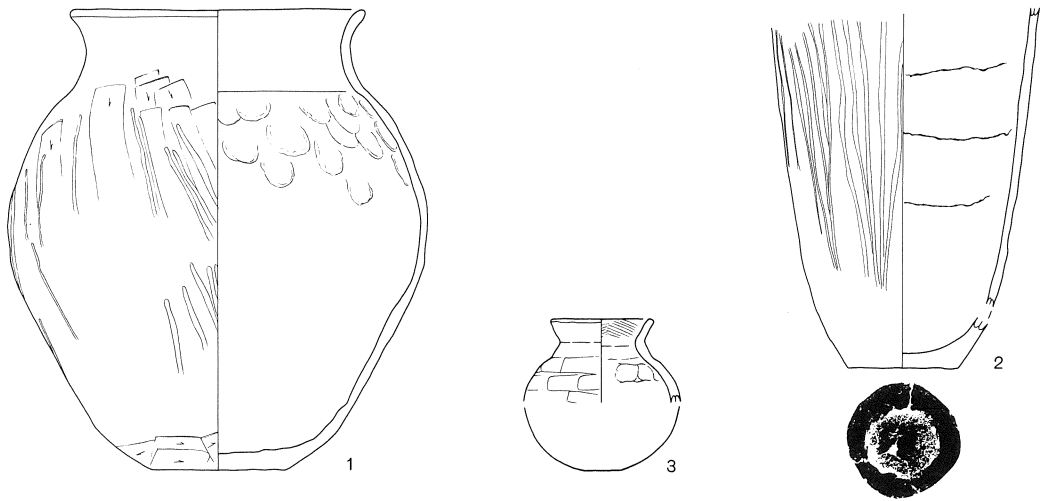
1. 黒色 粘質。
2. 黒褐色 3層に類似、混在物少ない。
3. 黒褐色 しまり弱。微粒の焼土 黒色土含、砂岩片含む。
4. 黒褐色 しまり良。炭化物少量含む。
5. 黄褐色 砂質。砂岩粒多量含む。
6. 暗褐色 砂岩粒(3~5cm)含む。
7. 赤褐色 白色粒・焼土粒多量混入。
8. 赤褐色 焼土少ない。
9. 赤褐色 焼土、炭化物多量含む。



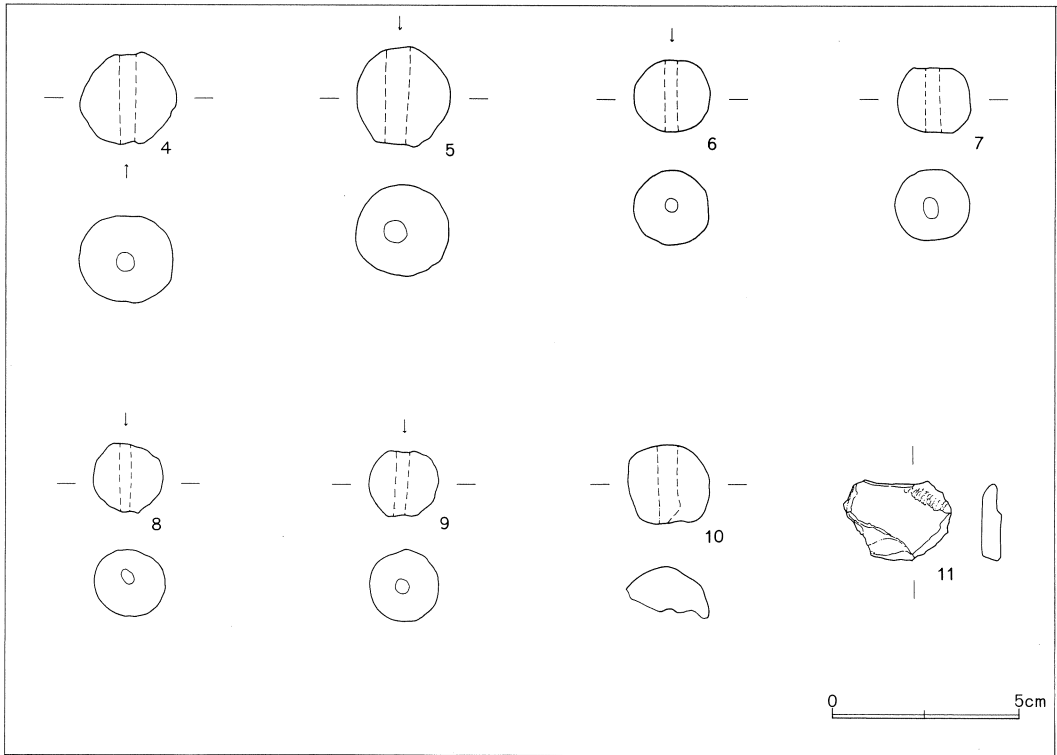
水系標高=11.100m



第74図 第29号住居跡



0 10cm



0 5cm

第.75図 第29号住居跡出土遺物

第29号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	甕	口 径 (15.1) 底 径 7.2 高 さ 24.4 最大径 (22.5)	赤色粒 礫 砂粒	赤褐	40	22, 45, 50, 51, 52	174	
2	ク	口 径 — 底 径 5.9 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	底部 100	39, 59, 60, 69, 75	175	
3	手捏ね	口 径 (5.3) 底 径 — 高 さ — 最大径 (8.4)	礫 砂粒	にぶい赤褐	30	3	176	

第29号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
4	—	2.5	0.4	12.05	完形	10	646
5	—	2.5	0.6	12.49	完形	7	645
6	—	2.0	0.3	6.53	完形	62	647
7	—	2.0	0.3	5.52	完形	81	648
8	—	1.9	0.3	5.00	完形	41	643
9	—	1.8	0.3	5.04	完形	13	642
10	—	—	—	(4.90)	1/3	11	644

第29号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
11	29	× 20	× 5	4.49	剥片		886

第30号住居跡 (第76図)

平面形は長方形である。東辺と西辺の長さが違うため歪んでいる。1号竪穴状遺構と重複する。1号竪穴状遺構より古い。覆土中から炭化材が検出されている。規模は6.1m×5.7mで確認面からの深さは14cmである。主軸方位は北辺でN-63°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

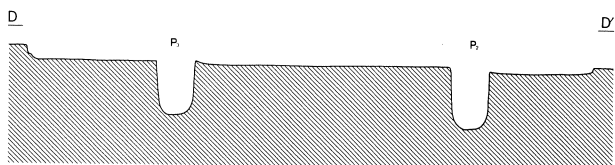
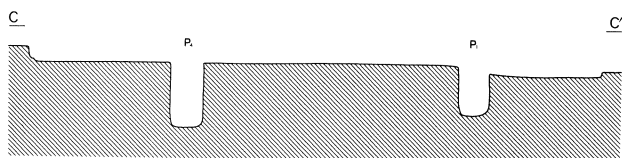
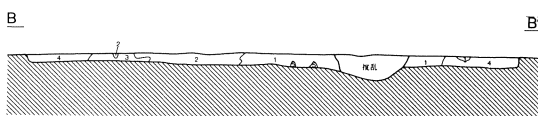
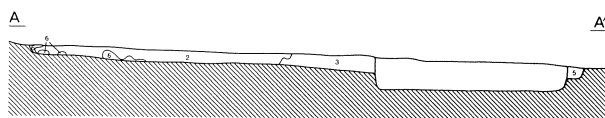
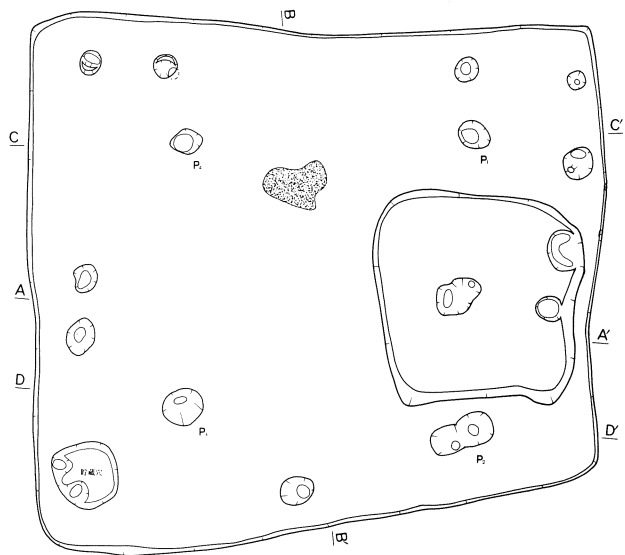
床面はやや起伏がある。貯蔵穴は南隅に検出された。方形の掘り込みで上面66cm×66cmほどで深さは44cmである。覆土は黒褐色でやや軟く焼土粒と炭化物を含む。ピットはP 1～P 4が主柱穴と考えられる。覆土はいずれも黒褐色である。壁溝は検出されなかった。

住居跡中央よりやや北寄りに炉が検出された。不整形を呈し長径は65cm短径は40cmである。

遺物は西のコーナーを中心に高坏、甕などが出土した。

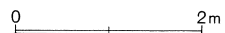
第30号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	高坏	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	坏部 20	15	180	
2	〃	口 径 17.9 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	〃	坏部 100	5, 6, 10, 11, 13	181	
3	〃	口 径 (17.9) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	〃	坏部 40	32	182	
4	〃	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	〃	脚部 30	16	179	
5	〃	口 径 — 底 径 (8.5) 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	脚部 40	3	177	
6	埴	口 径 — 底 径 4.3 高 さ — 最大径 10.4	赤色粒 砂粒	〃	50	33	187	
7	〃	口 径 — 底 径 4.3 高 さ — 最大径 14.0	赤色粒 砂粒	〃	40	52	186	
8	〃	口 径 10.7 底 径 2.7 高 さ 15.0 最大径 13.2	赤色粒 礫 砂粒	〃	90	10	185	

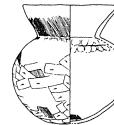
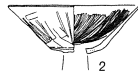
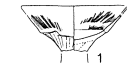
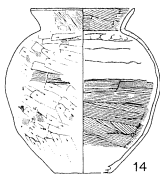
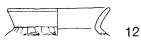
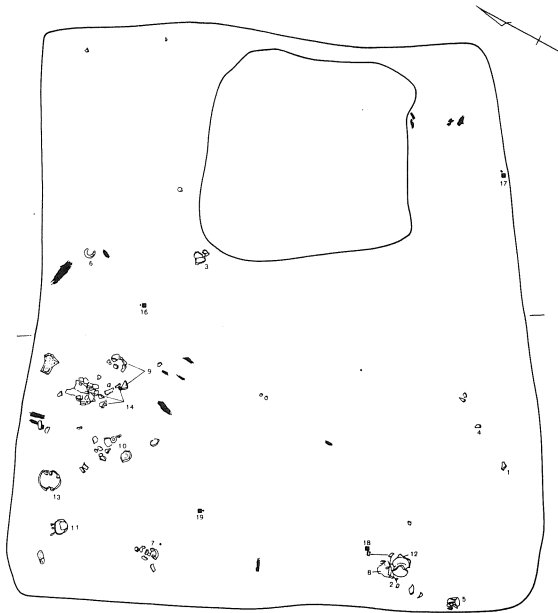


1. 黒褐色 しまり良。炭化物微量混入。
2. 黒褐色 しまり良。炭化物、焼土粒少量
3. 暗褐色 しまり良。炭化物、焼土粒多量
4. 明褐色 しまり良。混入物なし。
5. 明褐色 ロームブロック
6. 褐色 ロームと黒褐色土混入。

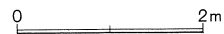
水系標高 = 11.200 m



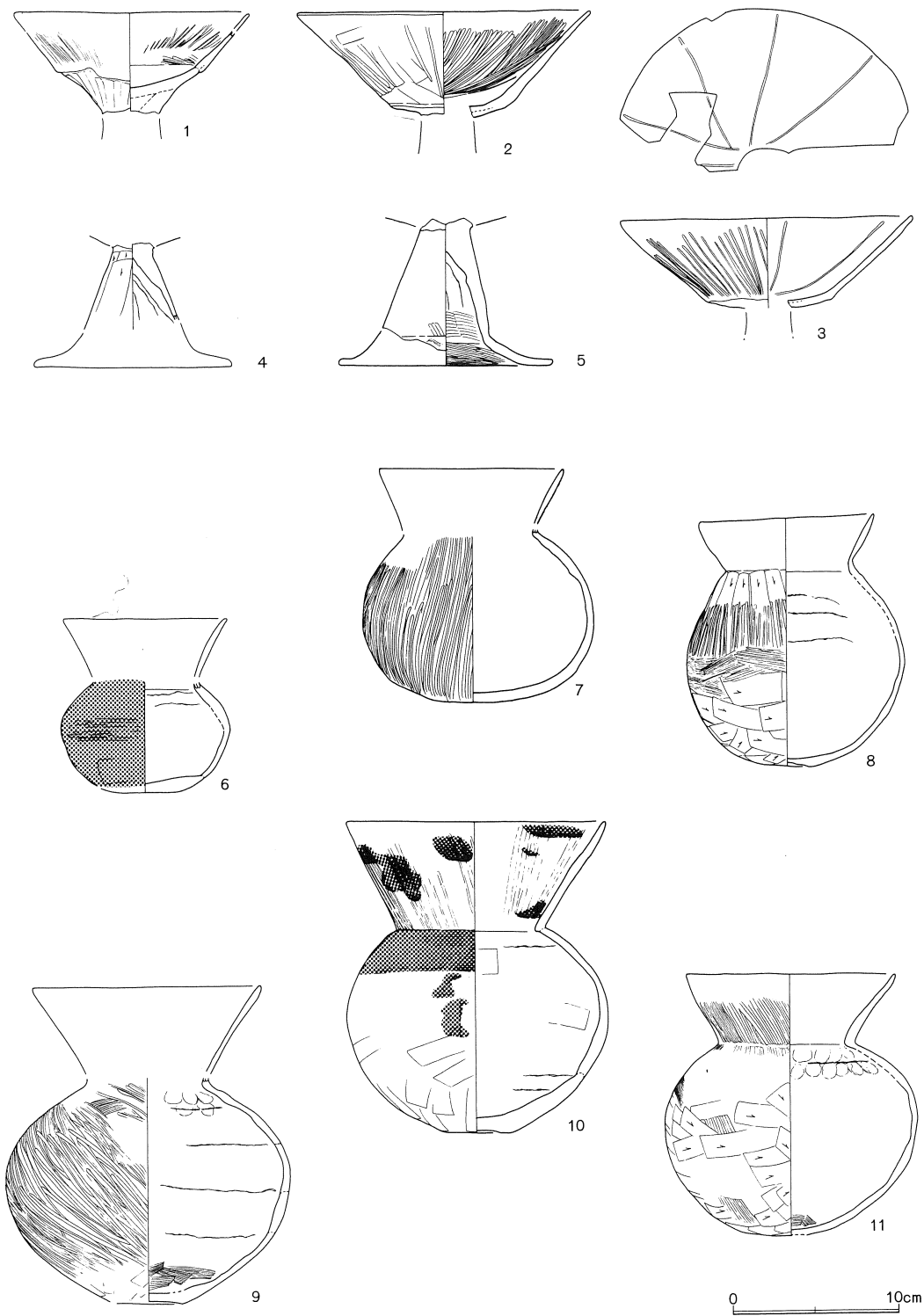
第76図 第30号住居跡(1)



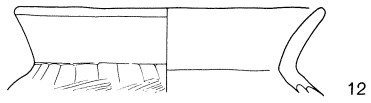
水系標高 = 11.200 m



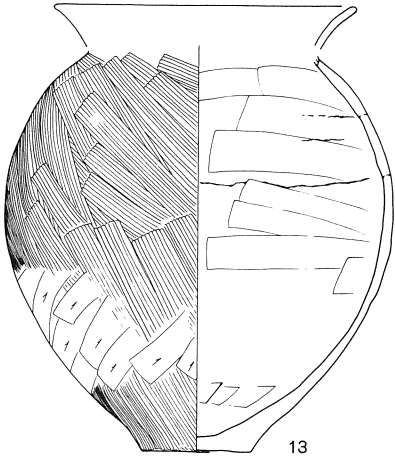
第 77 図 第 30 号住居跡(2)



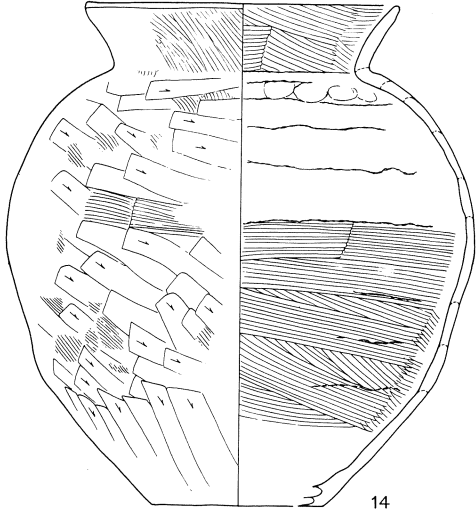
第78図 第30号住居跡出土遺物(1)



12

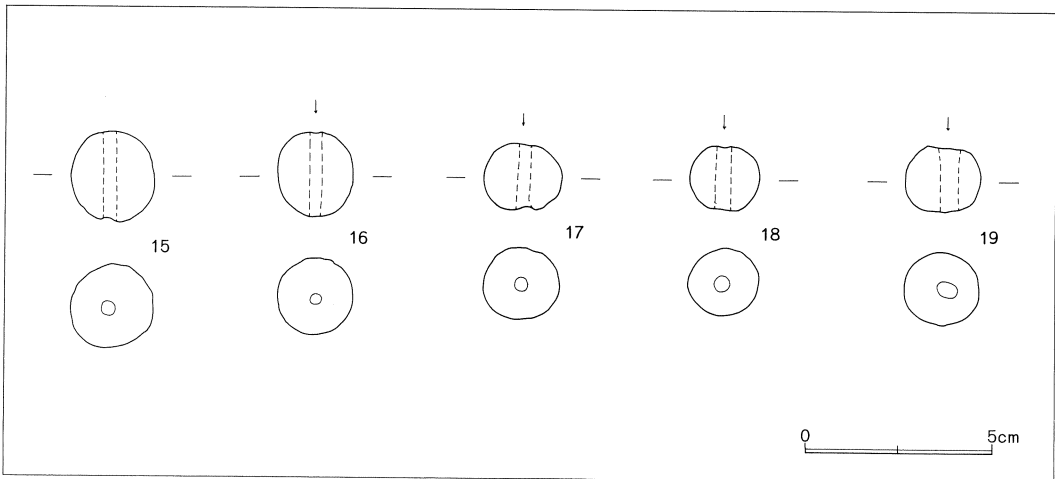


13



14

0 10cm



第 79 图 第 30 号住居跡出土遺物(2)

第30号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
9	埴	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 17.4	赤色粒 砂粒	橙褐	40	36, 37	189	
10	〇	口 径 15.9 底 径 4.0 高 さ 18.8 最大径 15.9	赤色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	70	45, 46	184	
11	〇	口 径 12.7 底 径 3.0 高 さ 15.8 最大径 15.4	赤色粒 砂粒	〇	70	50	190	
12	甕	口 径 16.4 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 砂粒		口縁 100	9	188	
13	〇	口 径 — 底 径 5.8 高 さ — 最大径 20.7	白色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい黄橙	60	49	183	
14	〇	口 径 (16.8) 底 径 (9.1) 高 さ 26.6 最大径 25.0	白色粒 礫 角閃石 砂粒	黒褐色	40	37, 39, 40, 41	191	

第30号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
18	—	2.2	0.3	10.07	完形		649
19	—	2.0	0.3	8.12	完形	34	650
20	—	2.1	0.3	5.83	完形	26	651
21	—	1.8	0.4	4.56	完形	12	653
22	—	2.0	0.5	5.90	完形	53	652

第31号住居跡（第80図）

一部調査区外にかかる。32号住居跡、円形周溝状遺構と重複しこれらより新しい。東辺と東南の角が調査区外であるが平面形は長方形になる。規模は4.3m×3.3mで確認面からの深さは35cmである。主軸方位は長軸でN-25°-Wである。32号住居跡より床面が上がっていたため貯蔵穴、壁溝等の詳細は不明である。

遺物は少量の破片が出土しているが覆土中からの出土で住居跡に確実に伴うものはない。

第32号住居跡（第80図）

一部調査区外にかかる。31号住居跡、円形周溝状遺構と重複する。31号住居跡より古く円形周溝状遺構より新しい。平面形は方形になるものと考えられる。規模は7.3m×7.2mで確認面からの深さは55cmである。主軸方位はN-32°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はやや起伏をもっている。貯蔵穴は住居跡の北隅に検出された。長方形の掘り込みで上面105cm×57cmほどで深さは50cmである。ピットは多数検出された。覆土はほとんどが黒褐色土で軟質のものが多くがP1～P3が支柱穴と考えられる。これらの覆土には焼土粒及び炭化物が含まれる。壁溝は全周せず北辺のカマド東側部分が切れる。またカマド西側部分はピットを伴って内側に入る。北辺の東側及び東辺の北よりには炭化物が検出されたが特に東辺のものは壁溝底より立った状態で遺存していた。

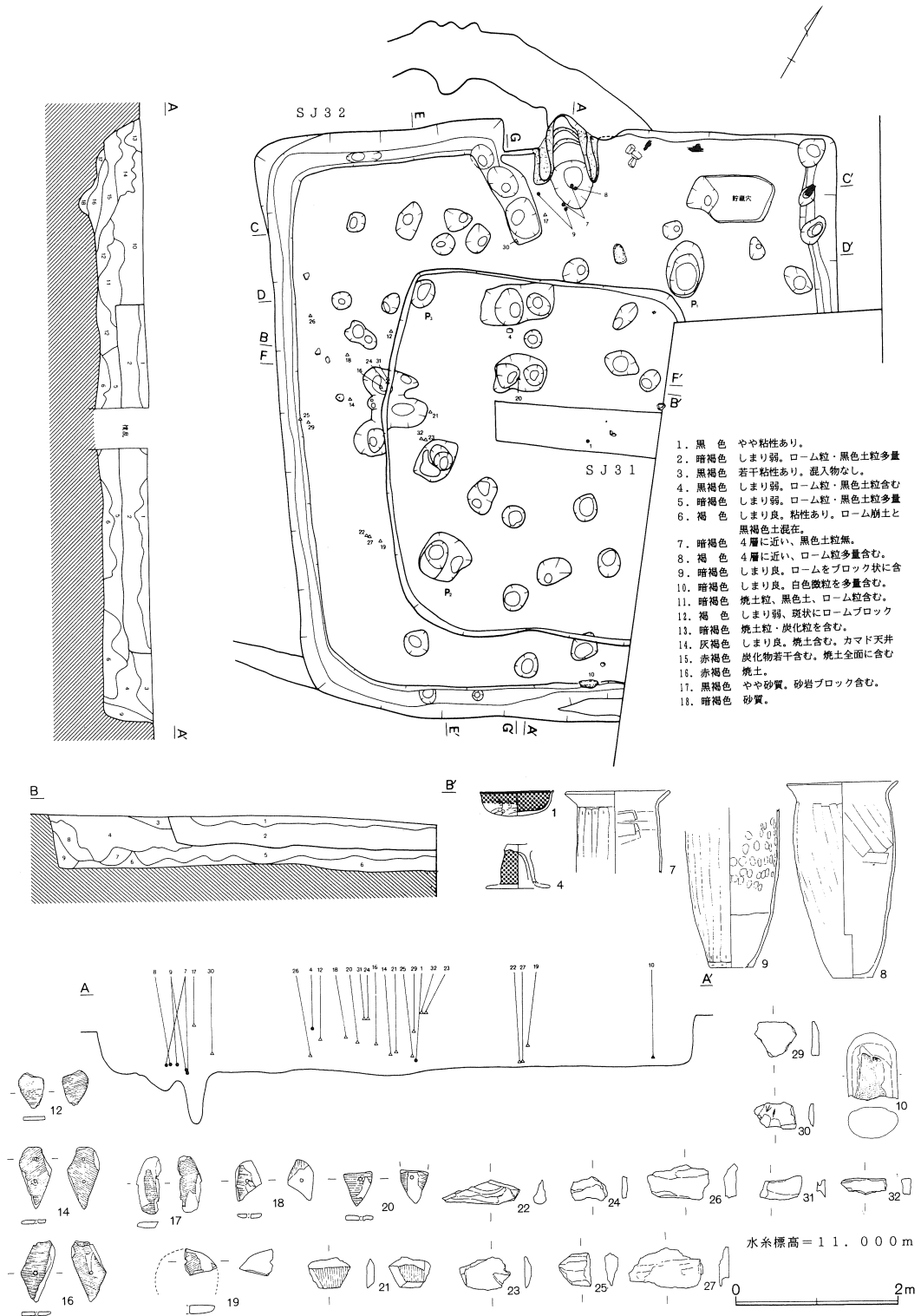
カマドは北壁中央に設けられていた。遺存状況は良好で袖には砂岩の切り石が用いられていた。また焚口部分は甕を組み合わせて袖の先端及び天井部を構築していた。焚口の幅は40cmでカマドの奥行きは80cmである。煙道は検出されなかったが煙出しになると思われる部分が28cmほどある。

遺物はカマドの構築材として甕が出土しているほかには石製模造品が出土しているが床面からはかなり浮いた状態である。

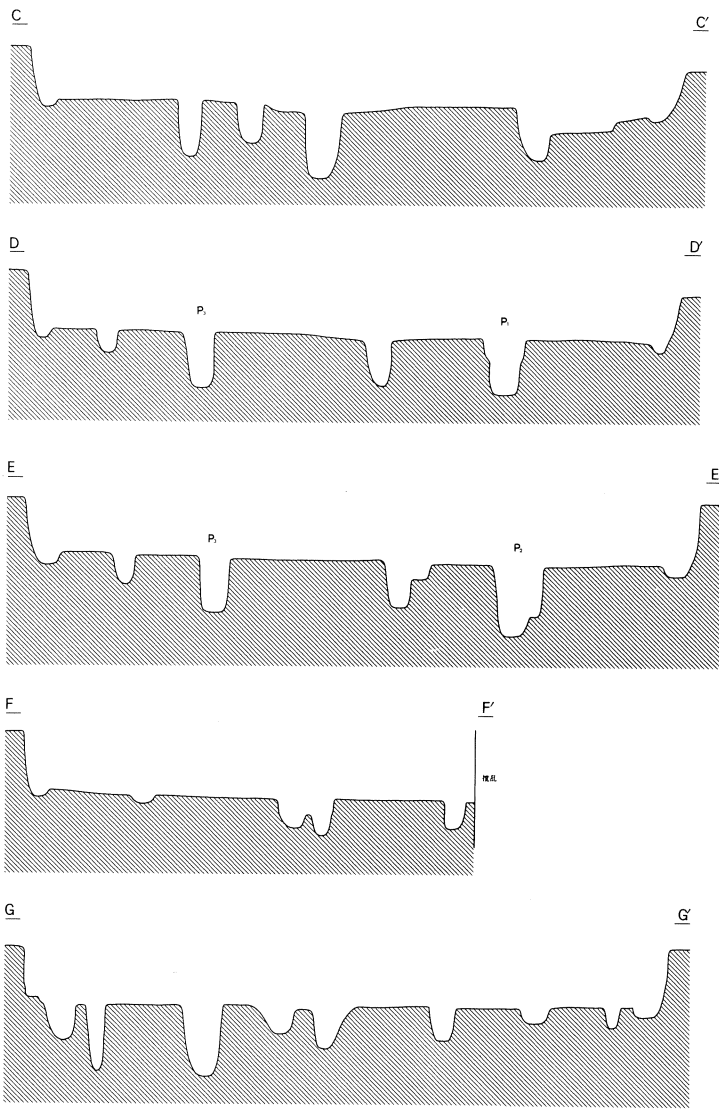
砥石 10は南壁際の床面直上から出土した。折損している。片面の中央が高くなっており主にその部分がよく使われており、平滑になっている。

第32号住居跡出土遺物（1）

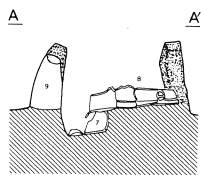
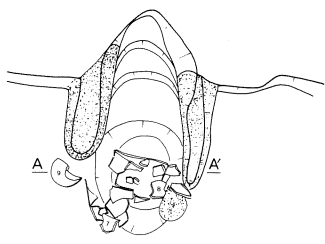
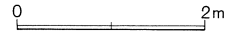
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (11.4) 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		30	26, Bグリット	197	
2	ク	口径 (11.7) 底径 — 高さ (3.8) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		20	Aグリット中層	198	



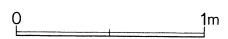
第80図 第31・32号住居跡(1)



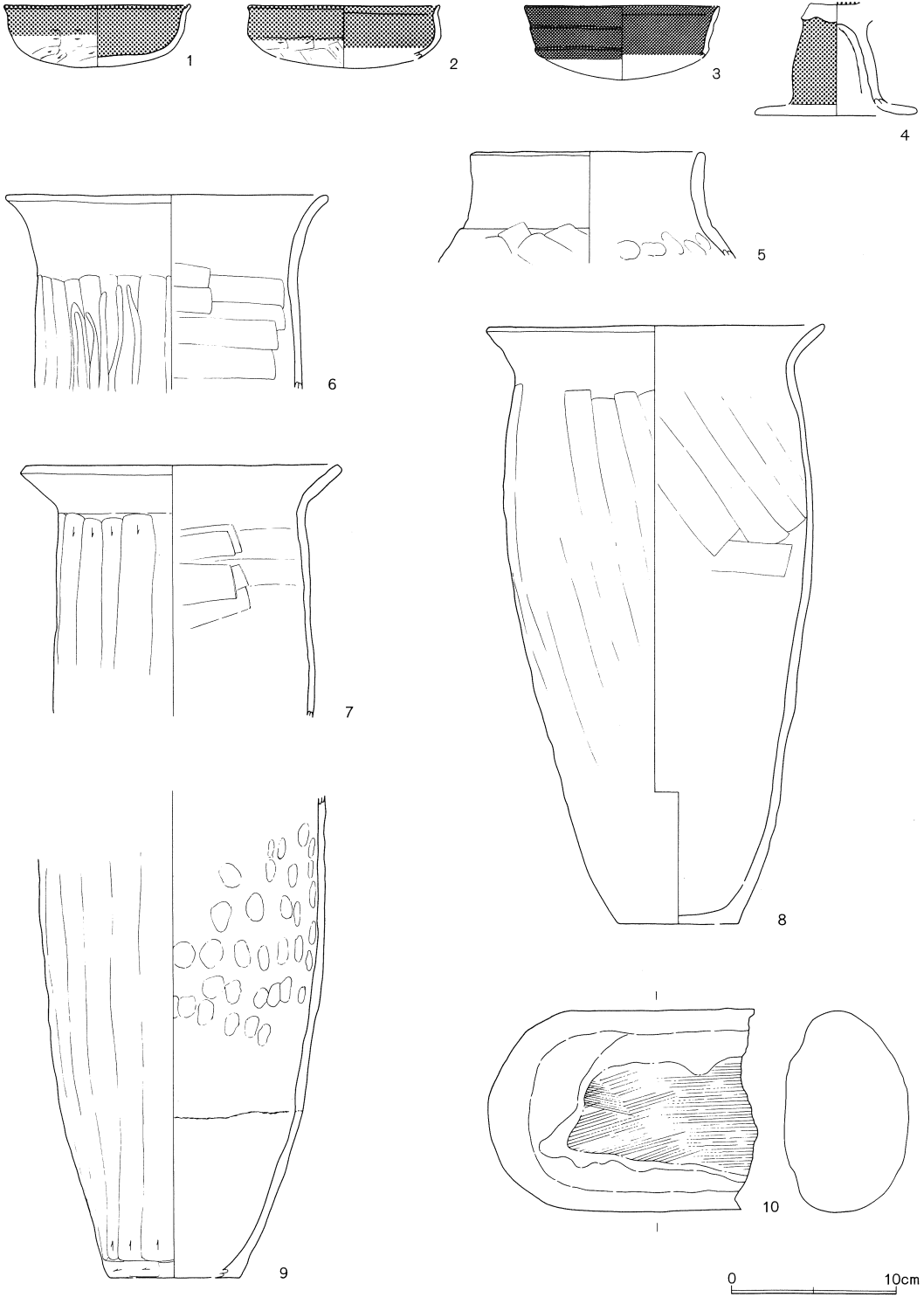
水系標高 = 11.000 m



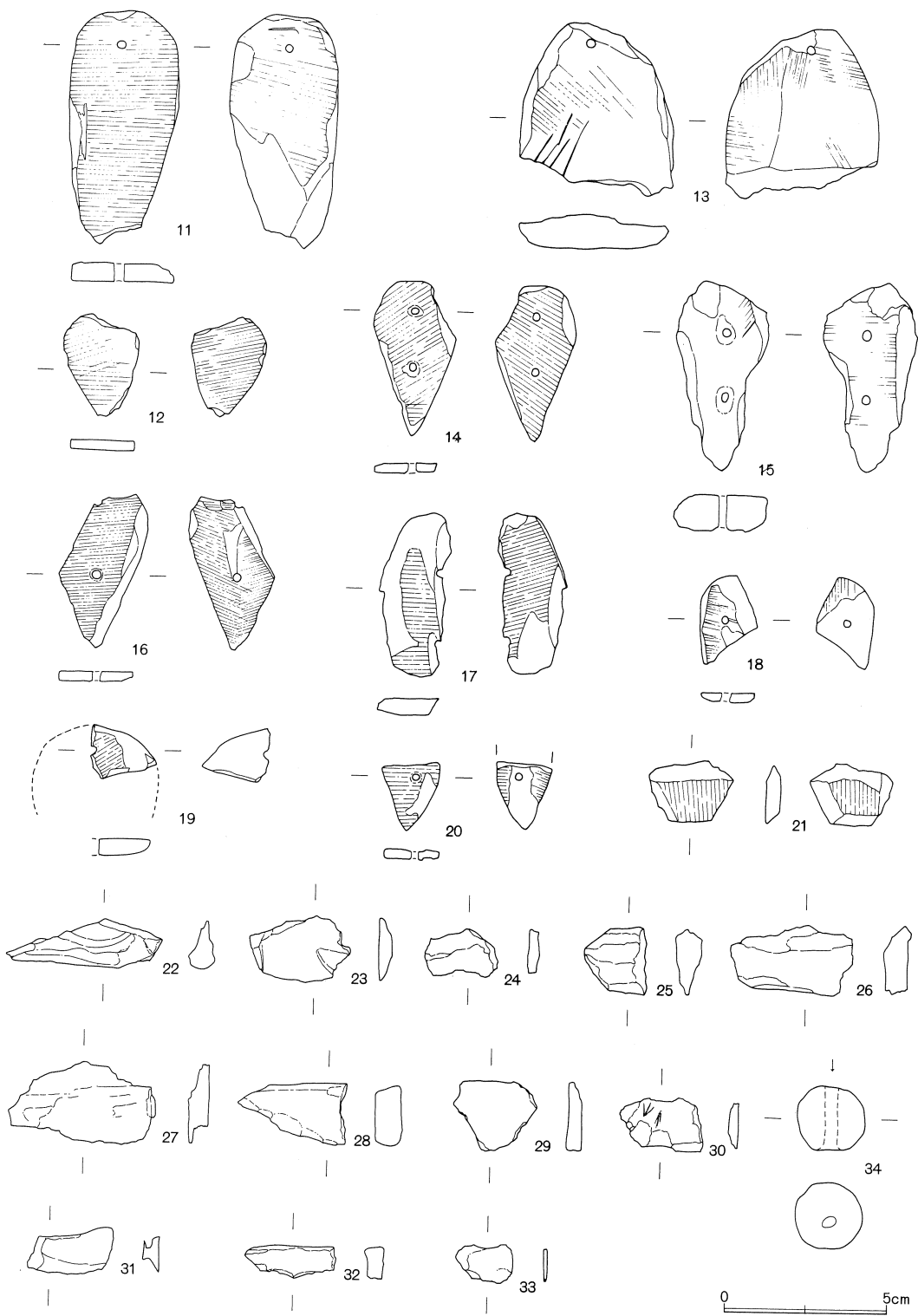
水系標高 = 10.600 m



第81図 第31・32号住居跡(2)



第 82 図 第 32 号住居跡出土遺物(1)



第 83 图 第 32 号住居跡出土遺物(2)

第32号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
3	坏	口 径 (11.9) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 雲母 砂粒		20		196	
4	高坏	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒 角閃石 雲母 片岩	明赤褐	脚部 60	16	195	
5	甕	口 径 (13.8) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	口縁 20	Cグリッド中層	194	
6	〆	口 径 (19.5) 底 径 — 高 さ — 最大径 (16.3)	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	口縁 40	Bグリッド上層	193	
7	〆	口 径 19.1 底 径 — 高 さ — 最大径 16.0	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	〆	口縁 50	30, 31, カマド	199	
8	〆	口 径 (20.4) 底 径 7.3 高 さ 36.3 最大径 19.0	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	80	31, カマド	200	
9	〆	口 径 — 底 径 8.0 高 さ — 最大径 17.5	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	胴下 90	29, 30	192	

第32号住居跡出土石製模造品計測表（1）

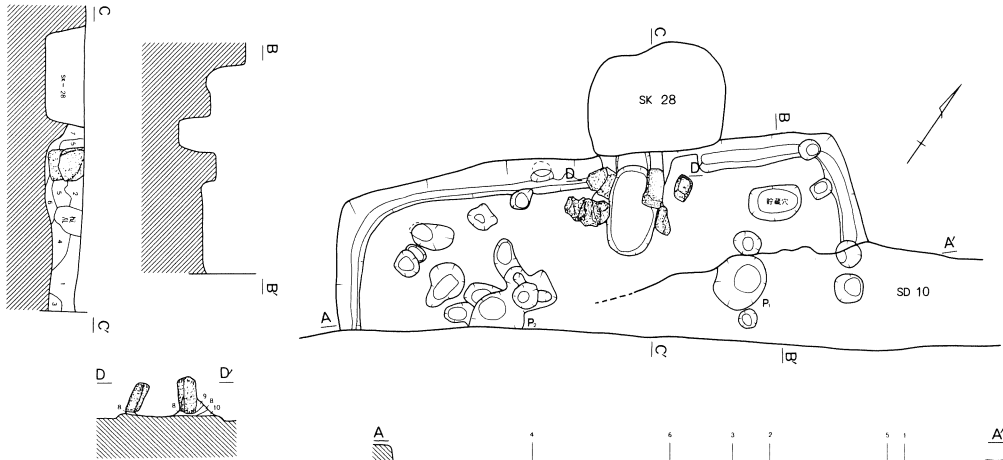
番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
11	71	33	5	26.39	剣形	Cグリッド上層	765
12	30	23	3	4.52	剣形	10	757
13	52	47	10	31.00	剣形	Cグリッド上層	764
14	47	25	3	6.73	剣形	11	758

第32号住居跡出土石製模造品計測表(2)

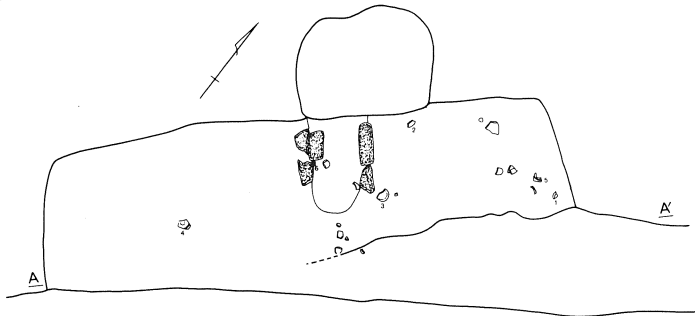
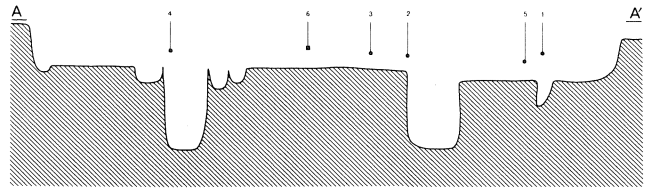
番号	法量(mm)			重量(g)	種類	註記番号	実測番号		
	たて	×	よこ					×	厚さ
15	58	×	27	×	11	20.87	剣形	ピット	763
16	47	×	27	×	3	7.72	剣形	9	756
17	50	×	21	×	5	8.17	剣形	18	761
18	27	×	18	×	3	2.49	剣形	3	755
19	20	×	17	×	5	2.60	剣形	20	762
20	21	×	18	×	3	1.47	剣形	15	760
21	26	×	19	×	4	2.63	剥片	14	759
22	48	×	15	×	8	6.07	剥片	28	906
23	31	×	20	×	4	3.16	剥片	19	905
24	23	×	14	×	3	1.72	剥片	8	900
25	20	×	19	×	8	4.92	剥片	12	901
26	38	×	21	×	7	9.42	剥片	2	897
27	46	×	24	×	6	7.82	剥片	28	907
28	34	×	19	×	8	5.36	剥片	ピット	908
29	26	×	21	×	5	3.30	剥片	7	898
30	25	×	16	×	3	2.02	剥片	17	903
31	26	×	14	×	5	2.37	剥片	8	899
32	28	×	10	×	6	2.23	剥片	19	904
33	17	×	12	×	1	0.51	剥片	13	902

第33号住居跡(第84図)

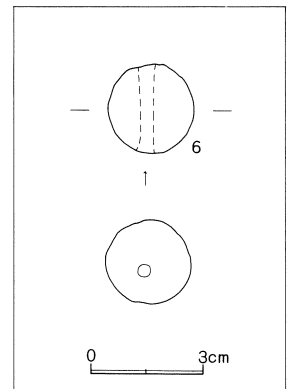
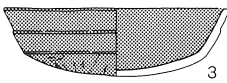
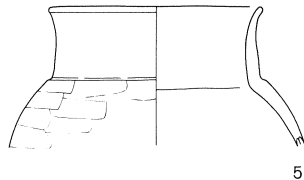
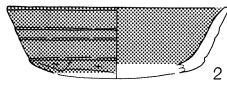
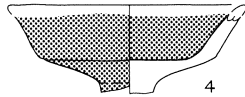
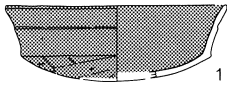
半分以上が調査区外にかかる。29号土坑、10号溝と重複しこれらより古い。平面形は方形になるものと思われる。規模は北西辺で5.6mである。確認面からの深さは40cmである。主軸方位はN-40°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。貯蔵穴は北隅に検出された。長方形の掘り込みで上面56cm×40cmで深さは35cmである。ピットはP1、P2が主柱穴と考えられる。覆土は黒褐色で微量の焼土粒、炭化粒を含み下部はローム粒が混じる。壁溝はカマド東側の部分がややあくが



1. 黒褐色 しまり弱。炭化物(3~4cm)含
微細焼土粒多量に混入。
2. 黒褐色 しまり良。
3. 明褐色 しまり良。焼土粒・炭化粒少量含
4. 褐色 焼土粒少量混入。
5. 褐色 しまり良。焼土ブロック混入。
6. 明褐色 焼土粒多、炭化物混入。
7. 褐色 しまり良。砂岩ブロック混入。
8. 黒褐色
9. 黄褐色 砂岩の崩れたものを多量含む。
11. 黄色



水糸標高=11.100m



第84図 第33号住居跡出土遺物

検出された範囲内ではまわっている。

カマドは北西辺中央よりやや北よりに設けられていた。28号土坑に外側部分を壊されている。袖には砂岩の切り石が用いられていた。遺存状況はあまり良くなく袖石はかなり崩落していた。焚口の幅は44cmで奥行きは100cm遺存していた。

遺物は坏等が少数出土している。

第33号住居跡出土遺物

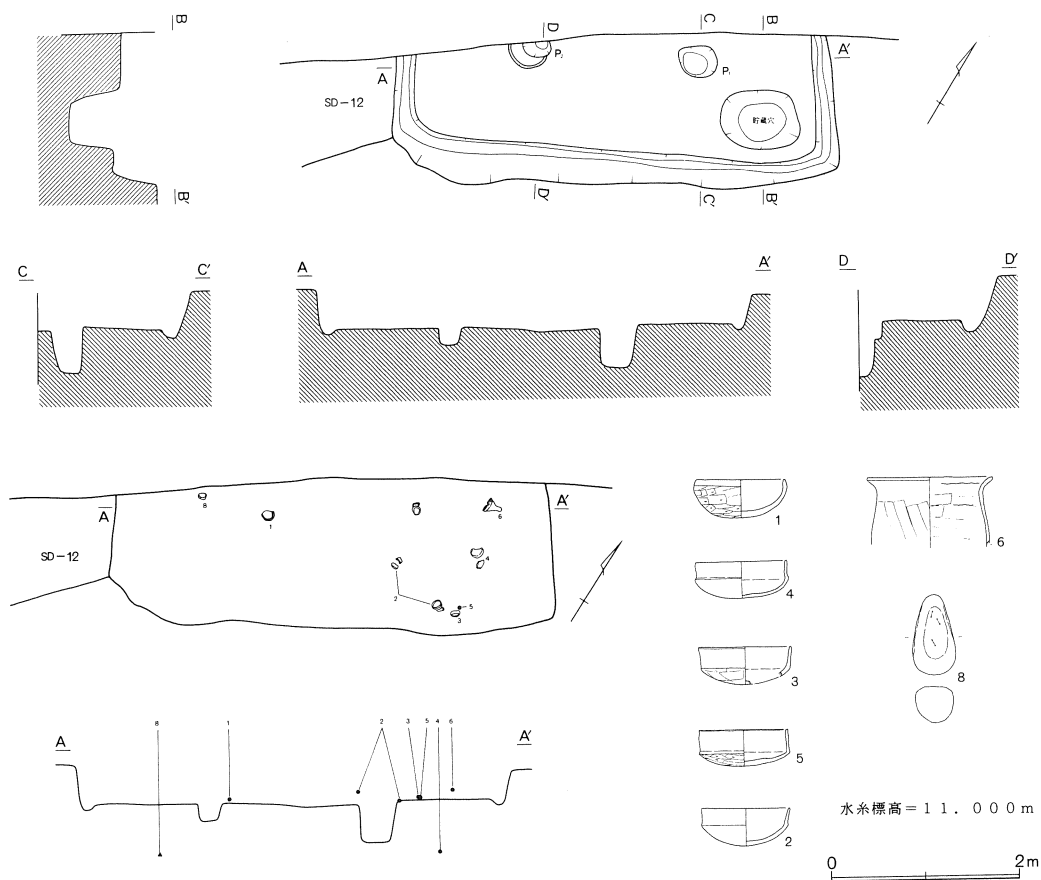
番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (11.8) 底 径 — 高 さ 4.1 最大径 —	白色粒 砂粒		20	20	204	
2	〃	口 径 (11.7) 底 径 — 高 さ (3.8) 最大径 —	白色粒 砂粒	にぶい赤褐	20	12	203	
3	〃	口 径 12.0 底 径 — 高 さ 3.6 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 赤色粒 角閃石	にぶい橙	60	10, Bグリッド	202	
4	高坏	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		坏部 30	1	201	
5	甕	口 径 (11.2) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	口縁 50	19	205	

第33号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
6	—	2.3	0.3	10.79	完形	2	655

第34号住居跡 (第85図)

大部分が調査区外にかかる。12号溝と重複しこれより古い。12号溝は住居跡床面までは達しない。平面形は方形になるものと思われる。規模は検出されている南東辺で4.7mである。確認面からの深さは43cmである。主軸方位はN-56°-Eである。壁は南東辺ではやや斜めに掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は南東隅に検出された。隅丸長方形の掘り込みで上面82cm×60cmほどで深さは43cmである。ピットはP1、P2が検出された。主柱穴であろう。覆土は黒褐色土でP1は



第85図 第34号住居跡

焼土粒、ローム粒を含む。P 2 は焼土粒を含まない。壁溝は検出された部分ではまわっており、全周するものと思われる。

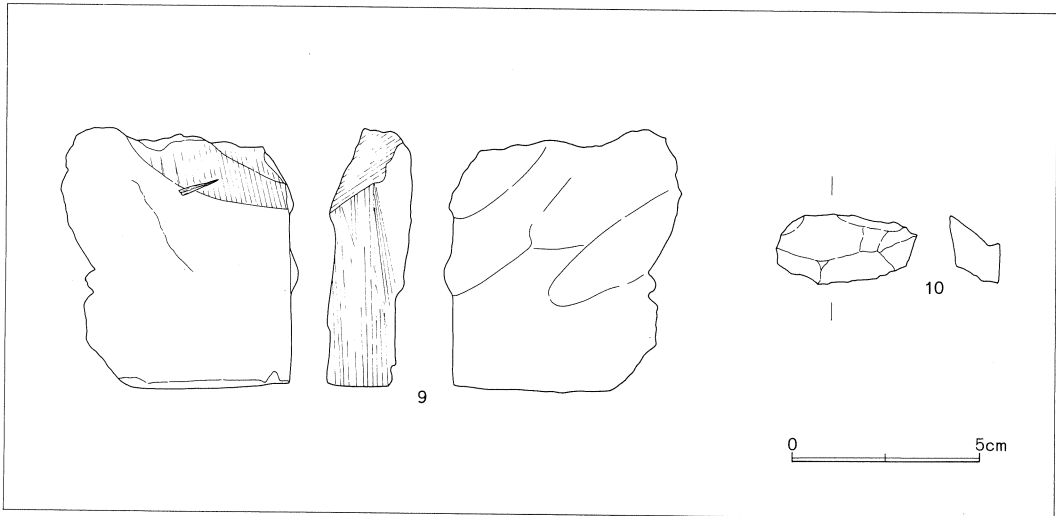
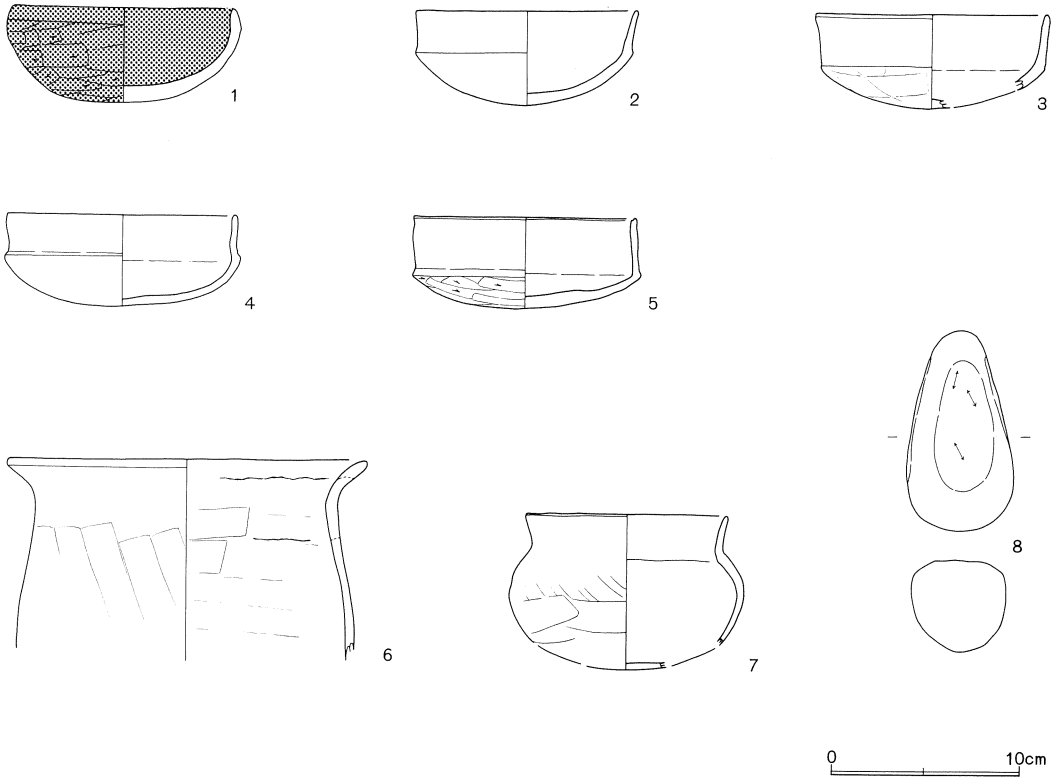
カマドは検出されなかったが調査区壁際の北東よりには断面にわずかに焼土が認められ、貯蔵穴の位置等からこの部分にカマドがあるものと思われる。

遺物は床面から坏および甕の破片が出土している。

砥石 8 はピットから出土した。楕円形の自然礫を利用している。上下面には細かい擦痕があり側面には長さ3～5mmほどの引っ掻いた様な痕跡が残る。

第34号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 11.9 底径 — 高さ 5.0 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		60	2	212	



第86图 第34号住居跡出土遺物

第34号住居跡出土遺物（2）

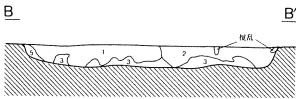
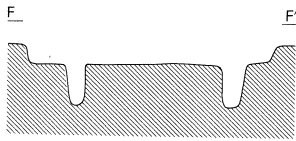
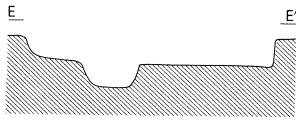
番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
2	坏	口 径 11.8 底 径 — 高 さ 5.0 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	90	3,5	211	
3	〃	口 径 12.5 底 径 — 高 さ 5.0 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	90	6	208	
4	〃	口 径 12.3 底 径 — 高 さ 4.8 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	〃	80	8,貯蔵穴	210	
5	〃	口 径 11.9 底 径 — 高 さ 4.8 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	〃	80	6	209	
6	甕	口 径 (19.1) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	口縁 30	7	207	
7	壺	口 径 (10.8) 底 径 — 高 さ (8.3) 最大径 (12.5)	白色粒 礫 砂粒	明黄褐	20	A・Bグリッド	206	

第34号住居跡出土石製模造品計測表

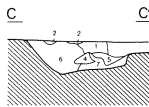
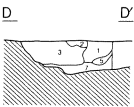
番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
9	69	63	22	94.56		68	766
10	37	19	14	9.39	剝片	2	888

第35号住居跡（第87図）

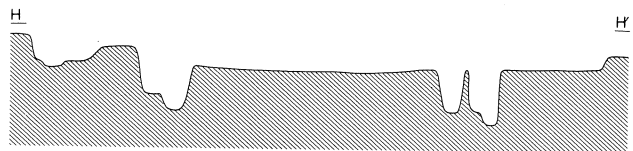
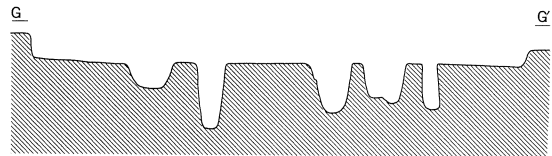
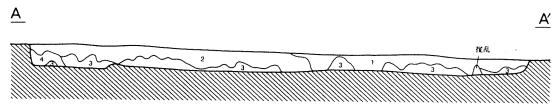
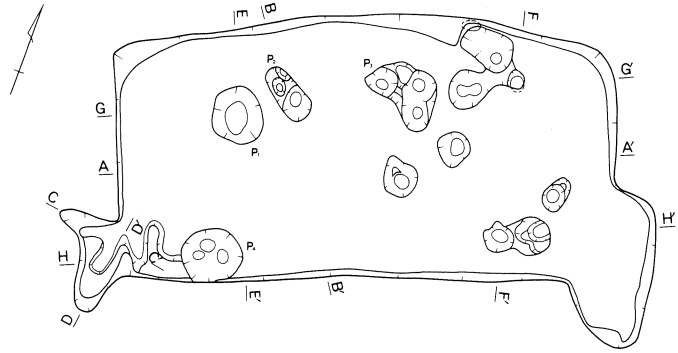
平面形は基本的には隅丸長方形と思われる。東南角部分の張り出し状のものは別遺構の可能性もある。規模は5.3m×2.8mで確認面からの深さは30cmである。主軸方位長辺ではN-67°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は緩い起伏をもつ。貯蔵穴はよくわからないがP4が該当するかもしれない。覆土は黒褐色で若干ローム粒を含む。直径65cmほどである。ピットは複数



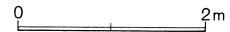
1. 黒褐色 しまり良。ローム粒若干含む。
2. 黒褐色 1層に類似、1層よりしまり良。
3. 暗褐色 しまり良。しみ状にローム粒含む
4. 黒褐色 2層に類似。焼土粒微量含む。
5. 褐色 壁崩壊土。



1. 黒褐色 焼土、炭化物、壁崩壊土多量に含む
2. 黒褐色 焼土粒・炭粒微量含む。
3. 赤褐色 焼土含む。煙道付近は炭化物含む
4. 赤褐色 焼土、炭化物をまばらに含む。
5. 黒褐色 焼土、炭化物含む。1層に類似。
6. 黒褐色 焼土含まない。
7. 黄灰色 粘性あり。ローム粒混入。



水系標高 = 111.200 m



第87図 第35号住居跡

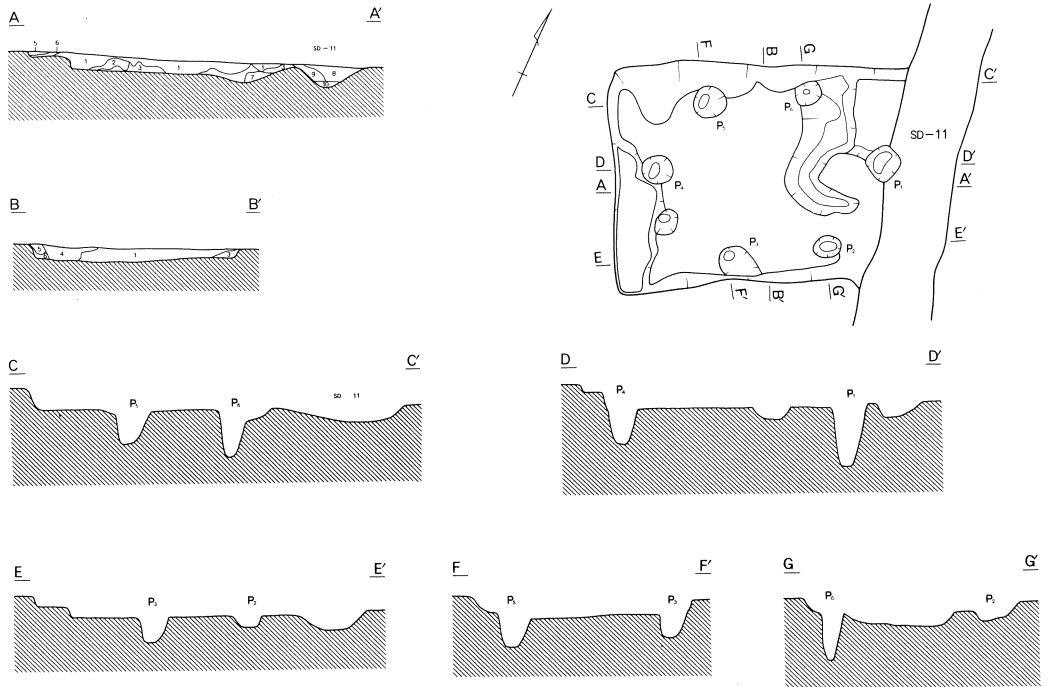
検出されたがどれが柱穴になるかはわからなかった。覆土はP1～P3が暗褐色でローム粒を含む。他は黒褐色で混入物は少ない。壁溝は検出されなかった。

カマドは南角に設けられていた。やや特異な形をしている。左袖のみが検出された。焚口の幅は30cmで奥行きは75cmである。煙道の長さは40cmである。

遺物は出土しなかった。

第36号住居跡 (第88図)

11号溝と重複しこれより古い。平面形は長方形である。規模は長辺は溝に切られているが残存で3.2m西辺で2.4mである。確認面からの深さは24cmである。主軸方位はN-64°-Eである。壁は



1. 黒褐色 ローム粒・赤色粒含む。
2. 暗褐色 しまり良。
3. 暗褐色 粘質あり。
4. 黒褐色 しまり良。1層に類似。
5. 黒褐色 しまり良。やや明るい。

6. 黄褐色 ローム崩土。
7. 褐色 しまり弱。ローム崩土多量含む。
8. 黒褐色 斑状にローム粒含む。
9. 黒褐色 しまり良。8層に類似。
11. 褐色 しまり良。

水系標高 = 11.000 m

0 2m

第88図 第36号住居跡

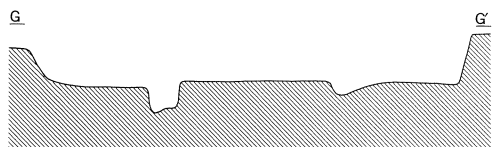
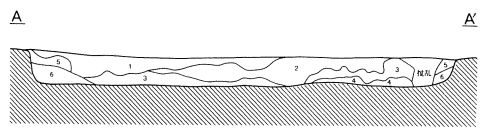
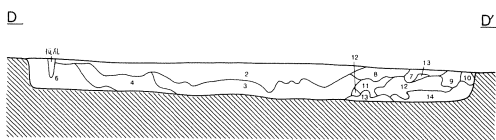
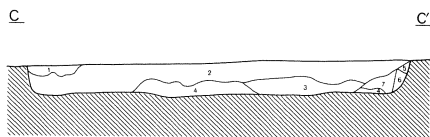
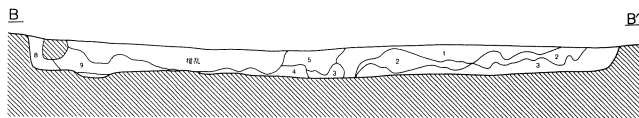
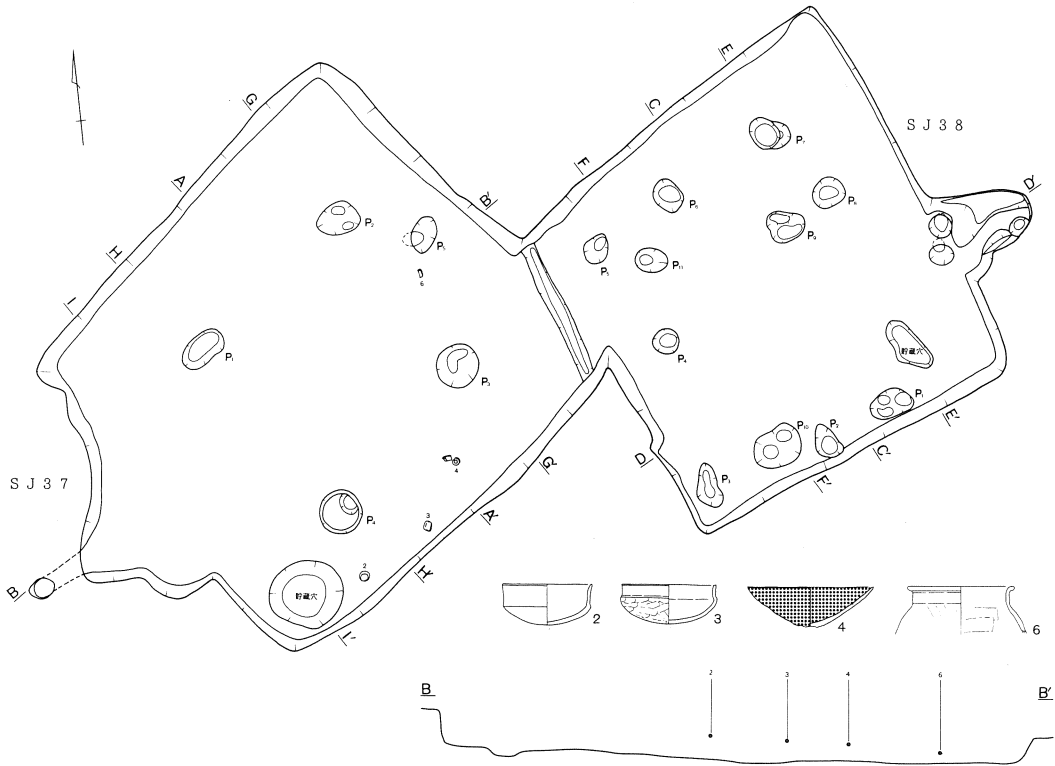
北辺は斜めに掘り込まれるが他はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦で西側には高さ15 cmほどの段をもっている。東側の溝状のものは攪乱の可能性もある。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP 2、P 3、P 5、P 6柱穴と考えられるが、P 1、P 4も軸が通ることから棟持柱のようなものとも考えられる。覆土は黒褐色でローム粒を含んでいる。P 2は若干浅く覆土は褐色である。壁溝は検出されなかった。

カマドは検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第37号住居跡 (第89図)

38号住居跡と重複する。調査時の所見では38号住居跡より新しい。平面形は方形である。規模は4.7 m × 4.5 mで確認面からの深さは50 cmである。主軸方位はN-130°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴はカマドの左、住居南隅に検出された。円形に近い掘り込みで上面78 cm × 72 cmほどで深さは40 cmである。覆土は暗褐色でしまりは良い。黒色土粒とローム粒を若干含む。ピットは5カ所検出されたがP 1 ~ P 4が主柱穴と考えられる。覆土はい



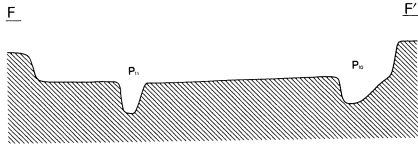
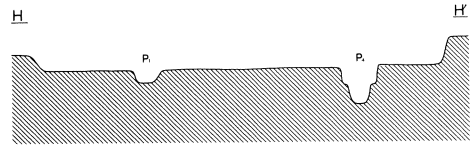
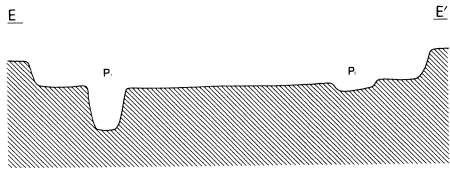
- A-A' B-B'
1. 黒褐色 しまり弱。黒色土、黄色土粒子を全体に含む。
 2. 黒褐色 しまり弱。赤色土、黒色土、黄色土微粒子全体を含む
 3. 暗褐色 しまり良。ローム粒、1cm大ブロック多量含む。
 4. 褐色 ロームブロック若干含む、しみ状にローム混入。
 5. 黄褐色 しまり弱。ローム粒・黒褐色土粒が混入。
 6. 黄褐色 極めてしまり弱。ローム崩土を全体に含む。
 7. 赤褐色 しまり弱。焼土大量に混入。ローム粒若干あり。
 8. 暗褐色 しまり弱。均質。ローム粒多量含む。
 9. 赤褐色 焼土含む。

- C-C' D-D'
- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1. 黒褐色 しまり良。 | 8. 黒褐色 焼土粒若干含む。3層に類似。 |
| 2. 黒褐色 しまり良。ローム粒若干含む。 | 9. 黒褐色 しまり良。焼土含まない。 |
| 3. 暗褐色 しまり良。焼土粒含む。ローム粒若干あり | 10. 黒褐色 しまり良。9層に類似より黒っぽい |
| 4. 暗褐色 しまり良。 | 11. 黒褐色 8層より焼土多量含む。 |
| 5. 黒褐色 若干ローム粒多。1層に類似。 | 12. 赤褐色 焼土ブロック状に多量含む。 |
| 6. 黄褐色 しまり弱。ローム崩土。 | 13. 赤褐色 焼土粒多量含む。 |
| 7. 黒褐色 1層に類似。よりしまり良。 | 14. 黄褐色 ローム上位に焼土若干混入。 |

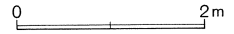
水系標高 = 11.400 m



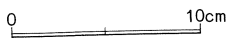
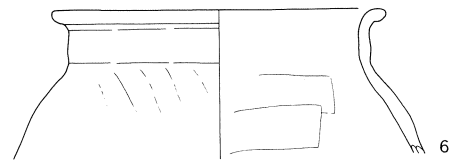
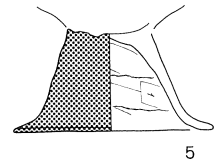
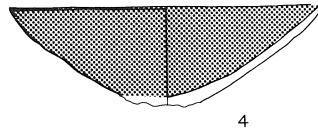
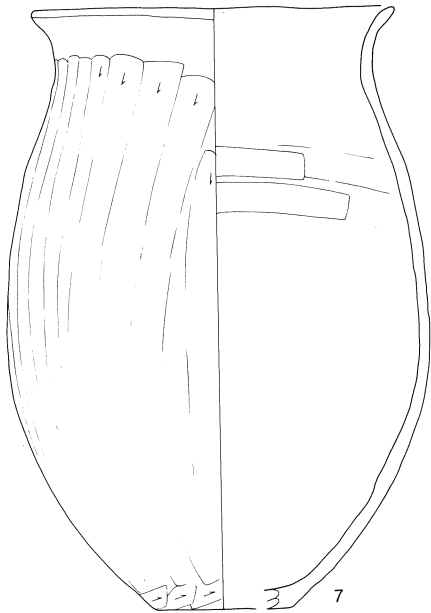
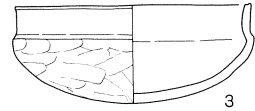
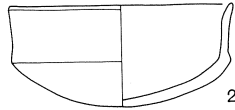
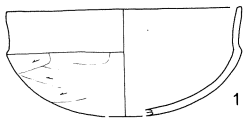
第 89 図 第 37・38 号住居跡(1)



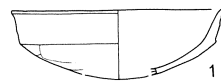
水系標高 = 11.400m



SJ37



SJ38



第90図 第37・38号住居跡(2)出土遺物

第37号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (12.6) 底径 — 高さ (5.7) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	20	Dグリッド	214	
2	ク	口径 11.9 底径 — 高さ 5.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	90	1	213	
3	ク	口径 (12.6) 底径 — 高さ 5.2 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	ク	30	3	215	
4	高坏	口径 16.8 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		坏部 70	4, Dグリッド	216	
5	ク	口径 — 底径 10.5 高さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	橙褐	脚部 70		217	
6	甕	口径 (11.5) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 砂粒	ク	口縁 20	5, Dグリッド, 床	562	
7	ク	口径 19.2 底径 (7.2) 高さ 31.8 最大径 22.5	白色粒 片岩 赤色粒 砂粒 礫 雲母	ク	50	C・Dグリッド	218	

ずれも暗褐色土でしまりは良い。P 2 はローム粒を P 4 は焼土粒を少量含む。P 5 は斜めに掘り込まれており、覆土は黒褐色でローム粒を若干含む。壁溝は北東辺の38号住居跡と重複する部分のみ認められた。調査時の所見では38号住居跡にかかったためその部分の壁を補強するために作られたのではないと思われる。

カマドは南西辺中央に設けられていた。上面に攪乱が及んでいたために遺存状態はあまり良くない。袖も検出されなかった。煙道も一部が壊されていたが天井部が残っていた。残存する長さは30cmほどで直径25cmほどの煙出しに通じる。

遺物は床面からやや浮いた状態で坏等が出土した。

第38号住居跡（第89図）

37号住居跡と重複する。37号住居跡より古い。平面形は方形である。規模は4.4m×3.9mで確認面からの深さは30cmである。主軸方位はN-67°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は東隅のものが該当すると思われる。楕円形の掘り込みで65cm×25cmほどで深さは8cmである。ピットは多数検出された。覆土はいずれも黒褐色で赤色粒、ロームブロックを含む。支柱穴を判断しかねるがP1～P3、P5～P7の6本あるいはP1、P3、P5、P7の4本等が考えられよう。壁溝は検出されなかった。

カマドは北東辺の右よりに設けられていた。袖は検出されなかった。焚口の幅は70cmで奥行きは90cmほど外側に張り出す。

遺物は坯の破片が1点出土しているが覆土中の出土であり、住居跡に伴うものではない。

第38号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坯	口 径 (11.4) 底 径 — 高 さ (3.7) 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	橙褐	20	Aグリッド	219	

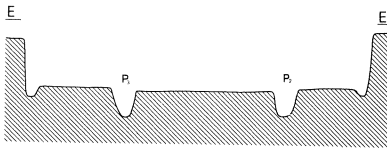
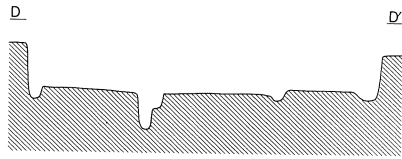
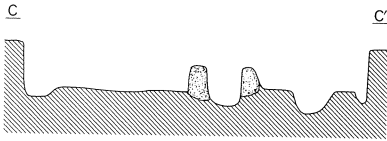
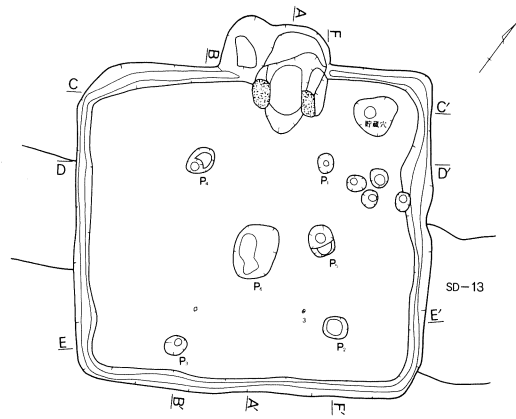
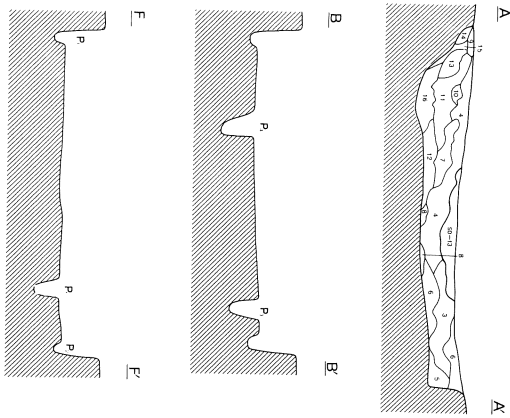
第39号住居跡（第91図）

13号溝と重複しこれより古い。平面形は方形である。規模は3.8m×3.5mで確認面からの深さは58cmである。主軸方位はN-34°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は北隅に検出された。不整形の掘り込みで上面46cm×36cmほどで深さは26cmである。覆土は暗褐色でしまりはやや弱くローム粒を含む。ピットはP1～P4が支柱穴と考えられる。覆土はいずれも黒褐色土でローム粒を含む。P5、P6も本住居跡に伴うものと思われる。壁溝は全周する。

カマドは北西辺北よりに設けられていた。袖には切り石が用いられていた。焚口の幅は34cmで奥行きは110cmである。カマド左脇の掘り込みは調査時の所見によれば炭化物、焼土粒、ロームを多

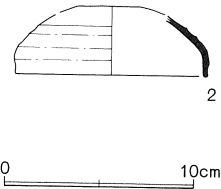
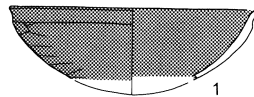
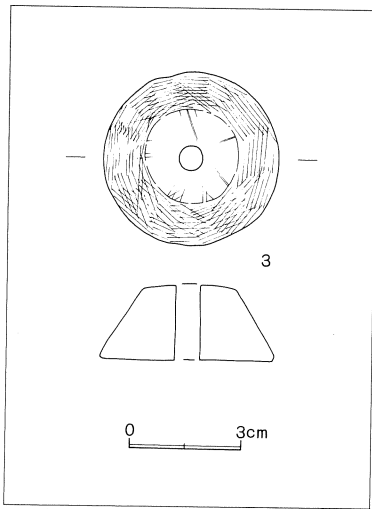
第39号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坯	口 径 (13.3) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒		20	Aグリッド	220	
2	蓋	口 径 (10.3) 天井径 — 高 さ — 最大径 —	黒色粒 砂粒	灰	10	Cグリッド	516	分析No.10



水糸標高 = 11.300 m

1. 黒褐色 SD13フク土。
2. 褐色 しまり良。ローム粒全体に混入。
3. 黒褐色 しまり弱。黒色土、ローム粒混入。
4. 黒褐色 3層に類似。ローム粒含む。
5. 黒褐色 しまり良。炭化物、ローム粒・焼土粒混入。
6. 暗褐色 しまり弱。ローム粒と黒色土縞状に入る。
7. 黒褐色 4層に類似。ローム粒少ない。
8. 黒色 しまり弱。ローム粒・焼土粒若干混入。
9. 褐色 しまり良。ロームブロック含む。
10. 赤褐色 極めてしまり良。焼土多量含む。
11. 赤褐色 しまり良。白っぽい。カマド天井の崩落か。
12. 黒褐色 大きめ(4cm)の炭化物上位にあり。焼土多。
13. 暗褐色 12層に類似。白色土。炭化物多量含む。
14. 赤褐色 しまり良。焼土を多量含む。
15. 暗褐色 しまり良。ローム粒を若干含む。
16. 暗褐色 15層に類似。下位で焼土含む。



第91図 第39号住居跡出土遺物

量に含む黒褐色土で充填されておりこれは掘方よりもカマドを小さく設営したため空間部分を埋めたものと考えられる。

遺物は石製紡錘車など少量が出土している。

紡錘車 3は断面台形で整った形をしている。上面は磨かれているが工具痕が残る。下面は丁寧に研磨され平滑で光沢がある。側面は面取りされた後横方向の細かい整形を行っている。穿孔は上から行っている。上面径2.5cm、下面径4.7cm、孔径0.7cm、高さ2.0cm、重量59.44g。滑石製。

第40号住居跡（第92図）

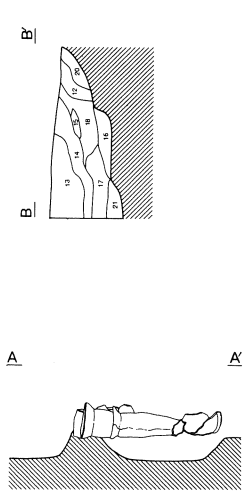
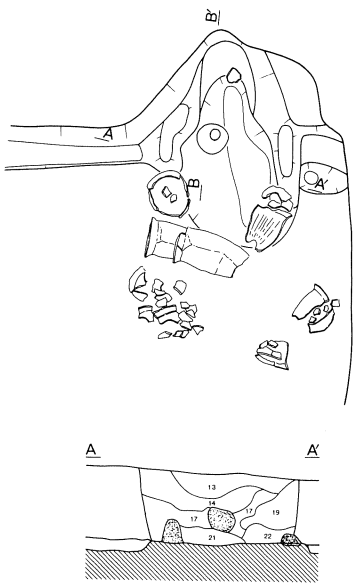
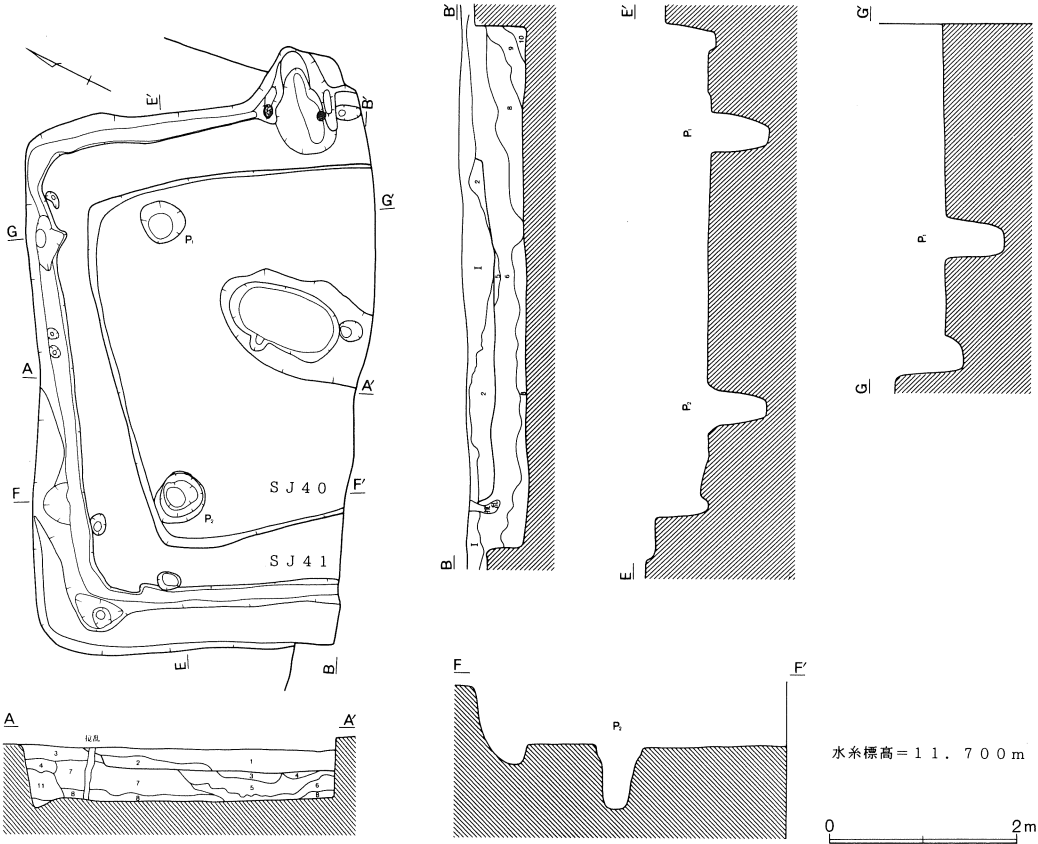
約半分が調査区外にかかる。41号住居跡と重複し、これより新しい。平面形は方形になるものと思われる。規模は北西辺が3.9m、北東辺は3.2mまで確認されている。深さは土層断面で観察されるところでは20cmほどでそれより上は耕作によって削られている。軸方位は北西辺でN-48°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。貯蔵穴、ピットなどは不明である。

カマドは検出されなかった。おそらく調査区外にあるものと考えられる。

遺物は覆土中から坏、円面硯の破片が出土している。

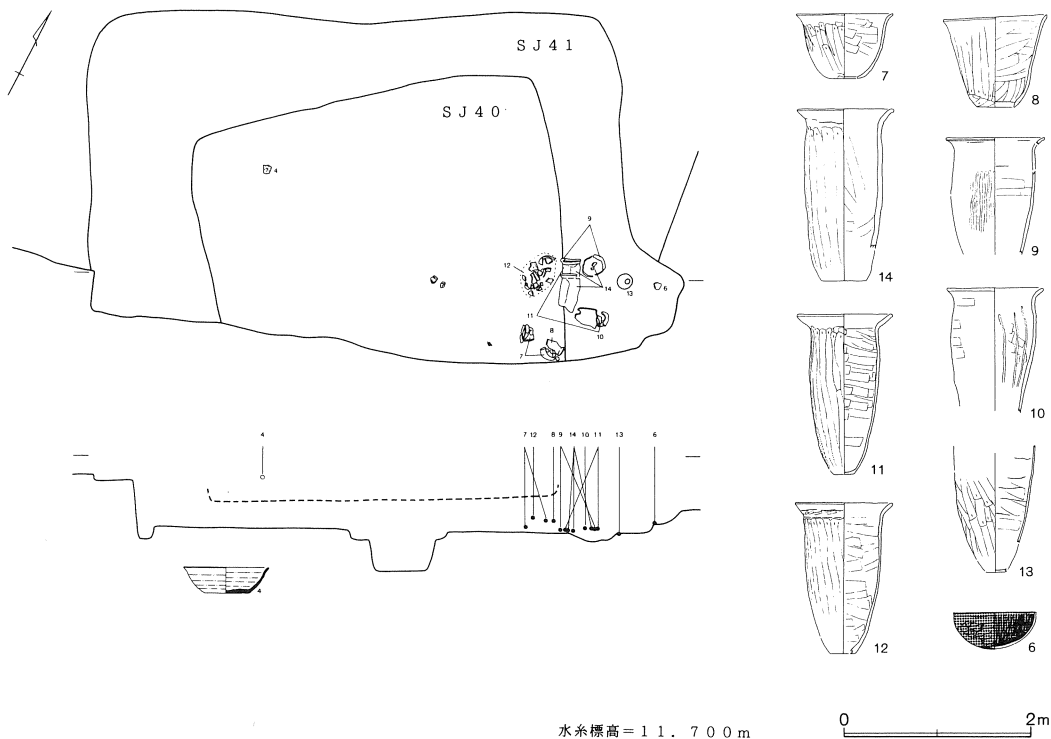
第40・41号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	明赤褐	20	A・Bグリッド	223	
2	ク	口 径 (11.9) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい橙	20	A・Bグリッド	222	
3	ク	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	砂粒	ク	20	Aグリッド	221	
4	ク	口 径 12.7 底 径 6.6 高 さ 3.9 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 白色針状物質	灰オリーブ	80		517	分析No.15
5	円面硯	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 砂粒	黄灰	破片	Aグリッド	508	



1. 表土
2. 黒褐色 しまり良。ローム微粒・赤色土粒を含む。
3. 暗褐色 しまり良。ローム粒多含む。
4. 暗褐色 炭化物多量含む。
5. 暗褐色 しまり弱。炭化物少。
6. 黒褐色 しまり弱。炭化粒含む。
7. 暗褐色 しまり弱。焼土粒含む。
8. 黒褐色 ローム粒(0.5cm)、炭化物(同大)多。
9. 暗褐色 しまり弱。ローム粒、炭化物(0.3cm)若干含む。
10. 暗褐色 全体にしまり弱。赤色土粒多含む。
11. 暗黄褐色 しまり弱。ロームブロック(1m)部分的にあり。黄色土粒若干含む。
12. 褐色 燧石礫土。
13. 黒灰色 極めてしまり良。灰白色鉱物、焼土多量含む
14. 褐色 しまり弱。焼土微粒含む。白色鉱物若干含む
15. 暗褐色 14層に類似。焼土含まない。
16. 赤褐色 しまり良。焼土が全体に含む。
17. 赤褐色 焼土多くブロック状に附れる。
18. 赤褐色 粘性有。やや黄色味帯びる。16層より焼土少
19. 赤褐色 しまり良。こぶし大の焼土ブロック含む。
20. 褐色 しまり弱。炭化物、焼土を微量含む。
21. 赤褐色 焼土。ブロック状、粒状ともに含む。
22. 暗褐色 しまり良。ローム、白色鉱物を多量含む。

第92図 第40・41号住居跡(1)



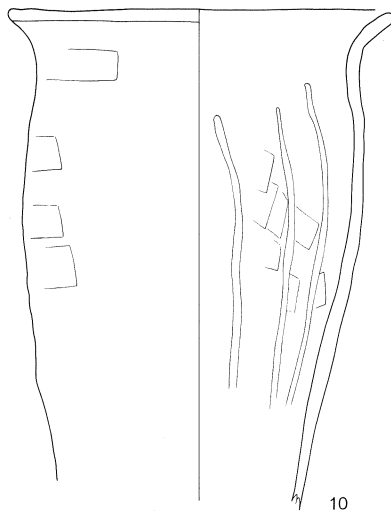
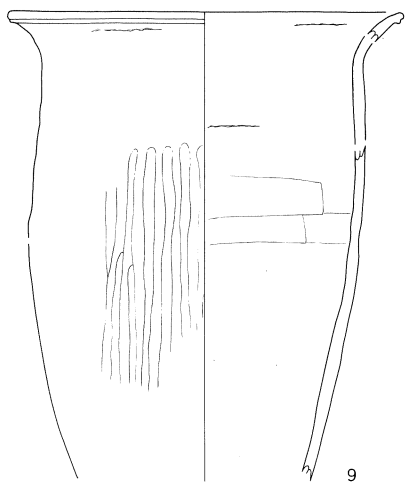
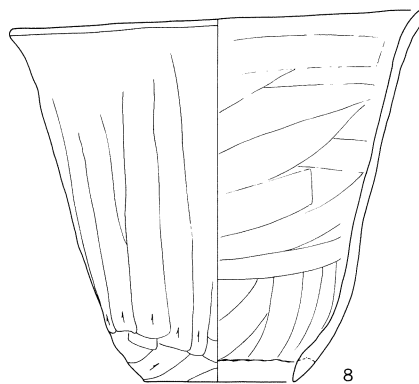
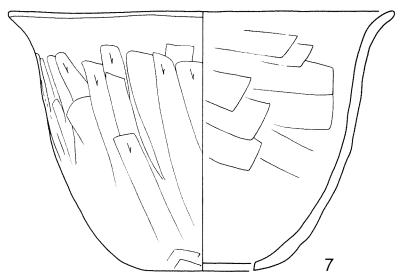
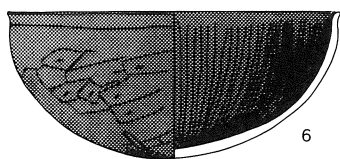
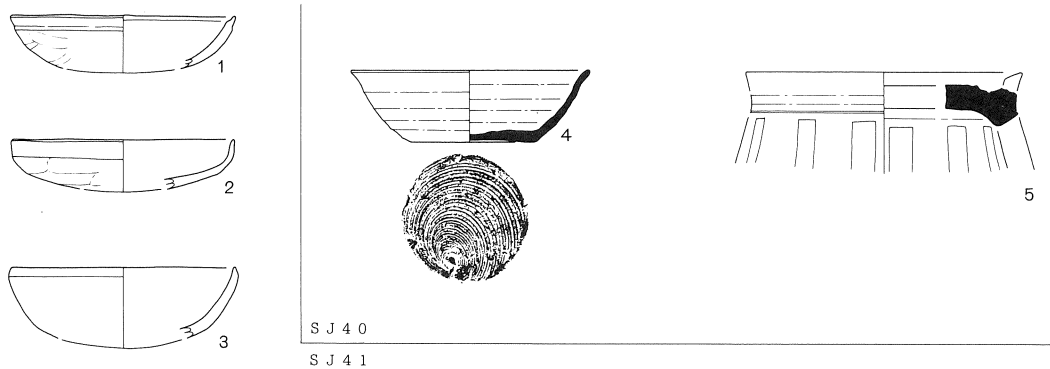
第93図 第40・41号住居跡(2)

第41号住居跡 (第92図)

約半分が調査区外にかかる。40号住居跡と重複し、これより古い。平面形は方形になるものと思われる。規模は北西辺で5.7m、北東辺は3.7mまで確認されている。確認面からの深さは46cmである。主軸方位はN-57°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦で南西辺に幅35cmほどのテラス状の段をもつ。貯蔵穴は検出されなかった。調査区外にあるものと思われる。ピットはP1、P2が柱穴と考えられる。覆土は黒褐色土でややしまりにかけロームブロックを若干含む。中央の土坑状の掘り込みは住居跡に伴う施設と考えられる。楕円形と考えられ短軸は101cm長軸は167cmまで検出されている。深さは40cmである。覆土は黒褐色でローム粒を含みやや軟質である。下層は焼土粒、炭化物を多く含む。壁溝は検出されたかぎりではまわっており全周するものと思われる。

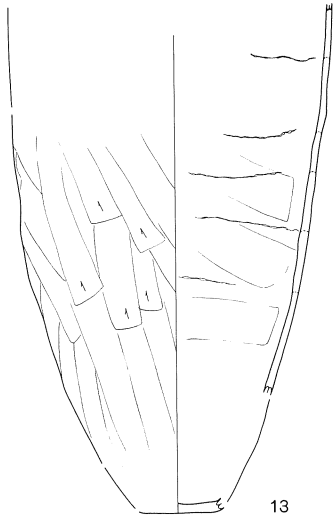
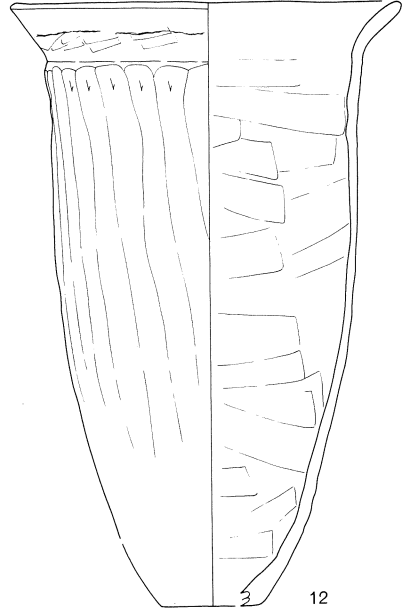
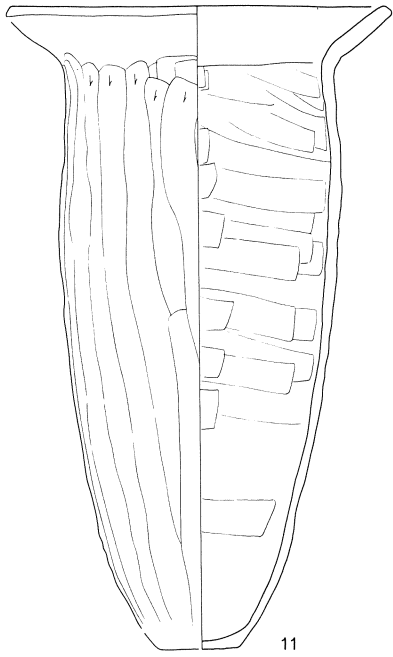
カマドは北東辺中央と思われるところに設けられていた。袖には砂岩がわずかに用いられており袖の先端及び焚口天井部には甕などが組み合わされて使われていた。焚口の幅は50cmで奥行きは110cmである。支脚にも甕が使われていた。

遺物はカマド加工材の甕類の他カマド周辺から甌などが出土している。またP2周辺からは少量の貝が出土した。



0 10cm

第94图 第40·41号住居跡出土遺物(1)



0 10cm

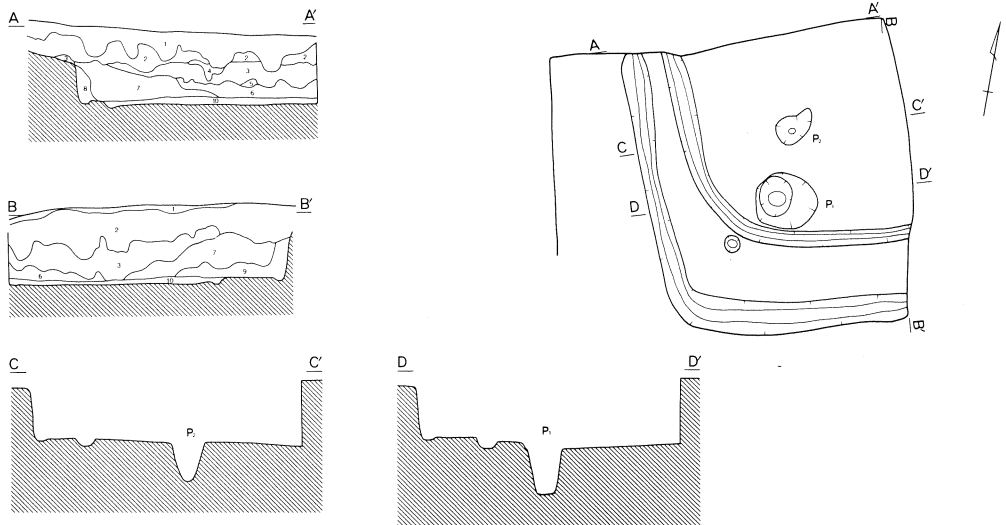
第95図 第41号住居跡出土遺物(2)

第40・41号住居跡出土遺物（2）

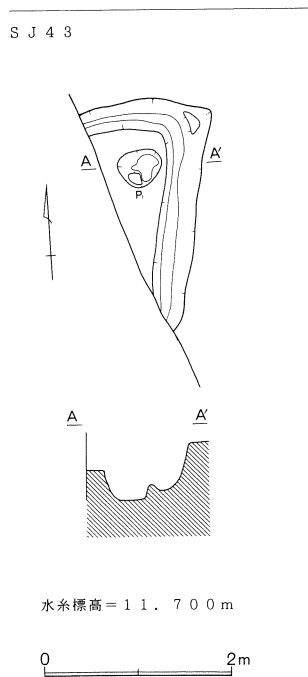
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
6	坏	口径 17.7 底径 — 高さ 7.8 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		50	1, Aグリッド	224	
7	甑	口径 20.5 底径 (5.6) 高さ 13.8 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい橙	60	8, 9, Bグリッド	225	
8	ク	口径 22.0 底径 8.0 高さ 19.2 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	90	8, 床面	226	
9	甕	口径 21.0 底径 — 高さ — 最大径 17.8	礫 砂粒	明赤褐	胴下半欠	3, 6, 床面	231	
10	甑	口径 20.4 底径 — 高さ — 最大径 18.2	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	ク	ク	4, 床面	232	
11	甕	口径 20.0 底径 4.2 高さ 34.0 最大径 15.0	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	90	4, 6	228	
12	ク	口径 20.5 底径 (5.3) 高さ 32.0 最大径 16.2	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐		7, Bグリッド	230	
13	ク	口径 — 底径 3.7 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	上半欠	2	227	
14	ク	口径 20.2 底径 — 高さ 36.5 最大径 16.6	礫 砂粒	明赤褐	底部欠	3, 5, 6, 床面	229	

第42号住居跡（第96図）

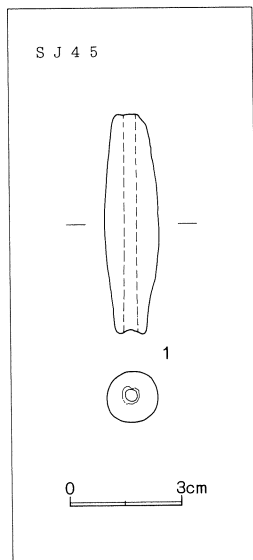
約4分の3ほどが調査区外にかかる。平面形は方形になるのではないと思われる。壁溝及びピットの状態からみて拡張の可能性はある。規模は不明であるが検出された部分は西辺が3.2m南辺が



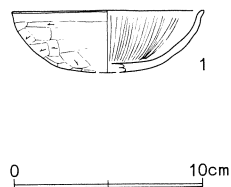
- | | |
|--|--|
| <p>1. 表土</p> <p>2. 黒褐色 しまり良。1層を粒状に少量含む。</p> <p>3. 暗褐色 しまり弱。炭化物、赤色土粒、ローム粒含む。</p> <p>4. 黒色 混入物少ない。</p> <p>5. 黄褐色 ロームをブロック状に含む。</p> | <p>6. 黄褐色 ロームをブロック状に多量含む。</p> <p>7. 暗褐色 しまり良。下位に炭化物有。混入物少。</p> <p>8. 黄褐色 壁崩壊土。</p> <p>9. 黒褐色 しまり良。赤色土微粒、炭化物微粒微量含む。</p> <p>10. 黄褐色 ローム。黒褐色土混入。粘床。</p> |
|--|--|



水系標高 = 11.700m



S J 4 2



第96図 第42・43号住居跡・出土遺物

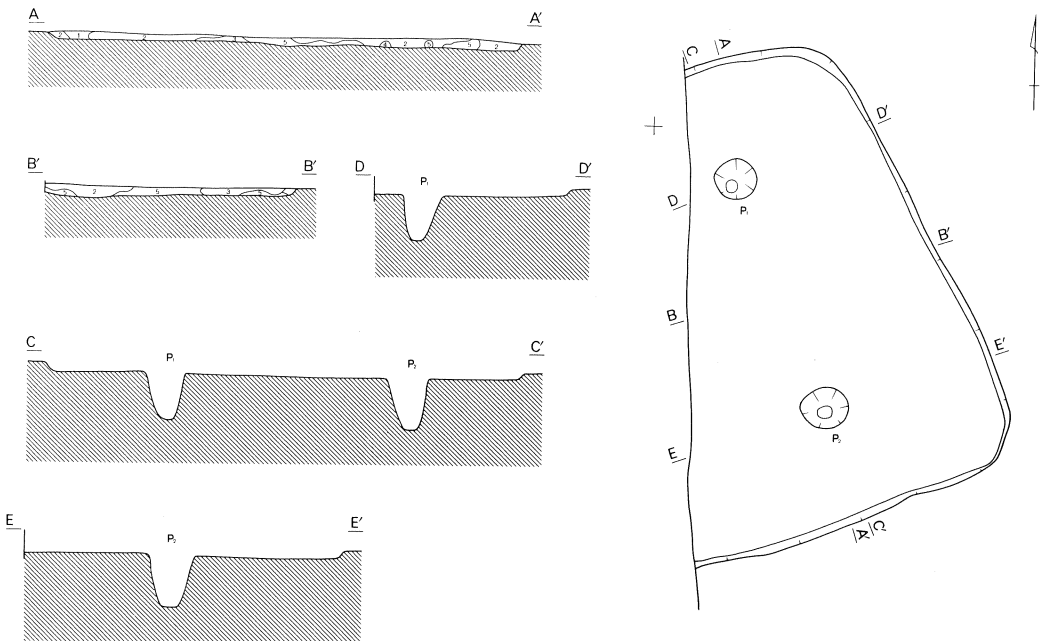
2.9mである。確認面からの深さは52cmである。方位は西辺を基準にするとN-22°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦で拡張前の部分は貼床をしている。貯蔵穴は検出されなかった。柱穴はP1が拡張後、P2は拡張前のものと考えられP2はその形状から抜き取られたものと考えられる。覆土はP1が黒褐色土でローム粒を若干含む。P2は暗褐色土でローム粒を多量に含みしまりは悪い。壁溝はおそらく全周すると思われる。拡張前の壁溝は南辺では90cm、西辺では約50cm内側を巡っている。

カマドは検出されなかった。調査区外にあるものと思われる。

遺物は覆土中から坏の破片が出土している。

第42号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (10.3) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 砂粒	明赤褐	20	セクションベルト	233	



1. 灰褐色 しまり良。砂質。焼土粒・炭化粒含む。
2. 暗褐色 しまり良。粘質。ローム粒、炭化粒微量含む。
3. 黒褐色 しまり良。ロームブロック斑状に含む。
4. 暗褐色 ややしまり弱。ローム粒含む。炭化物なし。
5. 黄褐色 ローム粒多量含む。

水糸標高=10.600m

0 2m

第97図 第44号住居跡

第43号住居跡（第96図）

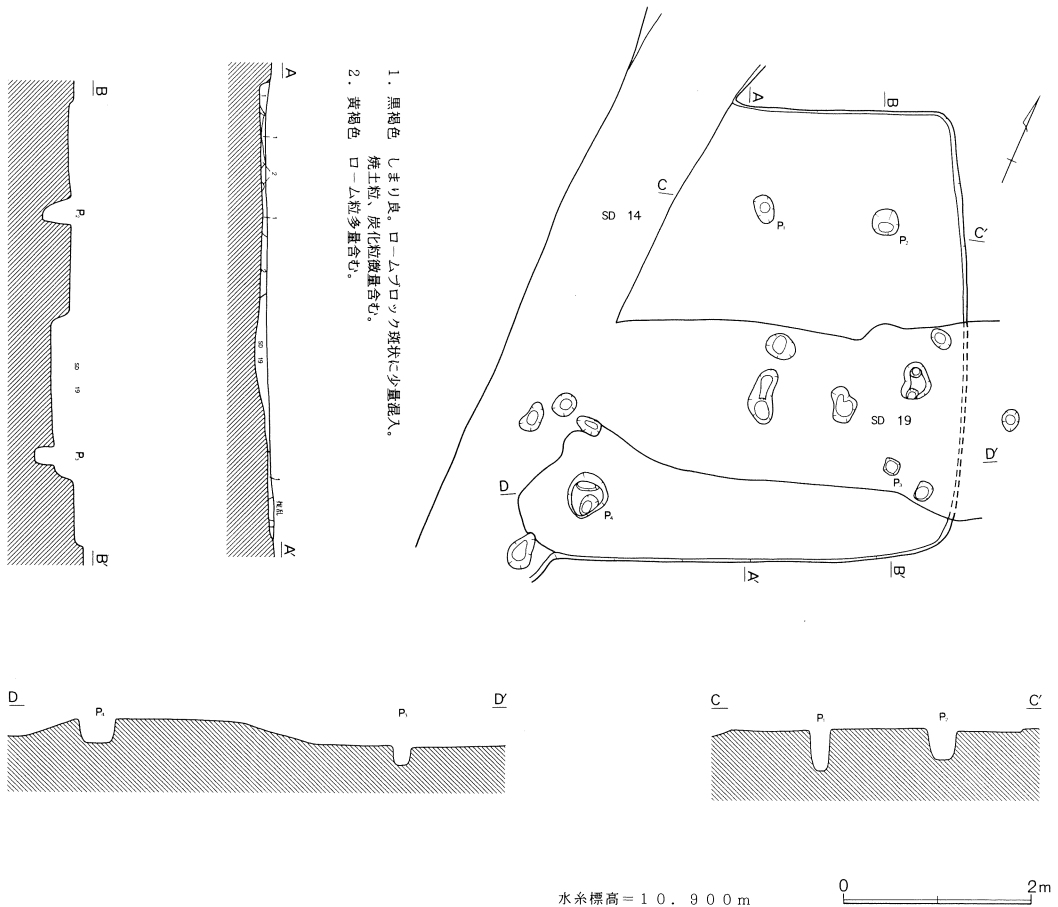
大部分が調査区外にかかる。北東隅部分が検出されたのみである。他の遺構との重複はない。規模、平面形などは不明である。確認面からの深さは30cmである。壁はややなだらかに掘り込まれている。床面にはピットが1個検出されたが柱穴になるものかどうかはわからない。位置的には貯蔵穴となる可能性もある。覆土は暗黄褐色でロームが多量に混じっている。壁溝は巡っている。

カマドは検出されなかった。調査区外にあると思われる。

遺物は出土しなかった。

第44号住居跡（第97図）

約半分ほどが調査区外にかかる。他の遺構との重複はない。平面形は隅丸方形になると思われる。規模は東辺で5.1m、南辺は3.6mまで確認されている。確認面からの深さは10cmである。主軸方位は東辺でN-23°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1、P2が検出された。主柱穴と考えられる。覆土は黒褐色で上位にはローム粒が混じる。壁溝は検出されなかった。



第98図 第45号住居跡

カマドも検出されなかった。
遺物は図示できるものはない。

第45号住居跡（第98図）

14号溝、19号溝と重複する。これらより古い。平面形は隅丸方形である。規模は南北が4.7m東西は14号溝に切られているため不明であるがほぼ同じくらいと思われる。確認面からの深さは3cmと浅い。軸方位は東辺を基準としてN-25°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。

ピットはP2～P4が支柱穴と考えられる。覆土は黒褐色土を基調としローム粒を含む。P1も住居跡に伴うものと考えられる。壁溝は検出されなかった。

カマドは検出されなかった。
遺物は土錘が1点出土しているのみである。

第45号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存	註記番号	実測番号
1	5.8	1.4	0.3	10.22	完形		656

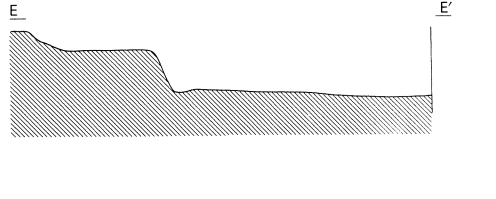
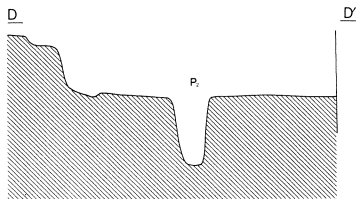
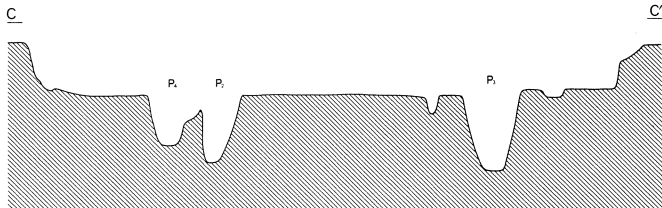
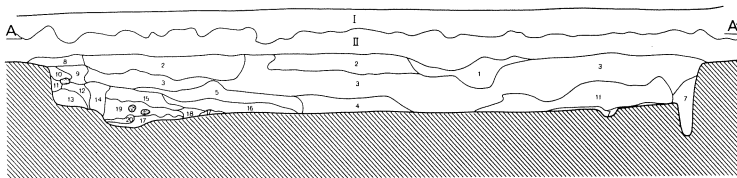
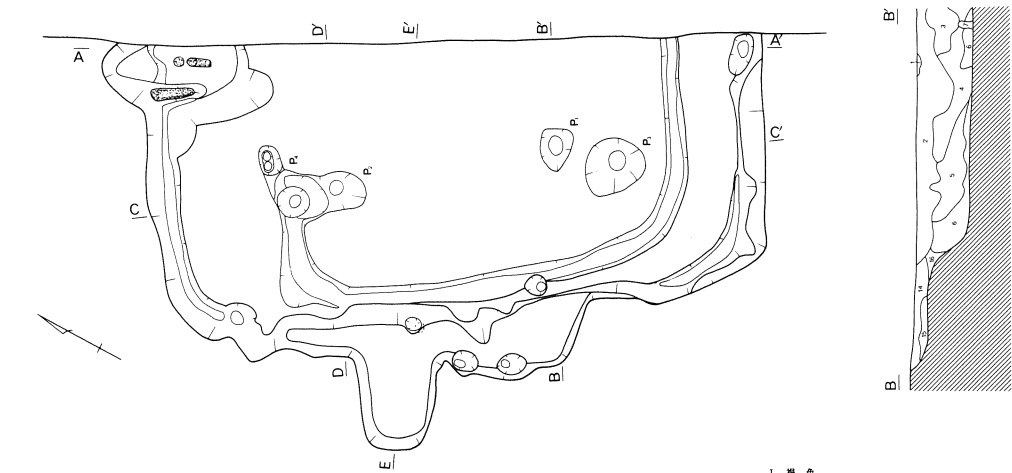
第46号住居跡（第99図）

約半分が調査区外にかかる。47号土坑と重複するが新旧関係はつかめなかった。壁溝、柱穴の状態から拡張されていると判断される。平面形は基本的には方形になるものと思われる。規模は西辺が6.6m、北辺は3mほど検出されている。確認面からの深さは58cmである。主軸方位はN-37°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。調査区外にあるものと思われる。柱穴はP1、P2が拡張前、P3、P4は拡張後のものである。覆土は前者が暗褐色を基調としロームブロックを含むのに対し後者は黒褐色でローム粒を少量含んでいる。壁溝は北辺と南隅で検出された。内側には拡張前の壁溝が巡る。

カマドは北壁に設けられていた。半分は調査区外に出ている。袖には切り石が用いられている。

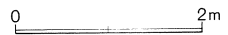
第46号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	胎土	色調	残存%	註記No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (12.4) 底径 — 高さ 3.9 最大径 —	白色粒 礫 砂粒		20	Bグリッド	235	
2	〃	口径 (9.7) 底径 — 高さ 4.9 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	40	Bグリッド	234	

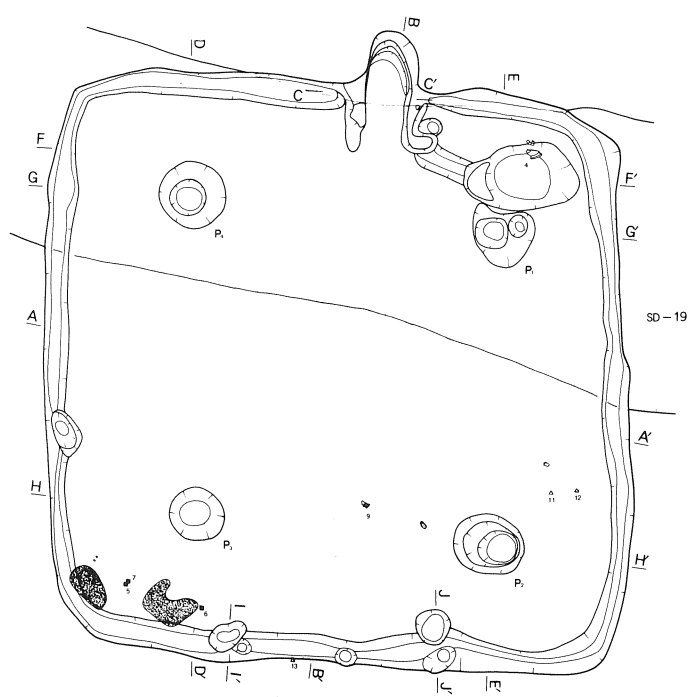
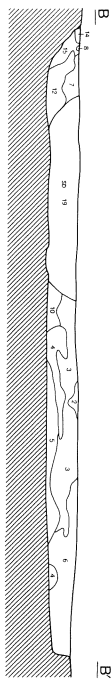


1. 褐色
- II. 灰褐色
1. 黒褐色 しまり良、焼土粒微量含む。
2. 黒褐色 しまり良、やや砂質、焼土粒微量含む。ローム粒混入少、やや灰色っぽい。
3. 黒褐色 しまり良、ローム粒・焼土粒微量含む。炭化物微量含む、やや黒っぽい。
4. 黒褐色 しまり良、2層に類似、炭化物微量含む。
5. 褐色 しまり良、ローム粒・ロームブロック含む。炭化物微量含む。
6. 黒褐色 しまり良、ローム粒多量混入。
7. 黒褐色 ローム粒混入。
8. 黄褐色 しまり良、焼土粒・炭化物微量に混入。
9. 黄褐色 しまり良、ローム粒少量含む、焼土粒微量含む。
10. 褐色 しまり良、やや砂質、赤味を帯びている。
11. 黒褐色 しまり弱、やや黄味を帯びている、焼土粒含む。
12. 赤褐色 しまり弱、焼土ブロック多量含む。砂質土とロームブロック等に混入。
13. 黒褐色 しまり1層より弱、やや黒色味を帯びている。焼土ブロック(4mm~1cm)混入少。
14. 黒褐色 しまり弱、やや黄味を帯びている。少量の焼土ブロック(3~4cm)と炭化物混入。
15. 黄褐色 粘質性、しまり良、焼土粒混入多、赤味を帯びる。
16. 黒褐色 しまり良、やや砂質、焼土粒少量、ローム粒混入多。
17. 黒褐色 しまり良、焼土粒(3~4cm)混入少。
18. 赤褐色 しまり弱、やや砂質、焼土粒大量を含む。焼土ブロック少量含む、赤っぽい色。
19. 褐色 しまり弱、焼土粒大量を含む、焼土ブロック少量含む赤っぽい色。
20. 赤褐色 焼土ブロック(3~4cm)混入、焼土粒多量含む。

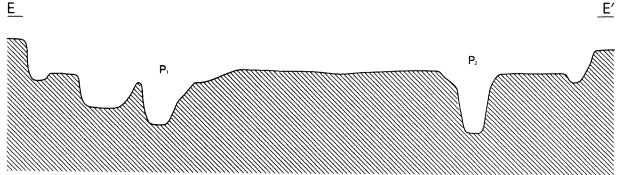
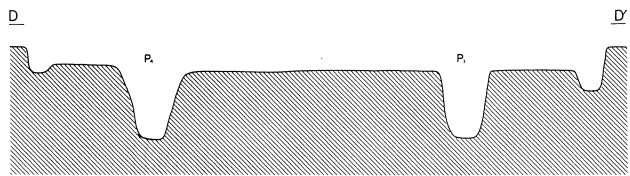
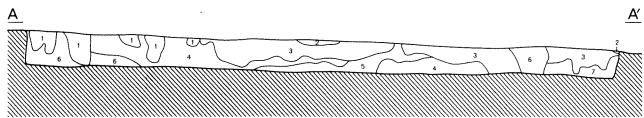
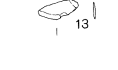
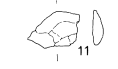
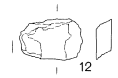
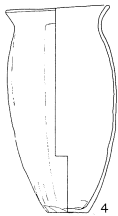
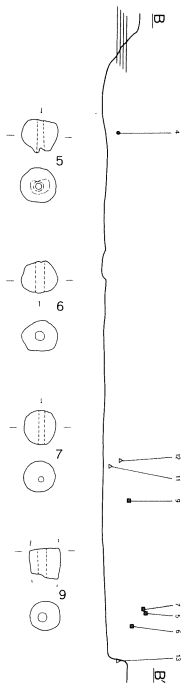
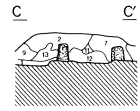
水系標高 = 10.500 m



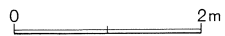
第99図 第46号住居跡



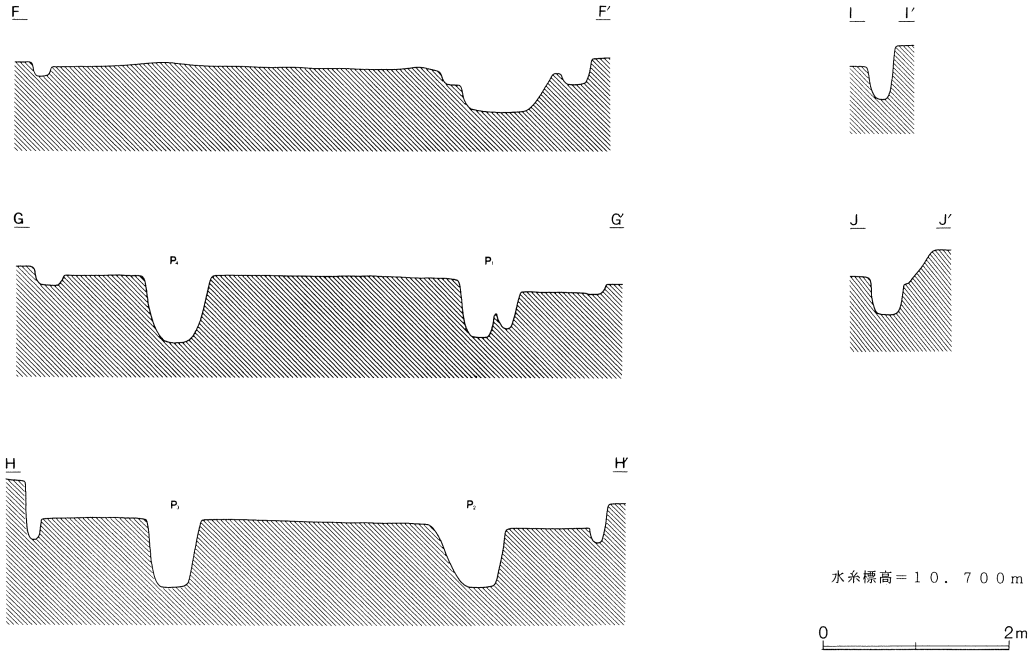
1. 灰褐色 しまり皮。砂質。
2. 暗黒褐色 しまり皮。微量の焼土混入。
3. 褐色 ロームブロック少量しまりに混入。
4. 褐色 しまり皮。焼土粒(4.5mm)、炭化粒(5mm)含む。
5. 暗褐色 しまり皮。ローム粒含む。
6. 暗褐色 しまり皮。ローム粒含む。
7. 黒褐色 しまり皮。焼土混入し赤味を帯びる。
8. 黒褐色 しまり皮。焼土ブロック、黒褐色土混入。
9. 褐色 しまり皮。焼土粒により赤味帯びた色調。焼土ブロック少量含む。
10. 黒褐色 しまり皮。ローム粒含む。
11. 赤褐色 焼土粒多量含む。砂質。
12. 赤褐色 焼土ブロック。
13. 黄色 カマド別荘土。
14. 黄褐色 ロームブロック。
15. 赤褐色 しまり皮。11層より超粒焼土粒均一に含む。



水系標高 = 10.700 m



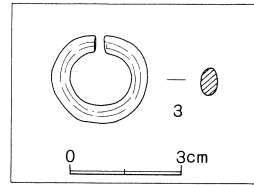
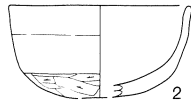
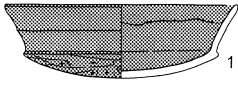
第100図 第47号住居跡(1)



第101図 第47号住居跡(2)

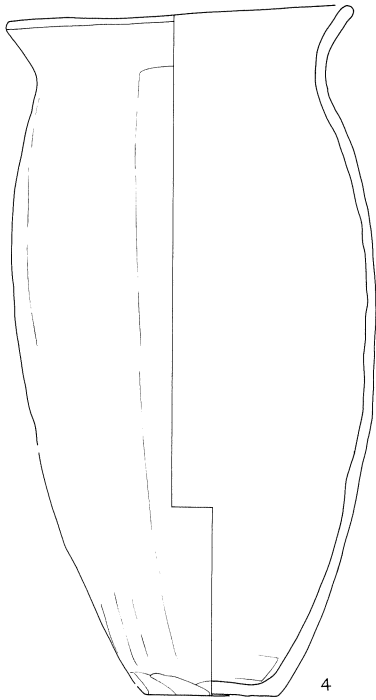
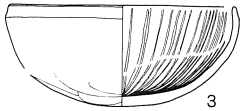
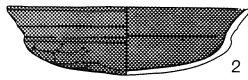
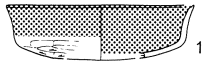
第47号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (10.1) 底径 — 高さ 2.9 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		30	Dグリッド	236	
2	ク	口径 (13.0) 底径 — 高さ 3.6 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	30	Aグリッド	237	
3	ク	口径 (12.1) 底径 — 高さ 5.4 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒		30	Cグリッド	239	
4	甕	口径 19.3 底径 7.0 高さ 36.1 最大径 19.4	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	60	10, 貯蔵穴	238	

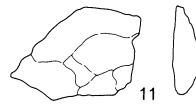
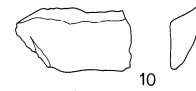
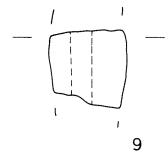
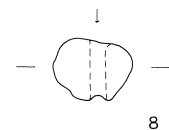
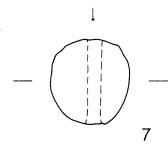
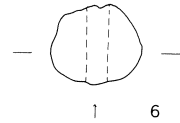


S J 4 6

S J 4 7



0 10cm



0 5cm

第102図 第46・47号住居跡出土遺物

第47号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存	註記番号	実測番号
5	—	2.4	0.4	9.14	完形	2	660
6	—	2.4	0.6	8.15	完形	3	658
7	—	2.1	0.3	8.36	完形	1	659
8	—	2.1	0.4	4.57	完形	Cグリッド	661
9	(2.1)	2.0	0.6	(7.09)	1/4	4	657

第47号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量(g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	×	よこ × 厚さ				
10	31	×	17 × 8	4.40	剥片	床	912
11	35	×	25 × 7	7.00	剥片	8	909
12	42	×	27 × 10	16.82	剥片	9	910
13	27	×	14 × 1	1.00	剥片	13	911

焚口の幅はわからないが奥行きは150cmである。煙道はない。

遺物は覆土中から坏、耳環が出土している。

耳環 3は錆化が進んでいるが内側と外側には金箔が残っている。断面は楕円形である。環径26mm×23mm、断面7mm×4mm、重量14.84g。

第47号住居跡（第100図）

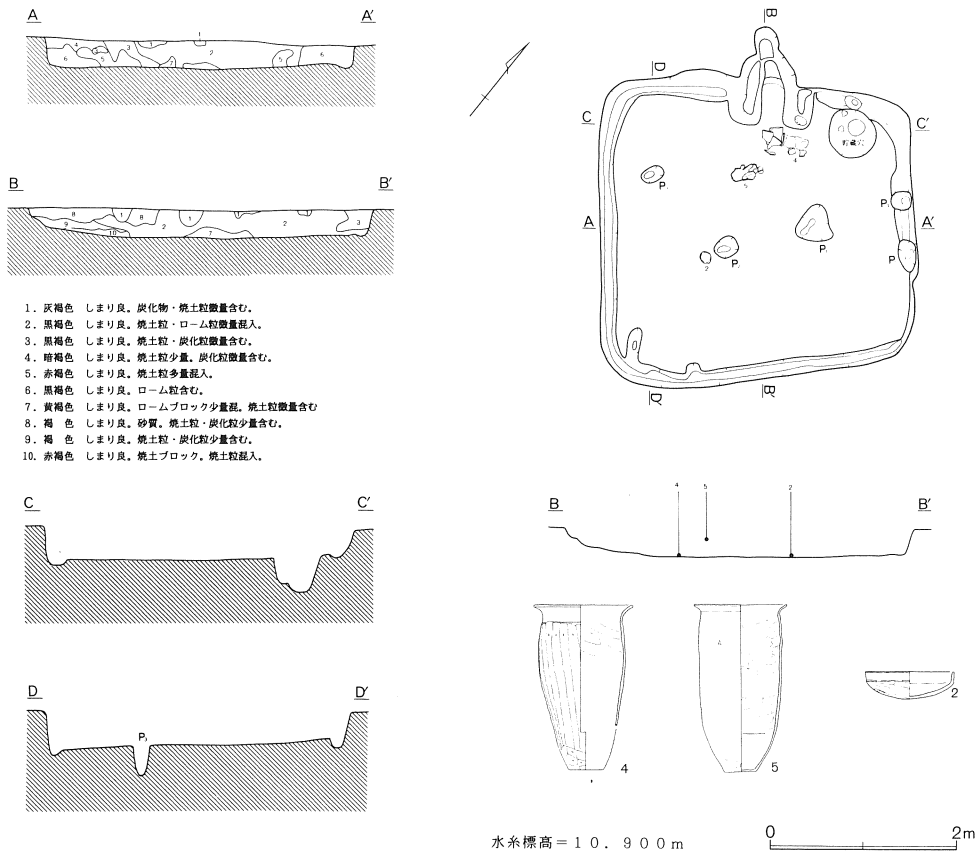
19号溝と重複する。溝より古い。平面形は隅丸方形である。規模は6.1m×6mで確認面からの深さは20cmである。主軸方位はN-35°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。住居跡中央部分は良く踏み固められている。南隅には焼土が認められた。貯蔵穴は北隅に検出された。長方形の掘り込みで上面120cm×70cmほどで深さは44cmである。覆土は黒褐色土でローム粒をやや多めに含む。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。覆土は黒褐色でローム粒を少量含む。南東辺には壁際にピットが並んで検出された。

壁溝は全周する。壁溝の覆土は黒褐色土でしまりが弱くロームの小ブロックを大量に含む。

カマドは北壁中央に設けられていた。袖の先端部は19号溝によって壊されており遺存状態はあまり良くない。構築材には砂岩の切り石が使われていた。

焚口の幅は42cmほどと思われ奥行きは100cmである。煙道は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴上面から甕の破片が出土している他は土玉等が出ている。



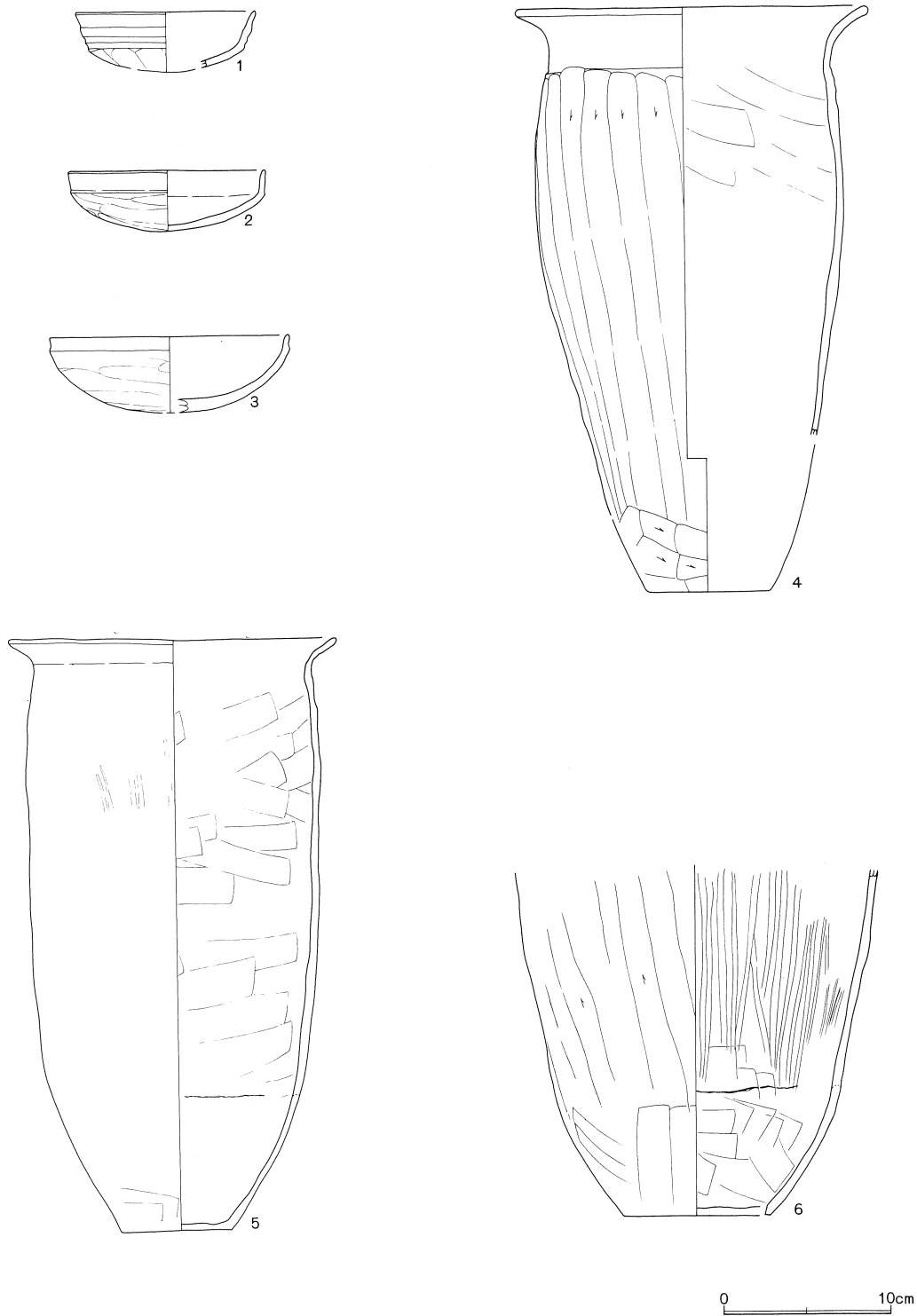
第103図 第48号住居跡

第48号住居跡 (第103図)

平面形は隅丸方形である。東辺が西辺より短いため台形状を呈する。他の遺構との重複はない。規模は北辺と西辺で3.3m×3.3mで確認面からの深さは32cmである。主軸方位はN-39°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は緩い起伏をもつ。貯蔵穴は北隅に検出された。円形の掘り込みで直径50cmほどで深さは35cmである。ピットは床面に3個、東壁際に2個検出されたが

第48号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (10.8) 底径 — 高さ (3.6) 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	30	Cグリッド	245	
2	ク	口径 11.9 底径 — 高さ 3.6 最大径 —	礫 砂粒	ク	100	6	243	



第104図 第48号住居跡出土遺物

第48号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
3	坏	口径 (14.5) 底径 — 高さ 4.6 最大径 —	赤色粒 砂粒	橙褐	40	Aグリッド	244	
4	甕	口径 21.0 底径 (7.3) 高さ 34.9 最大径 18.4	赤色粒 礫 砂粒	〃	70	1	242	
5	〃	口径 (19.6) 底径 6.5 高さ 35.3 最大径 17.7	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	70	5, カマド	241	
6	甌	口径 — 底径 8.8 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 雲母 砂粒	〃	胴下半	B・Cグリッド	240	

P 1、P 2 を柱穴と考えておきたい。覆土は黒褐色土が基調でローム粒を含む。壁溝は全周せず東隅で切れる。

カマドは北壁中央に設けられていた。袖には切り石が用いられていたと思われ右袖先端部に小塊が認められた。焚口の幅は22cmで奥行きは62cmである。煙出し部分の長さは20cmである。

遺物はカマド周辺の床面から甕、甌などが出土している。

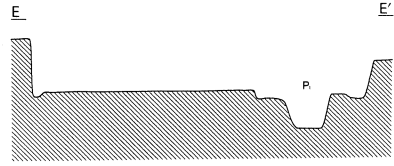
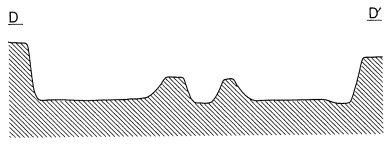
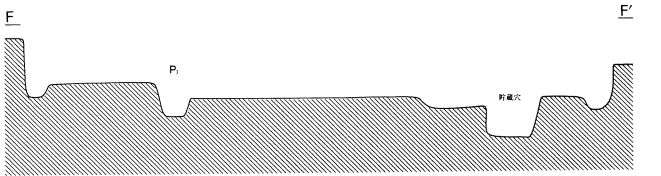
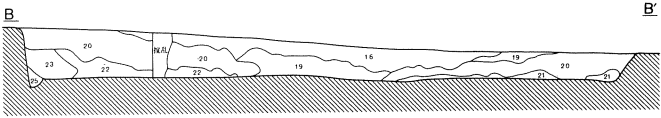
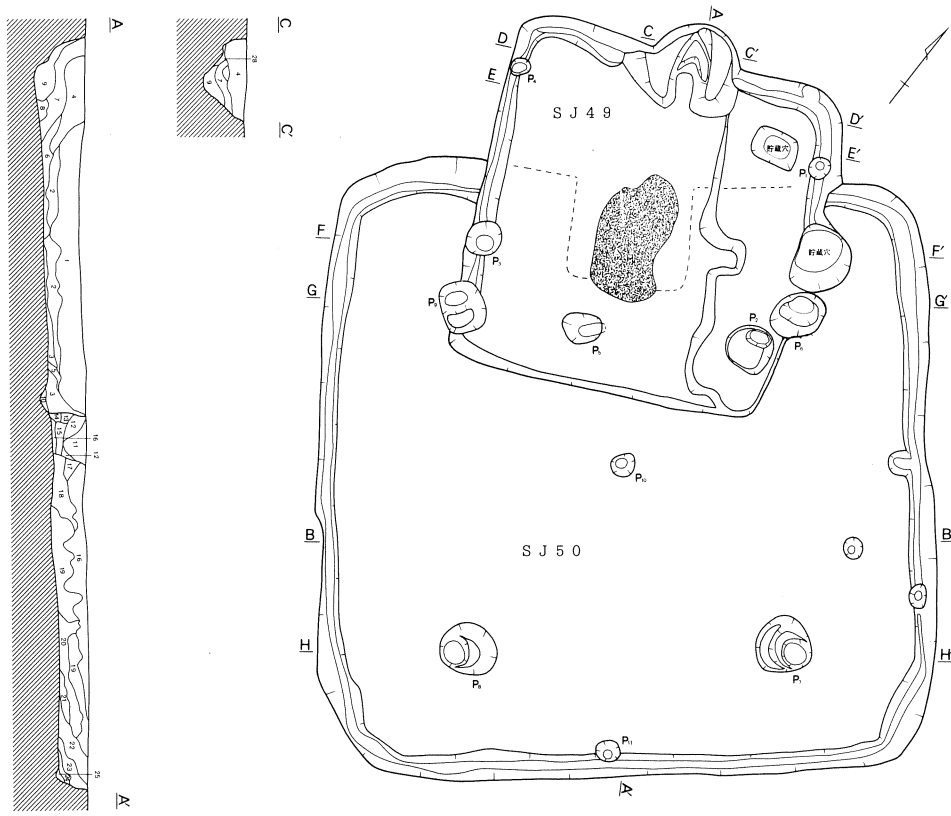
第49号住居跡（第105図）

50号住居跡と重複する。50号住居跡より新しい。平面形は方形である。規模は3.8m×3.7mで確認面からの深さは60cmである。主軸方位はN-27°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は50号住居跡の貯蔵穴、ピットをローム混じりの暗褐色土で埋めて作っている。東側3分の1が1段下がる。貯蔵穴は住居跡の北東隅に検出された。長方形の掘り込みで上面50cm×36cmほどで深さは34cmである。覆土は黒褐色土でローム粒、焼土粒を若干含む。ピットはP 1～P 4が柱穴と考えられる。P 5は本住居跡に伴うものと考えられる。覆土は黒褐色土を基調としローム粒をわずかに含む。壁溝は全周せず南辺と東辺の南側半分は検出されなかった。

カマドは北壁中央に設けられていた。遺存状態は比較的良く両袖ともきれいに残っていた。袖の幅が広くその分焚口が狭くなっている。焚口の幅は25cmで奥行きは90cmである。

遺物は坏及び長頸壺の破片などが床面から出土している。

砥石 4 は床面から出土した。断面台形状を呈するがこのうち広い2面を使っている。特に1面はよく使われて平坦な面となっている。

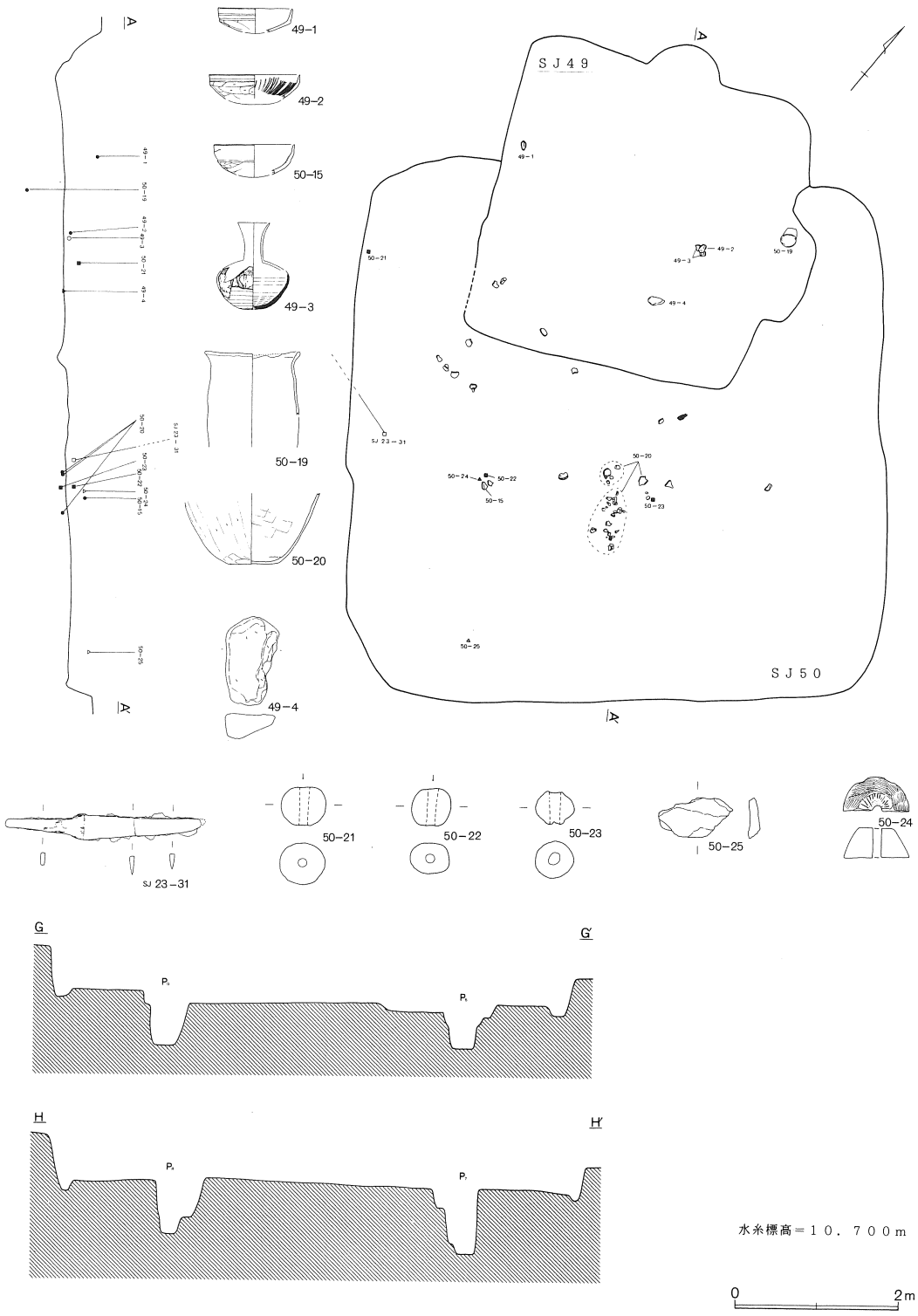


1. 黒褐色 焼土含む。赤色土・ローム粒・若干含む。
2. 黒褐色 1層に類似。よりしまっている。
3. 黒褐色 1層に類似。混入物少ない。
4. 黒褐色 炭化物多い。
5. 暗褐色 炭化物、焼土多量含む。
6. 暗褐色 5層に類似。より黒い。
7. 赤褐色 焼土粒(1cm)多量含む。
8. 赤褐色 砂岩粒を若干含む。焼土多量含む。
9. 黒褐色 8層に類似。より黒っぽい。
10. 暗褐色 極薄の埴土。ローム、黒色土混入。
11. 暗褐色 ローム粒・焼土粒若干含む。
12. 暗褐色 11に類似。大粒のローム(3cm~5cm)含む。
13. 暗褐色 黒褐色土にロームがしみ状に混入。
14. 暗褐色 焼土若干含む。ローム崩土含む。
15. 黄褐色 ローム混入土。
16. 黒褐色 ローム粒・赤色粒が微粒状に混入。
17. 黒褐色 しまり度。焼土粒、炭化物が微粒状に混入。
18. 黒褐色 しまり度。ローム粒(0.2cm)全体を含む。
19. 黄褐色 しまり度。ローム全体を含む。
20. 暗褐色 19層類似。ロームブロック、黒色土斑状を含む。
21. 黄褐色 しまり度。ロームを70%近く含む。
22. 暗褐色 しまり度。20に類似。ローム粒少ない。
23. 黒褐色 しまり度。ローム粒若干含む。
24. 黄褐色 しまり度。上位にローム崩土含む。
25. 暗褐色 埴土の埴土。ローム粒・黒色土粒混入。
26. 黄褐色 床面漸層汚れ。
27. 黄褐色 白色土含む。やや砂っぽい。
28. 黄褐色 ローム多い。

水糸標高 = 10,700m

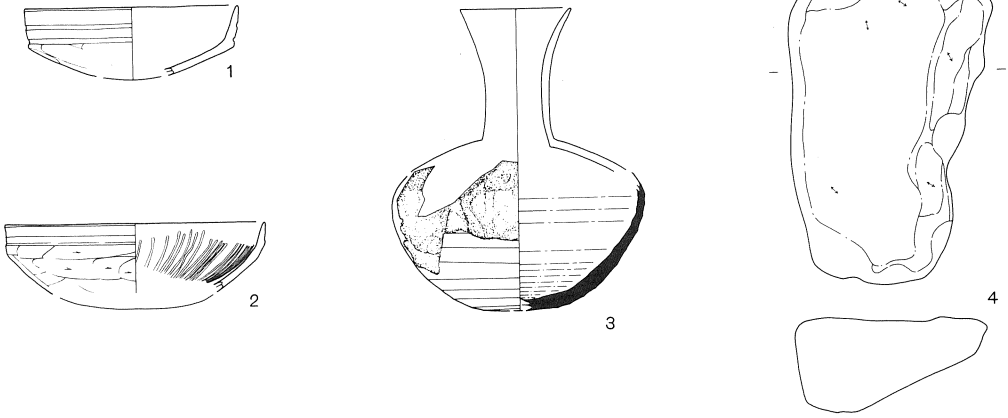


第105図 第49・50号住居跡(1)

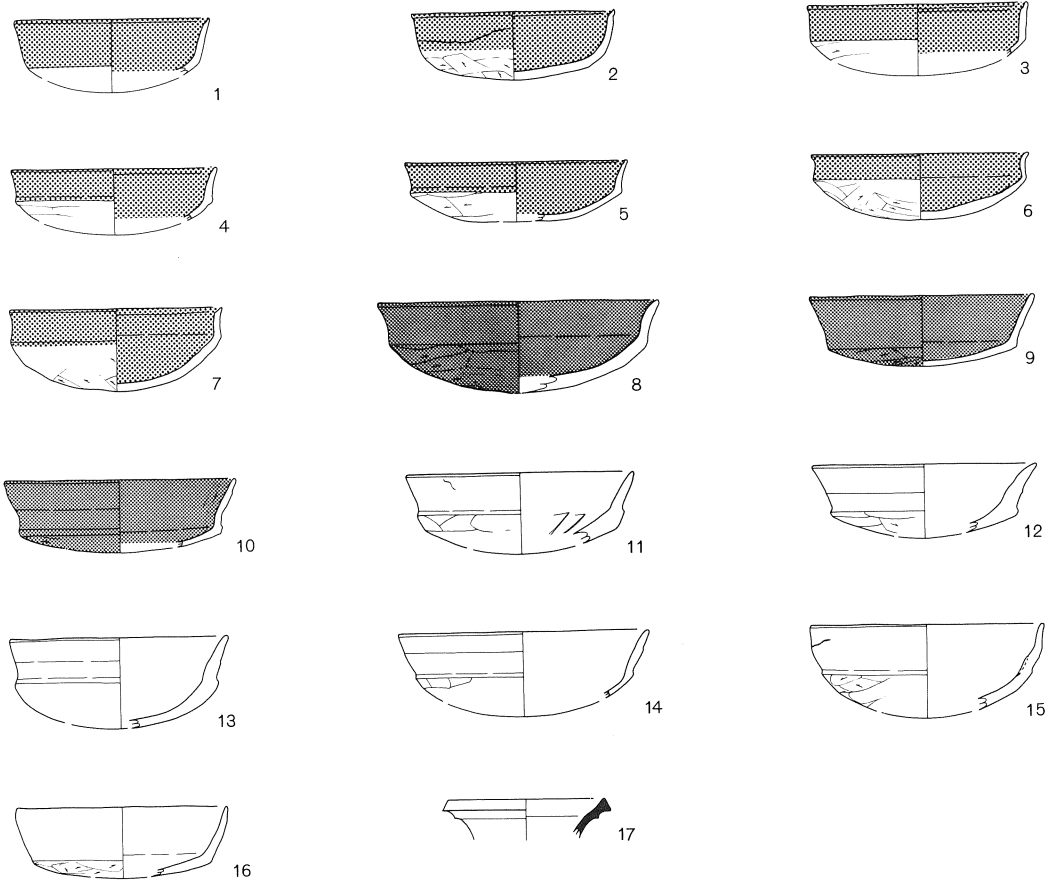


第106図 第49・50号住居跡(2)

S J 4 9

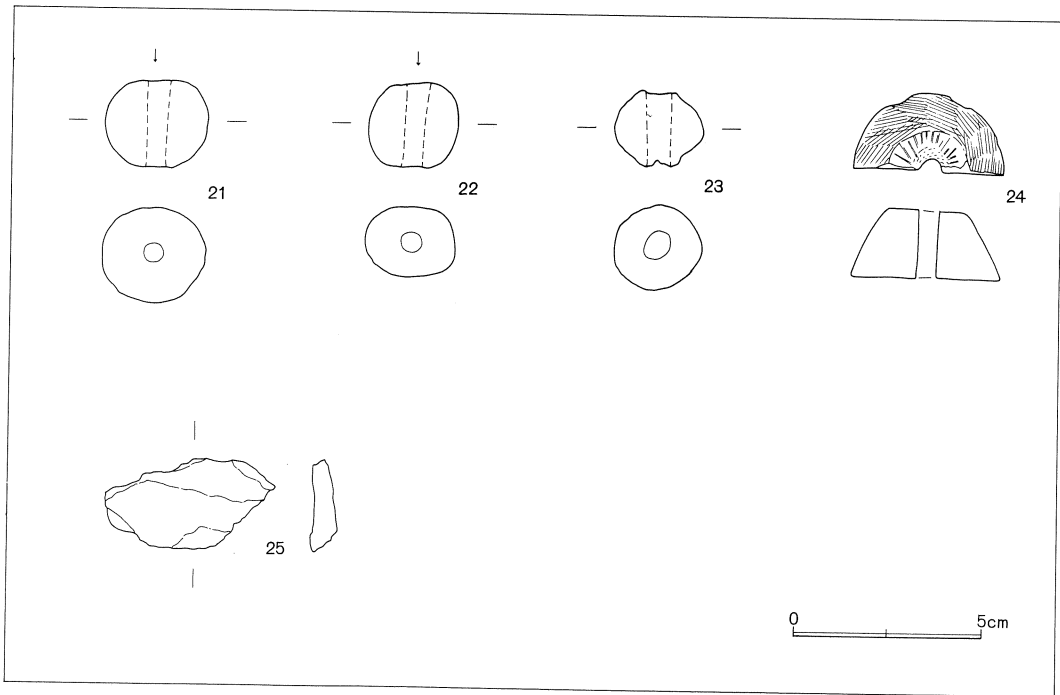
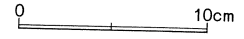
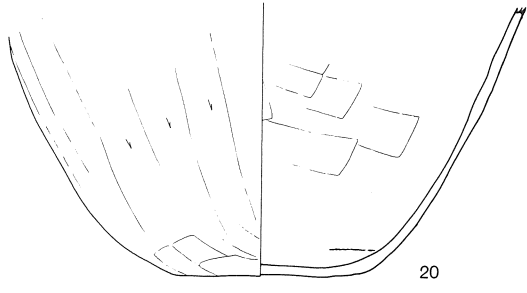
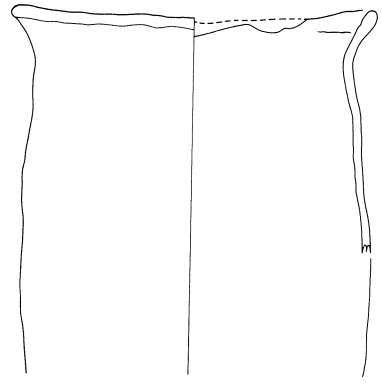
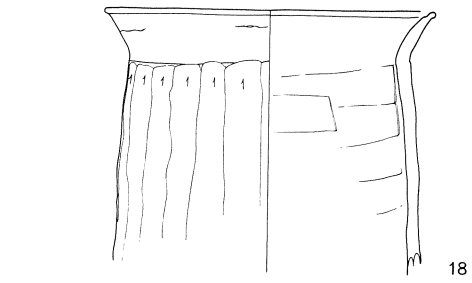


S J 5 0



0 10cm

第107図 第49・50号住居跡出土遺物(1)



第108图 第50号住居跡出土遺物(2)

第49号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (11.4) 底 径 — 高 さ (3.9) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	40	1	246	
2	ク	口 径 (13.9) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	ク	30	6, Cグリッド	563	
3	長頸瓶	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 13.5	黒色粒 砂粒	灰黄褐	体下半50	6, カマド内	553	

第50号住居跡 (第105図)

49号住居跡と重複し、これより古い。平面形は方形である。規模は6.6m×6.6mで確認面からの深さは50cmである。主軸方位はN-38°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は北東隅に検出された。上面を49号住居跡によって壊されている。残存している面で70cm×60cmほどである。深さは46cmである。覆土はローム混じりの暗褐色土で埋められており炭化物、焼土、焼けた砂質土を多く含むことからカマドを壊した時に埋められたものと思われる。ピットはP6～P9が主柱穴と考えられる。覆土はP8、P9が黒褐色土で炭化物、焼土粒ロームを含む。P6、P7は暗褐色土でロームをブロック状に含む。いずれも良くしまっている。P10、P11も住居跡に伴うものと考えられる。覆土は黒褐色土でローム粒を少量含みやや柔らかい。壁溝は49号住居跡によって壊されている部分はわからないが他は全周する。

カマドは北壁中央に設けられていた。49号住居跡によって破壊されており、燃烧部底面の焼土が残っていたのみである。袖等は全く残っていなかったが貯蔵穴の覆土に焼けた砂質土が含まれていたことから砂岩の切り石が使われていたことも考えられる。

遺物は住居跡中央部を中心として坏、甕、土玉等が出土している。

紡錘車 24は覆土中からの出土である。半分に分れている。上面は右回りの整形痕が残る。下面はわずかに整形痕が残るがよく研磨され平滑である。側面は面取りされた後横方向の細かい整形痕が残る。孔の断面は上下とも径が等しくきれいに通っているが上面にはあきらかに孔のまわりに回転した痕跡があり、下面にも同様のものがごくわずかではあるが認められることから穿孔は両方向から行われたものと考えられる。上面径2.1cm、下面径4.0cm、孔径6mm、重量20.15g。滑石製。

第50号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (10.5) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		30	Bグリッド	833	
2	ク	口 径 (10.9) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		40	Cグリッド	254	
3	ク	口 径 (11.8) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		30	Cグリッド	831	
4	ク	口 径 (11.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		20	Cグリッド	834	
5	ク	口 径 (11.9) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		20	Bグリッド	832	
6	ク	口 径 (11.6) 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		30	Aグリッド	250	
7	ク	口 径 (11.5) 底 径 — 高 さ 4.4 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		40	Aグリッド	249	
8	ク	口 径 (15.0) 底 径 — 高 さ 4.9 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		40	Cグリッド	256	
9	ク	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ 3.8 最大径 —	白色粒 砂粒	暗赤褐	30	ク	253	
10	ク	口 径 (12.4) 底 径 — 高 さ 3.9 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	黒褐	40	ク	252	

第50号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
11	坏	口 径 (12.1) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	にぶい赤褐	20	Cグリッド	829	
12	ク	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	20	ク	828	
13	ク	口 径 11.7 底 径 — 高 さ 4.8 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	50		258	
14	ク	口 径 (13.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	明黄褐	20		830	
15	ク	口 径 (12.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	にぶい赤褐	30	2, Cグリッド	255	
16	ク	口 径 (11.2) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	30	Cグリッド	257	
17	長頸壺	口 径 (8.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒	灰白	口縁 30	A, Cグリッド	545	
18	甕	口 径 (17.5) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	口縁 30	Aグリッド	247	
19	ク	口 径 (19.1) 底 径 — 高 さ — 最大径 18.7	赤色粒 礫 砂粒	ク	胴上半	22	248	
20	ク	口 径 — 底 径 9.9 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	胴下半	16, 17, 18	251	

第50号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
21	—	2.8	0.5	11.07	完形	1	662
22	—	2.4	0.5	8.35	完形	6	663
23	—	2.4	0.6	7.17	完形	8	664

第50号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて × よこ × 高さ						
25	46 × 25 × 7			7.69	剥片	15	913

第51号住居跡 (第109図)

平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は6.2m×6mで確認面からの深さは36cmである。主軸方位はN-26°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。西隅及び東隅には段が設けられている。貯蔵穴は北東隅に検出された。輪郭が乱れているが88cm×65cmほどで深さは15cmである。覆土は暗褐色で上位には焼土粒、ローム粒を含み下位は混入物は少ない。またカマドの袖材と思われる焼けた砂岩のブロックが落ち込んでいた。ピットはP1～P4が支柱穴である。覆土は黒褐色でローム粒を大量に含みやや軟質である。壁溝は検出されなかった。

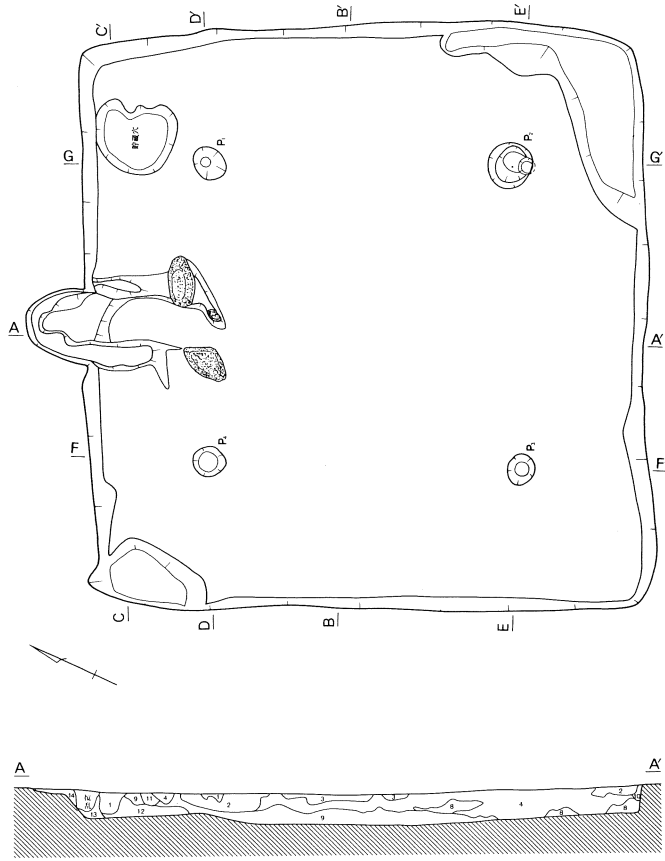
カマドは北壁中央に設けられていた。構築材には砂岩の切り石が使われていた。破壊されたものと思われカマド前面及び貯蔵穴の中に散乱していた。

焚口の幅は40cmほどと思われ奥行きは150cmである。

遺物は貯蔵穴から甕が出土しているほか坏が数点出土した。

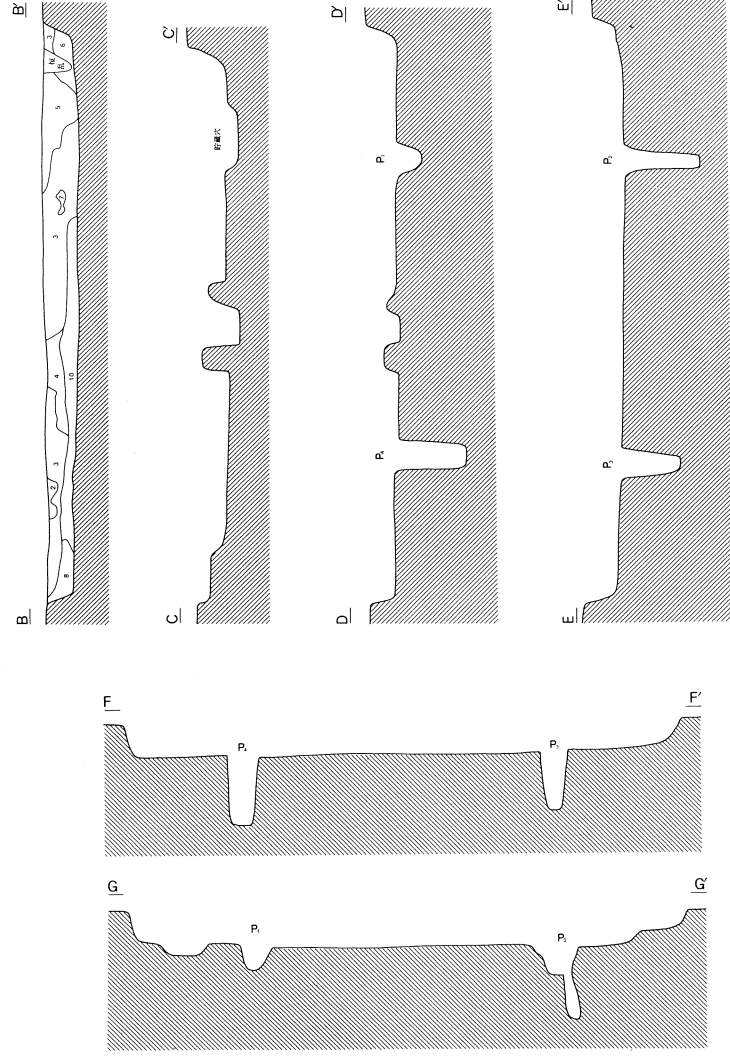
第51号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 10.6 底 径 — 高 さ 3.6 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	明赤褐	90	6, Aグリッド	265	
2	ク	口 径 (11.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	20	Bグリッド	266	



1. 灰褐色 しまり良。砂質。炭化粒・焼土粒含む。
2. 黒褐色 しまり弱。ロームを斑状に含む。
3. 暗褐色 4層類似。色調はやや明るい。
4. 黒褐色 しまり弱。ロームブロック斑状。炭化粒少
5. 褐色 しまり良。ローム粒・炭化粒少量含む。
6. 明褐色 しまり弱。ローム粒含む。
7. 褐色 ロームブロック混入。

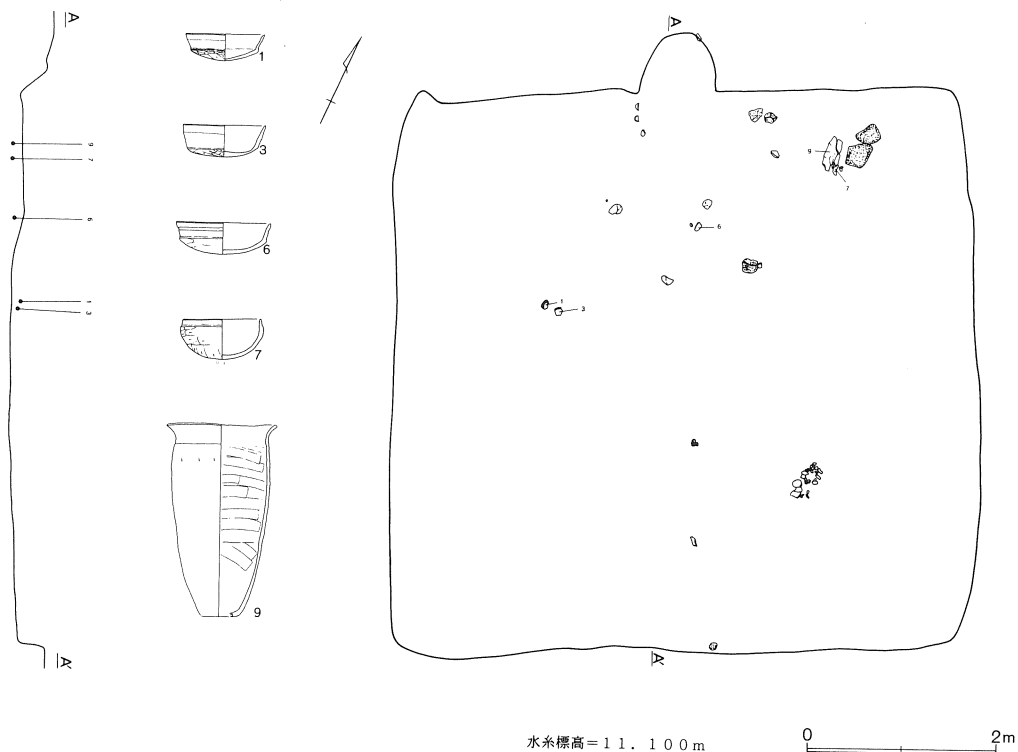
8. 黒褐色 しまり良。焼土粒・炭化粒・ローム粒多量
9. 赤褐色 しまり弱。焼土粒・炭化粒・ローム粒含む
10. 黄褐色 ロームブロック。壁崩壊土。
11. 黄褐色 しまり良。焼土ブロック少量含む。
12. 黄褐色 やや粘質。11層類似。細粒ローム混入。
13. 黄褐色 砂質。焼土混入。
14. 赤褐色 焼土微量含む。



水準標高=11.100m

0 2m

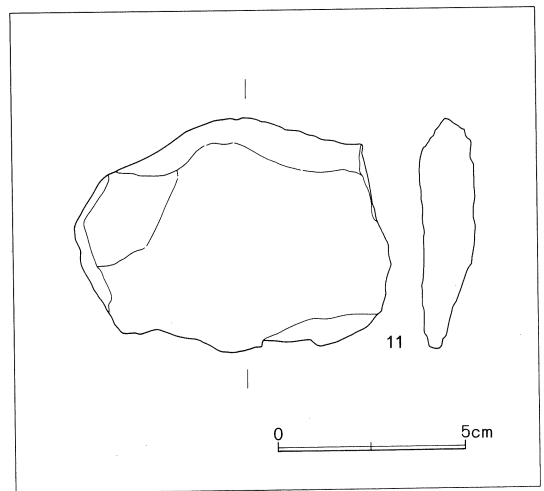
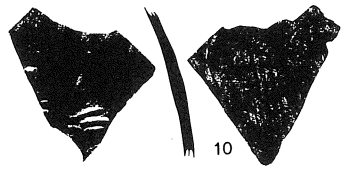
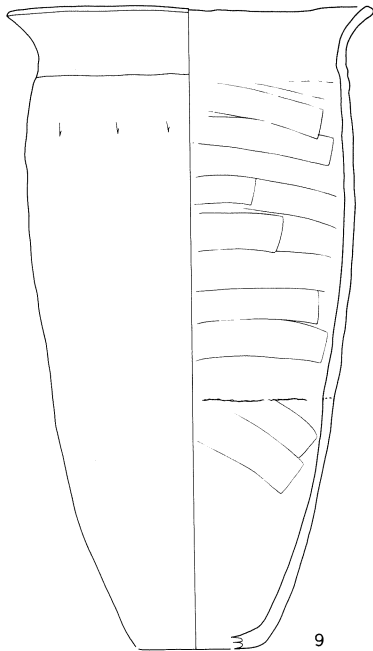
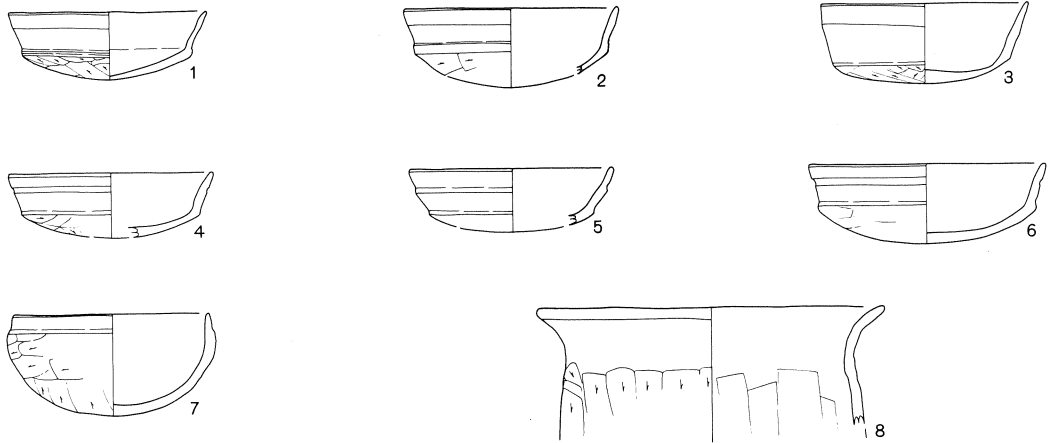
第109図 第51号住居跡(1)



第110図 第51号住居跡(2)

第51号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
3	坏	口径 11.0 底径 — 高さ 4.2 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	60	9, C・Dグリッド	264	
4	ク	口径 (10.8) 底径 — 高さ 3.5 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	30	Bグリッド	261	
5	ク	口径 (10.8) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 砂粒	ク	30	Bグリッド	262	
6	ク	口径 (12.6) 底径 — 高さ 4.2 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	ク	60	10, A・Bグリッド	263	



0 10cm

0 5cm

第111図 第51号住居跡出土遺物

第51号住居跡出土遺物（3）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
7	坏	口径 (10.4) 底径 — 高さ 5.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	40	16, Bグリッド	260	
8	甕	口径 18.5 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	口縁 60	A~Cグリッド	259	
9	ク	口径 19.3 底径 (6.2) 高さ 34.0 最大径 17.5	赤色粒 礫 砂粒	ク	90	16, Bグリッド	267	
10	ク	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	灰	破片		51-45	叩き幅 3本/cm

第51号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法量 (mm)			重量 (g)	種類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
11	85	62	15	98.53	原石	Bグリッド	767

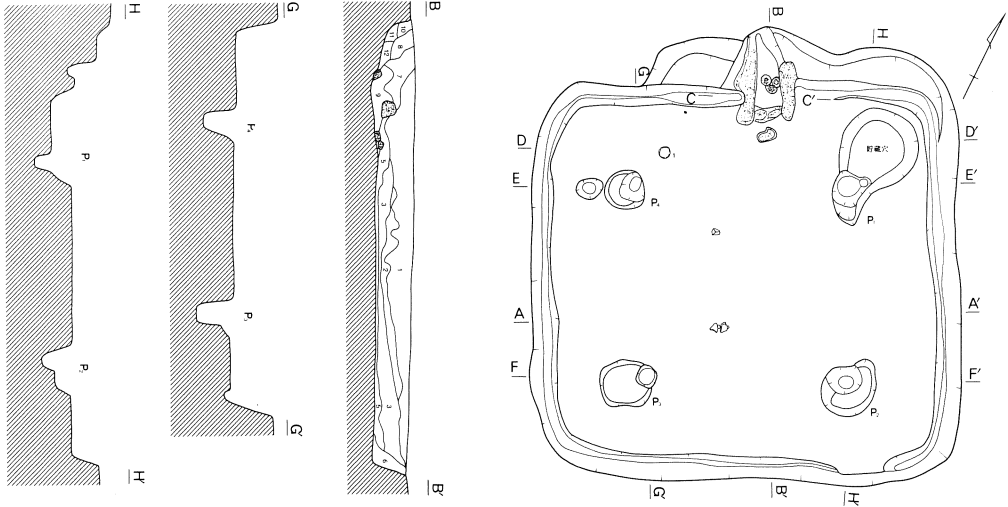
第52号住居跡（第112図）

平面形は基本的には隅丸方形である。北辺のカマドの両側が30~40cm張り出している。規模は4.6m×4.2mで確認面からの深さは44cmである。主軸方位はN-27°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は北隅に検出された。円形に近い掘り込みで径82cmほどで深さは24cmである。覆土は黒褐色でロームが全面に含まれる。ピットはP1~P4が支柱穴と考えられる。覆土は暗黄褐色でローム粒、ロームブロックを含む。柱穴は重複している様などもあり、土層の観察では確認されなかったが拡張されている可能性もある。壁溝は全周せずカマド東側と南辺東よりのところがわずかに切れる。

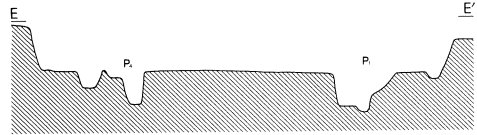
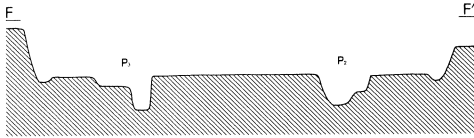
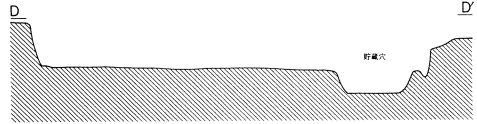
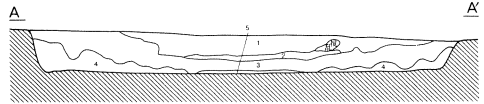
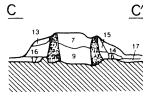
カマドは北壁やや東よりに設けられていた。砂岩の切り石が用いられていた。遺存状態は良く袖及び焚口部天井の切り石が残っていた。焚口の幅は30cmで奥行きは100cmである。

遺物は床面から坏、砥石が出土している。

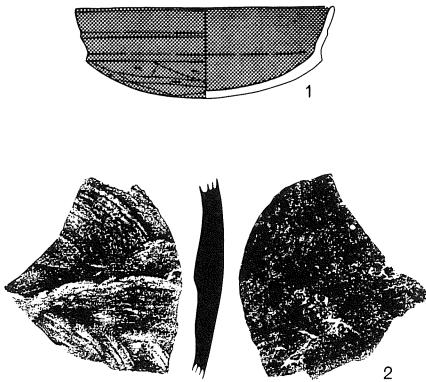
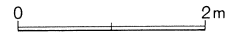
砥石 3は床面ほぼ中央から出土した。被熱している。断面三角形を呈するが一面は破面である。図の上面及び端面は研がれている。断面の右下面は切断された様に平坦である。



1. 黒褐色 しまり良、焼土、炭化物、ローム微粒多量
2. 黒褐色 しまり良、ロームブロック、炭化物多量
3. 黒褐色 しまり良、焼土粒・ローム微粒若干含む、
4. 暗褐色 しまり良、ローム粒多量含む、
5. 明褐色 4層に類似するがより硬い、黒色土粒含む
6. 明褐色 しまり良、焼土粒・ローム粒・炭化粒含む
7. 黒褐色 1層に類似、砂岩焼土若干含む、
8. 赤褐色 焼土全面に含む、
9. 赤褐色 しまり良、焼土全面に多量含む、
10. 暗褐色 粘性あり、焼土微量含む、
11. 黄褐色 粘性あり、焼土若干含む、
12. 赤褐色 焼土多量含む、砂岩削れのブロックあり、
13. 黒褐色 1層に類似、ローム粒多量含む、
14. 黒褐色 しまり良、焼土粒・ローム粒多量を含む、
15. 黄褐色 しまり良、ロームと黒色土混在、袖石被覆、
16. 黄褐色 しまり良、15層類似、ローム微粒含む、袖石被覆
17. 明褐色 黒褐色土の中にローム混、澁溝ワケ土、



水系標高 = 10.300 m



第112図 第52号住居跡・出土遺物

第52号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 13.9 底 径 — 高 さ 4.8 最大径 —	礫 砂粒	灰黄褐	90	1	268	
2	甕	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 白色針状物質	灰	破片	Bグリッド	52-48	

第53号住居跡 (第113図)

大半が調査区外にかかる。平面形、規模などは不明である。確認面からの深さは30cmである。方位は検出されている東辺でN-43°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面は検出面積が狭いために良くはわからないがほぼ平坦なものと思われる。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1、P2が検出されたが柱穴になるものかどうかはわからない。壁溝も検出されなかった。ないものと思われる。

カマドは検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第54号住居跡 (第113図)

平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は3.6m×3.5mで確認面からの深さは31cmである。主軸方位はN-20°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。ピットは壁際にいくつか検出された。覆土はいずれも黒褐色土でローム粒あるいは焼土粒を少量含む。P1は柱穴か貯蔵穴か判断に苦しむが構造的には柱穴と考えたほうが良いものと思われる。壁溝は全周せず北東角、西辺および北辺のカマド西側に検出された。

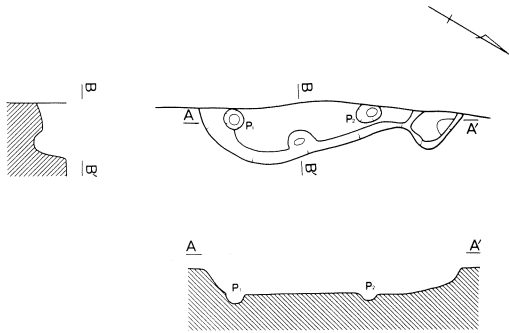
カマドは北壁東よりに設けられていた。遺存状態はあまり良くない。構築材には砂岩の切り石が使われていた。焚口の幅は30cmほどで奥行きは0cmである。

遺物は床面から土師器坏が出土しているほか覆土上層から湖西産の坏が出土している。

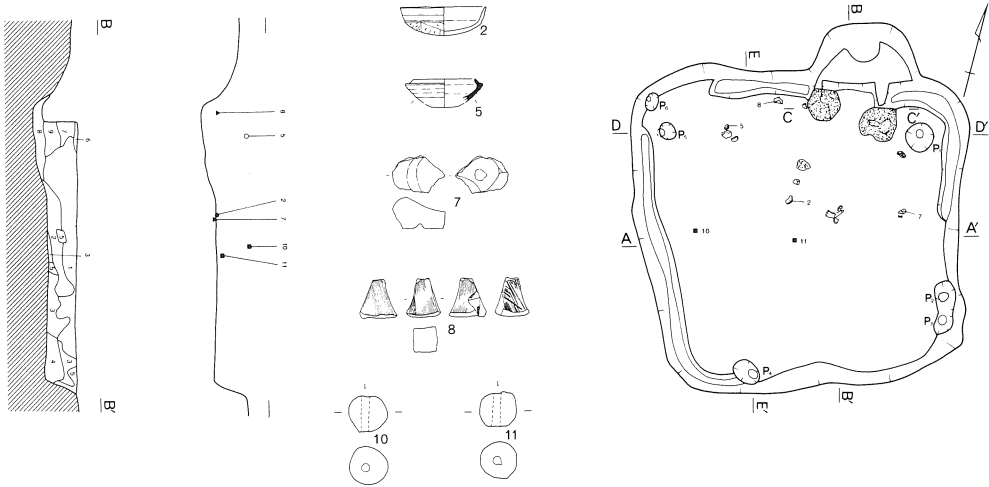
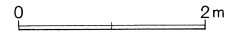
砥石(7、8) 床面から出土している。7は所謂石皿を転用したものである。8は撥型を呈するもので上端は欠損している。4面ともよく使われ一面には沈線状の痕跡が残る。9は須恵器の甕の胴部破片を転用したものである。

第55号住居跡 (第115図)

平面形は隅丸方形である。他の遺構との重複はない。規模は4.7m×4.6mで確認面からの深さは50cmである。主軸方位はN-35°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は南側中央部及び貯蔵穴付近に貼床が認められた。貯蔵穴は北隅に検出された。隅丸長方形の掘り込みで60cm

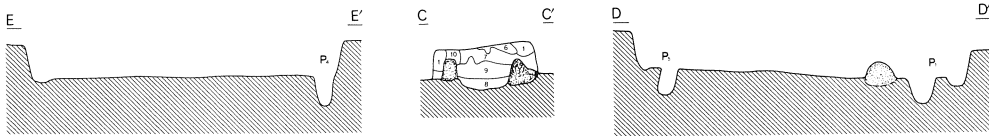
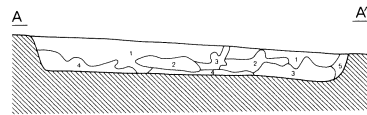


水系標高 = 111.600 m



- 1. 黒褐色 しまり良。焼土ブロック、ローム粒微量含む。
- 2. 黒褐色 しまりやや弱。焼土ブロック多量含む。炭化物微量含む。赤味ある色調。
- 3. 黄褐色 しまりやや弱。ローム粒含む。
- 4. 黄褐色 しまり良。3層よりローム粒多量含む。
- 5. 明黄褐色 壁崩壊土。ロームブロック。

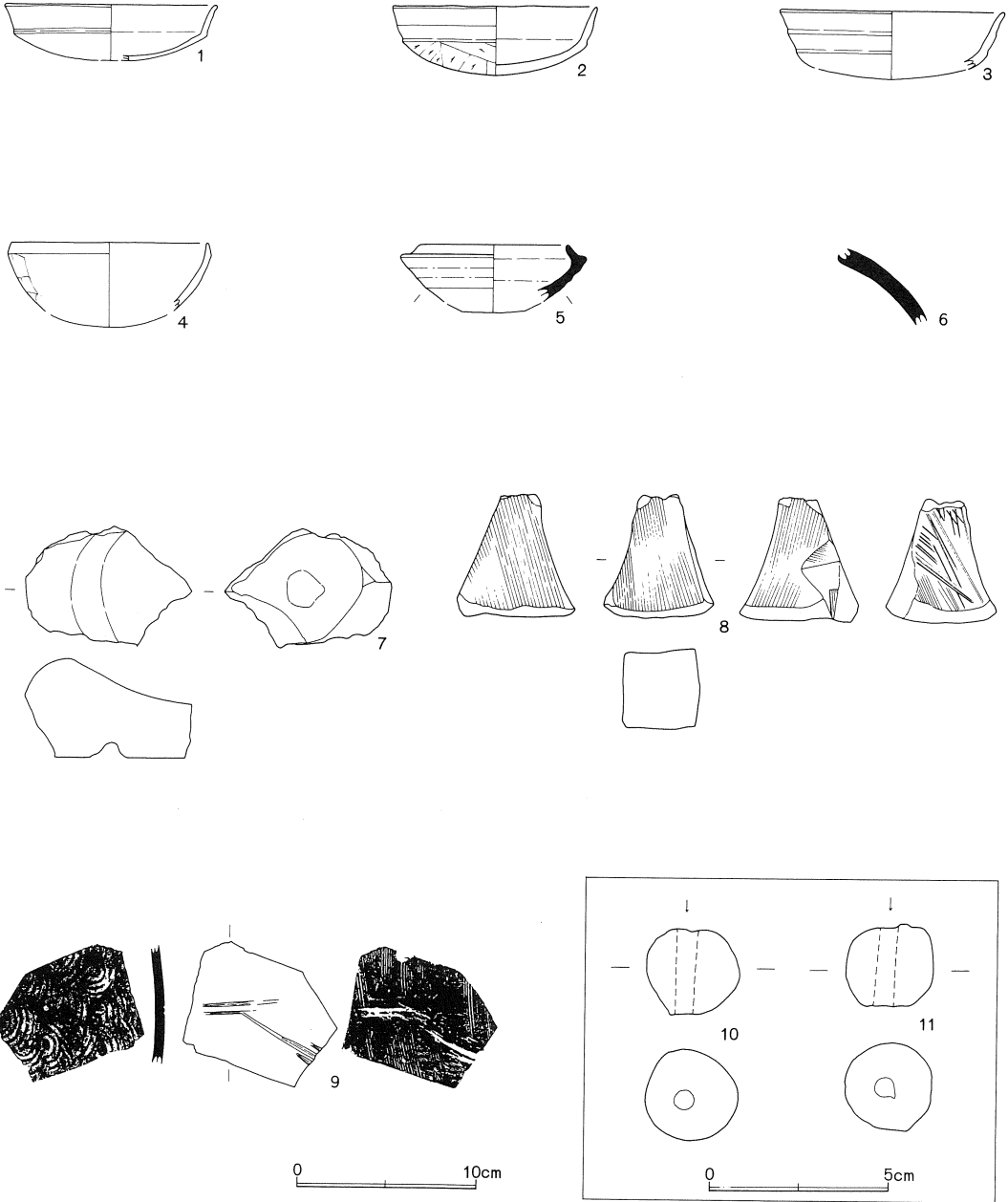
- 6. 黒褐色 しまり良。
- 7. 黒褐色 しまり良。焼土ブロック微量含む。
- 8. 赤褐色 しまり良。焼土ブロック含む。
- 9. 黄褐色 しまり良。やや砂質。焼土粒少量含む。
- 10. 黒褐色 しまり良。やや砂質。焼土粒少量含む。9層より黒褐色土多量含む。



水系標高 = 10.000 m



第113図 第53・54号住居跡



第114図 第54号住居跡出土遺物

第54号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (13.8) 底 径 — 高 さ 3.1 最大径 —	赤色粒 砂粒	橙褐	20		270	
2	ク	口 径 11.4 底 径 — 高 さ 3.8 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	明赤褐	50	7, Aグリッド	269	
3	ク	口 径 (12.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	ク	10	A・Cグリッド	271	
4	ク	口 径 (11.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	橙褐	10	Aグリッド	272	
5	ク	口 径 (8.2) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	砂粒	灰	20	15	518	湖西産
6	甕	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	黒色粒 礫 砂粒	灰白	破片		54-50	砥石転用

第54号住居跡出土土錘計測表

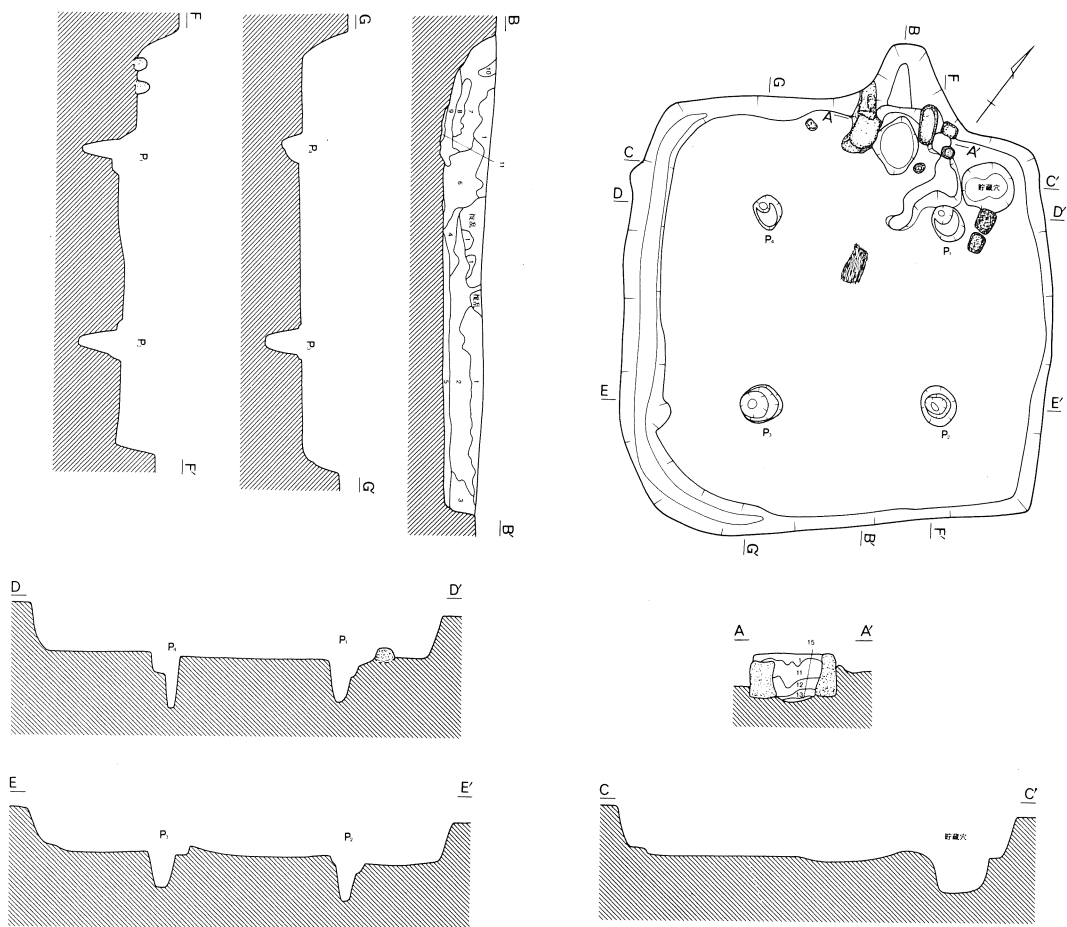
番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
10	—	2.6	0.5	12.27	完形	14	666
11	—	2.4	0.6	11.26	完形	6	665

×52cmほどで深さは38cmである。覆土は黒褐色でローム粒、炭化粒、焼土粒を全体に多く含む。ピットはP1～P4が支柱穴と考えられる。覆土は黒褐色でローム粒、焼土粒を少量含む。壁溝は全周せず西辺と南辺の位置部のみに検出された。

カマドは北壁東よりに設けられていた。袖には切り石が用いられていた。また天井部のものと思われる切り石が貯蔵穴周辺に散乱していた。焚口の幅は40cmで奥行きは70cmである。

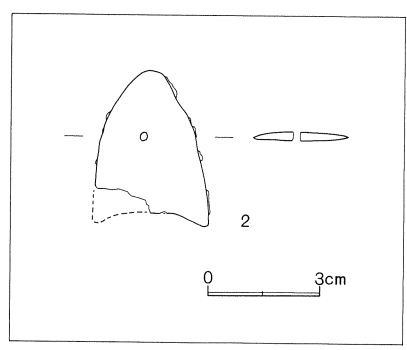
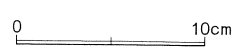
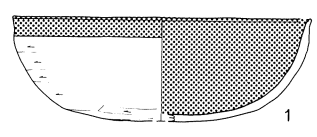
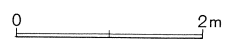
遺物は坏と鉄鏃が出土している。いずれも覆土中からの出土である。

鉄製品 2は無頭鏃である。長さ4.2cm、現存幅3.1cmの三角形で片丸造りである。



- 1. 黒褐色 しまり弱。ローム、赤色土粒若干含む。
- 2. 黒褐色 しまり良。1層より黒い。混入物少ない。
- 3. 暗褐色 しまり弱。混入物なし。
- 4. 暗褐色 ローム粒、炭化物、焼土。
- 5. 暗褐色 しまり良。ローム大量に混。粘床。
- 6. 暗褐色 しまり弱。焼土、砂粒、ローム粒含む。
- 7. 暗褐色 しまり良。6層類似。ロームブロック、焼土多量。
- 8. 黄褐色 しまり良。砂岩崩土多量混入。
- 9. 黄赤色 砂岩崩土と焼土が混在。
- 10. 黒褐色 しまり弱。混入物なし。
- 11. 暗黄赤色 9層類似。ロームブロック含む。

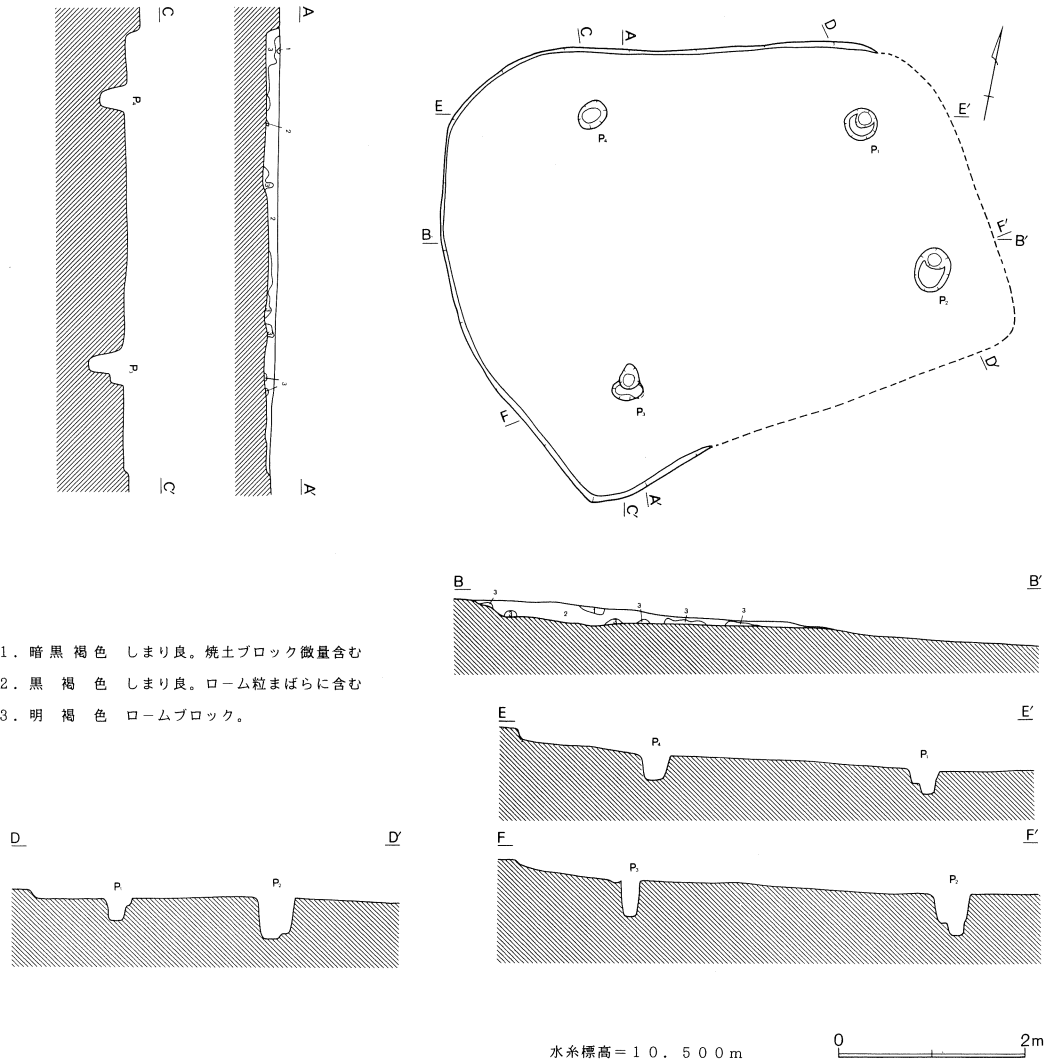
水系標高=9.700m



第115図 第55号住居跡・出土遺物

第55号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (16.0) 底径 — 高さ 5.5 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		20	Bグリッド	274	



第116図 第56号住居跡

第56号住居跡（第116図）

北辺及び西辺と南辺の一部が検出された。平面形は隅丸長方形になると思われる。他の遺構との重複はない。規模は北辺は検出されたのが5m西辺は4.7mである。確認面からの深さは西辺の一番深いところで10cmである。方位は西辺で $N-22^{\circ}-W$ である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はやや凹凸がある。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。覆土は黒褐色土でやや柔らかい。壁溝は検出されなかった。

カマドは検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第57号住居跡（第117図）

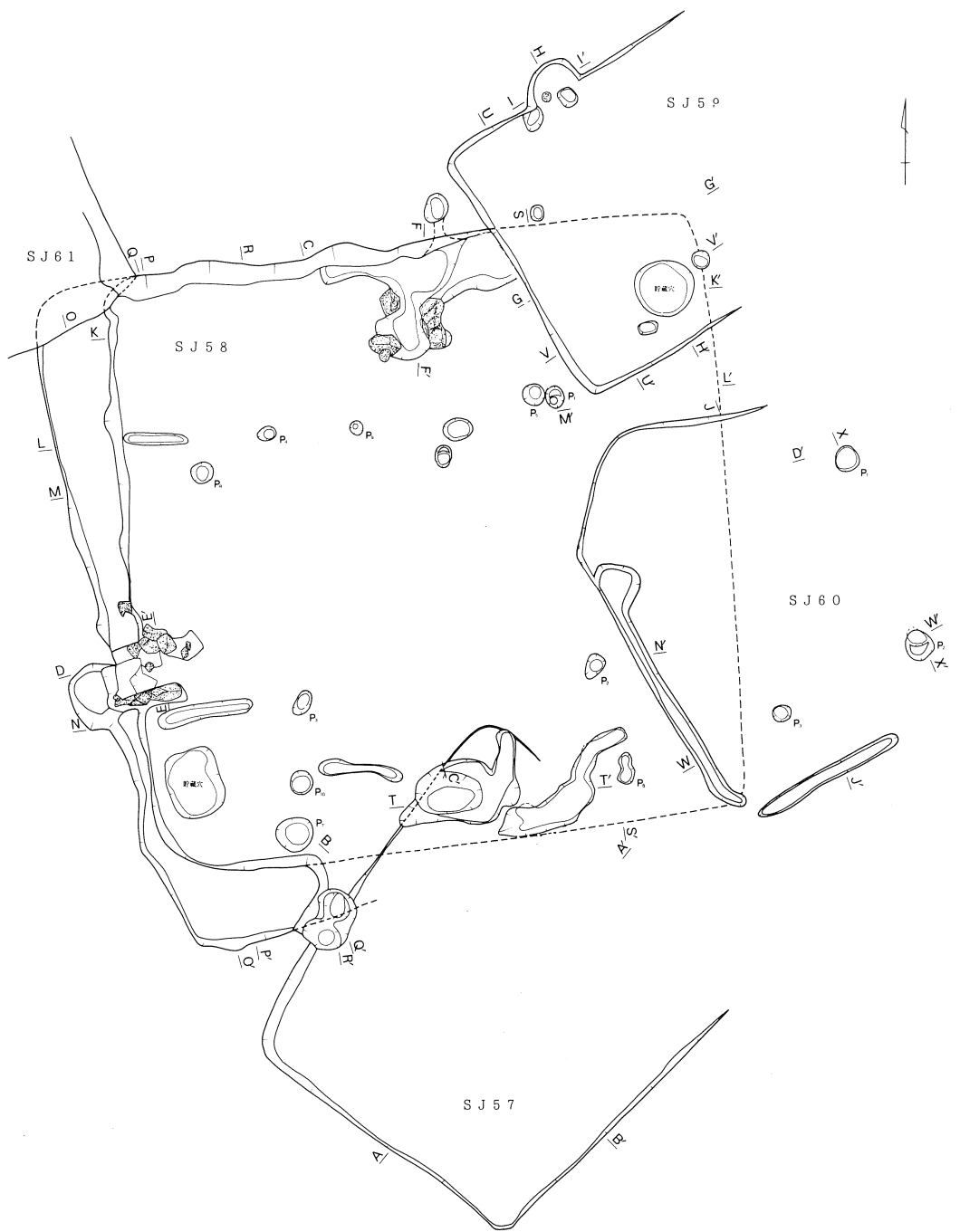
58号住居跡と重複する。北東辺は検出されなかった。平面形は隅丸長方形と思われる。規模は4.7m×4.2mで確認面からの深さは18cmである。主軸方位は北西辺で $N-35^{\circ}-E$ である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は北東方向に下がっている。貯蔵穴、ピットなどの床面の施設は北隅に不定形の掘り込みがあるが本住居跡のものか58号住居跡のものかさだかではない。

カマドなども検出されなかった。

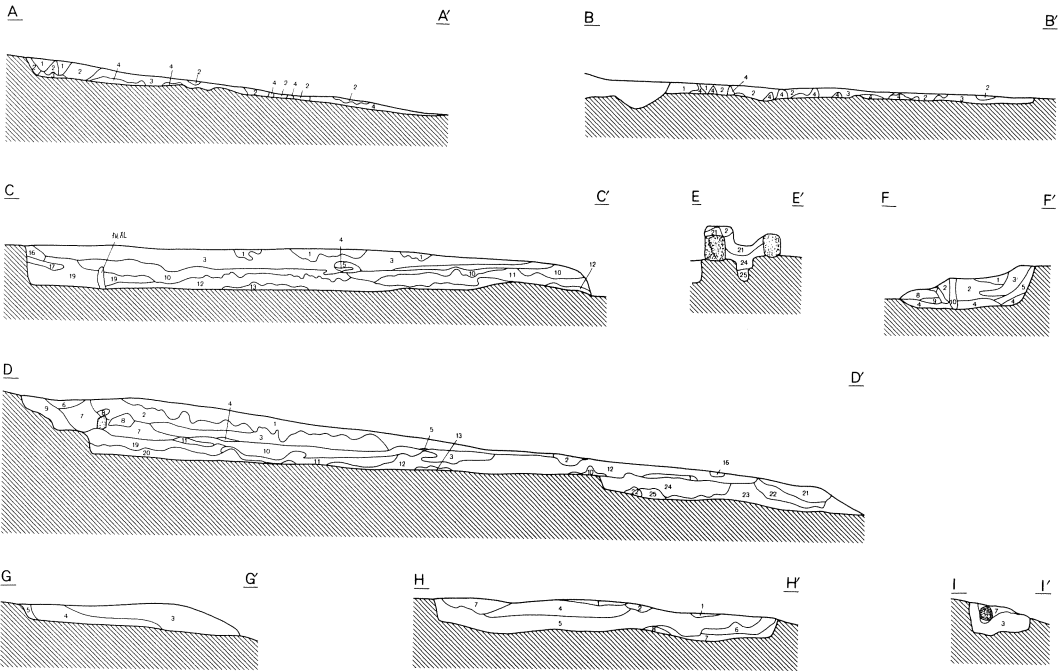
遺物も出土しなかった。

第58号住居跡（第117図）

57、59、60、61号住居跡と重複する。新旧関係は57、60号住居跡が本住居跡より古く、59、61号住居跡が新しい。また住居跡自体が拡張されている。現地形が傾斜しており東側は削平され拡張後の住居跡については平面形はつかめなかった。拡張前の平面形についても不明なところが多いが土層断面から推定すると隅丸方形をしていたのではないかとと思われる。規模は7.1m×7mである。拡張後の規模については西辺のみが残存し7.9mである。深さは西壁際で30cmである。主軸方位は $N-74^{\circ}-E$ である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は東にやや傾いているが平坦である。床面からは遺物とともに炭化材が検出され火災住居と思われる。貯蔵穴は拡張前のものが北東隅に、拡張後のものは西辺のカマド南側に検出された。前者は円形の掘り込みで径約70cm、深さは18cmである。覆土は黒褐色でロームブロックを含み良くしまっている。後者は隅丸長方形の掘り込みで80cm×64cm、深さは12cmである。覆土は黒褐色で炭化材及び焼土粒が混入していた。柱穴はP1～P4が拡張前の柱穴と考えられる。覆土は黒褐色でローム粒を含みややしまりに欠ける。拡張後の柱穴についてはP5～P9を考えておきたい。配置がやや南に偏るが他に該当するものがない。またP9の対になるものは精査の段階で確認されなかったがP6、P7間の土坑状の落ち込みのところにあったものと思われる。覆土はP1～P4と同様であるがローム粒の含みがやや多い。壁溝は検出されなかったが拡張前の住居跡においては壁際に溝状の浅い掘り込みがみられる。西辺では壁に直行して2本ある。北側のもは長さ75cm南側のもは115cmで幅は15cmほどである。北側のもは北辺から約2m南側は南辺から同じく2mのところでありなんらかの企画性をもつものと考えられる。南壁際には1mの間をおいて南辺に平行に検出された。西辺からの距離は約2mである。また



第117図 第57・58・59・60号住居跡(1)



C-C' D-D' E-E' F-F'

1. 黒褐色 しまり良。焼土粒少量混入。
2. 茶褐色 焼土粒(2mm~1cm)1層より混入多。炭化物多量
3. 茶褐色 しまり良。焼土粒2層に類似。炭化物の混入多。
4. 暗赤褐色 踏み固めたロームの床面。焼けて赤化している。
5. 暗黄褐色 踏み固めたロームの床面。
6. 黒褐色 しまり良。焼土ブロック1cm大含む。焼土粒含む。
7. 赤褐色 焼土粒、焼土ブロック含む。
8. 赤褐色 焼土ブロック。
9. 黄褐色 しまり良。ロームやや赤味あり。
10. 黒褐色 しまり良。ロームブロック全体の40%含む。灰混入
11. 黒褐色 しまり良。灰混入。やや白っぽい。炭化物微量含む
12. 黒褐色 しまり良。焼土粒、炭化物微量含む。
13. 茶褐色 しまり良。12層よりやや明るい。ローム粒微量混入
14. 黄褐色 ローム粒混入多。

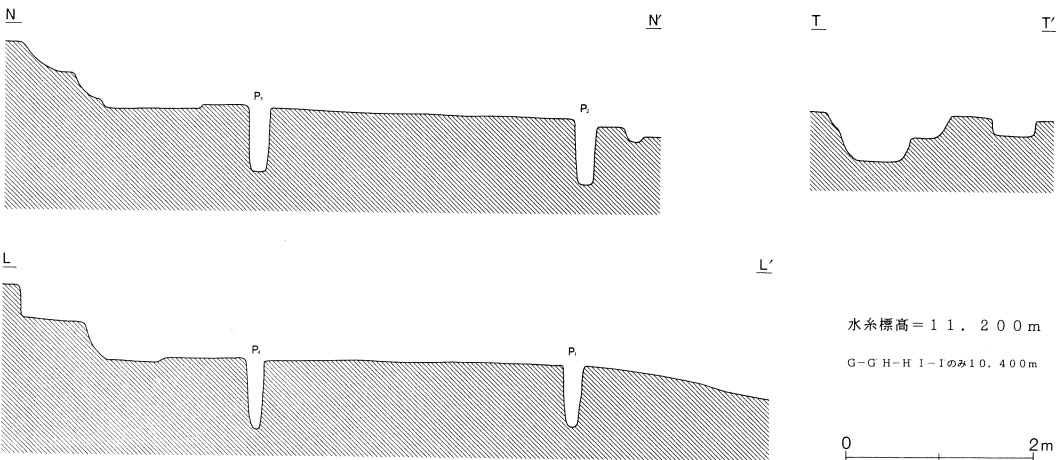
15. 黄褐色 しまり良。ローム粒混入多。やや汚れあり。
16. 赤褐色 しまり良。焼土。焼土粒まとまっている。
17. 黒褐色 ややしまり弱。炭化物、焼土ブロック(3~4mm、1~2cm)少量含む。
18. 黒褐色 ややしまり弱。焼土粒・ローム粒、炭化物少量全体に含む。
19. 黄褐色 しまり良。焼土粒、炭化物少量混入。
20. 黄褐色 しまり良。ローム粒、ロームブロック少量混入。
21. 灰褐色 灰層に焼土ブロック(2cm)、焼土粒(3~4mm)混入。やや赤化している。炭化物少量含む。
22. 黒褐色 しまり良。
23. 黒褐色 しまり良。22層より明るい。
24. 黒褐色 ローム粒混入多。ローム粒(2cm)混入。焼土粒、炭化物少量含む。
25. 黄褐色 ロームブロック。

A-A' B-B'

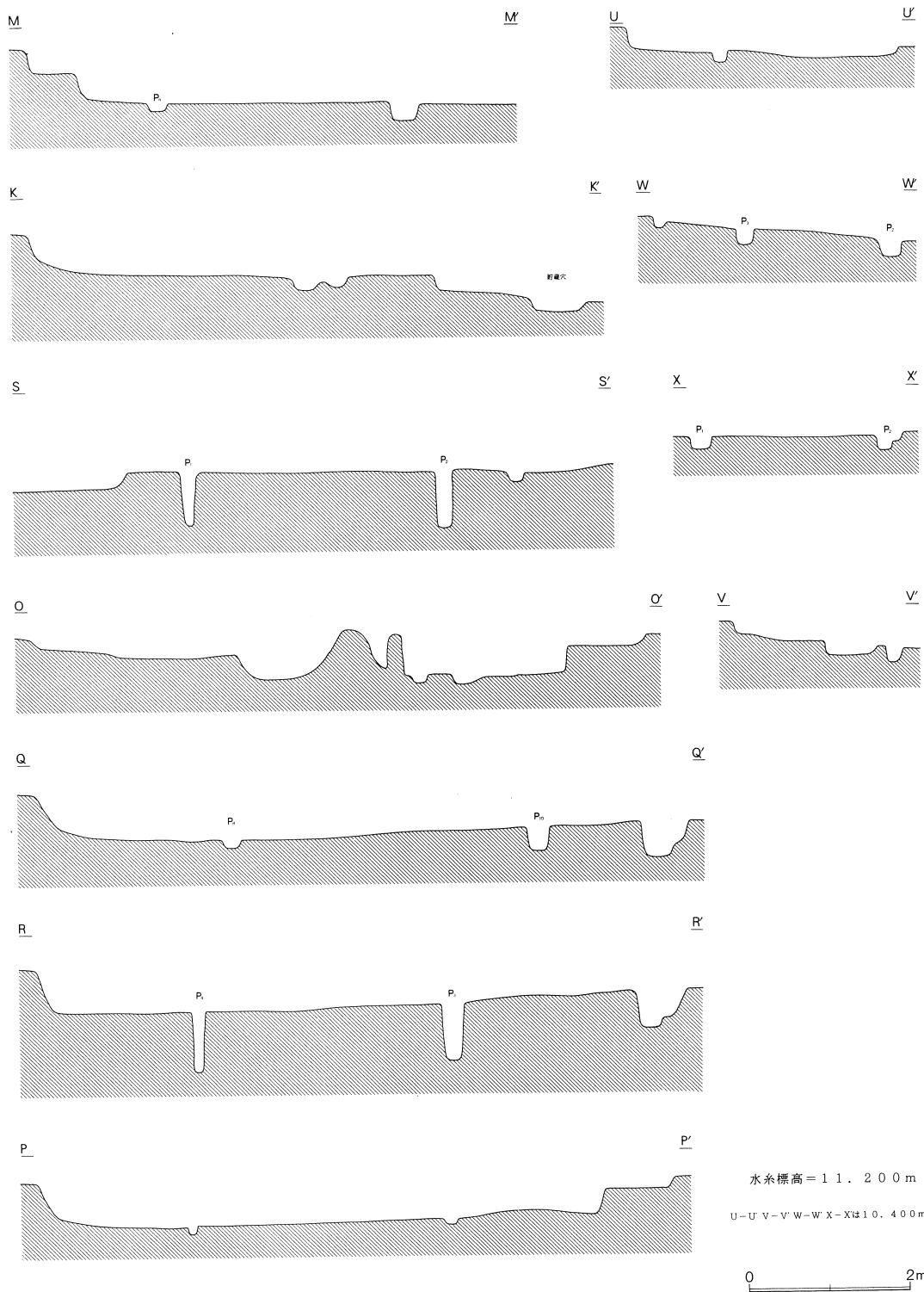
1. 黒褐色 ややしまり弱。炭化灰・ローム粒微量含む。
2. 黒褐色 しまり良。ローム粒まばらに混入。
3. 黒褐色 しまり良。ロームブロック(1~4cm)混入。
4. 明褐色 ロームブロック。

G-G' H-H' I-I'

1. 黒褐色 しまり弱。炭化物微量含む。
2. 赤褐色 しまり良。焼土粒多量含む。
3. 赤褐色 しまり弱。焼土多量含む。全体に黒褐色と混在。
4. 黒褐色 しまり良。焼土ブロック(3~8mm)まばらに混入。赤味帯びている。
5. 褐色 しまり良。焼土ブロック少量含む。
6. 黒褐色 しまり弱。
7. 黒褐色 しまり良。ロームブロックが黒っぽく変色。



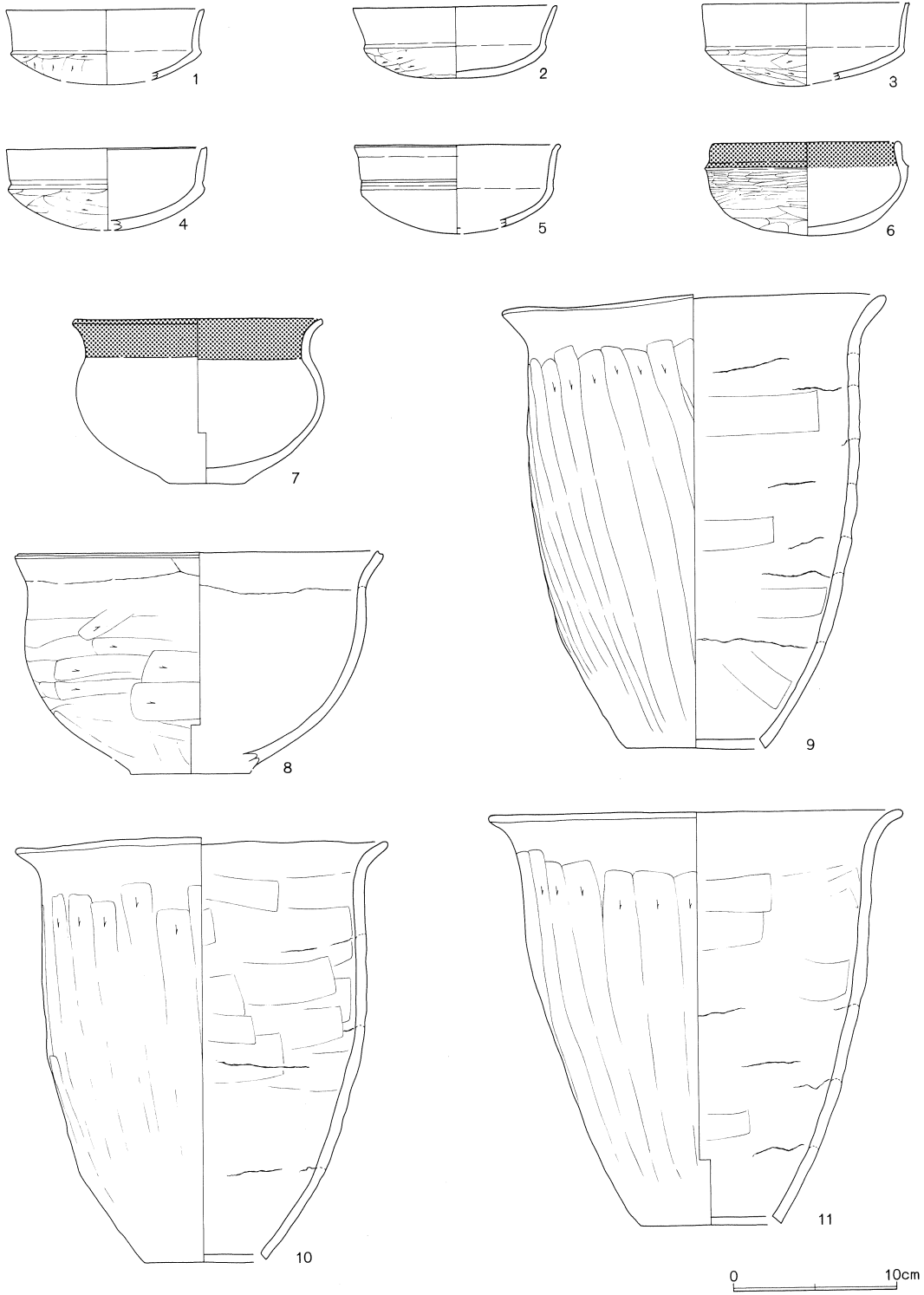
第118図 第57・58・59・60号住居跡(2)



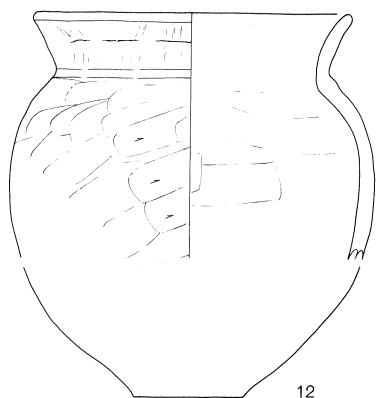
第119図 第57・58・59・60号住居跡(3)



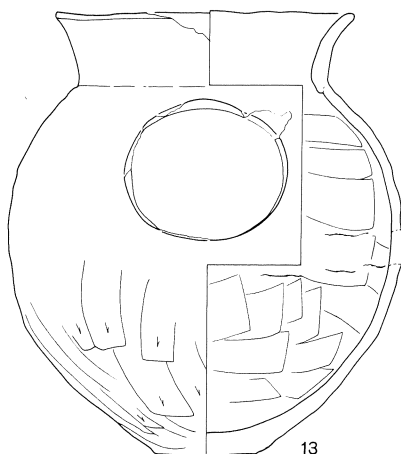
第120图 第57·58·59·60号住居迹(4)



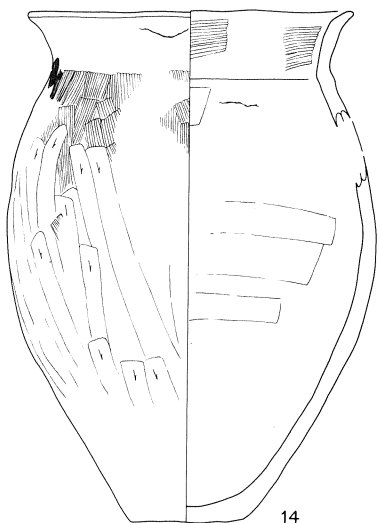
第121図 第58号住居跡出土遺物(1)



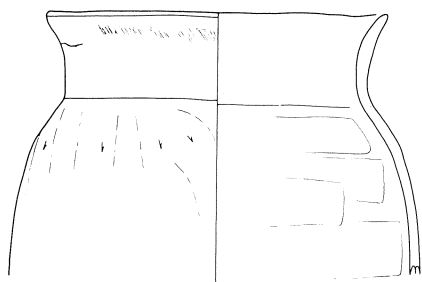
12



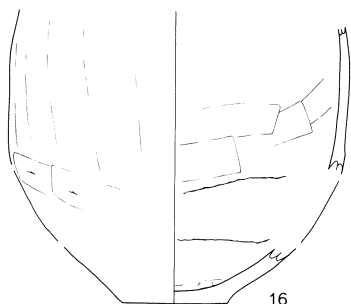
13



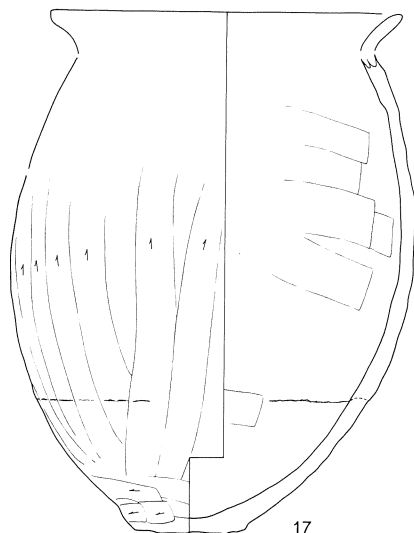
14



15



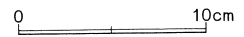
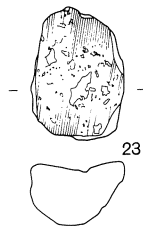
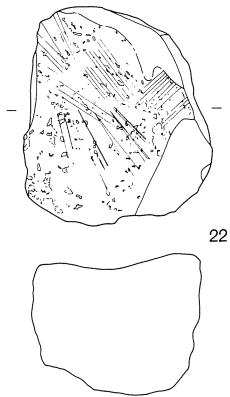
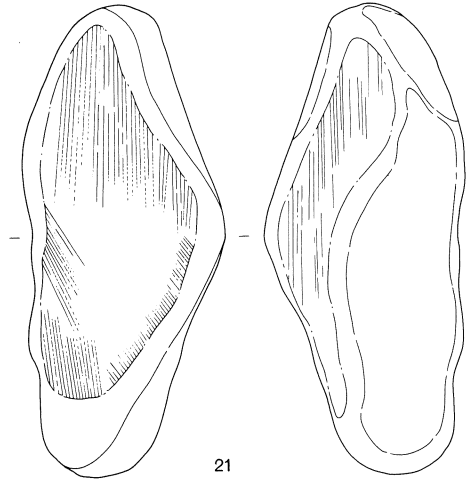
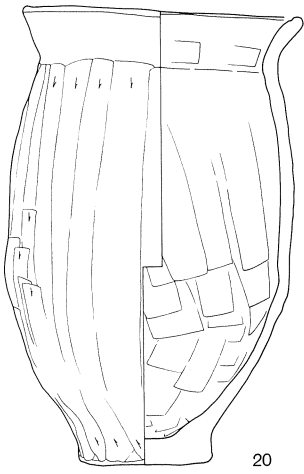
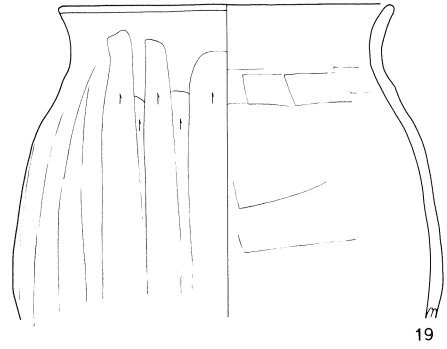
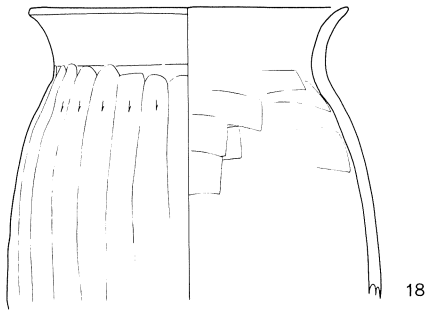
16



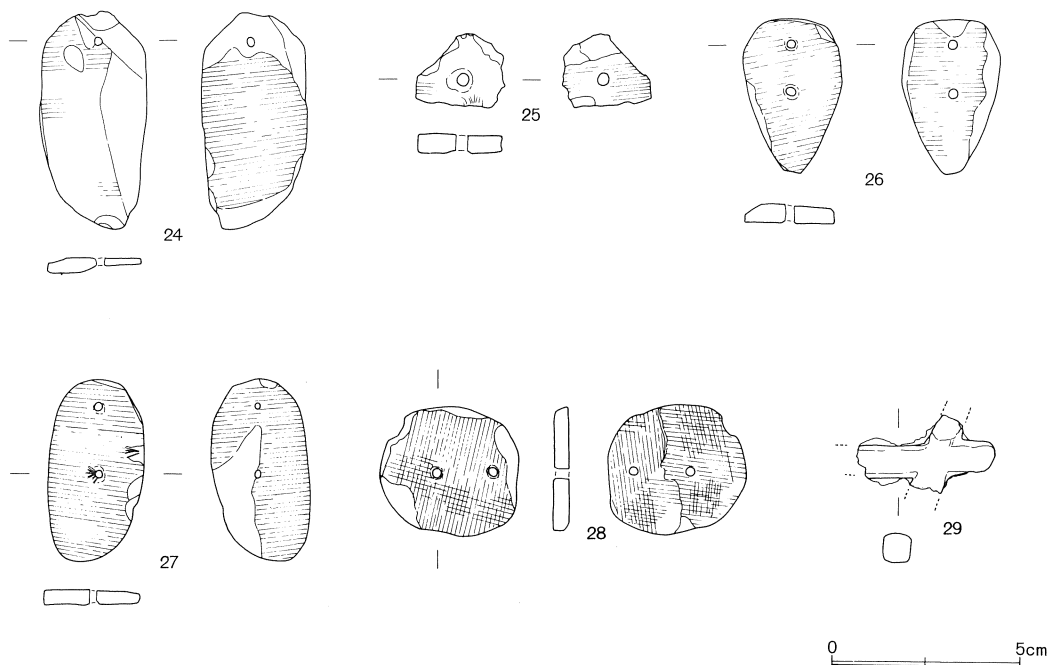
17

0 10cm

第122図 第58号住居跡出土遺物(2)



第123図 第58号住居跡出土遺物(3)



第124図 第58号住居跡出土遺物(4)

南辺のほぼ中央と思われるところに不規則な溝状の掘り込みが検出された。住居跡の推定線内におさまることから伴うものと考えられる。

カマド西辺南寄りに設けられていた。袖には切り石が用いられていた。遺存状態はやや悪く右袖が崩れている。焚口の幅は40cmで奥行きは110cmである。拡張前のカマドは北辺に作られており拡張の際に壊されていた。やはり切り石を用いていた。煙道が遺存しており長さ20cmほどのトンネル部を介して直径25cmの煙出しに通じる。

遺物はカマド周辺を中心として甕、甑、円窓土器等が出土している。

砥石 (21~23) 21は被熱している。断面三角形で平坦面を使用している。22、23は所謂軽石でいちめんを使用している。使用面は石材が柔らかいために窪んでいる。

鉄製品 29は用途不明。斜めに交差しているようであるが重なってはいない。錆化が激しくX線撮影をしたが鉾などの接続具は確認できなかった。

第59号住居跡 (第117図)

58号住居跡と重複しこれより新しい。東辺及び南辺の東半分は検出されなかった。平面形はおそらく方形になるものと思われる。規模は西辺が3.4m北辺は3.3m残存していた。深さは西側で32cmである。主軸方位はN-30°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は東に低くなる。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは3個検出されたが主柱穴は不明である。ピットの覆土は黒褐色でしまりはよい。壁溝は検出されなかった。

第58号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (12.2) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	30	69	279	
2	ク	口径 (12.7) 底径 — 高さ 4.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	ク	20	A・Bグリッド	278	
3	ク	口径 12.8 底径 — 高さ 5.0 最大径 —	礫 砂粒	ク	50	Bグリッド	276	
4	ク	口径 (12.4) 底径 — 高さ 5.0 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	30	Cグリッド	277	
5	ク	口径 (12.6) 底径 — 高さ 5.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	ク	50	4, Bグリッド	275	
6	ク	口径 11.5 底径 — 高さ 5.7 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	暗赤褐	80	18, 19	280	
7	鉢	口径 15.3 底径 4.2 高さ 10.1 最大径 15.3	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	100	44	285	
8	ク	口径 22.2 底径 — 高さ 13.6 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	60	40, 48	284	
9	甌	口径 23.5 底径 8.6 高さ 27.7 最大径 20.1	白色粒 片岩 赤色粒 砂粒 礫 雲母	にぶい褐	90	47	287	
10	ク	口径 22.9 底径 7.5 高さ 25.9 最大径 19.8	白色粒 雲母 赤色粒 片岩 礫 砂粒 角閃石	ク	100	45	288	

第58号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
11	甌	口 径 25.3 底 径 8.7 高 さ 25.2 最大径 21.2	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	橙褐	70	9, 11, 52, 53, 54	289	
12	甕	口 径 16.7 底 径 — 高 さ — 最大径 18.6	赤色粒 片岩 礫 砂粒 角閃石 雲母	〃	胴上半50	27, 35, 87, 99	282	
13	〃	口 径 15.7 底 径 5.3 高 さ 23.4 最大径 21.1	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	にぶい黄橙	90	46	290	円窓土器
14	〃	口 径 17.3 底 径 5.9 高 さ 27.1 最大径 19.7	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	にぶい赤褐	80	10, 53, 54, 58, 59	291	
15	〃	口 径 18.0 底 径 — 高 さ — 最大径 21.9	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	口縁 70	70, 71, 83, 126	283	
16	〃	口 径 — 底 径 5.6 高 さ — 最大径 17.7	赤色粒 片岩 礫 砂粒 角閃石 雲母	にぶい赤褐	胴下半30	39, 48	294	
17	〃	口 径 — 底 径 5.9 高 さ — 最大径 21.5	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	〃	胴部 80	48	281	
18	〃	口 径 17.0 底 径 — 高 さ — 最大径 (20.0)	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	胴上半60	48	286	
19	〃	口 径 (17.7) 底 径 — 高 さ — 最大径 (23.0)	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	〃	胴上半40	43, 48	293	
20	〃	口 径 14.8 底 径 7.0 高 さ 24.0 最大径 15.2	赤色粒 片岩 礫 砂粒 角閃石 雲母	にぶい褐	90	70	292	

第58号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
24	57	× 27	× 4	13.93	剣形	5	769
25	24	× 20	× 5	3.30	剣形	Dグリッド	772
26	41	× 26	× 4	9.80	剣形	13	770
27	48	× 26	× 4	11.12	剣形	1	768
28	36	× 34	× 4	11.16	有孔円板	14	771

カマドは北壁西よりに設けられていた。遺存状態はあまり良くない。袖は検出されなかった。覆土中に砂岩のブロックが落ち込んでいたが構築材として使われていたものかどうか不明である。焚口の幅は56cmで奥行きは30cmである。

遺物は覆土中から須恵器の坏片が出土している。

第60号住居跡（第117図）

58号住居跡と重複する。これより古い。東半分は削平されているために平面形、規模等は不明である。検出された西辺は北側の角が隅切りされたように斜めになっている。南北の長さは4.8mである。深さは20cmである。方位はN-29°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面は緩い起伏をもちながらわずかに東に下がっている。貯蔵穴は検出されなかった。

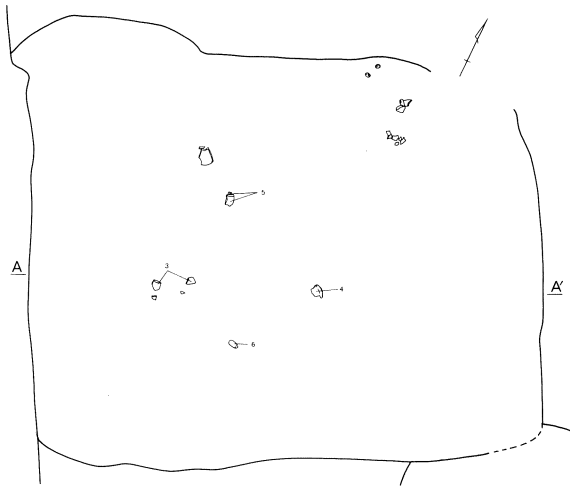
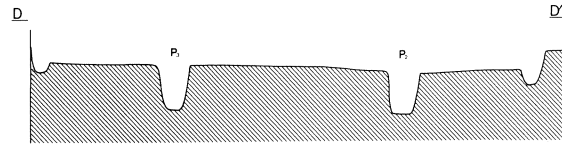
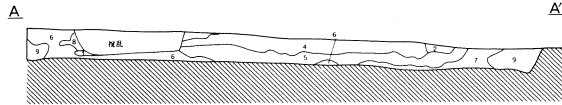
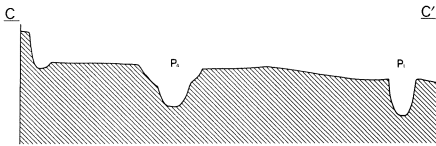
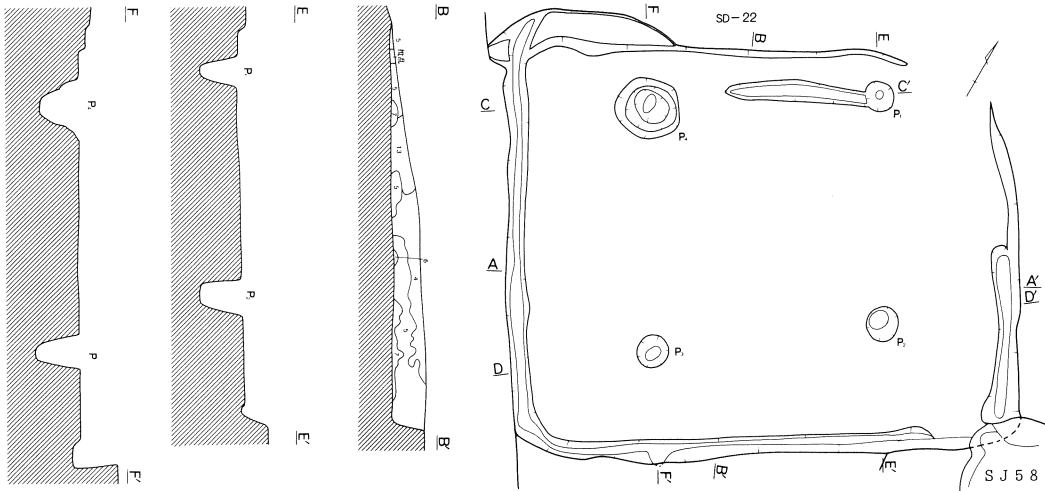
検出されたピットは3個のみである。主柱穴と考えられる。壁溝は北辺には検出されなかった。西辺は直線部分に検出され南西の角では切れる。南辺は西側に2mほど検出されたがそれより東は消滅している。

カマドは検出されなかった。

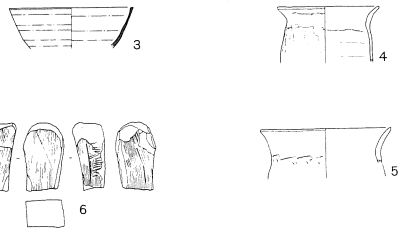
遺物は出土しなかった。

第61号住居跡（第125図）

58号住居跡、22号溝と重複しこれらより新しい。南西辺がわずかに調査区外にかかる。北西辺は22号溝によって上面が壊されており壁の立ち上がりはほとんどない。北隅は完全に削られている。平面形は隅丸長方形と思われるが北西辺南側が30cmほど張り出している。規模は5.5m×4.7mで確認面からの深さは29cmである。方位は南東辺でN-66°-Eである。壁はやや斜めに立ち上がる。床面はほぼ平坦である。北西辺の張り出し部分は10cmほど高くなっている。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1～P4が検出された。主柱穴と考えられる。覆土はいずれも2層にわかれ上層は黒褐色土で微量の炭化粒、ローム粒を含みしまりは良い。下層は黄褐色土でロームブロックを含みやや軟弱である。P1には溝状の掘り込みが付随している。長さは145cmである。壁溝は全周せず



1. 黒褐色 しまり弱。炭化物混入。
2. 灰褐色 しまり良。砂質。焼土粒・炭化粒微量含む。
3. 黒褐色 しまり良。焼土粒・炭化粒微量含む。
4. 黒褐色 しまり良。ローム粒全体を含む。3層より黄色強い
5. 黒褐色 しまりやや弱。4層より黒い、ローム粒少ない。焼土粒少量含む。
6. 黒褐色 しまり良。ローム粒全体に混入。
7. 灰褐色 しまり良。粘質。ローム粒少量含む。
8. 黄褐色 しまり良。粘質。ロームブロック少量含む。ローム粒多量含む。
9. 黒褐色 しまり良。ロームブロック・ローム粒少量含む。



水系標高=11.200m



第125図 第61号住居跡

第61号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (10.4) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		20	Aグリッド	303	
2	ク	口径 (10.6) 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	礫 角閃石 砂粒		20	Aグリッド	304	
3	ク	口径 (16.6) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 白色針状物質 砂粒	灰	30	2,4	506	
4	甕	口径 (15.4) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	口縁 50	10, Bグリッド	307	
5	ク	口径 (19.9) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい橙	口縁 20	5, 6, Aグリッド	308	

北西辺と北東辺の北半分で切れる。

カマドは検出されなかった。

遺物は坏、甕、砥石などがある。

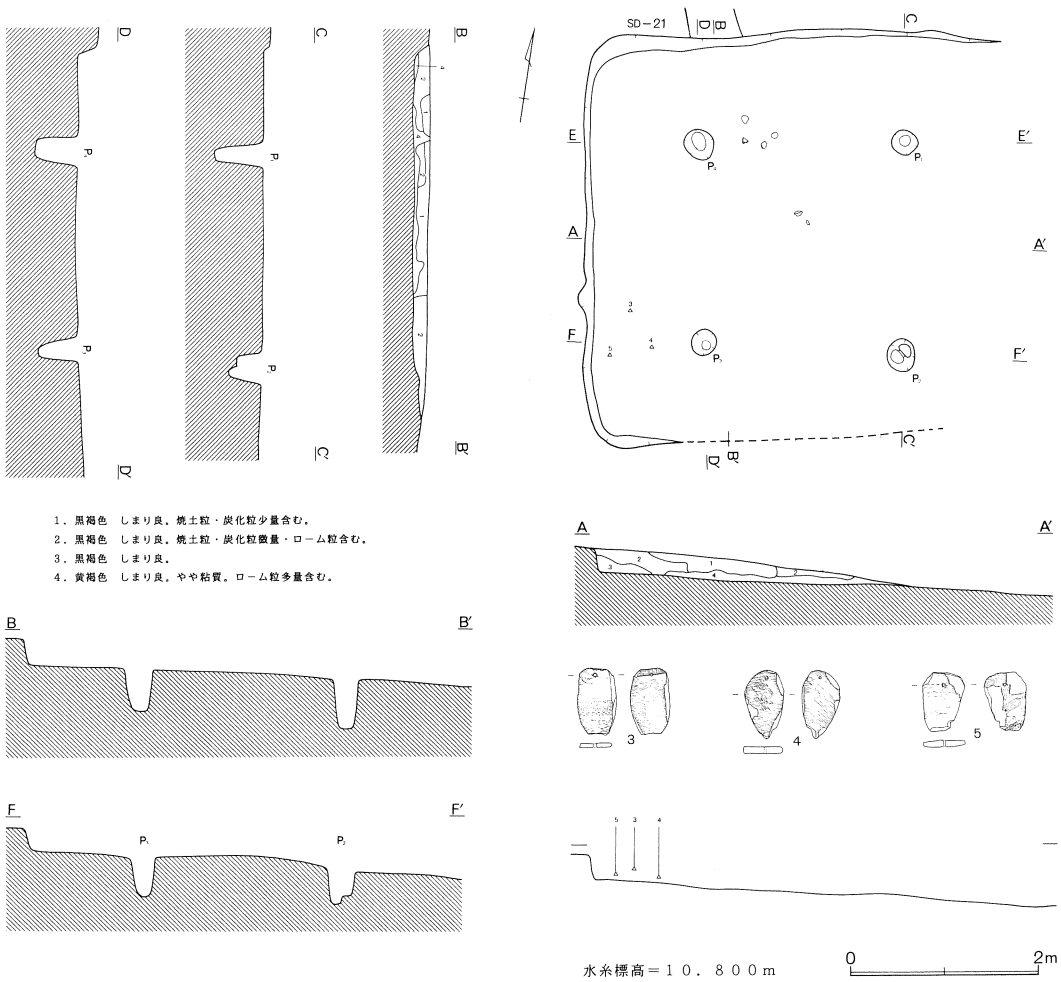
砥石 6は床面から出土した。折損している。4面ともよく使用され平滑である。端面は粗く面取りされているが使用はされていない。

第62号住居跡 (第126図)

21号溝と重複しこれより古い溝の掘り込みは住居の上面で止まっている。東側は地形が傾斜しているために壁の立ち上がりは検出されなかった。平面形は隅丸方形になるものと思われる。規模は西辺が4.4mで北辺は4.5mまで検出された。深さは西壁際で20cmである。方位は北辺を基準としてN-80°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1~P4が主柱穴と考えられる。覆土は黄褐色でやや粘性がある。壁溝は検出されなかった。

カマドは検出されなかった。

遺物は坏および石製模造品が出土している。



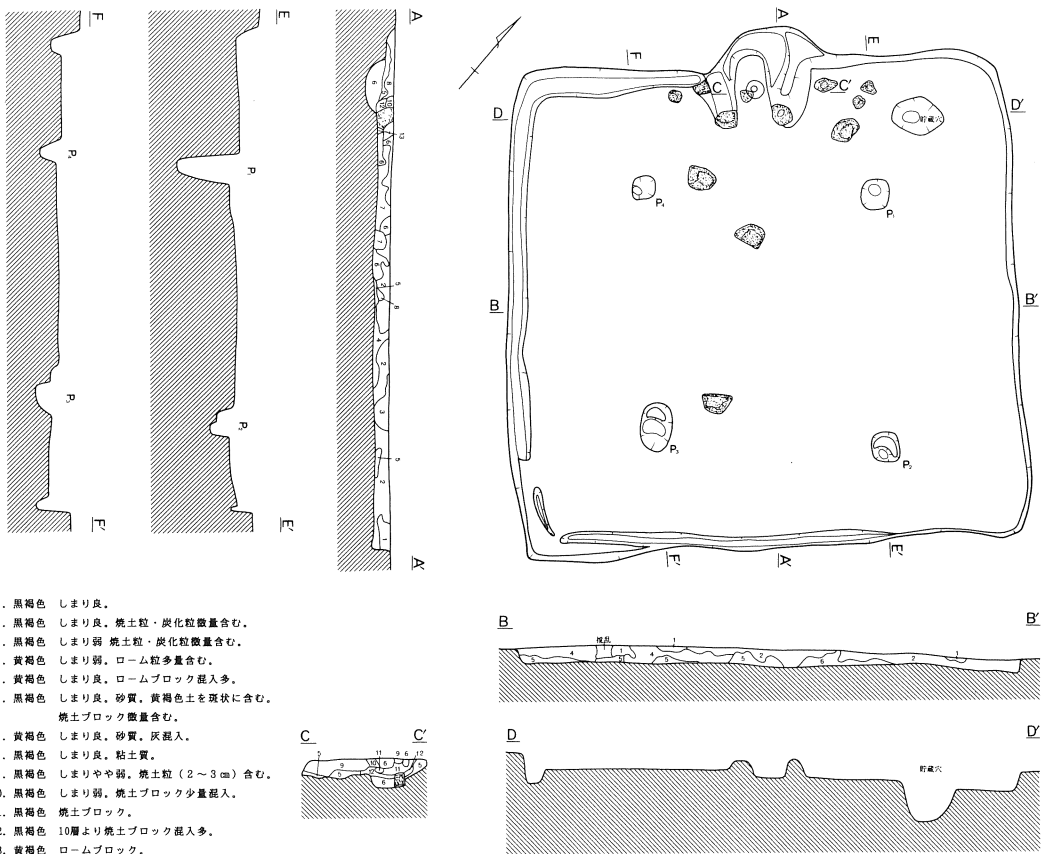
第126図 第62号住居跡

第62号住居跡出土遺物

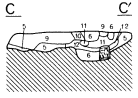
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (13.1) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	20	Cグリッド	306	
2	ク	口径 12.5 底径 — 高さ 5.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	ク	60	Bグリッド	305	

第62号住居跡出土石製模造品計測表

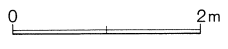
番号	法量 (mm)			重量 (g)	種類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
3	58	35	6	23.72	剣形	3	775
4	60	35	6	19.48	剣形	2	774
5	52	38	6	18.94	剣形	1	773



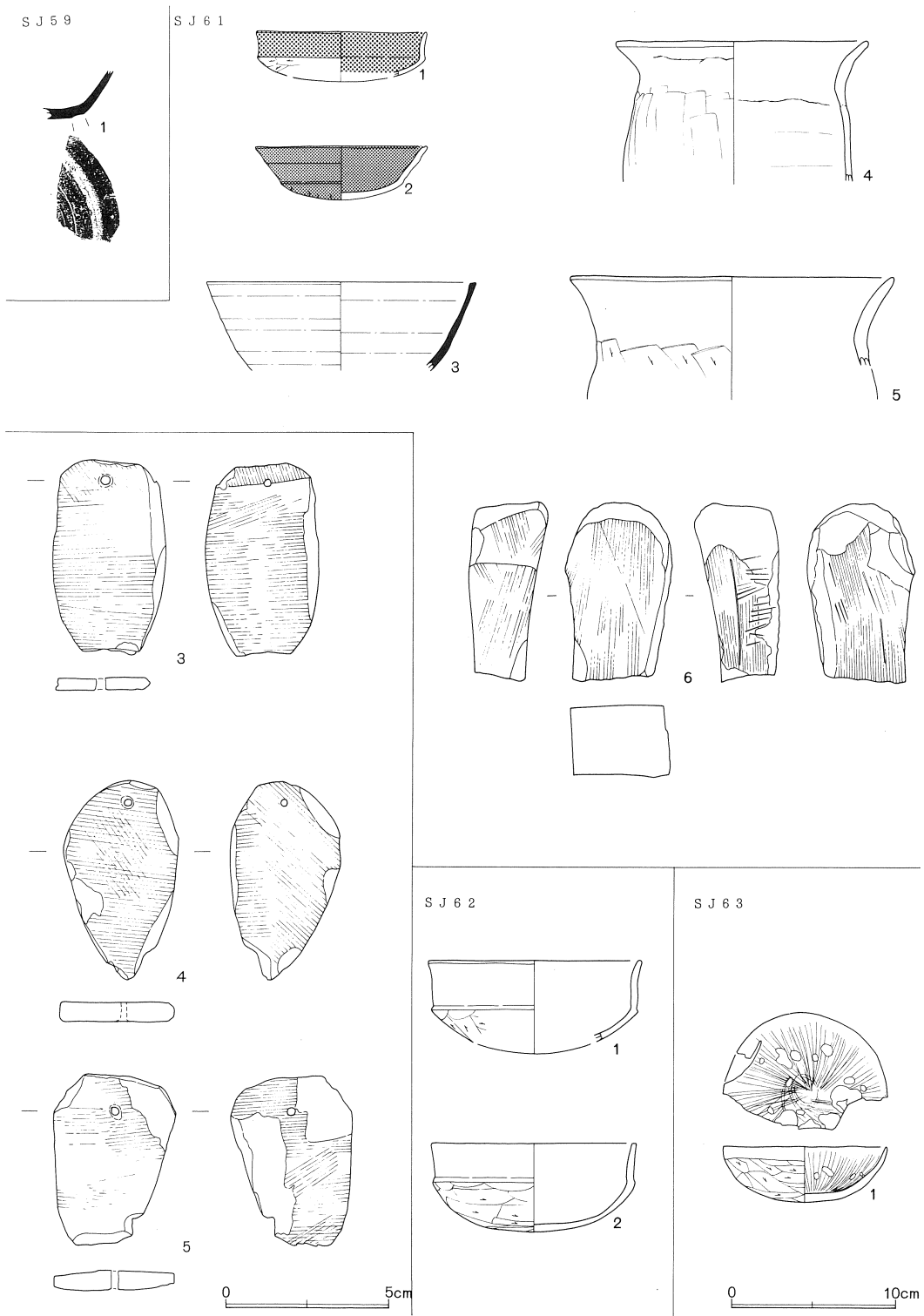
1. 黒褐色 しまり良。
2. 黒褐色 しまり良。焼土粒・炭化粒微量含む。
3. 黒褐色 しまり弱。焼土粒・炭化粒微量含む。
4. 黄褐色 しまり弱。ローム粒多量含む。
5. 黄褐色 しまり良。ロームブロック混入多。
6. 黒褐色 しまり良。砂質。黄褐色土を斑状に含む。
焼土ブロック微量含む。
7. 黄褐色 しまり良。砂質。灰混入。
8. 黒褐色 しまり良。粘土質。
9. 黒褐色 しまりやや弱。焼土粒 (2~3cm) 含む。
10. 黒褐色 しまり弱。焼土ブロック少量混入。
11. 黒褐色 焼土ブロック。
12. 黒褐色 10層より焼土ブロック混入多。
13. 黄褐色 ロームブロック。



水糸標高 = 9.600m



第127図 第63号住居跡



第128図 第59・61・62・63号出土遺物

第63号住居跡（第127図）

平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は5.4m×5.2mで確認面からの深さは20cmである。主軸方位はN-45°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は北隅に検出された。やや円形に近い掘り込みで60cm×40cmほどで深さは40cmである。覆土は黒褐色でローム粒をまばらに含む。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。覆土は黒褐色でしまりはやや弱くローム粒を均一に含む。壁溝は全周せず北西辺のカマド北側と北東辺、南東辺の東側には検出されなかった。また南角部分は壁から離れて途切れる。

カマドは北西辺中央に設けられていた。袖には砂岩の切り石が使われていたが住居廃絶時に破壊されたと思われ床面に散乱していた。焚口の幅は40cmで奥行きは90cmである。

遺物は覆土中から坏が1点出土している。

第63号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 10.1 底径 — 高さ 3.4 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	60	カマド付近	309	

第64号住居跡（第129図）

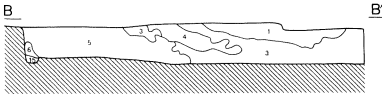
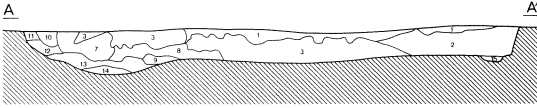
約半分が調査区外にかかる。平面形は隅丸方形になると思われる。他の遺構との重複はない。壁溝及び柱穴の状態から拡張されたものと思われる。規模は西辺が4.9mで北辺は3.9mまで検出されている。確認面からの深さは34cmである。主軸方位はN-32°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。調査区外にあるものと思われる。ピットはP1、P2が拡張前の柱穴と考えられる。P1は拡張後も同じ位置で使われP3と対になる。覆土は黒褐色である。壁溝はカマド部分を除き全周するが拡張部分にはない。

カマドは北辺に設けられていた。破壊されたらしく袖は残っていなかった。床面には構築材と思われる砂岩のブロックが散乱していた。

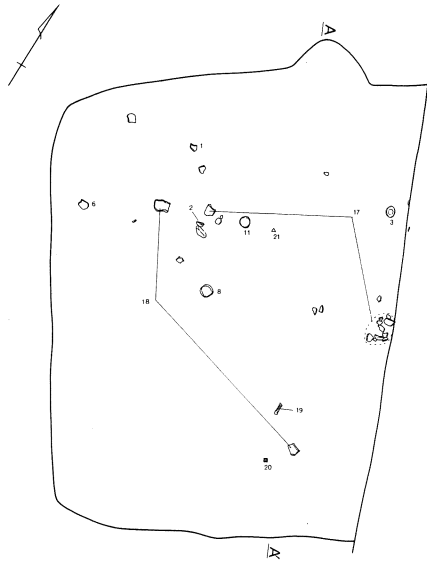
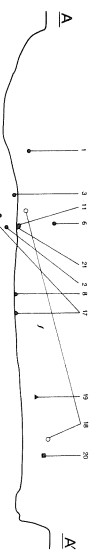
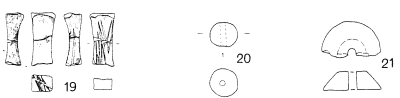
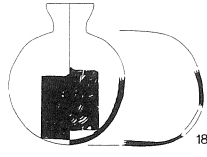
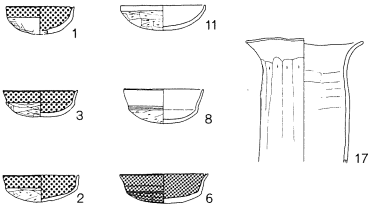
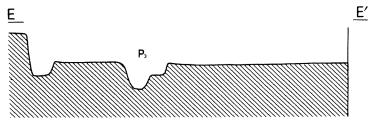
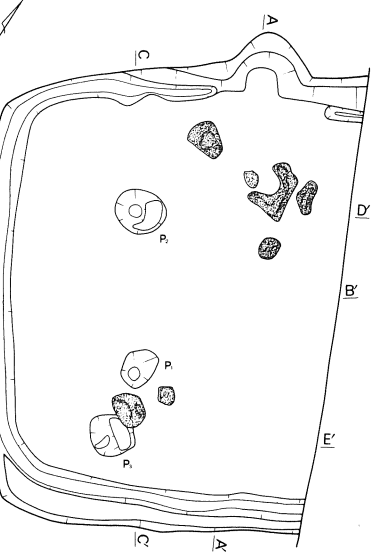
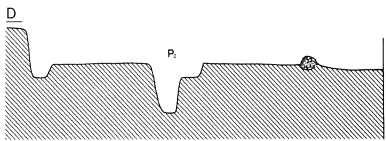
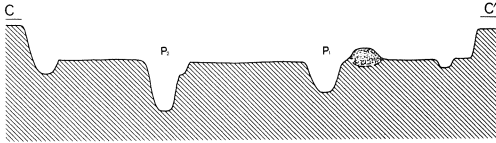
遺物は坏、甕などが出土している。

砥石 覆土中からの出土である。4面とも使用され平滑であるが下面は断面三角形に鋭く刻まれている。図の下端は折損後に粗く使用されている。

紡錘車 21は住居跡ほぼ中央の床面から出土している。半分に割れている。破損後一部被熱している。上面、下面ともよく研磨されているが下面は面を削り出した時の痕跡が残る。側面は縦方向に細かく整形された後磨かれている。穿孔は上から行われている。上面径2.3cm、下面径4.6cm、孔径7mm、重量21.29g。滑石製。



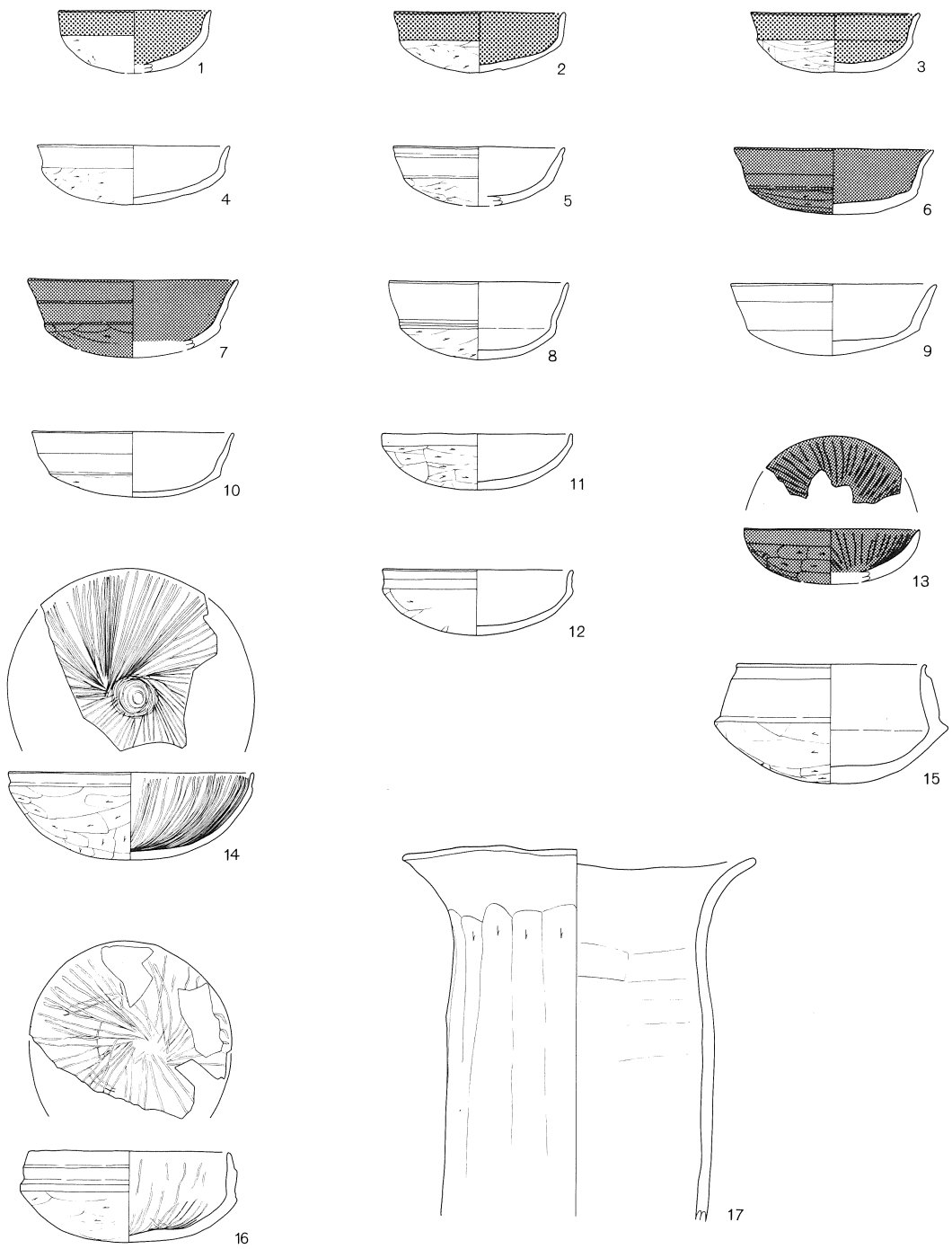
- 1. 黒色 粘性あり、焼土、炭化物含む。
- 2. 黒褐色 ややしまり良、焼土、ローム粒含む。
- 3. 暗黄褐色 ローム混入、黄色味帯びる。炭化物含む。
- 4. 黄褐色 しまり良、ロームブロック混入。
- 5. 黒褐色 しまり良、炭化物（1cm前後）多量含む。
- 6. 黒褐色 5層類似。炭化物なし。
- 7. 黄灰色 砂岩崩土。
- 8. 黒褐色 焼土、砂岩崩土多量含む。
- 9. 黄灰色 焼土多量含む、砂岩崩土。
- 10. 黒褐色 炭化物、焼土、砂岩崩土が中心に集まる。
- 11. 黒褐色 しまり良、焼土含まない。
- 12. 黒褐色 しまりやや弱、焼土含まない。
- 13. 黒褐色 しまり良、ローム粒・焼土粒混入。
- 14. 黒褐色 焼土、ブロック状に多量含む。
- 15. 黒褐色 黒色土とローム土が互層に混入、堅滑。



水糸標高=9.300m



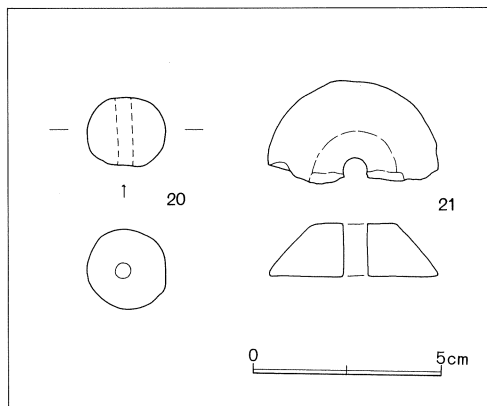
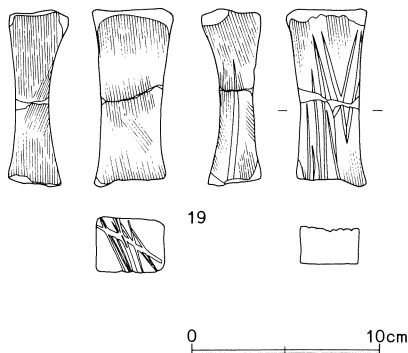
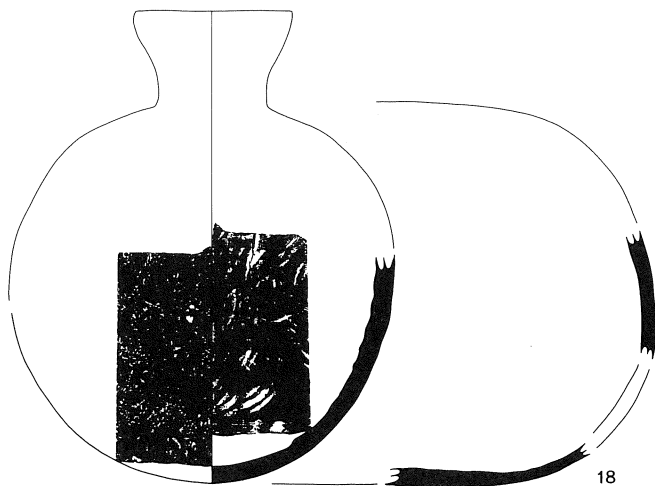
第129図 第64号住居跡



第130図 第64号住居跡出土遺物(1)

第64号住居跡出土遺物観察表 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (9.0) 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	暗赤褐	40	23	310	
2	ク	口径 10.2 底径 — 高さ 3.6 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		100	25	311	
3	ク	口径 10.0 底径 — 高さ 3.5 最大径 —	礫 砂粒		100	8	312	



第131図 第64号住居跡出土遺物(2)

第64号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
4	坏	口 径 11.5 底 径 — 高 さ (3.5) 最大径 —	白色粒 赤色粒 砂粒	にぶい赤褐	70	A・Cグリッド	313	
5	〃	口 径 (10.2) 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	40	Dグリッド	316	
6	〃	口 径 11.8 底 径 — 高 さ 3.9 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒		70	21	320	
7	〃	口 径 (12.5) 底 径 — 高 さ (4.6) 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	灰褐	30	A・Cグリッド	321	
8	〃	口 径 10.7 底 径 — 高 さ 4.6 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	100	26	319	
9	〃	口 径 12.2 底 径 — 高 さ 4.2 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	90	Aグリッド	317	
10	〃	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ 3.9 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	40	A・Bグリッド	318	
11	〃	口 径 11.2 底 径 — 高 さ 3.4 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	100	13	314	
12	〃	口 径 (11.4) 底 径 — 高 さ 3.9 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	40	Aグリッド	315	
13	〃	口 径 (10.5) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	赤褐	20	Aグリッド	322	

第64号住居跡出土遺物観察表 (3)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
14	坏	口径 (14.6) 底径 — 高さ 5.2 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	40	Aグリッド	323	
15	ク	口径 11.2 底径 — 高さ 7.1 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	赤褐	80	A・Cグリッド	273	
16	ク	口径 12.0 底径 — 高さ 5.4 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	ク	60	Cグリッド	376	
17	甕	口径 20.8 底径 — 高さ — 最大径 16.0	赤色粒 礫 砂粒	にぶい橙	胴上半70	6, 16, 床上, Pit1	328	
18	横瓶	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	灰	胴部 20	2, 20	549	

第64号住居跡出土土錘計測表

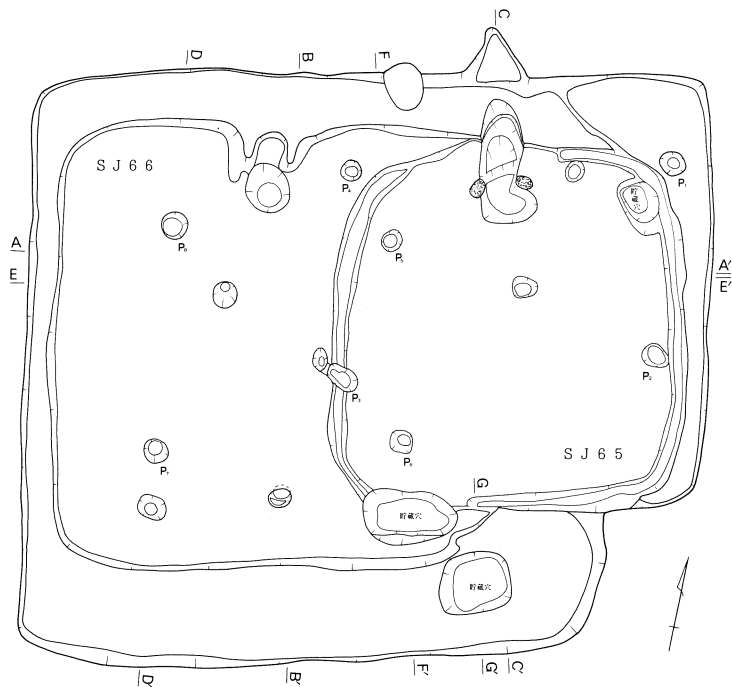
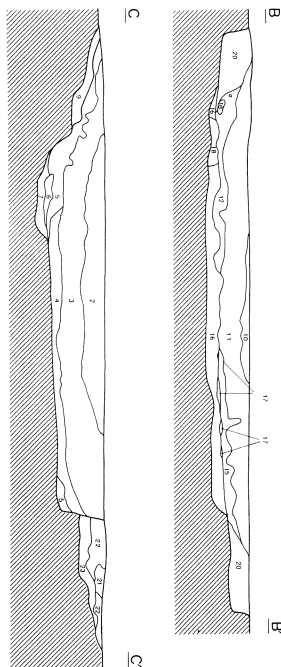
番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
20	—	2.1	0.4	7.03	完形	1	669

第65号住居跡 (第132図)

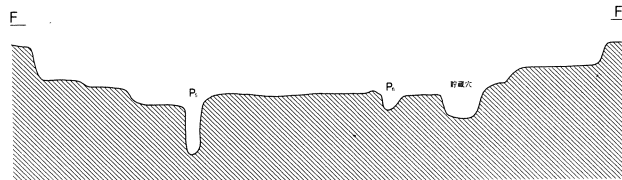
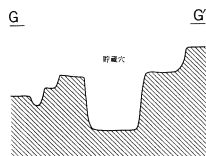
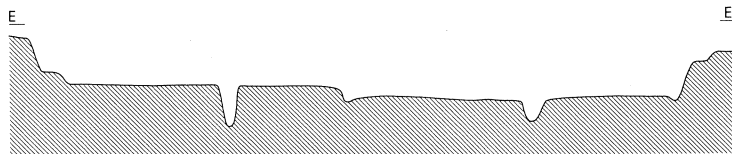
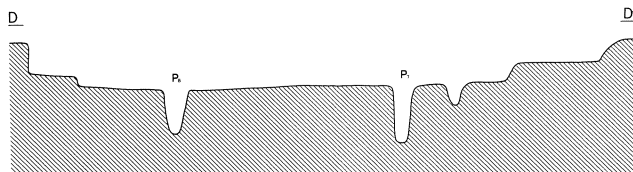
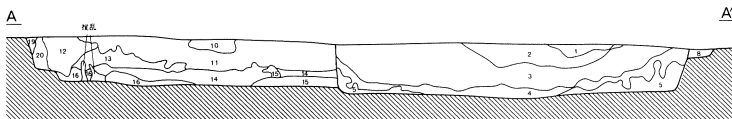
66号住居跡と重複しこれより新しい。また本住居跡は規模を縮小して建て替えられている。平面形は隅丸方形である。規模は3.9m×3.9mで深さは10cmである。主軸方位はN-14°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は北東隅に壁に接して検出された。上面は隅丸長方形の掘り込みで60cm×40cmほどで深さは16cmである。ピットはいくつか検出されたが建て替え前のものもあり支柱穴は不明である。壁溝はカマドの両側と南西隅が切れる。

カマドは北壁中央に設けられていた。残りが悪く袖は検出されなかったが砂岩のブロックが両脇に検出されたことから砂岩の切り石を構築材として使っていたことがわかる。焚口の幅は30cmで奥行きは110cmである。煙道は土層断面の観察で斜め上に延びていることがわかる。

建て替え前のものは一辺が4.4mほどの方形の住居と思われる。東側は高さ10cmほどの段になっている。掘り込みが浅いためか西側の立ち上がりは確認されなかった。ピットはP1～P4が柱穴



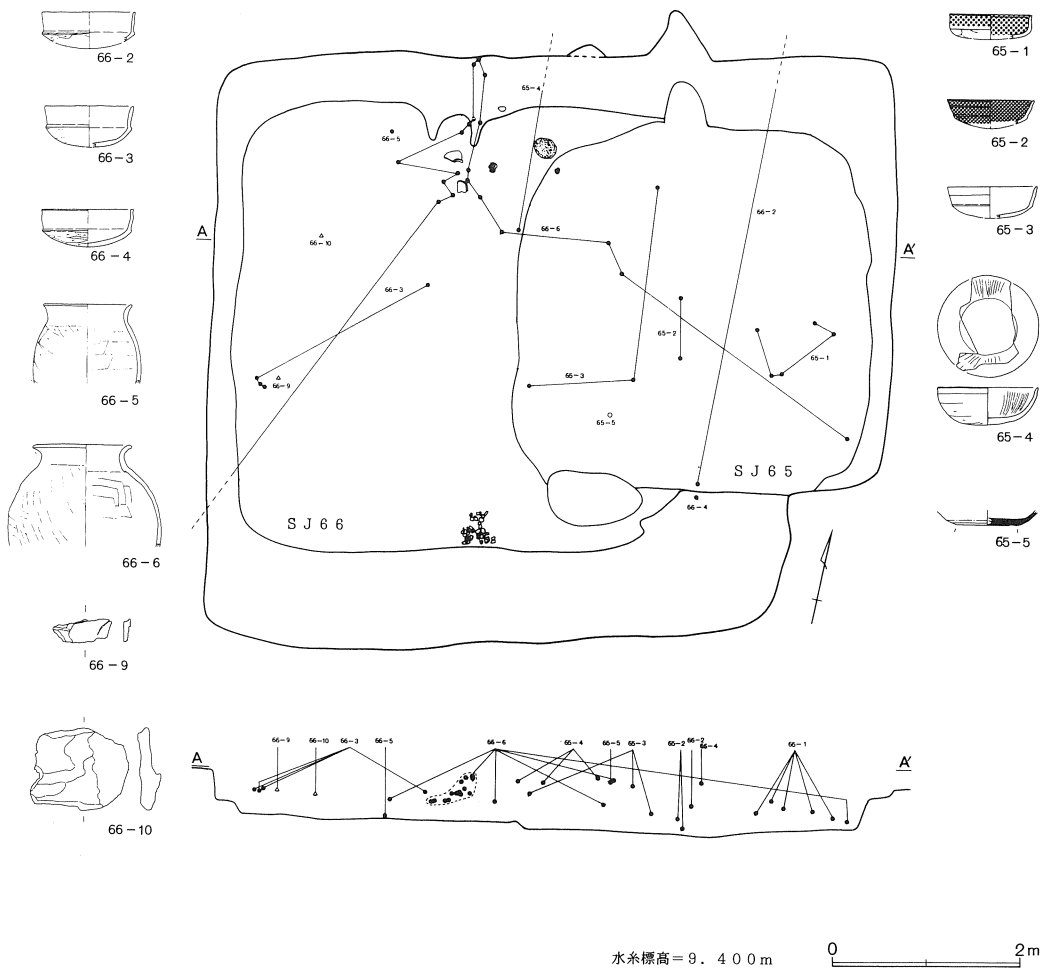
1. 黒褐色 しまり良、砂質、ローム粒少量含む。炭化粒・焼土粒含まない。
2. 黒褐色 しまり良、砂質、ローム粒混入多、炭化粒(5mm)まばらに混入。
3. 黒褐色 しまり良、砂質、2層よりローム粒・炭化粒混入多、焼土粒混入少。
4. 黒褐色 しまり弱、粘質、3層よりローム粒多量含む。
5. 暗褐色 しまり良、粘質、ローム粒混入多、カマド周辺は、焼土粘土、砂質土多量含む。
6. 赤褐色 しまり良、粘性なし、焼土粒、焼土ブロック充満。
7. 黒褐色 しまり良、ローム混入、雨移層。
8. 暗褐色 しまり良、粘質、ロームブロック混入多。
9. 黒褐色 しまり良、砂質、ロームブロック、焼土粒なし。
10. 黒褐色 しまり弱、砂質、2層厚弱、ローム粒少量含む。
11. 黒色 しまり良、砂質、10層よりローム粒多量含む。
12. 暗褐色 しまり良、砂質、11層よりローム粒多量含む。黒色部分がブロック状に混入。
13. 暗褐色 しまり良、砂質、ローム粒多量、炭化粒若干混入。
14. 暗褐色 しまり良、粘質、ロームブロック多量に混入。
15. 暗褐色 しまり良、粘質、焼土粒混入多。
16. 暗褐色 しまり良、粘質、灰色粘土ブロック環状に混入。
17. 暗褐色 しまり良、粘質、ハードロームのブロック状。
18. 褐色 ロームブロック。
19. 暗褐色 しまり良、粘質、ロームブロック多量含む。
20. 暗褐色 粘質、ロームブロック混入。
21. 暗褐色 ローム粒・砂粒混入。
22. 黒色 しまり良、砂質。
23. 暗褐色 ロームブロック混入。



水系標高 = 9.500m



第132図 第65・66号住居跡(1)



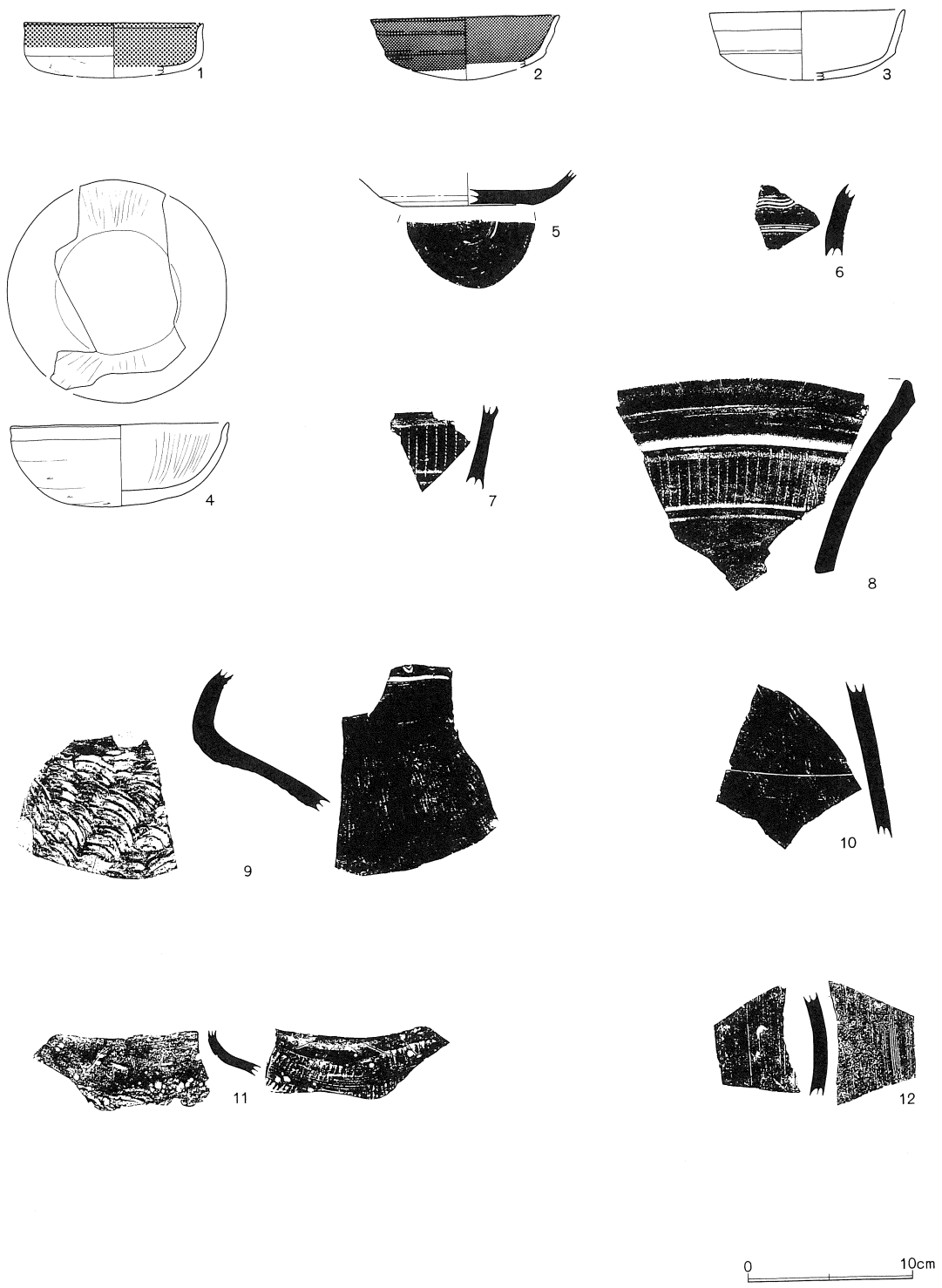
第133図 第65・66号住居跡(2)

である。覆土はP 1、P 4が黒褐色土、P 2、P 3は黒色土で若干のローム粒を含む。壁溝はない
カマドは北壁にあり建て替え時に壊されているために詳細は不明である。

遺物は土師器坏、須恵器甕片などが覆土中から出土している。甕の口縁部破片は湖西産のものも含まれる。

第66号住居跡（第132図）

65号住居跡と重複し、これより古い。拡張住居である。平面形は隅丸方形になると思われる。東辺は65号住居跡に壊されている。規模は6.2m×6mで確認面からの深さは24cmである。方位は西辺でN-12°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は拡張前の住居を粘質の暗褐色土で埋めて作っている。貯蔵穴は南東隅に検出された。隅丸長方形の掘り込みで上面78cm×64cmほどで深さは60cmである。覆土は黒色土でローム粒が少量含まれている。柱穴はよくわからない。拡



第134图 第65号住居跡出土遺物

第65号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (11.0) 底 径 — 高 さ 3.3 最大径 —	礫 砂粒		40	2083, 2387, 2426	329	
2	〇	口 径 (11.6) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	砂粒	褐灰	20	2412, 2496	324	
3	〇	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ 4.2 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	浅黄橙	30	1808, 1995, 2478	325	
4	〇	口 径 (13.4) 底 径 — 高 さ 5.0 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〇	40	1764, 1773, 1967	326	
5	〇	口 径 — 底 径 8.0 高 さ — 最大径 —	礫 白色針状物質 砂粒	灰白	底部 50	1830	519	
6	甕	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	暗灰	破片		65-77	
7	〇	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒	灰オリーブ	〇		65-73	湖西産
8	〇	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	灰黄褐	〇		65-71	湖西産
9	〇	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	灰白	〇		65-56	叩き幅 4本/cm
10	〇	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒	にぶい褐	〇		65-74	湖西産? 叩き幅 4本/cm

第65号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
11	甕	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	暗青灰	破片		65-78	叩き幅 4本/cm
12		口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	暗青灰	破片		65-59	

張前のものと同じ可能性も考えられる。壁溝はない。

カマドは検出されなかった。65号住居跡によって壊されたと考えられる。

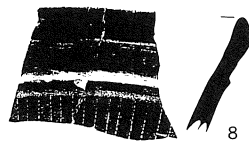
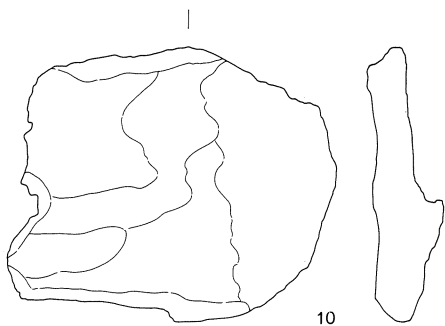
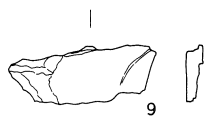
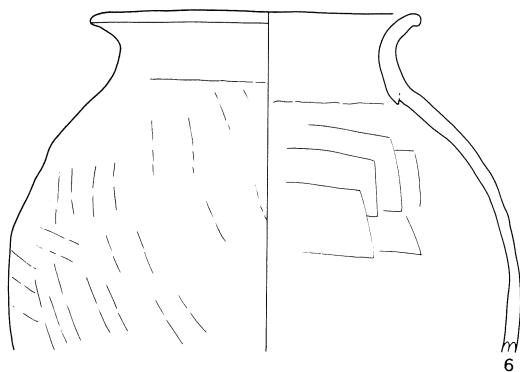
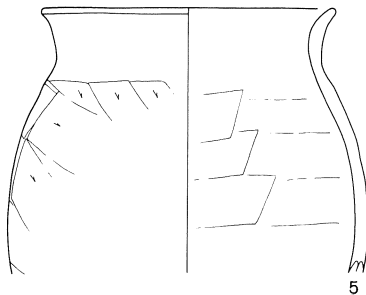
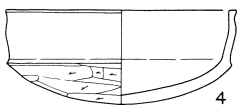
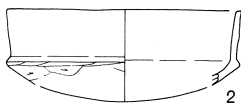
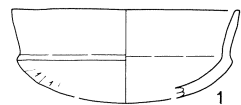
拡張前の住居跡は西辺が4.5mで東側は65号住居跡によって壊されている。深さは拡張後の床面から15cmほどである。貯蔵穴は南東隅に検出された。隅丸長方形の掘り込みで100cm×54cm、深さは40cmである。

カマドは北辺に検出された。上面は拡張時に削られているため袖の基底部が残っていただけで、先端は失われていた。焚口幅は50cmほどと思われ奥行きは95cmほどと推測される。

遺物は土師器坏、甕が出土している。また拡張前の住居の南壁際に円礫がまとまって検出された

第66号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (12.2) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 砂粒	明赤褐	20		330	
2	〃	口径 (12.5) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	30	3237, 3276, 3278	331	
3	〃	口径 (12.0) 底径 — 高さ 5.5 最大径 —	礫 砂粒	〃	30	2190, 2197, 2198	327	
4	〃	口径 12.3 底径 — 高さ 5.0 最大径 —	礫 砂粒	〃	80	2127	332	



0 5cm

0 10cm

第135图 第66号住居跡出土遺物

第66号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
5	甕	口 径 (15.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 (19.3)	赤色粒 礫	にぶい黄褐	口縁 30	3157	333	
6	〃	口 径 17.0 底 径 — 高 さ — 最大径 27.3	赤色粒 礫 砂粒	赤褐	胴上半	1946, 1954, 1961	565	
7	〃	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	青黒	破片	2458	66-75	
8	〃	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒	灰褐	〃	2207	66-72	湖西産

第66号住居跡出土石製模造品計測表

番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
9	39	15	4	4.10	剝片	2195	914
10	87	73	19	153.00	原石	2179	776

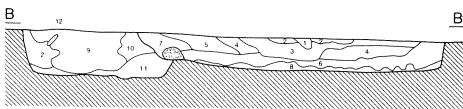
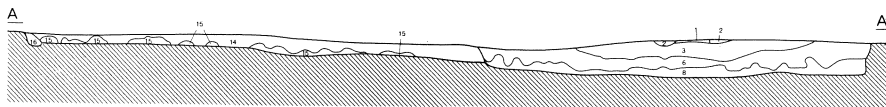
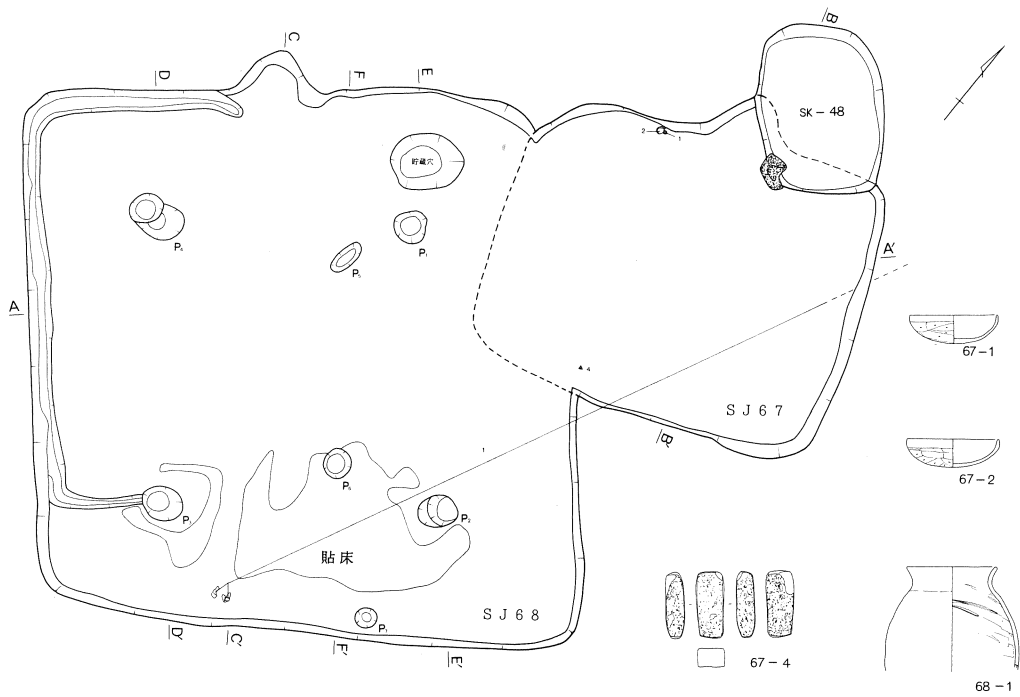
第67号住居跡（第136図）

68号住居跡、48号土坑と重複する。68号住居跡より新しく48号土坑より古い。平面形は隅丸長方形と推定される。規模は3.7m×2.9mで確認面からの深さは33cmである。主軸方位はN-23°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は中央部がわずかに下がる浅い皿状を呈する。貯蔵穴、柱穴、壁溝などの施設はいっさい検出されなかった。

カマドは北壁中央に設けられていた。残りが悪く袖はなかったが砂岩のブロックが右袖に相当する部分に検出された。

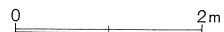
遺物は坏と砥石が床面から浮いた状態で出土している。

砥石 6面とも使用されている。石質は所謂軽石で空隙が非常に多い。

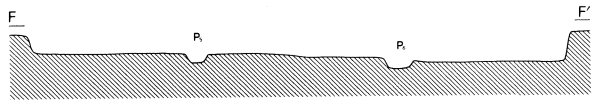
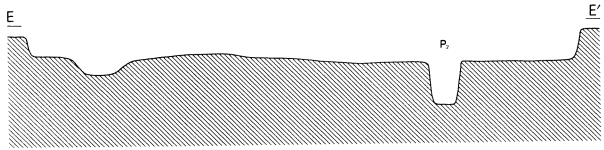
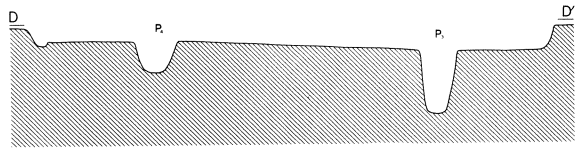


1. 赤褐色 焼土ブロック。
2. 赤褐色 しまり弱。砂質。焼土粒多量含む。
3. 黒色 しまり弱。砂質。ローム粒・焼土粒少量含む。
4. 黒色 しまり弱。砂質。ローム粒多量含む。
5. 赤褐色 しまり弱。砂質。焼土粒・炭化物多量含む。焼土は場所によりブロック状となる。
6. 黒褐色 しまり弱。砂質。焼土・ローム粒・炭化物含まない。
7. 暗褐色 砂岩ブロックと焼土粒多量含む。
8. 褐色 地山ロームブロックを多量含む。
9. 黒色 しまり弱。砂質。ローム粒・焼土粒含まない。
10. 黒褐色 しまり弱。砂質。ローム粒多量含む。
11. 黒褐色 2層より明るい色調。ローム粒・炭化物多量含む。
12. 暗褐色 しまり弱。やや粘質。ブロック状に1・2層に混入。
13. 黒色 しまり弱。砂質。ローム粒・焼土粒含まない。
14. 黒褐色 しまり弱。砂質。ローム粒多量含む。
15. 暗褐色 しまり良。やや粘質。ロームブロック多量含む。
16. 黒褐色 しまり弱。砂質。14層よりローム粒多。褐色味強い。
17. 赤褐色 焼土多量含む。
18. 暗褐色 焼土・炭化物・ローム粒多量含む。
19. 暗赤褐色 焼土・炭化物多量含む。
20. 黒褐色 ローム粒含む。

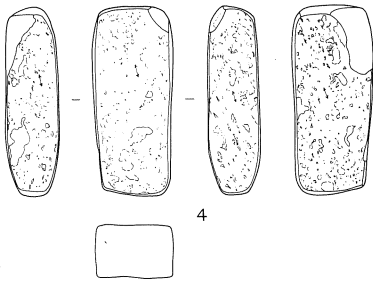
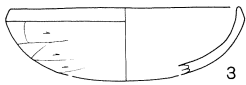
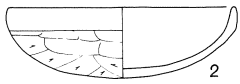
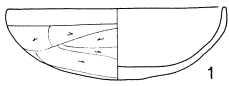
水系標高=9.500m



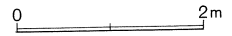
第136図 第67・68号住居跡



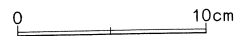
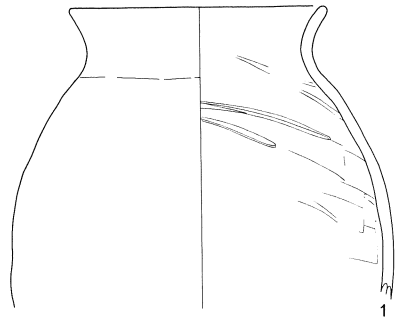
S J 6 7



水系標高=9.500m



S J 6 8



第137図 第67・68号住居跡出土遺物

第67号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 11.8 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	礫 砂粒	橙褐	80	389	335	
2	〃	口径 12.2 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〃	90	390, 1716	334	
3	〃	口径 (12.4) 底径 — 高さ 3.9 最大径 —	礫 砂粒	〃	20	1772	336	

第68号住居跡 (第136図)

67号住居跡と重複する。これより古い。貯蔵穴の位置、壁溝、柱穴の状態などから拡張された可能性がある。平面形は方形であるが東西方向にやや歪む。規模は5.8m×5.7mで確認面からの深さは32cmである。主軸方位はN-40°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は緩い起伏をもち東側がわずかに下がっている。南側には一部貼床が認められた。貯蔵穴は北隅に検出された。東壁からはおよそ80cmほど離れている。楕円形に近い掘り込みで80cm×60cmほどで深さは32cmである。ピットはP1～P4が支柱穴と考えられる。覆土は黒色土で砂質である。しまりは悪く混入物は少ない。他のピットも住居跡に伴うものと考えられる。壁溝は北辺カマド東側と西辺に検出された。西辺からはP3に接続する。

カマドは北辺中央に設けられていた。袖は検出されなかった。

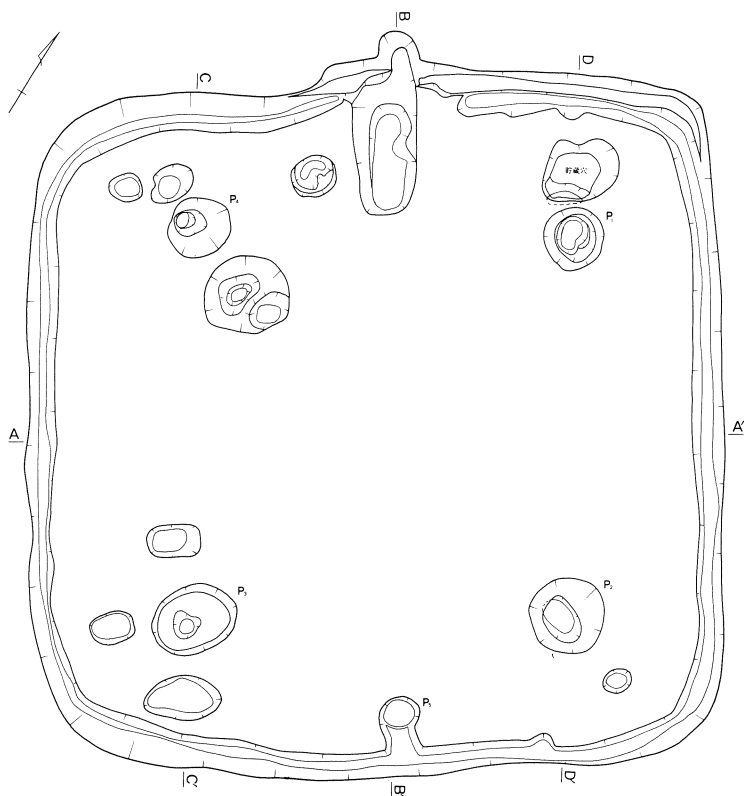
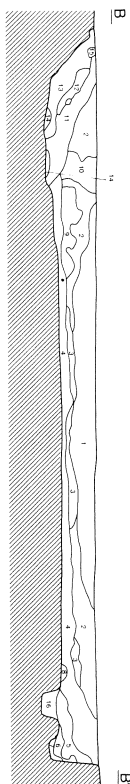
遺物で図示できるのは土師器甕1点のみである。

第68号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	甕	口径 (13.6) 底径 — 高さ — 最大径 (20.4)	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	胴上半30	394, 395, 595	337	

第69号住居跡 (第138図)

平面形は隅丸方形である。他の遺構との重複はない。規模は7.5m×7.5mで確認面からの深さは52cmである。主軸方位はN-31°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦であ

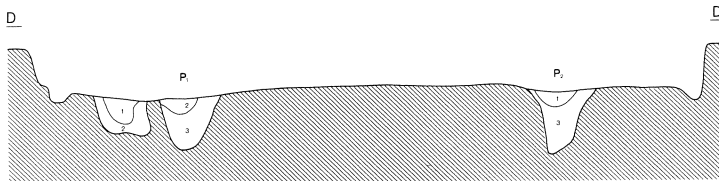
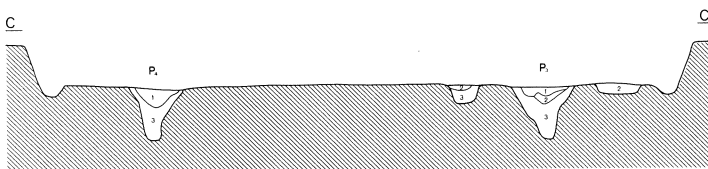
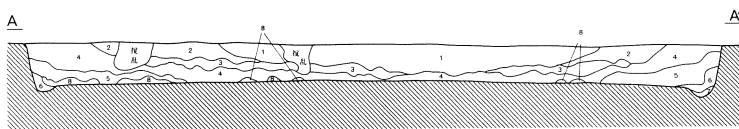


A-A'・B-B'

1. 黒褐色 しまり弱。砂質。炭化粒・ローム粒含む。中央部焼土含む。
2. 黒褐色 しまり弱。砂質。1層より明るい。炭化粒・ローム粒含む。カマド付近焼土粒混入多。
3. 黒色 しまり良。砂質。炭化粒多量含む。焼土・ローム粒少ない。
4. 暗褐色 しまり良。砂質。炭化粒・ローム粒・焼土粒含む。
5. 黒褐色 しまりやや良。粘質。3層類似するが明るいローム粒・炭粒・焼土粒含む。
6. 暗褐色 しまり弱。やや粘質。1~5層よりロームブロック混入。部分的に指頭大の炭粒含む。
7. 暗褐色 しまり弱。やや粘質。ロームブロック多。炭化粒・焼土粒少ない。
8. 暗褐色 しまり弱。やや粘質。ロームブロック多。
9. 赤褐色 しまり弱。砂質。焼土・砂粒多量含む。
10. 黒褐色 しまりやや良。砂質。焼土粒多量含む。
11. 赤褐色 しまりやや良。粘質。焼土粒多量含む。砂粒少。
12. 黒色 しまりやや弱。粘質。焼土粒・砂粒少量含む。
13. 赤褐色 しまり良。焼土粒・焼土ブロック多量含む。炭化粒・砂粒少量含む。
14. 赤色 しまり良。焼土ブロック充満。
15. 黄褐色 しまり良。やや粘質。ローム。
16. 黒褐色 しまりやや良。ローム粒少量含む。

C-C'・D-D'

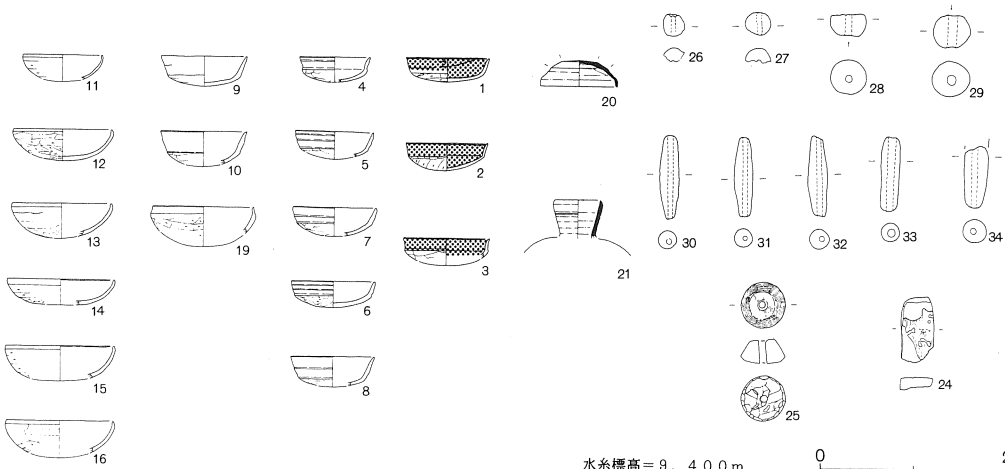
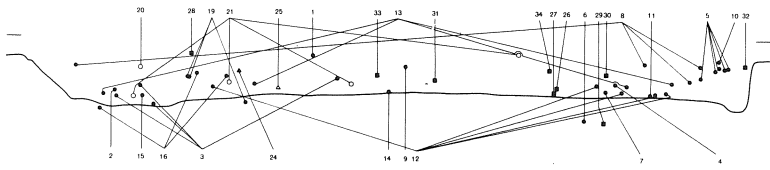
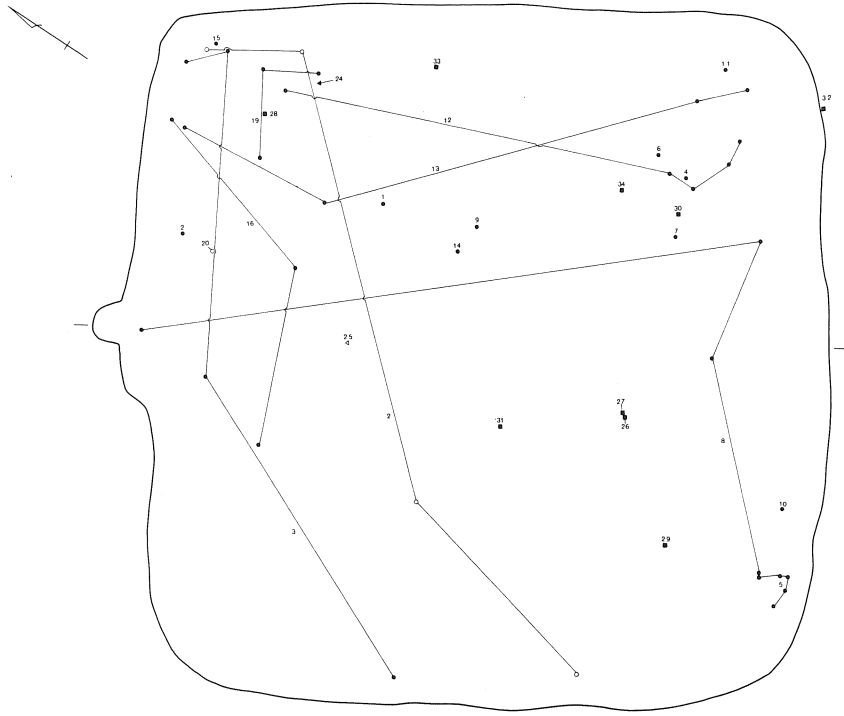
1. 黒褐色 しまり弱。砂質。ローム粒・焼土を多く含む。
2. 暗褐色 しまり弱。砂質。炭化粒・ロームブロック多。
3. 暗褐色 しまり弱。やや砂質。2層よりローム粒が多。



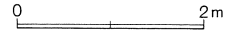
水系標高=9.400m



第138図 第69号住居跡(1)



水糸標高=9.400m



第139図 第69号住居跡(2)

る。貯蔵穴は北隅に検出された。不整形の掘り込みで76cm×60cmほどで深さは40cmである。ピットはP1～P4が主柱穴である。P5は壁溝が接続しており何等かの施設があったことを窺わせる。他のピットも配置や覆土の状態から住居跡に伴うものと考えられる。壁溝はカマド部分を除いて全周する。

カマドは北西辺中央に設けられていた。袖は残っていなかった。燃焼部の掘り込みから推測すると焚口の幅は60cmほどで奥行きは190cmである。

遺物は坏、土錘、石製紡錘車など出土している。

砥石 覆土中からの出土である。被熱して剥離しているため2面しか残っていない。2面ともよく使用されて平滑である。端面は使用していないようである。

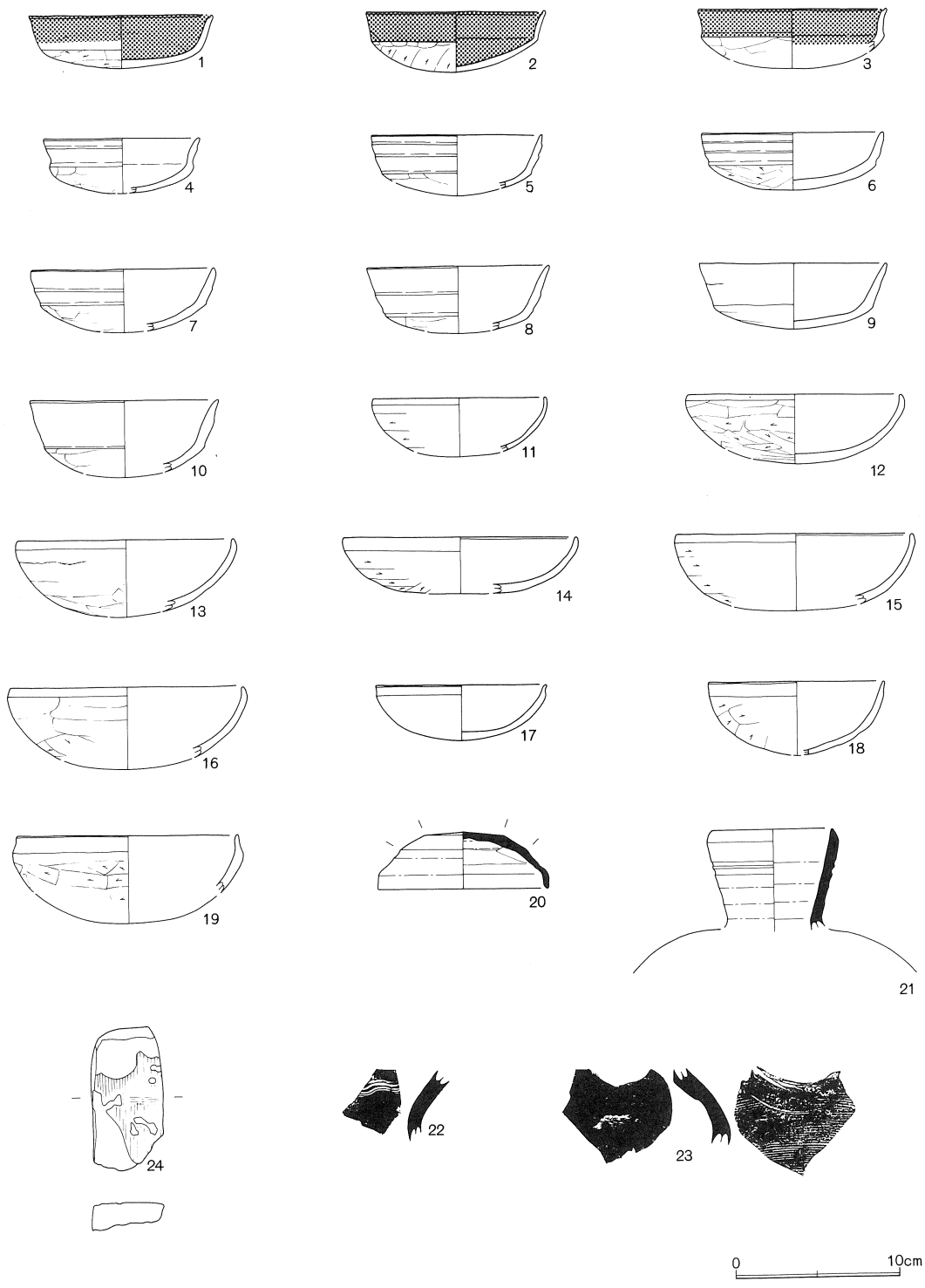
紡錘車 25は住居跡のほぼ中央床面よりやや浮いた状態で出土した。断面は下面が完全に整形されていないために下が膨らむ形となっている。上面は研磨されているがまだ一方向の整形痕が残っている。孔周辺は穿孔の際に大きく削られている。下面はわずかに研磨されてはいるが削りの痕跡が全面に残る。周辺部は左回りに斜めに削られている。側面は面取りされた後左回りの細かい整形痕が残る。穿孔は両方向から行われている。上面径2.2cm、下面径4.0cm、孔径7mm、重量45.92g。滑石製。

第69号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (11.3) 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	礫 砂粒		50	303	345	
2	ク	口径 11.0 底径 — 高さ 3.2 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		70	1246	344	
3	ク	口径 11.6 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 砂粒		40	1401, 1483, 1580	299	
4	ク	口径 (9.6) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	40	1107	297	
5	ク	口径 10.6 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	40	1043, 1065, 1067	342	

第69号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
6	坏	口 径 (11.2) 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	40	2934	341	
7	〃	口 径 (11.3) 底 径 — 高 さ 3.8 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	30	1117	298	
8	〃	口 径 (11.2) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〃	40	520, 1041, 1232	343	
9	〃	口 径 (11.6) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	20	2285	339	
10	〃	口 径 (11.6) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	20	515	338	
11	〃	口 径 (10.7) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〃	20	1637	346	
12	〃	口 径 13.3 底 径 — 高 さ 4.2 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	70	1111, 1197, 1509	348	
13	〃	口 径 13.4 底 径 — 高 さ 4.7 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	60	1256, 1279	350	
14	〃	口 径 14.4 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	20	1474	301	
15	〃	口 径 (14.5) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	橙褐	20	1487	300	



第140図 第69号住居跡出土遺物

第69号住居跡出土遺物（3）

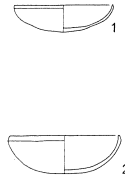
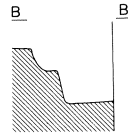
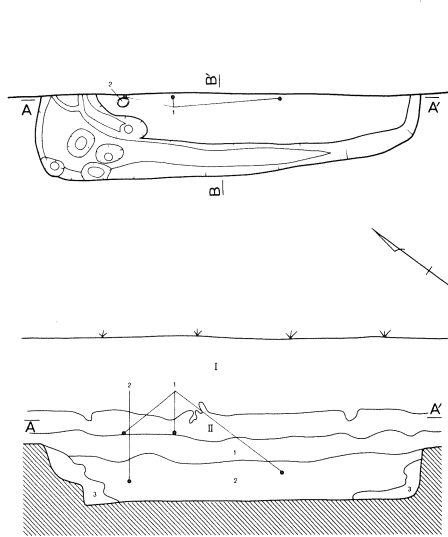
番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
16	坏	口 径 (14.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	40	627, 710, 3918	349	
17	〃	口 径 10.5 底 径 — 高 さ 3.4 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	100		347	
18	〃	口 径 (10.8) 底 径 — 高 さ 4.5 最大径 —	礫 砂粒	〃	20		296	
19	〃	口 径 (13.6) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	20	765, 1271, 1543	351	
20	蓋	口 径 (10.5) 天井径 (4.7) 高 さ 3.5 最大径 —	白色粒 黑色粒 礫 砂粒	灰	50	614	520	分析No.8
21	提瓶	口 径 7.5 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 黑色粒 礫 砂粒	灰	口縁 50	773, 989, 1486	510	
22	甕	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	灰	破片	2043	69-96	
23	長頸壺	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 黑色粒 礫 砂粒	灰	破片	902	69-103	

第70号住居跡（第141図）

大部分が調査区外にかかる。検出されたのは南西辺のみであるため平面形などの詳細は不明である。南西辺の長さは4.1mで深さは60cmである。方位は南西辺を基準としてN-38°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは北側にかたまって検出されたが住居跡に伴うものかどうか分からない。

壁溝は南側には検出されず途中から掘り込まれている。また西隅部分は内側にさらに一本接して掘

S J 7 0

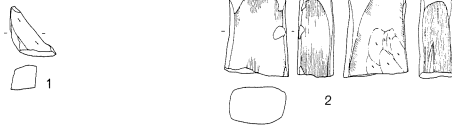
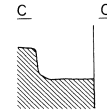
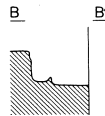
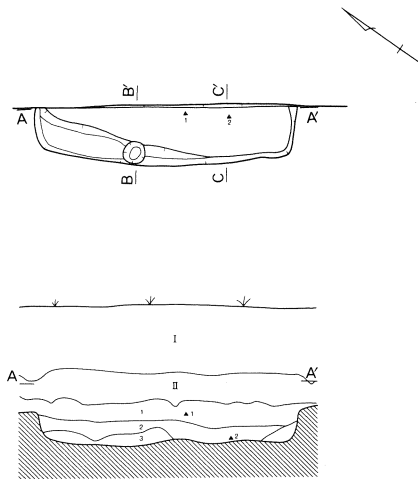


- I. 黒褐色
- II. 黒色
- 1. 黒褐色 しまりやや良。砂質。炭化物、焼土粒・ローム粒多量
- 2. 黒褐色 しまりやや良。砂質。焼土粒多量含む。炭化物混入。
- 3. 暗褐色 しまりやや良。やや粘質。ブロック多量含む。

水系標高=9.400m

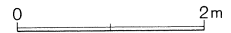


S J 7 1



- I. 黒褐色
- II. 黒色
- 1. 黒褐色 しまり良。炭化物、焼土粒微量含む。
- 2. 黒褐色 しまり良。1層より明るい。炭化物、焼土粒微量含む
- 3. 黒褐色 しまり弱。やや粘質。ロームブロック混入少。

水系標高=9.400m



第141図 第70・71号住居跡

第69号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
26	—	—	—	(2.00)	1/4	955	677
27	—	2.0	0.3	(2.87)	1/2	954	676
28	—	2.8	0.5	(9.58)	1/2	2236	675
29	—	2.9	0.7	16.65	完形	2610	674
30	6.5	1.4	0.4	11.56	完形	1116	668
31	6.0	1.4	0.3	9.77	完形	971	673
32	6.1	1.5	0.4	10.54	完形	545	671
33	5.7	1.4	0.5	10.07	完形	318	672
34	(4.8)	1.8	0.4	(14.16)	2/3	452	670

られている。

遺物は覆土中から坏が出土している。

第70号住居跡出土遺物

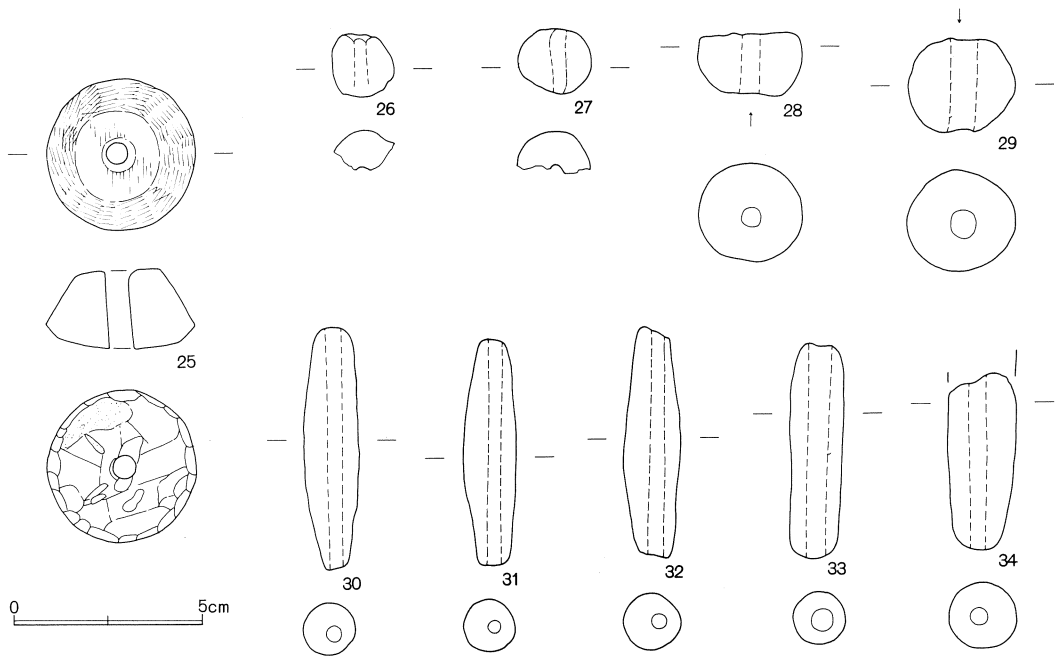
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (13.2) 底径 — 高さ 3.6 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	30	2677, 2684, 5043	352	
2	〃	口径 (14.3) 底径 — 高さ 5.1 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	40	5045	353	

第71号住居跡 (第141図)

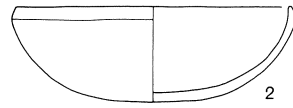
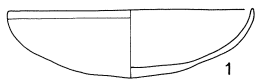
大部分が調査区外にかかる。70号住居跡と同じく南西辺が検出されただけである。長さは2.8mで深さは34cmである。方位はN-34°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は検出面積が狭いために全体の傾向とは思えないがやや起伏が多い様である。壁際の北半分ほどが掘り込まれている。ピットは1個検出されたが柱穴かどうか不明である。

遺物は床面及び覆土中から砥石が出土した。

砥石 (1. 2) 1は覆土上層からの出土である。被熱している。破損しているため上面と側面の一部が残っているだけであるが使用により平滑になっている。端面はごくわずかに使用された痕

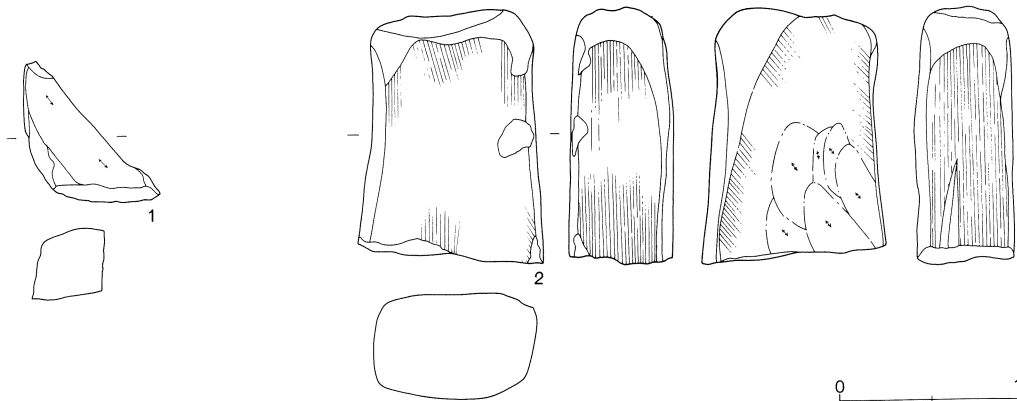


S J 6 9



S J 7 0

S J 7 1



第142图 第69·70·71号住居跡出土遺物

跡が残る。2は床面からの出土である。被熱している。4面とも平滑になるまで使用され特に両側面は内反りしており全体の形状は角柱状を呈する。下端は折損している。上端は形を整えるために打ち欠いたものと思われる。

第73号住居跡（第143図）

住居跡の北西部分4分の1を攪乱によって壊されている。平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は4m×3.9mで確認面からの深さは17cmである。主軸方位はN-18°-Wである。壁は垂直に掘り込まれている。床面は若干北方向に傾くが平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは3個検出された。主柱穴と考えられる。1個は攪乱によって壊されている。壁溝は各辺とも1ヵ所部分的に切れている。

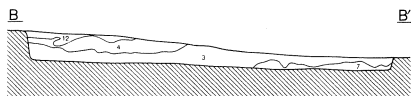
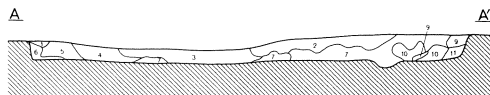
カマドは北辺のやや東よりに設けられていた。西側は攪乱によって少し削られている。袖は検出されなかった。燃烧部底面の掘り込みからの奥行きは140cmである。

遺物は北東隅の床面から坏、甕、鉄製品が一括して出土している。また住居跡中央からは須恵器の坏を転用した硯が出土した。

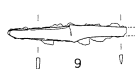
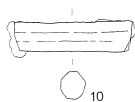
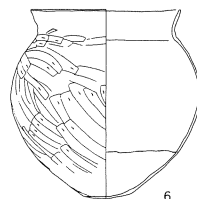
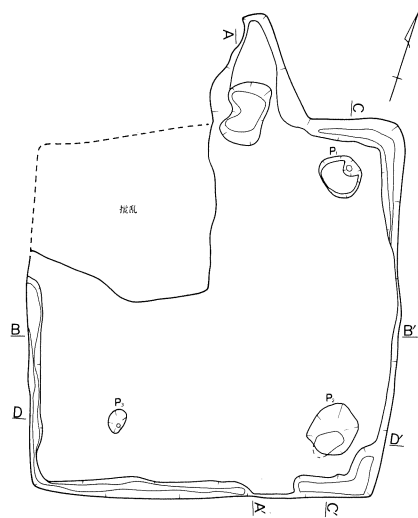
鉄製品（9～11） 9は刀子である。刀身の半分を欠失する。刃部は研減りしている。関は両関である。刀身部現存長4.4cm、身幅7mm、背幅3mmほどである。茎部は長さ4.7cm、幅1cm、背幅3mmほどである。10は断面八角形をした棒状の製品で両端は斜めになっており重い。用途不明。長さ9cm、太さ1.8×2.1cm。11は板状の製品である。図の右側は折損しているようにも見えるがよくわからない。大きさは4.5cm×3.7cm、厚さ6mmで均一である。

第73号住居跡出土遺物（1）

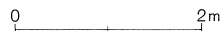
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (13.2) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	20	Dグリッド	357	
2	ク	口径 (14.1) 底径 — 高さ (3.8) 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	40	A・Bグリッド	356	
3	ク	口径 13.5 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい褐	60	28	355	
4	ク	口径 13.6 底径 — 高さ 3.5 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	90	27, 28	354	灯明



- | | |
|----------------------------|--------------------------------|
| 1. 灰褐色 しまり良、ローム粒含む。 | 7. 黄褐色 しまり良、やや粘質。 |
| 2. 暗褐色 しまり良、焼土粒・炭化粒少量含む。 | 8. 暗黄褐色 焼土粒・炭化粒少量含む。 |
| 3. 暗褐色 しまり良、焼土粒・炭化粒少量含む。 | 9. 赤褐色 しまり良、焼土ブロック(2~3cm)含む。 |
| 4. 暗褐色 しまり良、ローム粒多量含む。 | 10. 赤褐色 しまり良、焼土ブロック(2~10cm)含む。 |
| 5. 黒褐色 しまり弱、ロームブロック少、炭化粒少量 | 11. 黒褐色 しまり弱、焼土ブロック(1cm)含む。 |
| 6. 黒褐色 しまり良、ローム粒含む。 | 12. 黄褐色 しまり良、やや砂質。 |



水糸標高 = 11.000 m



第143図 第73号住居跡

第73号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
5	甕	口径 17.9 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	口縁 100	24, 29	378	
6	ク	口径 24.3 底径 7.5 高さ 30.2 最大径 30.6	白色粒 礫 角閃石 砂粒	暗赤褐	60	31, 32	377	
7	坏	口径 — 底径 9.0 高さ — 最大径 —	礫 白色針状物質 砂粒	褐	底部 100	4	358	転用硯
8	甕	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	オリーブ黒	破片	1933	73-106	

第74号住居跡（第145図）

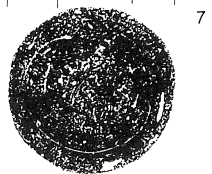
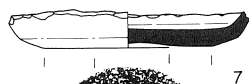
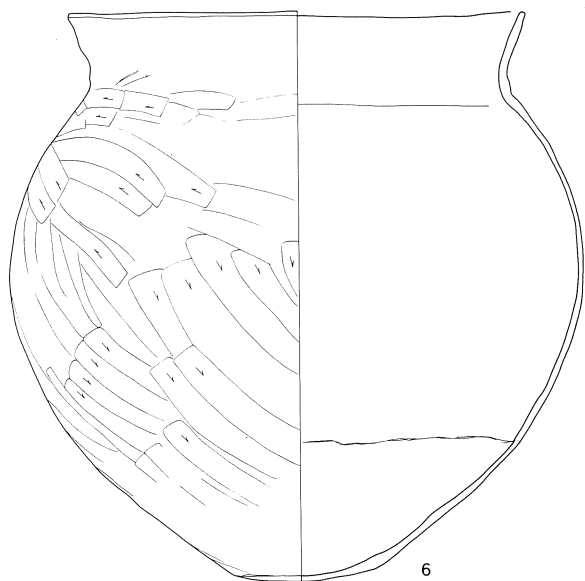
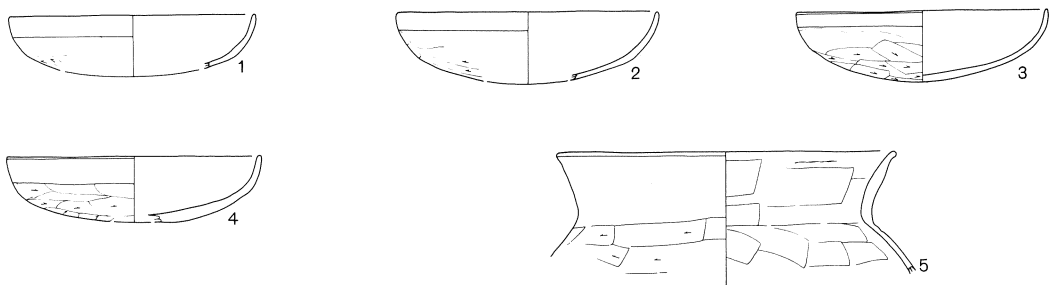
半分以上が調査区外にかかる。平面形は隅丸方形と思われる。すぐ北側に76号住居跡がある。規模は東辺が5mで南辺は2.9mほど検出されている。深さは検出面の状態が悪く思い切って下げたために8cmほどしか残っていないが土層断面の観察では約40cmほど地山を掘り込んでいる。方位は東辺でN-44°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面は北から南に緩く傾斜する。貯蔵穴は北東隅に検出された。隅丸長方形の掘り込みで上面68cm×56cmほどで深さは50cmである。ピットは2個検出された。主柱穴と考えられる。覆土は黒褐色で少量の焼土を含みしまっている。壁溝は全周するものと思われる。

カマドは検出されていないが北辺の調査区際の土層断面に砂岩の崩れた砂粒と焼土粒を含む層が確認されカマドの右袖部分にあたると考えられる。

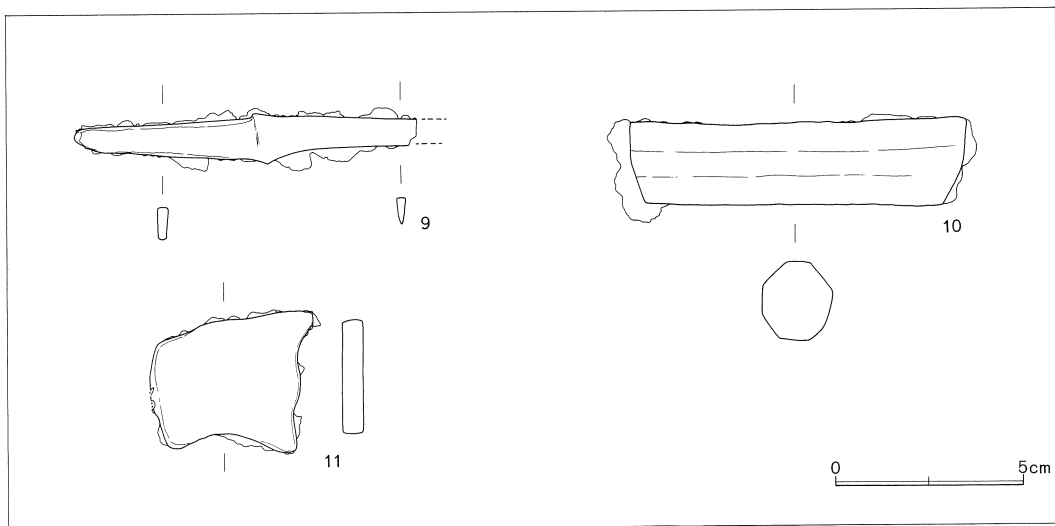
遺物は図示できるものは出土しなかった。

第75号住居跡（第145図）

半分以上が調査区外にかかる。柱穴及び壁溝の状態から拡張住居と考えられる。平面形は隅丸方形と思われる。検出されたのは西辺と南北辺の約半分ほどである。西辺の長さは4.3mで南辺は2mほど検出されている。方位は西辺を基準としてN-20°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。柱穴はP1、P2が拡張後の主柱穴と考えられる。覆土は黒色土でしまり弱く砂質である。ロームブロックを斑状に含む。他のピットの覆土は黒褐色で色調が明るくロームブロックの混入も多い。壁溝は南辺で二重になっており南側

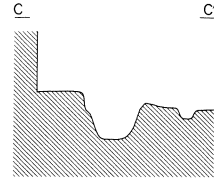
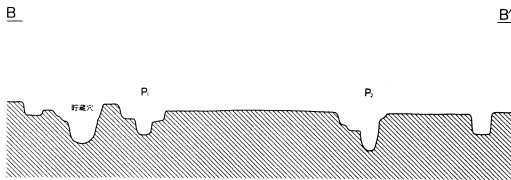
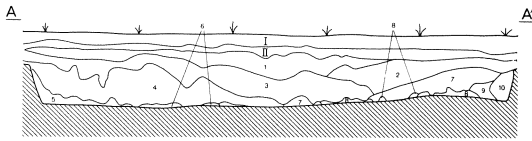
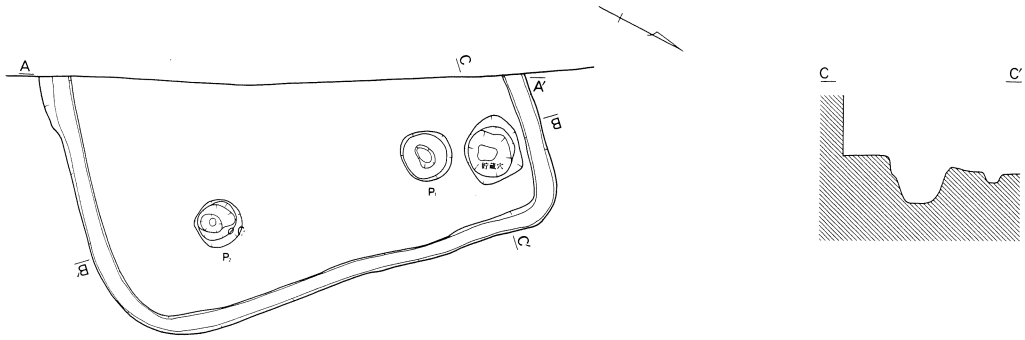


0 10cm



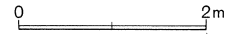
第144图 第73号住居跡出土遺物

S J 7 4

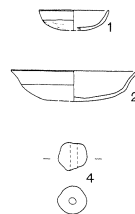
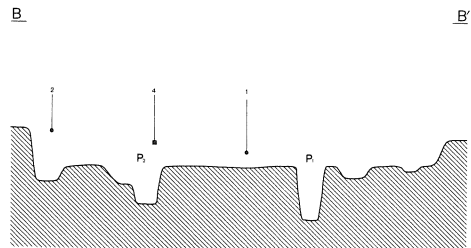
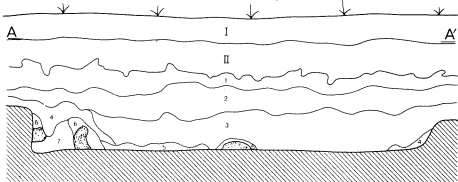
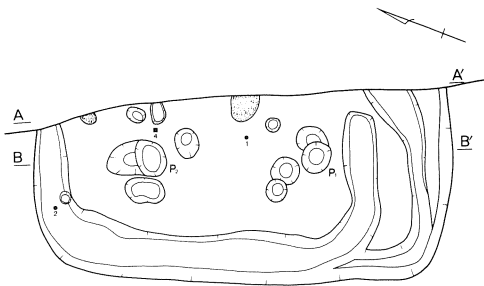


- I. 灰褐色
- II. 黒褐色
- 1. 暗褐色 しまり良。焼土粒微量混入。
- 2. 黒褐色 しまり良。焼土粒微量混入。
- 3. 黒褐色 しまり良。2層よりやや黒い。
- 4. 黒褐色 しまり弱。ローム粒、ブロック斑状に混入
- 5. 黄褐色 しまり良。ローム粒混入多。
- 6. 黒褐色 しまり弱。
- 7. 黒褐色 しまり良。ローム粒・焼土粒微量混入。
- 8. 灰褐色 しまり良。粘質。砂粒多量含む。
- 9. 黒褐色 しまり良。焼土粒微量含む。
- 10. 黒褐色 粘質。9層より黒い。焼土粒微量含む。

水糸標高 = 11.000 m



S J 7 5



- I. 灰褐色
- II. 黒褐色
- 1. 黒褐色 しまり弱。砂質。黄色粒まばらに含む。
- 2. 黒色 しまり良。砂質。黄色粒・炭化粒含む。
- 3. 黒褐色 しまり弱。砂質。小ヌコリヤ粒・炭化粒含む。
- 4. 暗褐色 しまり弱。砂質。地山のローム粒多量混入。
- 5. 黒色 しまり良。砂質。焼土粒・炭化粒・砂岩粒子多量含む
- 6. 暗褐色 しまり良。砂質。カマド付近に砂岩粒子・焼土粒多量
- 7. 暗褐色 しまり弱。砂質。焼土粒混入多。

水糸標高 = 10.400 m



第145図 第74・75号住居跡

に拡張したことがわかる。

カマドは検出されなかったが調査区壁際の断面にわずかにかかっている。砂岩のブロックがみられることからこれの切り石を袖に使っていたと思われる。

遺物は少量であるが覆土中からの出土で湖西産の坏も含まれる。

第75号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (9.4) 底径 — 高さ 2.2 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	20	112	295	
2	ク	口径 (17.0) 底径 — 高さ 4.1 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	50	1	302	
3	ク	口径 (8.6) 底径 (3.6) 高さ 3.9 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	灰黄褐	40	上面	521	湖西産 分析No. 5

第75号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
4	—	1.9	0.5	4.74	完形	17	702

第76号住居跡 (第146図)

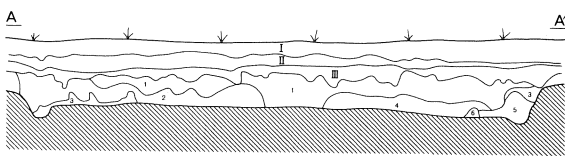
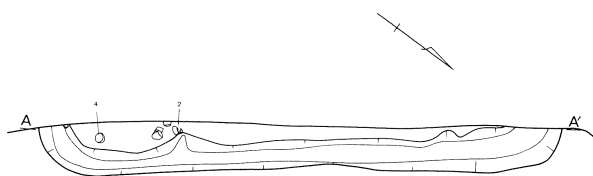
大部分が調査区外である。検出されたのは東辺だけであるため平面形は不明といわざるをえない。東辺の長さは5.6mで確認面からの深さは20cmである。方位は東辺でN-25°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴、柱穴などは検出されなかった。壁溝は深さ10cmほどでしっかりしたものである。

カマドも検出されなかった。おそらく調査区外にあると思われる。

遺物は床面から土師器坏及び湖西産の坏が出土している。

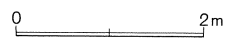
第77号住居跡 (第147図)

18号溝と重複しこれより古い。また東辺と南辺の一部、床面東側のかなりの部分が攪乱されている。平面形は長方形である。規模は3.9m×3.5mで確認面からの深さは36cmである。主軸方位はN-35°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は18号溝及び攪乱によってかなり壊されているが西側はほぼ平坦である。貯蔵穴は北隅に検出された。長方形ぎみの掘り込みで上面50cm×40cmほどで深さは30cmである。覆土は黒褐色でしまりはやや弱くロームブロックを少量含む。ピッ



- I. 灰褐色
- II. 黒褐色
- III. 灰褐色
- 1. 黒褐色 しまり弱。焼土粒・ローム粒微量混入。
- 2. 黒褐色 しまり良。炭化物、焼土粒少量含む。
- 3. 黒褐色 しまり良。焼土粒微量含む。黒っぽい色調。
- 4. 黒褐色 しまり良。焼土粒(3mm~1cm)少量含む。
- 5. 黄褐色 しまり良。焼土粒少量含む。
- 6. 黄褐色 ロームブロック

水系標高=111.900m



第146図 第76号住居跡

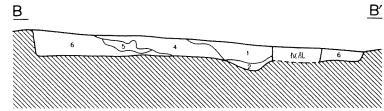
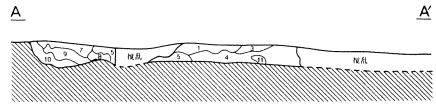
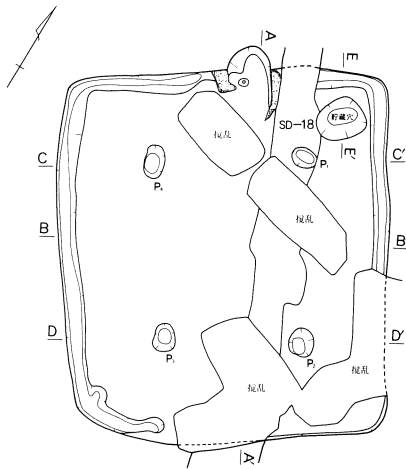
第76号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (11.2) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 砂粒		20	覆土	360	
2	ク	口径 11.3 底径 — 高さ 3.9 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		60	378,379	359	
3	ク	口径 (15.0) 底径 — 高さ (3.3) 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	30		361	

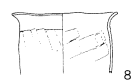
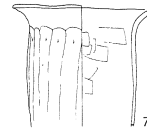
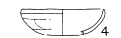
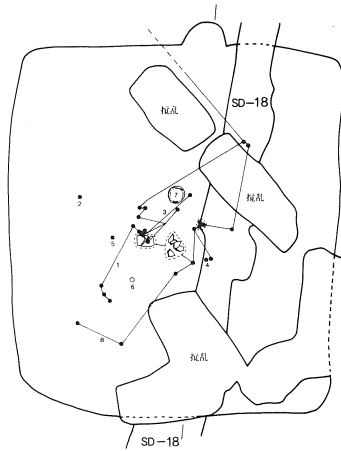
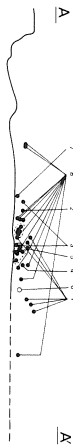
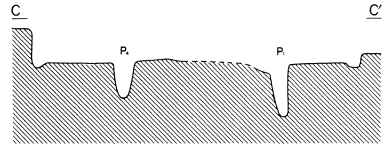
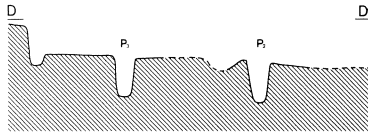
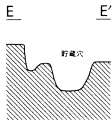
トはP1~P4が主柱穴である。覆土は褐色度でしまりはやや弱く焼土粒、ローム粒を少量含む。壁溝は南辺と東辺の南側は切れる様である。

カマドは北辺のほぼ中央に設けられていた。袖には切り石が用いられている。両袖とも攪乱によって一部が壊されており遺存状態は良くない。焚口の幅は35~40cmと推測され奥行きは右袖先端部から約80cmである。

遺物は18号溝及び攪乱によって一部巻き込まれたものもあるがほとんどは床面中央部から出土している。



1. 黒色 しまり弱。砂質。焼土、炭化物混入。SD18覆土
2. 黒褐色 しまり良。粘質。ローム粒混入多。SD18覆土。
3. 赤褐色 しまり弱。砂質。焼土ブロック混入多。
4. 黒褐色 しまり弱。焼土混入小。炭化粒含む。
5. 赤褐色 しまり弱。砂質。焼土微粒子混入。
6. 暗褐色 しまり良。砂質。焼土粒・炭化粒混入少。
7. 黒褐色 しまり良。ローム粒混入。焼土ブロック少量含む
8. 赤褐色 しまり良砂質。微細焼土粒含む。
9. 赤褐色 しまり良。砂質。焼土ブロック多量含む。
10. 暗黄褐色 ローム混入。



水系標高 = 11.000 m



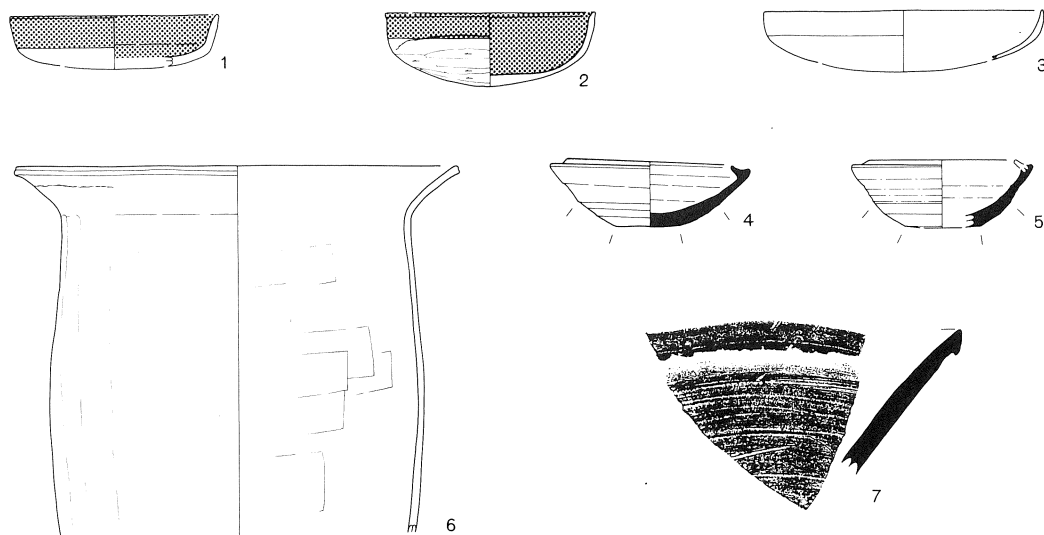
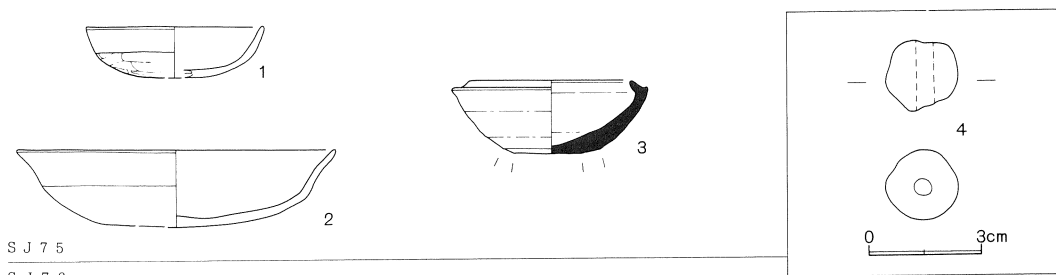
第147図 第77号住居跡

第76号住居跡出土遺物（2）

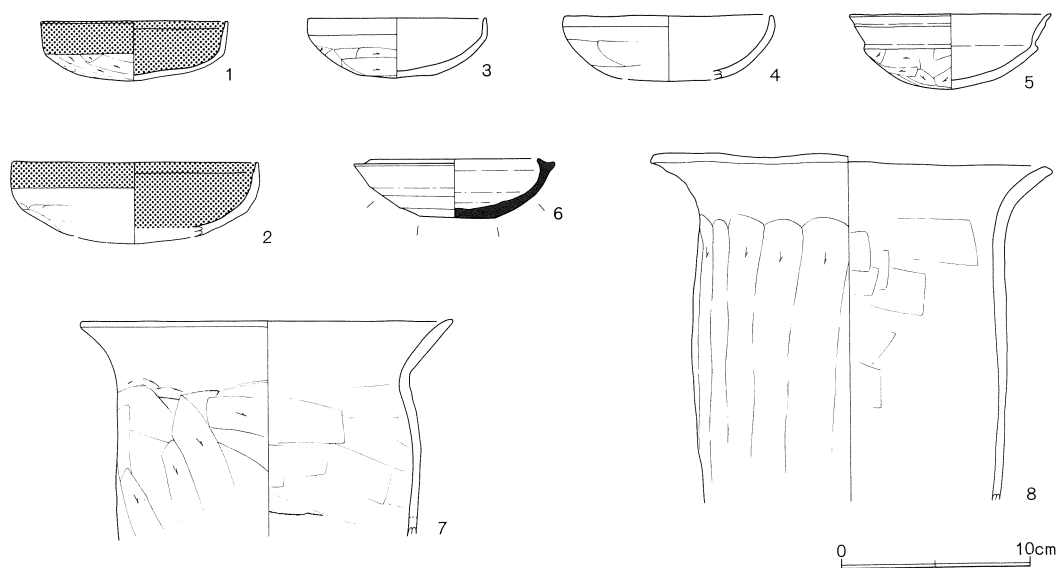
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
4	坏	口径 8.8 底径 3.4 高さ 3.4 最大径 -	白色粒 礫 砂粒	褐灰	100	385	522	湖西産 分析No.6
5	〆	口径 (7.9) 底径 (4.1) 高さ 3.6 最大径 -	白色粒 礫 砂粒	〆	40		523	湖西産 分析No.16
6	甕	口径 (23.5) 底径 - 高さ - 最大径 (20.0)	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	にぶい褐	胴上半30		362	
7	〆	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	暗青灰	破片	76	76-112	

第77号住居跡出土遺物（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 10.0 底径 - 高さ 3.2 最大径 -	赤色粒 礫 砂粒		90	3085, 3086, 3112, 3113	363	
2	〆	口径 (13.2) 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		20	6111	365	
3	〆	口径 (9.6) 底径 - 高さ 3.2 最大径 -	礫 砂粒	にぶい黄橙	30	3054, 5474	367	
4	〆	口径 (11.2) 底径 - 高さ 3.5 最大径 -	礫 角閃石 砂粒	橙褐	30	6288	366	
5	〆	口径 10.8 底径 - 高さ 4.0 最大径 -	礫 角閃石 砂粒	明黄褐	80	3081	364	灯明皿と して使用 か？



S J 7 7



第148図 第75・76・77号住居跡出土遺物

第77号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
6	坏	口径 9.1 底径 4.2 高さ 3.2 最大径 -	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	灰	100	3136	524	
7	甕	口径 19.9 底径 - 高さ - 最大径 16.3	礫 角閃石 砂粒	橙褐	口縁 100	5801	368	
8	ク	口径 21.0 底径 - 高さ - 最大径 17.0	礫 砂粒	にぶい赤褐	胴上半 80	2908, 2909, 3103	369	

第78号住居跡（第149図）

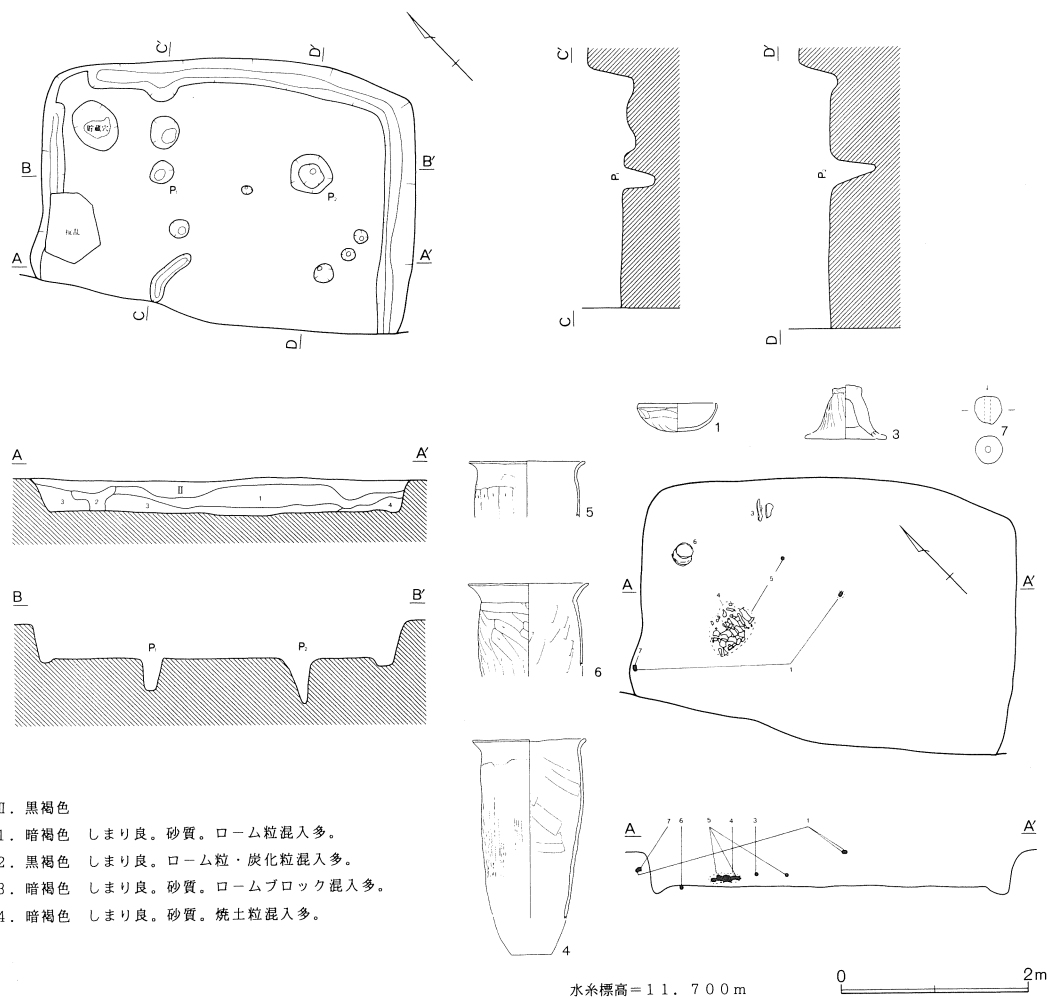
約半分が調査区外にかかる。検出されたのは東辺と南辺、北辺の約半分である。平面形は方形と思われる。他の遺構との重複はない。規模は東辺が4mで南辺は2.5mほど検出されている。確認面からの深さは25cmである。方位は東辺でN-44°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面はほぼ平坦である。貯蔵穴は北隅に検出された。56cm×44cmほどの掘り込みで深さは30cmである。覆土は暗褐色でしまり弱く砂質である。ローム粒、焼土粒と炭化物を含む。ピットはP1、P2が主柱穴と考えられる。覆土は貯蔵穴と同じである。他のピットは覆土が粘質のものが多い。壁溝は北隅が切れている。

カマドは検出されなかったがおそらく北辺の調査区外にあるものと思われる。

遺物は貯蔵穴上面及び床面直上から甕などが出土している。

第78号住居跡出土遺物（1）

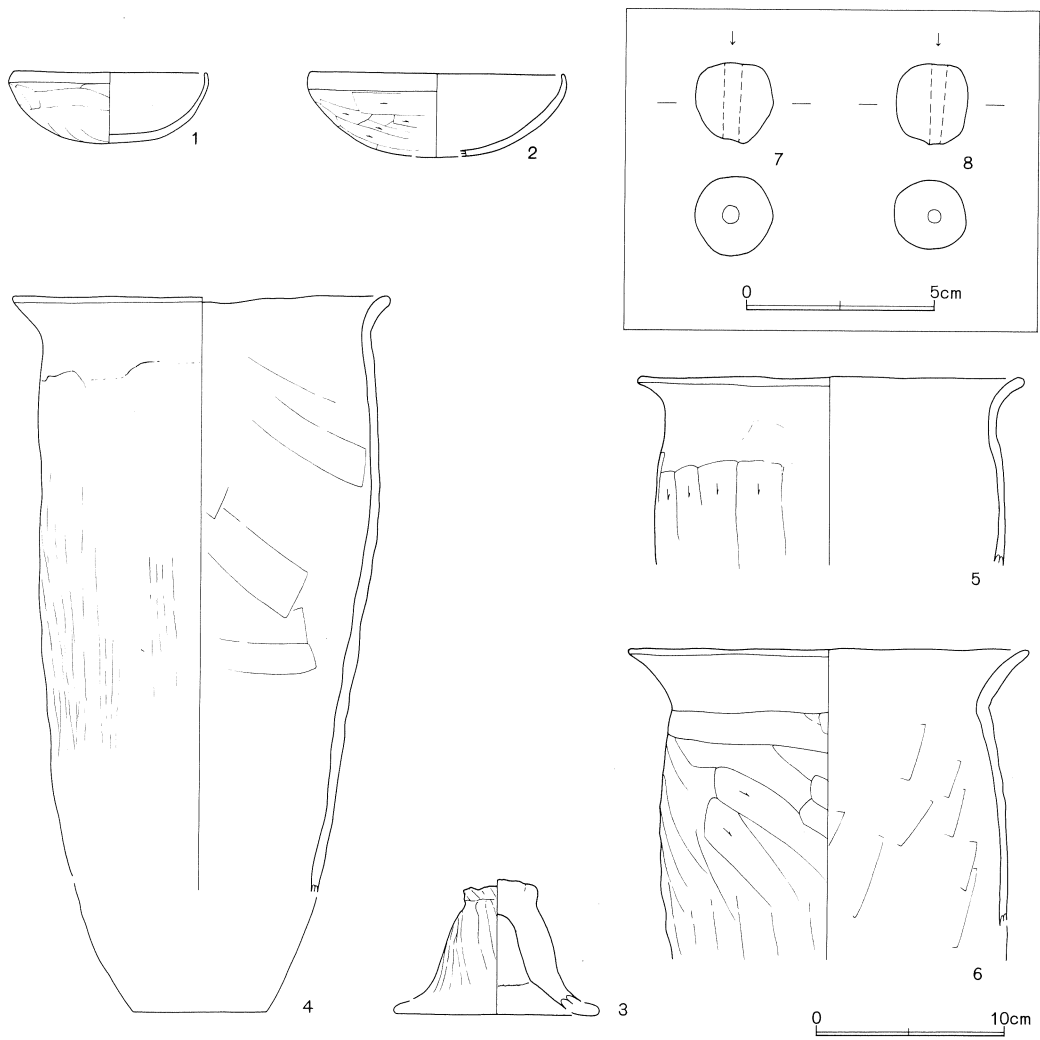
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 10.2 底径 - 高さ 3.8 最大径 -	角閃石 砂粒	橙褐	90	2989, 6957, 6958	370	
2	ク	口径 (13.6) 底径 - 高さ 4.4 最大径 -	礫 角閃石 砂粒	にぶい橙	30	2980, 2993, 2994	371	



第149図 第78号住居跡

第78号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
3	高坏	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	脚部 50	3697	372	
4	甕	口径 (20.2) 底径 — 高さ — 最大径 18.1	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	底部欠80	3717, 3719, 3721	375	



第150図 第78号住居跡出土遺物

第78号住居跡出土遺物 (3)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
5	甕	口径 20.4 底径 — 高さ — 最大径 10.0	礫 砂粒	明赤褐	口縁 70	973, 2974, 2975	373	
6	〃	口径 21.3 底径 — 高さ — 最大径 14.5	礫 角閃石 砂粒	橙褐	胴上半	3694	374	

第78号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
7	—	2.0	0.4	7.00	完形	2988	685
8	—	1.9	0.3	6.06	完形	3026	679

第79号住居跡 (第151図)

80号、84号住居跡と重複しこれらより新しい。平面形は隅丸方形である。規模は4 m×3.8 mで確認面からの深さは20cmである。主軸方位はN-46°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP2～P5が主柱穴と考えられる。覆土は暗褐色でしまりがあり砂質である。ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む。P7～P9も住居跡に伴うものと考えられる。覆土は黒色でしまり弱く砂質。炭化粒を含む。壁溝は全周せず北西と南西辺の一部にのみ検出された。

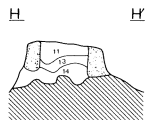
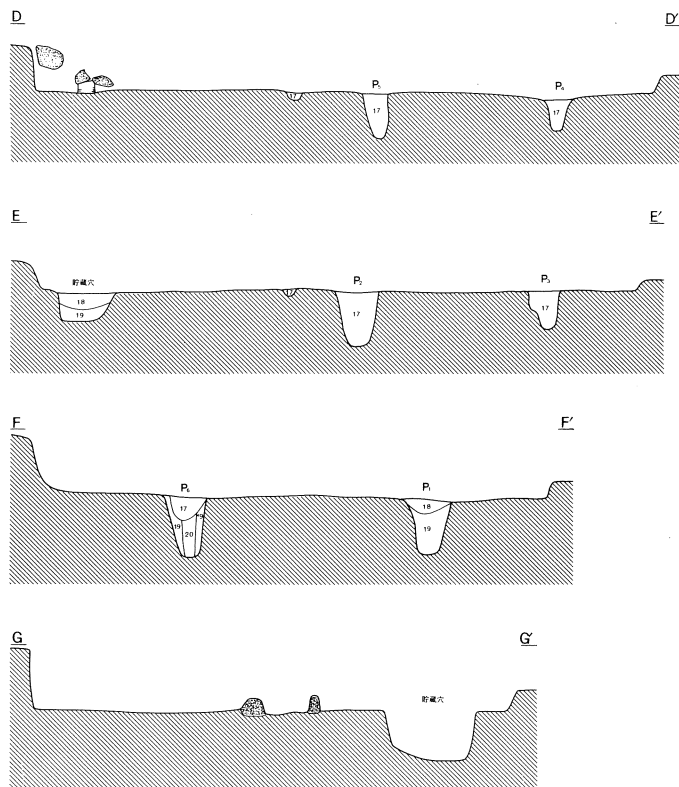
カマドは北東辺中央に設けられていた。遺存状態が悪く袖は検出されなかったが砂岩の切り石が検出された。焚口部の天井に使われていたものと思われる。焚口の幅は50cmほどと思われ奥行きは60cm、煙道の長さは40cmである。

遺物はカマドを中心として坏、甕と多量の土玉が出土している。

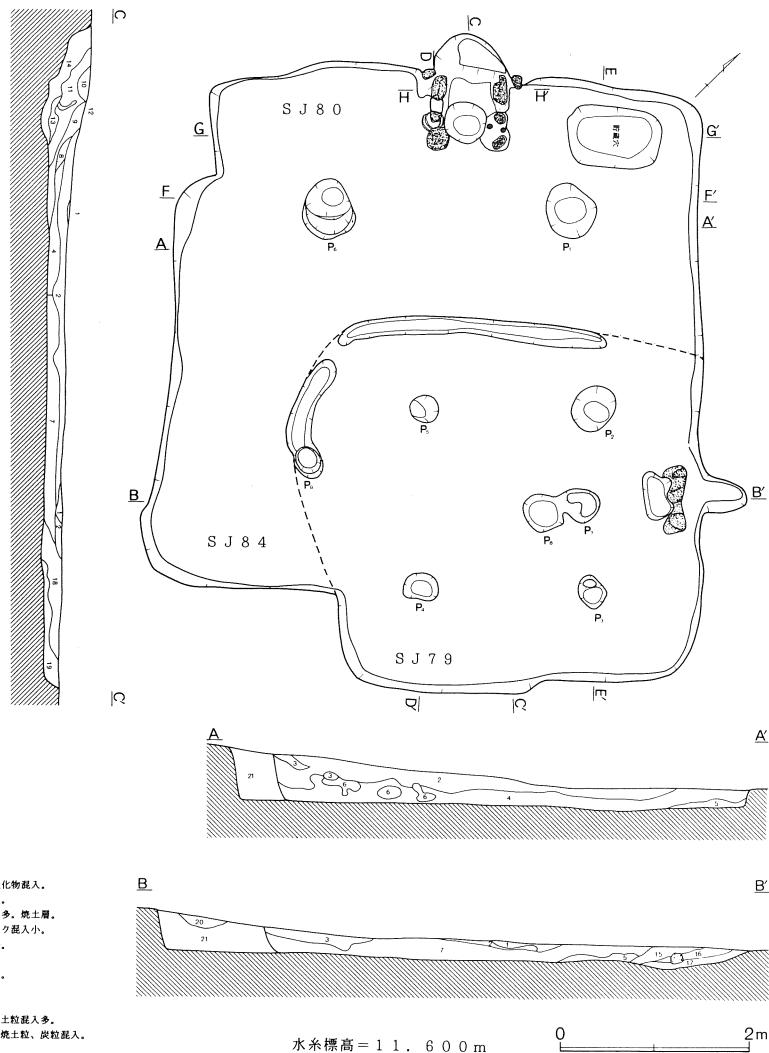
第79号住居跡出土遺物 (1)

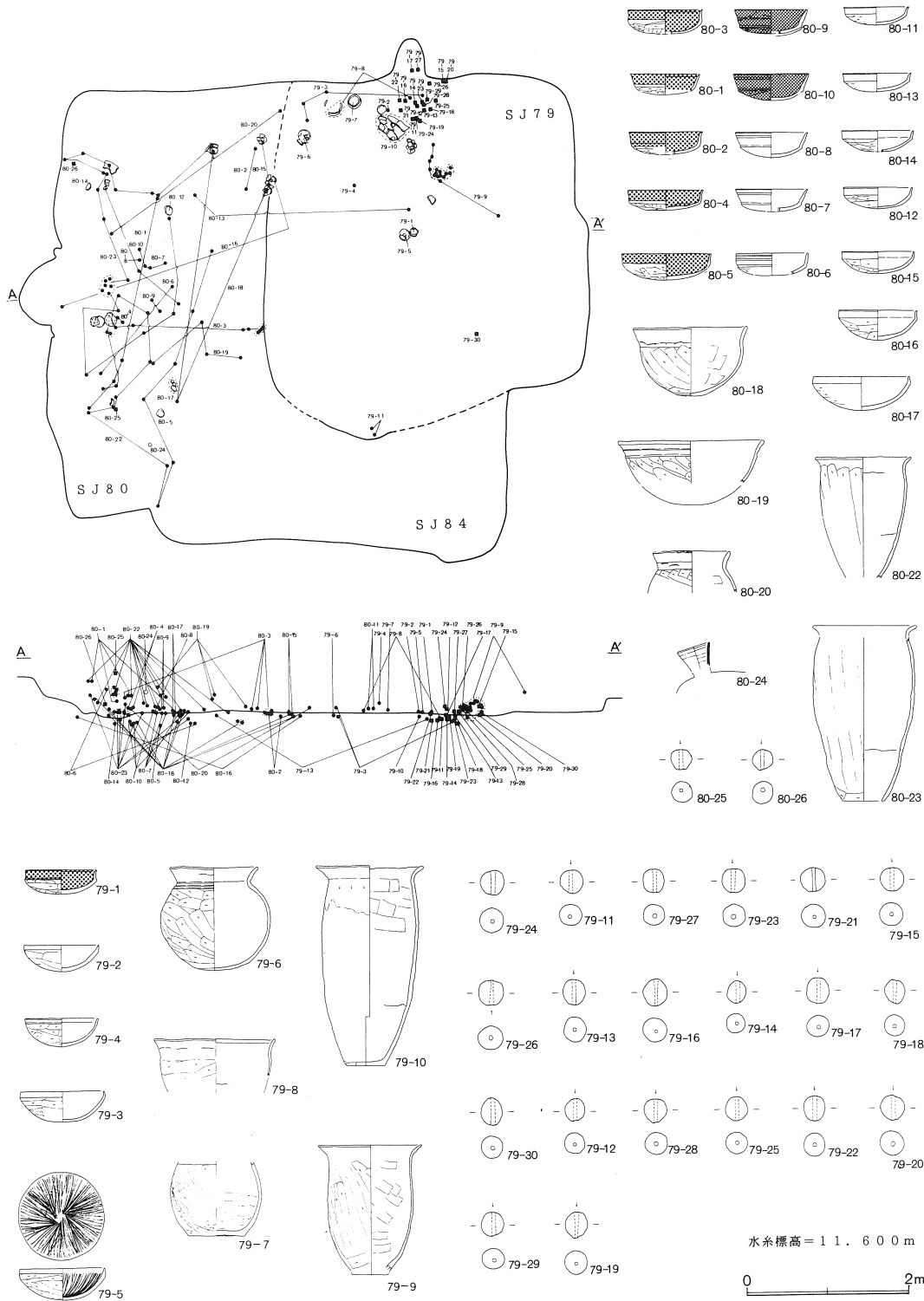
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 11.0 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	礫 砂粒		90	7896	397	
2	ク	口径 11.6 底径 — 高さ 4.1 最大径 —	礫 砂粒	赤褐	90	6068	408	
3	ク	口径 12.9 底径 — 高さ 4.6 最大径 —	礫 砂粒	橙褐	50	3518, 6063, 8291	406	
4	ク	口径 11.4 底径 — 高さ 4.4 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	ク	60	3547	409	
5	ク	口径 13.2 底径 — 高さ 4.9 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	赤褐	100	7895	410	

第151図 第79・80・84号住居跡(1)

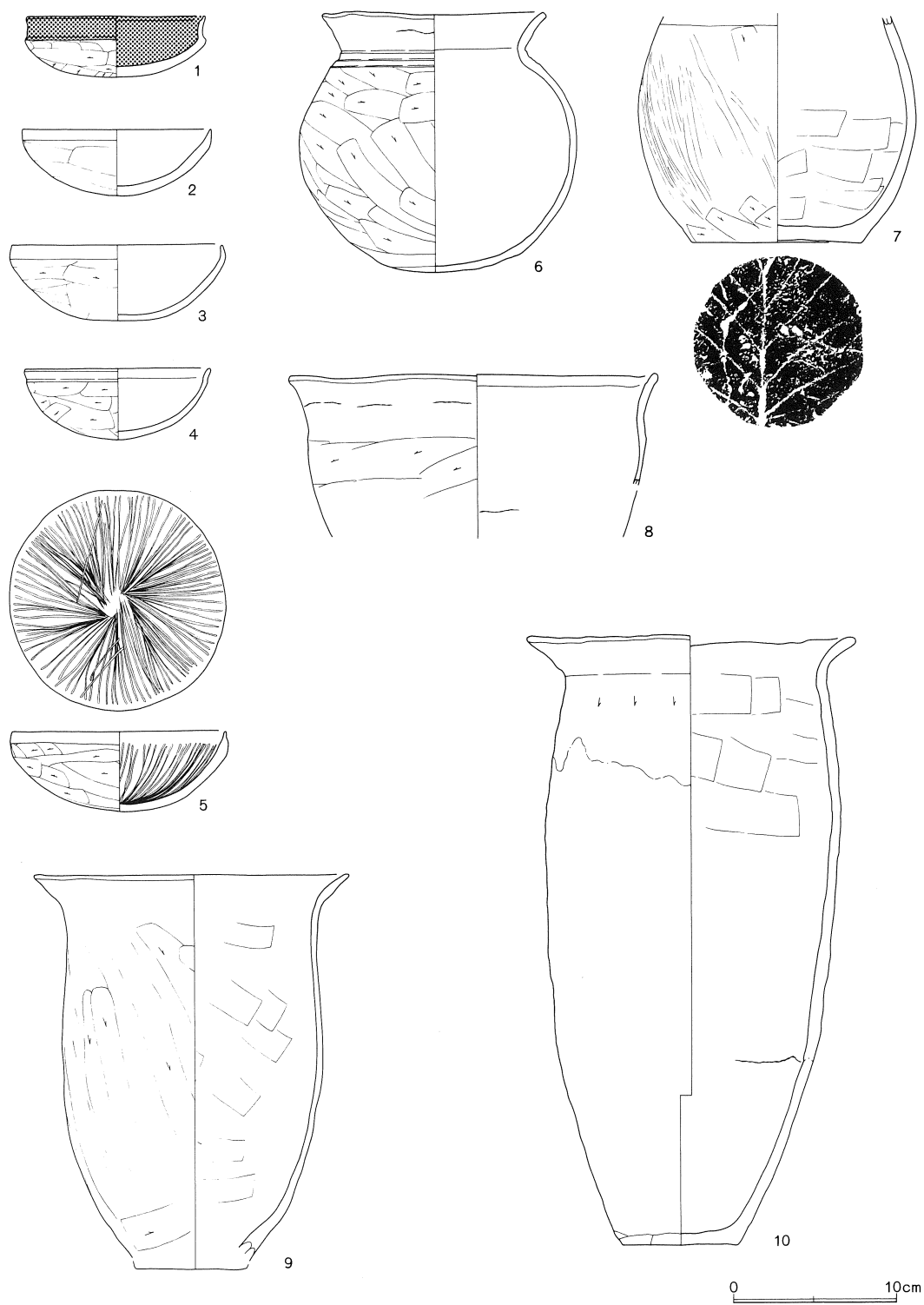


1. 黒褐色 しまり良、砂質、焼土粒・ローム粒多量含む。
2. 黒褐色 しまり良、砂質、焼土粒・炭化粒・ロームブロックロームブロックを多量含む。
3. 黄褐色 ロームブロックを多量含む。
4. 黒褐色 しまり弱、砂質、焼土粒・ローム粒多量含む。
5. 暗褐色 しまり良、粘性良、ロームブロック多量含む。
6. 赤褐色 しまり良、砂質、焼土ブロック含む。
7. 暗褐色 しまり良、砂質、長さ2~3mm炭粒、若干焼土粒含む。
8. 黄褐色 しまり弱、砂岩燧石の周囲に炭化物、焼土粒含む。
9. 暗褐色 しまり弱、砂質、焼土粒多量含む、赤褐色にちかい。
10. 暗褐色 しまり弱、砂質、焼土粒あまり含まない。
11. 赤褐色 しまり弱、砂質、焼土粒、炭化物混入。
12. 暗褐色 しまり弱、砂質、炭化物混入。
13. 赤褐色 しまり弱、焼土ブロック混入多、焼土層。
14. 赤褐色 しまり弱、砂質、焼土ブロック混入小。
15. 暗赤色 しまり弱、砂質、焼土混入多。
16. 赤褐色 しまり弱、砂質、焼土層。
17. 暗褐色 しまり弱、砂質、焼土混入少。
18. 暗褐色 ローム粒多。
19. 黒色 しまり弱、砂質、炭化物、焼土粒混入多。
20. 暗褐色 しまり弱、粘性、ローム粒、焼土粒、炭粒混入。
21. 暗褐色 しまり弱、砂質、ローム粒、炭粒混入。

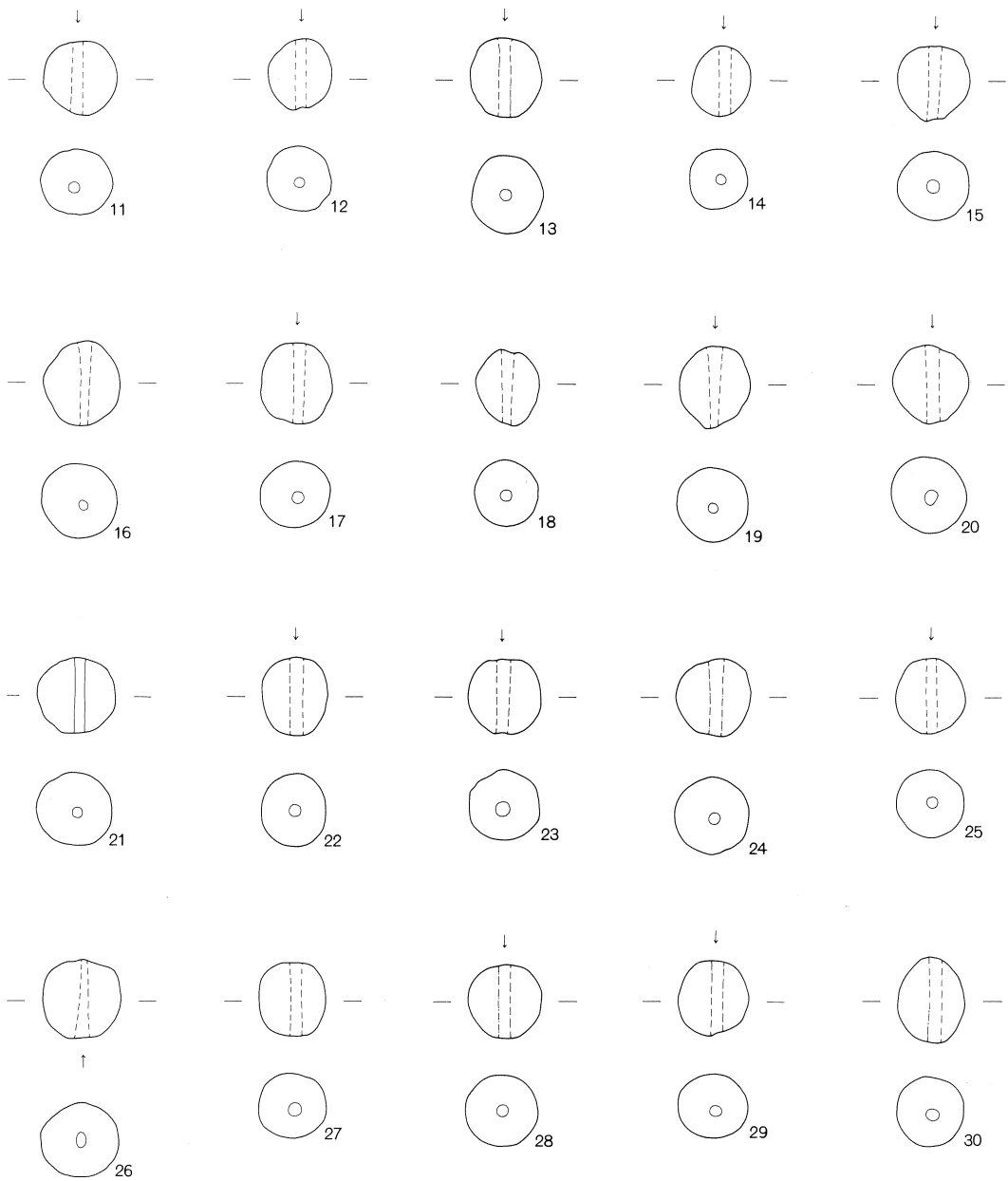




第152図 第79・80・84号住居跡(2)



第153图 第79号住居跡出土遺物(1)



第154图 第79号住居跡出土遺物(2)

第79号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
6	甕	口径 13.5 底径 8.4 高さ 15.8 最大径 17.1	白色粒 礫 砂粒	明黄褐	80	6065	386	
7	ク	口径 — 底径 10.5 高さ — 最大径 13.8	赤色粒 礫 砂粒	ク	口縁欠	6067	411	
8	鉢	口径 22.5 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい褐	口縁 60	6064, 8288	379	
9		口径 19.3 底径 (6.9) 高さ 24.0 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明黄褐	40	3578, 3580, 3581	388	
10	甕	口径 20.1 底径 7.0 高さ 37.2 最大径 18	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	90	7900	382	

第80号住居跡（第151図）

79、84号住居跡と重複する。84号住居跡より新しく79号住居跡より古い。平面形は方形である。規模は南東辺は79号住居跡に切られてよくわからないが一辺が5.2m前後と思われる。確認面からの深さは60cmである。主軸方位はN-45°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は北隅に検出された。長方形の掘り込みで上面100cm×60cmほどで深さは45cmである。覆土は黒色で焼土粒、炭化粒を含む。ピットはP1、P6が支柱穴と考えられるがほかには検出されなかった。あるいはP2等と重なっていたことも考えられる。覆土は黒色でしまり弱く砂質である。内容物は貯蔵穴とほぼ同じである。壁溝は検出されなかった。

カマドは北西壁中央に設けられていた。袖には砂岩の切り石が使われていた。また左袖には甕が構築材として使われていた。焚口の幅は44cmで奥行きは80cmである。煙出し部は30cmである。

遺物はカマド付近を中心に坏、甕などが出土している。

第84号住居跡（第151図）

79号、80号住居跡と重複しこれらより古い。大部分を二つの住居によって切られているので形状等は不明の部分が多いが隅丸方形であったと思われる。規模も確定できないが西辺だけは全て検出

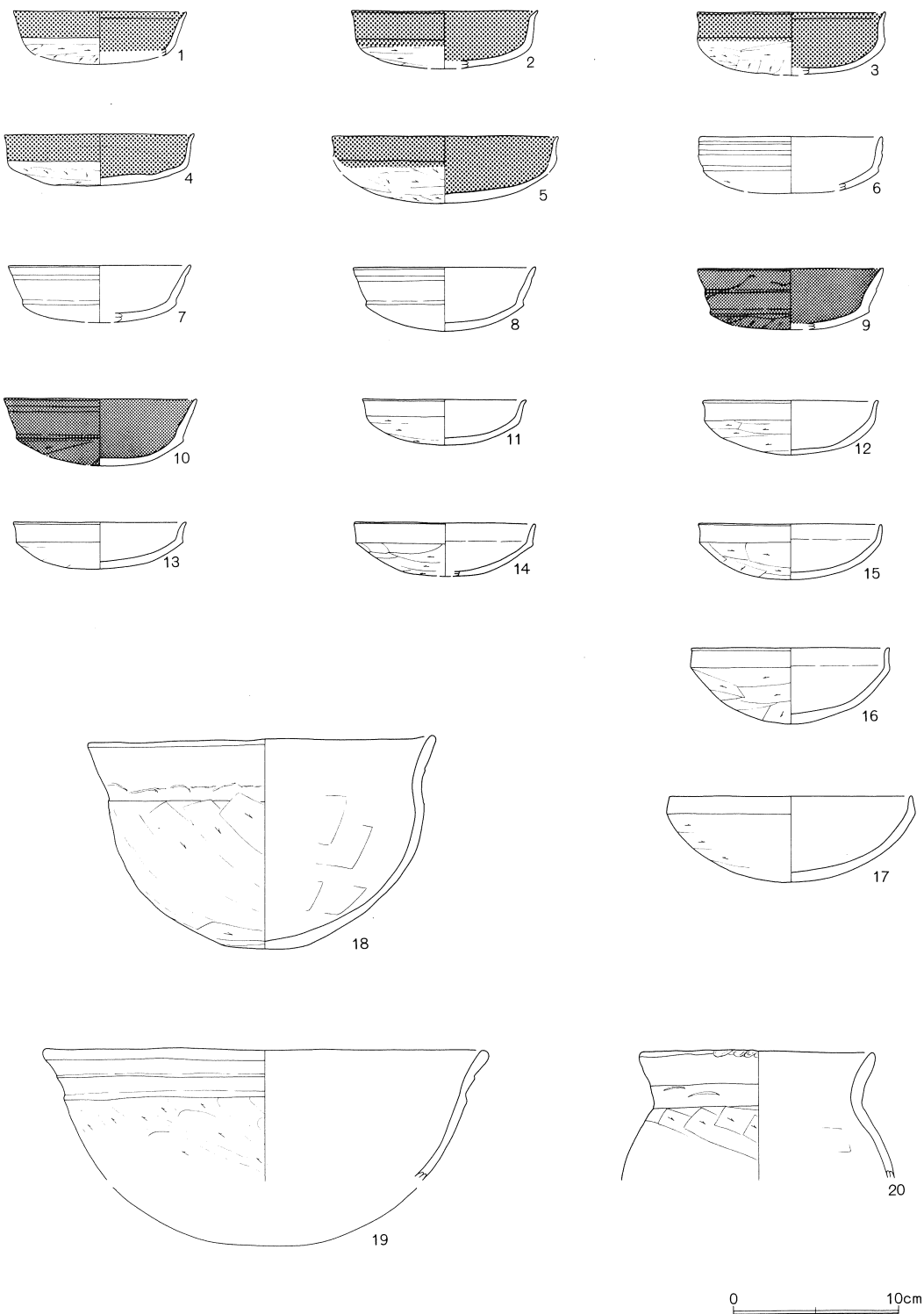
第79号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存	註記番号	実測番号
11	—	2.0	0.3	5.89	完形	8278	680
12	—	1.7	0.3	5.03	完形	7902	693
13	—	2.0	0.3	7.22	完形	7904	697
14	—	1.6	0.3	4.25	完形	8292	689
15	—	2.0	0.3	5.72	完形	8274	684
16	—	2.1	0.2	7.59	完形	8293	688
17	—	2.0	0.3	6.33	完形	8357	690
18	—	1.8	0.3	5.25	完形	8290	691
19	—	2.0	0.3	6.47	完形	7905	700
20	—	2.1	0.4	6.54	完形	8275	678
21	—	2.1	0.3	7.00	完形	8295	686
22	—	1.8	0.3	6.86	完形	8294	687
23	—	2.0	0.4	6.17	完形	8277	682
24	—	2.1	0.3	7.09	完形	7901	698
25	—	2.0	0.3	6.00	完形	7907	695
26	—	2.2	0.3	7.50	完形	8276	683
27	—	1.9	0.3	5.63	完形	8279	681
28	—	2.0	0.3	6.57	完形	7903	694
29	—	2.0	0.3	6.34	完形	7906	699
30	—	1.9	0.3	6.60	完形	6271	692

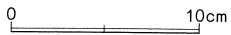
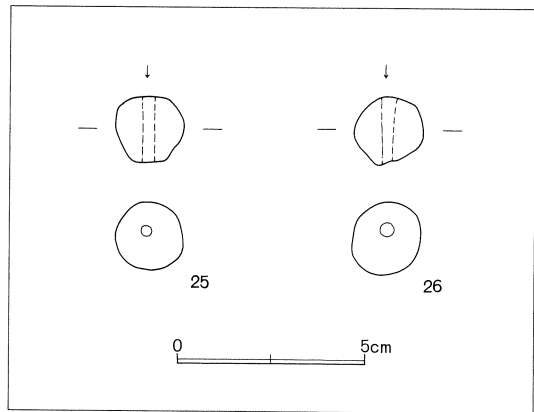
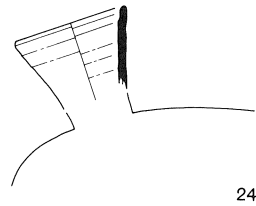
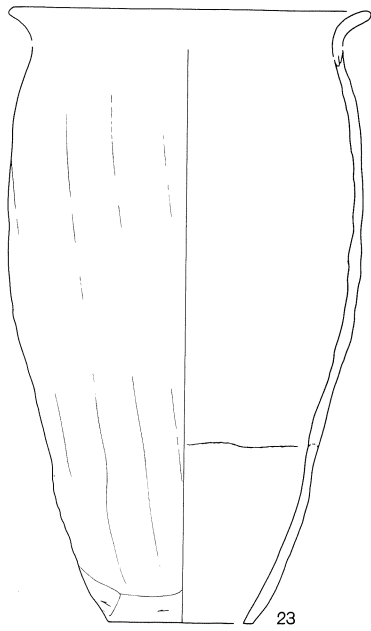
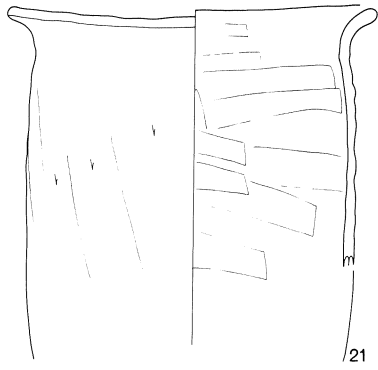
された。長さは4.4mである。確認面からの深さは50cmほどである。方位は西辺を基準にしてN-45°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴、柱穴、壁溝などは本住居跡に該当すると思われるものは検出されなかった。

カマドも検出されなかった。

遺物は出土しなかった。



第155図 第80号住居跡出土遺物(1)



第156図 第80号住居跡出土遺物(2)

第80号住居跡出土遺物 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 10.1 底径 — 高さ 3.2 最大径 —	白色粒 礫 砂粒		40	3454, 6211, 6265	389	
2	〆	口径 (11.4) 底径 — 高さ 3.5 最大径 —	礫 砂粒		30	6061, 6062	390	
3	〆	口径 11.5 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	礫 砂粒		50	6234, 6235, 6236	391	
4	〆	口径 11.6 底径 — 高さ 3.1 最大径 —	礫 砂粒		70	6136, 6137	396	
5	〆	口径 (13.8) 底径 — 高さ (4.0) 最大径 —	礫 砂粒		口縁欠	8270	392	
6	〆	口径 (11.2) 底径 — 高さ (3.4) 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	30	6196, 7733	398	
7	〆	口径 (11.2) 底径 — 高さ 3.4 最大径 —	礫 砂粒	〆	40	8246, 8331, 8333	393	
8	〆	口径 (11.2) 底径 — 高さ 3.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	40	8326	394	
9	〆	口径 11.4 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	礫 砂粒	黒褐	60	6220, 6223	399	
10	〆	口径 11.9 底径 — 高さ 4.1 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	浅黄橙	50	7727, 8241, 8242	395	

第80号住居跡出土遺物（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
11	坏	口径 (10.1) 底径 — 高さ 2.8 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明褐	40	7890, 7891	400	
12	〆	口径 10.2 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〆	80	8256	402	
13	〆	口径 (10.1) 底径 — 高さ 2.8 最大径 —	礫 砂粒	橙褐	30	6060, 8298	401	
14	〆	口径 (11.1) 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〆	40	8329	403	
15	〆	口径 11.2 底径 — 高さ 3.4 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〆	100	6932, 6934	404	
16	〆	口径 12.1 底径 — 高さ 4.6 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〆	100	3498, 6932, 7738	405	
17	〆	口径 (14.8) 底径 — 高さ 5.2 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	30	8267, 8268	407	
18	鉢	口径 21.3 底径 5.4 高さ 12.7 最大径 19.3	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	90	3410, 3412, 6144	387	
19	〆	口径 27.7 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい橙	口縁 30	3471, 3489, 3491	383	
20	甕	口径 14.3 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	口縁 30	3509, 6158	381	

第80号住居跡出土遺物（3）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
21	甕	口径 19.5 底径 — 高さ — 最大径 13.6	礫 砂粒	明赤褐	胴上半	8358	384	
22	甌	口径 17.9 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい褐	80	3377, 3378, 3387	380	
23	ク	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 (18.9)	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	胴部 40	6155, 6166, 6727	385	
24	平瓶	口径 (6.6) 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	灰オリーブ	口縁 40	3440	507	湖西産

第80号住居跡出土土錘計測表

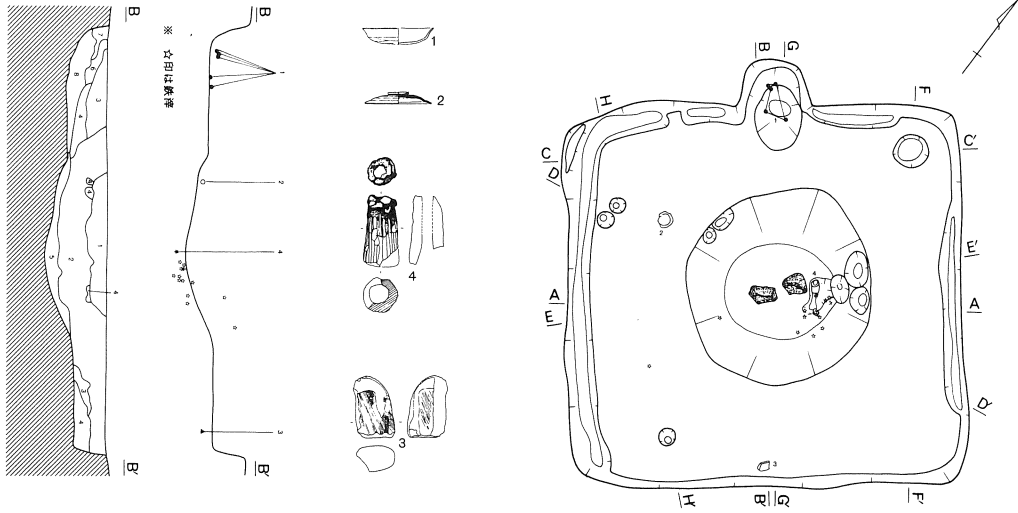
番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
25	—	1.8	0.3	4.54	完形	6744	701
26	—	1.8	0.4	4.79	完形	3411	696

第81号住居跡（第157図）

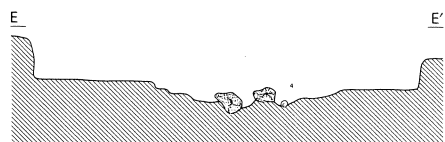
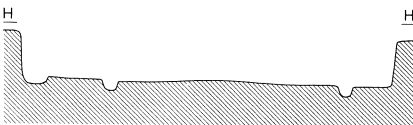
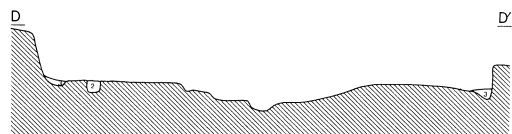
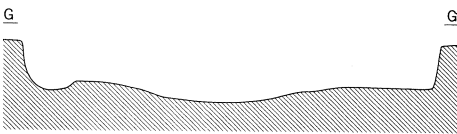
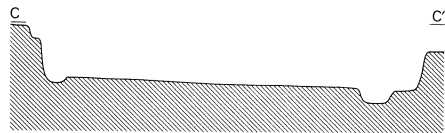
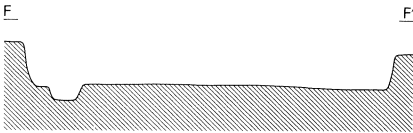
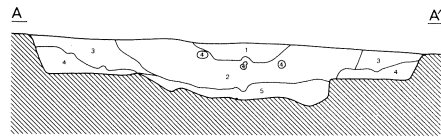
平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は4.2m×4.0mで確認面からの深さは40cmである。主軸方位はN-37°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は中央に直径2mほどの作業用の土坑が掘り込まれている。土坑の東側側面には小ピットが3個掘り込まれており底面からは羽口及び砂岩のブロックが2個検出された。土坑底面の土層は焼土粒を少量、炭化物、木炭片を多量に含むものであった。また鉄滓も含まれていた。以上のことから製鉄に関する工房跡と考えられる。ピットは北隅と床面西側に小ピットが検出された。北隅のものは貯蔵穴かもしれない。ピットは柱穴になるかどうかわからない。壁溝は全周せず南辺には検出されなかった。また北隅、北辺カマド左で切れる。

カマドは北辺中央に設けられていた。袖は検出されなかった。

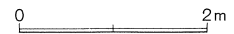
遺物はカマドから土師器坏、床面から須恵器蓋、砥石のほか前述の羽口、鉄滓が出土している。砥石 床面から出土している。破損した後被熱している。扁平な石の両面を使用している。



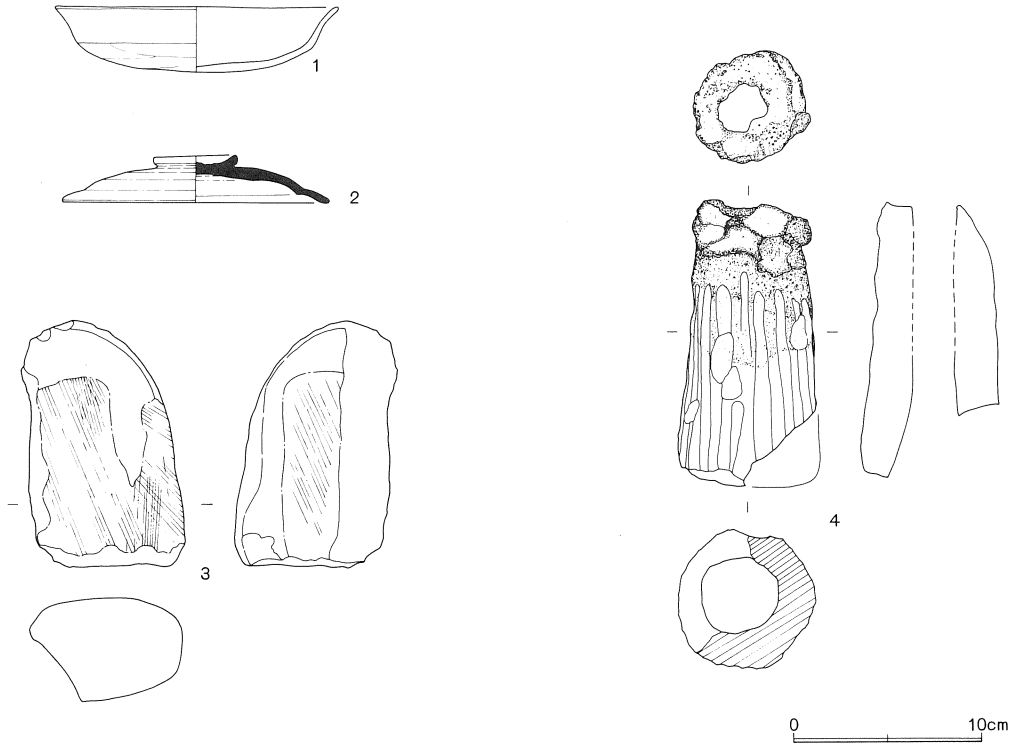
1. 黒色 しまり良。砂質。焼土粒・炭粒微量含む。
2. 黒褐色 しまり良。砂質。ロームブロック、ローム粒子多量、炭化物含む。
3. 黒褐色 しまり良。砂質。ローム粒子多量含む。
4. 暗褐色 しまり良。粘質。ロームブロック混入多。
5. 黒色 しまり良。砂質。炭化物、焼土粒多量含む。
6. 黒褐色 しまり良。砂質。焼土粒混入多。
7. 黒色 しまり弱。焼土粒、炭化物混入少。
8. 赤褐色 しまり良。砂質。焼土粒混入多。



水系標高 = 11.700m



第157図 第81号住居跡



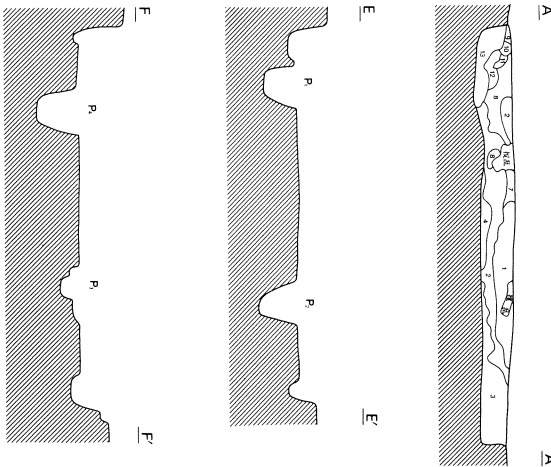
第158図 第81号住居跡出土遺物

第81号住居跡出土遺物観察表

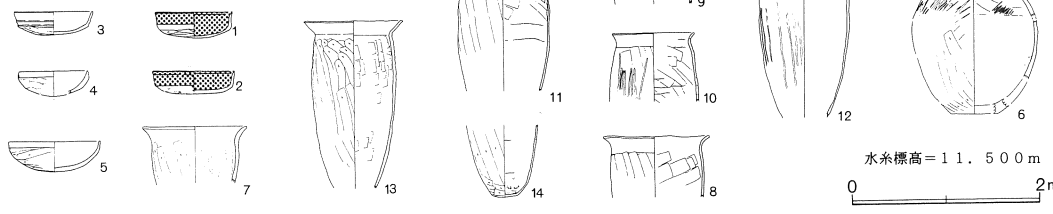
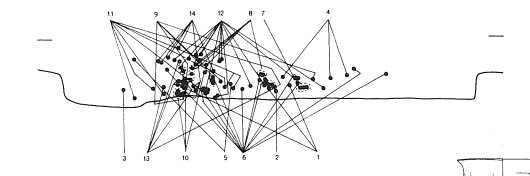
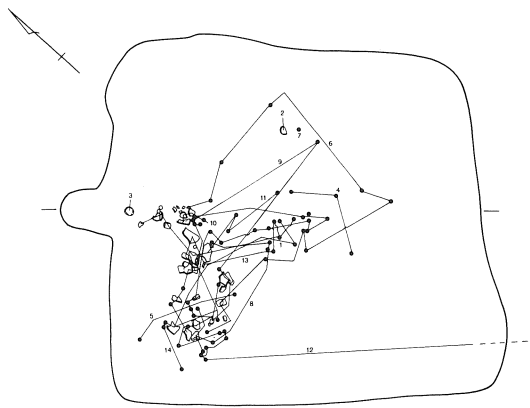
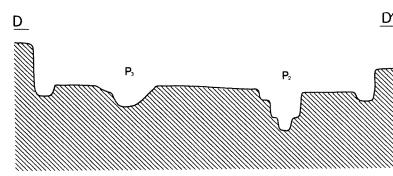
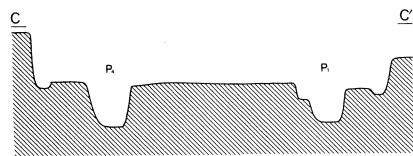
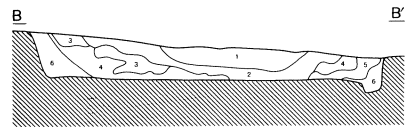
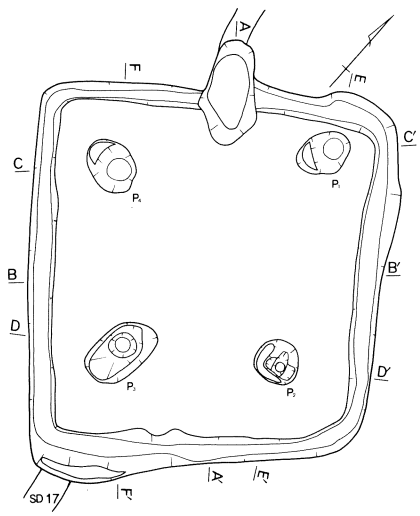
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 15.2 底径 — 高さ 3.5 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	90	6893, 8154, 8155	412	
2	蓋	口径 14.4 底径 — 高さ 2.5 最大径 —	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	黄灰	80	7352	525	分析No.14

第82号住居跡 (第159図)

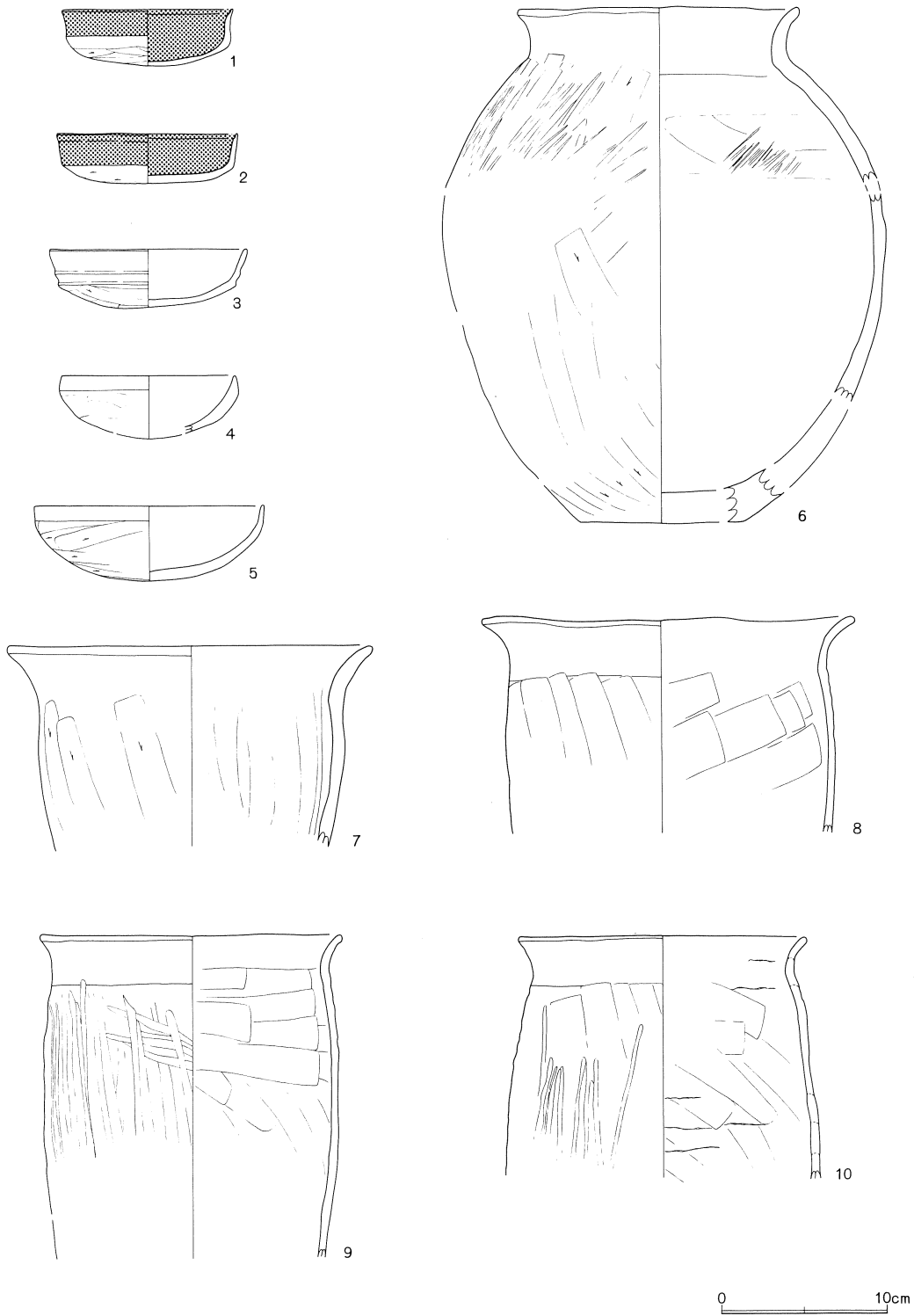
17号溝と重複する。これより古い。平面形は東辺が西辺より短く歪んでいるが基本的には方形である。規模は西辺が4.1mで北辺が3.8mである。確認面からの深さは50cmである。主軸方位はN-40°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。南辺西側に段をもつ。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1~P4が主柱穴である。覆土は暗褐色でしまりはやや良く粘質である。焼土粒、炭化粒をわずかに、ローム粒を多量に含む。壁溝は全周する。



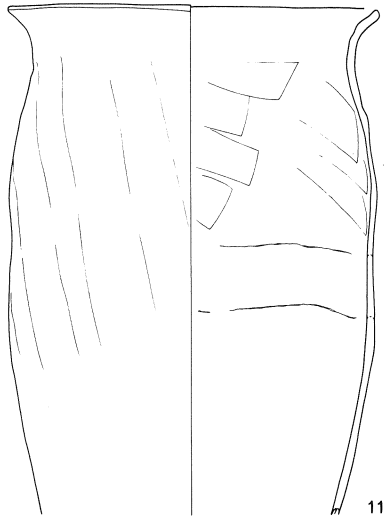
1. 褐色 しまり良、粘質。
2. 黒色 しまり良、ローム粒少量、焼土粒少量含む。
3. 黒褐色 しまり良、ロームブロック斑状。
4. 黒褐色 しまり良、ロームブロック、黒色土少量含む。
5. 黒褐色 しまり弱、ローム粒少量、焼土粒少量含む。
6. 黒褐色 しまり弱、ローム粒少量含む。
7. 暗褐色 しまり良、焼土粒少量含む。
8. 反褐色 しまり弱、砂質、焼土粒少量含む。
9. 黄褐色 しまり良、砂質。
10. 暗褐色 しまり良、炭化物少量含む。
11. 赤褐色 砂質、焼土充満、焼土ブロック少量含む。
12. 黒褐色 しまり弱、炭化物少量含む。
13. 黒褐色 しまり良、ロームブロック混入。



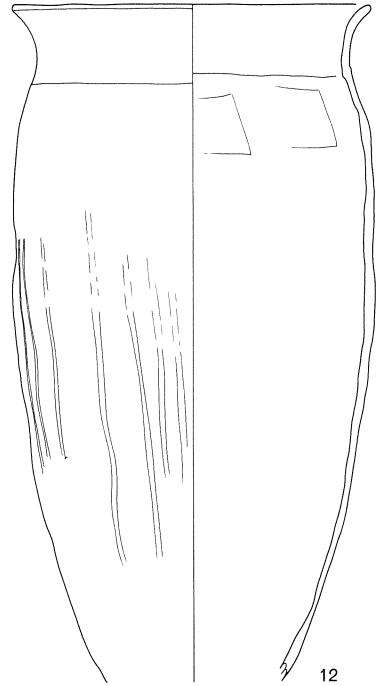
第159図 第82号住居跡



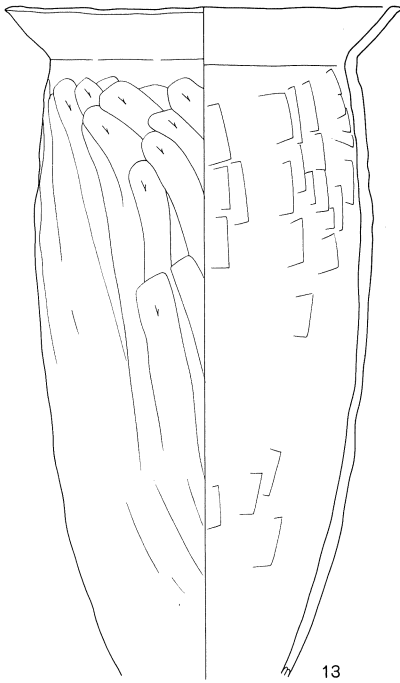
第160図 第82号住居跡出土遺物(1)



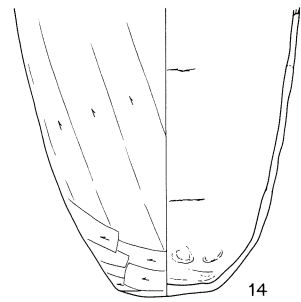
11



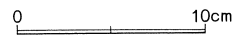
12



13



14



第161图 第82号住居跡出土遺物(2)

第82号住居跡出土遺物観察表 (1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 10.4 底 径 — 高 さ 3.4 最大径 —	白色粒 礫 砂粒		90	5396, 6051	413	
2	〇	口 径 11.0 底 径 — 高 さ 3.0 最大径 —	白色粒 礫 砂粒		60	6872	414	
3	〇	口 径 12.0 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	100	6854	415	
4	〇	口 径 (10.5) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〇	30	4702, 6764, 6777	416	
5	〇	口 径 (14.0) 底 径 — 高 さ 4.5 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	30	4594, 4654	417	
6	甕	口 径 (17.0) 底 径 (9.9) 高 さ (31.0) 最大径 (27.0)	白色粒 赤色粒 礫 砂粒	橙褐	60	4608, 5350, 5383	422	
7	〇	口 径 (22.2) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	口縁 30	4687	426	
8	〇	口 径 (22.7) 底 径 — 高 さ — 最大径 (19.9)	礫 雲母 片岩 砂粒	〇	口縁 40	4617, 4620, 4680	420	
9	〇	口 径 (18.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 (18.0)	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	口縁 40	6053, 6054, 4656	418	
10	〇	口 径 (17.5) 底 径 — 高 さ — 最大径 (18.8)	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	口縁 40	5375, 6055, 6788	419	

第82号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
11	甕	口 径 (19.8) 底 径 — 高 さ — 最大径 19.3	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	胴上半40	5384, 6855, 6856	424	
12	〃	口 径 (19.2) 底 径 — 高 さ — 最大径 19.3	礫 砂粒	〃	底部欠60	4610, 4615, 4618	425	
13	〃	口 径 (21.2) 底 径 — 高 さ — 最大径 18.1	礫 角閃石 砂粒	〃	底部欠50	4606, 5403, 6769	423	
14	〃	口 径 — 底 径 5.3 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	にぶい橙	胴下半30	4635, 5378, 5391	421	

カマドは北壁中央に設けられていた。袖はなかった。燃焼部掘り込みの幅は60cm、奥行きは100cmである。

遺物はカマド左側を中心に坏、甕が出土しているが床面からかなり浮いているものもあり混入が認められる。

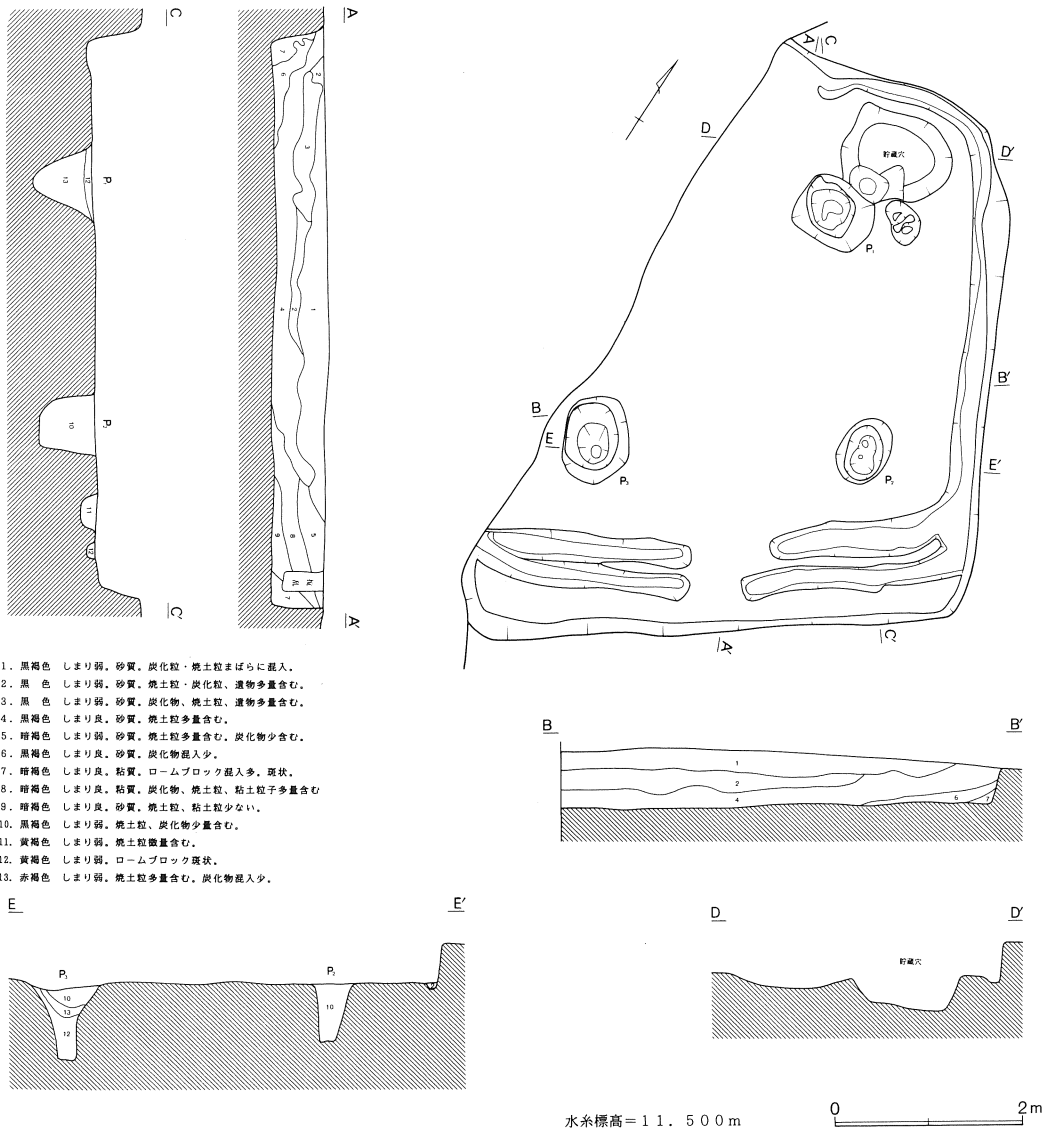
第83号住居跡（第162図）

西側が調査区外にかかる。検出されたのは南辺、東辺と北辺の東半分である。平面形は方形になるものと思われる。他の遺構との重複はない。規模は南辺が5.4m東辺が5.8mである。確認面からの深さは50cmである。主軸方位はN-29°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面はやや起伏がある。貯蔵穴は北隅に検出された。上面120cm×90cmほどで深さは38cmである。ピットはP1～P3が支柱穴と考えられる。壁溝は南辺が壁から離れて二重になっており中央が切れる。覆土は内側が黄褐色で外側は黒褐色である。ピット及び壁溝の状態から拡張されたとも考えられる

カマドは北壁中央に設けられていた。大半が調査区外になる。右袖にあたる部分は検出されていない。

遺物は貯蔵穴上面に甕、坏が出土した他多量に検出されたがほとんどが覆土上層からの出土である。

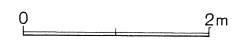
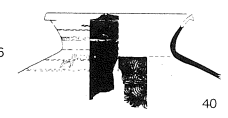
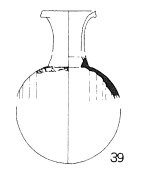
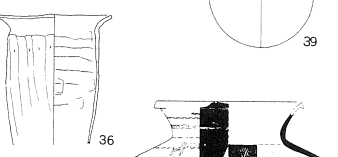
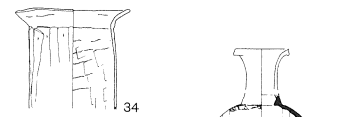
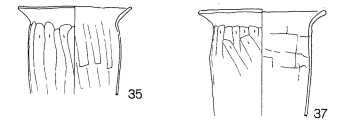
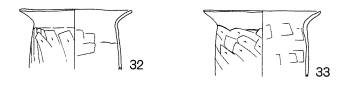
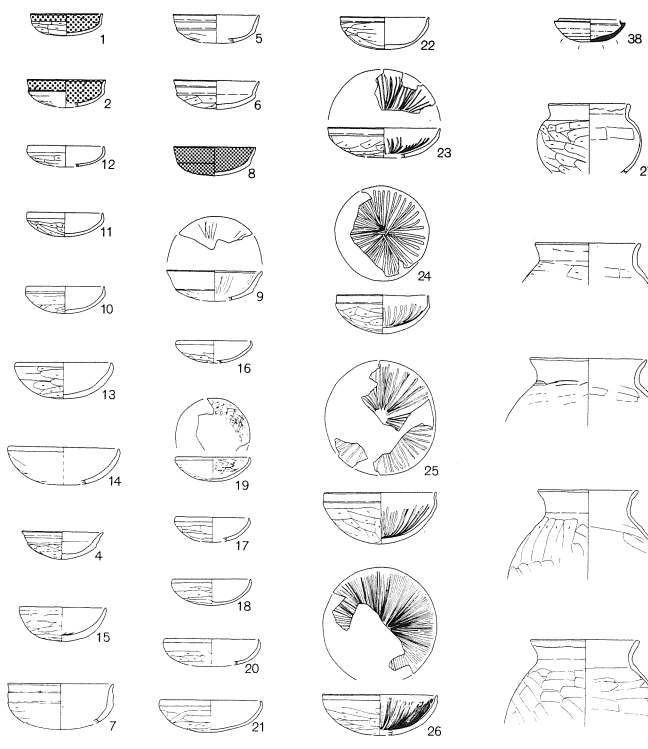
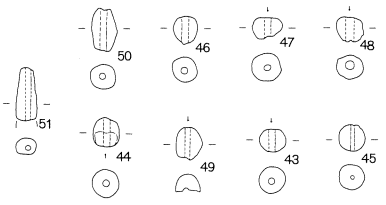
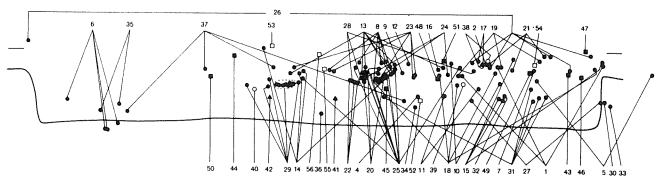
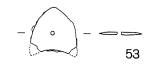
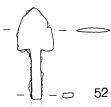
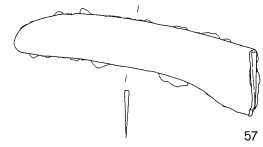
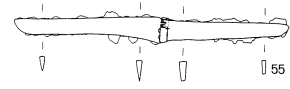
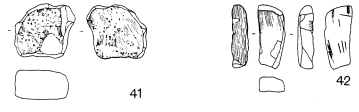
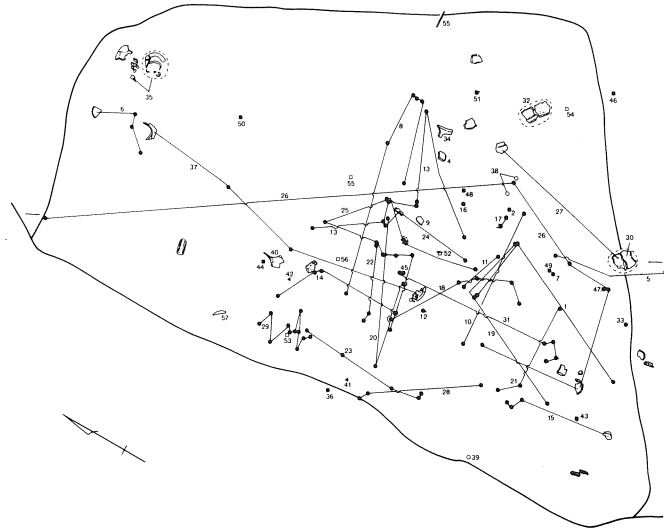
砥石(41～42) 41は破損後に被熱している。円盤状をしていたと思われる。両面とも使用によって平滑になっている。側面は粗く面取りされている様である。42は一方の側面のみが平滑になるまで使い込まれている。上面は使用によっていくぶんなめらかな面になりつつあるが下面はわずかに



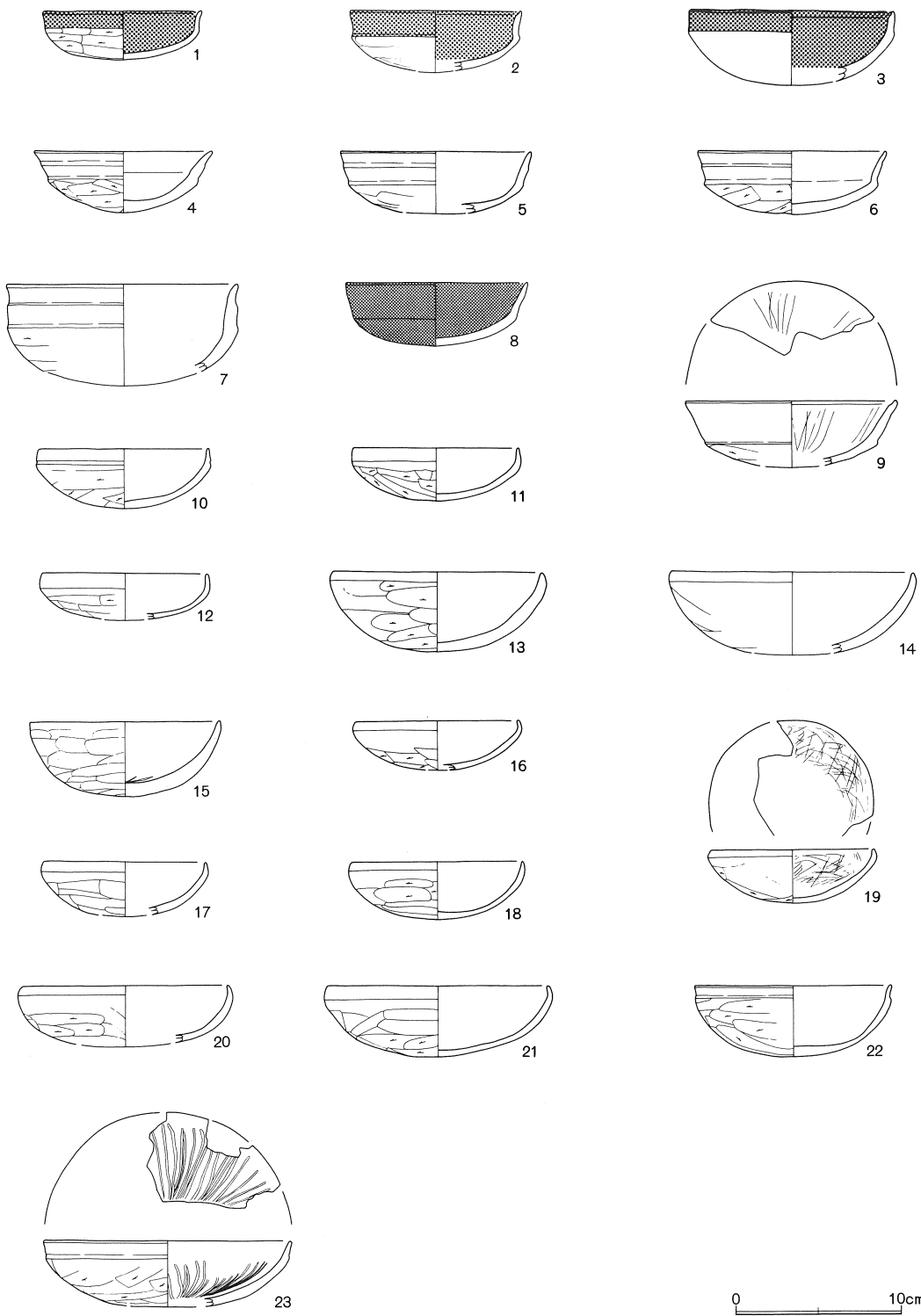
第162図 第83号住居跡(1)

使用の痕跡があるだけで成形の際の分割痕も見あたらない。形状からは剝離したものか否か判断に迷う。

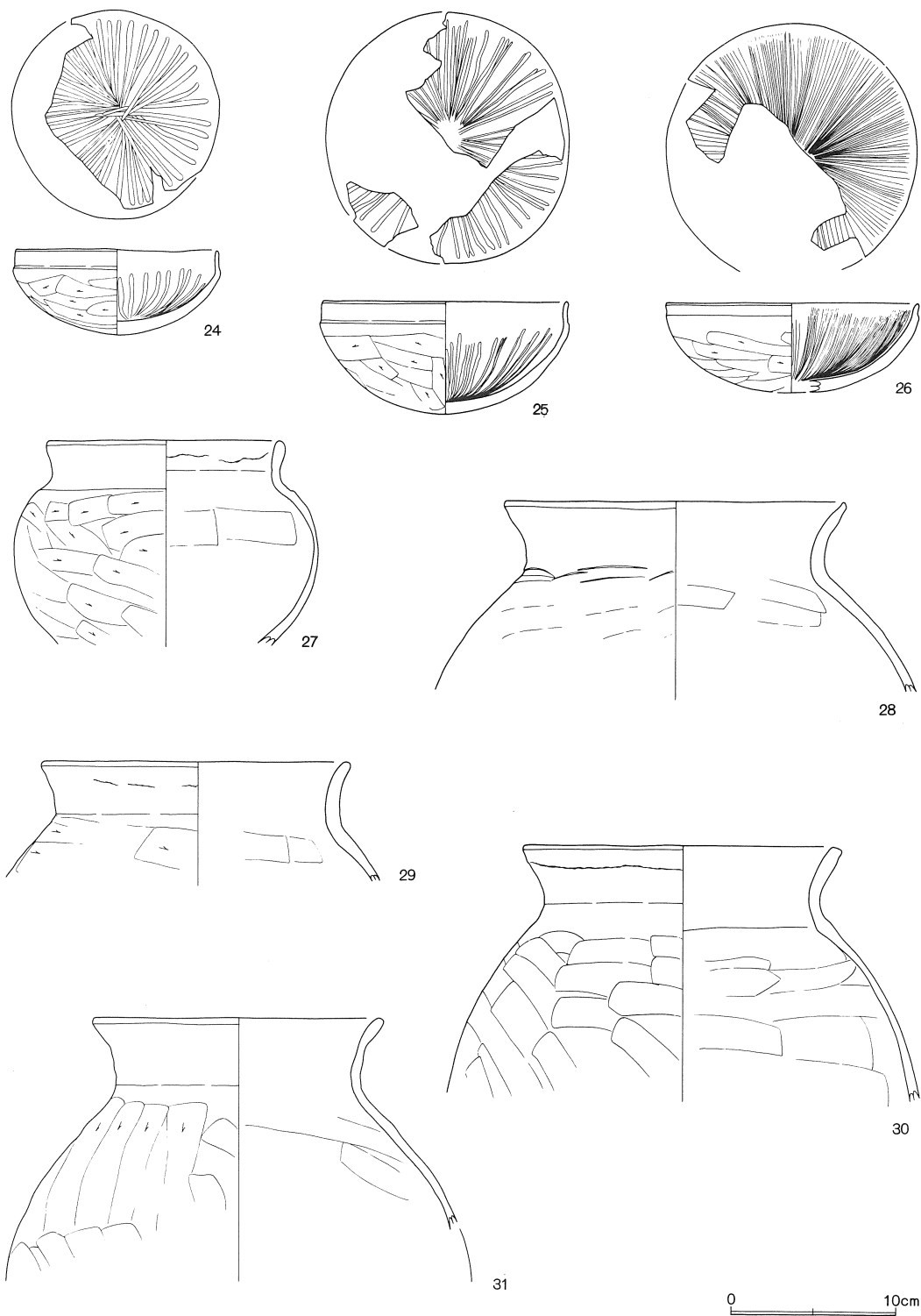
鉄製品 (52~57) 52~54は鎌である。52は頸部の一部を欠失する。鎌身は三角形で逆刺は極く浅い。平造り。長さ2.8cm、最大幅2.4cm。頸部は残存長3.2cm、幅7mm、厚さ3mmほどである。53は無頸鎌である。中央部に1孔を有する。現状は錆で塞がっているがX線撮影の結果明瞭に観察できた。現存長3cm、幅3cm。平造り。54は茎部の一部を欠失する。鎌身は腸袂式で、長さ2.2cm、最大幅1cmで柳葉形に近い。茎部は残存長2.5cm、幅4mm、厚さ3mm前後である。55.56は刀子。55は全長13.3cm。刀身は長さ9.8cm、身幅1.1cm、背幅4mmで刃部は研減りして湾曲している。関は両



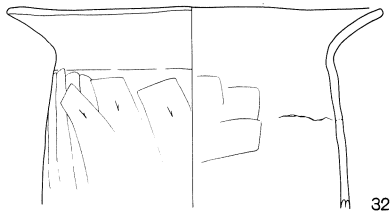
第163图 第83号住居跡(2)



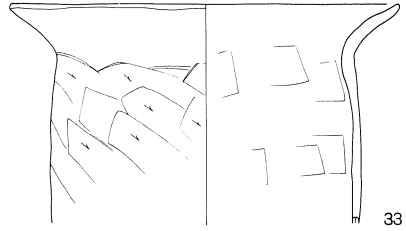
第164図 第83号住居跡出土遺物(1)



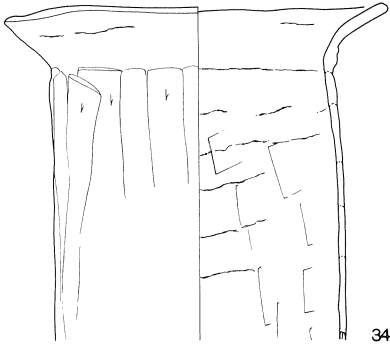
第165图 第83号住居跡出土遺物(2)



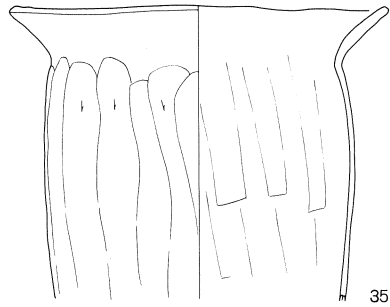
32



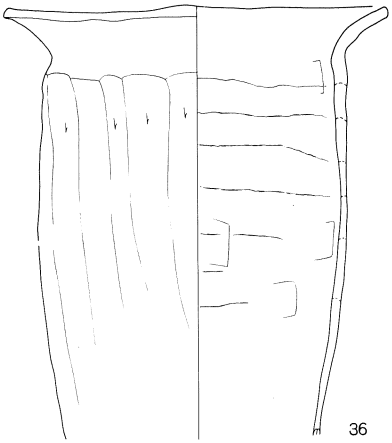
33



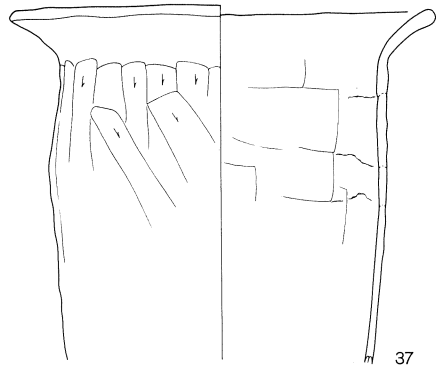
34



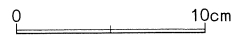
35



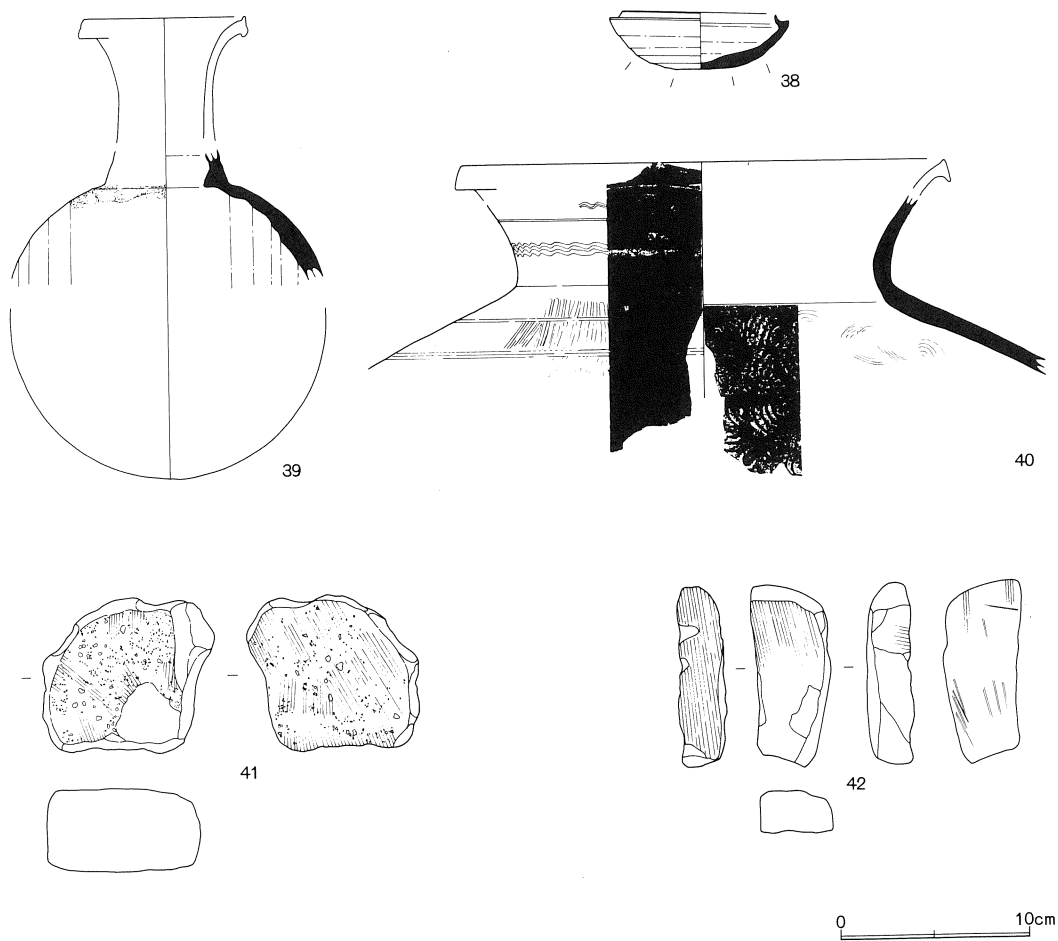
36



37



第166図 第83号住居跡出土遺物(3)



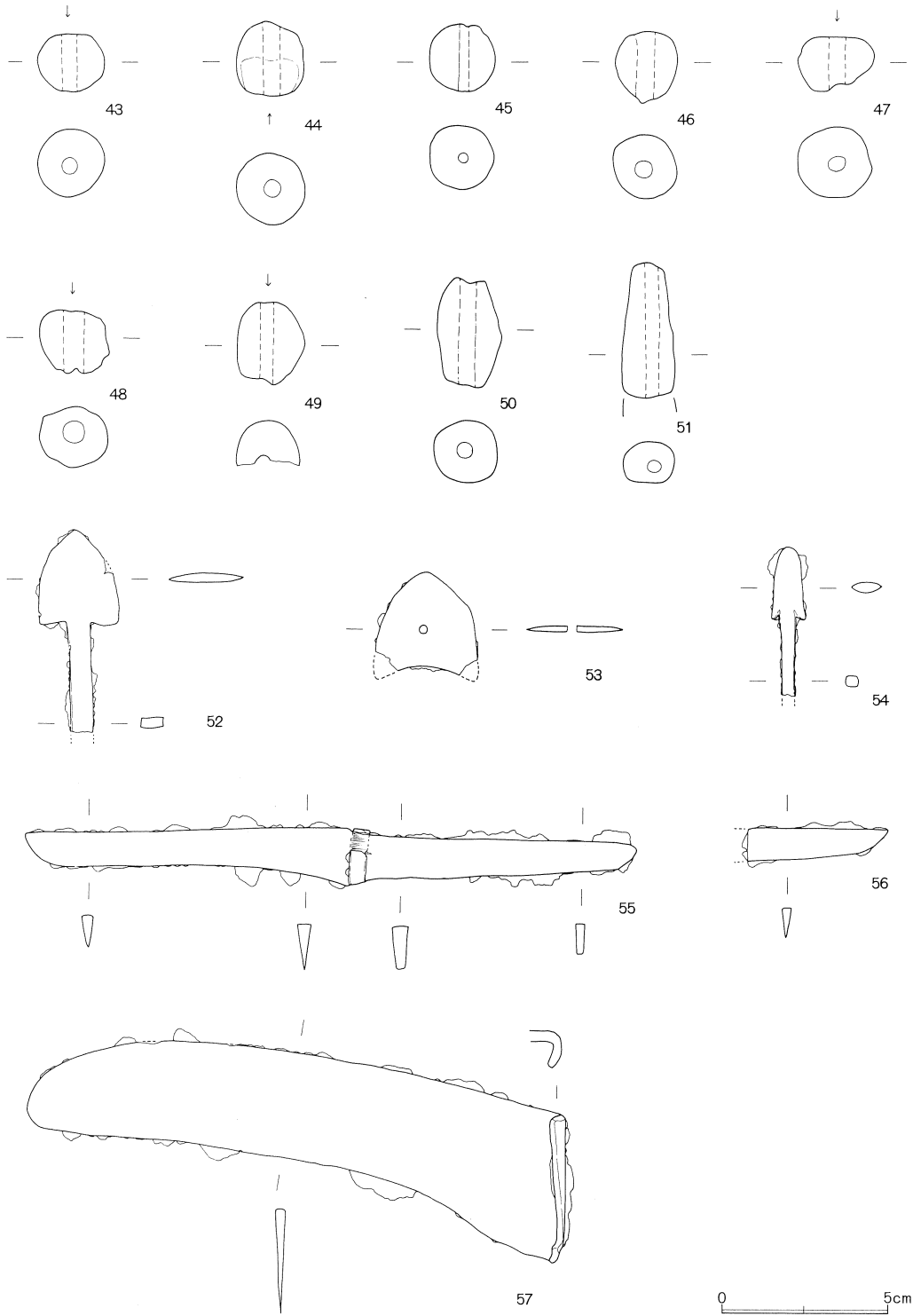
第167図 第83号住居跡出土遺物(4)

関式である。茎部には鉤が残りその内側には木質も遺存している。長さ8.6cm、幅1.1cm前後、背幅4mm前後である。56は刀子の切先部である。現存長4.2cm、身幅9mm、背幅2mm。57は鎌。曲刃である。基部は約1cmほど折返している。先端は丸味を帯びる。長さ16.5cm、幅3.1cm、背幅3mmほどである。

第85号住居跡（第169図）

平面形は方形である。他の遺構との重複はない。規模は4.1m×3.6mで確認面からの深さは25cmである。主軸方位はN-40°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴、柱穴、壁溝等の施設は検出されなかった。

カマドは北辺中央に設けられていた。袖は検出されなかった。燃烧部底面の掘り込みから幅40cm、奥行きは110cmと推定される。



第168図 第83号住居跡出土遺物(5)

第83号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 9.7 底径 — 高さ 3.0 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	赤褐	70	5003, 5917, 5951	448	
2	〃	口径 (10.4) 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	礫 砂粒		20	6584	450	
3	〃	口径 (12.4) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	赤褐	20		449	
4	〃	口径 10.8 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明黄褐	60	6804	453	
5	〃	口径 11.6 底径 — 高さ (3.8) 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	40	5936, 6468, 6813	451	
6	〃	口径 11.4 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	90	7517, 7938, 8221, 8226	452	
7	〃	口径 (14.1) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	20	7616	457	
8	〃	口径 11.1 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		80	3928, 3935, 4369, 7130	454	
9	〃	口径 (12.9) 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 砂粒	橙褐	20	5631	461	
10	〃	口径 (10.4) 底径 — 高さ 3.6 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	〃	40	4956, 5960	436	

第83号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
11	坏	口径 10.2 底径 — 高さ 3.2 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	80	7313, 7603	440	
12	〇	口径 (10.2) 底径 — 高さ 2.8 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	〇	40	5145	441	
13	〇	口径 12.8 底径 — 高さ 4.8 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	80	4364, 5161, 5177, 5621	443	
14	〇	口径 (14.8) 底径 — 高さ 5.0 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	黄橙	30	3867, 5548, 6003, 7122	446	
15	〇	口径 11.6 底径 — 高さ 4.5 最大径 —	礫 砂粒	にぶい褐	90	4984, 6823, 7581, 7582	455	
16	〇	口径 (10.0) 底径 — 高さ 3.0 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	40	5737	439	
17	〇	口径 (9.9) 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	40	4560, 4562	442	
18	〇	口径 10.5 底径 — 高さ 3.5 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	明赤褐	80	7207, 7586, 7597	437	
19	〇	口径 (10.0) 底径 — 高さ 3.2 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい橙	40	5000, 5917, 5951	438	
20	〇	口径 (12.5) 底径 — 高さ 3.7 最大径 —	礫 砂粒	〇	40	5611, 5622, 5711	445	

第83号住居跡出土遺物観察表（3）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
21	坏	口 径 13.5 底 径 — 高 さ 4.3 最大径 —	礫 砂粒	明赤褐	60	4065, 4519, 5291	444	
22	〆	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ 4.3 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	〆	40	5721, 5722, 7135	456	
23	〆	口 径 (15.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		20	5565, 5833, 7163	460	
24	〆	口 径 (12.4) 底 径 — 高 さ 5.1 最大径 —	白色粒 赤色粒 礫 砂粒		60	6350, 6449, 7570	458	
25	〆	口 径 15.0 底 径 — 高 さ 6.8 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	明赤褐	40	7193, 7482, 7585	459	
26	〆	口 径 15.4 底 径 — 高 さ 5.4 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい黄橙	60	3998, 6624, 7303	462	
27	甕	口 径 (14.5) 底 径 — 高 さ 18.5 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	30	6806, 6812	435	
28	〆	口 径 (20.8) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	口縁 40	5850, 7158, 7532	428	
29	〆	口 径 18.8 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	口縁 80	6007, 6311, 6312	429	
30	〆	口 径 (19.3) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい黄橙	口縁 20	6812	551	

第83号住居跡出土遺物観察表（4）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
31	甕	口 径 (17.7) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 砂粒	にぶい褐	口縁 20	7765, 7766, 7767	550	
32	〃	口 径 (20.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	口縁 40	6805	431	
33	〃	口 径 (20.8) 底 径 — 高 さ — 最大径 (16.5)	礫 角閃石 砂粒 赤色粒	〃	口縁 40	7638, 7639, 7640	430	
34	〃	口 径 20.2 底 径 — 高 さ — 最大径 15.5	赤色粒 礫 砂粒	〃	胴上半80	6803	427	
35	〃	口 径 20.0 底 径 — 高 さ — 最大径 16.5	赤色粒 礫 砂粒	〃	胴上半90	6794, 6797	432	
36	〃	口 径 20.2 底 径 — 高 さ — 最大径 16.5	赤色粒 礫 砂粒	〃	胴上半60	8819	434	
37	〃	口 径 22.3 底 径 — 高 さ — 最大径 18.0	赤色粒 礫 砂粒	〃	胴上半80	4197, 6798, 6832	433	
38	坏	口 径 8.1 底 径 2.9 高 さ 3.0 最大径 —	白色粒 黒色粒 砂粒	黄灰	100	6562, 6563	526	分析No.4
39	長頸壺	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	黒色粒 砂粒	灰黄	肩部 20	5858	556	
40	甕	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	黄灰	口縁 20	6800	555	

第83号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
43	—	2.0	0.4	5.05	完形	5881	710
44	—	2.1	0.5	(7.07)	少欠	4220	706
45	—	1.9	0.3	(5.58)	少欠	6831	711
46	—	1.8	0.5	5.09	完形	6394	707
47	—	2.2	0.5	(5.07)	少欠	7304	705
48	—	2.0	0.6	4.76	完形	5662	709
49	—	2.0	0.4	(4.36)	1/2	7617	708
50	3.3	1.9	0.5	7.83	完形	4201	703
51	(4.1)	1.5	0.4	(7.50)	1/2	3961	704

遺物は住居跡西側を中心に土師器坏、甕、須恵器坏、長頸瓶、甕、鉄製品等が出土している。

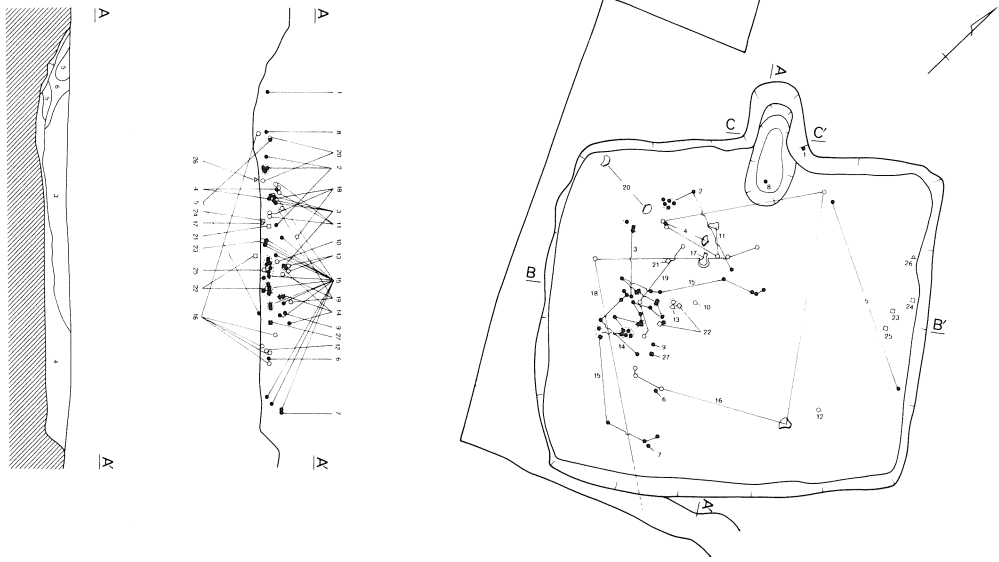
紡錘車 26は壁際の床面から出土している。断面は高さが低く上面と側面の境が不明瞭で曲線的である。上面、下面、側面ともよく研磨されほとんど整形の痕跡を残さない。上面径2.2cm、下面径4.0cm、孔径6mm、重量32.00g。滑石製。

鉄製品 (21～25) 21は刀子状の製品である。わずかに外反している。長さ15.9cm、身幅1.8cm、背幅3mmほどである。22は棒状を呈する。鏃の茎部かとも思われる。幅8mm、厚さ4mm。23は釘である。頭部は折り曲げではなく叩いて潰しているようである。現存長4.3cm、太さ7×6mm。24.25は刀子である。24は刃部の大部分と茎部の先端を欠失する。刃部は研減りして湾曲している。関はないようである。現存長7.6cm、刃部身幅1.1cm、背幅2mm、茎部幅1.2cm、背幅2mm。25は刃部茎部ともに大部分を欠失する。錆化が激しい。両関と思われる。現存長3.7cm、刃部身幅1cm、背幅4mm、茎部幅7mm、背幅3mm。

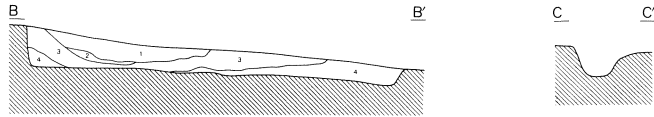
第86号住居跡 (第173図)

22号溝と重複しこれより古い。また91号住居跡とも重複していると思われるが22号溝によって両者とも壊されているためその新旧関係は不明である。東側半分は地形が下がっているために検出されなかった。壁の立ち上がりが検出されたのは西角部分のみで床面もほぼ4分の1しか残っていなかった。残存部分の深さは26cmほどで壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸方位はN-34°-Wである。貯蔵穴は不明であるが、P1のわきの小ピットがそのあたるかもしれない。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。壁溝は北辺のカマド西側で切れている。

カマドは北辺に設けられていた。燃焼部底面が検出されただけである。

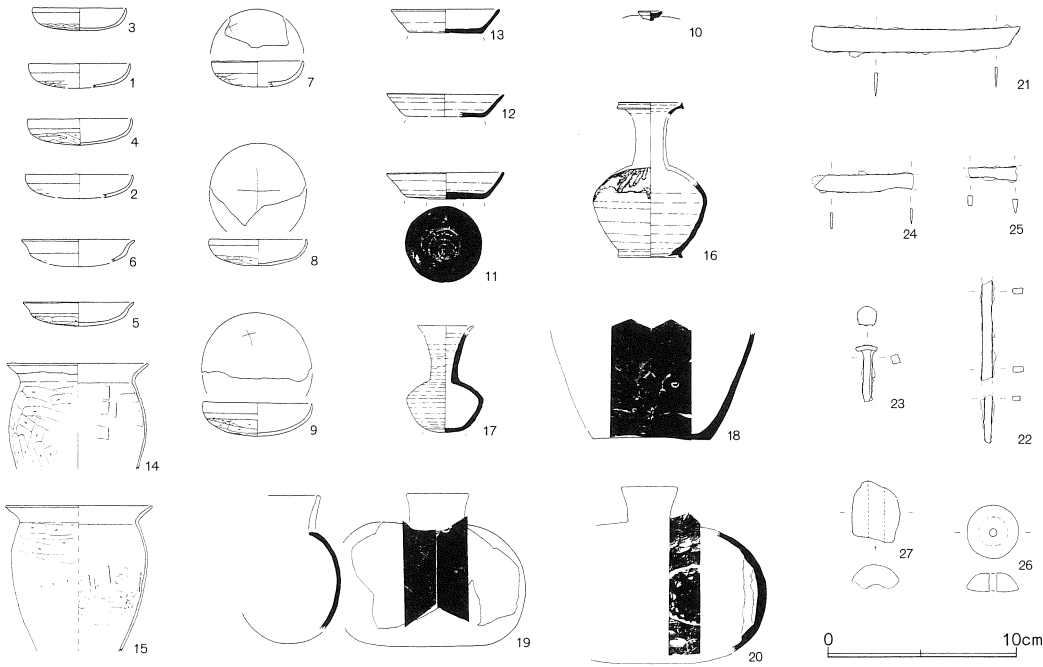


1. 黒色 しまり弱、砂質、炭化物、土器含む。
2. 黒色 しまり弱、砂質、炭化物少、焼土粒多混入。
3. 黒褐色 しまり良、砂質、焼土粒、炭化粒含む。
4. 黒褐色 しまり良、砂質、焼土粒・炭化粒
ローム粒・ロームブロック混入多。
5. 赤褐色 しまり良、焼土ブロック。
6. 黒色 しまり良、砂質、3層類似、焼土粒混入多。
7. 暗褐色 しまり良、粘質、ロームブロック混入多。

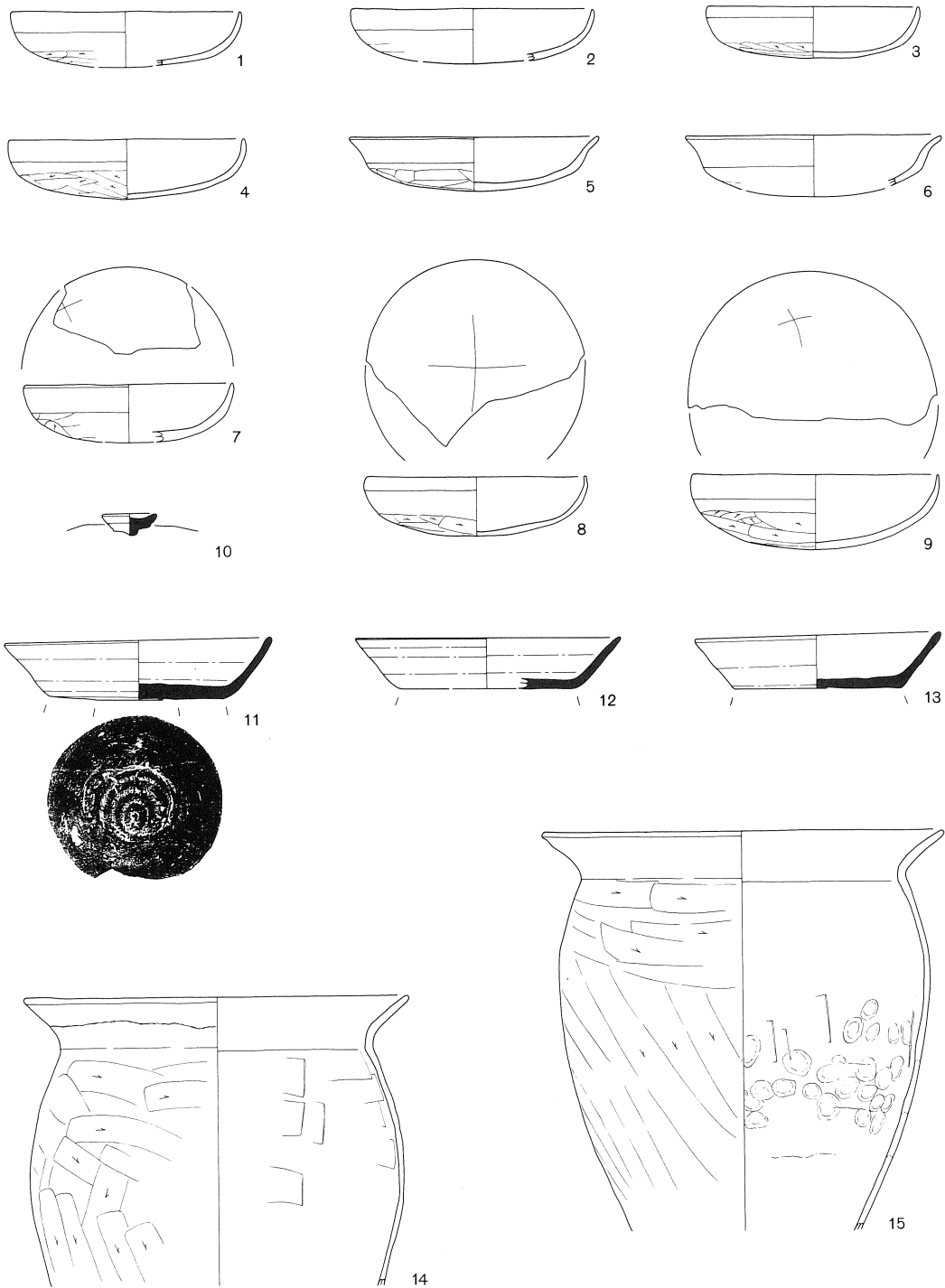


水系標高 = 11.400 m

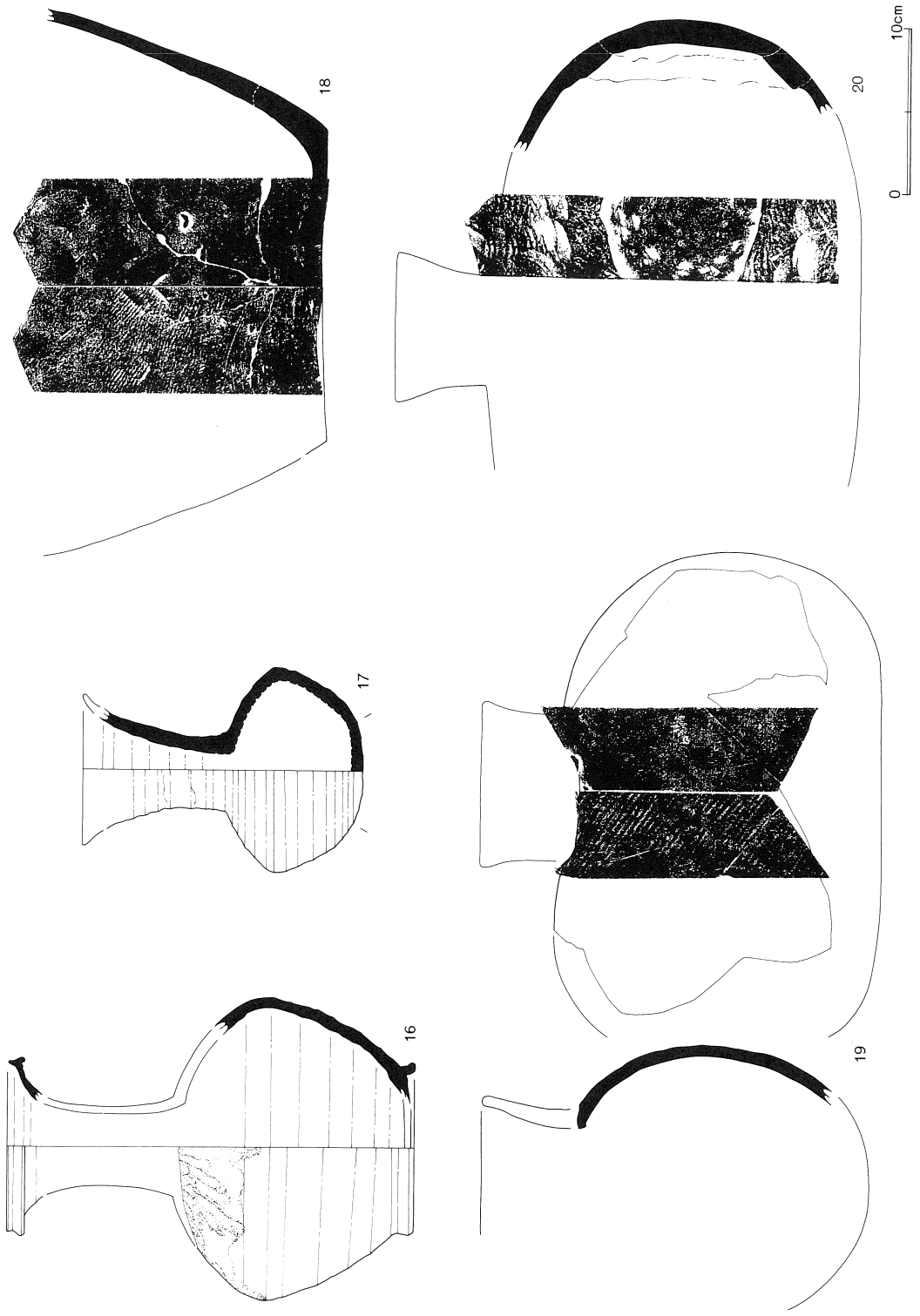
0 2m



第169図 第85号住居跡



第170图 第85号住居跡出土遺物(1)



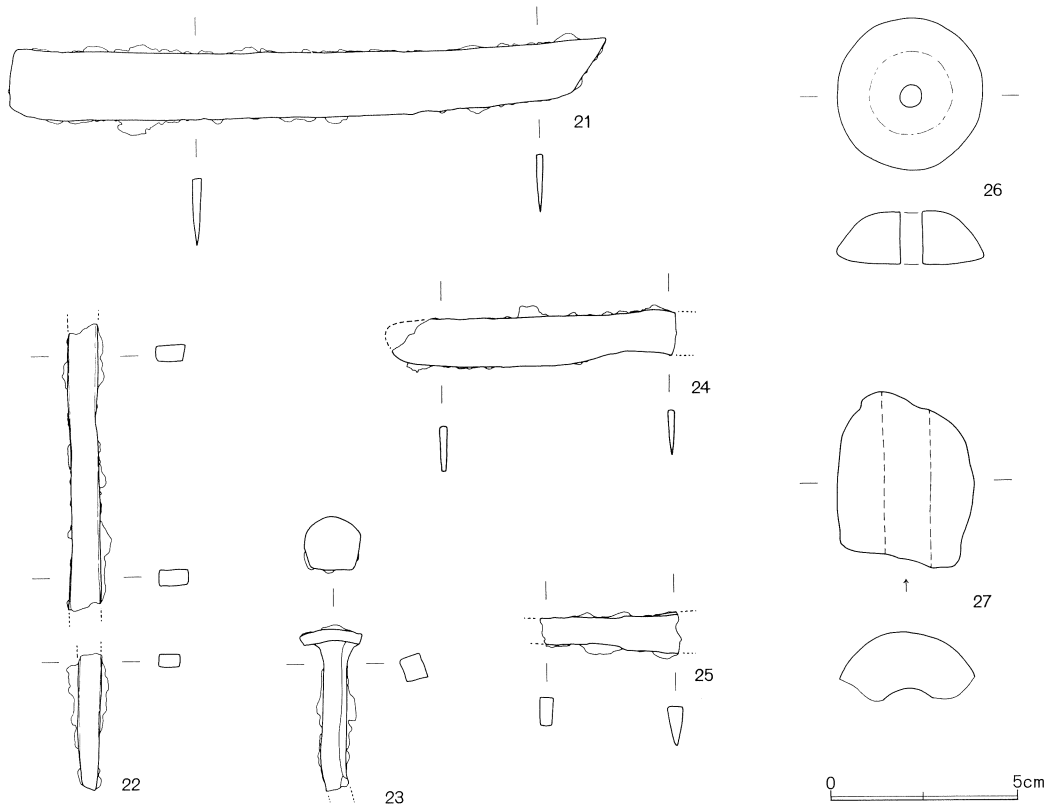
第171図 第85号住居跡出土遺物(2)

第85号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (13.7) 底 径 — 高 さ 3.3 最大径 —	礫 砂粒	にぶい褐	40	11248	464	
2	〆	口 径 (14.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	にぶい赤褐	30	10006, 10007, 10008	472	
3	〆	口 径 12.6 底 径 — 高 さ 3.0 最大径 —	礫 砂粒	にぶい褐	80	8131, 10044, 10046	463	
4	〆	口 径 14.0 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	礫 砂粒	橙褐	60	11028, 11035	468	灯明皿として使用
5	〆	口 径 14.8 底 径 — 高 さ 3.2 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい褐	90	10137, 10141	469	
6	〆	口 径 (15.1) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	〆	20	10113	470	
7	〆	口 径 (12.4) 底 径 — 高 さ 3.4 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	40	8085	465	
8	〆	口 径 13.1 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい褐	70	11793	466	
9	〆	口 径 14.7 底 径 — 高 さ 4.4 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	60	8024	467	
10	蓋	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 白色針状物質 砂粒	灰	つまみ のみ	10106	587	

第85号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
11	坏	口 径 15.8 底 径 10.4 高 さ 3.5 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰黄褐	90	10017, 10027, 10034	528	
12	〆	口 径 (15.7) 底 径 (10.2) 高 さ 3.0 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰黄	20	10138	527	
13	〆	口 径 14.6 底 径 9.9 高 さ 3.1 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰白	60	8113, 8115	529	分析No.11
14	甕	口 径 (22.8) 底 径 - 高 さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	明赤褐	胴上半30	10083, 10095, 10164	474	
15	〆	口 径 (23.9) 底 径 - 高 さ - 最大径 -	礫 白色針状物質 砂粒	にぶい橙	胴上半60	11308, 11309, 11310	473	
16	長頸瓶	口 径 (10.4) 底 径 10.2 高 さ (25.0) 最大径 18.5	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	灰白	頸部欠60	8107, 10112	547	
17	長頸壺	口 径 - 底 径 2.4 高 さ (17.2) 最大径 12.4	黒色粒 礫 砂粒	褐灰	口縁欠	10037	509	
18	甕	口 径 - 底 径 18.9 高 さ - 最大径 -	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	オリーブ黒	胴下半30	10030, 10032, 10058	511	
19	横瓶	口 径 - 底 径 - 高 さ - 最大径 -	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	灰	胴部片	10020, 10082, 10096	552	
20	〆	口 径 - 底 径 - 高 さ - 最大径 -	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	〆	〆	10002, 10004	548	



第172図 第85号住居跡出土遺物(3)

第85号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
27	—	—	—	(24.25)		11050	713

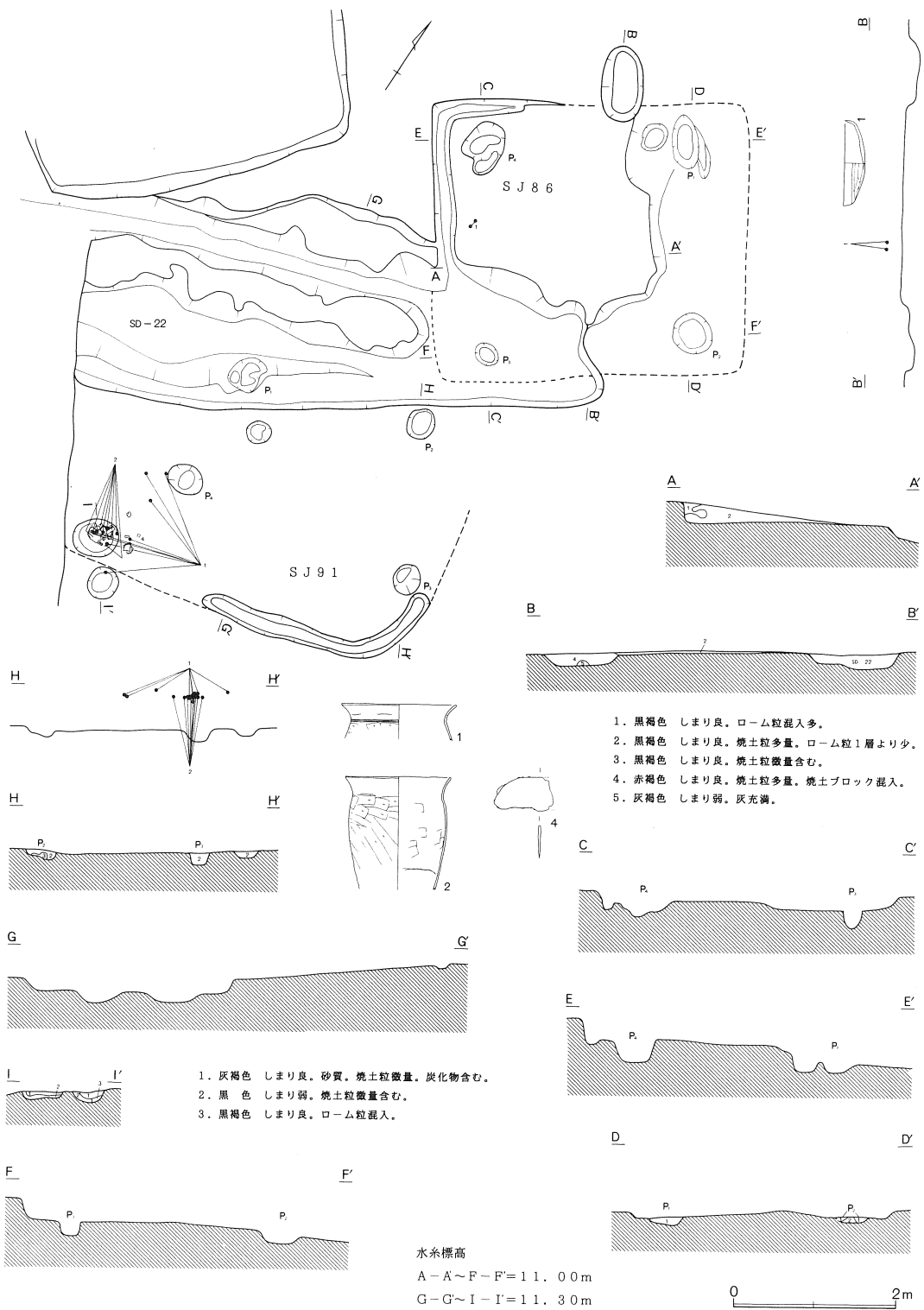
遺物は床面上15cmから坏が出土している。

第86号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 13.2 底径 — 高さ 3.2 最大径 —	礫砂粒	橙褐色	90	8754, 10426	471	

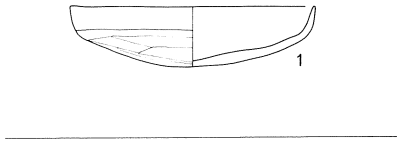
第91号住居跡 (第173図)

22号溝と重複しこれより古い。また86号住居跡とも重複していると思われる。検出されたのは壁

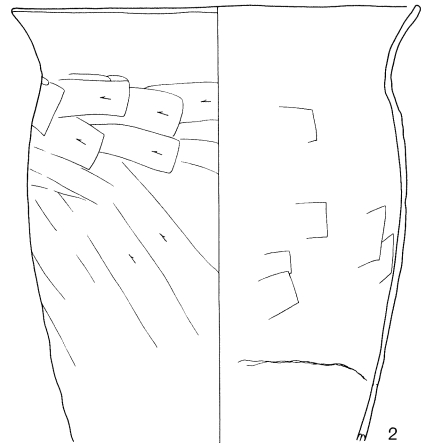
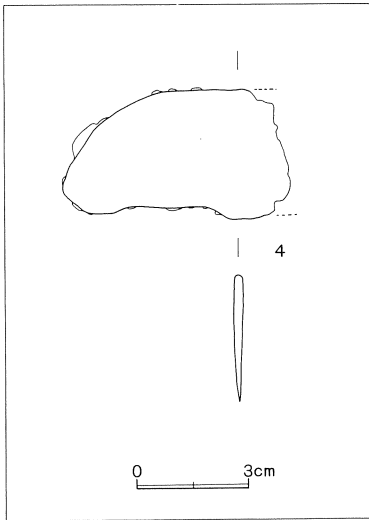
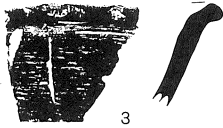
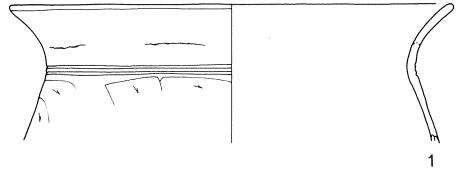


第173図 第86・91号住居跡

S J 8 6



S J 9 1



第174図 第86・91号住居跡出土遺物

溝とピットのみである。壁溝は東南隅部分と考えられる。ピットはP 1～P 4を支柱穴と考えておきたい。

遺物は土師器甕及び鎌などが床面からかなり浮いた状態で出土している。

鉄製品 4は鎌の先端部である。刃部はかなり刃こぼれしている。現存長6.1cm、幅3.4cm、厚さ3mmである。

第87号住居跡（第175図）

88号住居跡と重複しこれより古い。平面形は隅丸方形である。規模は5.4m×5.3mで確認面からの深さは54cmである。主軸方位はN-27°-Wである。壁はやや斜めに掘り込まれている。床面は平坦であるが貯蔵穴とカマドの間は5cmほど高くなっている。また南辺中央部分も馬蹄形状に高くなっている。貯蔵穴は北隅に検出された。長方形の掘り込みで上面76cm×62cmほどで深さは40cmで

第91号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	甕	口 径 (23.7) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	赤褐	口縁 40	9093, 9120, 11711	485	
2	〃	口 径 21.9 底 径 — 高 さ 23.0 最大径 20.1	白色粒 礫 砂粒	〃	胴上半50	9113, 9122, 11727	486	
3	鉢	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	灰オリーブ		9130	91-154	

ある。ピットはP1～P4が支柱穴と考えられる。壁溝はなかった。

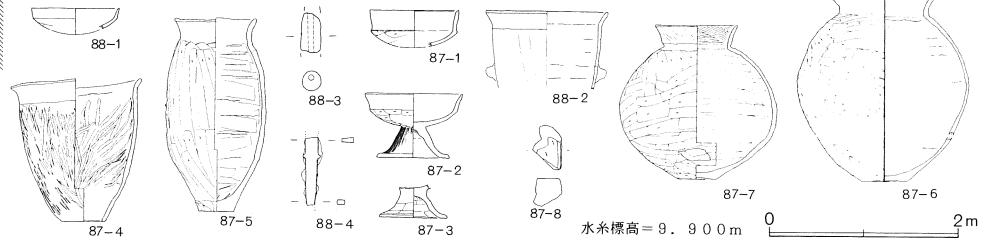
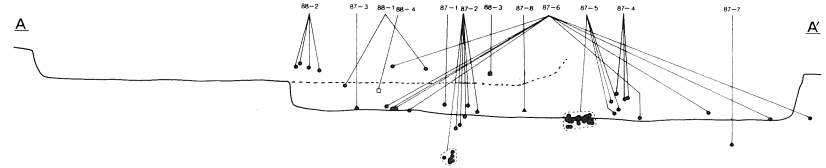
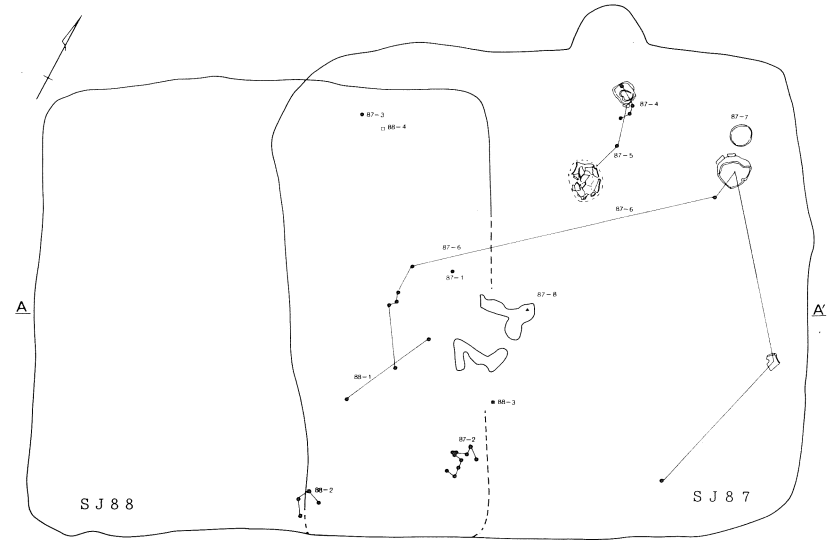
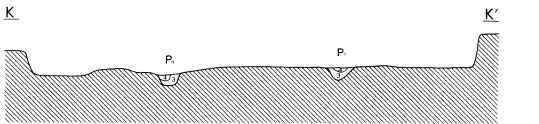
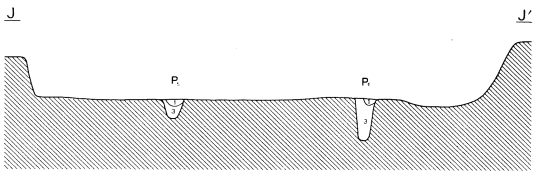
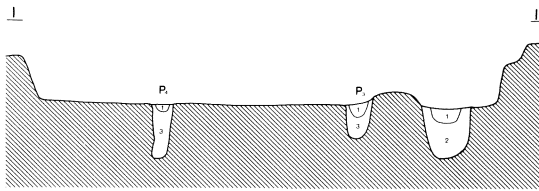
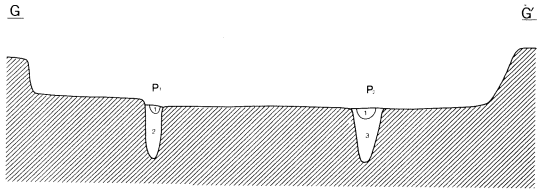
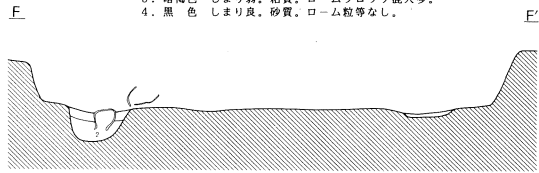
カマドは北壁中央に設けられていた。袖は比較的良く残っており、焚口の幅は40cmで奥行きは60cmである。

遺物は床面から坏、甕などが出土している。

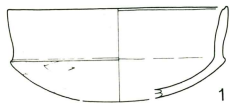
第87号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (11.8) 底 径 — 高 さ 4.9 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	20	11588	476	
2	高坏	口 径 12.9 底 径 9.7 高 さ 8.6 最大径 —	白色粒 砂粒 赤色粒 礫 角閃石	赤褐	70	12664, 12666, 12668	480	
3	〃	口 径 — 底 径 9.0 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	橙褐	脚部 100	11930	479	
4	甗	口 径 23.2 底 径 7.5 高 さ 25.3 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい黄褐	100	8703, 11834, 12146	482	

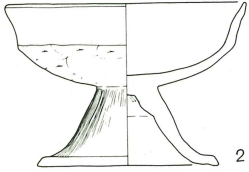
1. 黒褐色 しまり弱。砂質。微細ローム粒混入。
2. 黒褐色 しまり弱。砂質。1層類似。より黒味帯びる。
3. 暗褐色 しまり弱。粘質。ロームブロック混入多。
4. 黒色 しまり良。砂質。ローム粒等なし。



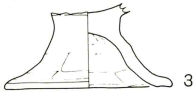
第176図 第87・88号住居跡(2)



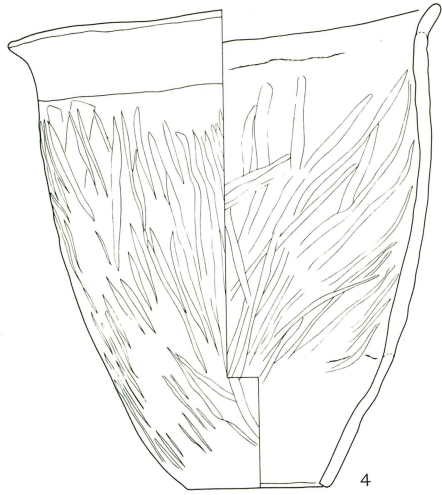
1



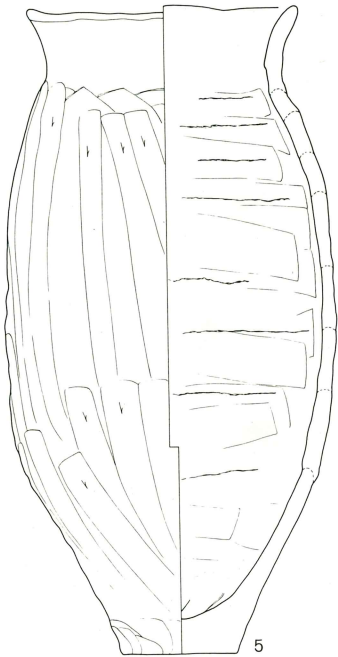
2



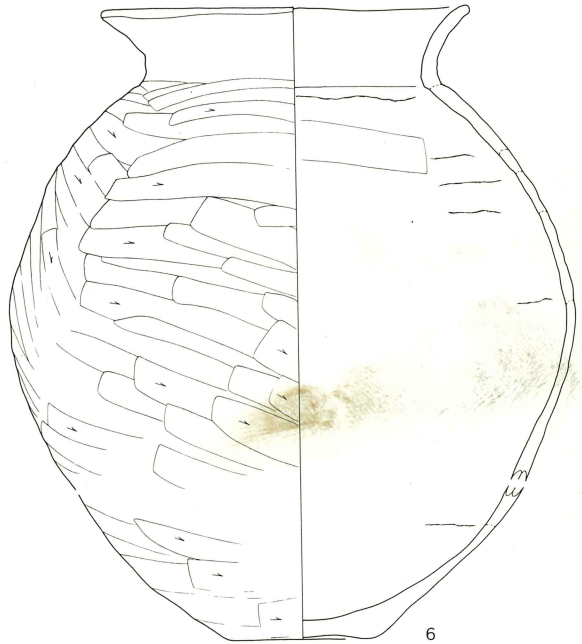
3



4



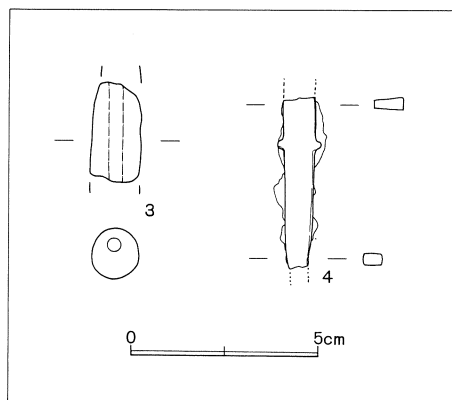
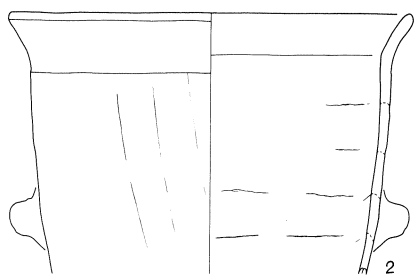
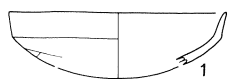
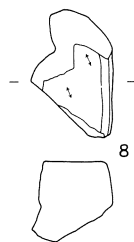
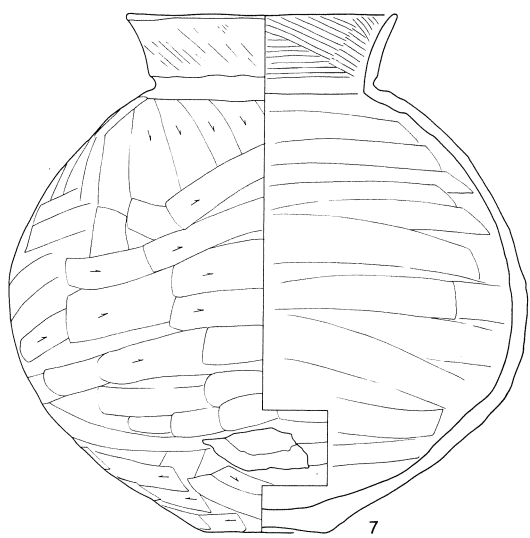
5



6



第177図 第87号住居跡出土遺物



0 10cm

第178図 第87・88号住居跡出土遺物

第87号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
5	甕	口 径 14.5 底 径 6.1 高 さ 34.4 最大径 17.6	礫 雲母 砂粒	赤褐	100	11548, 11833, 12012	481	
6	〃	口 径 19.7 底 径 7.6 高 さ (33.5) 最大径 29.9	白色粒 礫 砂粒	〃	60	8566, 11962, 12150	484	
7	壺	口 径 14.6 底 径 6.5 高 さ 27.3 最大径 27.8	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	100	12658	483	焼成前 穿孔

第88号住居跡（第175図）

87号住居跡と重複する。これより新しい。平面形は方形である。規模は4.8m×4.7mで確認面からの深さは20cmである。主軸方位はN-61°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は東隅に検出された。円形の掘り込みで直径60cmで深さは64cmである。ピットはP5～P8が主柱穴と考えられる。P9も住居跡に伴うものと考えられる。壁溝は西辺のみに検出されたがP9部分は切れている。

カマドは東辺中央に設けられていた。袖には砂岩の切り石が用いられていた。

遺物は床面から10cmほど浮いた状態で坏、鉄製品等少量が出土している。

鉄製品 4は長頸鏃の頸部破片である。棘篋被である。現存長4.5cm、幅8mm、厚さ3mmほどである。

第88号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (11.7) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 砂粒	明赤褐	20	8580, 8866	477	
2	甗	口 径 21.6 底 径 — 高 さ 13.9 最大径 —	赤色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	100	8617, 8620, 8923	478	

第88号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
3	(2.7)	1.3	0.3	(4.56)	1/3	8594	712

第89号住居跡 (第179図)

大半が調査区外にかかる。平面形は方形と思われる。他の遺構との重複はない。検出されたのは東辺と北辺の東側と考えられる。規模は東辺が2.7mで北辺は1.1mである。確認面からの深さは12cmである。方位は東辺でN-12°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は小ピットが散在している。柱穴は確定できない。貯蔵穴、壁溝、カマドは検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第90号住居跡 (第179図)

カマド部分及び南辺と南西の角の壁溝が検出された。床面はカマド周辺がころうじて残っていたのみである。平面形は方形あるいは長方形と思われる。遺存していた壁溝の長さは3.6mである。深さは南東の角で7cmである。主軸方位はN-79°-Wである。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP1、P2が柱穴と考えられるが他のものは住居跡に伴うかどうかわからない。壁溝はカマド南側25cmほどのところから掘り込まれ西辺は130cmほど遺存していた。カマド北側はないようである。

カマドの位置は東辺南よりと推定される。右袖が残っていた。焚口の幅は40cmほどと推定され奥行きは右袖の先端から65cmである。

遺物は出土しなかった。

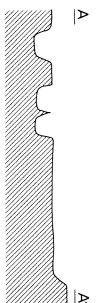
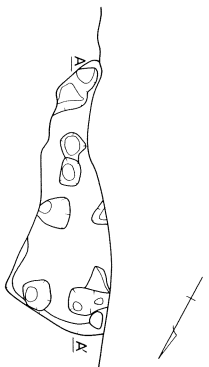
第92号住居跡 (第180図)

93号住居跡と重複する。これより古い。平面形は隅丸方形である。規模は5.7m×5.7mで確認面からの深さは26cmである。主軸方位はN-35°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴は南隅に検出された。貯蔵穴とP3との間は一段高くなっている。方形の掘り込みで上面68cm×64cmほどで深さは64cmである。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。壁溝は北辺のカマドの西側90cmのところから始まり西辺を経て南辺は93号住居跡に切られるところまで続いている。東辺及び北辺のカマド東側には検出されなかった。

カマドは北辺中央に設けられていた。袖には砂岩の切り石が用いられていた。焚口の幅は30cmで奥行きは120cmほどである。

遺物はカマド内から高坏が伏せられた状態で出土している他床面及び覆土中から坏、甕、鉄製品などが出土している。

砥石 12は覆土中からの出土である。所謂撥型を呈するものであるが下方を折損している。4面とも非常によく使用され平滑である。折損後にも使用され線状の痕跡が残る。

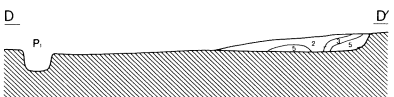
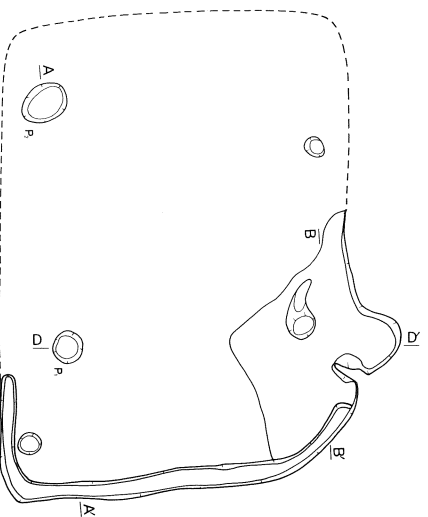


水糸標高=11.200m

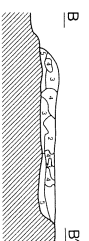
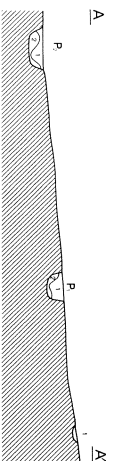


S J 89

S J 90



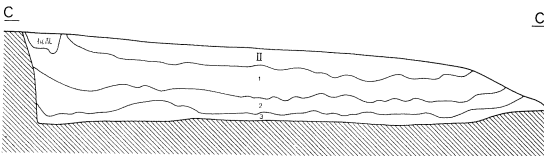
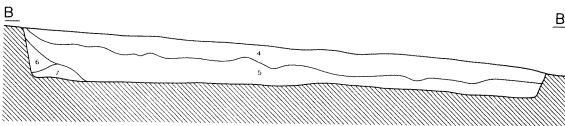
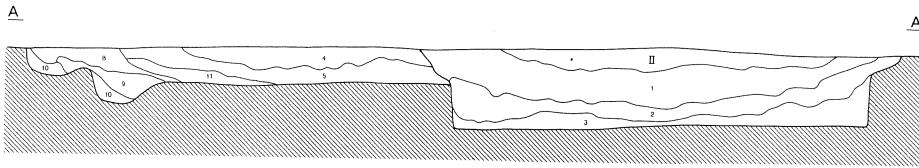
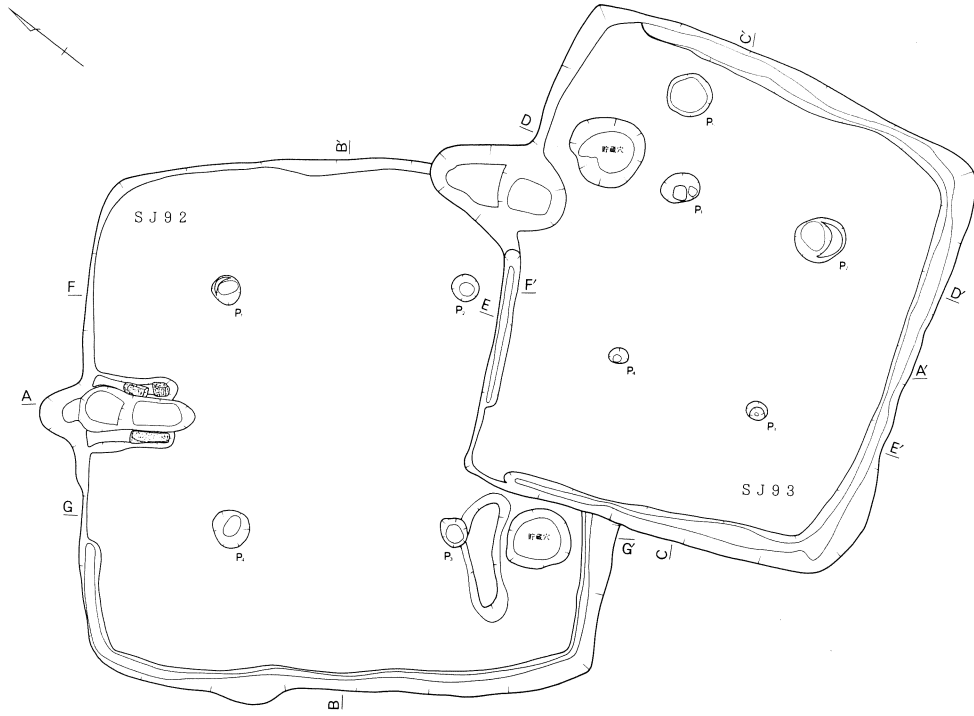
1. 黄褐色 しまり良。砂質。細粒多量。焼土粒混入少。
2. 赤褐色 しまり良。焼土粒、焼土ブロック多量。炭化物少量。
3. 黒褐色 しまり良。焼土粒混入少。4層少量斑状に混入。
4. 灰褐色 しまり良。粘質。砂粒微量。カマド袖部風化。
5. 黒褐色 しまり良。焼土粒微量混入。



水糸標高=10.100m

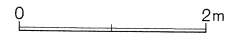


第179図 第89・90号住居跡



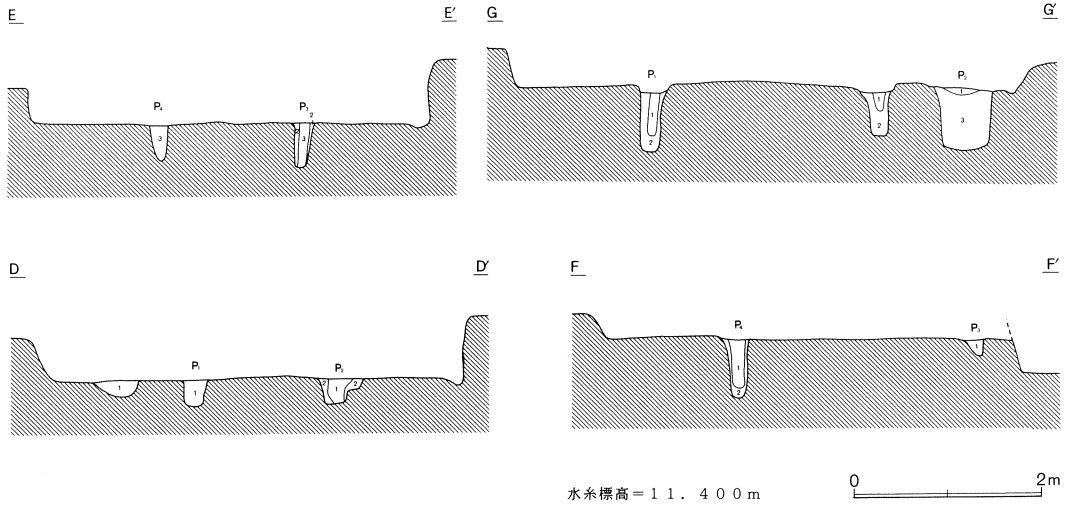
- II. 黒色
1. 黒褐色 しまり弱。砂質。焼土ブロック(5cm~1cm)、炭化物多量含む。
 2. 黒色 しまり弱。砂質。焼土粒少ない。
 3. 黒褐色 しまり弱。砂質。焼土粒少ない。
 4. 黒色 しまり弱。砂質。ローム、焼土の微粒子多量。炭化物若干含む。
 5. 黒色 しまり弱。砂質。焼土粒・炭化粒・ローム粒多量含む。
 6. 黒色 しまり弱。砂質。ローム粒子少ない。
 7. 黒色 しまり弱。砂質。灰色粘土含む。炭化粒・ローム粒少。
 8. 黒褐色 しまり良。砂質。焼土粒、炭化物多量含む。
 9. 赤褐色 しまり弱。砂質。焼土粒、ブロック多量含む。
 10. 黒褐色 しまり弱。砂質。上面は焼土粒混入多。下部はロームブロック多量含む。
 11. 黒褐色 しまり弱。砂質。焼土粒子多量含む。

水系標高 = 11.400 m



第180図 第92・93号住居跡(1)

1. 黒褐色 しまり良。ローム粒、焼土粒含む。
2. 暗褐色 しまり良。ローム粒少量含む。
3. 黒褐色 しまり良。ローム粒含む。焼土なし。

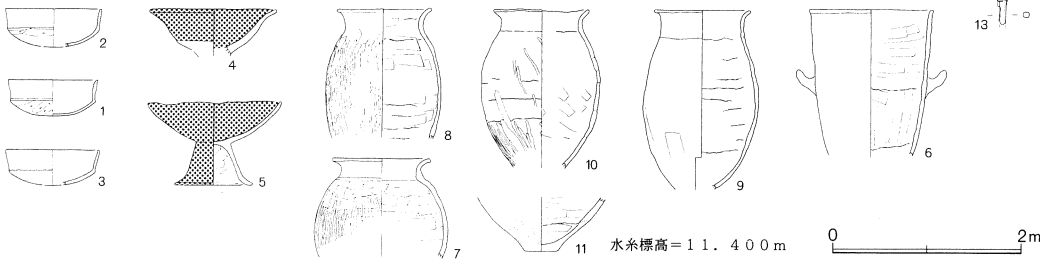
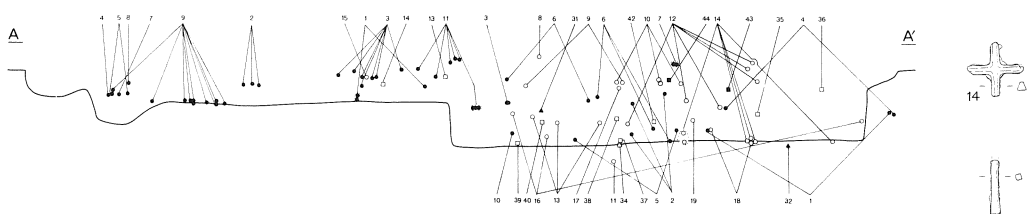
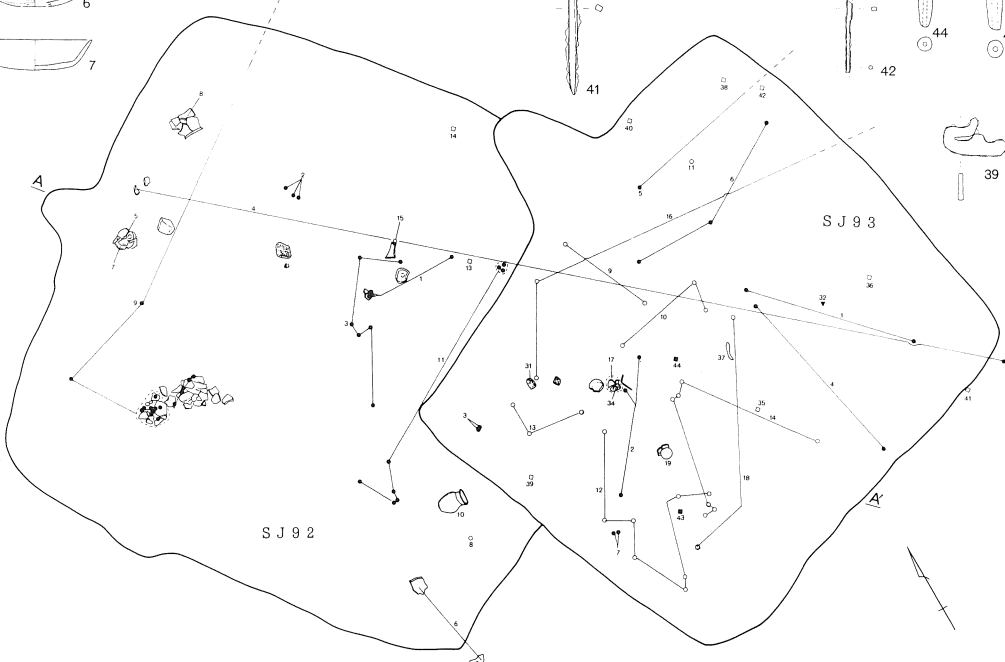
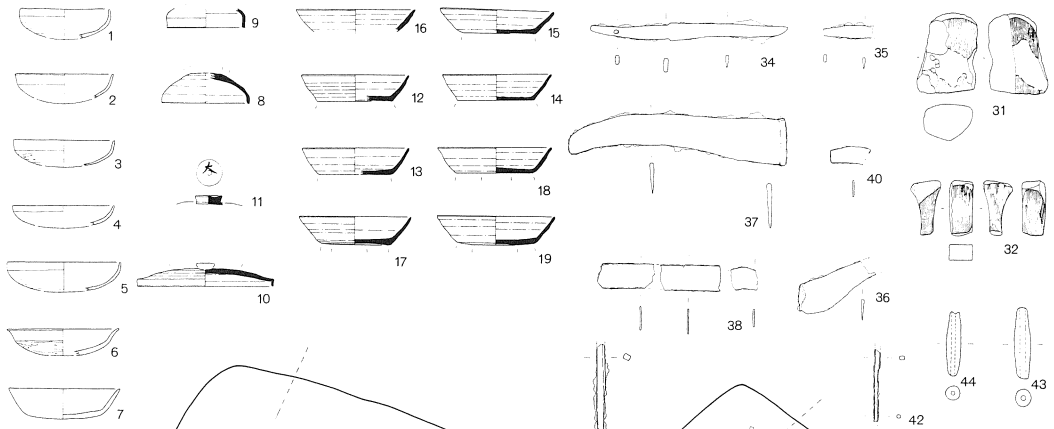


第181図 第92・93号住居跡(2)

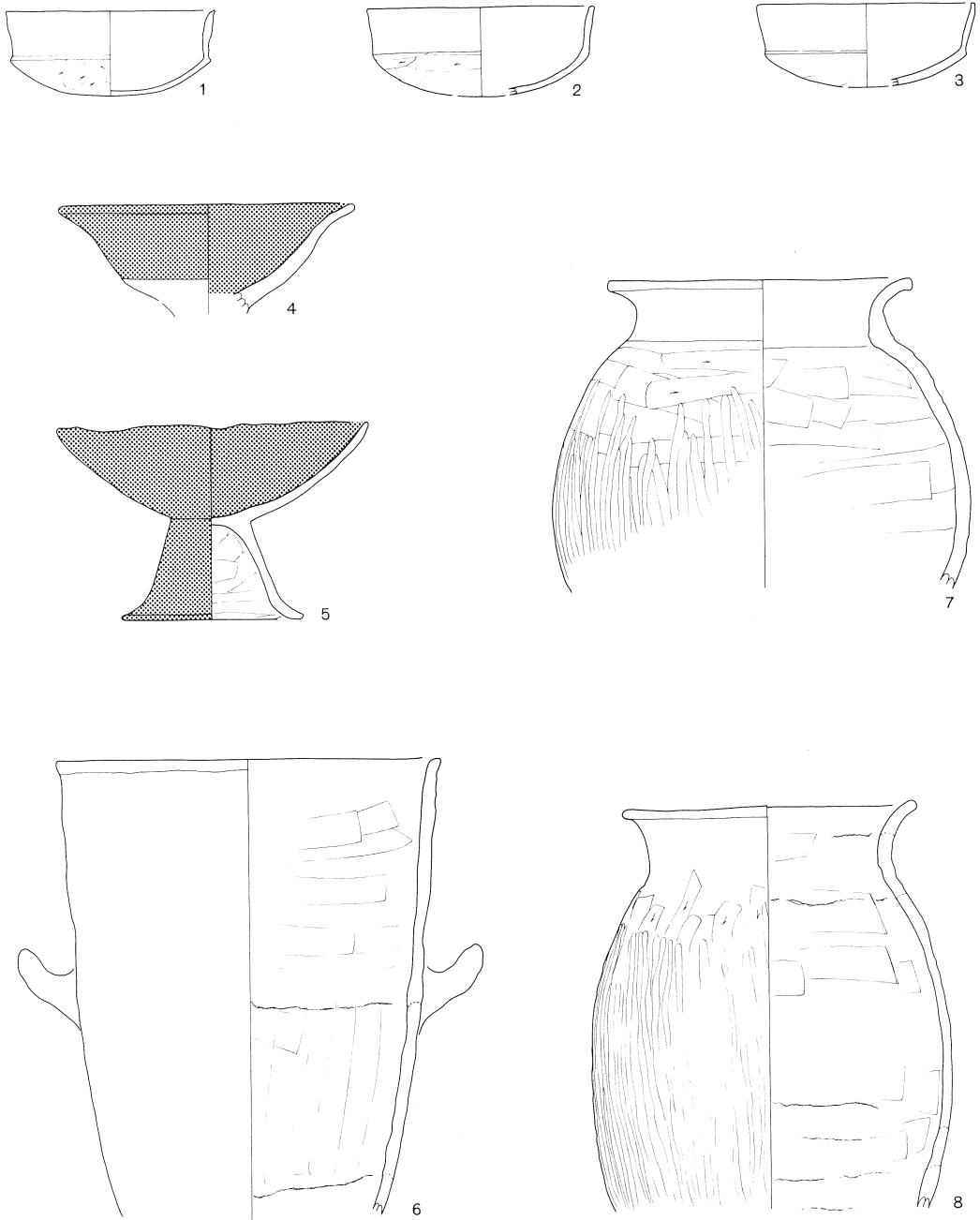
鉄製品 (13~14) 13は鍬の頸部である。関匏被である。現存長6.2cm、匏被部は幅、厚さともに4mm四方、茎部は幅4mm、厚さ3mmである。14は用途不明。

第92号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 12.0 底径 — 高さ 4.8 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	90	9324, 9813	491	
2	〃	口径 (13.0) 底径 — 高さ 5.0 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	40	9271, 9272, 9273	489	
3	〃	口径 (12.4) 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	〃	30	9146, 9171, 9296	488	
4	高坏	口径 17.0 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒		坏部 60	12593, 12595, 12765	497	

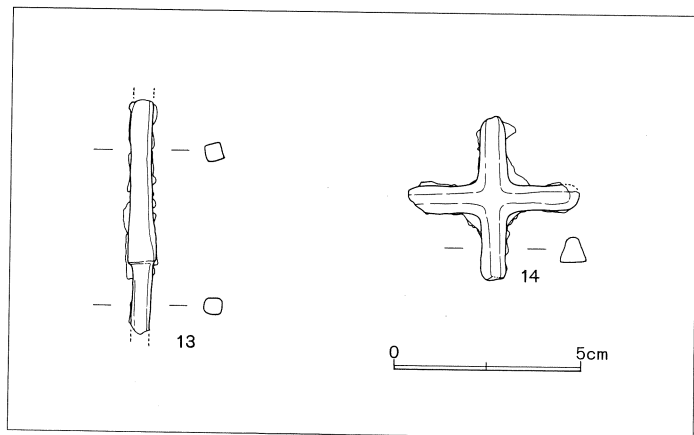
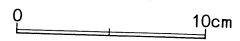
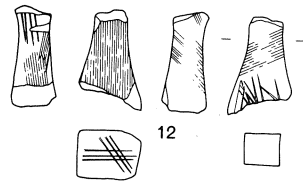
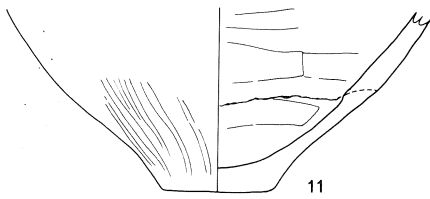
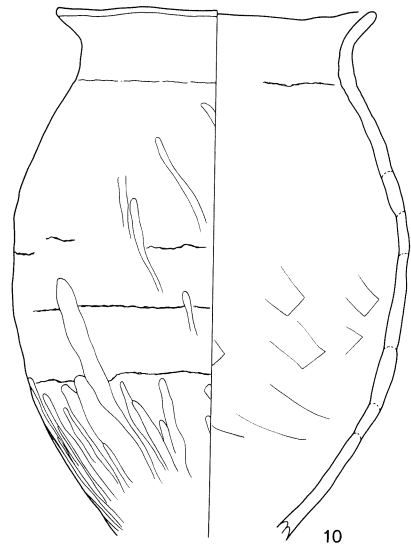
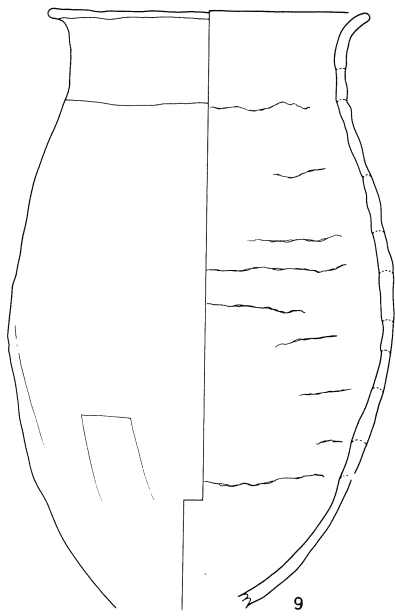


第182图 第92·93号住居跡(3)



0 10cm

第183図 第92号住居跡出土遺物(1)



第184図 第92号住居跡出土遺物(2)

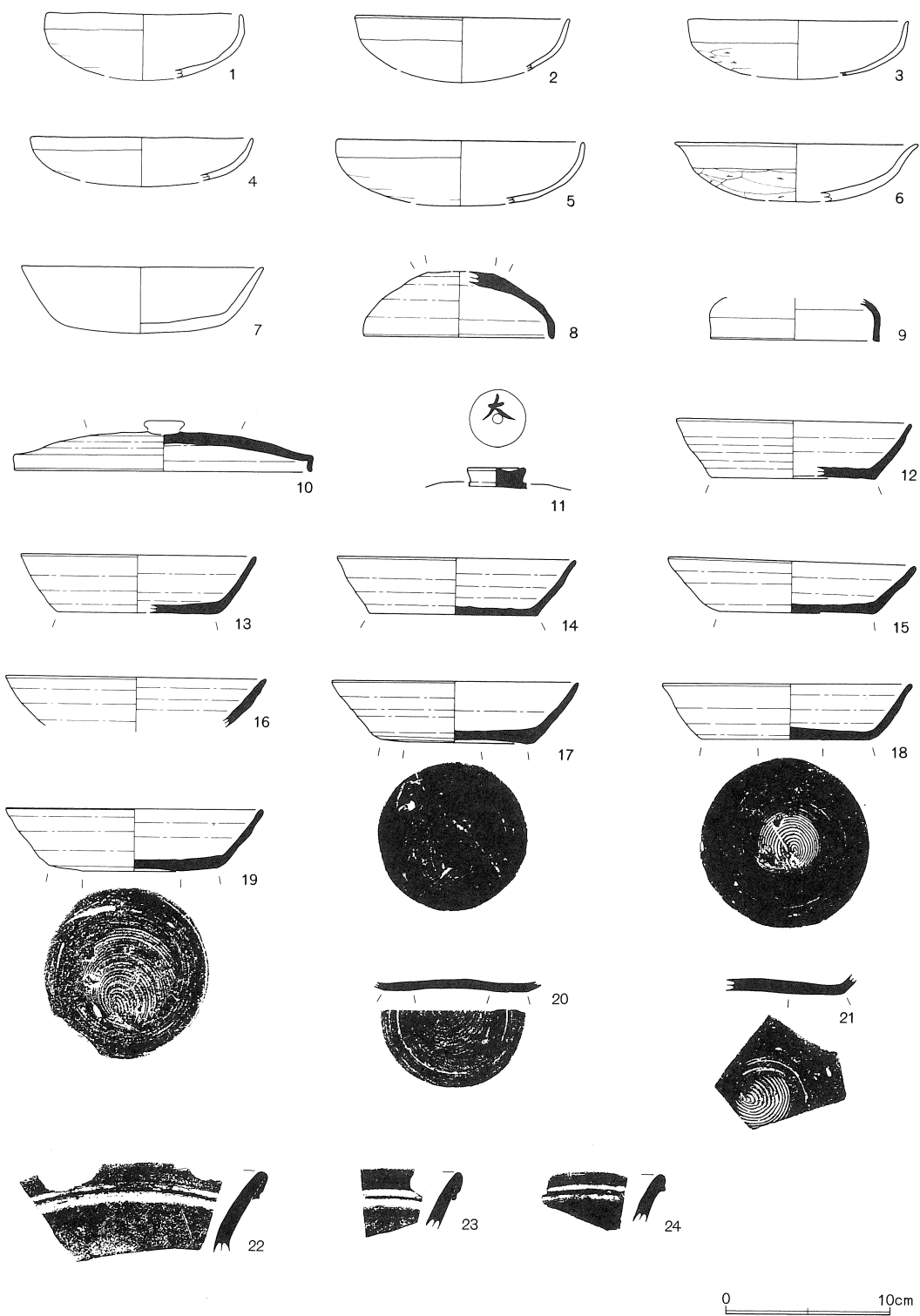
第92号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
5	高坏	口径 17.8 底径 10.4 高さ 10.9 最大径 -	礫 角閃石 砂粒		90	12556, 12701	498	
6	甌	口径 (21.9) 底径 - 高さ - 最大径 -	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	口縁 10	11746, 12625	502	
7	甕	口径 (17.3) 底径 - 高さ - 最大径 23.8	礫 雲母 片岩 砂粒	橙褐	胴上半50	12702	487	
8	〃	口径 16.8 底径 - 高さ (22.8) 最大径 20.6	礫 砂粒 角閃石 雲母 片岩	にぶい橙	胴上 100	11252	475	甌転用か？
9	〃	口径 17.2 底径 - 高さ (31.6) 最大径 20.6	白色粒 片岩 赤色粒 砂粒 礫 雲母	〃	底部欠	11257, 11266, 11267	500	
10	〃	口径 17.1 底径 - 高さ (27.8) 最大径 21.0	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	〃	底部欠	12706	499	
11	〃	口径 - 底径 (5.8) 高さ - 最大径 -	赤色粒 砂粒 礫 雲母 片岩	にぶい赤褐	胴下 20	9306, 9310, 9334	501	

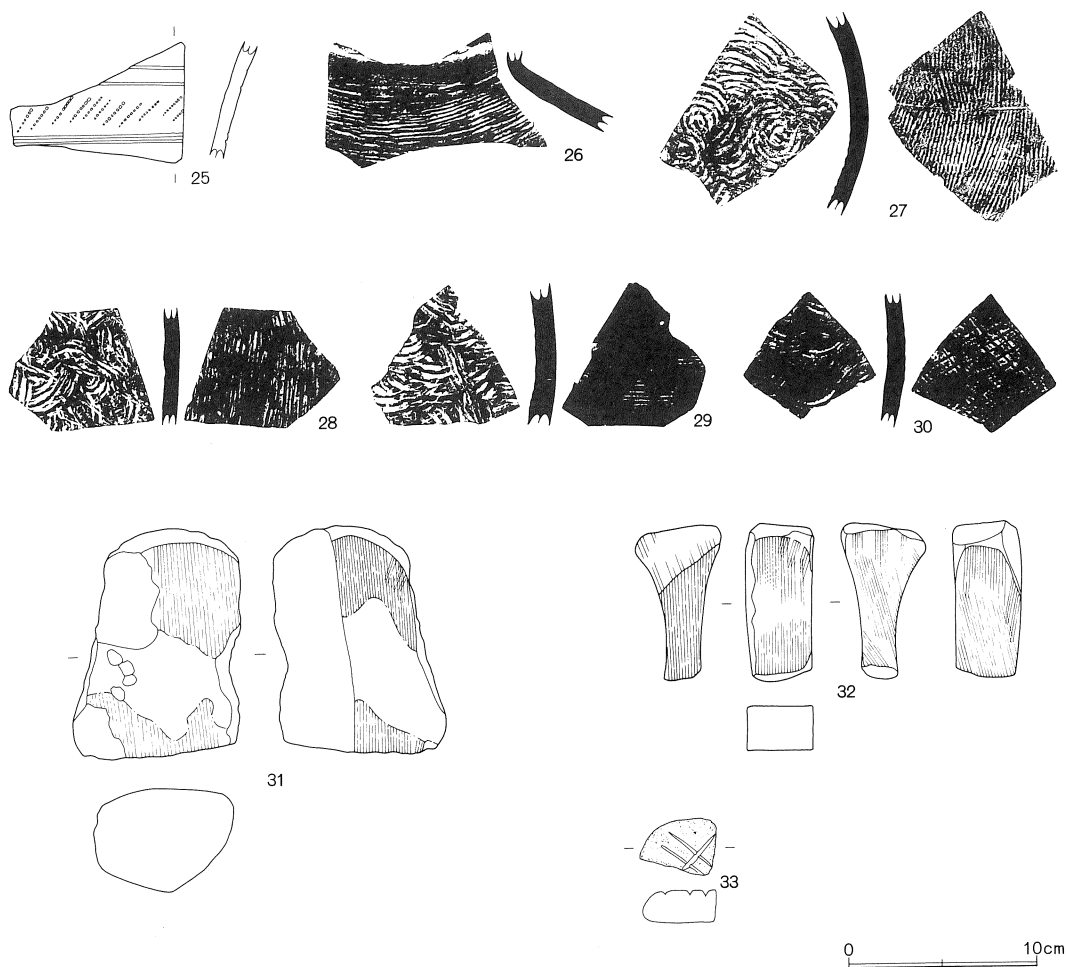
第93号住居跡（第181図）

92号住居跡と重複しこれより新しい。平面形は方形である。規模は5.2m×4.7mで確認面からの深さは48cmである。主軸方位はN-16°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。貯蔵穴はカマドの右手前に検出された上面86cm×76cmほどの掘り込みでカマド側はカマドに規制されたように変形する。深さは18cmである。ピットはP1～P4が主柱穴と考えられる。P5も住居跡に伴うものと考えられる。壁溝は全周せず北西角と北辺のカマド東側は検出されなかった。

カマドは北辺中央に設けられていた。袖は残っていなかったが貯蔵穴の形状から短い袖があったことも考えられる。焚口の幅は80cmほどと推定され奥行きは70cmである。



第185図 第93号住居跡出土遺物(1)

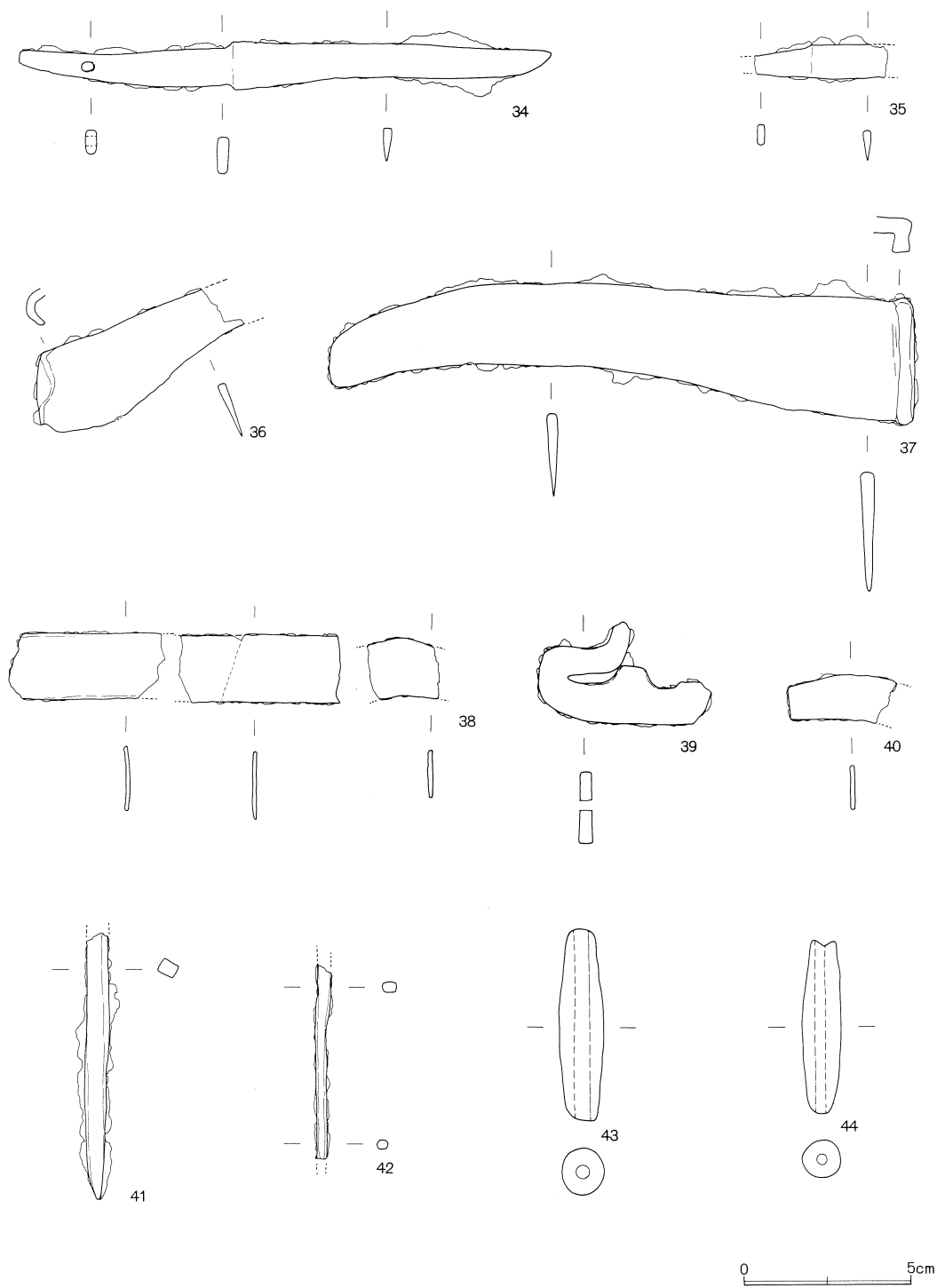


第186図 第93号住居跡出土遺物(2)

遺物は床面及び覆土中に散っているが坏、鉄製品、砥石等が出土している。

砥石 (31~33) 31は覆土中からの出土である。破損後に被熱している。側面は使用されていない。使用されている面は平滑になり切らず使用の状態は進んでいない。32は床面からの出土である。下方を折損する。4面とも使用されているが特に2面は使い込まれて側面は撥型を呈する。端面もわずかに使用されている。33は所謂軽石であるが断面三角形の鋭い刻みが入る。

鉄製品 (34~42) 34. 35は刀子。34は現状は3片に破損しており接合すると茎部で大きく折れ曲がってしまうが図上で復原した。刃部は中央部が研減りして湾曲している。両関。長さ9.6cm、身幅1.4cm、背幅3mm。茎部は少し湾曲しているが本来はまっすぐだったものと思われる。目釘穴が認められる。裏面には木質が残る。長さ6.2cm、幅1.1cm、背幅3mm。36. 37は鎌。いずれも曲刃である。36は基部の折り返しが左側になる。現存長6.8cm、幅2.6cm、背幅3mmほどである。37は基部の折り返しがほぼ直角である。長さ17.5cm、幅2.5cm、背幅3mmほどである。41. 42は棒状の製品である。41は先端が尖っているので釘かとも思われる。現存長7.9cm、太さ5×4mm。42は両端を



第187图 第93号住居跡出土遺物(3)

欠失する。一方に向かって太さを減ずる。細いほうは六角形を呈するようである。錐あるいは紡錘車の軸などが考えられよう。現存長5.7cm。38.40は板状の製品である。39は不明鉄製品。現状は一枚の板状を呈していたがX線撮影により図のような製品であることがわかった。右側を欠失するが左右対象であったと思われる。左側の屈曲した先端部は破損していると思われる。大きさは5.2cm×3cm、厚さ4mm。

第93号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
1	坏	口 径 (12.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	にぶい赤褐	10	10638, 11382	492	
2	〇	口 径 (13.2) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒 礫 角閃石	赤褐	20	10300, 10618, 12573	493	
3	〇	口 径 (13.6) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	20	10657, 11464	495	
4	〇	口 径 (13.7) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	30	10584, 12374	494	
5	〇	口 径 (15.2) 底 径 — 高 さ (4.0) 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	30	10532, 12353	496	
6	〇	口 径 (15.0) 底 径 — 高 さ 3.5 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	40	9872, 10522, 11679	447	
7	〇	口 径 (14.8) 底 径 — 高 さ 4.0 最大径 —	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	〇	40	9237, 9238	490	
8	蓋	口 径 — 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒	灰	20	9347	530	湖西産 (分析No.9)

第93号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
9	蓋	口 径 (10.4) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 黒色粒 礫 砂粒	灰オリーブ	20	9424, 10226	546	
10	〆	口 径 (18.2) 底 径 — 高 さ (2.4) 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	黄灰	20	9431, 9432, 9471	586	
11	〆	口 径 3.6 底 径 — 高 さ — 最大径 —	黒色粒 礫 砂粒	にぶい黄橙	つまみ部	12719	588	墨書「大」
12	坏	口 径 14.5 底 径 10.1 高 さ 3.5 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰	70	9493, 9923, 11208	532	分析No.12
13	〆	口 径 (14.4) 底 径 (9.6) 高 さ 3.5 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	褐灰	20	10933, 11211, 11219	533	分析No.18
14	〆	口 径 14.7 底 径 10.4 高 さ 3.4 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰	70	11385, 11387, 11409	531	分析No.13
15	〆	口 径 15.3 底 径 9.4 高 さ 3.1 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰黄	80	11223	536	
16	〆	口 径 (16.1) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	黄灰	30	10947, 11243, 12672	544	
17	〆	口 径 15.1 底 径 9.1 高 さ 3.7 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰オリーブ	70	12454	534	
18	〆	口 径 15.4 底 径 10.3 高 さ 3.4 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰	60	11378, 11925	535	

第93号住居跡出土遺物観察表(3)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
19	坏	口径 (15.8) 底径 10.3 高さ 3.8 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰黄褐	50	11873	537	
20	ク	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	灰オリーブ	破片	9236	93-156	
21	ク	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	赤色粒 礫 白色針状物質 砂粒	灰白	ク	10808	93-183	
22	甕	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰オリーブ	ク	11618	93-178	
23	ク	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	暗青灰	ク	11330	93-176	
24	ク	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	褐灰	ク	12251	93-174	
25	ク	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒	オリーブ灰	ク	12228	93-191	湖西産
26	ク	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰	ク	11667	93-179	叩き幅 4本/cm
27	ク	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	ク	ク	11652	93-167	叩き幅 5本/cm
28	ク	口径 - 底径 - 高さ - 最大径 -	白色粒 礫 砂粒	ク	ク	11202	93-175	叩き幅 2本/cm

第93号住居跡出土遺物観察表（4）

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
29	甕	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 砂粒 黒色粒 礫 白色針状物質	灰オリーブ	破片	10598	93-173	叩き幅 5本/cm
30	〃	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	白色粒 礫 白色針状物質 砂粒	〃	〃	9712	93-170	叩き幅 6本×7本 /3cm 7本×3cm

第93号住居跡出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
43	5.7	1.3	0.4	8.90	完形	12519	715
44	(5.2)	1.2	0.3	(5.97)	少欠	9477	714

2 竪穴状遺構

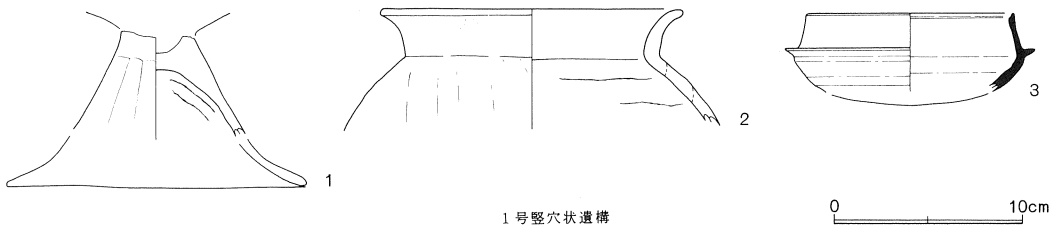
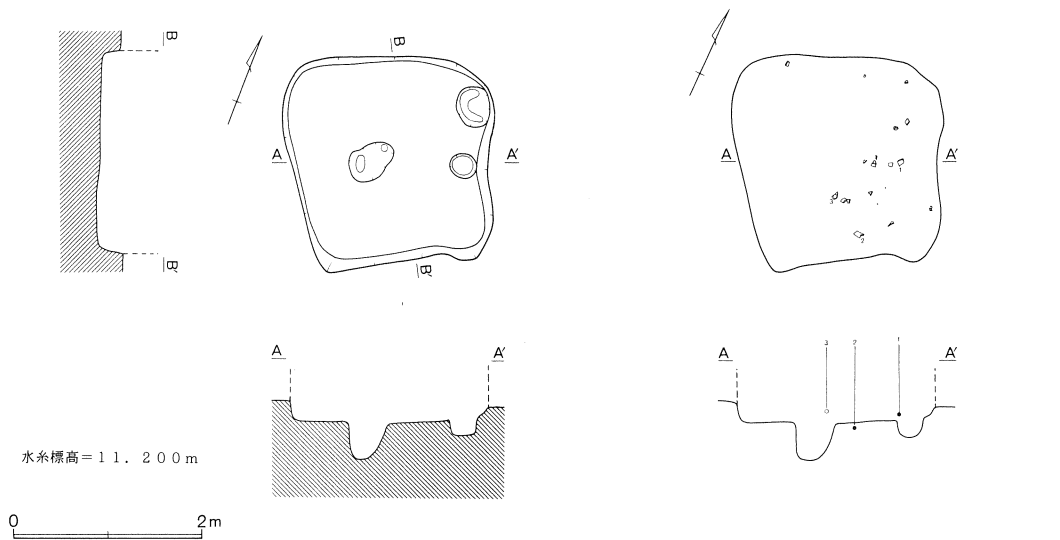
第1号竪穴状遺構（第188図）

第30号住居跡と重複する。これより新しい。平面形は隅丸方形である。規模は22.6m×2.1mで深さは20cmである。主軸方向はN-30°-Wである。壁は垂直に掘り込まれている。床面はほぼ平坦であるがピットは住居跡のものと区別がつかない。

遺物は数点出土しているが住居跡の遺物が混入していることも考えられる。

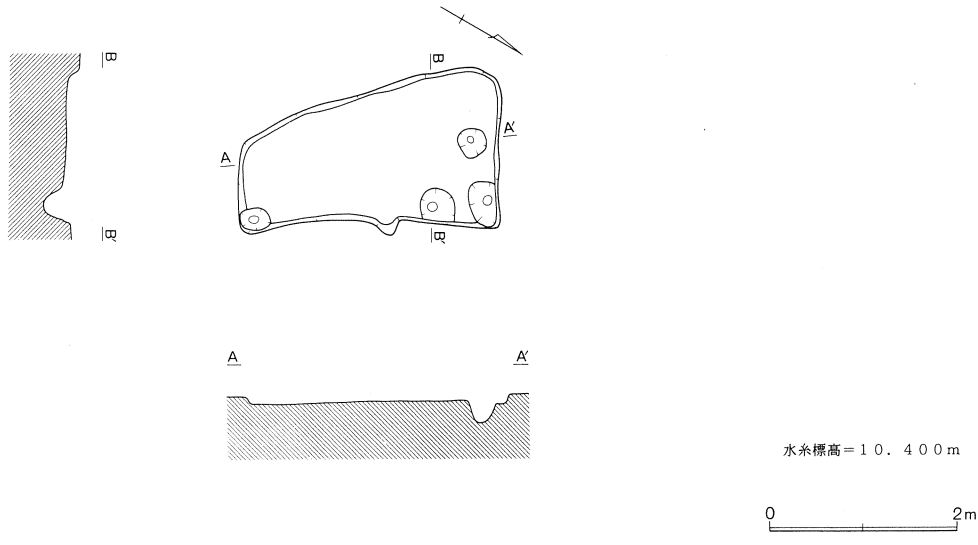
第1号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
1	高坏	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	橙褐	脚部 20	28	178	
2	甕	口径 (15.9) 底径 — 高さ — 最大径 —	黒色粒 赤色粒 礫 砂粒	〃	口縁 20	55	560	
3	坏	口径 (17.1) 底径 — 高さ — 最大径 —	黒色粒 赤色粒 礫	灰	20	19	515	分析No.1



1号竖穴状遺構

2号竖穴状遺構



第188图 第1・2号竖穴状遺構

第2号竪穴状遺構（第188図）

平面形は不整長方形で北辺と南辺の長さが違う。規模は北辺が1.8m南辺は1mである。東辺は2.8mで深さは15cmほどである。主軸方向はN-25°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は西から東に緩く傾斜する。ピットは4個検出された。

遺物は出土しなかった。

3 円形環状遺構（第189図）

円形周溝状遺構あるいはたんに周溝状遺構等と呼ばれているものである。遺構の性格についてははっきりしない。本遺跡では1基検出された。

32号住居跡と重複しこれより古い。32号住居跡に約半分を壊されている。平面形はやや楕円形になるものと思われる。規模は長軸8.8m短軸8mくらいと推定される。溝幅は25cmから広いところで60cmほどである。断面は基本的にはU字型を呈する。底面には小ピットがいくつか検出された。

遺物は滑石製白玉、土玉が1個ずつ検出された。土器は小破片が少量出土したのみで時期を推定させるようなものはなかった。

円形環状遺構出土土錘計測表

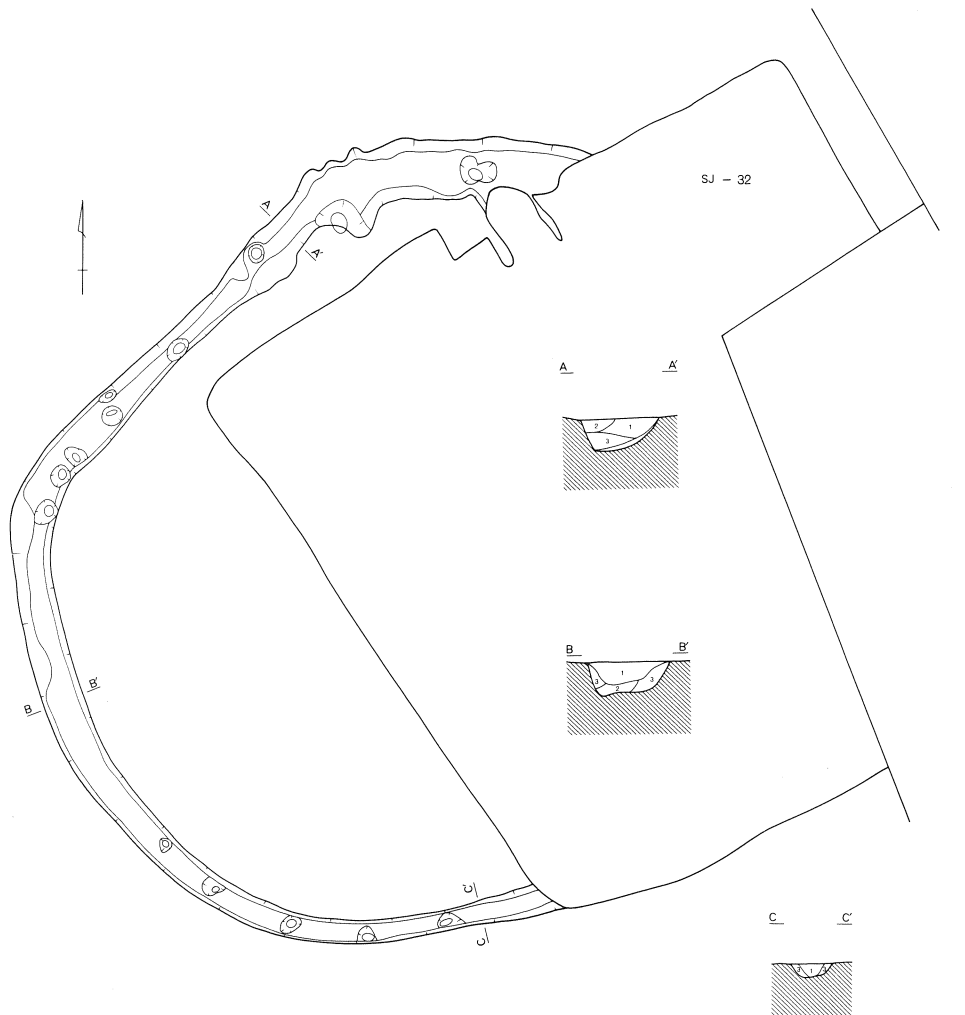
番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存	註記番号	実測番号
1	—	2.1	0.4	5.86	完形	7	716

円形環状遺構出土石製模造品計測表

番号	法量(mm)			重量(g)	種類	註記番号	実測番号
	直径	× 孔径	× 厚さ				
2	7	× 2	× 4	0.31	白玉	8	793

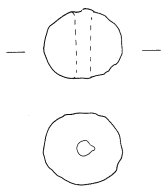
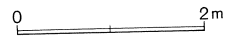
4 土坑（第190～193図）

総数65基検出された。このうち他の遺構と重複するものは第29号、47号、48号土坑だけである。このうち前後関係がつかめたのは48号土坑だけである。また遺物は14の土坑から出土しているが48号土坑以外はいずれも細片で図示できるものはない。時期判定についても確実に特定できるものはないといってよく、なかには縄紋土器と土師器が混在しているものも認められ、また近世以降に下るものもあると考えられる。48号土坑については67号住居跡を切り込んでおり遺物は土坑の覆土堆積時に混入した可能性も考えられる。

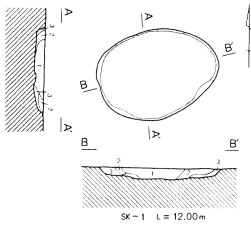


1. 黒褐色 軟質、ローム粒少量含む。
2. 暗褐色 1層よりローム粒を多く含む。
3. 黄褐色 粘質、ローム多、黒色土混在。

水系標高=11.000m

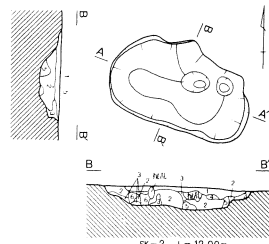


第189図 円形環状遺構



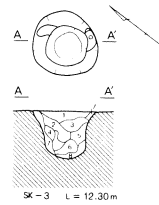
SK-1 L=12.00m

1. 暗褐色 土まり及 粘性中あり
2. 褐色 土まり及 粘性あり
3. 褐色 土まり及 粘性强



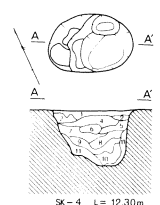
SK-2 L=12.00m

1. 暗褐色 土まり及 粘性なし
2. 暗褐色 土まり中弱 粘性なし
3. 暗褐色 土まり及 粘性あり
4. 暗褐色 土まり及 粘性中あり
5. 暗褐色 土まり及 粘性あり
6. 暗褐色 土まり及 粘性なし



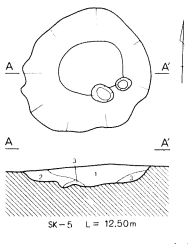
SK-3 L=12.30m

1. 暗褐色 土まり及 粘性弱
2. 暗褐色 土まり及 粘性弱
3. 暗褐色 土まり中弱 粘性弱
4. 暗褐色 土まり及 粘性中あり
5. 暗褐色 土まり及 粘性弱
6. 暗褐色 土まり中弱 粘性弱
7. 暗褐色 土まり及 粘性あり
8. 土まり黄褐色 土まり中弱 粘性あり



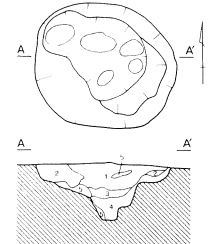
SK-4 L=12.30m

1. 暗褐色 土まり及 粘性弱
2. 暗褐色 土まり及 粘性中あり
3. 暗褐色 土まり及 粘性弱
4. 暗褐色 土まり及 粘性弱
5. 暗褐色 土まり及 粘性弱
6. 暗褐色 土まり及 粘性弱
7. 暗褐色 土まり及 粘性弱
8. 暗褐色 土まり及 粘性中あり
9. 暗褐色 土まり及 粘性弱
10. 暗褐色 土まり及 粘性中あり
11. 暗褐色 土まり及 粘性あり



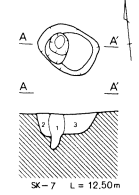
SK-5 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色
4. 暗褐色
5. 暗褐色



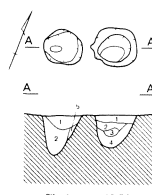
SK-6 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色
4. 暗褐色
5. 暗褐色



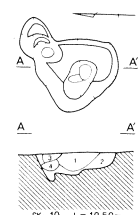
SK-7 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色



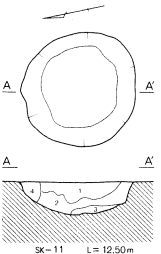
SK-8-9 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色
4. 暗褐色
5. 暗褐色



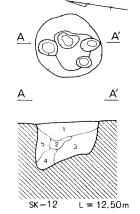
SK-10 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色
4. 暗褐色



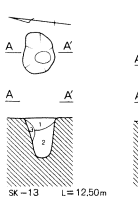
SK-11 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色
4. 暗褐色



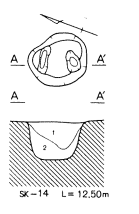
SK-12 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色
4. 暗褐色
5. 暗褐色



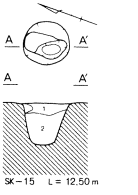
SK-13 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色



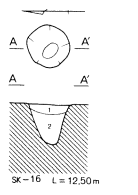
SK-14 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色



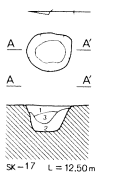
SK-15 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色



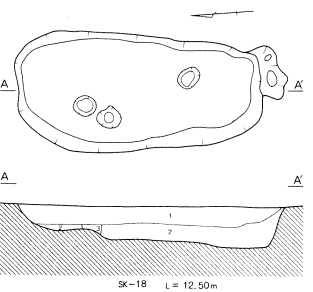
SK-16 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色



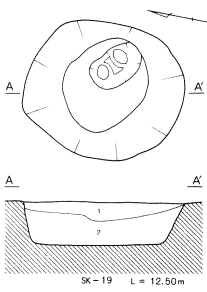
SK-17 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色



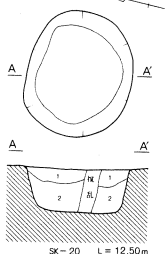
SK-18 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色



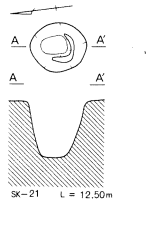
SK-19 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色



SK-20 L=12.50m

1. 暗褐色
2. 暗褐色

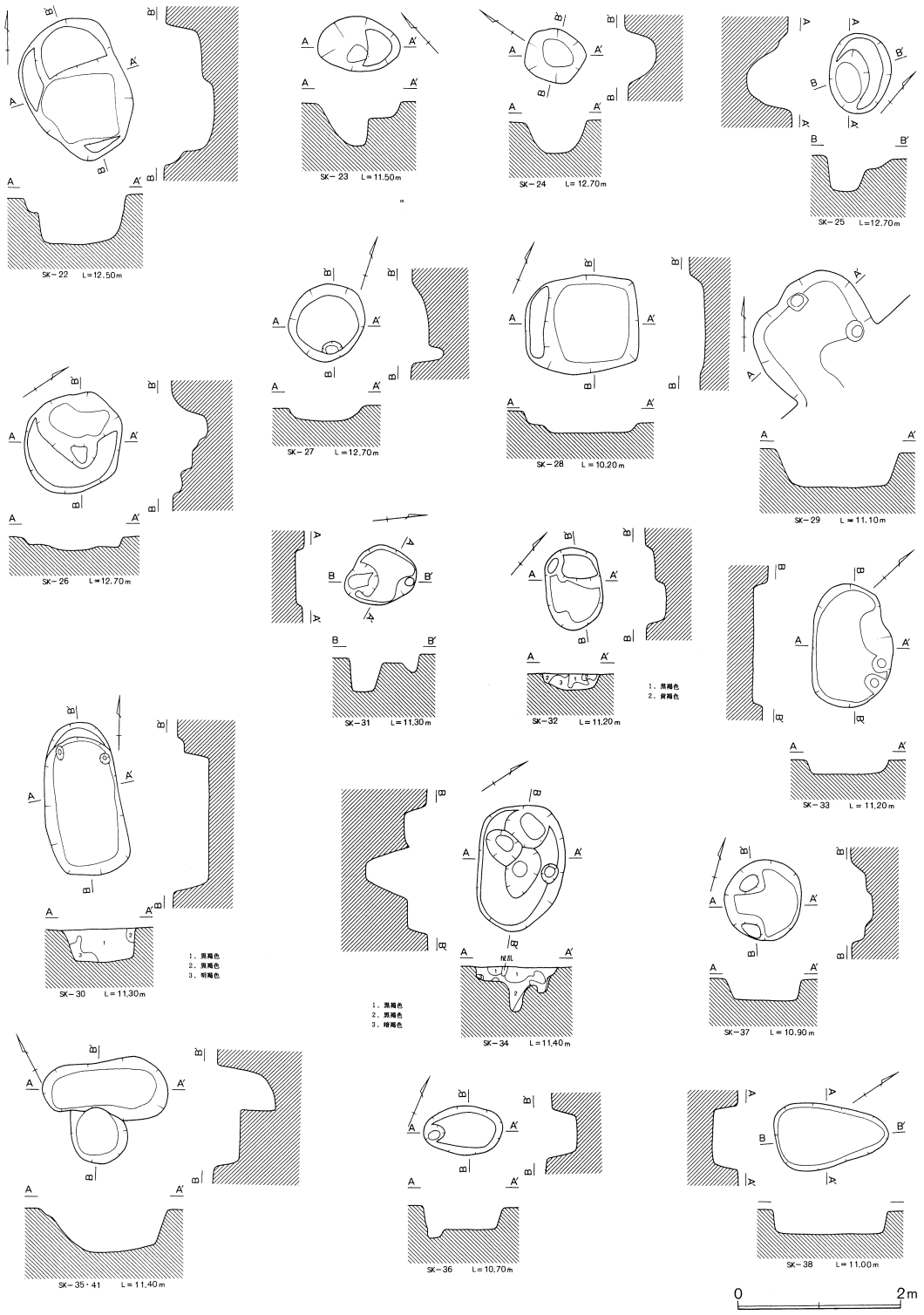


SK-21 L=12.50m

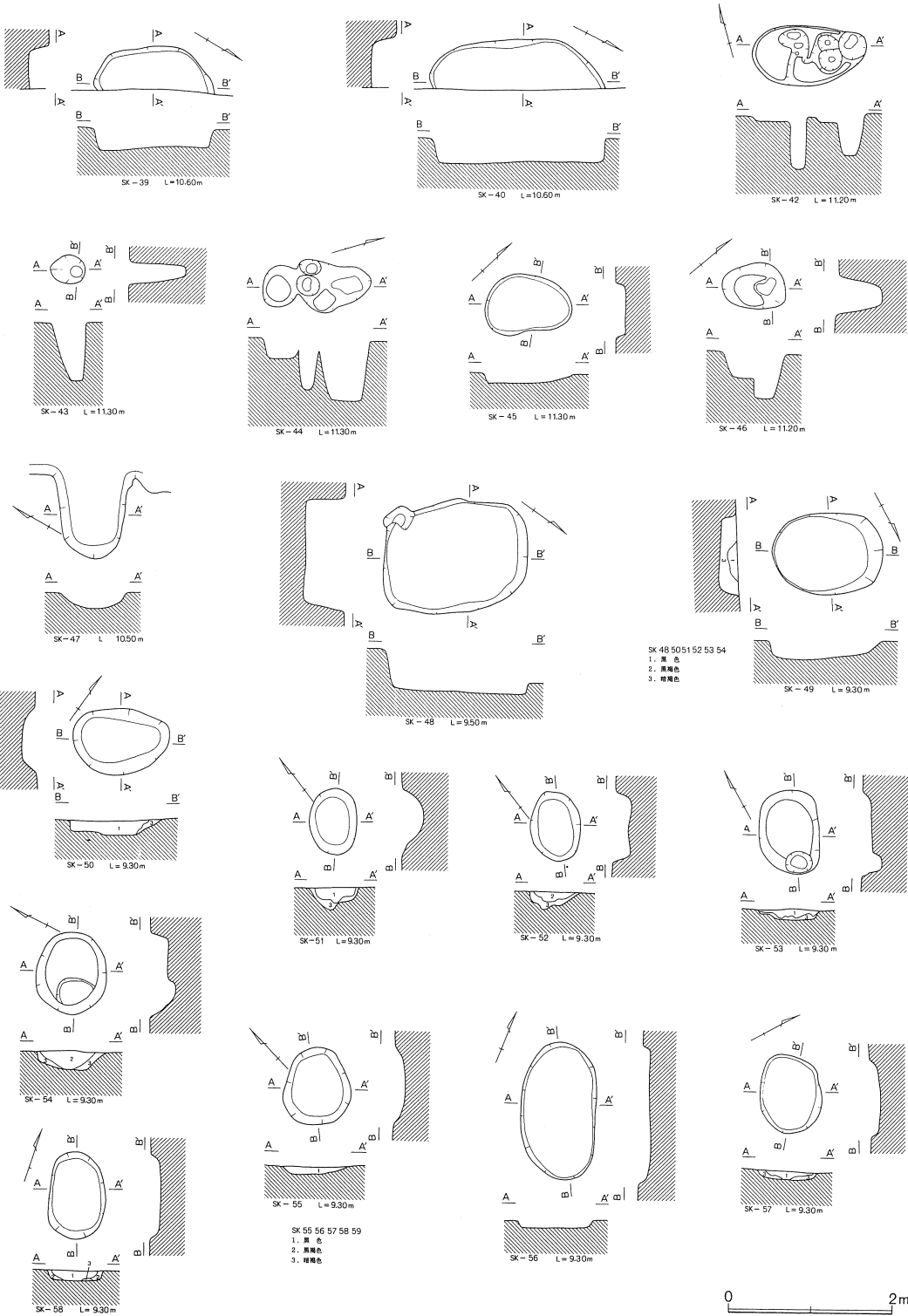
1. 暗褐色
2. 暗褐色
3. 暗褐色



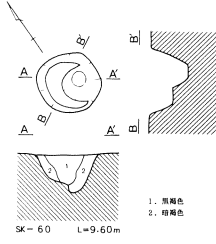
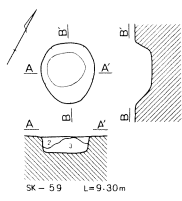
第190図 土坑(1)



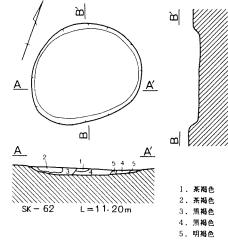
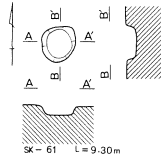
第191图 土坑(2)



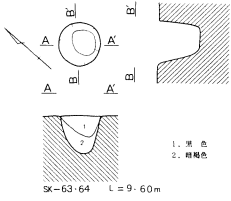
第192图 土坑(3)



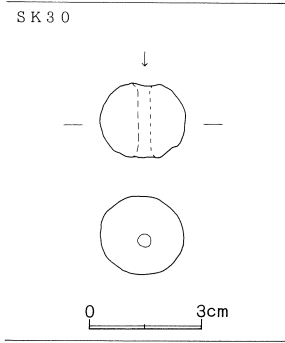
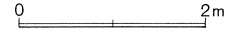
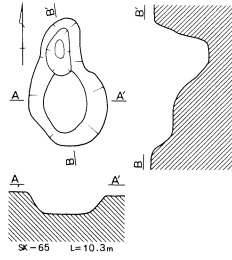
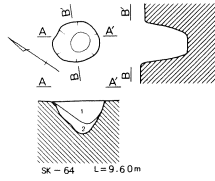
1. 黑褐色
2. 暗褐色



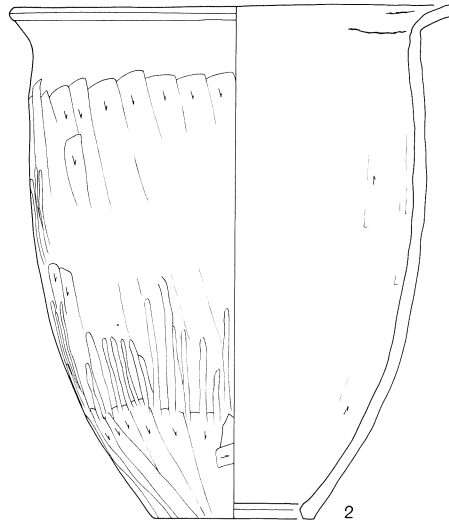
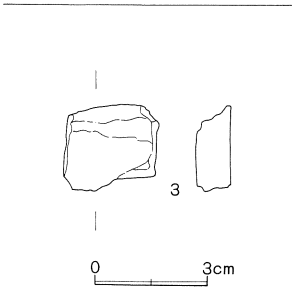
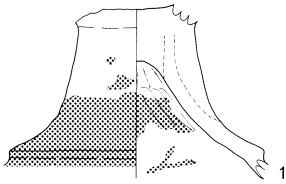
1. 黑褐色
2. 深褐色
3. 暗褐色
4. 浅褐色
5. 明褐色



1. 黑褐色
2. 暗褐色



SK 48



第193图 土坑(4)·出土遗物

土坑計測表(1)

番号	形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	長軸方向	旧番号	備考
1	楕円形	130	94	12	N-75°-E	1	昭和55年度調査
2	長方形	155	95	22	N-70°-W	2	〃
3	円形	68	—	50	N-0°-E	3	〃 土師器片
4	楕円形	90	61	57	N-78°-W	4	〃 土師器片
5	円形	135	—	21	N-86°-E	5	〃
6	円形	155	—	60	N-55°-W	6	〃
7	不整形	63	46	23	N-56°-W	7	〃
8	円形	40	—	40	N-70°-E	8	〃
9	円形	50	—	36	N-70°-E	8	〃
10	不整形	87	70	24	N-53°-W	9	〃
11	円形	120	—	35	N-0°-E	10	〃
12	楕円形	75	65	40	N-25°-E	11	〃
13	不整形	44	32	42	N-82°-E	12	〃
14	楕円形	65	55	41	N-17°-W	13	〃
15	円形	50	—	43	N-17°-W	14	〃
16	円形	43	—	43	N-0°-E	15	〃
17	円形	47	—	28	N-0°-E	16	〃
18	長方形	260	118	36	N-4°-E	17	〃
19	円形	173	—	45	N-12°-W	18	〃
20	円形	134	—	45	N-78°-E	19	〃
21	楕円形	60	54	60	N-8°-E	20	〃
22	楕円形	173	123	61	N-17°-W	21	〃
23	楕円形	96	67	50	N-30°-W	22	〃
24	円形	75	—	40	N-35°-W	23	〃
25	楕円形	98	76	52	N-40°-W	24	〃

土坑計測表(2)

番号	形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	長軸方向	旧番号	備考
26	円形	120	—	14	N-0°-E	25	昭和55年度調査
27	円形	97	—	22	N-17°-W	26	〃
28	方形	140	120	20	N-68°-E	27	〃
29	長方形	150	(100)	45	N-47°-E	1	平成元年度調査 SJ 33と重複
30	長方形	186	90	43	N-5°-W	2	平成元年度調査
31	橢円形	90	70	10	N-10°-W	3	〃 土師器片
32	長方形	100	70	24	N-47°-W	4	〃 土師器片
33	橢円形	150	100	17	N-45°-W	5	〃
34	円形	155	—	24	N-45°-W	6	〃 土師器片
35	円形	70	—	31	N-0°-E	8	〃
36	長方形	96	60	27	N-65°-E	9	〃
37	円形	100	—	25	N-15°-W	10	〃
38	長方形	139	78	30	N-28°-E	11	〃
39	不明	147	(52)	24	N-28°-W	12	〃
40	不明	211	(62)	30	N-29°-W	13	〃 土師器片
41	橢円形	155	76	52	N-60°-W	14	〃 土師器片
42	橢円形	135	72	7	N-71°-W	15	〃 土師器片
43	橢円形	42	30	71	N-57°-E	16	〃 土師器片
44	不整形	130	60	73	N-14°-E	17	〃
45	橢円形	105	65	14	N-41°-E	18	〃
46	橢円形	76	52	54	N-39°-E	19	〃
47	不明	135	77	21	N-118°-W	20	平成元年度調査 SJ 46と重複
48	長方形	177	137	50	N-35°-W	21	平成元年度調査 SJ 67と重複 土師器
49	橢円形	135	100	23	N-59°-W	22	平成元年度調査

土坑計測表(3)

番号	形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	長軸方向	旧番号	備考
50	楕円形	115	80	17	N-57°-E	23	平成元年度調査
51	楕円形	80	57	27	N-41°-E	53	〃
52	楕円形	83	61	20	N-30°-W	54	〃
53	楕円形	101	74	12	N-25°-E	55	〃 縄文土器片
54	楕円形	100	85	22	N-63°-W	56	〃
55	楕円形	92	81	13	N-34°-E	57	〃
56	長方形	166	92	15	N-25°-W	58	〃
57	楕円形	92	75	13	N-54°-W	59	〃
58	楕円形	105	66	12	N-20°-E	60	〃
59	楕円形	64	57	18	N-31°-E	61	〃 土師器片
60	円形	70	—	40	N-55°-W	62	〃
61	円形	37	—	10	N-0°-E	63	〃 土師器片
62	楕円形	120	103	11	N-56°-E	64	〃
63	円形	46	—	43	N-52°-E	65	〃
64	楕円形	50	43	45	N-50°-W	66	〃
65	不整形	133	84	23	N-9°-W	67	〃

第30号土坑出土土錘計測表

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存	註記番号	実測番号
2	—	2.2	0.3	8.00	完形		717

第48号土坑出土遺物

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	高坏	口径 — 底径 — 高さ (9.2) 最大径 —	赤色粒 砂粒	淡褐色	脚部 40	360, 361, 363	566	
2	甌	口径 23.8 底径 10.6 高さ 27.3 最大径 —	赤色粒 片岩 砂粒	淡褐色	脚部 80	746, 750, 751	919	

第48号土坑出土石製模造品計測表

番号	法量 (mm)			重量 (g)	種類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
3	25	22	9	8.00	剥片		915

5 溝 (第194~200図)

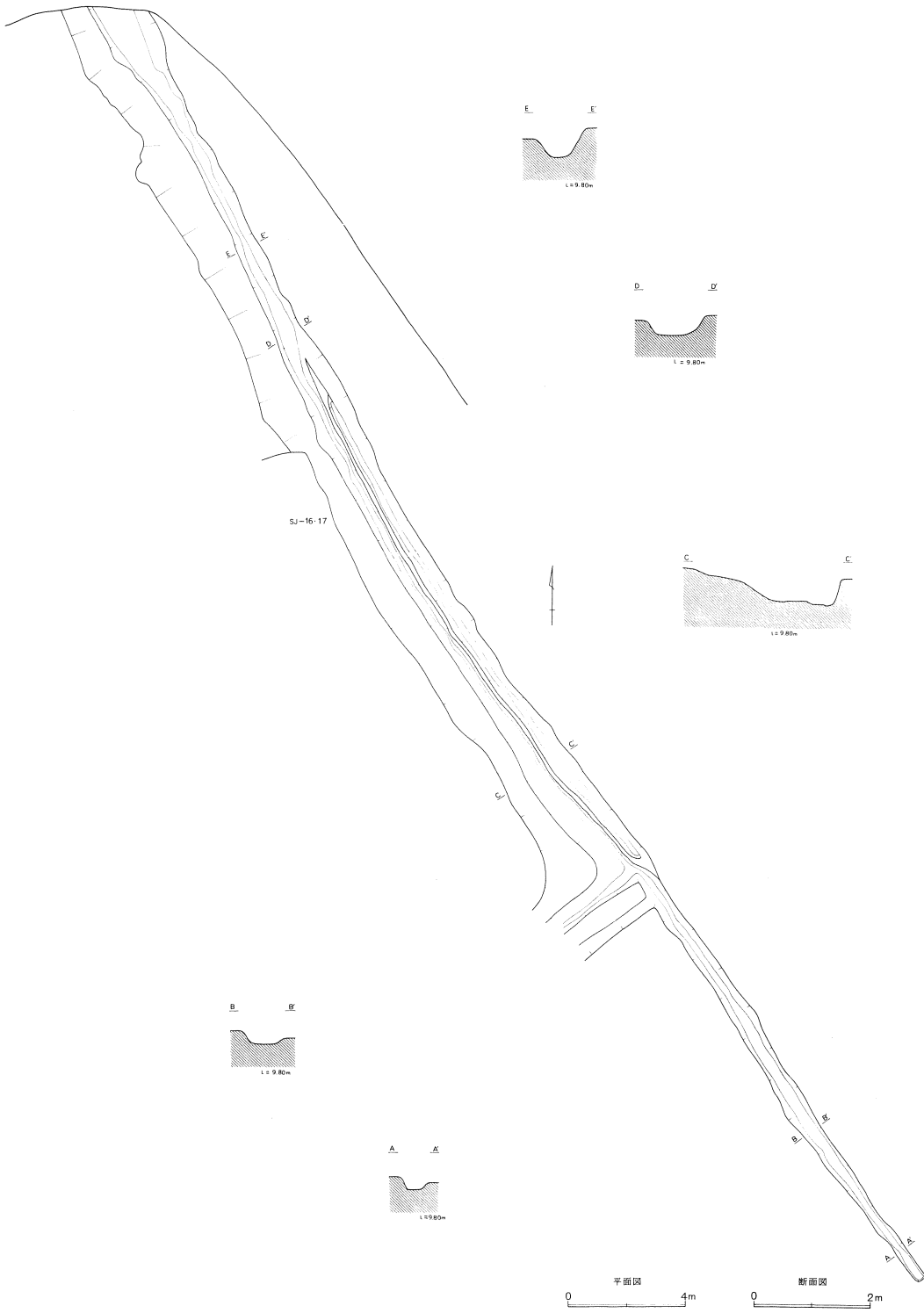
溝は全部で22条検出された。住居跡と重複しているものは全て住居跡より新しい。方向性と配置にも一定の規則性が認められる。時期は近世以降と考えられる。性格については畑などの境溝などが考えられる。出土遺物は縄紋土器、土師器、近世陶磁器など多時期にわたっているが前二者は遺構からの混入である。遺物数は非常に少なく図示できるものはほとんどなかった。

溝出土石製模造品計測表

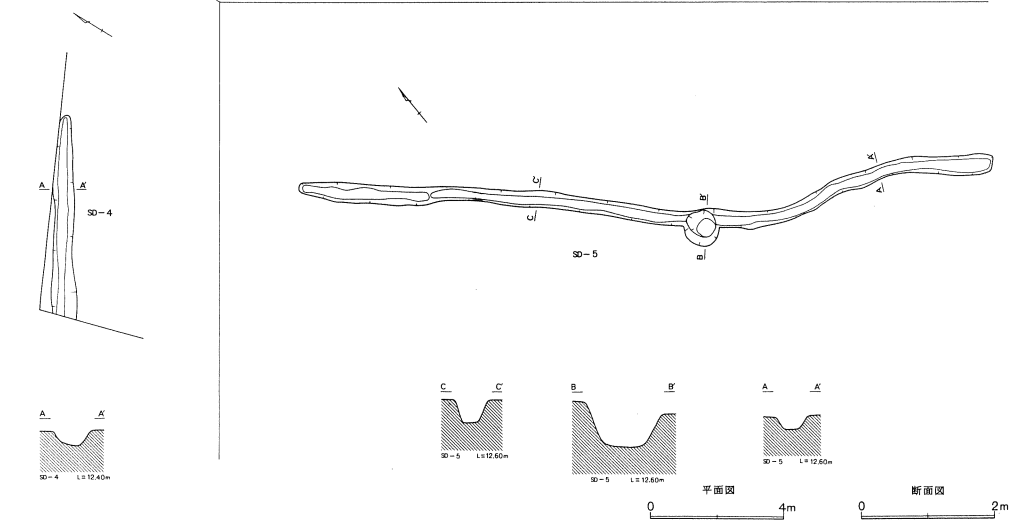
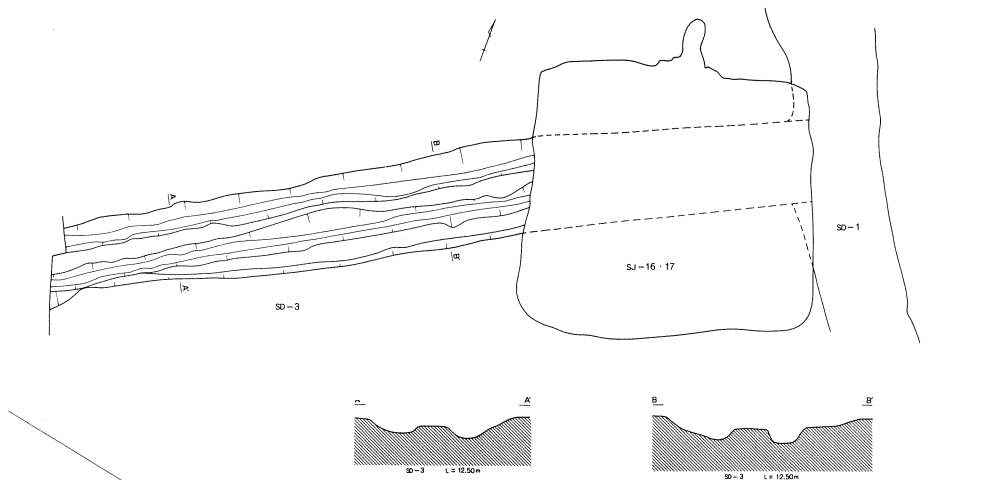
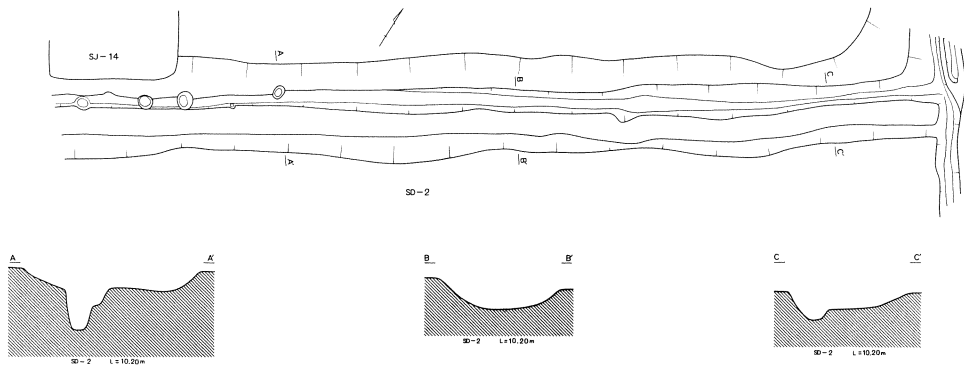
番号	法量 (mm)			重量 (g)	種類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
1	54	27	4	11.46	剣形	SD 5	777
2	32	22	4	4.09	剣形	SD 7	778
3	31	15	6	4.34	剥片	SD 7	916

6 グリッド出土遺物 (第202~204図)

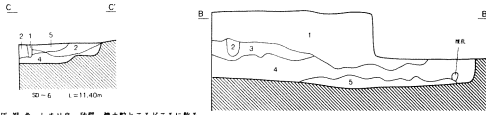
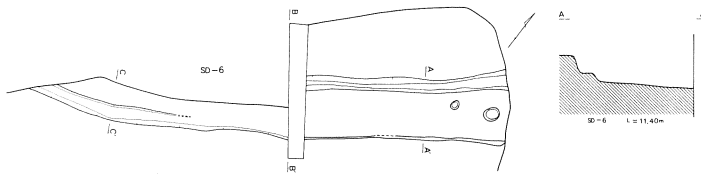
羽口 (13~15) 13, 14は先端部の破片である。外面は筥状の工具で削っている。孔は基部から先端に向かって細くなる。先端はかなり溶解してガラス化している。13は現存長6.4cm、厚さ1.1cm、先端部分の直径は3cmほどと思われる。14は現存長6.8cm、厚さ1cm、先端部分の直径は3.6cmほど



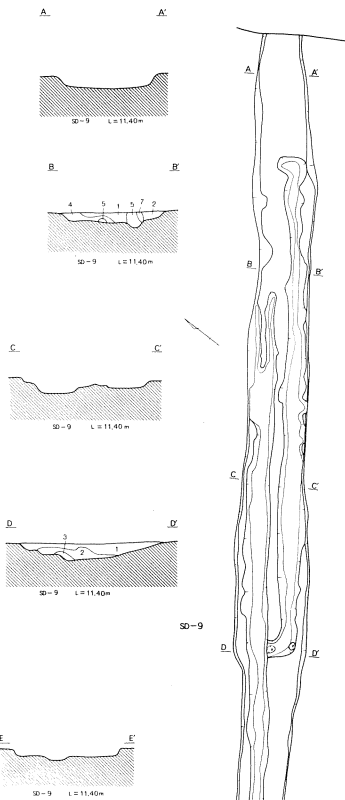
第194図 溝(1)



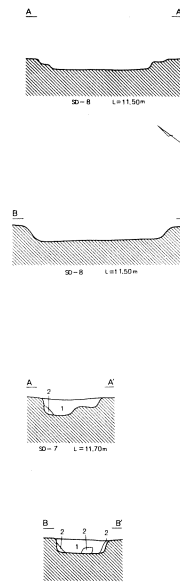
第195图 溝(2)



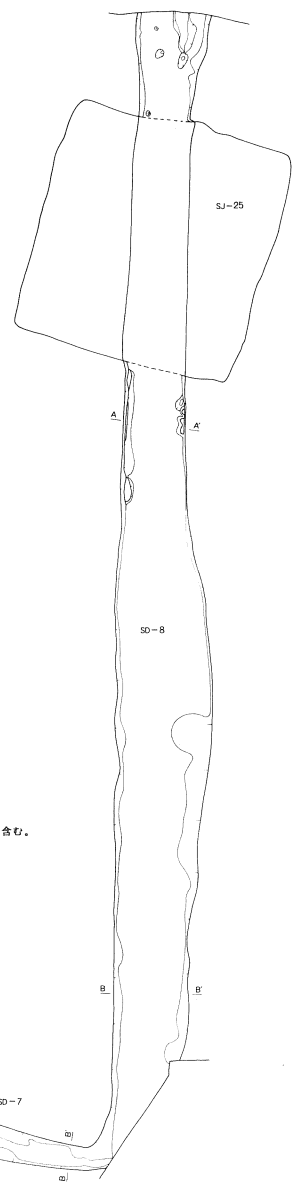
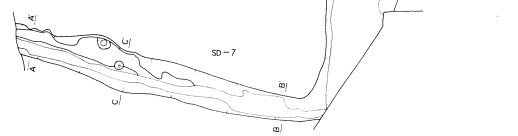
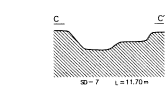
1. 灰褐色 しまり目、砂質。粘土粒とコウジゴロに散る。
2. 黒褐色 しまりや中粒、未炭の黄土（腐食土）。
3. 黒褐色 しまり目、ロームブロック残骸に少量散る。
4. 暗褐色 しまり目、やや粘質。水により黒褐色に着色。
5. ローム
6. 黒褐色 しまりなし、ロームブロック残骸に散、粘土粒少量散入。



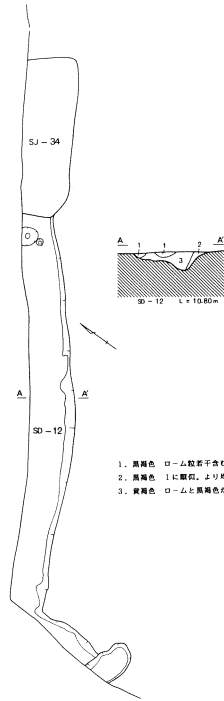
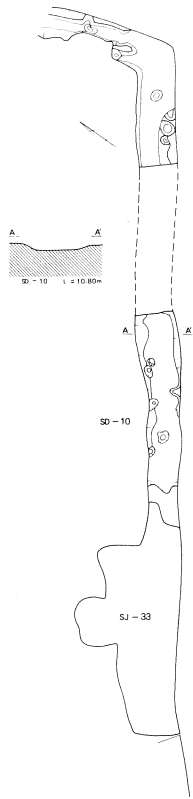
1. 黒褐色 部分的にローム粒・ブロック散在、白色土粒多く含む。
2. 黒褐色 1層断続、白色土粒なし、ローム粒ブロック状に散在。
3. ローム粒
4. 黒褐色 腐食少量あり。
5. 黒褐色 全体にローム粒（3-4mm）が少量散入。
6. 黒褐色 下部にロームが散在、炭化物若干あり。
7. 黒褐色 ローム粒。



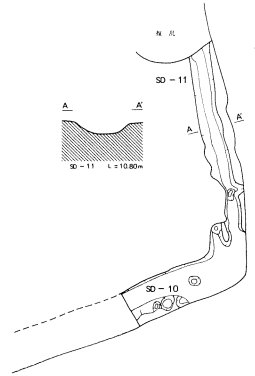
1. 黒褐色 しまり弱。ローム粒をしみ状に含む。
2. ローム崩土。



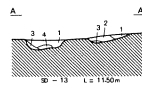
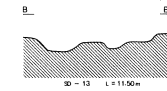
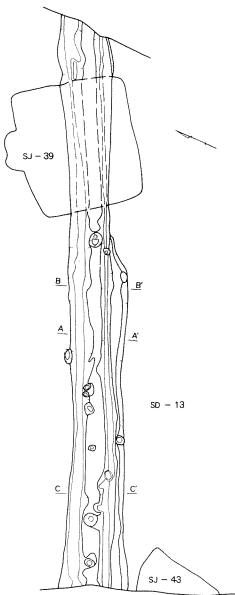
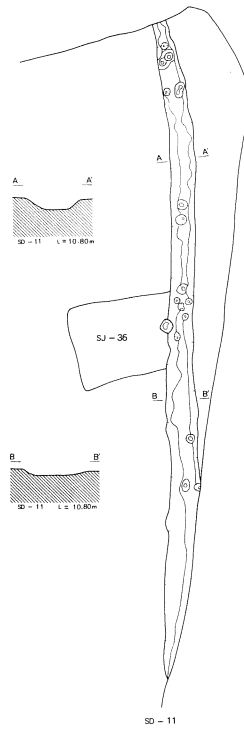
第196図 溝(3)



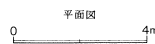
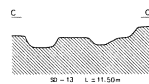
1. 黒褐色 ローム状卵石含む。
2. 黒褐色 1に類似。より均質。
3. 黄褐色 ロームと黒褐色が混状に混入。



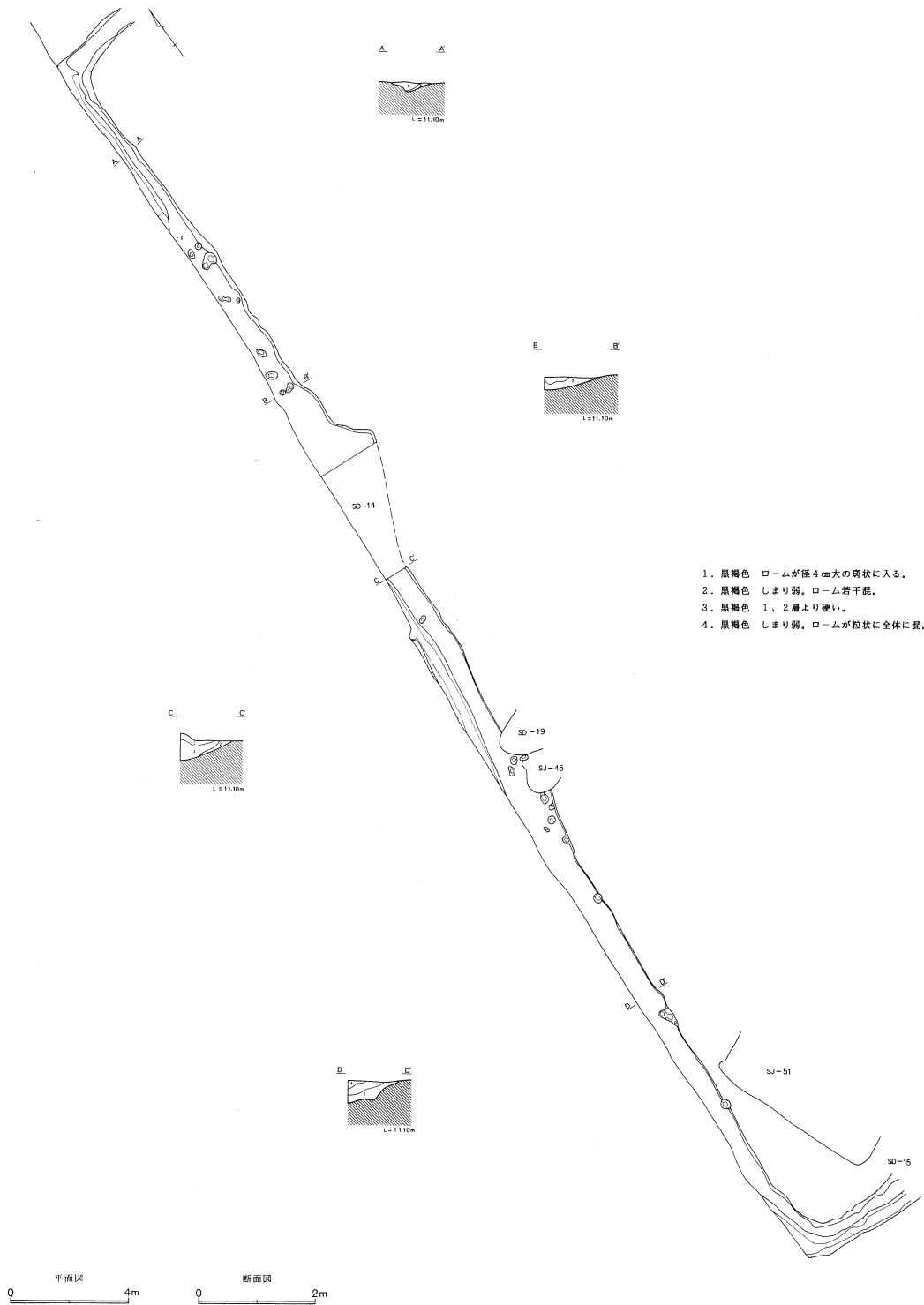
道路



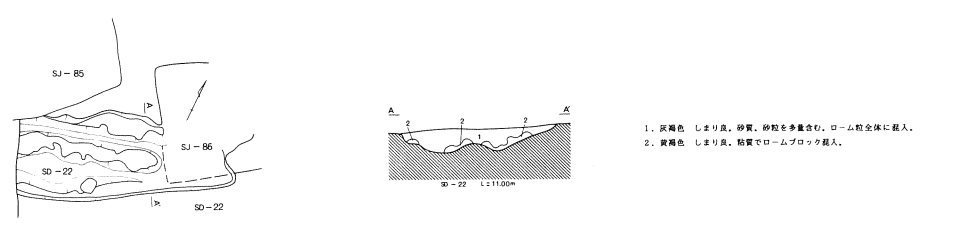
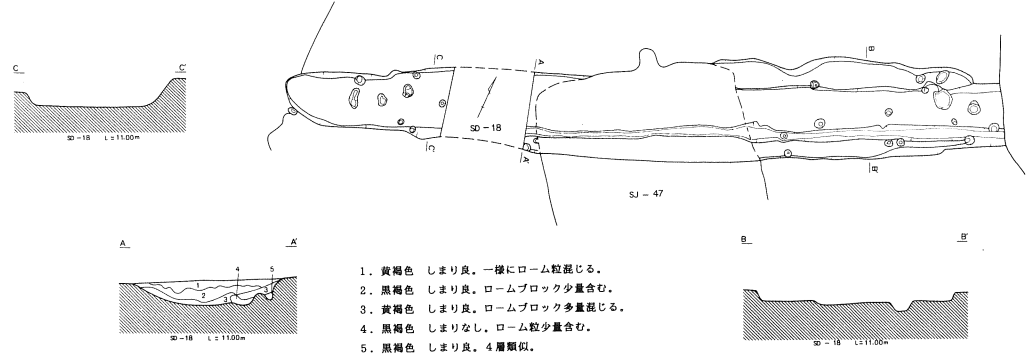
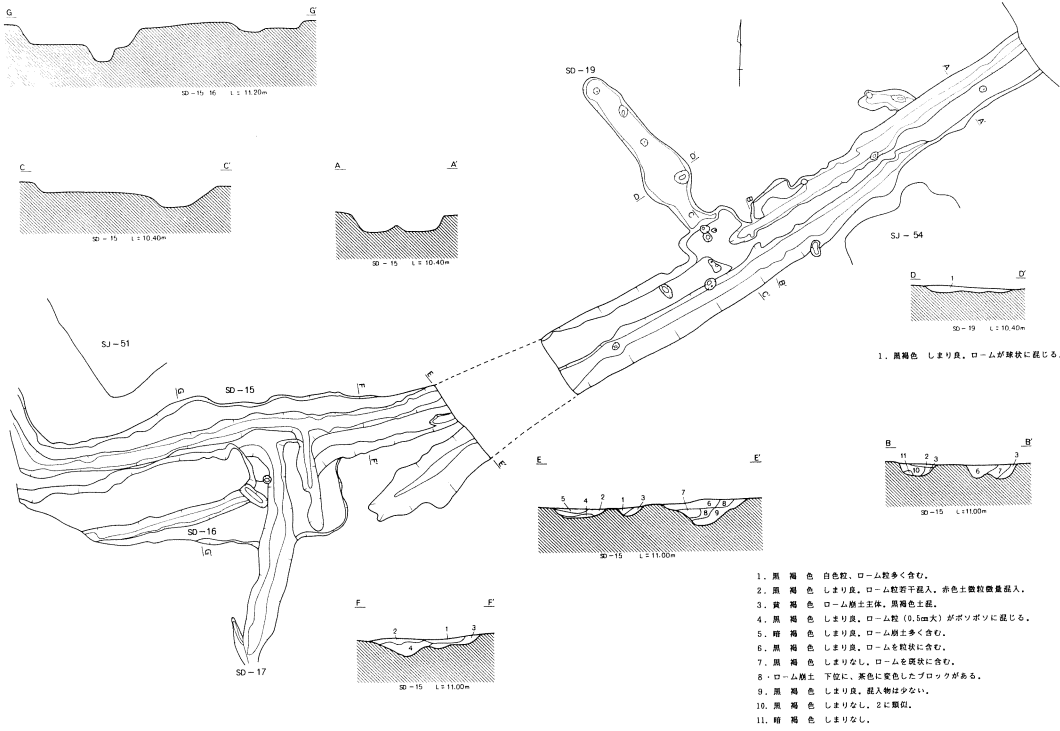
1. 黒褐色 しまりなし。ローム状、炭化粒含む。
2. 暗褐色 ローム、混状に混入。
3. 黒褐色 混入物少ない。
4. ローム質土 しまりなし。



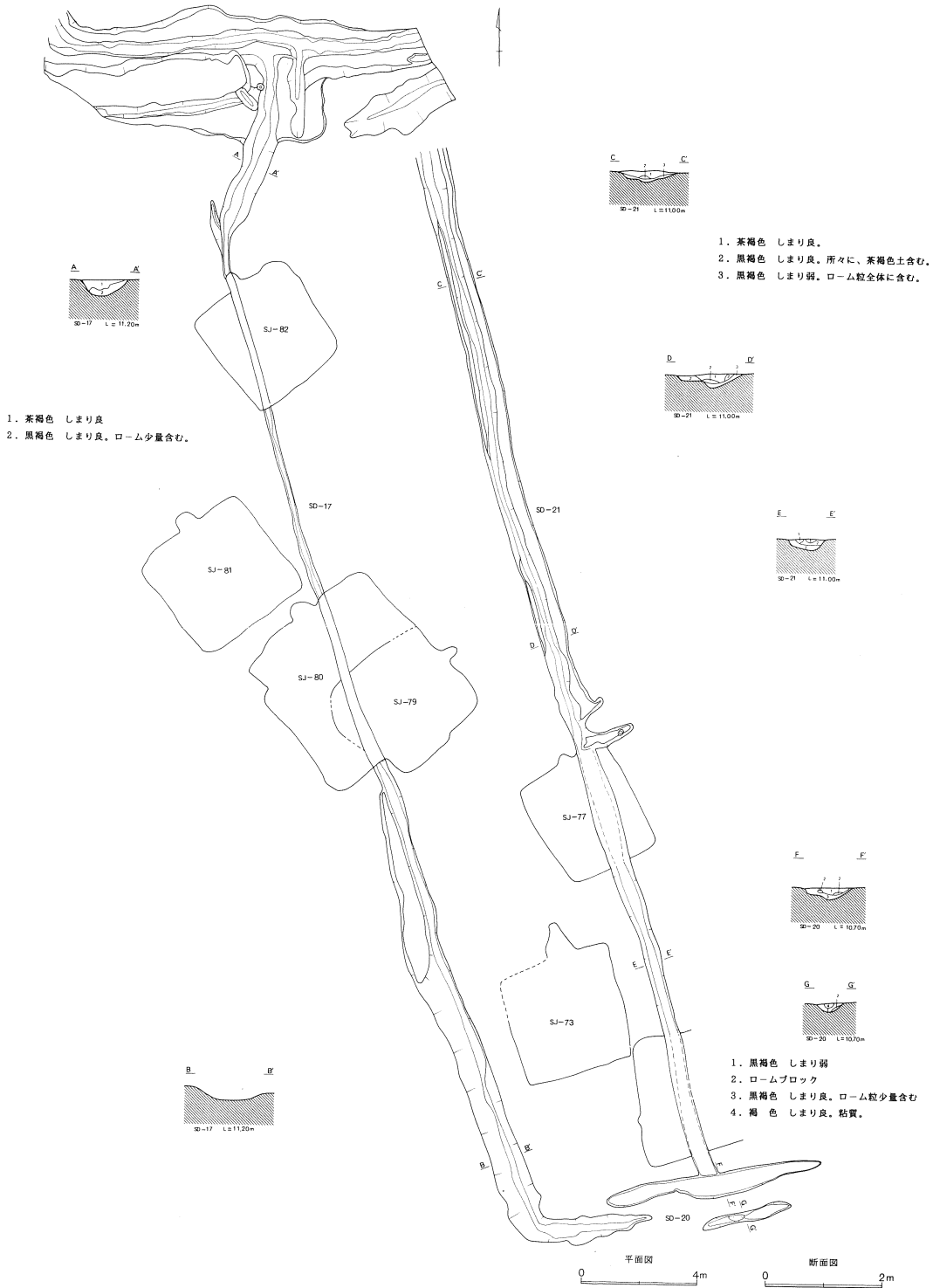
第197図 溝(4)



第198図 溝(5)



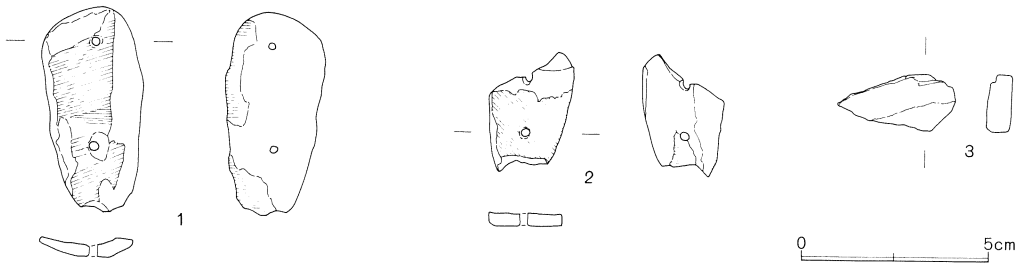
第199図 溝(6)



第200図 溝(7)

溝計測表

番号	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	方 向	重複関係	旧番号	備 考
1	47.4	2.4	30	N-28°-W	SJ 16, 17	1	昭和58年度調査
2	26.3	2.6	32	N-53°-W	SJ 14	2	〃
3	22.8	2.8	36	N-61°-E	SJ 16, 17	3	〃
4	6.0	0.6	40	N-60°-E		4	〃
5	20.8	0.5	30	N-47°-W		5	〃
6	14.5	1.8	14	N-53°-E	SJ 27	1	平成元年度調査
7	9.6	1.2	25	N-22°-W		2	〃
8	21.9	2.2	22	N-55°-E	SJ 25	3	〃
9	29.2	1.9	16	N-54°-E		4	〃
10	13.6	1.2	38	N-52°-E	SJ 33	5	〃
11	17.0	0.9	34	N-14°-W	SJ 36	6	〃
12	11.8	1.3	22	N-55°-E	SJ 34	7	〃
13	17.0	1.8	17	N-70°-E	SJ 39	8	〃
14	48.0	0.6	10	N-0°-E	SJ 45	9	〃
15	33.5	1.3	19	N-78°-E		10	〃
16	20.0	1.2		N-65°-E		11	〃
17	40.0	1.1	14	N-15°-W	SJ 79, 80, 82, 84	12	〃
18	21.4	2.9	18	N-73°-E	SJ 45, 47	14	〃
19	5.4	1.5	8	N-32°-W		15	〃
20	7.5	0.8	20	N-78°-E		17	〃
21	35.8	1.0	10	N-30°-W	SJ 62, 77	18	〃
22	6.6	2.5	40	N-57°-E	SJ 86, 91	19	〃



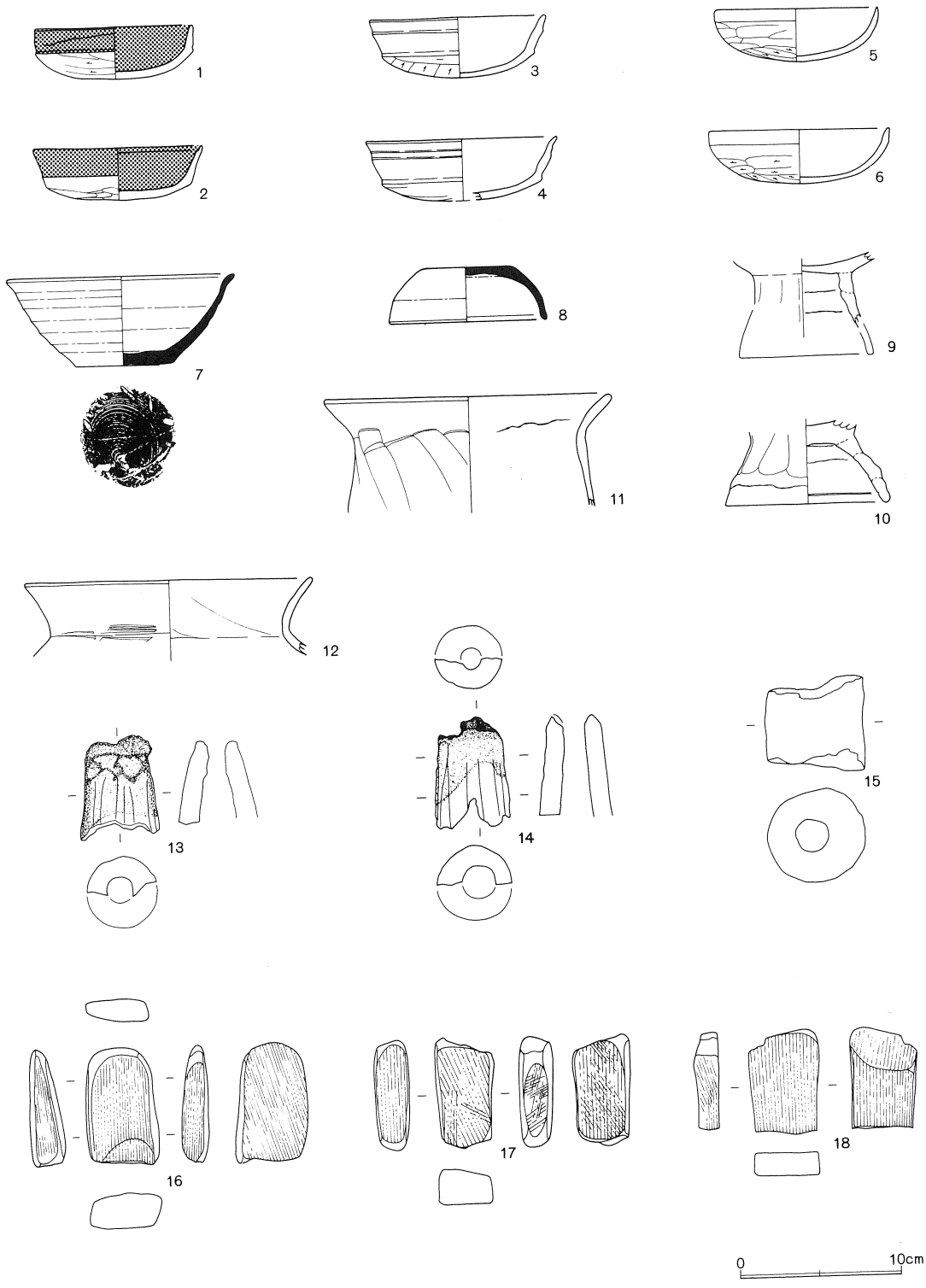
第201図 溝出土遺物

と思われる。15は両端を欠失している。火熱の影響はみられない。孔は中心からずれている。現存長6cm、直径6cm、孔径2cmほどである。

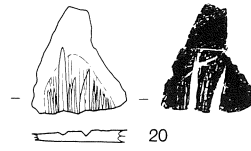
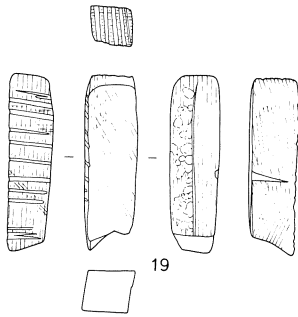
砥石 (16~20) 16~18は断面が板状になるものである。いずれも折損しているが4面ともよく研磨されている。19は断面が方形で角柱状になるものである。一端を欠失する。一側面及び端面には石材の分割痕が残る。4面及び端面も研磨している。20は土師器甕の破片を転用したものである。断面三角形の鋭い研磨溝が残る。

グリッド出土遺物 (1)

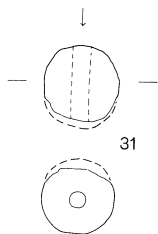
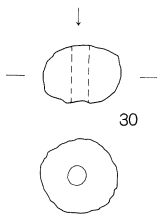
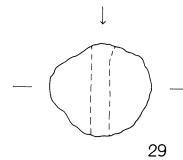
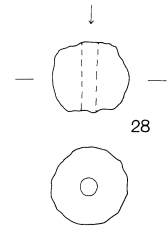
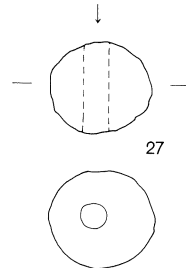
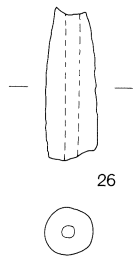
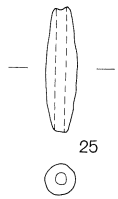
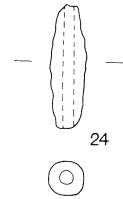
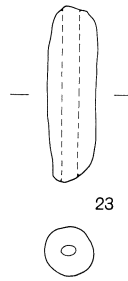
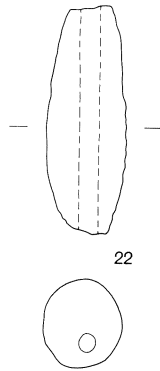
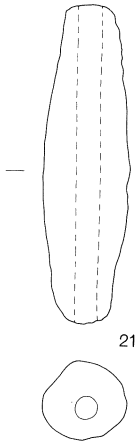
番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存 %	註記 No.	実測No.	備考
1	坏	口径 (9.8) 底径 — 高さ 3.2 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい橙	40	E-(1)-8、3、7	539	
2	ク	口径 (10.5) 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	礫 砂粒	にぶい赤褐	20		572	
3	ク	口径 10.9 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	礫 砂粒	にぶい褐	90	E-(4)-5、37	540	
4	ク	口径 12.0 底径 — 高さ 3.8 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	明赤褐	20	3934	340	
5	ク	口径 (10.2) 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい橙	70	E-(0)-4、60	542	



第202図 グリッド出土遺物(1)

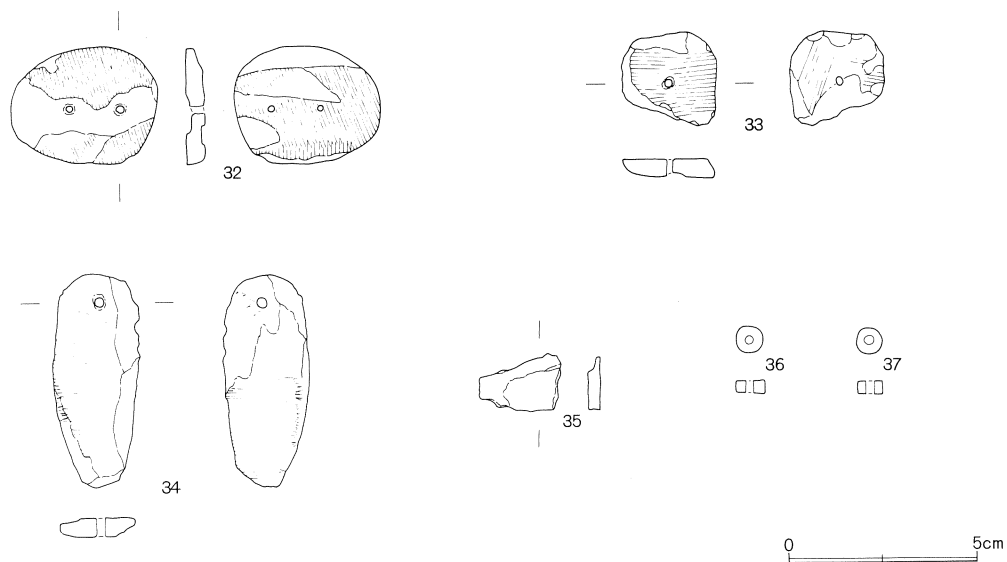


0 10cm



0 5cm

第203図 グリッド出土遺物(2)



第204図 グリッド出土遺物(3)

グリッド出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ (cm)	胎土	色調	残存%	註記 No.	実測No.	備考
6	坏	口径 (11.3) 底径 — 高さ 3.3 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい褐	40	C-5-1, 10	541	
7	〃	口径 (14.2) 底径 6.1 高さ 5.5 最大径 —	黒色粒 礫 砂粒	灰白	40	E-0-4, 18	543	
8	蓋	口径 5.5 天井径 9.7 高さ 3.3 最大径 —	白色粒 黒色粒 砂粒	黄灰	90		538	分析No.7
9	台付甕	口径 — 底径 — 高さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	明赤褐	脚部 20		569	
10	〃	口径 — 底径 10.1 高さ — 最大径 —	白色粒 礫 角閃石 砂粒	にぶい褐	脚部 90		568	

グリッド出土遺物 (3)

番号	器種	大きさ (cm)	胎 土	色 調	残存 %	註 記 No.	実測No.	備 考
11	甕	口 径 (17.8) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	礫 角閃石 砂粒	橙褐	口縁 20		567	
12	ク	口 径 (18.0) 底 径 — 高 さ — 最大径 —	赤色粒 礫 砂粒	にぶい赤褐	口縁 40		570	

グリッド等出土土錘計測表

番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	残存	註記番号	実測番号
21	8.5	2.3	0.6	33.93	完形	D-(-2)4-193	718
22	(6.1)	2.1	0.5	25.84	少欠	E-(-1)4-16	719
23	(4.7)	1.3	0.4	6.79	2/3	D-(0)-6-9	728
24	3.4	0.9	0.3	1.59	完形	D-(-2)-4-12	726
25	3.3	0.8	0.2	1.43	完形	D-(2)-4-57	727
26	(4.1)	1.3	0.3	6.49	2/3	表採	725
27	—	2.7	0.6	15.47	完形	D-(-2)-4-347	720
28	—	2.0	0.4	6.88	完形	D-(-2)-8-25	721
29	—	2.7	0.5	13.23	少欠	F-(-3)-3-6	724
30	—	2.0	0.5	4.65	完形	D-(-2)-4-151	723
31	—	2.0	0.4	4.26	1/2	V区表採	722

縄文土器 (第205~206図)

縄文土器はグリッド及び各遺構から出土しているが、遺構出土のものは全て混入であるため一括して以下にまとめた。

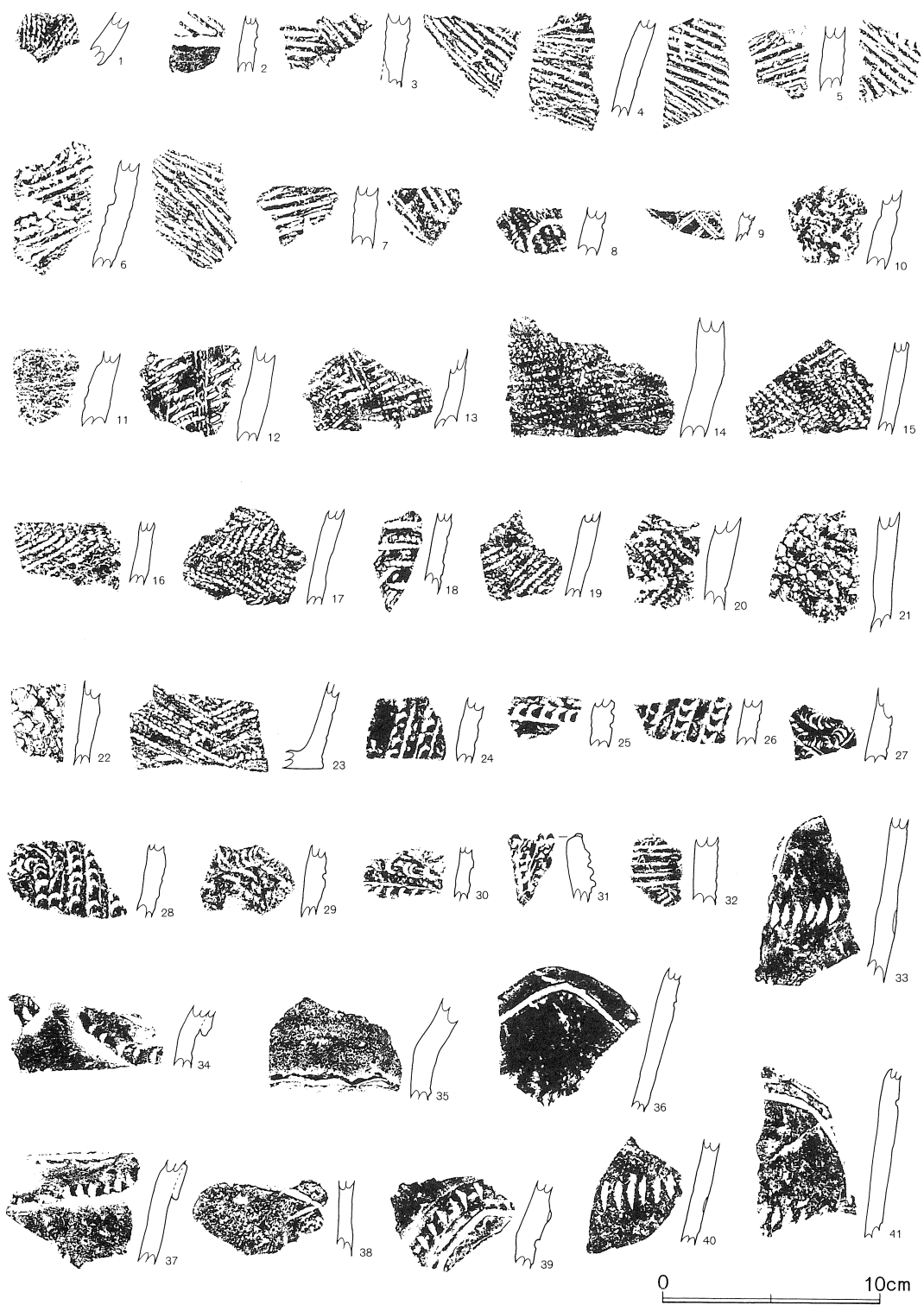
1は早期夏島式、2は野島式と思われる。3~7は条痕文土器である。茅山式に比定されよう。8~11は前期花積下層式で8、9は撚糸側面圧痕文と思われる。10、11は裏面に粗い条痕が施される。12~23は黒浜式である。12~14は貝殻圧痕文、15~23は羽条縄文である。24~30は爪型文が施され諸磯b式に、31、32は諸磯c式に比定される。33~41は中期阿玉台式、42~45は加曽利EⅠ式

グリッド出土石製模造品計測表

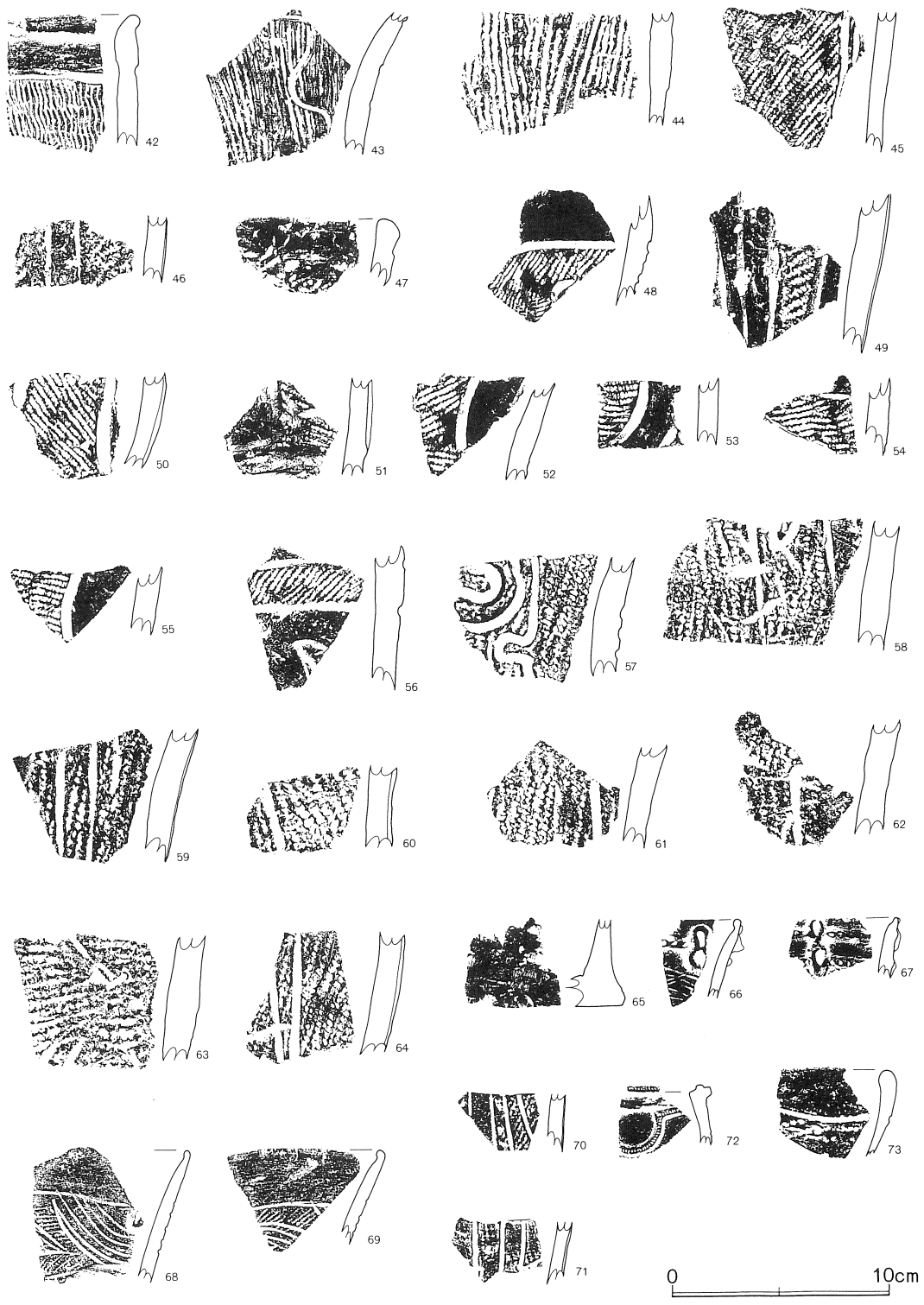
番号	法 量 (mm)			重量 (g)	種 類	註記番号	実測番号
	たて	よこ	厚さ				
32	39	× 31	× 5	10.88	有孔円板	I 区1	779
33	25	× 25	× 5	5.00	剣形	I 区3	780
34	56	× 23	× 5	13.00	剣形		781
35	22	× 16	× 3	1.52	剥片	D-(-2)-8-1	917
36	直径 8 × 孔径 2 × 4			0.31	白玉	I 区4	791
37	直径 7 × 孔径 2 × 3			0.25	白玉	I 区2	792

縄文土器出土位置一覧

No.	出 土 位 置	No.	出 土 位 置	No.	出 土 位 置	No.	出 土 位 置	No.	出 土 位 置
1	SJ 28	16	C-(-1)-8	31	F-(-2)-4	46	SJ 81	61	E-0-1
2	SJ 1 B-2-1	17	SJ 15 C-(-1)-6	32	SJ 1 B-2-5	47	D-0-9	62	D-0-9
3	SJ 1 B-2-2	18	SJ 38 A	33	D-0-2	48	SJ 55	63	SJ 1 B-2-1
4	SJ 1 B-2-2	19	SJ 15 C-(-1)-6	34	D-0-3	49	SJ 16 D-(-3)-8	64	C-0-3
5	SJ 1 B-2-2	20	SJ 1 B-1-1	35	SJ 85	50	SJ 41 B	65	V区
6	SJ 1 B-2-2	21	E-(-3)-3	36	D-(-1)-8	51	E-0-7	66	SJ 80
7	SJ 1 B-2-2	22	F-4-8 3	37	D-(-1)-8	52	SJ 55	67	SJ 92
8	SJ 1 B-2-1	23	SJ 75 上面	38	D-0-2	53	SJ 55 A	68	SJ 80
9	SJ 1 B-2-5	24	SJ 32 B上層	39	D-0-2	54	SJ 55 D	69	SJ 80
10	SJ 1 B-2-1	25	I 区表採	40	D-0-2	55	SJ 55 D	70	SJ 83
11	SJ 30	26	SJ 32 A上層	41	D-0-3	56	SJ 51 D	71	SJ 79, 83
12	SJ 3 C-4-2	27	SJ 31 B上層	42	B区	57	D-0-3	72	B区
13	E-(-2)-5	28	SJ 31 D上層	43	B区	58	D-0-6	73	SJ 46 A
14	B区	29	SJ 1 B-1-7	44	SJ 2 C-2-9	59	SJ 15 D-(-1)-4		
15	SJ 15 C-(-1)-9	30	SJ 32 A中層	45	D-(-1)-7	60	D-0-6		



第205図 縄文土器(1)



第206図 縄文土器(2)

かEⅡ式に、46～51は加曾利EⅢ式に比定される。52～55は加曾利EⅢ式あるいは称名寺式と思われる。56は称名寺式である。57～65は堀之内Ⅰ式、66～71は堀之内Ⅱ式に比定されよう。

石器（第207～208図）

本遺跡から検出された石器は先土器時代及び縄文時代に属するものである。先土器時代に帰属する石器のうち、ナイフ形石器2点、使用痕のある剥片2点、剥片2点が近接して出土した。また、ナイフ形石器2点が住居跡覆土等から採集されている。

縄文時代に属する石器は、有茎尖頭器1点と石鏃4点が住居跡覆土等から採集されている。以下、個別に説明を行う。

ナイフ形石器（第207図1・4）

1 上位縦長剥片を素材に用いている。調整加工は左側縁上半部と右側縁基部付近にBluntingが施されている。石材は透明度の高い良質の黒耀石である。大きさは4.4×1.5×1.5cm、重さ2.39g、先端角は38度である。

2 上位縦長剥片を素材に用いている。調整加工は左側縁下半部と右側縁にBluntingが施されている。石材は赤みをおびた良質の黒耀石である。大きさは4.6×1.7×0.5cm、重さ2.49g、先端角は40度である。

3 横広厚手の剥片を素材を横に用い、打面部及び先端部を折断している。素材剥片の主要剥離面を正面とし、裏面は原石の平坦な面を利用している。調整加工は右側縁に鋸歯状の剥離、左側縁の上半部に細かいBluntingが施されている。石材は透明度の低い粗悪な黒耀石を用いている。大きさは3.1×1.2×0.8cm、重さ2.19g、先端角は66度である。

4 下位縦長剥片を素材に用い、打面は除去されている。調整加工は右側縁に主に施され、左側縁には細かい剥離が若干みられる。珪質頁岩を素材とし、大きさは4.25×2.1×0.8cm、重さ5.0g、先端角は53度である。

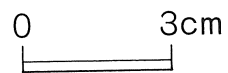
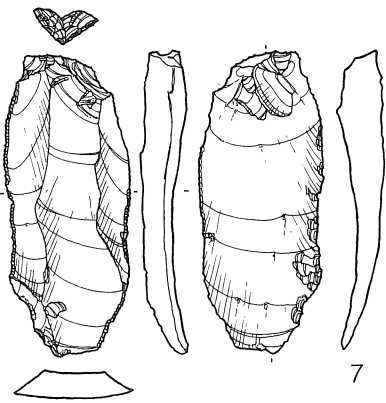
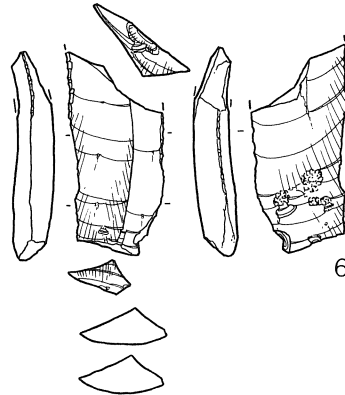
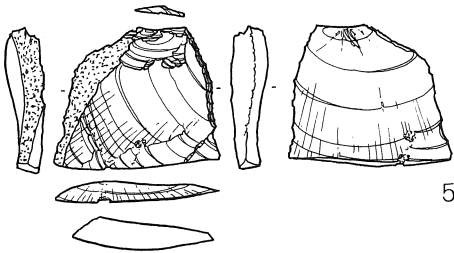
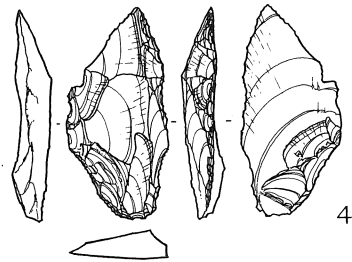
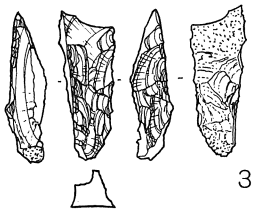
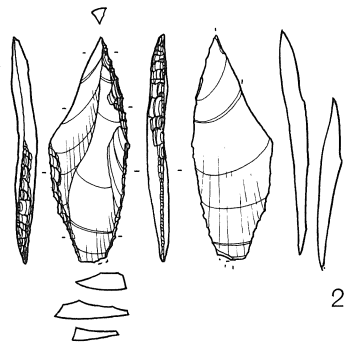
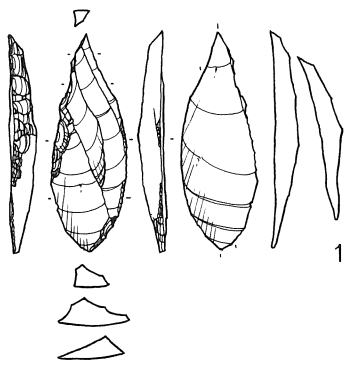
使用痕のある剥片（第207図5・6）

5 縦長剥片の右側縁に細かい剥離痕がみられる。剥片の打面は単剥離打面による。左側一部に自然面を残し、主要剥離面と直角に交差する方向の第一次剥離面が観察できることから、原石の表皮に近い段階での90度打面転位と考えられる。下半分が折断している。大きさは(2.9)×3.35×0.7cm、重さ5.96g。石材は良質の黒耀石である。

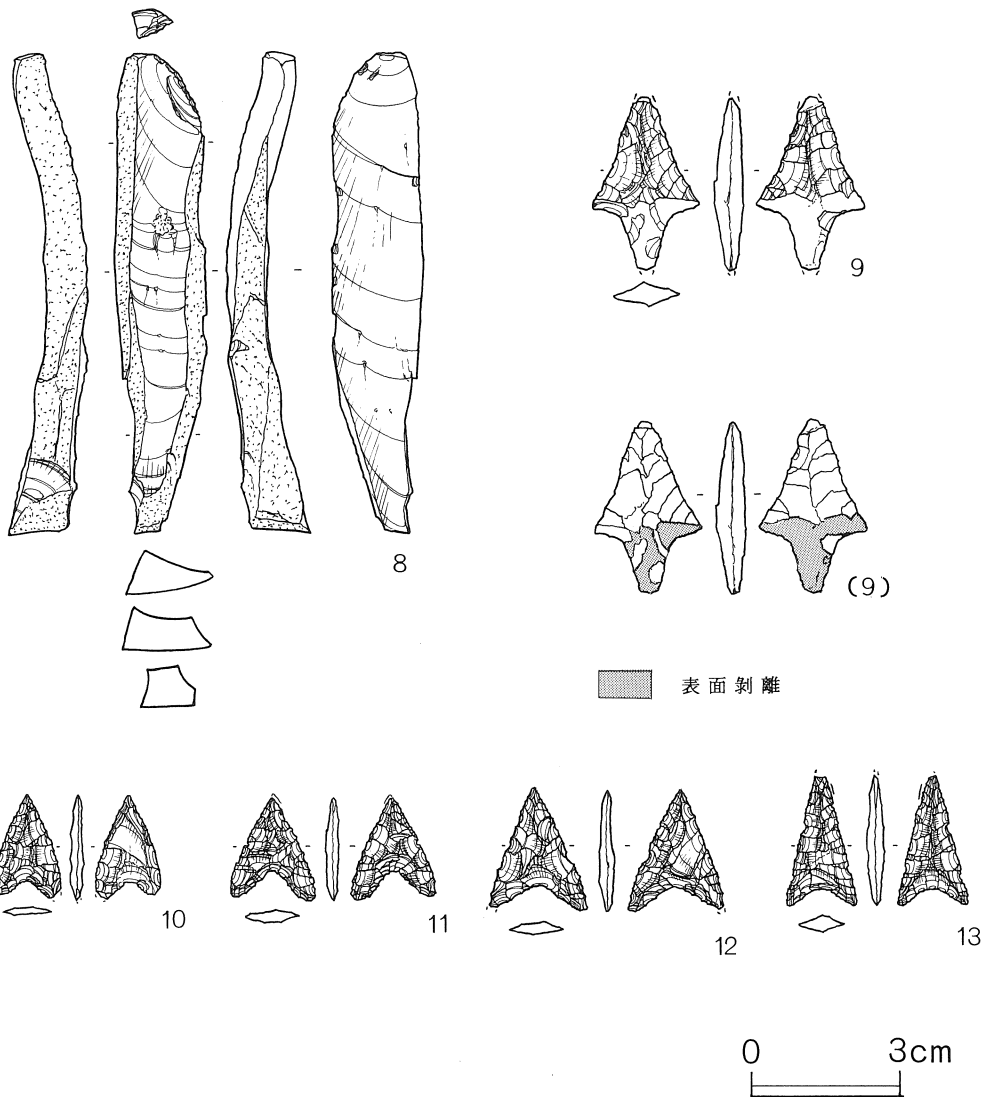
6 打面部を欠損する。縦長剥片の上半部の両側縁に細かい剥離痕がみられる。正面の剥離方向と主要剥離面の打撃方向が一致しており、石刃状剥片が連続して作出されていたことが窺える。大きさは4.2×1.9×0.9cm、重さ4.63g。石材は良質の黒耀石である。

剥片（第207図7・第208図8）

7 石刃状の縦長剥片。打面は複剥離面によって構成され、正面は主要剥離面と同一方向の剥離



第207图 石器(1)



第208図 石器(2)

面がみられる。左側縁の剥離痕は調査の際の新傷痕である。大きさは $6.1 \times 2.5 \times 1.1$ cm、重さ12.18g。石材は良質の黒耀石である。

8 大形の縦長剥片である。正面の面構成は両側面に自然面を残し、中央部に主要剥離面と同一方向の剥離面がみられる。大きさは $9.7 \times 1.9 \times 1.6$ cm、重さ19.98g。石材は良質の黒耀石である。

有茎尖頭器 (第208図9)

9 茎部の風化が進み表面が剥落している為、剥離面の観察を断念した。調整剥離は両面とも、両側縁からの規格的剥離が施され、軸上に稜線が整い、横断面は菱形状を呈している。茎部と鏃身の比は1.3 : 2.2である。大きさは $3.5 \times 2.2 \times 0.6$ cm、重さ2.79g。石材は凝灰岩である。

石鏃 (第208図10~13)

10 裏面中央部に主要剝離面を残し、調整加工は正面が面的剝離、裏面は周縁的剝離によって仕上げられている。右側脚部の先端を欠損する。大きさは $2.1 \times 1.3 \times 0.3$ cm、重さ0.6g。石材はチャートである。

11 両面ともに入念な剝離加工が施され、第一次剝離面は観察できない。先端部に前方方向からの打撃による欠損がみられる。大きさは $2.1 \times 1.7 \times 0.3$ cm、重さ0.5g。石材は黒耀石である。

12 両面ともに入念な剝離加工が施され、第一次剝離面は観察できない。左脚先端を欠損する。大きさは $2.5 \times 2.0 \times 3.5$ cm、重さ1.0g。石材はチャートである。

13 両面ともに入念な剝離加工が施され、第一次剝離面は観察できない。先端部に前方方向からの打撃による欠損がみられる。大きさは $2.6 \times 1.4 \times 0.4$ cm、重さ0.82g。石材はチャートである。

V 自然科学分析

胎土分析

(株) 第四紀 地質研究所 井上 巖

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m}/\text{m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。

測定には日本電子製JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu、Filter : Ni、Voltage : 40Kv、Current : 30mA、ステップ角度 : 0.02° 、計数時間 : 0.5 SEC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行なった観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000、の5段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取り扱い

実験結果は第1胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行なった結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に表れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)を m/m 単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリスト

バーライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行ない、各胎土の位置を数字で表した。

Mo, Mi, Hb, の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) * 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hb, も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1～4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示すとおりである。

2) Mo-Ch, Mi-Hb 菱型ダイアグラム

第2図に示すように菱型ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch)、のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Ch, の2成分が含まれない、c) Mi, Hb, の2成分が含まれない、の3例がある。

菱型ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo / (Mo + Ch) * 100$ と計算し、Mi, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMo, Hb, Ch, の4成分を含み、各辺はMo, Mi, Mo, Ch, のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡によるガラス量によって行なった。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクⅢ：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微少な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱型ダイアグラムの位置分類による組合せによって行なった。同じ組成を持った土器胎土、位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの太文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。例えば、三角ダイアグラムの1と菱型ダイアグラムの1の組合せはA、三角ダイアグラムの2と菱型ダイアグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、Cなどは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

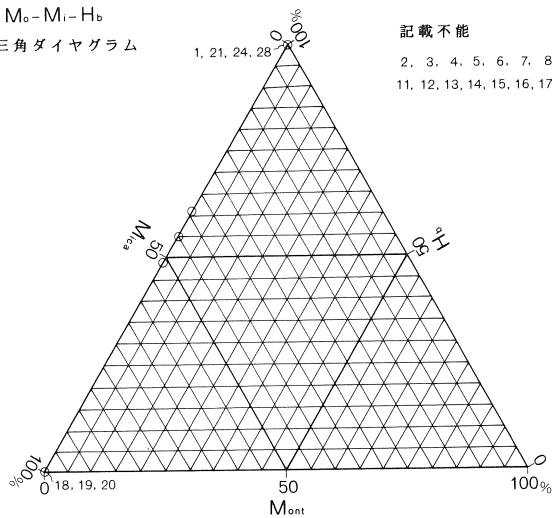
3-1 タイプ分類

荒川附遺跡の土器は昭和63年度分の10個と今回の18個の併せて28個に対して実験を行い比較対比した。

荒川遺跡出土土器は第1表胎土性状表に示すように、第3図三角ダイアグラム、第4図菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Eの5タイプに分類された。

荒川附-1～18は須恵器の杯と蓋であり、荒川附-19～28は須恵器と土師器が混在している。荒川附-19、20、24、25、27、28、の6個は須恵器、他の4個が土師器である。電子顕微鏡による分析では須恵器は全体に粗粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅠあるいはⅠ～Ⅱのものが主体となる。これらには高温焼成の際に焼成するムライト、クリストバーライトが検出され、高温で焼成されたことを裏付けている。土師器は全体に中粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅢと幾分低い。

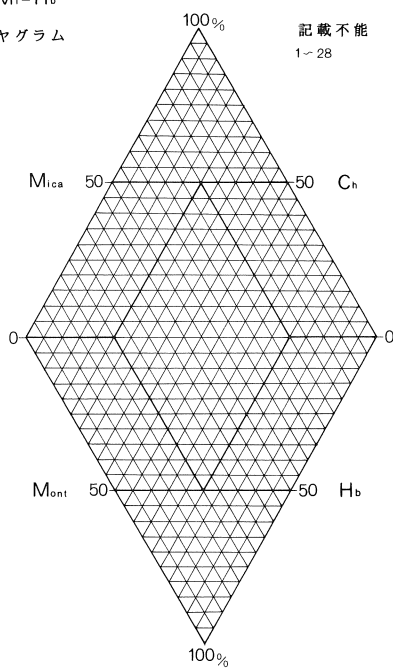
$M_o - M_i - H_b$
 三角ダイヤグラム



記載不能

2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10
 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 25, 27

$M_o - C_h, M_i - H_b$
 菱形ダイヤグラム



記載不能

1-28

第209図 三角・菱形ダイヤグラム

第1表 胎土性状表

試料 No.	タイプ 分類	焼成 ランク	粘土鉱物 および 造岩鉱物														ガラス	備 考		
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Fe)	Py ite	K-fels	Albite	Qt	Pl	Mu	Cr				
荒川附-1	A	I	5	20						216			1378	113	247	721	粗粒	細粒砂, 砂層性粘土		
2	E	I	14	20						233			1743	94	235	488	粗粒	粗粒砂, 砂層性粘土		
3	E	I	14	20						264			1582	94	249	497	発泡	粗粒砂, 砂層性粘土 (均質)		
4	E	I~III	14	20						157			2658	163	134	129	粗粒	細粒砂, 砂層性粘土 (均質)		
5	E	I~II	14	20						123			3383	147	139	115	粗粒	細粒砂, 砂層性粘土 (均質)		
6	E	I~II	14	20						117			3469	143	113	116	粗粒	細粒砂, 砂層性粘土		
7	E	I	14	20						116			2766	133	118	129	発泡	細粒砂, 砂層性粘土 (均質)		
8	E	I~II	14	20						163			1527	102	186	258	粗粒	粗粒砂, 砂層性粘土 (均質)		
9	E	I	14	20						159			1066	115	221	149	発泡	細粒砂, 砂層性粘土 (均質)		
10	E	I~II	14	20						148			1244	108	188	163	粗粒	細粒砂, 砂層性粘土 (均質)		
11	E	III	14	20									3328	183		257	中粒	中粒砂, 砂層性粘土		
12	E	II~III	14	20									3761	108		180	中~粗粒	中粒砂, 砂層性粘土		
13	E	II~III	14	20									2896	98		169	中~粗粒	細粒砂, 砂層性粘土		
14	E	I~II	14	20						78			3475	98	82	177	粗粒	細粒砂, 砂層性粘土		
15	E	III	14	20									3092	224		275	中粒	細粒砂, 砂層性粘土		
16	E	I~II	14	20						84			3605	174	90	115	粗粒	細粒砂, 砂層性粘土		
17	E	I	14	20						136			2235	102	149	159	粗粒	細粒砂, 砂層性粘土		
18	D	III	8	20		60						151	3366	151		211	中粒	細粒砂, 砂層性粘土		
19	D	III	8	20		97						279	3116	446		170				
20	D	III	8	20		76						296	2673	276		144				
21	A	III	5	20			69						2576	2270	553		273			
22	B	III	6	20		111	135						988	1399	333		172			
23	B	III	6	20		137	222							3133	726		126			
24	A	II~III	5	20			64							3589	882		115			
25	E	I	14	20												94	241	175		
26	C	II~III	7	20		113	105							2021	713		91			
27	E	I	14	20										2147	115	150	138			
28	A	III	5	20			63							3701	295		110			

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V
 Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カオリナイト
 My: 紫蘇輝石 Qt: 斜長石 Cr: クリストバーライト Mu: ムライト

Aタイプ…荒川附-1、21、24、28

Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。個体数は4個である。原土の組成を残すものとしては最も多いタイプである。

Bタイプ…荒川附-22、23

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。個体数は2個である。

Cタイプ…荒川附-26

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。個体数は1個である。組成的にはCタイプと同じであるが検出強度が幾分異なるために、位置分類が違っている。

Dタイプ…荒川附-18、19、20

Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。個体数は3個である。

Eタイプ…荒川附-2~17、25、27

Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。個体数は18個に達する。これらは高温で焼成された須恵器で、高焼成によって4成分の鉱物が分解し、ガラス化したために生じた現象である。

以上の結果からすると昭和63年度に分析した土器は原土の組成を持っているものが多く、荒川附1~18は高焼成のために原土の組成が分解によって、残っていない。

3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るとことは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々固有の石英-斜長石比を有しているといえる。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する固有の技術の一端である。

第5図石英-斜長石相関図には荒川附遺跡から出土した土器、荒川附-1~18の28個が記載してある。図からも明らかなように土器はI~VIの6つのグループと“その他”に分類された。荒川附-1~18は高焼成のために斜長石が分解し、斜長石の強度が低いところでグループを作っている。これに対して、荒川附-19~28のうち25と27を除く8個は斜長石の強度が高く、明らかに分離している。

Iグループ…荒川附-1、2、3、8、9、10、25

石英は800~1900、斜長石は50~200の範囲にあり、個体数は7個で集中度はよい。

IIグループ…荒川附-17、27

石英は200~2400、斜長石は100~150の範囲にあり、個体数は2個と少ないが集中度はよい。

IIIグループ…荒川附-4、7、13

石英は2400~3000、斜長石は100~200の範囲にあり、個体数は3個で、集中度は比較的よい。

IVグループ…荒川附-5、6、11、12、14、16、18

石英は3100~4000、斜長石は100~200の範囲にあり、個体数は7個で、集中度はよい。

Vグループ…荒川附-19、20、28

石英は2400~400、斜長石は250~450の範囲にあり、個体数は3個で、分散傾向にある。

VIグループ…荒川附-21、23、26

石英は1800~3200、斜長石は550~800の範囲にあり、個体数は3個で、分散している。

“その他” …荒川附-15、22、24

15はIVグループに近くこのグループにはいるものかも知れない。22は土師器の杯であり、Iグループとは異質である。24は須恵器の甕であるが、石英と斜長石の強度が高く異質であるように思えるが、VIグループにはいるものかもしれない。

次に各グループの特徴を述べる。

須恵器は図からも明らかなようにI~IVの4つのグループに集中している。

Iグループの荒川附-1、2、3は6Cの杯、荒川附-8、9、10は湖西産(?)の蓋で構成され、グループの前半に湖西産、後半に6Cの杯が位置し、両者は分かれるのかも知れない。

IIグループは7Cの杯で構成される。

IIIグループの荒川附-4、7は湖西産、13は南比企産であり、両者が共存する。

IVグループの荒川附-5、6、16は湖西産、荒川附-11、12、14、18は南比企産で構成され両者が混在している。

II~IVの3つのグループでは南比企産と湖西産が共存している状況にあり、これらは南比企産になるのかも知れない。Iグループは明らかに湖西産が集中しており、このグループの湖西産が本来の湖西産かも知れないがはっきりしない。

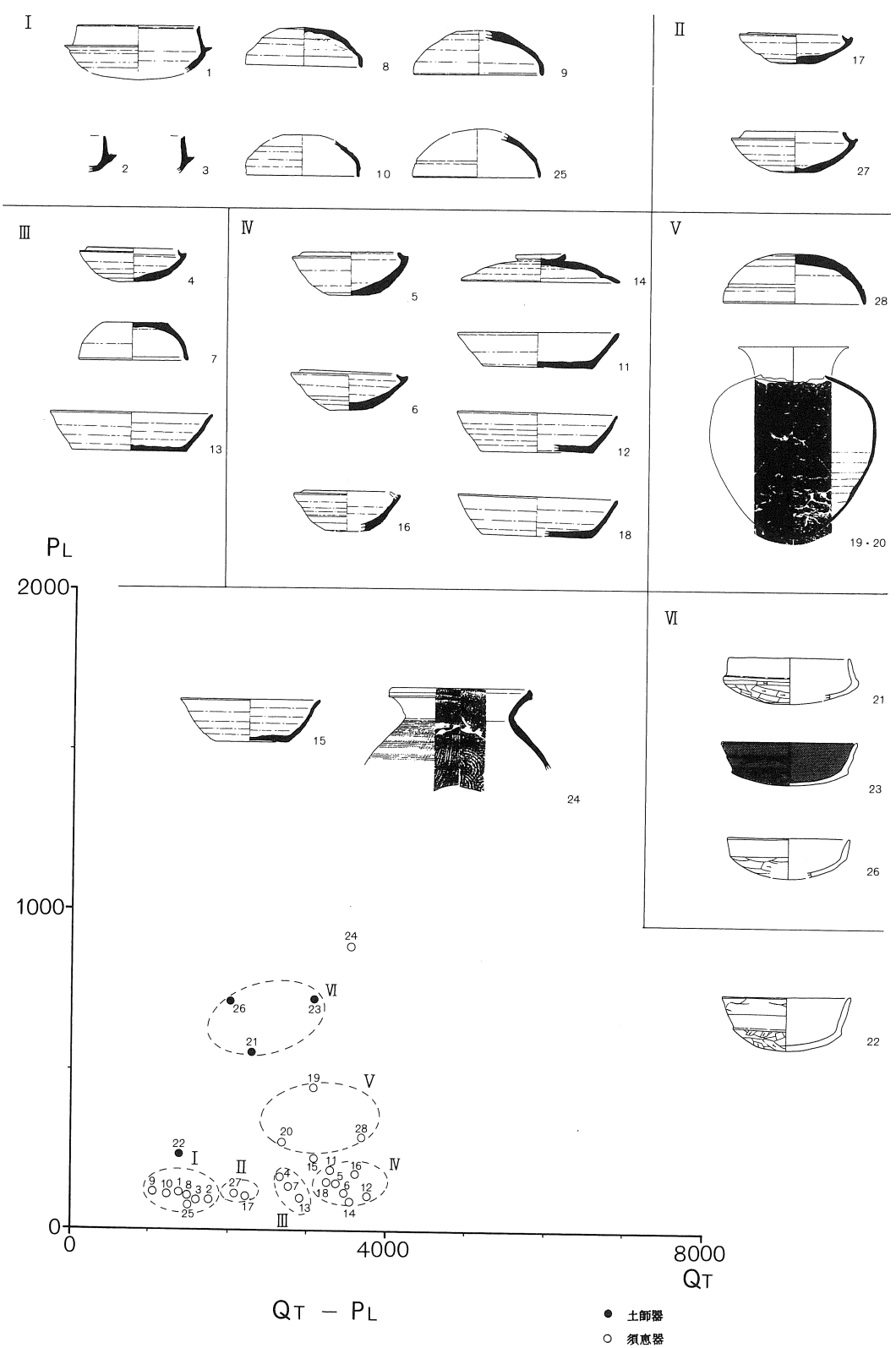
荒川附-19~28の土器は明らかに斜長石の強度が高く、須恵器とは異なることが図からわかる。土師器及び須恵器の甕は焼成ランクが低く本来の組成が残っており、そのため斜長石の強度が高いもので、荒川附-1~18と比較して分散傾向が強い。Vグループは須恵器の甕、VIグループは土師器の杯が集中し、それぞれ器種が異なることがわかる。

4 まとめ

- i) 土器胎土はA～Eの5タイプに分類された。Eタイプは高温で焼成された須恵器が集中するもので、本来の組成が分解し、ガラス化したために生じたタイプである。このグループは荒川附1～18の須恵器が集中する。これに対して、A～Dの4つのタイプは本来の組成に近いものであり、これら4つのタイプのもは荒川附-19～28のもので構成される。これらは焼成ランクの低いもので、Eタイプとは明らかに相違がある。このことは石英と斜長石の相関でも認められ、両者は斜長石の高いグループと低いグループとに明確に分かれている。
- ii) 電子顕微鏡によれば、荒川附-1～18の須恵器は明らかに粗粒のガラスが生成し、焼成ランクがⅠ～Ⅱと高い。しかし、荒川附-19～28は中粒のガラスを主体とし、焼成ランクはⅢと幾分低く、対照的である。
- iii) 石英と斜長石の相関ではⅠグループに湖西産が集中し、このグループに属するものが湖西産の可能性が高いと推察された。Ⅱ～Ⅳグループは湖西産と南比企産が共存し、南比企産が主体となるように見受けられる。Ⅴグループは須恵器の甕、Ⅵグループは土師の杯が集中し、特徴的である。
- “その他”の荒川附-24は石英と斜長石の強度が高く、特徴的である。

胎土分析資料一覧

No.	出土遺構	図版No.	No.	出土遺構	図版No.	No.	出土遺構	図版No.	No.	出土遺構	図版No.	No.	出土遺構	図版No.
1	1号竪穴	183図-3	7	グリッド	202図-8	13	SJ-93	18 図-14	19	SJ-1	13図-29	25	SJ-3	20図-10
2	SJ-46		8	SJ-69	140図-20	14	SJ-81	158図-2	20	SJ-1	13図-29	26	SJ-3	20図-2
3	SJ-75		9	SJ-93	185図-8	15	SJ-40	94図-4	21	SJ-1	10図-3	27	SJ-16	44図-26
4	SJ-83	167図-38	10	SJ-39	91図-2	16	SJ-76	148図-5	22	SJ-1	10図-9	28	SJ-16	44図-25
5	SJ-75	148図-3	11	SJ-85	169図-13	17	SJ-4	23図-3	23	SJ-1	10図-5			
6	SJ-76	148図-4	12	SJ-93	185図-12	18	SJ-93	185図-13	24	SJ-3	20図-11			



第210図 QT-PL相関図

1 実験条件

荒川附遺跡より出土した鉄滓の分析は10個である。これら10個の鉄滓にたいして行った実験は日本電子製エネルギー分散型X線分析装置 (EDS) を使用した。

分析に供した鉄滓の一部の表面を研磨し、試料台に接着し、カーボンコーティングし、分析を行った。

分析は第2・3表化学分析表に示すように、Na, Mg, Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Cuの10元素を基本元素とし、酸化物として分析した。その他の元素は分析の際に検出されたもので、分析器が自動的に登録したものである。

分析はBEIの写真でも明らかなように、 $\times 200$ と $\times 500$ の2つの倍率で行った。1つのサンプルに対して分析は2度行った、それらの結果は第1表に示す通りである。

分析値の計算はスタンダードに基づく Sprint でおこなった。

2 分析結果

鉄滓10個に対する分析結果は第1表化学分析表に示す通りである。これらの分析値に基づいて第1図 $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図、第2図 $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{MgO}$ 図を作成した。

図から明らかなように鉄滓と言われるサンプルは3つのタイプに分かれる。

Iグループは明らかに鉄の純度が高く、90~100%の領域に分布する純度の高い鉄類、IIグループは60~70%の領域に分布する純度の低い鉄類、IIIグループは明らかに鉄滓としては純度の低い鉄類である。これらは断面写真でも明らかなように、Iグループのものは鉄が濃縮し、鉛色を呈する、IIグループのものは黒色の断面の中に鉄の小さな結晶が認められるもの、IIIグループは黒色の多孔質のガラスで構成されている。第1図の各グループと第II図の各グループは同じサンプルで構成されている。次に各グループの特徴について記載する。

Iグループ… 1, 6, 9, 10

これら4個のサンプルは Fe_2O_3 の重量% (Wt%) が90~100%の領域に分布するもので、純度が非常に高いのが特徴である。 SiO_2 は5%以下と低く他の元素も非常に低い値を示しており、これらが不純物の少ない純度の高い鉄であることは明らかである。

IIグループ… 2, 3, 4, 5, 8

これら5個のサンプルは、 Fe_2O_3 の Wt % が60~70%の領域に分布し、 SiO_2 は12~20%の領域に分布する。これらは黒色のガラスの中に鉄の結晶が認められるタイプで、明らかに鉄ガラス的なものである。

Ⅲグループ…7

SiO₂が30%、Fe₂O₃が22%、CaOが24%、この3成分で構成される多孔質の黒色の多孔質ガラスである。

3 まとめ

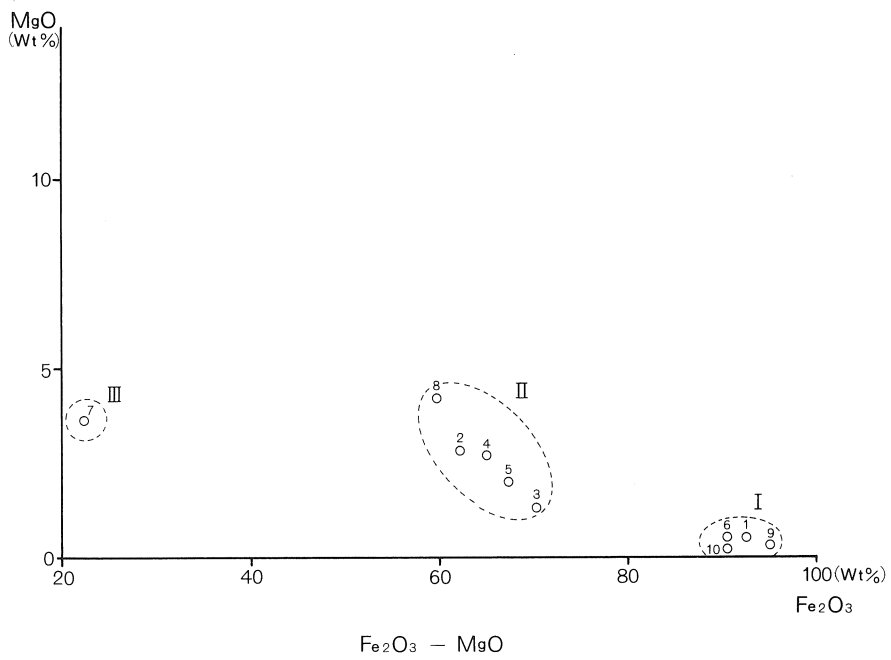
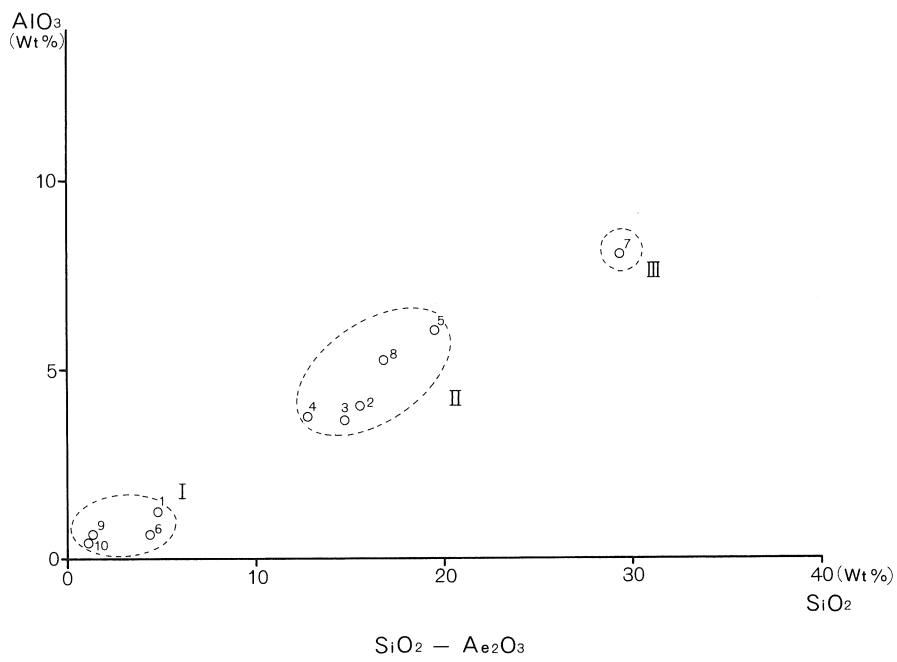
- i) 分析結果に基づいて考察すると、ⅠグループとⅡグループの各々のサンプルはFe₂O₃のWt%が50%以上であり、これらの結果から推察すれば、ⅠとⅡの両グループに属するサンプルは鍛冶滓であろう。特に、Ⅰグループに属するものは鉄の純度が高く、BEI写真でも鉄が主体となっている。Ⅱグループのものは黒色のガラスの中に鉄の結晶が方向性をもって配列しており、鍛冶滓としての特徴が認められる。これに対して、7は多孔質で、Fe₂O₃のWt%が25%以下と低い値を示しており、鉄滓であろう。
- ii) これらのサンプルではTiO₂が検出されており、多いものではWt%で8%以上、普通のもので1~2%の値が認められる。これらが鉄鉱石起源のものではなく、砂鉄起源のものであることを示唆している。
- iii) これらのサンプルは比重が高く、緻密であり、多孔質の鉄を含むガラスである鉄滓とは明らかに異なっている。以上の結果から推察して、荒川附遺跡の鉄滓といわれるものはそのほとんどが鍛冶滓であろう。

第 2 表化学分析表(1)

	荒川附1-1	荒川附1-2	荒川附2-1	荒川附2-2	荒川附3-1	荒川附3-2
Oxide	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %
NaO ₂	0.400	0.000	0.220	0.300	0.220	0.230
MgO	0.520	0.830	2.750	2.960	1.570	1.280
Al ₂ O ₃	1.220	1.850	3.990	4.090	5.200	3.570
SiO ₂	4.750	7.360	15.590	12.520	18.380	14.810
K ₂ O	0.140	0.320	0.520	0.180	1.100	0.660
CaO	0.720	1.260	4.340	3.250	4.880	5.190
TiO ₂	1.590	2.830	8.650	12.190	2.350	2.440
MnO	1.580	1.640	1.570	1.480	1.130	1.290
Fe ₂ O ₃	86.460	81.180	61.230	59.530	64.100	70.160
CoO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
CuO	0.000	0.200	0.140	0.150	0.370	0.040
SnO ₂	0.310	0.050	0.000	0.000	0.000	0.000
HgO						
PbO	0.470	0.600	0.140	0.720	0.330	0.330
SO ₃	1.820	1.890	0.850	2.630	0.360	
Total	99.980	100.010	99.990	100.000	99.990	100.000
	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓
	荒川附4-1	荒川附4-2	荒川附5-1	荒川附5-2	荒川附6-1	荒川附6-2
Oxide	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %
Na ₂ O	0.620	0.400	0.410	0.760	0.000	0.280
MgO	3.480	2.730	2.380	1.930	0.720	0.490
Al ₂ O ₃	4.220	3.740	7.810	5.930	0.420	0.560
SiO ₂	15.470	12.410	17.190	18.760	2.120	2.160
K ₂ O	1.250	1.350	0.220	0.400	0.030	0.040
CaO	8.350	6.860	0.770	0.990	0.130	0.100
TiO ₂	3.770	4.380	1.390	1.580	2.080	0.800
MnO	1.280	1.360	1.220	1.500	1.690	1.830
Fe ₂ O ₃	60.630	65.820	67.880	67.970	92.470	93.250
CoO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
CuO	0.000	0.000	0.110	0.000	0.330	0.040
SnO ₂	0.000	0.040	0.150	0.200	0.000	0.120
HgO						
PbO	0.250	0.360	0.470	0.000	0.000	0.080
SO ₃						
P ₂ O ₅	0.690	0.550			Rh2O3	0.240
Total	100.010	100.000	100.000	100.020	99.990	99.990
	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓

第3表化学分析表(2)

	荒川附7-1	荒川附7-2	荒川附8-1	荒川附8-2	荒川附9-1	荒川附9-2
Oxide	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %
Na ₂ O	0.800	0.900	1.130	0.920	0.240	0.000
MgO	3.620	4.020	4.210	4.070	0.270	0.100
Al ₂ O ₃	7.950	7.640	5.190	5.060	0.550	0.640
SiO ₂	29.350	29.620	16.860	16.360	1.360	2.330
K ₂ O	5.230	4.630	0.360	0.490	0.020	0.110
CaO	23.720	26.060	2.840	2.940	0.150	0.140
TiO ₂	4.150	3.850	8.270	8.570	0.000	0.000
MnO	0.740	0.790	1.500	1.480	1.710	1.750
Fe ₂ O ₃	22.340	20.530	59.320	59.830	95.230	94.230
CoO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
CuO	0.000	0.240	0.000	0.000	0.000	0.010
SnO ₂	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
HgO						
PbO	0.490	0.380	0.340	0.280	0.000	0.090
SO ₂					0.470	0.600
Rh ₂ O ₃	1.610	1.350				
Total	100.000	100.000	100.020	100.000	100.000	100.000
	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓
	荒川附10-1	荒川附10-2	荒川附10-3	荒川附10-4		
Oxide	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %	Wt %
Na ₂ O	0.110	0.350	0.100	0.000		
MgO	0.560	0.610	0.190	0.160		
Al ₂ O ₃	1.100	0.990	0.360	0.360		
SiO ₂	4.370	3.960	1.060	1.160		
K ₂ O	0.110	0.110	0.000	0.000		
CaO	0.970	0.460	0.060	0.020		
TiO ₂	1.260	0.430	0.000	0.000		
MnO	1.690	1.390	1.570	1.570		
Fe ₂ O ₃	86.630	88.230	94.240	94.320		
CoO	0.000	0.000	0.000	0.000		
CuO	0.000	0.030	0.000	0.000		
SnO ₂	0.000	0.090	0.000	0.000		
HgO						
PbO	0.550	0.550	0.360	0.430		
SO ₂	2.650	2.810	2.060	2.000		
P ₂ O ₅						
Total	100.000	100.010	100.000	100.020	0.000	0.000
	鉄滓	鉄滓	鉄滓	鉄滓		



第211図 $\text{Si}_2\text{O}_3 \cdot \text{FeO}_3 - \text{MgO}$ 相関図

木炭について

本遺跡出土の木炭について鑑定を行った。鑑定は山内文氏に依頼した。(註)

本遺跡からは数箇所から木炭が出土している。出土している木炭は火災住居や竈からでてくる所謂消し炭ふうのものではない。木炭は一般の集落においては日常的に需要があったものとは考えにくく、製鉄などの高温を必要とする生産活動に使われた場合が多かったと思われる。本遺跡においても81号住居跡のように鍛冶に関係する遺構が検出されており、木炭はそれらに使われたと思われる。出土木炭はいずれも細片で状態のいいものはあまりないが、大きさなど遺存状態のいい16号住居跡出土のものを資料として選んだ。16号住居跡の年代は鍛冶関係の遺構より古いと考えられるが遺物の出土状況は貝をはじめとして比較的不安定な状態もある。また覆土最上位からは曲刃鎌が出土しており木炭もこれに伴うとも考えられる。

(註) 山内氏にはご多忙中にもかかわらずわざわざお越しくださりご教示いただいた。

実体顕微鏡写真の撮影にあたっては資料の研磨から撮影まで県立自然史博物館動物課学芸員吉田孝造氏にお世話になった。あわせてお礼申し上げます。

なお、本文の文責は担当者にある。

貝について

本遺跡出土の貝について鑑定を行った。

鑑定は県立自然史博物館動物課の松本充夫氏に依頼した。(註)

結果は以下のとおりである。

ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (R?ding)
オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i> (v.Martens)
チリメンカワニナ	<i>Semisulcospira bennsoni reiniana</i> (Brot)
イシガイ	<i>Unio douglasiae</i> (Griffith et pidgeon)
マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i> (Lea)
ニッポンマイマイ	<i>Satsuma japonica</i> (Pfeiffer)
ヒカリギセルガイ	<i>Zaptychopsis buschi</i> (K?ster)

参考文献

黒田徳米・波部忠重他 1965 「新日本動物図鑑」(中) 北隆館

これらの貝は第16号住居跡から出土したものである。出土状況は住居跡の南東部分にかたまって検出された。床面から浮いていることから住居廃絶後に一度に投げ込まれたものと考えられる。当然のことながら破損した個体が多くそれぞれの個体数を明確に示すことはできないが、総量は1mmの篩にかけてコンテナ(58×38×15cm)約1箱分であった。量的に多いのはマツカサガイ、イシガイで次いでオオタニシ、ハマグリの順である。チリメンカワニナは確認されたのはわずかに5個体、ニッポンマイマイは幼貝でヒカリギセルガイとともに1個体である。

これらの貝は食用にされたものと考えられるが、注目されるのは海産のハマグリが入っていることである。これの入手経路を元荒川に求めるとすれば入手先は東京湾沿岸の地域が考えられ、この地域との交通が具体的に読み取れるひとつの資料と考える。

量的に一番多いマツカサガイ、イシガイは両種ともに比較的水のきれいなところに生息する貝でドブガイのように止水域に生息する貝がないこともひとつの特徴で当時の環境を物語るとともに種類を選択採集していた可能性を示す。

(註) 鑑定については担当者が資料のなかから破損の程度の少ないものを選んで依頼した。よって上記以外に種類があるとすれば担当者の責任である。また、本文の文責は担当者にある。

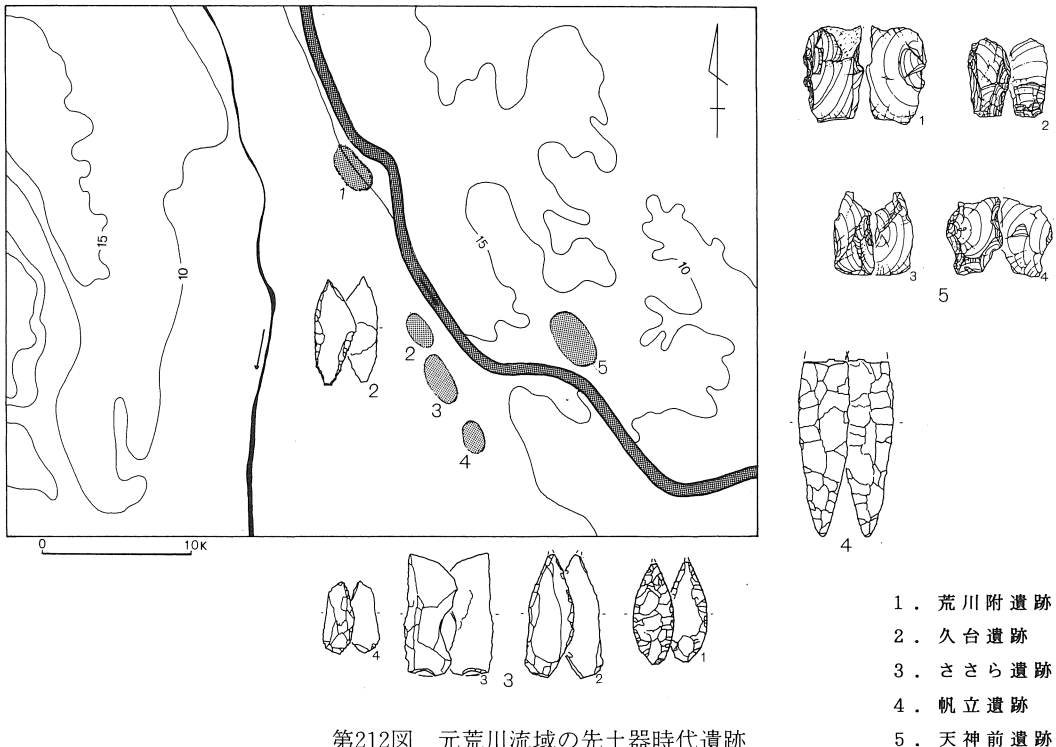
VI 結語

1 先土器時代の石器

1. 元荒川流域の先土器時代遺跡

元荒川は大宮台地の東部を北西から南東の方向に流れ、西岸を狭義の蓮田台地、東岸を狭義の白岡台地に挟まれている。蓮田市周辺の中流域では地形図を観察すると、標高10mのコンタラインを境におおよそ水田面と住宅地に分けられ、台地と低地が視覚的にとらえることができ、先土器時代の遺跡は台地上に位置する。それに対し、上流域の菖蒲町、騎西町、鴻巣市ではいわゆる埋没台地と呼称されるように、視覚的に台地と低地部の識別は困難である。このため、遺跡の発見例は少なく、最近まで2～3の遺跡で表採の記載が見られるだけであった。しかし、近年当該地域における調査が進み注目されるべき良好な資料の提示がなされている。

元荒川流域の先土器時代遺跡は、国道122号線建設に伴う一連の発掘調査において、ささら遺跡、帆立遺跡、久台遺跡、閩戸足利遺跡（1983年・1984年）等から散発的ではあるが検出されている。その成果は『研究紀要'86』『埼玉県大宮台地の先土器文化』（1986年）で一部記載した。それ以後、蓮田市教育委員会『天神前遺跡』（1991年）、上流域では『鴻巣市史 資料編Ⅰ 考古』（1989年）、『中三谷遺跡』（1989年）等が刊行され資料的蓄積がなされている。本稿は荒川附遺跡の石器群を基に元荒川中流域の遺跡群を概観する。



第212図 元荒川流域の先土器時代遺跡

まず、元荒川右岸蓮田台地の遺跡をみると、北から(1)荒川附遺跡、(2)久台遺跡、(3)ささら遺跡、(4)帆立遺跡と川に沿って並ぶ。標高は10m～15mの範囲で現状では畑又は住宅街となっている。次に左岸白岡台地に目を転ずると(5)天神前遺跡がみられる。本遺跡は黒浜遺跡群内の一つにかぞえられ、黒浜式期を主体とした地点貝塚を含む集落跡である。発掘調査は区画整理事業に先立つ道路部分の調査のため、広範囲を対象としながら幅数mと限定されたものであり、遺物分布の面的広がりには把握されていない。石器集中はⅠ区とⅡ区の2カ所で確認されている。

(1) 荒川附遺跡

良質の黒耀石を素材に用いたまとまりをもつ一群と、他にナイフ形石器2点が出土している。前者は別途検討するため、ここでは後者について触れておく。

3 (第213図)は厚手の横長剥片(片面に原石面を残している点などから、粗悪な角礫の黒耀石を原材とし、初期段階に剥離されたものと推測できる。)を打撃方向に直交するように分割したものを素材としており、右側に素材の打瘤の隆起が見られることから、打点に近い部分であることが窺える。正面に素材剥片の主要剥離面、裏面に原石面そして左側縁に主要剥離面(分割面)と変則的な素材の用い方であるが、厚手の剥片を分割することで幅狭厚手の素材を手に入れる手法は、上草柳遺跡第2地点の角錐状石器の接合例、天沼遺跡の切出形石器の接合例(註1)などにみられ、当該期に多く用いられていたと考えられる。調整加工を観察すると、右側縁に鋸歯状剥離を施した後一部微細な剥離が重ねられており、左側縁は分割面からの剥離と先端一部に細かい剥離がみられる。

4 (第213図)は珪質頁岩を用い、打面部を正面から裏面方向の加撃によって削除している。正面を構成する第一次剥離面と主要剥離面の打撃方向は若干異なり、同一打面からの連続した剥片剥離工程ではなく、その間に打面転位等が想定できる。調整加工は基部付近と背縁上半部とで異なっている。背縁上半部は個々の剥離は不規則であるが、調整加工全体の形状は三角形状を呈している。基部付近は細かい剥離によって、舌状とも表現できる形状に仕上げられている。

2点のナイフ形石器の所属時期は共に岩宿Ⅱ期の範疇で捉らえられると考える。

(2) 久台遺跡

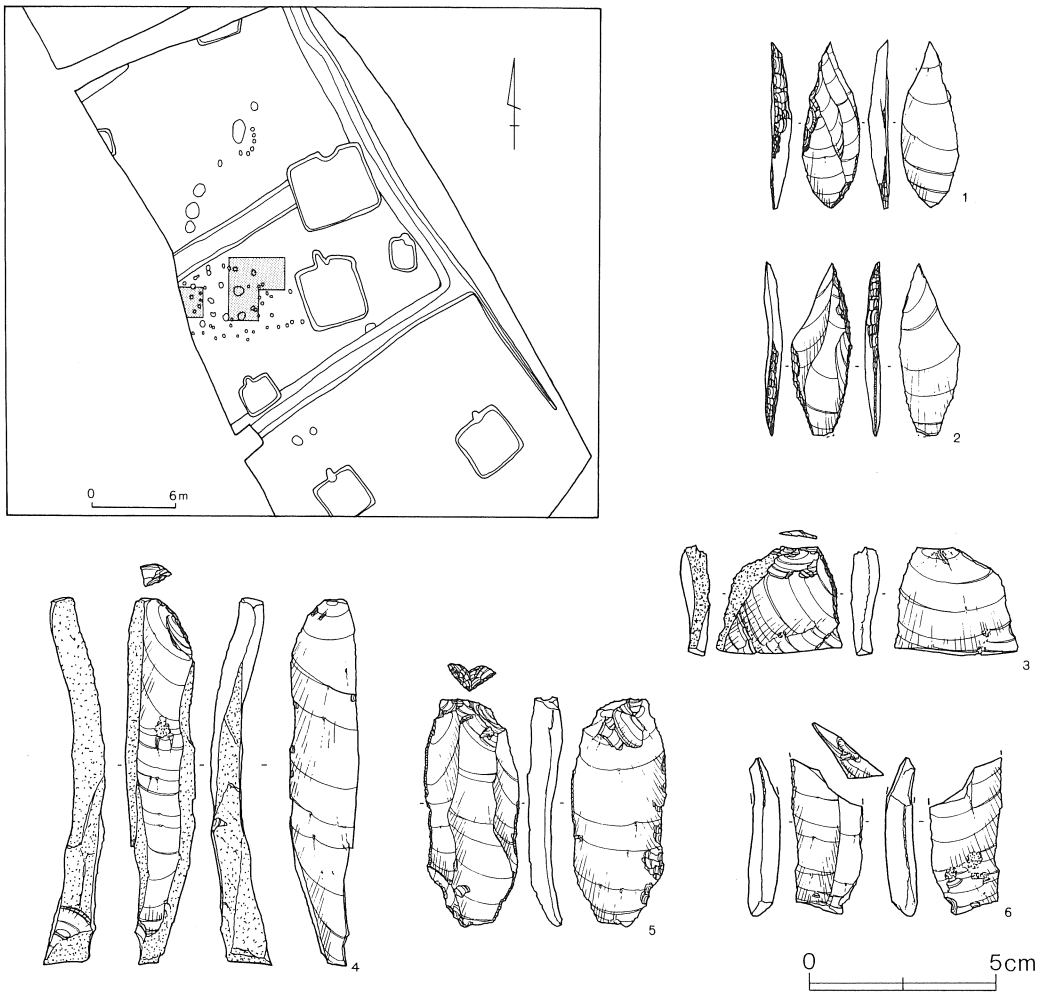
メノウ製の横長剥片を素材としたナイフ形石器1点と、細石刃と思われる剥片1点が出土している。

(3) ささら遺跡

石器は第Ⅱ区と第Ⅳ区から主に検出されている。第Ⅳ区出土の尖頭器(1)とナイフ形石器(2)は同一の古墳周溝から検出されたおり、極めて近い時期に属すると考えられる。他に記載した第Ⅳ区(3)と第Ⅱ区(4)は、いわゆる切出形石器である。本期の石器は第Ⅱ区から数点出土しており、分布の主体は第Ⅱ区にあったと考えられる。表採に近い資料であるため制約は多いが、剥片素材の小型尖頭器の段階と岩宿Ⅱ期の2時期が若干分布を異にして存在していたと言える。

(4) 帆立遺跡

安山岩を素材とした両面加工の槍先形尖頭器が1点検出されている。



第213図 荒川附遺跡出土の黒燐石製石器

(5) 天神前遺跡

蓮田市内でプライマリーな状態で先土器時代の石器集中が検出された最初の遺跡である。本遺跡の発掘調査は上記した如く道路部分と保留地に限定されているため、かならずしも遺物分布の全容は明らかにしているとは言えず、今後の調査に期待する部分は大きい。

I区では石器集中3カ所が検出された。石器のほとんどは1号集中からの出土である。石材はほとんどがチャートで占められている。ナイフ形石器は横長貝殻状の厚手剥片を素材とし台形状を呈するものが主体を占め、調整加工は打面部を取り除くように剥離加工が施されており、対峙する側縁にも一部加工がみられる。縦長剥片を素材とした(2)は、基部から両側縁に剥離加工が施され先端に幅狭の刃部を形成している。

I・I'区から船底状を呈する細石核が1点出土している。

II区では石器集中1カ所が検出されている。石器点数は少ないが、チャートを素材とした小形剥片の一部に調整加工が施された、ナイフ形石器2点とスクレイパー2点が出土している。

以上、周辺遺跡を概観した。遺跡それぞれは小規模であるが、岩宿Ⅱ期に対比される資料が検出された遺跡は、荒川附遺跡、久台遺跡、ささら遺跡、天神前遺跡があげられる。また、ささら遺跡からは尖頭器が検出され、天神前遺跡からは細石核、久台遺跡からは細石刃がそれぞれ検出されている。大宮台地ではナイフ形石器以後の資料は少なく、特に細石器の資料は、幾つかの遺跡で単独にみつまっているのみである。近接する二遺跡で細石核と細石刃が出土した例として注目し、今後の資料の増加をもって検討して行きたい。帆立遺跡出土の槍先形尖頭器は、縄文時代草創期の所産と考えられる。本地域で連綿と遺跡が存在したことが窺える。

2. 荒川附遺跡出土の黒耀製ナイフ形石器

荒川附遺跡では1983年発掘調査の遺構確認の際、良質の黒耀石を素材としたナイフ形石器2点、剥片類4点が小範囲(約6m四方)から検出されている。当該範囲の掘り下げはハードローム層(第Ⅳ層)中で終了したため、プライマリーな状態での遺物確認はされておらず状況的限界はある。しかし、ここでは一定のまとまりのある石器群として捉え検討して行く。

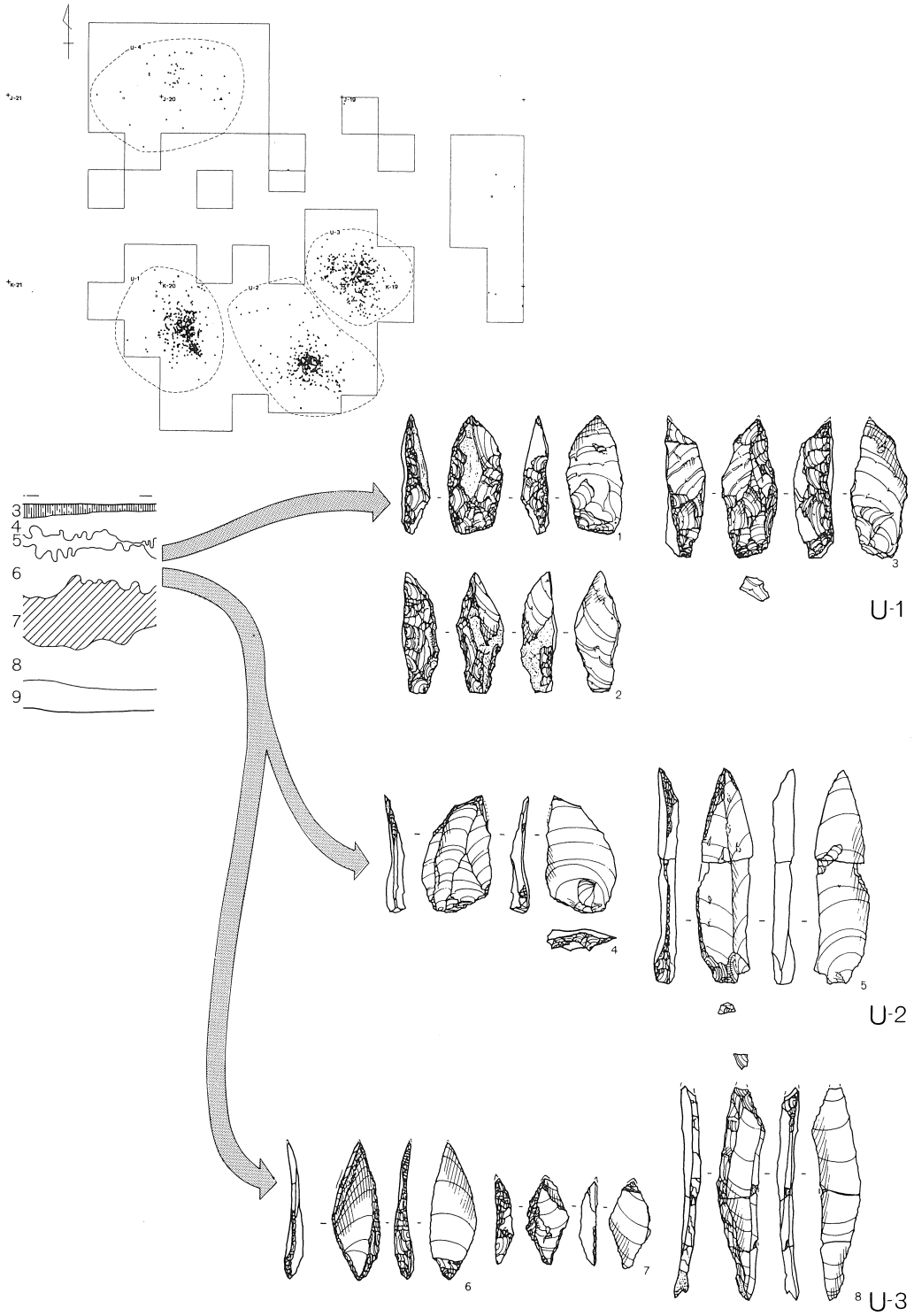
1のナイフ形石器は、上位の縦長剥片を素材とし、縦断面を見ると上半部が厚く基端部に向かって薄くなっている。正面の第一次剥離面は主要剥離面と同一方向の剥離面が平行してみられる。刃部は右刃、先端角は38度、側刃角(註2)は約140度を計る。最大幅は刃縁と側刃縁が交差する点より若干下がり、長に対する刃部の割合は約40%である。

平面形状は基端部が丸まり零状と表現できが、基本的には菱形とし説明する。まず、調整加工が施されている部位は、背縁上半部と側刃縁が対峙し、前者が規格的な Blunting であるのに対し後者は微細な剥離である。次に、刃縁と対峙する背縁下半分は共に素材剥片の縁辺をそのまま使用している。

2のナイフ形石器は、上位の縦長剥片を素材とし、縦断面は1同様に先端部側が厚く基端部に向い薄くなる。正面の第一次剥離面は主要剥離面とほぼ同一方向である。刃部は左刃、先端角は40度、側刃角は1よりは明確で140度を計る。最大幅は刃縁と側刃縁の交点より上位にあり、長に対する刃部の割合は46%と大きい。

平面形状は概形は菱形を呈し、基端部はコ字状となっている。調整加工は背縁上半部と側刃縁が対峙し共に規格的な Blunting が施されている。また、刃縁と対峙する背縁下半分には微細な剥離が観察することができる。

以上2点のナイフ形石器の相違性と共通性を整理する。まず、素材剥片の用い方に強い斉一性が見られる。長さ、幅、厚さ、重量、先端角、側刃角側のいずれも近似値を示している。刃部は左刃・右刃と対峙する。調整加工の種類は規格的な Blunting と微細な剥離の2者がみられ、側縁の関係を記号化してみるとまず対峙する辺の関係は、1、刃縁と背縁下半分が $a : a$ (註3)、側刃縁と背縁上半部が $b : c$ となり、2、刃縁と背縁下半分が $a : c$ 、側刃縁と背縁上半部が $b : b$ となる。次に上下両端で交差する辺の関係は、1、先端が $a : b$ 、基端部が $c : a$ となり、2、先端が $a : b$ 、基端部が $b : c$ の関係となる。このように2点は基本的に同じ構造のもとに作られていると言える。



第214図 北宿西遺跡出土の先土器時代遺物346

次に剥片類の説明を続ける。

3は下半分を欠損する。正面の一部に原石面を残している。打面は単剥離面で構成され、正面の第一次剥離面と主要剥離面の打撃方向は90度異なっている。右側縁に細かい剥離がみられ使用痕と考えられる。

4は両側面に原石面をと留めており、角柱状の原石であったことが窺える。正面と主要剥離面の打撃方向は一致している。打面は正面方向からの剥離面によって構成される。

5は正面に稜線が2条みられる。正面の第一次剥離面と主要剥離面の打撃方向は一致する。打面は複数の細かい剥離面がみられ入念に打面が調整されていたことが窺える。

6は上半部を欠損する。正面には稜線が1条みられ、打撃方向はともに主要剥離面と共通する。一部に微細な剥離がみられ使用痕と考えられる。

剥片類の観察から、推察される点を整理してみると、正面の第一次剥離面と主要剥離面の打撃方向は、3の1点を除くと全て共通している。これは、固定された打面からの連続的剥片剥離作業が行われていたことが窺える。また、3に関しては正面に原石面を残す点など剥片剥離の初期段階（石核面調整段階）と思われ、剥離方向の一定しないのも説明がつく。次に打面を観察すると、3・4に対し5は細かい剥離によって構成されている、これは剥片剥離作業段階が進む中、打面の調整が入念に行われていたことを物語っている。このような点から、3・4が初期段階の剥片、5・6が剥片剥離が進んだ段階での剥片といった違いはあるが、打面の固定化と連続した縦長剥片の作出手法は石刃技法と呼べるものである。

以上6点の石器の観察を通し、剥片剥離技術と調整加工等の共通性が明確になったと考える。次に本石器群の時間的位置付けが問題となる。良質の黒耀石を石材とし、石刃と呼べる縦長剥片を素材とし、ナイフ形石器は2種類の調整加工が各側縁毎に対峙し、器長に対する刃部は占める割合が高く、刃部は左刃と右刃に分かれる点など寺尾期の特徴をよく示していると言える。層位的・状況等の要因は欠くが、石器そのものに内包されている諸要素から本石器群を寺尾期石器群として位置付けておきたい。

3. 岩宿Ⅱ期以前の石器群—北宿西遺跡の場合—

北宿西遺跡は浦和市大字三室に所在し、周辺に松木遺跡・大古里遺跡等が見られる。地形的には芝川の右岸の台地縁辺に位置し、標高は約15m、水田面との比高差は8mを計る。

石器の集中は4カ所検出された。U-4は他の石器集中からおおむね10mほど北側に位置し集中密度は散漫である。U-1～U-3は集中密度が高く分布は近接している、特にU-2とU-3は近い位置にある。

次に、層位を基本層序の説明に基づきみて行く、3層：ローム層への漸移層。4層：ソフトローム層。5層：ハードローム層。6層：暗茶褐色土層でロームと黒色帯の混合層。7層：黒色帯。8層：ハードローム層。9層：ハードローム層と記載されている。これを武蔵野台地基本層準に対比すると、4層のソフトローム層はⅢ層、5層のハードローム層はⅣ層に対比できそうである。6層

は説明からみてV層第1黒色帯もしくは、Ⅶ層第2黒色帯上部に対比できると思われる。7層は明確な黒色帯でありⅦ～Ⅸ層の第2黒色帯全体もしくは、Ⅸ層第2黒色帯下部に対比できそうである。以下の8・9層はⅩ層もしくは武蔵野ロームに一部対比できる層準と予想される。北宿西遺跡の土層を武蔵野台地基本層準と対比したが、ここで問題になるのは、5・6層の解釈となる。次に具体的に石器群の内容を検討しその問題に迫りたい。

石器群はU-1が5層を中心に礫群と平面的に重複して検出され、U-2・U-3が6層を中心に検出されている。これは、石器集中の距離等の状況から判断して2つの文化層に分離されることは確実と思われる(註4)。

では、分離された2つの石器群の内容を具体的に検討してみよう。まず、上層に位置付けられるU-1のナイフ形石器をみると、石材は「漆黒」の黒耀石を用いており、正面の第一次剝離面の打撃方向は一定しておらず、主要剝離面の打撃方向とは一致しない。また、第一次剝離面が表面積に占める割合は少なく、一部に原石面を残置するものもある。両側縁から施される鋸歯状剝離は基部中央部深くまで達しており、横断面は三角形を呈し器厚である。これを数値でみるとU-2・3のナイフが厚さ0.5～0.6cmであるのに対し、U-1は約1cmと大きい。また、厚さと長さの比は前者が1:5～10、後者が1:4に近い値を示している。長さに対する刃部の占める割合は、U-3が44～54%であるのに対し、U-1は20～34%と小さく、いわゆる切出状を呈している。次に調整加工を観察すると、鋸歯状の剝離を施した後、細かい剝離を重ね細調整を施している。この手法は岩宿Ⅱ期に特徴的にみられるものである。

U-2・3のナイフ形石器は「良質」の黒耀石を石材に用い、正面の第一次剝離面の占める割合が大きく、また、主要剝離面の打撃方向と良く一位する。素材の使い方は打面を基部方向に置くものが目立つ。調整加工はBluntingと微細剝離の2種類がみられる(註5)。それぞれ施される部位に分解すると、4は左側縁先端部付近に微細な剝離がみられる。5は左側縁の先端部と基端部付近にBlunting、左側縁下半分に微細な剝離が施されている。6は側刃縁に微細な剝離、背縁上半部に微細な剝離、下半分にBluntingが施され、基端部付近に正面→背面の剝離面と裏面剝離がみられる。7は側刃縁に微細な剝離、背縁に不規則なBluntingが施されている。石器の形態をみるとU-2とU-3の間の差が目に着くが、出土状況・剝片素材等からは敢えて分離する必要性は無いと考える。

次に、荒川附遺跡のナイフ形石器との比較すると、荒川附遺跡では素材剝片の用い方が上位のみであるのに対し、北宿西遺跡では上位を主体としながらも上下両者がみられる違いがあるが、正面と主要剝離面の打撃方向が一致する点は共通する。また、刃部が全長の50%前後を占め、刃縁と側刃縁の交点と最大幅の位置はほぼ一致す点や、調整加工はBluntingと微細な剝離の2者がみられ、各側縁を単位として施されている点等に共通した手法がみられる。

以上、岩宿Ⅱ期と下層石器群に層位的に分離できた北宿西遺跡を検討し、その石器群の違いを明確にした。また、U-3と荒川附遺跡のナイフ形石器の共通性から同一時期の石器群の可能性は高く、寺尾期に位置付けられるのが最も妥当であると考えられる。今後、大宮台地における当該期石器群の検討をおこなって行くための、重要な視準になるものと期待する。

4. おわりに

荒川附遺跡から出土した石器群から導かれる問題点を微弱ではあるが、自分なりに整理を試みた。まず、元荒川東岸の石器群の概略的整理は、122号線建設に伴う発掘調査成果の一応のまとめとしておきたい。また、荒川附遺跡と北宿西遺跡出土の石器群に関する検討は、大宮台地において資料的に貧弱であった、岩宿Ⅱ期より下層に位置付けられる石器群を明確にして行くための作業仮設であり、特に空白時期と思われるがちな寺尾期石器群の抽出を目的とした。筆者の不勉強から包含されている問題に対して、消化不足な点や誤解を多く有しているかもしれないという危惧を感じるが、その点は今後の課題として行きたい。

(註1) 天沼遺跡第1次調査の接合資料No.1に含まれる。本資料に関しては、『殿山遺跡—第2次調査—』考察の部分で荒井氏によって、細かい分析がなされている。

(註2) ナイフ形石器の各部の呼称は田中英司「武蔵野台地Ⅱb期前半の石器群と砂川期の設定について」。調整加工の呼称は松村(織笠)明子「鈴木遺跡Ⅳ層出土石器群についての一考察」、織笠昭「鈴木遺跡Ⅵ層出土石器群についての一考察」に準拠した。

(註3) 調整加工をa:素材剥片の縁辺、b:規則的なBlunting、c:微細な剝離とし表記した。

(註4) 織笠昭氏は1988年浦和市で行った講演、《うらわの旧石器時代》の資料「浦和市内出土資料による大宮台地編年」において、北宿西遺跡の石器群を明花向遺跡C区の基本層準の第Ⅳ下層と第Ⅵ層の2時期に細分している。また、筆者も『提灯木山遺跡』の結語の部分でU-1とU-2・3が分離できる可能性は高く、U-2・3のナイフ形石器が松木遺跡下層のナイフ形石器よりは新しい様相である点から、武蔵野台地第Ⅵ層に相当のではないかと述べておいた。

(註5) 荒川附遺跡と比べるとBluntingの規則性は低く、特に7の背縁の剝離は粗雑な感じを受ける。

引用・参考文献

- 青木義脩 1986 『北宿西・北宿南遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書 第63集
荒井幹夫 1991 「〔1〕旧石器時代」『殿山遺跡—第2次調査—』 上尾市文化財報告 第36集
織笠昭 1978 「鈴木遺跡Ⅵ層出土石器群についての一考察」『鈴木遺跡Ⅰ』 鈴木遺跡刊行会
織笠昭 1988 「角錐状石器の形態と技術」『東海史学』第22号
鴻巣市市史編さん調査会編 1989 『鴻巣市史 資料編1 考古』 鴻巣市
実川順一 1991 「旧石器時代」『天神前遺跡』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第17集
竹岡俊樹 1989 『石器研究法』 言叢社
田中英司 1979 「武蔵野台地Ⅱb期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』第7号
西井幸雄 1983 「(1)先土器時代の遺物」「石器」『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第24集

- 西井幸雄 1984 「石器」『閩戸足利』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第40集
- 西井幸雄 1989 「先土器時代」『中三谷遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第76集
- 西井幸雄 1990 「1. 先土器時代」『提灯木山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第92集
- 橋本 勉 1984 「2-5 石器」『久台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第36集
- 服部隆博他 1984 「第Ⅴ章 上草柳第2地点遺跡」『一般国道246号（大和・厚木バイパス地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』 大和市文化財調査報告第15集
- 藤波啓容 1984 「先土器時代」『天沼遺跡 第1～3次調査』 上尾市文化財報告 第21集
- 松村（織笠）明子 1978 「鈴木遺跡Ⅳ層出土石器群についての一考察」『鈴木遺跡Ⅰ』 鈴木遺跡刊行会

2 古墳時代以降の土器

古墳時代以降の集落の変遷と土器の様相について出土土器、遺構の重複関係などをもとに変遷を考えた。以下土器を中心にしてみていく。

I 期

集落が最初に形成される時期である。器種構成は椀、高坏、埴、甕、壺が検出されている。椀は突出した平底の底部から内湾して立ち上がり口縁部は素口縁である。口縁部の大きさに大小がある。外面は篋削りされるものと粗いミガキの施されるものがある。高坏は坏部の底部と口縁部の境が稜をなすものと段をなすものがある。後者は底部が小さく逆「ハ」字状になるものがある。脚は中膨らみの柱状のものが主体で、他に大きく開くラッパ状のもの、短い柱状の脚で裾部が急激に開くものなどがある。調整は丁寧に篋ミガキされるものと坏底部および脚部が削りのままのものがある。丁寧に調整されるものなかには赤彩されるものもある。埴は底部中央が窪むものと丸底のものがあり、それぞれ小型のものと大型のものがある。調整は篋ミガキされるが体部下端は篋削りのものがほとんどである。赤彩されるものがある。甕は球胴でハケ目と篋削りのもの、篋削りの後粗く篋ミガキされるもの、篋削りのみのものがある。壺は二重口縁と複合口縁のものがある。外面および口縁部内面は丁寧に篋ミガキされる。SJ95-24は肩部に文様が線刻される特異なものである。I期の住居跡はSJ22、24、30、95、96が該当する。I期は和泉期の範疇に入るものと思われるがSJ95とSJ30などのあいだには明らかに時期差が認められる。SJ95は壺および一部の高坏などにやや古い様相が見えるが甕は篋削りされている。SJ95-24、25に類似するものに後張遺跡187号住のものがある。SJ95のものは後張遺跡のものに比べて口縁部まで篋ミガキされておりいくぶん古いと思われることから和泉期でもさらに古い段階に位置しよう。SJ30は高坏、埴などに新しい様相が窺える。和泉期の新しい段階といえよう。

II 期（6世紀前半）

II期は既に竈が存在している。集落は大きく見ると調査区中央と南側の2ヵ所に分かれる。器種は坏、高坏、鉢、甕、甗と壺がわずかに見られる。坏は須恵器を模倣したもの（坏A）が圧倒的に多い。分量にはわずかながらばらつきが見られSJ21、23、25、などはII期のなかでも古いものと思われる。他には坏A類似で口縁部がやや開き内面に放射状のミガキが施されるもの。丸底で内湾しながら立ち上がるもの。やや深い丸底で口縁部との境に突出した稜を持つものなどがあり、これら坏A以外のものは赤彩される。高坏はSJ37-4のように坏部は底部と口縁部の区別がなく短脚のものと、SJ87-2のように坏Aに短脚をつけたものがある。前者は赤彩される。鉢は底部が窪むものと底部が平底のものがある。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。調整は体部外面は篋削りされる。内面はナデ調整される。SJ58-7のように口縁部が赤彩されるものもある。甕は長胴の甕がでてくるがまだ最大径は胴部にある。またSJ58-20のように器壁が非常に厚く底部が突出したものはII期の中でも新しい時期にしかみられない。球胴の甕は全体を窺い得る資料が少ないがSJ87-6のように中型の製品と比較的小型の製品がある。甕の調整技法は篋削りが主体であるが一部にハ

ケ目を残すもの、篋削りの上をナデツケるものなどがある。SJ58-13は焼成前に円窓をあけている。甗は緩やかに内湾しながら立ち上がり口縁部は外反するものと、ほぼ直線的に立ち上がり把手を持つもの（SJ92-6）がある。またSJ25-9のように肩部が張る甗型土器の底部を抜いたものもある。壺はSJ87-7とSJ23-10のように特殊なものである。前者は胴部下半に焼成前と思われる穿孔がある。後者は口縁部の対角に2ヵ所焼成前の穿孔がなされている。Ⅱ期の住居跡はSJ21、23、25、34、37、58、62、66、68、87、92が該当する。Ⅱ期は坏の形態などにより細分することも可能である。SJ25は口縁部の立ち上がりが長く底部も丸みが強く器高も深いことから古いと考えられる。SJ58、87などは口縁部が短くやや開き気味で底部も平底気味で浅いものを含むことから新しいと考えられる。

Ⅲ期（6世紀末～7世紀第1四半期）

Ⅲ期からは継続的に集落が営まれていく。器種構成は坏、高坏、鉢、甗、甗、手捏ね土器である。坏は複数の形態のものが存在する。坏Aは既に主体的な存在ではなく、底部の深みが減って器高の低いものになる。わずかではあるが須恵器坏身を模倣したものがみられる（SJ1-3）。主体を占めるのは口縁部に複数の段をもついわゆる有段口縁坏（坏B）である。坏Bは数量的にはⅢ期に最も多い。口径は11cm～13cmに集中する。Ⅲ期以降Ⅵ期まで継続するが数は少なくなる。坏Bに次いで多いのはいわゆる比企型坏（坏C）である。坏CもⅢ期に最も多くこれ以降Ⅵ期まで続く。口径は10cm～12cmの間にあり器高は一貫して3cm代である。高坏は器壁が厚く短脚のものがある。鉢は丸底で内湾して立ち上がり口縁部の境には段を持ち、口縁部は緩く外反するものである。外面は横方向に篋削りされる。甗は完全に長胴化し最大径は口縁部にある。口縁部の形態により3種類に分類される。口縁部が鋭く外反するもの（SJ1-17）、口縁部が曲線的に大きく外方へ開くもの（SJ16-17）、口縁部が曲線的に小さく外反するもの（SJ16-22）である。調整は外面が縦方向の篋削り内面は、横方向のナデである。球胴の甗はSJ16-23、24のように篋削りによってわずかに底部を作りだすものがある。特異な例として把手の付いた台付甗がある（SJ1-25）。甗は長胴で口縁部が外反するものと小型で口縁部は直線的に開くもの、口縁部がやや内湾気味に立ち上がるものがある。調整はいずれも外面は縦方向の篋削りである。手捏ね土器は完型品はないが石製模造品と出土する事が多い。須恵器坏は湖西窯跡群産のものである。甗は大型のものがある（SJ1-29）。甗、提瓶も検出されている。提瓶は口縁部内面に緩い段をもつが胴部側面は3本の沈線があるだけで把手は付かない。Ⅲ期の住居跡にはSJ1、2、3、13、15、16、27、29、32、33、50が含まれる。SJ1、3、16の須恵器は古い様相を持つ。

Ⅳ期（7世紀第2四半期）

集落は調査区の南側に移動する。器種構成はⅢ期とほとんど変わらないと思われるが、遺物の出土量が少なく全体像は不明である。坏Aは引続きわずかに存在するが主体は坏B、坏Cである。坏B、坏CはⅢ期より口径が縮小傾向にある。またこの時期から口縁部が短く直立あるいは内屈する坏（坏D）が覆土中から出土するようになる。高坏は出土していない。甗は前代と変わらないと思われる。球胴の甗及び甗についてもよい資料がないが引続き作られると思われる。須恵器では湖西

窯跡群産の坏がかなりの確率で出土する。Ⅳ期の住居跡にはSJ51、52、54、75、76、77、80、82を考えている。

V期（7世紀第3四半期）

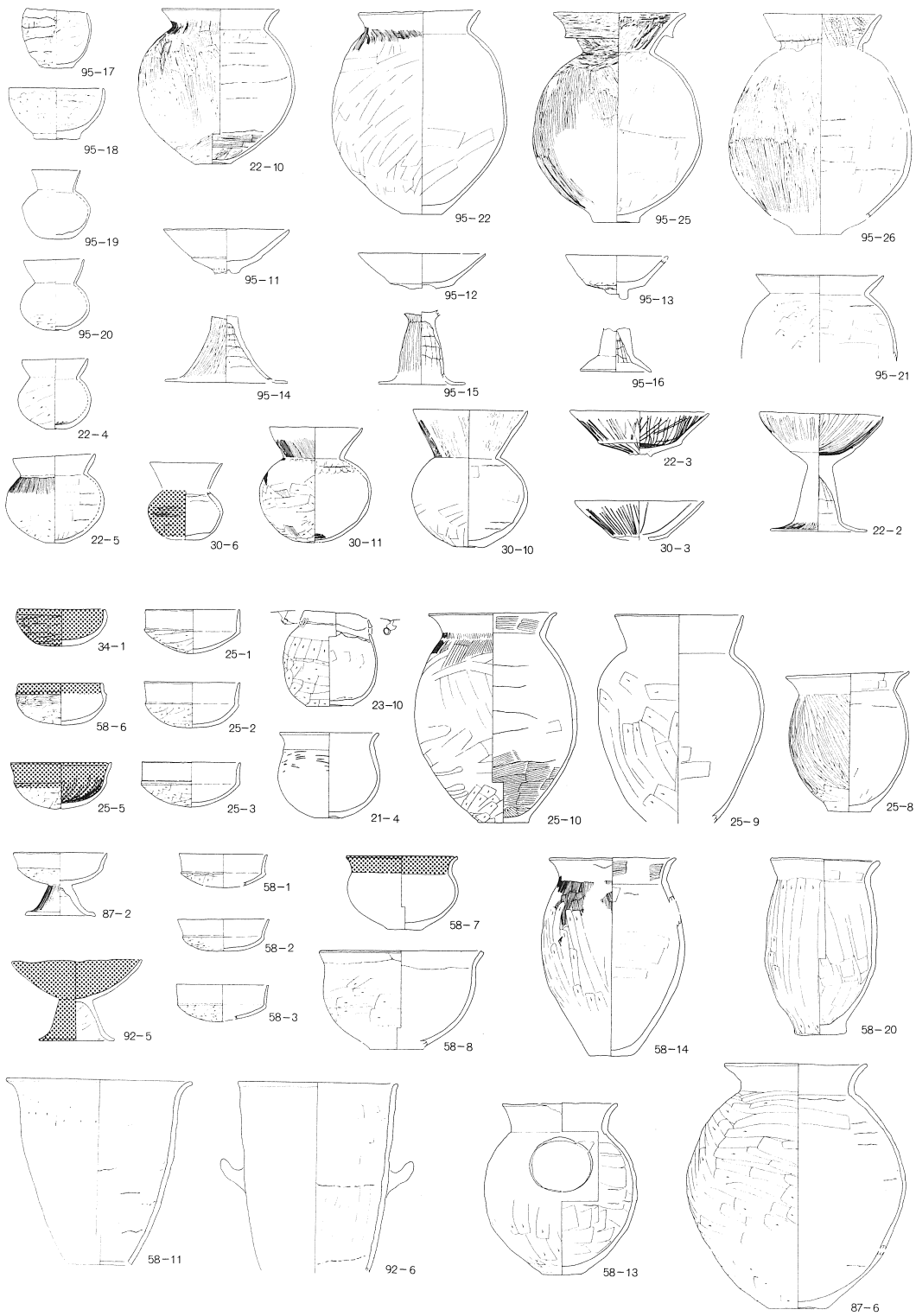
集落は以前として調査区の南側を中心として展開する。器種構成は前期とあまり変わらない。坏Aはごくわずかに作られているようである。坏Bは口径11cm代のものが多い。器高は3.5cm前後である。坏Cは口径10cm、11、5cm前後である。器高は3cm代の前半と4cm前後に分かれるようである。坏DはV期から本格的な生産が開始されるものと思われる。数量的にも主流となる。口径は10cm代の小型のものと13cm以上の大型のものがありおそらく3種類に法量分化していると思われる。器高は3cm前後のものと4cm以上のものにわかれる。この時期から丸底で碗形の坏（坏E）が現れる。坏Eはほとんどの場合内面に放射状の暗文が施される。V期のもので確実に住居跡に伴うと思われるものはSJ41-6であるが外面は篋削りされ一部撫で付けたような調整を施す。口縁部は横ナデされる。内面は細い線の放射状暗文である。鉢はⅢ期と同様である。長胴の甕は変わらない。球胴の甕は良好な資料がないが比較的大型のものと小型のものがある。甗は長胴の甕型のものと比較的小型のものがある。須恵器は出土量が少ないが湖西窯跡群産の坏は継続してみられる。V期の住居跡はSJ4、39、41、47、69が考えられる。

Ⅵ期（7世紀第4四半期）

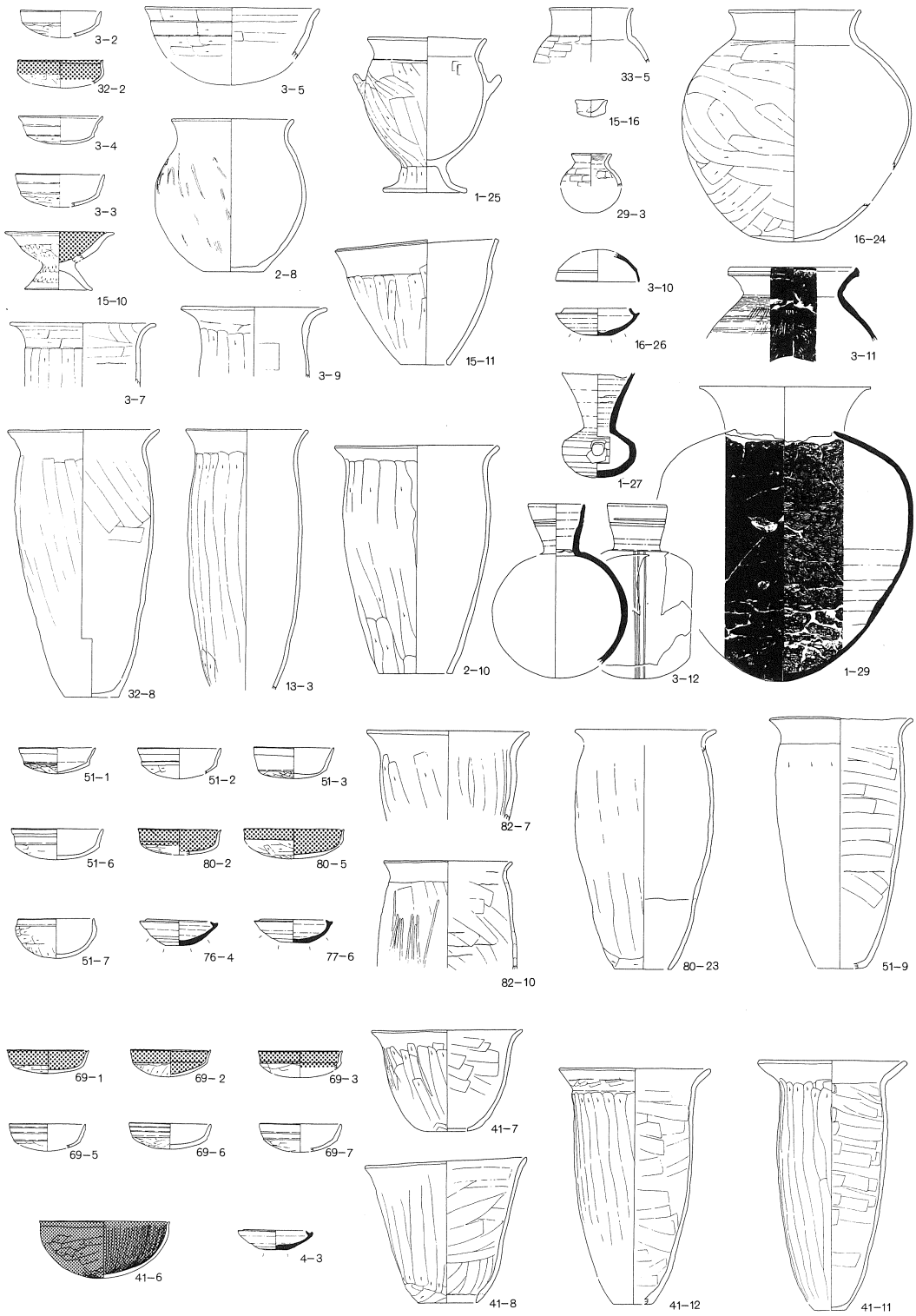
集落は南側を中心としながらも中央部にも展開する。坏Bはこの期を最後に見られなくなる。この時期にともなうものは口径12cm以下である。坏Cもこの期で終わる。口径は11cm以下で10cm未満のものもある。坏Dは最も多くなる。法量は口径10cm前後、器高3cm代にひとつの集中が見られそれより大型のものは口径11～14cm、器高3.5～5cmの間に散在する。なかには口径が15cm前後のものもある（SJ83-14）。坏Eはこの期になって安定してくる。甕は胴部上半がやや膨らんでやや新しい様相のものも見られる。須恵器はこの時期の住居跡に確実に伴うものは出土していない。Ⅵ期の住居跡はSJ9、28、46、48、55、61、64、79、83、86が該当する。

Ⅶ期（7世紀末～8世紀初頭）

Ⅶ期の集落は再び調査区の南側に分布する。遺物の出土量はきわめて少ない。坏は皿形の器形で内湾しながら立ち上がり口縁部が大きく外湾するもの（坏F）がある。甕は最大径が口縁部にあるものの胴部上半が張って器壁も薄くなり外面の篋削りも上半部が斜めから横方向に削られるようになる。須恵器ではSJ81から環状のつまみを持つ蓋が出土している。蓮田市教育委員会で調査した6号住居跡（大塚 1984）から同様の蓋が出土しており共伴する湖西窯跡群産の高台付坏から8世紀初頭とされる。（酒井 1986）SJ81は小鍛冶の工房跡と思われる。Ⅶ期の住居跡はSJ49、67、70、78、81、91が該当する。



第215図 I期・II期の土器



第216図 Ⅲ期・Ⅳ期・Ⅴ期の土器

Ⅷ期（8世紀第2四半期）

Ⅷ期の集落はさらに南に寄る傾向にある。坏Dは口径13cm以上に中心が移り器高は3cm代となり皿に近い器形となる。さらに外面の調整は篋削りされる底部と横ナデされる口縁部との間に無調整の部分が見られるようになる。坏Fも少ないが継続して見られる。甕は器壁が薄く胴上半部が横方向に篋削りされる。球胴の甕も器壁が薄く底部外面も篋削りされる。須恵器は在地産のものを中心に出土量が増える。特に坏においてその傾向が顕著で甕、横釜なども伴っている。坏は平底で全面または外周が回転篋削りされる。口径は15cm前後に集中する。器高は3.5cm前後である。またSJ73からは坏の体部を丁寧に打ち欠いた転用硯が出土している。SJ93-11は蓋のつまみだけであるが「大」の墨書がある。長頸瓶（SJ85-16）は湖西窯跡群産である。Ⅷ期の住居跡はSJ59、73、85、93が該当する。

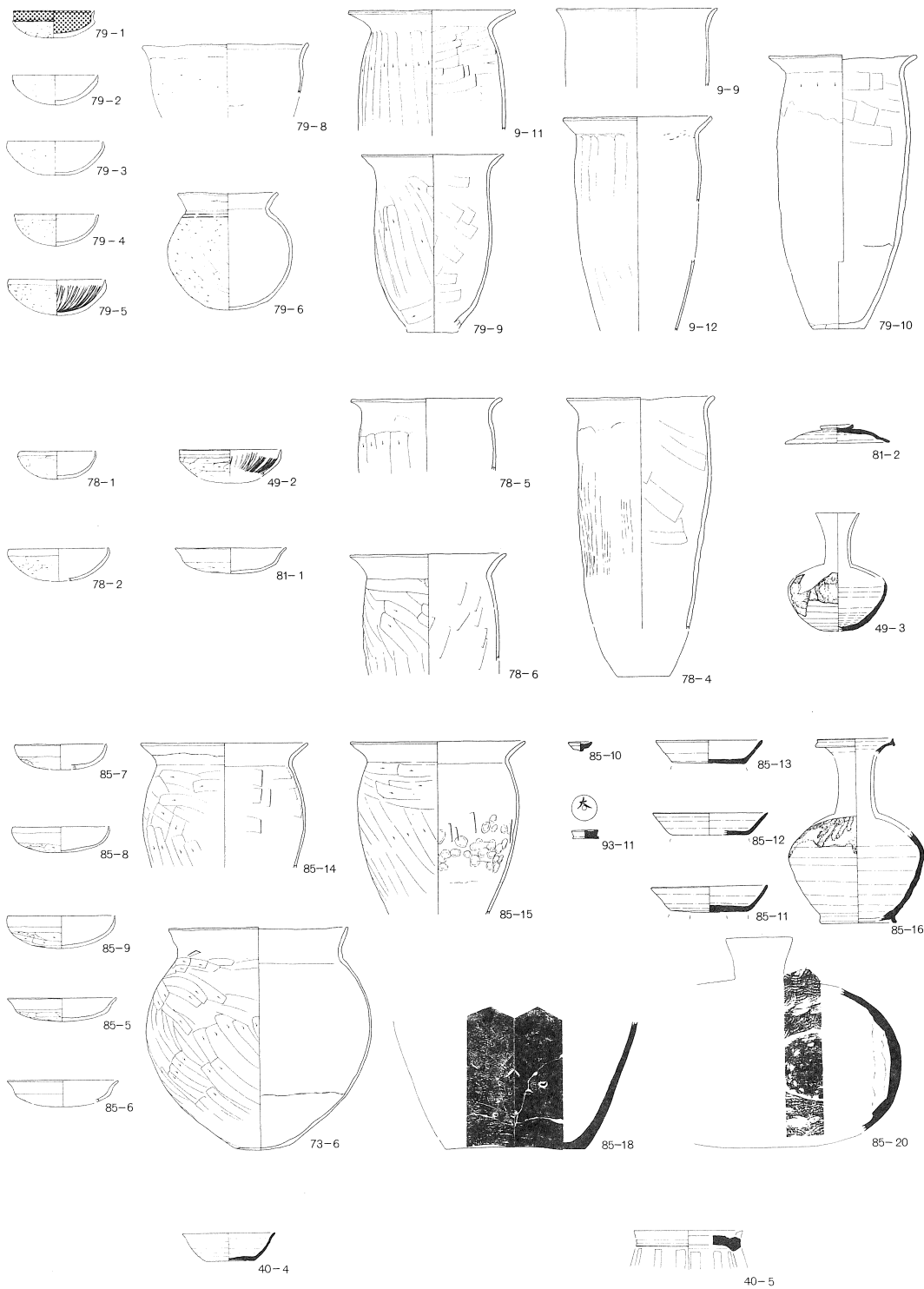
Ⅸ期（9世紀中頃）

SJ40一軒のみである。須恵器坏と円面硯の小破片が出土している。坏は底部回転糸切りで内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。

以上のように9期に分けて変遷を概略したが、遺物の出土状況は必ずしも安定したものではない。特にⅢ期以降においては集落が連続して営まれているために必然的に遺物の混入も多く、時期の判定を繁雑にさせている。今後修正を必要とする部分も出てくると思われる。本遺跡はまだ調査が予定されておりさらに調査が進んだ時点で再考してみたい。

第95号住居跡出土の壺形土器について

第95号住居跡から肩部に文様の線刻された壺形土器が出土している（第66図）。土器は住居跡南辺やや内側から出土した。同形の壺（第67図-25）が反対の北側から出土している。土器は胴部外面を2段に篋磨きし肩部は斜め方向頸部及び口縁部は横方向に篋磨きしている。口縁部内面は横方向に磨いた後縦方向に粗い磨きをしている。文様は4ヵ所にはほぼ均等に配されている。肩部から胴中央にかけてふたつずつ2種類の文様が描かれている。ひとつは縦の2本線が上端を接して描かれておりあたかも松葉のようである。もう1種類は同様の文様の中に横に数本の線を入れたものである。こちらは縦の2本線の開きがやや大きく左側に反っている。いずれも先の鋭い工具で細い線が浅くひかれている。この時期の土器に文様が施されることは希な事と言え、関東地方ではほとんど例がないが、大宮市篠山遺跡に壺形の土器に記号化された文様が描かれているものがある。（笹森1988）報文によれば方形周溝墓の陸橋上より出土したもので五領Ⅰ式に比定されている。文様は幅3mmの先の丸い工具で舟とそれを漕ぐ人が記号化されて描かれており類例を奈良県唐古遺跡出土のものに求めている。本遺跡のものは篠山遺跡例よりも新しく文様も具象的なものではない。なにを表したのか不明である。壺形埴輪の透かしに通じる要素もあるかとも思われるが住居跡からの出土という事も含めて土器の持つ性格の解明はこれからの課題である。



第217図 VI期・VII期・VIII期・IX期の土器

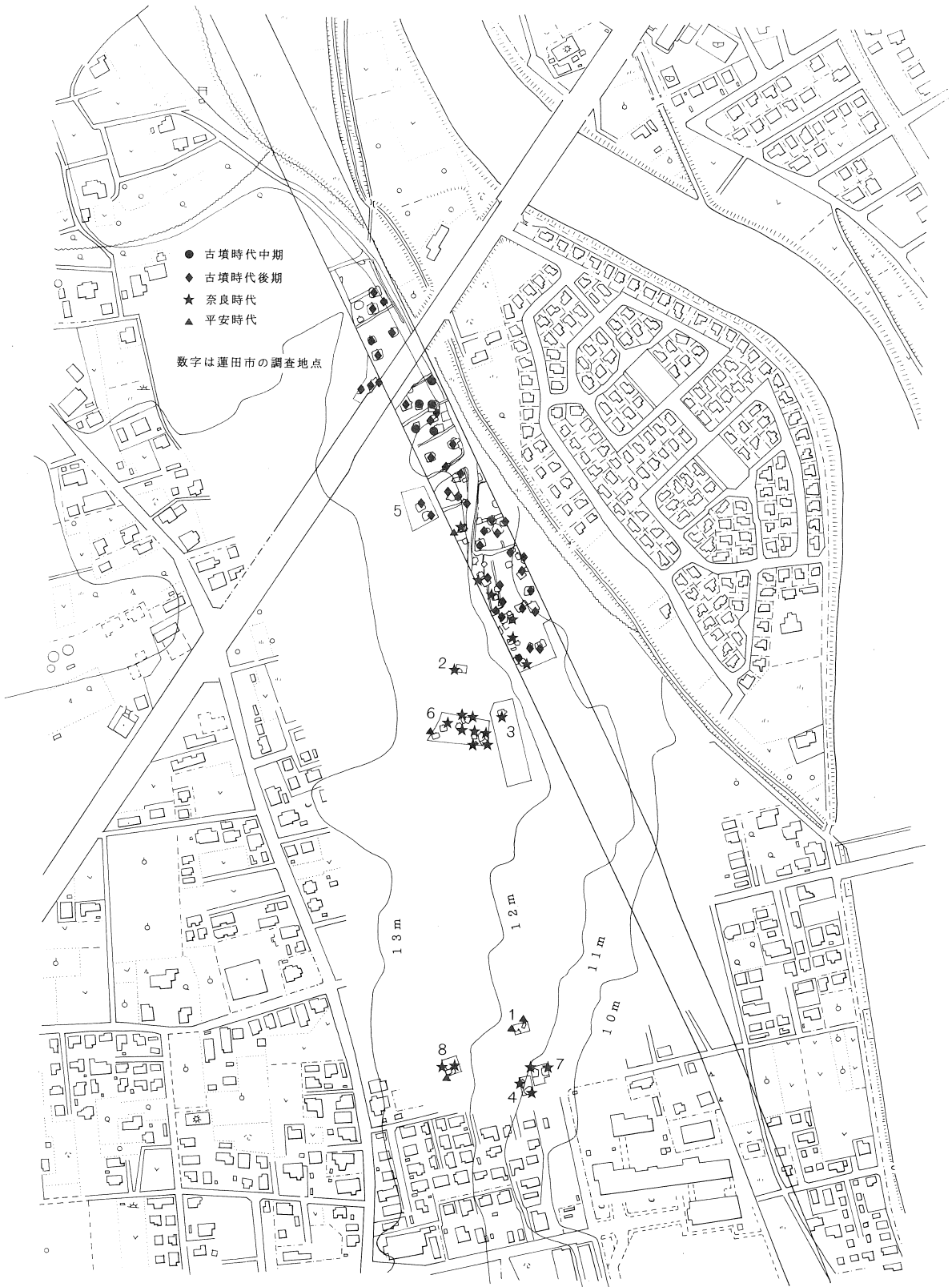
まとめ

荒川附遺跡は先土器時代に既に人が活動しており、この地域が早くから人間の生活する舞台であったことが窺われる。縄文時代は晩期の住居跡が1軒検出されただけで人々の生活の跡を直接的に辿ることはできない。しかし周辺には縄文時代前期の遺跡も多く、本遺跡においてもわずかながら遺物が検出されることから、本遺跡を含む周辺の空間がそれらの遺跡で生活した人々となんらかの形で関わっていたことが推定できる。人々の生活の跡が濃厚になるのは古墳時代になってからである。おそらく5世紀の第2四半期頃には集落ができはじめ6世紀の前半にはまとまった集落を形成していたと思われる。その後約半世紀近くの間集落が途絶えるが6世紀の終わり頃から再び集落が作られ、以後8世紀半ば頃まで続く。蓮田市では遺跡の南側部分を数ヶ所調査しており9世紀後半までの住居跡が検出されている。遺跡全体ではその時期まで集落が継続するのであろう。元荒川対岸の椿山遺跡は9世紀前半から11世紀中葉に及ぶ鉄生産に関わった遺跡であることが調査の結果明らかになっており（大塚他 1989）現時点では9世紀の前半段階で椿山遺跡に集落の中心が移っていくものとする。遺物では8世紀に在地の製品が一斉に導入される迄7世紀を通じて坏を中心として湖西窯跡群の製品が入ってきていることは注目される。集落の時的的な占地は既に指摘されているように（寺内他 1989b）北から南に新しくなる傾向が今回の調査によってはっきりしたものとなった。遺跡の終末についてはよくわからないが遺跡の南半部の調査が進めば明らかになってくるものと思われる。

集落と古墳との関係では椿山遺跡で円墳が5基検出されている。5世紀末～6世紀初頭の年代が与えられている（大塚他 1989）。本遺跡のⅡ期の一部にからんでくる時期と思われるが元荒川対岸の椿山遺跡の古墳と荒川附遺跡の集落が直接的な関係にあるとは考えにくく椿山遺跡の古墳を築造した集落は元荒川左岸に求めるべきであろう。本報告で残念ながら載せ得なかったが今回の調査で埴輪の小破片が出土していることを明記しておく。破片は2cmほどのもので橙褐色を呈し焼成はよい。埴輪は蓮田市ではいままで確認されておらず初めての出土である。遺跡周辺に埴輪をもつ古墳が存在すると思われそれがⅡ期の集落と関係するものであろう。7世紀代ではささら古墳群と十三塚古墳群がある。十三塚古墳群は距離的にも近い。またフラスコ型長頸壺を出土しており（埼玉県 1982）同じ東海地方の製品を出土することからも荒川附遺跡の集落の人々との直接的関係が窺われる。

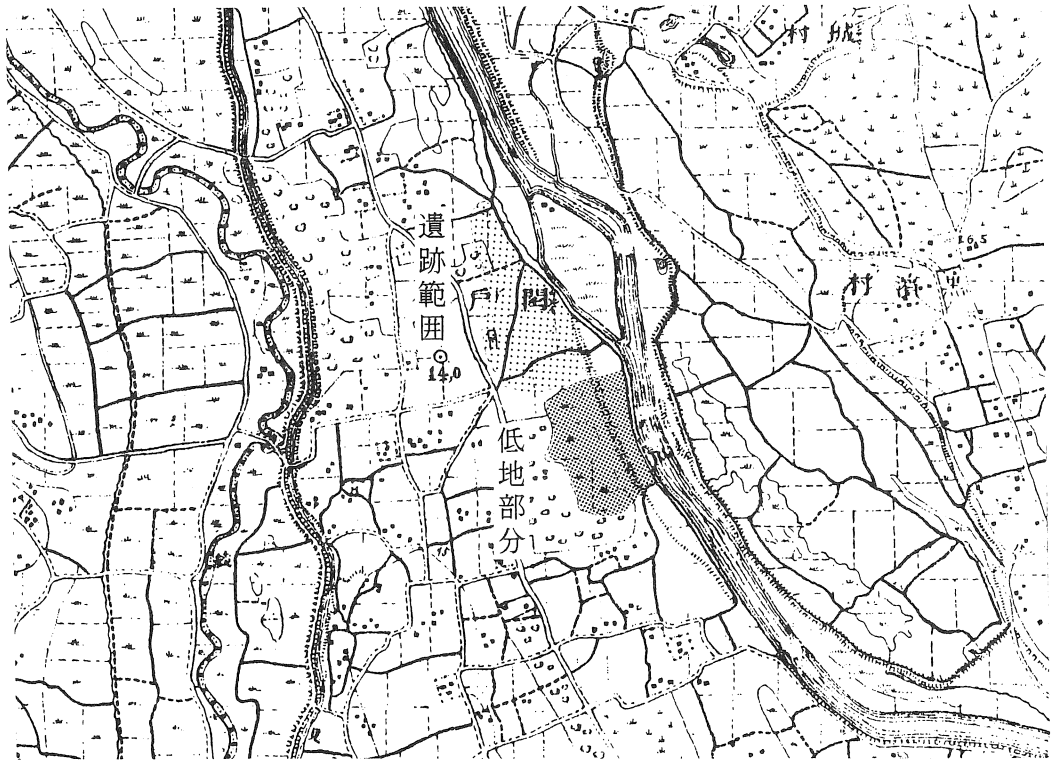
椿山遺跡が製鉄関係の遺跡であることは先に述べたが、荒川附遺跡においては椿山遺跡で鉄生産が開始される以前に小鍛冶が行われている。蓮田市の調査では2軒の工房跡が報告されている。1軒は平安時代前半と報告されている（大塚 1988）。もう1軒は出土した遺物から本報告のⅦ期に近いやや遅れる時期と思われる（野中 1983）。本報告では81号住居跡が工房跡と考える。81号住居跡はⅦ期にあたり荒川附遺跡における小鍛冶は奈良時代以前に始まっていたことになる。他にも35号住居跡のように長方形で角に竈を持つものがあり蓮田市で調査した事例と類似するものがある。

最後に遺跡の広がりや微地形について気がついたことを述べる。荒川附遺跡は広範囲にわたっているが集落の北限は今回の調査によって従来の推定通りであることが確認された。南側については



第218図 時代別住居分布

蓮田市の調査によって明らかになりつつあるがまだ不明な部分が多い。しかし第7地点、第8地点の調査結果は注目される(寺内他 1989b)。第7地点は遺跡の南端にあたり従来から地形の落ち込みが予想されていたが調査の結果予想よりも急激に落ち込むことが確認された。第8地点では住居跡の重複が多くさらなる遺跡の広がりを感じさせるものがある。宅地化が進んだ現在造成などによって等高線も不明確になり微地形を推定するのは困難である。できるだけ古い地形図を利用することが望ましいがその一つに明治18年に作成された迅速図が有効である。これによれば遺跡東側の住宅地は元荒川の中州である。また現在の蓮田中央小学校から南側約300mほどは水田となっており地形はあたかも入江のようになっている(第219図)。標高はわからないが先の蓮田市の調査結果と考えあわせると古代においてはあるいは入江状の低地または湿地であったとも推考される。第7地点の急激な落ち込みもこれで理解できるわけである。敢て推測を重ねれば元荒川を利用する場合にはこのような地形は有効であったと思われる。そのように考えるならばこの入江状の地形のまわりに集落が営まれても不思議ではない。さらに細かく観察すると第3地点の南側は遺構が検出されていない。第3地点と第1地点の間は等高線が大きく湾曲しており小さな谷があることも考えられる(第218図)。蓮田市の試掘調査によっても遺構が検出されない部分であり(寺内他 1989)ここで住居跡の分布が切れることも考えられる。南限については迅速図による地形の観察から蓮田中央小学校の西側をさらに南に広がる可能性は大きいと思われる。



第219図 迅速図

参考・引用文献

- 青木義脩 1983 『北宿遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書 第26集 浦和市遺跡調査会
- 石岡憲雄他 1981 『六反田遺跡』 岡部町六反田遺跡調査会
- 大塚孝司 1984 『江ヶ崎貝塚 荒川附遺跡』 蓮田市文化財調査報告書 第6集 蓮田市教育委員会
- 1988 『荒川附遺跡』 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書 第3集 埼玉県蓮田市遺跡調査会
- 大塚他 1986 『ささら遺跡』 蓮田市遺跡調査会調査報告書 第1集 蓮田市遺跡調査会
- 1988 『椿山遺跡』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第12集 埼玉県蓮田市教育委員会
- 1989 『椿山遺跡』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第13集 埼玉県蓮田市教育委員会
- 金子直行他 1982 『大山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第17集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 後藤建一 1983 『東笠子遺跡群発掘調査概報』 静岡県湖西市教育委員会
- 後藤他 1987 『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』 静岡県湖西市教育委員会
- 1989 『静岡県の窯業遺跡』 静岡県文化財調査報告書 第42集 静岡県教育委員会
- 埼玉県 1982 『新編埼玉県史』 資料編2
- 酒井清治 1986 「北武蔵における7・8世紀の須恵器の系譜」『研究紀要』第8号 埼玉県立歴史資料館
- 笹森紀巳子 1988 『篠山遺跡』 大宮市遺跡調査会報告別冊4 大宮市遺跡調査会
- 立木新一郎他 1984 『鎌倉公園遺跡発掘調査報告』 大宮市遺跡調査会報告 第9集 大宮市遺跡調査会
- 立石盛詞他 1983 『後張』 本文編Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明 1991 a 「東国の在財産暗文土器」『埼玉考古』第28号 埼玉考古学会
- 1991 b 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 寺内正明 1987 『ささら遺跡』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第9集 埼玉県蓮田市教育委員会
- 寺内他 1989 a 『荒川附遺跡』 埼玉県蓮田市遺跡調査会調査報告書 第4集 埼玉県蓮田市遺跡調査会
- 1989 b 『荒川附遺跡 宿下遺跡』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書 第14集 埼玉県蓮田市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1977 『飛鳥藤原宮発掘調査報告Ⅱ』
- 中島利治 1979 『大山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集 埼玉県教育委員会
- 野中松夫 1981 『の場 八番 荒川附遺跡』 蓮田市文化財調査報告書 第2集 蓮田市教育委員会
- 1983 『江ヶ崎貝塚 御殿場遺跡 荒川附遺跡』 蓮田市文化財調査報告書 第2集 蓮田市教育委員会

- 浜野美代子他 1989 『大山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第84集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤原高志他 1983 『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第24集埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎由利江他 1991 『市内遺跡群発掘調査報告』 大宮市文化財調査報告 第29集 大宮市教育委員会
- 水口由紀子 1989 「いわゆる“比企型坏”の再検討」 『東京考古7』 東京考古談話会
- 横川好富 1983 「埼玉県の古式土師器」 『埼玉県史研究』 第10号
- 渡辺 一 1990 「南比企窯跡群の須恵器の年代」 『埼玉考古』 第27号 埼玉考古学会